

千葉東南部ニュータウン 14

——バクチ穴遺跡・有吉遺跡(第3次)・有吉南遺跡——

1 9 8 3

住 宅・都 市 整 備 公 団
財団法人 千葉県文化財センター

千葉東南部ニュータウン 14

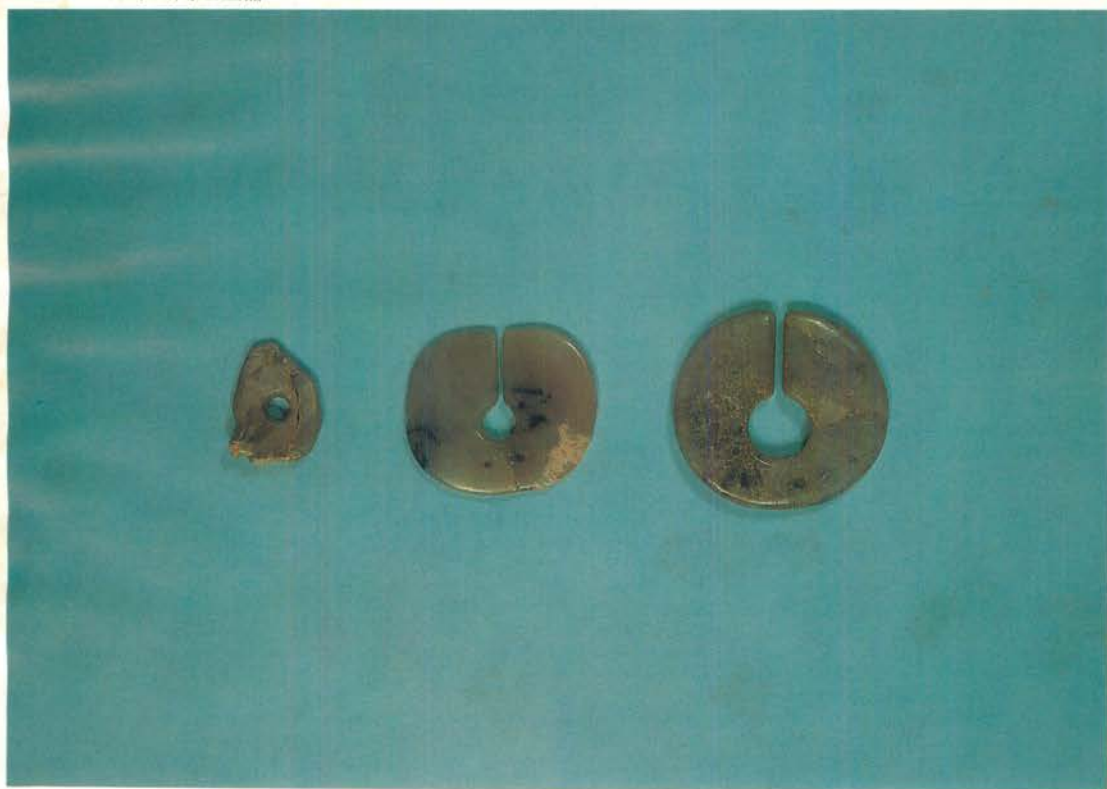
——バクチ穴遺跡・有吉遺跡(第3次)・有吉南遺跡——

1 9 8 3

住 宅・都 市 整 備 公 団
財団法人 千葉県文化財センター



1. 28・33号址出土土器



2. 15・33号址出土块状耳飾

序 文

千葉市の南部を流れる村田川流域には、その恵まれた自然環境等により先土器時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が残されており、この地が古代文化の一つの中心地として繁栄したことを物語っています。

近年、首都圏の人口増加は著しく、それに対応して大規模な宅地造成事業が各地で実施されております。本県においても、住宅・都市整備公団（前日本住宅公団）がこの地域に約600ヘクタールに及ぶ千葉東南部地区土地区画整理事業を計画しました。

このため、千葉県教育委員会では昭和46年度に事業地内の埋蔵文化財の所在について分布調査を実施し、これらの遺跡の取扱いについて、住宅・都市整備公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。

その結果、できるだけ公園・緑地に取込んで現状保存を図る一方、現状保存が困難な遺跡については、やむを得ず事前に発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることで協議が整い、当初、昭和49年度には(財)千葉県都市公社文化財調査事務所が、次いで同50年度以降は当センターが調査を実施してまいりました。

このたび、昭和54年度から同56年度にかけて調査されたバクチ穴遺跡、有吉遺跡、有吉南遺跡の成果のとりまとめが終了しましたので「千葉東南部ニュータウン14」として、その報告を刊行することとなりました。

本書では、先土器時代から歴史時代に至るまでの遺構・遺物を収録することができました。特に、バクチ穴遺跡では縄文時代の早期から後期までの土器群とともに、縄文時代前期の特徴的な遺物とも言える玦状耳飾が3点発見されました。石材には良質な滑石を使用しており、そのきれいな仕上げは縄文人の製作技術の高さを示すものと思われます。

また、有吉南遺跡では古墳時代後期の集落跡が発見されました。有吉地区には古墳も多く確認されているところから、集落と古墳との関連を解明するという点で重要な資料を提供しました。

本書が学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のために広く一般の方々に活用されれば幸いです。

終りに、住宅・都市整備公団、千葉県教育庁文化課及び千葉市教育委員会の御指導、助言に御礼を申し上げるとともに、極寒酷暑のなかで調査に協力された調査補助員の皆様方に心から謝意を表します。

昭和58年6月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例 言

1. 本書は、住宅・都市整備公団（前日本住宅公団）首都圏都市開発本部による千葉市東南部地区におけるニュータウン建設計画（土地区画整理事業）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書に所収された遺跡は、昭和54・56年度に調査された千葉市大金沢町に所在するバクチ穴遺跡、昭和55年度に調査された千葉市南生実町に所在する有吉遺跡（第3次）および昭和56年度に調査された千葉市有吉町に所在する有吉南遺跡である。
3. 発掘調査及び整理作業は、調査部長白石竹雄の指導のもとに、下記の職員がこれにあたった。
調査部長 白石竹雄
部長補佐 山田友治，栗本佳弘，天野 努
班長 栗本佳弘，山田常雄，古内 茂
バクチ穴遺跡 発掘 小久貫隆史，梶 淳，加藤正信，郷田公子
整理 大野康男，郷田公子
有吉遺跡（第3次）
発掘 栗田則久，榊原弘二
整理 栗田則久
有吉南遺跡 発掘 栗田則久 横山 仁
整理 栗田則久
4. 本書の編集は、古内 茂，栗田則久，大野康男が担当した。
5. 本書の執筆は別記のとおりである。
6. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部，千葉県教育庁文化課の関係者各位をはじめとして，多くの方々から御指導・助言をいただいた。
7. 本書に収書した図面の方位は座標北とした。
8. 本書の第1図については，国土地理院発行の1：25,000地形図，蘇我（千葉15号—2）を使用した。

本文目次

序 文

例 言

第1章 遺跡の位置と周辺の遺跡	栗田則久	1
第2章 バクチ穴遺跡		4
第1節 調査の経過と方法	郷田公子	4
第2節 先土器時代	古内 茂	6
第3節 縄文時代の遺構と遺物	郷田・大野	21
第4節 弥生時代の遺構と遺物	郷田・大野	59
第5節 歴史時代の遺構と遺物	郷田・大野	61
第6節 小 結	古内 茂	82
第3章 有吉遺跡（第3次）		85
第1節 調査の経過と方法	栗田則久	85
第2節 縄文時代の遺構と遺物	大野康男	87
第3節 弥生時代の遺構と遺物	栗田則久	111
第4節 古墳時代の遺構と遺物	栗田則久	117
第5節 歴史時代の遺構と遺物	栗田則久	145
第6節 小 結	栗田則久	159
第4章 有吉南遺跡		163
第1節 調査の経過と方法	栗田則久	163
第2節 縄文時代の遺構と遺物	大野康男	163
第3節 古墳時代の遺構と遺物	栗田則久	169
第4節 歴史時代の遺構と遺物	栗田則久	217
第5節 小 結	栗田則久	226
終章 結 語	古内 茂	230

挿 図 目 次

第 1 図	東南部地区主要遺跡位置図	2
第 2 図	遺跡周辺現況図	3
第 3 図	バクチ穴遺跡全体図	5
第 4 図	G(右)・H(左)ユニット石器分布図	7
第 5 図	Kユニット石器分布図	11
第 6 図	石器実測図 (1)	12
第 7 図	石器実測図 (2)	13
第 8 図	石器実測図 (3)	14
第 9 図	石器実測図 (4)	15
第 10 図	石器実測図 (5)	16
第 11 図	石器実測図 (6)	17
第 12 図	石器実測図 (7)	18
第 13 図	石器実測図 (8)	19
第 14 図	石器実測図 (9)	20
第 15 図	5号住居址実測図	22
第 16 図	4号住居址実測図	24
第 17 図	8号住居址(左), 40-B(右)号址実測図	24
第 18 図	15・28・39・51号址実測図	25
第 19 図	21・33号址実測図	28
第 20 図	38・50・55・56・58号址実測図	31
第 21 図	45号址実測図	32
第 22 図	縄文式土器実測図 (1)	38
第 23 図	縄文式土器実測図 (2)	39
第 24 図	縄文式土器実測図 (3)	40
第 25 図	縄文式土器実測図 (4)	41
第 26 図	縄文式土器拓影図 (1)	42
第 27 図	縄文式土器拓影図 (2)	43
第 28 図	石製品実測図	43
第 29 図	縄文式土器拓影図 (3)	47
第 30 図	縄文式土器拓影図 (4)	48
第 31 図	縄文式土器拓影図 (5)	49

第 32 図	縄文式土器拓影図 (6)	50
第 33 図	縄文式土器拓影図 (7)	51
第 34 図	縄文式土器拓影図 (8)	52
第 35 図	縄文式土器拓影図 (9)	53
第 36 図	縄文式土器拓影図 (10)	54
第 37 図	縄文式土器拓影図 (11)	55
第 38 図	縄文式土器拓影図 (12)	56
第 39 図	石器実測図	58
第 40 図	11号住居址実測図	60
第 41 図	住居址出土土器実測図	61
第 42 図	6-A・B号住居址実測図	62
第 43 図	7号住居址実測図	64
第 44 図	10号住居址実測図	65
第 45 図	25号住居址実測図	66
第 46 図	40-A号住居址実測図	68
第 47 図	52号住居址実測図	69
第 48 図	54号住居址実測図	71
第 49 図	住居址出土土器実測図 (1)	72
第 50 図	住居址出土土器実測図 (2)	73
第 51 図	1・2・3・9・12・13-A, B・14・16・18号址実測図	75
第 52 図	19・20・22・23・24-A, B・26・27・29・30号址実測図	77
第 53 図	31・32・34・35-A, B・36・48・49号址実測図	79
第 54 図	41・43・44・46・47号址実測図	81
第 55 図	有吉遺跡(3次)全体図	86
第 56 図	27・28・44・45・46・47号址実測図	88
第 57 図	48・49・53号址実測図	89
第 58 図	縄文式土器拓影図 (1)	97
第 59 図	縄文式土器拓影図 (2)	98
第 60 図	縄文式土器実測図	99
第 61 図	縄文式土器拓影図 (3)	100
第 62 図	縄文式土器拓影図 (4)	101
第 63 図	縄文式土器拓影図 (5)	102
第 64 図	縄文式土器拓影図 (6)	103

第 65 図	縄文式土器拓影図 (7)·····	104
第 66 図	縄文式土器拓影図 (8)·····	105
第 67 図	縄文式土器拓影図 (9)·····	106
第 68 図	縄文式土器拓影図 (10)·····	107
第 69 図	縄文式土器拓影図 (11)·····	108
第 70 図	縄文式土器拓影図 (12)·····	109
第 71 図	6 号住居址実測図·····	112
第 72 図	11号住居址実測図·····	113
第 73 図	12号住居址実測図·····	114
第 74 図	13号住居址実測図·····	115
第 75 図	住居址出土土器実測図·····	116
第 76 図	1・2号墳墳丘実測図·····	118
第 77 図	1号墳周堀実測図·····	119
第 78 図	1・2号墳墳丘断面図·····	120
第 79 図	1号墳墳丘・周堀出土土器実測図·····	121
第 80 図	1号墳第1主体部実測図·····	122
第 81 図	1号墳第2主体部実測図·····	123
第 82 図	1号墳主体部出土遺物実測図·····	124
第 83 図	1号墳第2主体部出土玉類実測図·····	126
第 84 図	2号墳周堀実測図·····	128
第 85 図	2号墳墳丘・周堀出土土器実測図·····	128
第 86 図	2号墳第1主体部実測図·····	130
第 87 図	2号墳第2主体部実測図·····	132
第 88 図	2号墳主体部出土遺物実測図 (1)·····	133
第 89 図	2号墳主体部出土遺物実測図 (2)·····	134
第 90 図	2号墳第1主体部(上)・第2主体部(下)出土玉類実測図·····	135
第 91 図	9号住居址実測図·····	136
第 92 図	10号住居址・カマド実測図·····	138
第 93 図	16号住居址実測図·····	140
第 94 図	17号住居址実測図·····	141
第 95 図	32号住居址実測図·····	142
第 96 図	住居址出土土器実測図 (1)·····	143
第 97 図	住居址出土土器実測図 (2)·····	144

第98図	15号住居址実測図	146
第99図	30号住居址実測図	147
第100図	37号住居址実測図	148
第101図	41号住居址・カマド実測図	150
第102図	住居址出土土器実測図 (1)	151
第103図	住居址出土土器実測図 (2)	152
第104図	7・8号址実測図	154
第105図	5・14・26・34・36・40・52号址実測図	157
第106図	土壇・方形周溝遺構・溝出土土器実測図	158
第107図	グリッド出土土器実測図	158
第108図	有吉南遺跡全体図	164
第109図	7号址実測図	165
第110図	7号址出土土器実測図	166
第111図	縄文式土器拓影図	168
第112図	1号住居址実測図	169
第113図	3号住居址実測図	171
第114図	3号住居址カマド実測図	172
第115図	8号住居址実測図	174
第116図	10号住居址・カマド実測図	175
第117図	12号住居址・カマド実測図	177
第118図	14号住居址実測図	179
第119図	15号住居址実測図	181
第120図	16号住居址実測図	183
第121図	17号住居址実測図	185
第122図	18号住居址実測図	187
第123図	19号住居址実測図	188
第124図	20号住居址実測図	190
第125図	21号住居址実測図	191
第126図	22号住居址・カマド実測図	192
第127図	24号住居址・カマド実測図	194
第128図	25号住居址実測図	196
第129図	27号住居址実測図	197
第130図	28号住居址実測図	199

第131図	29号住居址実測図	200
第132図	30号住居址実測図	201
第133図	31号住居址実測図	203
第134図	33号住居址実測図	204
第135図	37号住居址実測図	205
第136図	38号住居址実測図	206
第137図	住居址出土土器実測図 (1)	207
第138図	住居址出土土器実測図 (2)	208
第139図	住居址出土土器実測図 (3)	209
第140図	住居址出土土器実測図 (4)	210
第141図	住居址出土土器実測図 (5)	211
第142図	住居址出土土器実測図 (6)	212
第143図	住居址出土土器実測図 (7)	213
第144図	住居址出土土器実測図 (8)	214
第145図	住居址出土土器実測図 (9)	215
第146図	住居址出土土器実測図 (10)	216
第147図	4号住居址実測図	218
第148図	11号住居址実測図	218
第149図	23号住居址・カマド実測図	220
第150図	26号住居址実測図	221
第151図	住居址出土土器実測図 (1)	221
第152図	住居址出土土器実測図 (2)	222
第153図	住居址出土鉄製品・土玉実測図	223
第154図	住居址出土支脚実測図	224
第155図	13号址・出土遺物実測図	225

図版目次

- 巻頭図版 1. 28・33号址出土土器
2. 15・33号址出土块状耳飾
- 図版 1 1. 遺跡遠景(北から)
2. 遺跡近景調査前(B区)
3. 遺跡近景調査前(A区)
- 図版 2 1. 先土器時代ユニット(G区)遺物
出土状況
2. 先土器時代ユニット(H区)遺物
出土状況
3. 先土器時代ユニット(K区)遺物
出土状況
- 図版 3 1. 5号住居址全景
2. 5号住居址遺物出土状況
3. 4号住居址炉址全景(左)
4. 4号住居址遺物出土状況(右)
- 図版 4 1. 8号住居址炉址内遺物出土状況
(右)
2. 40-B号址遺物出土状況(左)
3. 15号址全景
4. 15号址遺物出土状況
- 図版 5 1. 28号址全景
2. 28号址遺物出土状況
- 図版 6 1. 21号址全景
2. 33号址全景
3. 33号址遺物出土状況
- 図版 7 1. 38号址全景
2. 45号址全景
3. 45号址遺物出土状況
- 図版 8 1. 56号址全景
2. 56号址遺物出土状況
3. 58号址全景
- 図版 9 1. 11号住居址全景
2. 11号住居址遺物出土状況
3. 6号住居址全景
- 図版10 1. 10号住居址全景
2. 10号住居址遺物出土状況(カマド
内)
3. 25号住居址遺物出土状況
- 図版11 1. 40号住居址全景
2. 52号住居址全景
3. 40号住居址遺物出土状況(左)
4. 52号住居址遺物出土状況(右)
- 図版12 1. 54号住居址全景
2. 41・43・44・46・47号址全景
3. 41・43・44・46号址全景
- 図版13 1. 先土器時代石器
2. 先土器時代石器
- 図版14 1. 先土器時代石器
2. 土壇出土遺物(15・33号址)
- 図版15 炉穴出土土器(33・39・45・51・
56号址)
- 図版16 住居址(4・5号住居址)・土壇
(28・40-B号址)出土土器
- 図版17 住居址(5号住居址), 包含層出
土土器
- 図版18 住居址(11号住居址), 包含層出
土土器
- 図版19 住居址出土土器(7・10・25・
52・54号住居址)
- 図版20 1. 遺跡全景(南から)
2. 航空写真
- 図版21 航空写真

- 図版22 1. 27号址全景
2. 44号址全景
3. 45号址全景
- 図版23 1. 47号址全景
2. 48号址全景
3. 49号址全景
- 図版24 1. 53号址全景
2. 11号住居址全景
3. 11号住居址遺物出土状況
- 図版25 1. 12号住居址全景
2. 13号住居址全景
3. 13号住居址遺物出土状況
- 図版26 1・2号墳調査後全景
- 図版27 1. 1号墳調査前全景
2. 1号墳調査後全景
3. 1号墳墳丘断面
- 図版28 1. 1号墳第1主体部遺物出土状況
2. 1号墳第1主体部掘り方
3. 1号墳第2主体部全景
- 図版29 1. 1号墳第2主体部掘り方
2. 2号墳調査前全景
3. 2号墳調査後全景
- 図版30 1. 2号墳墳丘断面
2. 2号墳第1主体部全景
3. 2号墳第1主体部遺物出土状況
- 図版31 1. 2号墳第2主体部全景
2. 2号墳第2主体部遺物出土状況
3. 2号墳第2主体部掘り方
- 図版32 1. 9号住居址全景
2. 9号住居址遺物出土状況
3. 10号住居址全景
- 図版33 1. 16号住居址全景
2. 17号住居址全景
3. 32号住居址全景
- 図版34 1. 32号住居址遺物出土状況
2. 32号住居址遺物出土状況（カマド内）
3. 32号住居址カマド掘り方
- 図版35 1. 15号住居址全景
2. 15号住居址遺物出土状況
3. 30号住居址全景
- 図版36 1. 37号住居址全景
2. 37号住居址遺物出土状況
3. 37号住居址カマド掘り方
- 図版37 1. 41号住居址全景
2. 41号住居址遺物出土状況
3. 41号住居址遺物出土状況（カマド内）
- 図版38 1. 41号住居址遺物出土状況
2. 7号址全景
3. 8号址全景
- 図版39 住居址出土土器（11・18号住居址）
- 図版40 1. 住居址出土土器（11・12号住居址）
2. 1号墳第2主体部出土遺物
- 図版41 1. 2号墳第1・2主体部出土遺物
2. 1号墳第1・2主体部出土遺物
- 図版42 2号墳主体部出土遺物
- 図版43 2号墳主体部出土遺物
- 図版44 住居址出土土器（9・10・32号住居址）
- 図版45 住居址（9・10・11・32号住居址）、1・2号墳出土土器
- 図版46 住居址出土土器（37・41号住居址）

- 図版47 住居址 (15・30・37・41号住居址), 方形周溝状遺構(7号址), 土壇(14号址), 溝, グリッド出土土器
- 図版48 1. 遺跡遠景(西から)
2. 遺跡全景
- 図版49 1. 7号址全景
2. 7号址遺物出土状況
3. 1号住居址全景
- 図版50 1. 3号住居址全景
2. 3号住居址カマド全景
3. 3号住居址遺物出土状況(カマド左)
- 図版51 1. 8号住居址全景
2. 10号住居址全景
3. 10号住居址カマド全景
- 図版52 1. 12号住居址全景
2. 12号住居址遺物出土状況(カマド内)
3. 14号住居址全景
- 図版53 1. 15号住居址全景
2. 16号住居址全景
3. 16号住居址遺物出土状況
- 図版54 1. 17号住居址全景
2. 17号住居址遺物出土状況(貯蔵穴内)
3. 18号住居址全景
- 図版55 1. 18号住居址遺物出土状況
2. 19号住居址全景
3. 20号住居址全景
- 図版56 1. 21号住居址全景
2. 22号住居址全景
3. 22号住居址遺物出土状況
- 図版57 1. 24号住居址全景
2. 24号住居址遺物出土状況
3. 24号住居址遺物出土状況(カマド内)
- 図版58 1. 25号住居址全景
2. 27号住居址全景
3. 28号住居址全景
- 図版59 1. 29号住居址全景
2. 30号住居址全景
3. 31号住居址全景
- 図版60 1. 33号住居址全景
2. 37号住居址全景
3. 37号住居址遺物出土状況
- 図版61 1. 4号住居址全景
2. 13号址全景
3. 13号址遺物出土状況
- 図版62 炉穴(7号址), 住居址(1・3号住居址)出土土器
- 図版63 住居址出土土器(1・3号住居址)
- 図版64 住居址出土土器(8・10・12号住居址)
- 図版65 住居址出土土器(12・14号住居址)
- 図版66 住居址出土土器(14・15・16号住居址)
- 図版67 住居址出土土器(16・17号住居址)
- 図版68 住居址出土土器(17・18号住居址)
- 図版69 住居址出土土器(19・20・22号住居址)
- 図版70 住居址出土土器(22・24号住居址)

	址)		37号住居址)
図版71	住居址出土土器 (24・25・27・ 28・30号住居址)	図版74	住居址出土支脚 (3・10・17・ 18・22号住居址)
図版72	住居址出土土器 (28・31・37号 住居址)	図版75	住居址 (3・12・15・16・22・ 24・25・30・31・37号住居址), 土壇 (13号址) 出土遺物
図版73	住居址出土土器 (11・23・33・		

表 目 次

表 1	バクチ穴遺跡検出遺構一覧表.....	84
表 2	有吉遺跡 (第3次) 検出遺構一覧表	162
表 3	有吉南遺跡検出遺構一覧表	229

第1章 遺跡の位置と周辺の遺跡

本報告書に収書した遺跡は、千葉市と市原市の境を流れる村田川によって樹枝状に開析された台地上に位置する。有吉遺跡（第3次）は東南部地区の最西端で、V字状を呈す通称イズミ谷津によって形成される台地上の西側、舌状に突出する小台地上に占地する。有吉南遺跡は、有吉遺跡の東方に位置し、北東方向に分かれるイズミ谷津のやや奥まったところに北西に張り出す舌状台地上である。バクチ穴遺跡は、有吉南遺跡よりさらに2.5 Km程南東に離れたところで、東南部地区の南東端となる。先述した2遺跡より村田川の上流となり、これによりかなり複雑に侵入した谷津の最深部台地上に位置する。

村田川によって開析されたこの複雑な台地上にはいくつかの遺跡が確認されている。先土器時代の遺跡は最近その例が増加してきており、ムコアラク遺跡^{*}、六通金山遺跡^{*}、南二重堀遺跡^{*}、馬ノ口遺跡^{**}で比較的多く検出されている。いずれも開析された支谷の奥部の小台地上に位置する点で、バクチ穴遺跡と共通するものが認められる。縄文時代の遺跡はムコアラク遺跡^{*}、木戸作遺跡^{*}等多数確認されており、六通貝塚、大膳野貝塚等貝塚の存在も多い。

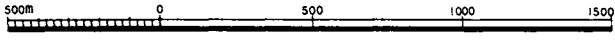
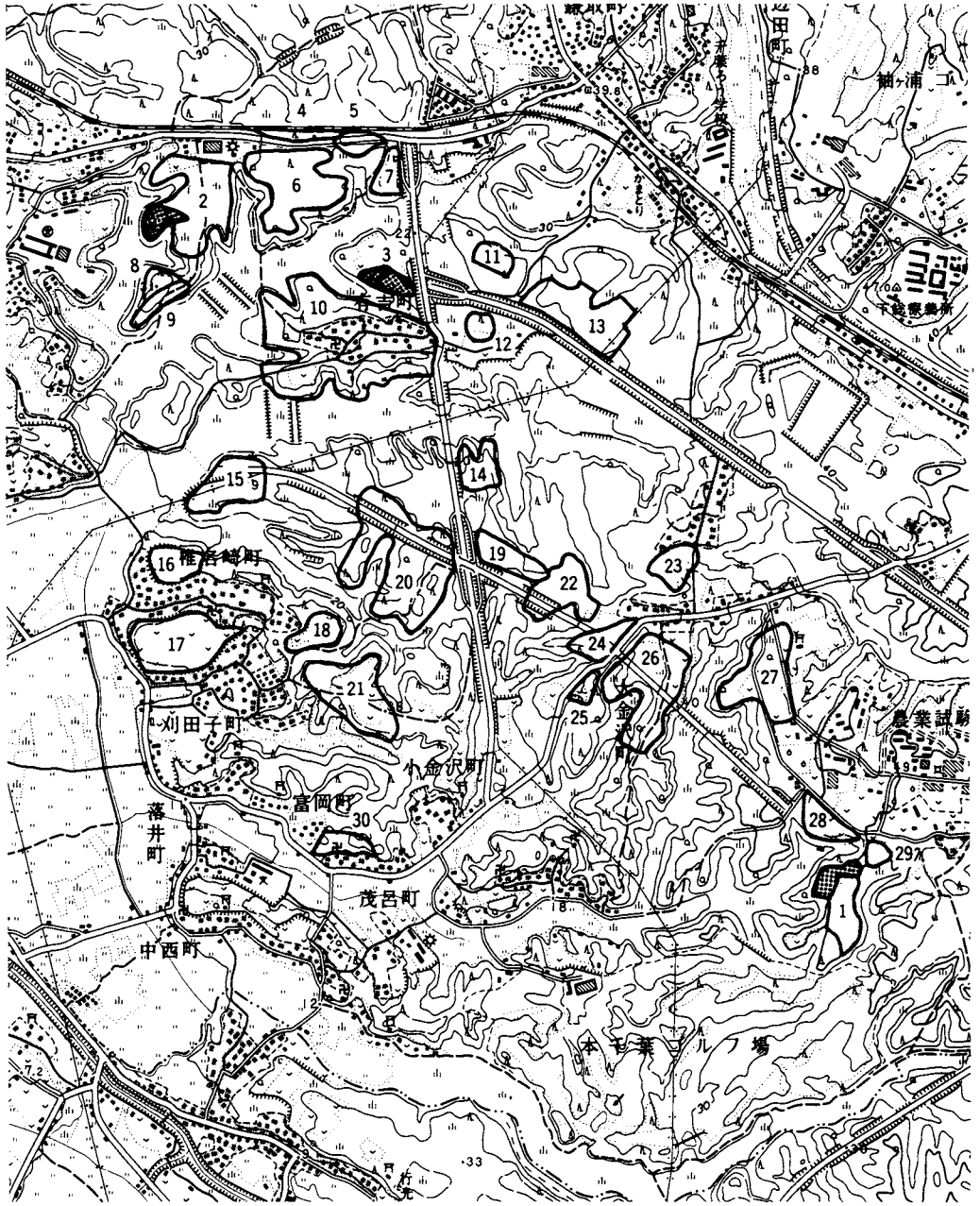
弥生時代の遺跡は現在までのところきわめて少なく、南二重堀遺跡において終末期的な様相をもつものが認められている程度で、有吉遺跡（第3次）の3軒の住居址が初めての検出例と言ってよい状況である。村田川対岸の市原市では多くの弥生時代の遺跡が調査されており、村田川を挟んだ本地区においては様相がかなり異なってくるようである。

古墳時代になるとその遺跡数はかなり増加してくる。前期および中期の集落はあまり多くないが、最近になって南二重堀遺跡、馬ノ口遺跡で検出されており今後の調査に伴いさらに増加することが予想される。この時期の古墳は多くないが、上赤塚1号墳^{*}では石枕等の良好な資料が出土し、5世紀中葉頃と比定されている。後期の遺跡数は多く、有吉遺跡^{*}、椎名崎遺跡^{*}等で大きな集落が確認されており、今後の調査でもその量はますます増加するものと思われる。これに対する古墳群も多く、椎名崎古墳群^{*}（A・B・C支群）、生浜古墳群^{*}等7世紀代に比定される古墳群が東南部地区全体にみられ、古墳群間の様相の解明とともに、集落との関係も徐々に把握されるようになってきた。歴史時代の遺跡も古墳時代後期からの大規模な集落が有吉遺跡^{*}、椎名崎遺跡^{*}等で確認されている。特に現在調査中の高沢遺跡^{***}では大規模な集落とともに貴重な遺物が検出されており、成果が期待されるところである。

* 既報告分

** 「東南部ニュータウン」15として報告予定

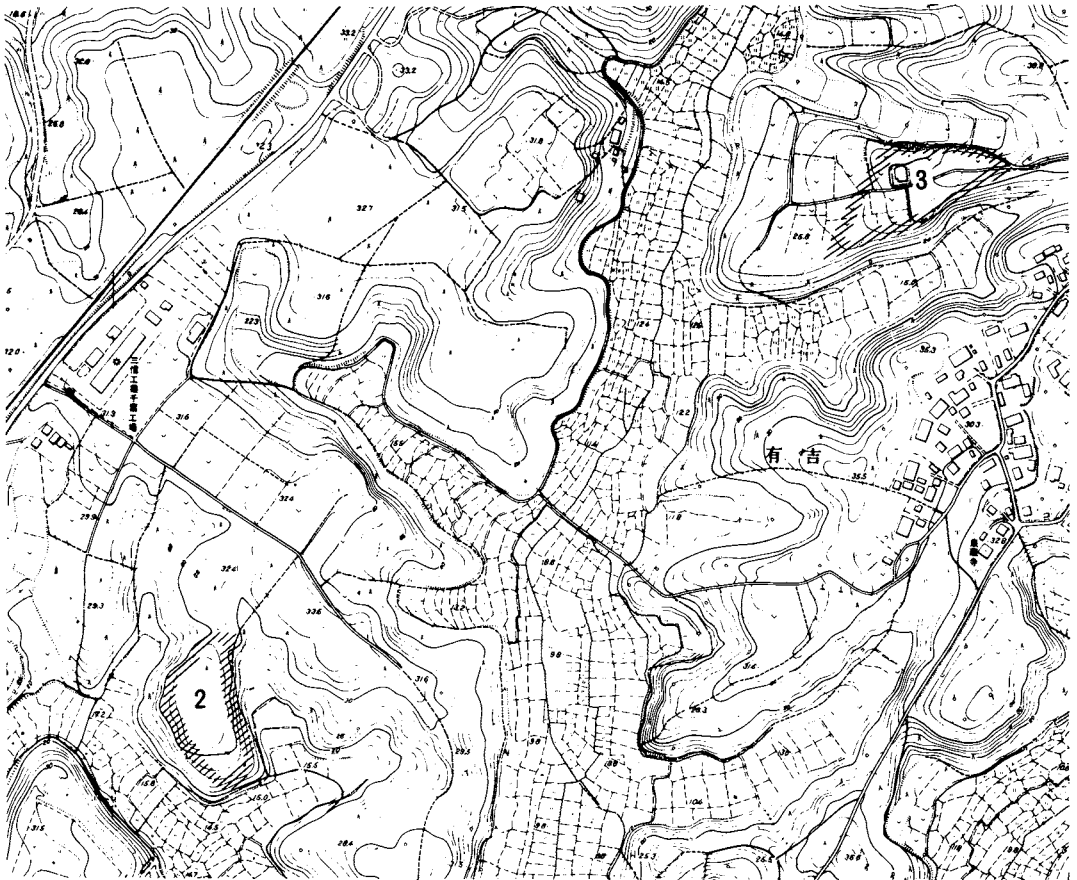
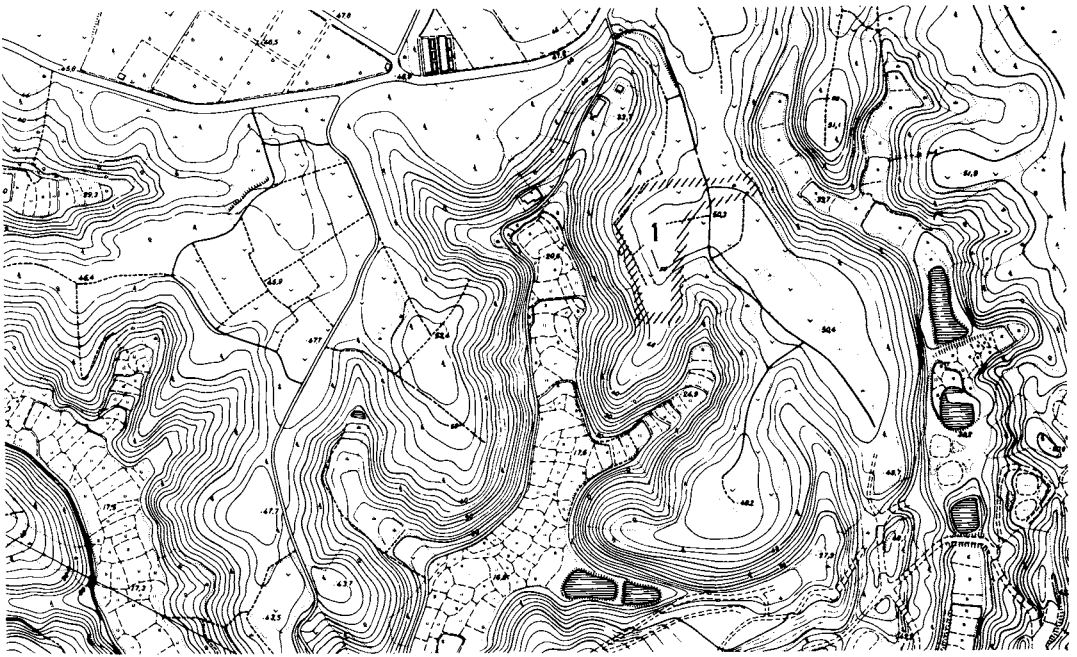
*** 昭和56・57年度に調査



1:25,000 蘇我

- | | | | | |
|---------------|------------|------------|---------------|---------------|
| 1. バクチ穴遺跡 | 2. 有吉遺跡 | 3. 有吉南遺跡 | 4. 高沢古墳群 | 5. 生浜古墳群 |
| 6. 高沢遺跡 | 7. 南二重堀遺跡 | 8. 上赤塚貝塚 | 9. 上赤塚古墳群 | 10. 有吉城跡 |
| 11. 有吉北貝塚 | 12. 有吉南貝塚 | 13. 馬ノ口遺跡 | 14. 木戸作遺跡 | 15. 椎名崎遺跡 |
| 16. 伯父名台遺跡 | 17. 刈田子台遺跡 | 18. 今台遺跡 | 19. 椎名崎古墳群A支群 | 20. 椎名崎古墳群B支群 |
| 21. 椎名崎古墳群C支群 | 22. 小金沢貝塚 | 23. 六通遺跡 | 24. 小金沢古墳群 | 25. 御塚台遺跡 |
| 26. ムコアラク遺跡 | 27. 六通金山遺跡 | 28. 大膳野北遺跡 | 29. 大膳野南貝塚 | 30. 富岡古墳群 |

第1図 東南部地区主要遺跡位置図



1. バクチ穴遺跡 2. 有吉遺跡(3次) 3. 有吉南遺跡

1 : 7,500

第2図 遺跡周辺現況図

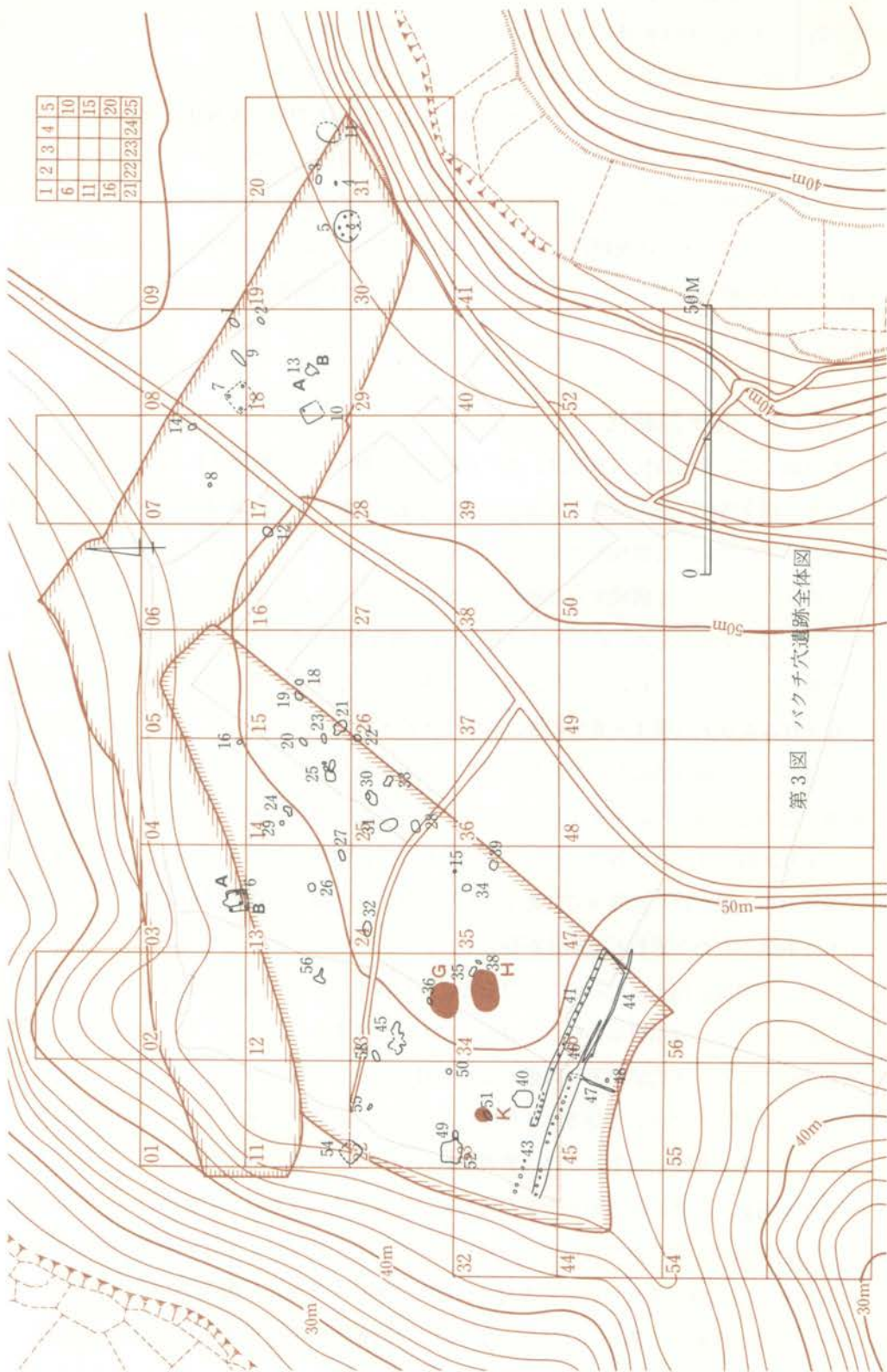
第2章 バクチ穴遺跡

第1節 調査の経過と方法

調査は、1・2次の2期に分けられる。1次調査は、遺跡の北端にあたる2区域、計3,500㎡について、昭和55年1月4日から2月29日まで実施された。2次調査は、遺跡の西側張り出し部分4,500㎡について、昭和56年8月1日から12月5日まで実施された。なお、遺跡の大半を占める南へ延びる舌状台地上については、現況のままである。発掘にのぞんで、1次調査区は西側がA区、東側がB区と名付けられ、2次調査区をC区とした。また、遺跡を網羅する範囲で20m×20mの大グリッドが設定された。2次調査では便宜上4m×4mの小グリッドをも設定した。グリッド番号は、北西コーナーから東側コーナーへ至ることを原則とした(第3図参照)。

1次調査の表土剥ぎは、昭和55年1月11日から約1か月に亘って実施された。A区及びB区の一部は機械によって、B区の大部分は人力によって行った。表土上面から遺構確認面までは50～100cmに及んだが、特にB区は包含層が遺存し、縄文時代前期後半を主体とする多量の土器破片を検出したため、表土剥ぎは人力によるところとなった。遺構の確認は、表土剥ぎと併行して行なわれた。土坑は確認後順次半截して掘られ、断面図作成後完掘し、写真撮影、平面図作成を行った。住居址は十字にセクションベルトを設定し、覆土の検討を行いながら床面まで掘り下げ、写真撮影、断面図作成を行う。次にセクションベルトを除去し、柱穴や壁、付属施設の有無を確認しながら完掘し、写真撮影と平面図作成を行った。遺物の出土状況と炉は、適宜写真・図面を作成した。なおカマドは、床面等検出後、十字にセクションベルトを設定し、状況の良好なものについては袖を残し、随時写真・図面を作成した。住居址の概要は、A区で2軒の歴史時代の住居址が重複して検出されたのみで、B区では、縄文時代1、弥生時代1、歴史時代2の4軒が認められた。他に縄文期の炉址だけの遺構が2基検出できた。先土器時代の調査では、2m×4mの試掘坑を30か所に設定し、武蔵野ローム最上層確認面までを掘り下げている。遺構の検出はなく、遺物はB区に単発的な出土がみられ、付近を拡張の結果、4か所計7点を検出した。

2次調査は昭和56年8月1日に開始した。当初は調査区がC区の東側半分であったため、区内に設定した幅1m、長さ10mのトレンチ調査の後、機械による表土剥ぎを行った。耕作等の影響を受け、遺構確認はあまり成果をあげ得なかった。8月10日、遺構確認中に、褐色土中から扁平な石製品が出土し、後を追うように対の一片が出土した。精査の結果、円形のピットがかろうじて認められ、続いてもう一对の玦状耳飾の出土を見たのである。遺構の調査方法は、1次調査とほぼ同じである。上層遺構が薄かったこともあり、10月に入るとC区の西側部分への拡張が決まり、順次発掘作業が進められた。主な遺構としては、土坑、炉穴群、住居址があげられる。土坑は縄文時代前期初頭の深鉢形土器を横置して埋納したものの、玦状耳飾の一部を再利用した遺物を底面より検出したものがある。炉穴群は、単独で4基、群で5か所数えられるが、その内1群は



第3図 バクチ穴遺跡全体図

18基の火床が確認され、多くの攪乱を受けていることから、調査に困難をきたした。住居址は、歴史時代の住居址が4軒検出されたのみである。先土器時代の調査では、2 m×4 mの試掘坑を39か所に設定し、武蔵野ローム最上層確認面までを掘り下げている。遺構は検出できなかったが、大きな遺物集中地点が隣接して2か所、計約550点の石器及び剥片を検出した。他に、計26点の遺物を出土した所、2か所の単発的な出土がみられた。発掘区を拡張した後、集中出土地点の周囲3か所に、遺物出土層位である立川ローム層第IV層までの試掘坑を設定したが、成果はなかった。以上のように1・2次を総合して、先土器時代の成果と、東南部地区内でも比較的希薄な縄文時代早期から前期前半を中心とする2次調査、縄文時代前期後半以降を主とする1次調査の成果が特筆できよう。

第2節 先土器時代

本遺跡での先土器時代石器群は、大部分が第2次調査の際に検出されたものである。ローム層の調査は縄文時代以降の遺構の調査を終了した後、2 m×4 mの試掘坑を斜面部を除いて全域に入れた。その結果、石器検出グリッドは11か所(A～K)にのぼったが、それぞれを拡張したところ確実にユニットを構成する石器群は3地点にとどまり、他は単独出土あるいは縄文期の石器片の混入等であったため、結果的には約700m²の調査面積となった。また、後述するようにユニット番号についてはG、H、Kとし、調査時の番号をそのまま使用することとした。

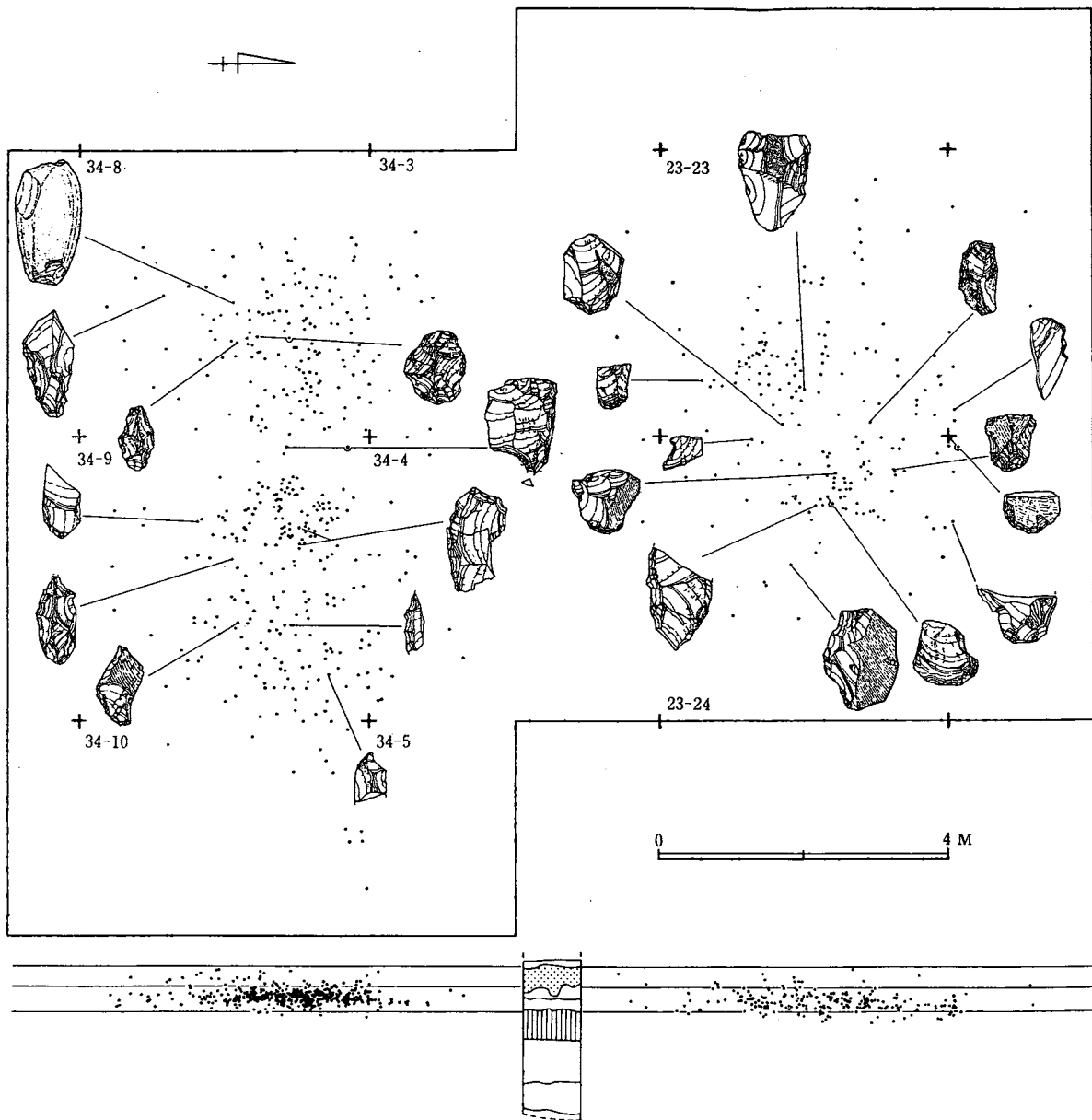
G・Hユニット (第4・6～12図、図版2・13・14)

両ユニットは調査時において、石器の集中地点が異なるため、全く別なユニットとして考えて調査を進めた。つまり、第4図に示すようにその中心は23-23・24グリッドと34-8・9グリッドにあり、34-3～5の各グリッドでは明らかに空白地帯が存在する。だが、この事実は整理の段階で見事に覆された。僅少ではあるが互いのユニット間で接合関係が認められ、他にも同一母岩から剝離されたと思われる剥片が存在した。

一方、石器群の出土層位について見ると、いわゆるハードローム(第IV～V層)に集中しており、Gユニットでは第III層のソフトロームにも若干含まれており、反面Hユニットでは第VI層の暗色帯にも及ぶ。平均値で言えば僅かながらHユニットのほうが下位となろうか。

さらに使用石材について見ると、黒曜石、メノウ、頁岩、チャートと若干の砂岩で構成されており、とりわけ黒曜石は気泡が多く良質とは言いがたい石質であった。

ナイフ形石器 ナイフ形石器は欠損品を含めて5点が検出された。石材にはメノウを多用しており、石材の選択と言う点では一つの特色と言えるかもしれない。1は先端部を欠損するものの左側面がきれいに調整されている。素材には縦長の剥片を使用し、裏面での加工は認められない。剥片としては比較的大形品を使用したようだ。2は横長の剥片を使用して簡単に両側縁を加工し成品としている。裏面基部にも4回以上の剝離痕を残す。また、右上部に位置する打点部での加



第4図 G(右)・H(左)ユニット石器分布図

工は施されていない。形態としては1あるいは4とは異なるが、ナイフ形石器の類として扱ってよいであろう。3は基部を含む約 $\frac{1}{2}$ を欠損する。加工は先端部左側に僅かながら認められる。4はチャート製で、左側基部及び先端部右側に加工痕が認められる。簡単な仕上げとなっているがナイフ形石器としてよいであろう。表面には節理面が認められる。5はきれいに整形されたナイフ形石器で、裏面から推察すると剥片の上部を切断して下端部を素材としたようである。加工は右側縁に集中し、左側では基部に数回の剥離が施されるにとどまる。

尖頭状石器 角錐状石器などとも呼ばれている石器で2点出土し、いずれも黒曜石製である。ともに背高があり、断面が三角形を呈する特徴的な石器で、大きさの点では少々異なるが整形剥離には類似点が多い。加工も簡単にすましており、裏面でも6の場合2～3の剥離痕が認められるにすぎない。ただ、6ではわずかに彎曲した先端部が欠損しているところから錐としての機能も考慮できる。

エンドスクレイパー 計8点が出土した。11, 12, 14は頁岩で、他は黒曜石となっている。8は比較的整った形で製作されており、加工もていねいなものとなっている。9は背高があり、表面には自然面も残す。10は小形品で、刃部の調整にも入念さが窺える。11の背高はもっとも高く、2 cm ほどにもなる。整形も不完全で、左上部を角状に残す。12もそれほどきれいな整形は施されておらず、両面に節理痕が認められる。刃部は尖っている先端を小さな剥離で整形し作出する。13はこれら8点のうちでもっともよく仕上げられており、打面も削除されラウンドスクレイパーに近い。14は他の剥片とも接合する。自然面に近い部分を利用し、その端部を簡単に剥離しエンドスクレイパーとしている。15も他の剥片と接合した。上部は欠損したわけではなく、素材とする剥片を意図的に半割したままのもので、第8図-30がその接合状態である。これを見ると刃部はさらに折断された後に作出されていることが理解できる。

サイドスクレイパー 計5点が出土した。16は黒曜石製で、縦長剥片の左側縁を加工してスクレイパーとしており、作りは概して粗雑となる。17はメノウ製で石器の一部が遺存するにすぎない。刃部と考えられる部分ではあるが、剥離がやや大きく他の器種の可能性もある。18もメノウ製で割れた状態で出土した。素材には横長剥片を用いており、刃部は左側に位置する。19は頁岩製で、右側縁中央部を数回剥離しただけで石器とする。仕上げと言う点から見れば粗雑さが窺える。20も頁岩製で、表面には大きな節理面を残す。刃部の加工は左側縁全面にわたっており、微調整も施され、きれいな刃部に仕上げられている。下端部は意識的に切断されたものであろう。

石錐 23の1点だけで、メノウ製となる。下部の先端は欠損しているものの、彎曲した整形を考えればおそらく石錐となろう。右側面もきれいに剥離され、錐としての機能が窺える。

敲石 22は砂岩製で約 $\frac{1}{2}$ が失われている。下端の使用痕から推察してハンマーストーンと考えて間違いあるまい。欠損面は節理面ともなっていることから使用中の破損とも考えられる。

使用痕を有する剥片 24, 25, 26は頁岩製であり、24は右側縁上部に明確な剥離痕を残す。25は

大形剥片で、意識的に四分割されたものであろう。左側縁では鋭いエッジが形成され刃こぼれ痕が認められる。26は12と接合する、小剥片であるが、左側にノッチをもつ。21, 45, 46, 47, 48はメノウ製で、調整剥離あるいは刃こぼれ痕が認められる。45は大形の剥片であり、石器の素材としても十分と言えよう。46は右側縁に剥離が認められるもののサイドスクレイパーとしては不十分となろう。

石核・剥片 メノウ製には28, 40, 42, 44, 49, 55, 56とがある。石核としては40の1点だけであった。黒曜石製では31～39となり、石核あるいはそれに類するものは37～39となろう。37, 38の石核では打面調整が施されている。41, 43, 50, 51, 53, 58～60は頁岩製で接合関係を中心として図示した。ただ、この頁岩には石核は存在せず、すべて剥片に限られていた。第12図に示したものがチャートである。図示した以外には22点の剥片が検出された。石質から母岩は2個の存在が想定できた。第12図はすべて同一母岩に属するものであり、第6図-4は他の母岩から製作されたものと思われた。

Kユニット (第5・13・14図, 図版2)

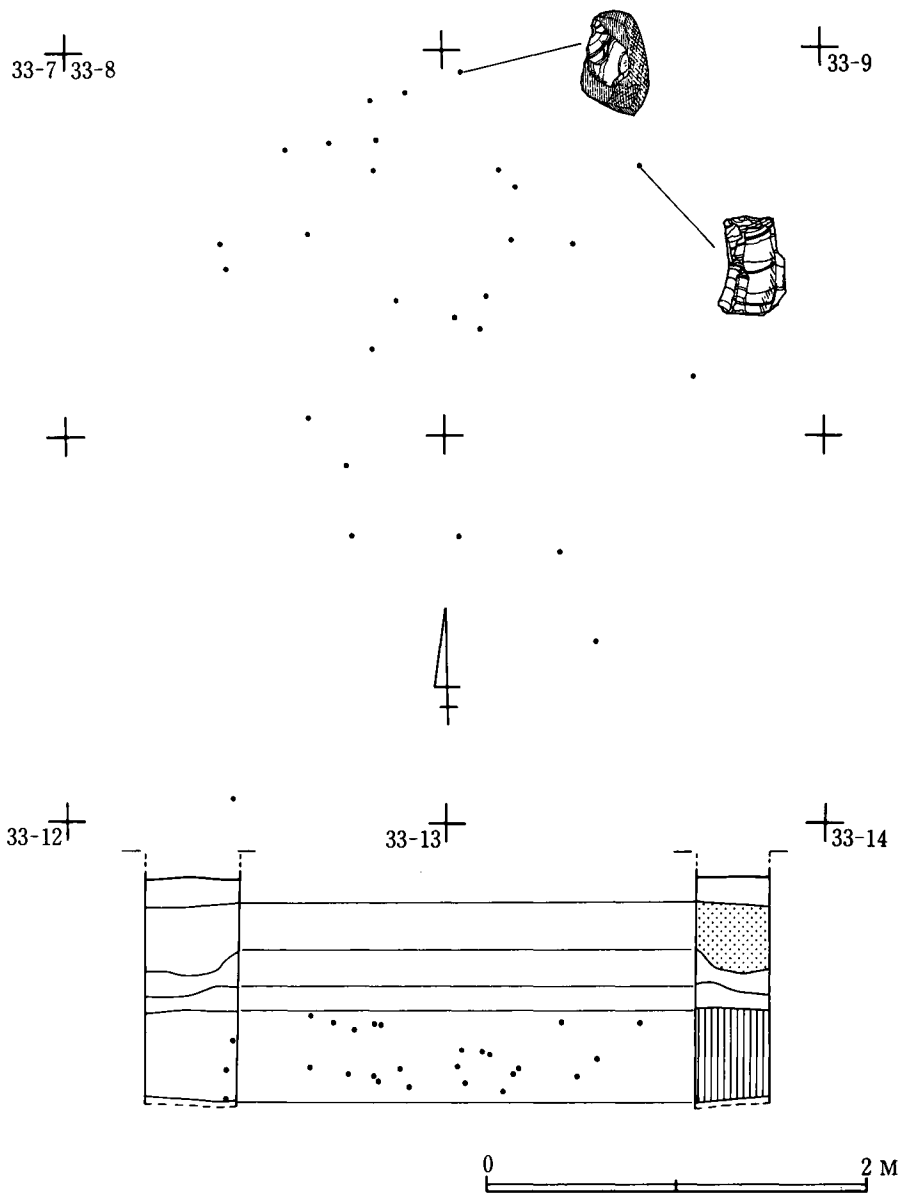
本ユニットは33-8グリットにおいて全点出土した。総数26点とユニットとしては小さく、分布の径が4m弱となる。石材はすべて黒曜石によって構成され、しかも図示したごとく大半が接合してしまった。

出土層位は第VI層の暗色帯からであり、層序からも前G・Hユニットよりも古い時期の所産となる。ここでは成品としての石器は皆無であったため詳細を語ることはできないが、概観すると出土層位がやや深いような感を呈する。むしろハードローム下部から出土してもよさそうである。ここでは攪乱等も確認されていないため、出土層位については暗色帯中としておき、これからの出土層位に留意してみたい。

使用痕を有する剥片 72がこれにあたる。素材としても十分な大きさと言えよう。表面には自然面が残り、背面のもっとも高い部分を1回の剥離により削除している。おそらく使用するためのものであろう。使用の痕跡は左側縁の表裏両面に調整痕として残る。機能としては一応サイドスクレイパーが想定できる。

石核 67の1点だけではあるが、87に示すとおり68～71, 73～86の18点が簡単に接合した。原石はかなり大きかったものと思われる。打面には6～7回の調整痕が認められ、剥離もしっかりした面を残す。打面は下部にも設定し、2回以上の剥片剥離を行っている。それに伴う打面調整が78, 85の剥片剥離となり、87に見られるように接合した。

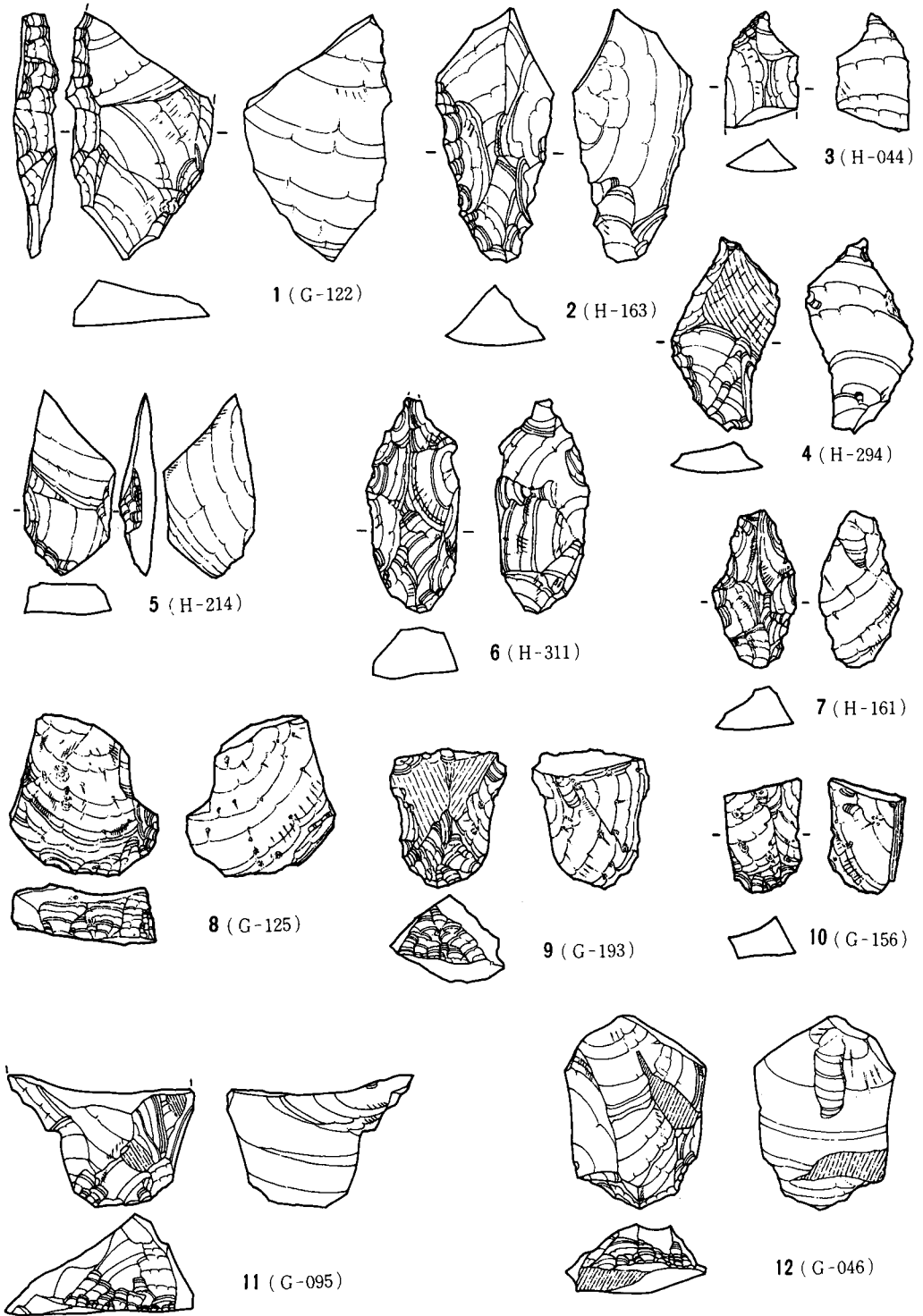
剥片 前記の2点以外はすべて67の石核に接合した剥片であり、石器の素材にできるような良好な剥片は少ない。なお、69, 70, 79, 80, 81, 86の5点は87に示した如く上部打面での打面調整剥片である。このように見てくると比較的横長に近い形状を有するものには打面調整剥片が多く、縦長のものは意識的な剥片剥離によるものと言うことが明確に把握できよう。



第5図 Kユニット石器分布図

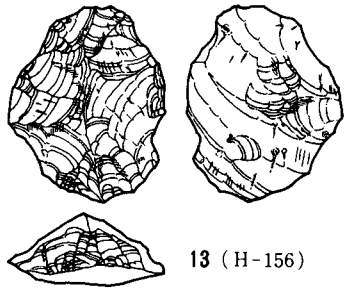
いづれにせよ本ユニットの場合、成品は残されていないところから剝離作業だけをした痕跡と
 考えてよいであろう。しかも石質は半透明の良質なものであり、おそらく信州系に属するのでは
 なかろうか。この点、多くの気泡を有するG・Hユニットとは明らかに異なる。

この他に図示した88~92の石器は、単独出土あるいは表土等から検出されたものであり、図示
 だけにとどめることとする。成品では、88が頁岩製のサイドスクレイパーで、92が黒曜石製の細
 石核となる。

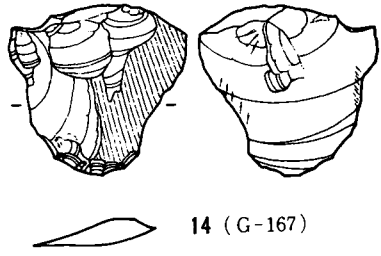


0 5 CM

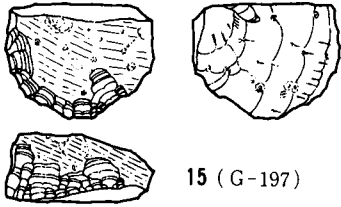
第6图 石器实测图(1)



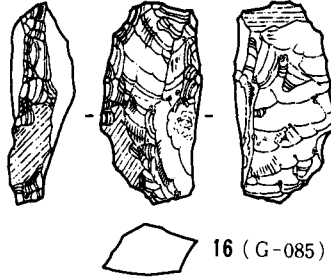
13 (H-156)



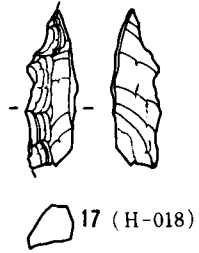
14 (G-167)



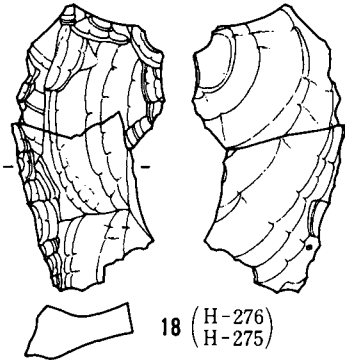
15 (G-197)



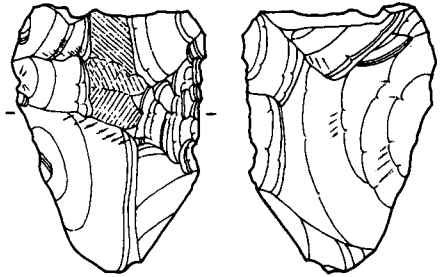
16 (G-085)



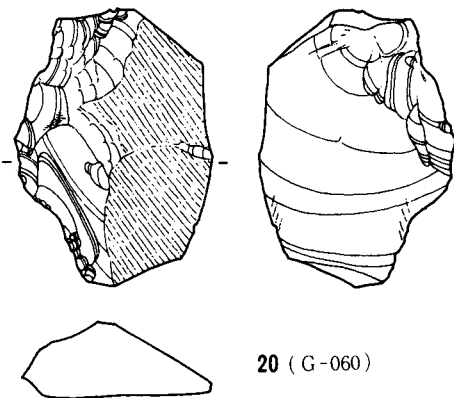
17 (H-018)



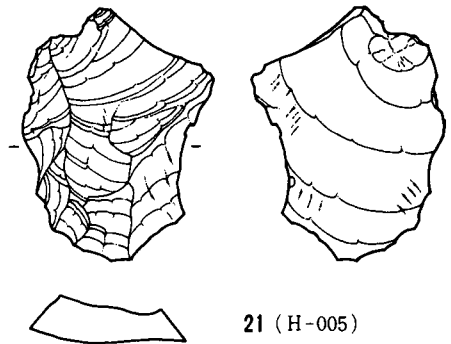
18 (H-276
H-275)



19 (G-087)



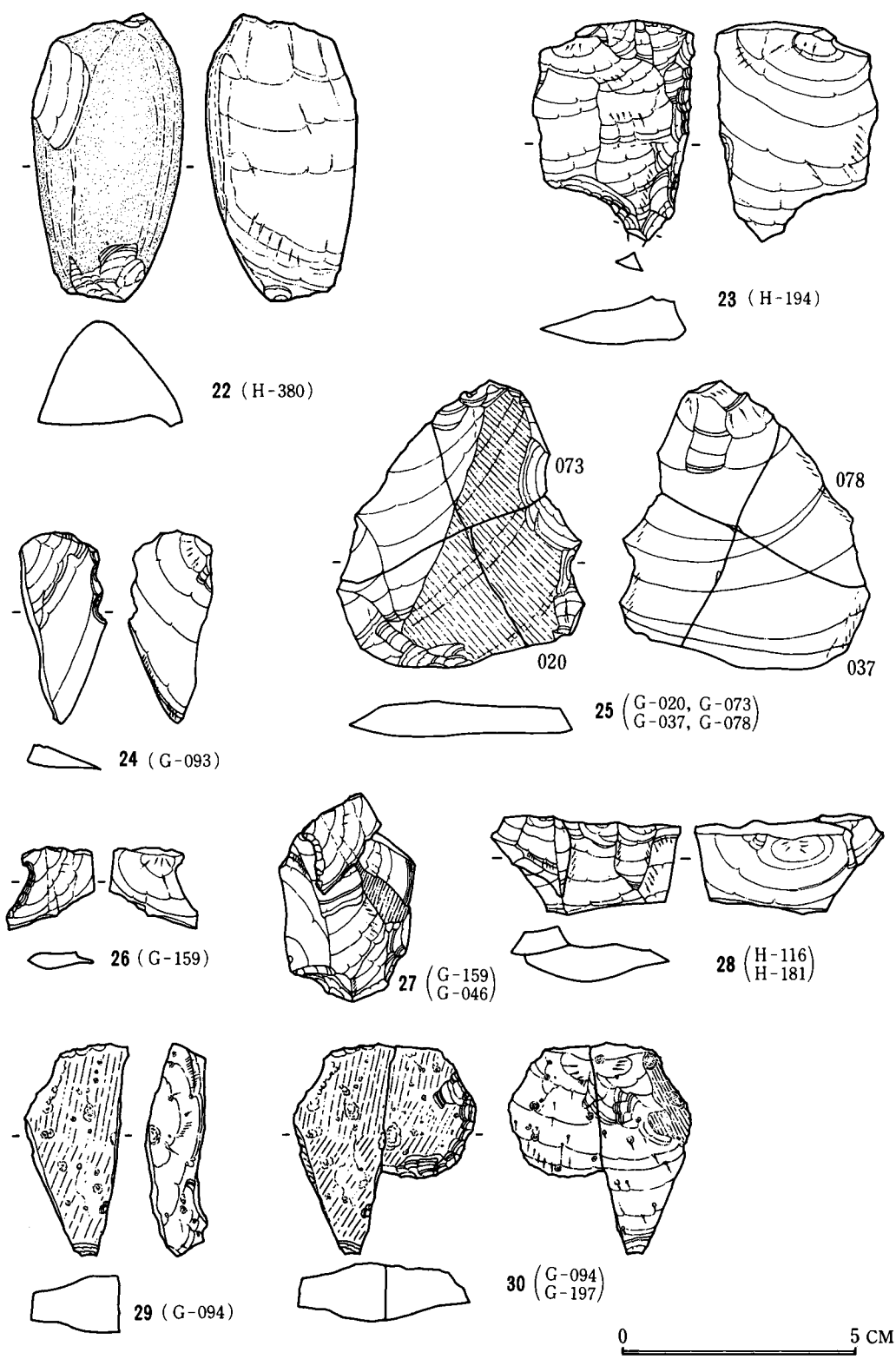
20 (G-060)



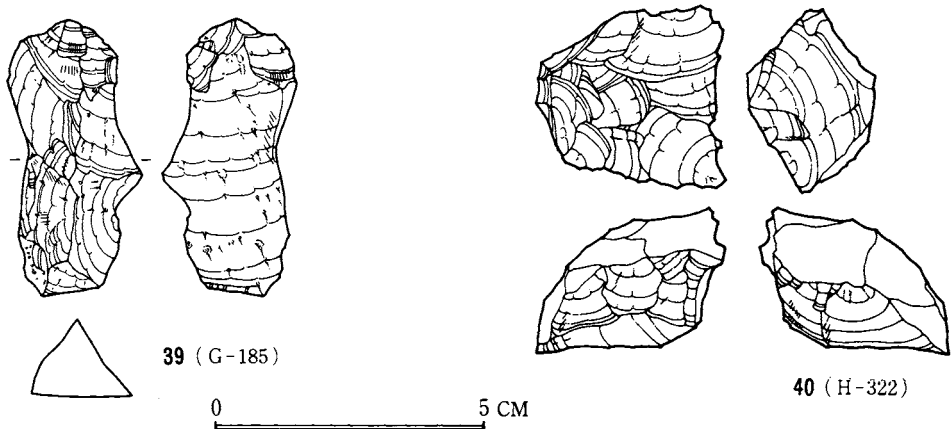
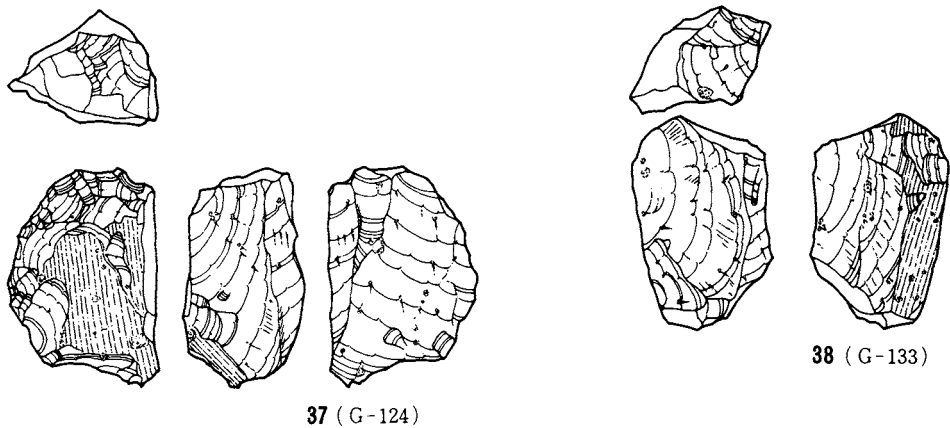
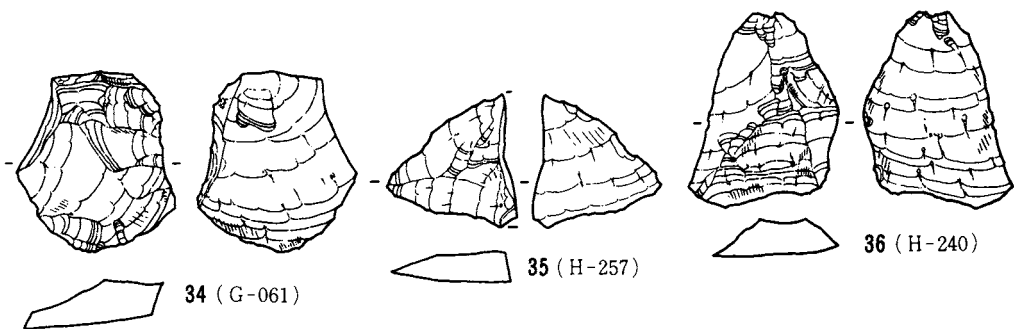
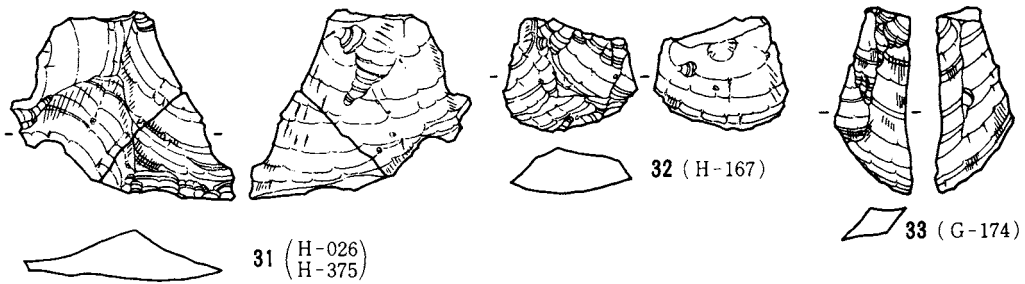
21 (H-005)

0 ————— 5 CM

第7图 石器实测图(2)

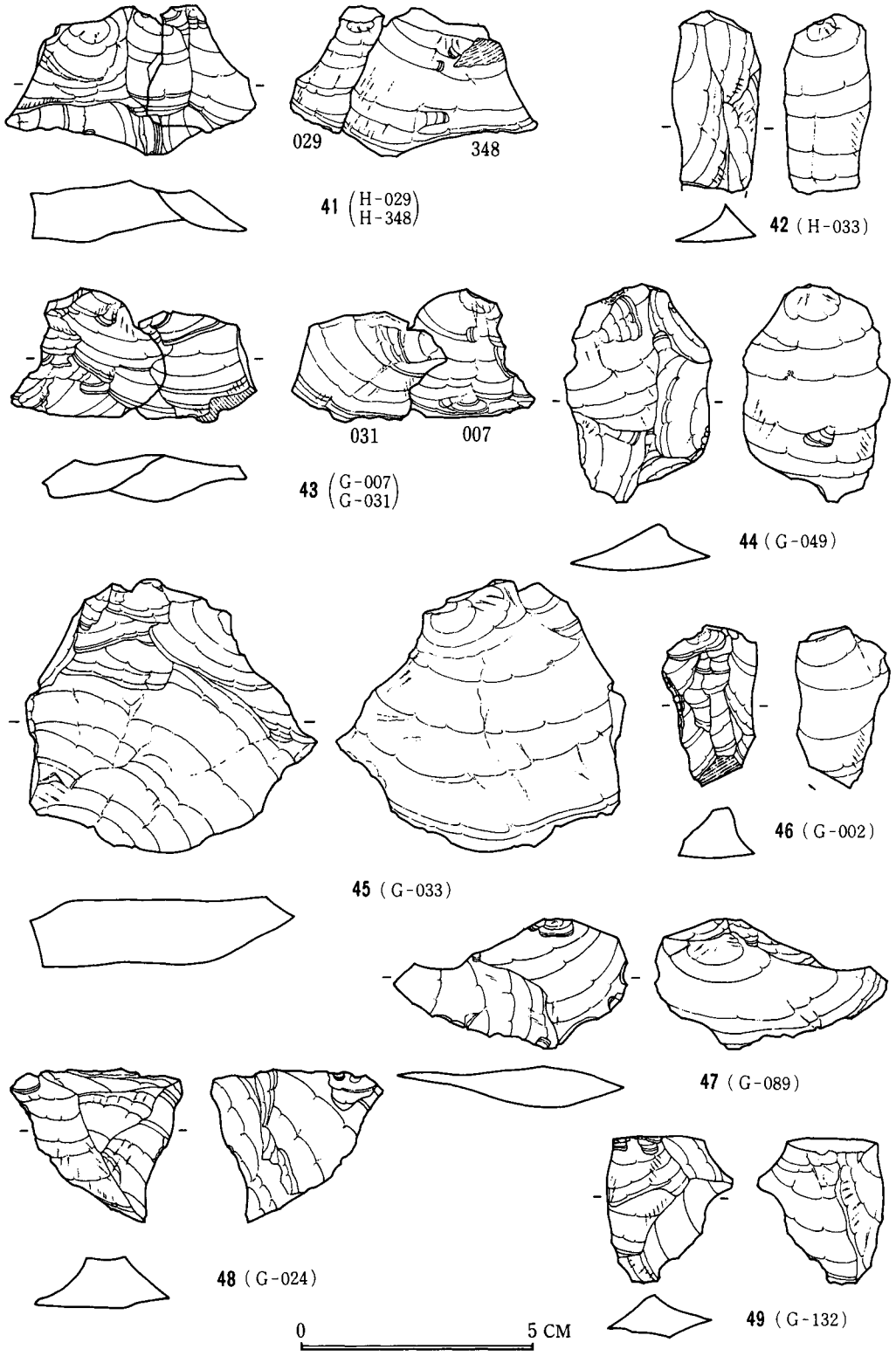


第8图 石器实测图(3)

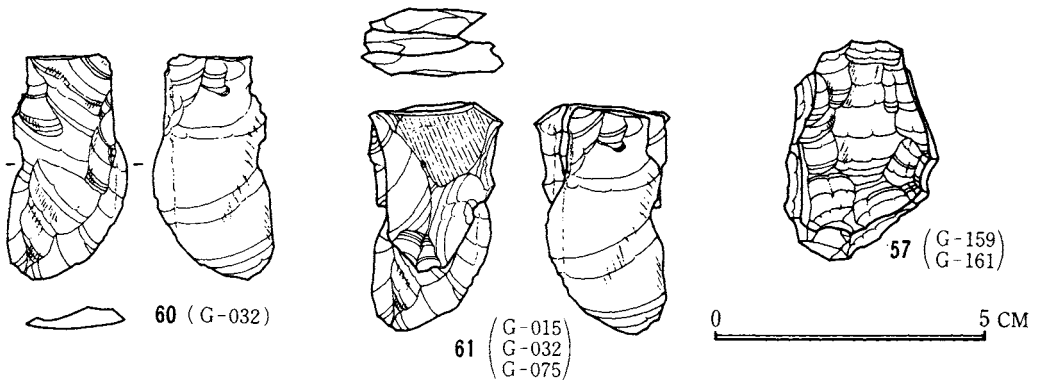
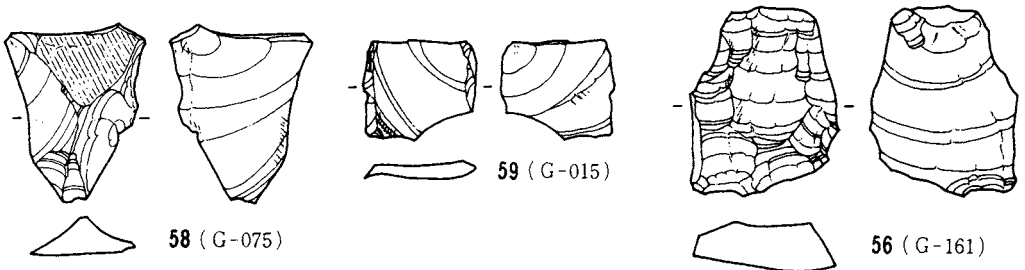
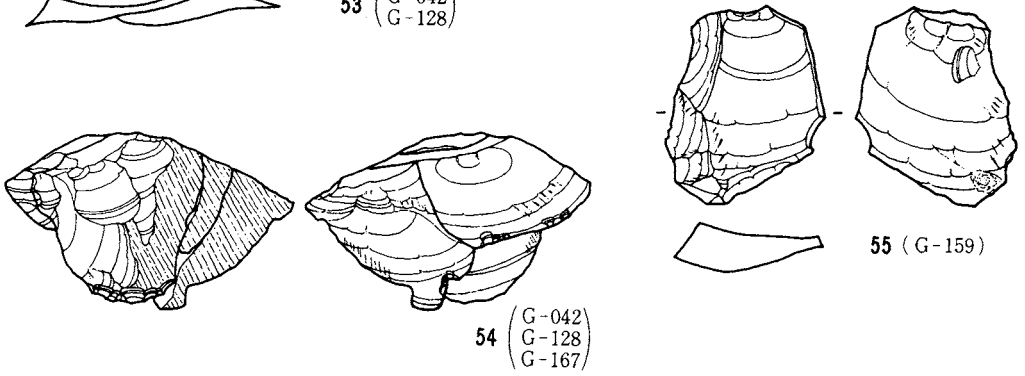
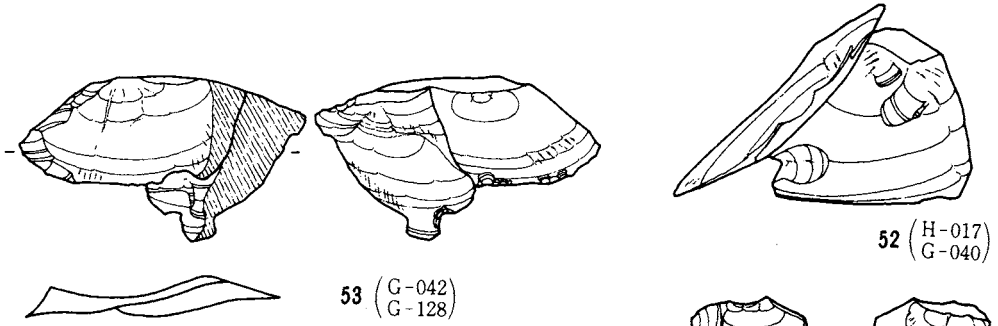
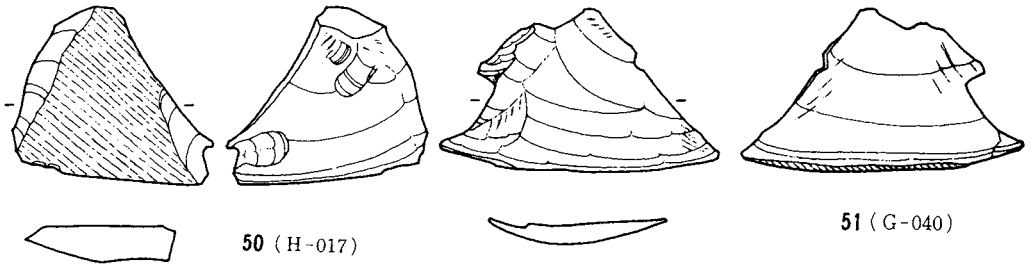


0 5 CM

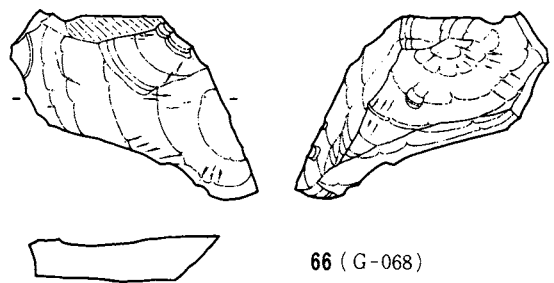
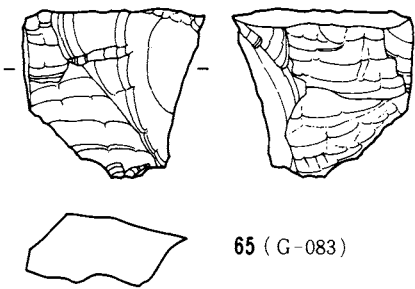
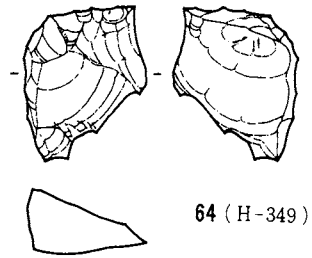
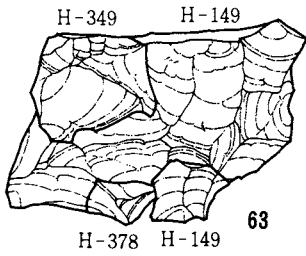
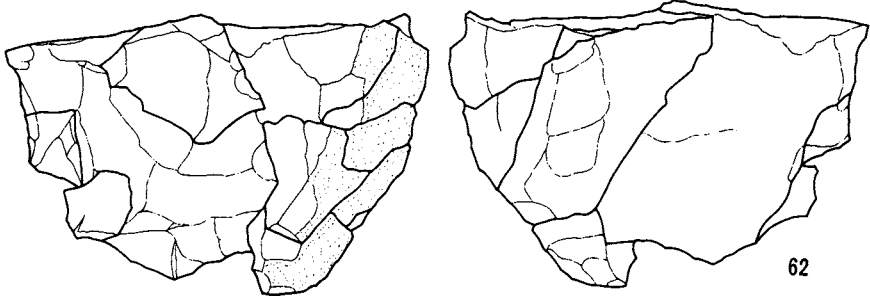
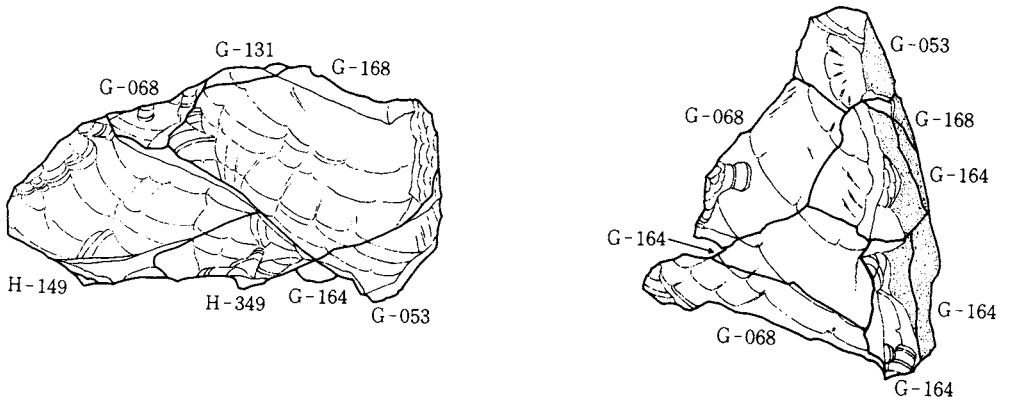
第9图 石器实测图(4)



第10图 石器实测图 (5)

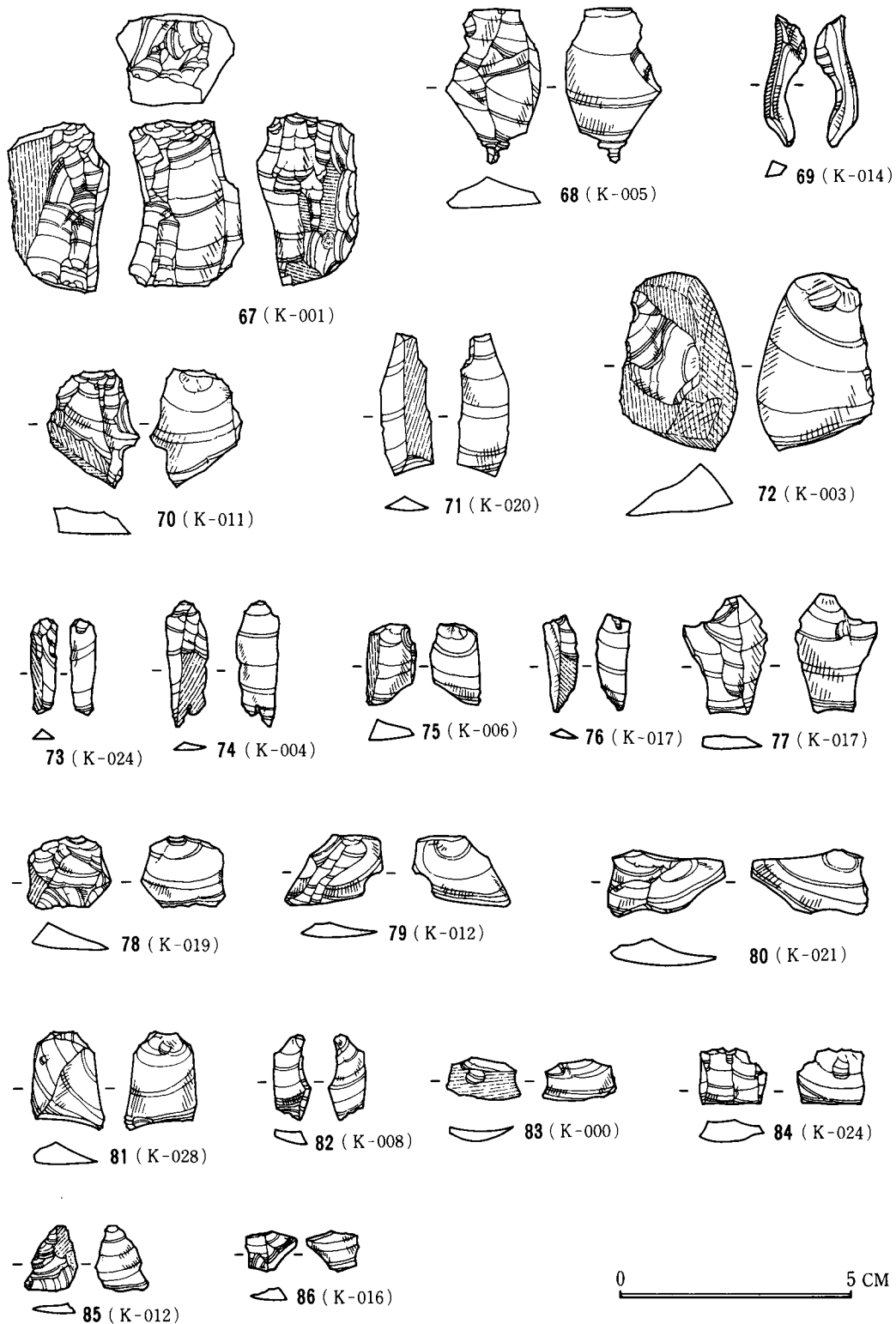


第11图 石器实测图 (6)

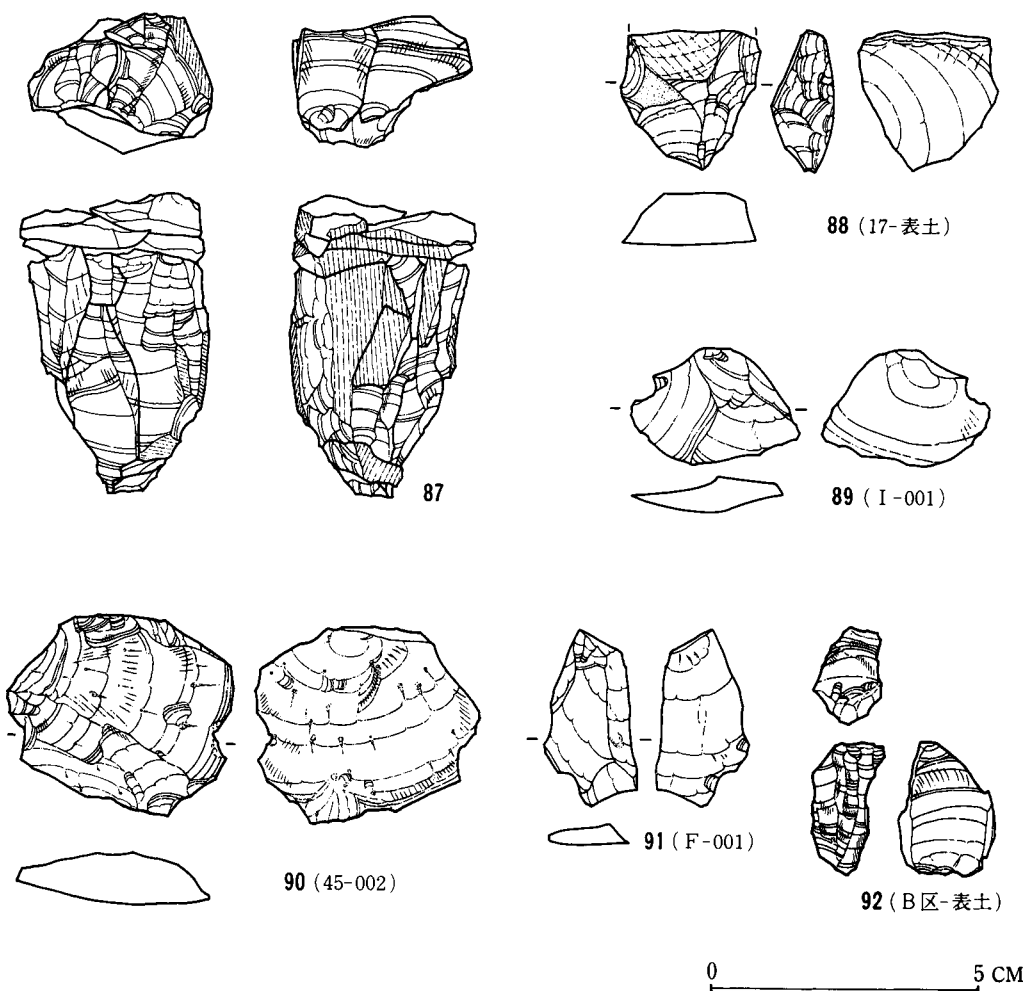


0 5 CM

第12图 石器实测图 (7)



第13图 石器实测图 (8)



第14図 石器実測図 (9)

ユニット外の石器 (第14図88~92)

遺構の覆土中や表土、単独出土の石器についてはユニット外の石器として一括して述べたい。

88は頁岩製のサイドスクレイパーであり、上部は欠損している。表面には自然面と節理面が認められ、刃部は打面を整形して作出する。90は黒曜石製の剥片で、石器の素材としては十分となるが加工痕は認められない。表面には気泡が多い点からG・Hユニットの黒曜石と関連するかもしれない。92は細石核である。打面調整も認められ、剝離角は約60度となる。少なくとも5枚以上の細石刃を剝離している。これは本遺跡唯一の資料となり、存在が想定される細石刃は発見できなかった。石材は黒曜石で半透明の良質品を使用しており、この点ではKユニットに近い。

89・91は単独出土の剥片で、いわゆるハードローム層中から検出されており、石材は黒曜石と頁岩となっている。

第3節 縄文時代の遺構と遺物

本遺跡における縄文時代の遺物は、晩期を除く全ての時期の遺物が検出されている。特にB区包含層においては前期前半から後半にかけての土器が多量に認められている。しかし遺構の分布はやや散漫な状況を呈し、さほど濃密という感はない。また、遺跡全体に及ぶ調査ではないため全貌を把握するまでには至らなかった。

1. 住居址

4号住居址 (第16・24図, 図版3・16)

本址はB区東側に位置し、炉址と遺物を検出したのみである。炉址の平面形態は、開口部が85cm×58cm、底部が43cm×24cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-90°-Wと東西方向を指す。底面はロームが焼けており、ほぼ平坦で確認面からの深さは23cmを測る。覆土は第1・2層に焼土粒が含まれている。主な遺物としては、炉址の約3m東に深鉢形土器(14)の胴部以下が暗褐色土層(第1・2層)中から出土した。

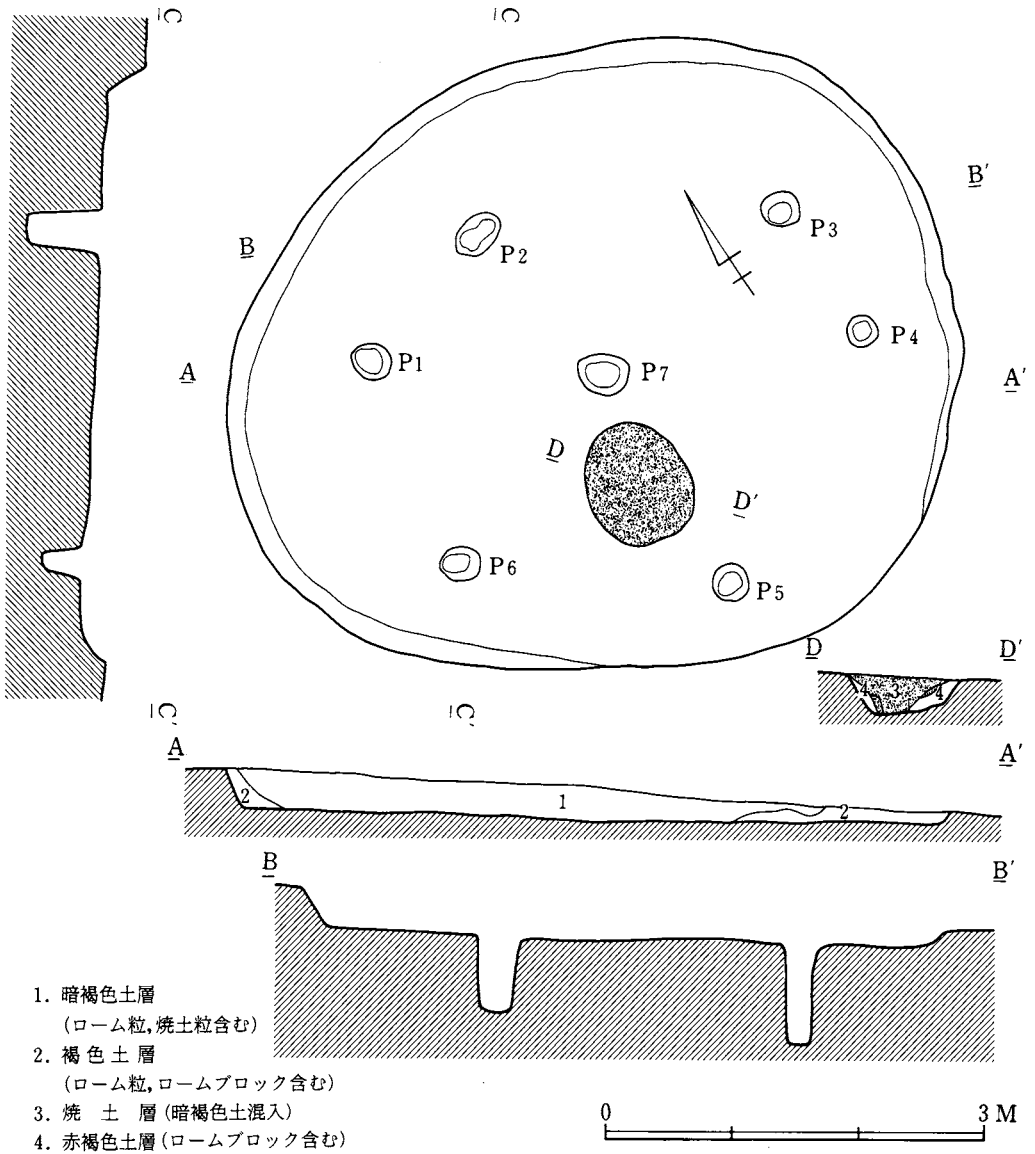
遺物 本址出土の遺物は、2点の実測可能な土器の他は土器細片であった。13・14ともに深鉢形を呈するもので、13は粗いナデ調整後に沈線で曲線を描き、沈線はやや密集する傾向がある。色調は外面暗褐色、内面褐色を呈し、比較的堅緻な仕上がりである。14は胴下半部のみが遺存する。器面は風化が著しいが、縦方向にヘラ磨きが施されるようである。色調は褐色を呈する。13・14ともに堀之内I式である。

5号住居址 (第15・24図, 図版3・16・17)

本址はB区の東側に位置する住居址である。南側では壁の一部が既に消失し、床面のみが確認された。平面形態は5.9m×4.9mの楕円形を呈し、長軸方向はN-70°-Wを指す。壁は南側を除いて明瞭に検出され、北側で高さ32cmを測り、わずかに外側に傾斜する。壁溝はない。柱穴はP1~P7の7か所で検出され、規模は直径27~42cmの円形または楕円形を呈する。柱穴の深さはP6が31cmと浅い他は、58~73cmとほぼ様な深さを持つ。床面は多少凹凸が見られるがほぼ平坦で、比較的堅い。南東部分の床面は、南北140cm、東西130cmの半円形の範囲で5~10cm高くなっている。

炉址は中央のやや南寄りに位置する。平面形は、開口部が径98cmの円形、底部が72cm×55cmの楕円形を呈する。底部の長軸方向はN-30°-Eを指す。底面はよく焼けており、凹凸が顕著である。床面からの深さは30cmを測る。炉のやや北寄りに25cm×18cmの楕円形、底面からの深さ10cmのピットが穿たれている。出土遺物は、床面直上から2点の縄文式土器破片と、石器剥片が検出された。

遺物 本址からは図示した5点の他にも、約50片ほどの土器片が検出されている。15は底部を欠き、全周の約1/4が現存する。器形は、胴部上半でゆるく外反する深鉢形を呈する。地文は原体L { $\frac{R}{R}$ }の斜縄文で、縄文施文後に沈線でモチーフを描く。沈線は2本単位で引かれ、胴下位は縦方



第15図 5号住居址実測図

向に磨き消す。16は胴下半部のみが現存する。器面の風化が著しいが、かろうじて施文が確認できる。縄文原体は不明で、沈線も施される。残存部下半は縦方向の磨き調整が行なわれているようである。18・19は同一個体と考えられるもので、器形は小形の鉢形を呈する。口縁は平縁で、内面に段を有する。文様帯は胴部上半に上下を区画して配され、三角形を基本としたモチーフを描く。器面の風化が著しいが、縄文原体はL { $\frac{R}{R}$ }である。17はやや大形の直線的に開く深鉢形を呈する土器で、胴部上半のみが全周の約 $\frac{1}{4}$ 遺存している。口縁部は4～5か所で波状を呈し（現存1か所）波頂部を中心に文様が描かれる。懸垂文は、同心円文と蛇行沈線であり、更に沈線が充填されている。器面の風化が著しいが、L { $\frac{R}{R}$ }の斜縄文が施されているようである。15・16・

17は堀之内Ⅰ式に、18・19は堀之内Ⅱ式に比定される。

8号住居址（第17・23図、図版4）

本址はB区の中央やや北西寄りに位置し、炉址のみを検出したに過ぎない。炉の平面形態は、開口部が64 cm×58 cmの楕円形、底部が直径41 cmの円形を呈する。底面はわずかに凹凸が見られ、開口部からの深さは14 cmを測る。上部は既に削平されており、残存する覆土中には、縄文式土器破片の底部に近い部分のみが遺存する。

遺物 本址からの出土遺物は、図示したもので全てである。12は加曽利E式土器の胴下半部の破片で、全周の約 $\frac{1}{2}$ が遺存する。沈線で区画し、縄文帯と磨消帯を交互に配する。縄文原体はL { $\frac{R}{R}$ } であり、縦に回転している。色調は赤褐色を呈し、遺存状態はあまり良くない。

2. 埋 壺

40—B号址（第17・23図、図版4・16）

本址は40—A号住居址の南西コーナーの南側に検出した埋壺である。土器の包含層は付近のソフトローム上面の褐色土で、精査の結果関連遺構の検出はなかった。土器は中期の深鉢形土器で、正位置で埋設され土圧によって割れた状態で出土した。

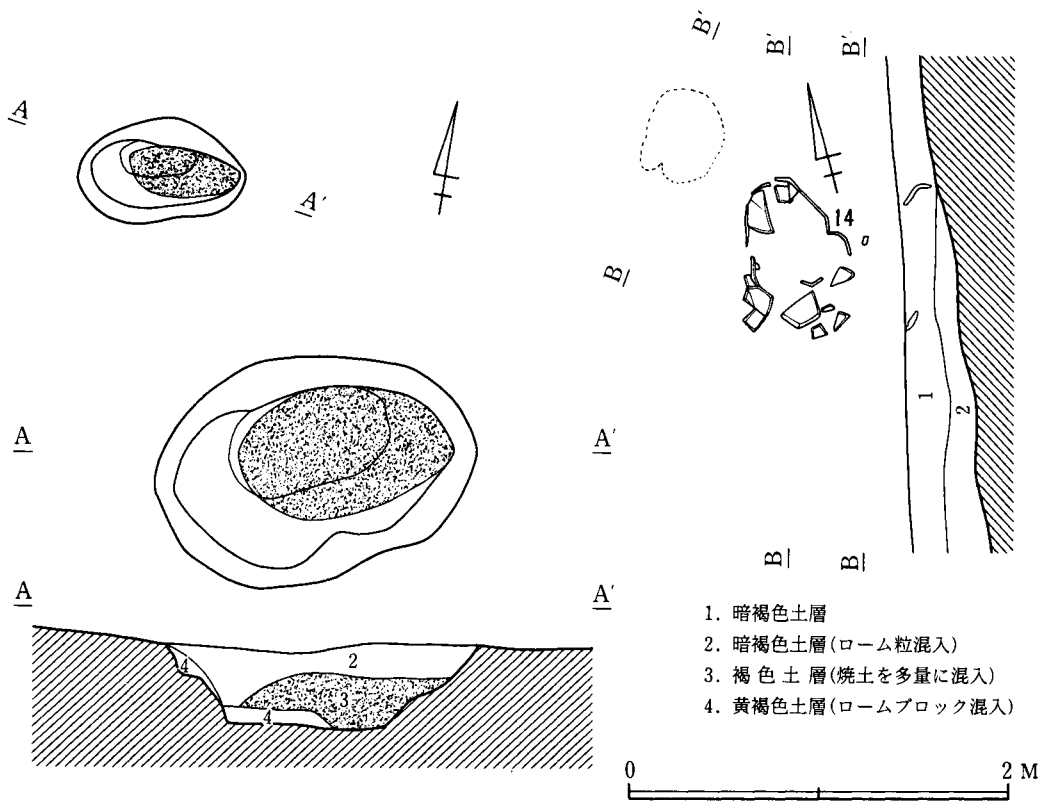
遺物 本址から出土した遺物は図示したもので全てである。11は胴部上半のみが現存している。口縁は平縁で、かなり簡略化された渦巻文を付する。胴部は太い沈線で区画し、縄文帯と磨消帯を交互に配する。磨消帯は全周で7列存在する。地文の縄文は原体R { $\frac{L}{L}$ } であり、胴部も横方向に回転している。色調は褐色を呈し、器面は脆弱である。加曽利EⅡ式である。

3. 土 塚

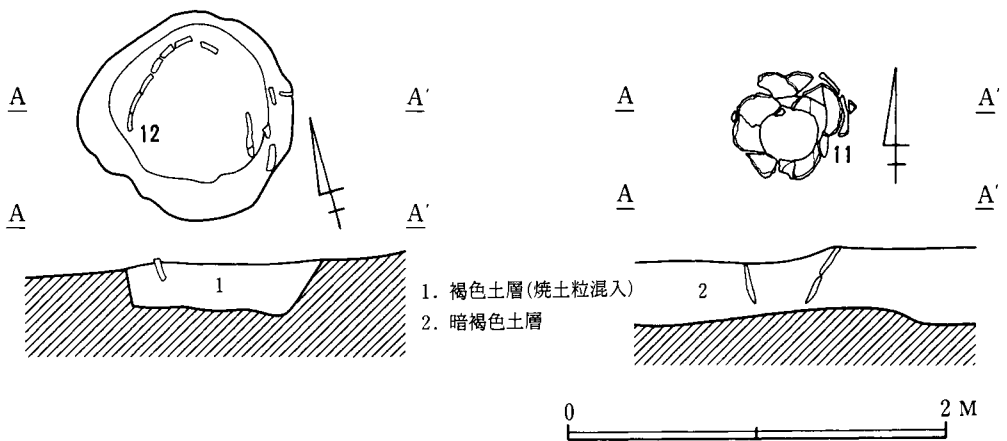
15号址（第18・28図、図版4・14）

本址は遺構確認段階で、遺物の出土を契期として認められた土塚で、C区に位置する。精査の結果本址は円形プランと確認された。平面形態は径50 cmの円形を呈し、確認面からの深さは20 cmであった。覆土中から玦状耳飾2点が相次いで出土した。このため本址は、土塚墓と考えたほうが妥当となろう。

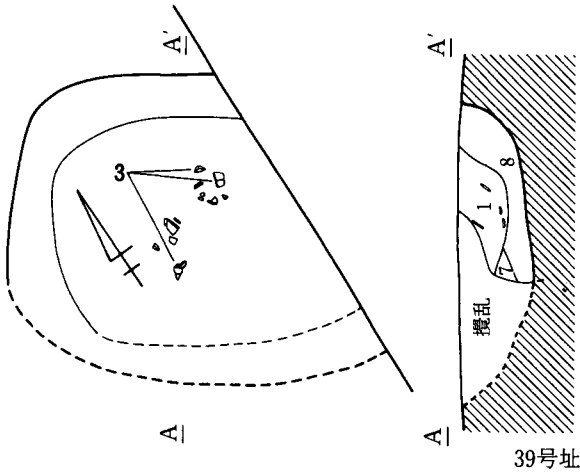
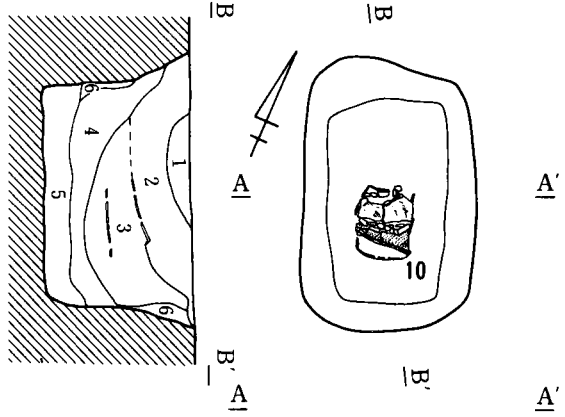
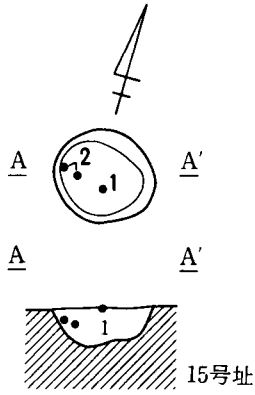
遺物 本址出土の遺物は玦状耳飾2点である。1は接合して完形となった。53 mm×48 mmの楕円形を呈し厚さは6 mmを測る。孔は上方にややずれるが径15 mmを有し、幅2.5 mmの切れ込みがある。切れ込みは直線で両面から加工がなされ、稜はほぼ中央に位置している。全面にわたり入念なる研磨が行なわれ、光沢を帯びる。石材は滑石で、重量は21.9 gを測る。2は1よりもわずかに小さく、48.5 mm×40 mmの略円形となり、厚さは5 mmを測る。孔は中央から上方寄りに径7 mmで穿たれており、幅1.5~2 mmの切れ込みを有する。切れ込みは直線で両面から加工がなされ、稜はほぼ中央に位置している。また破砕部の両側に径1.1 mm・1.6 mmの補修孔があげられている。孔周囲は磨滅しており、実測図裏面がより著しい。全面にわたり入念なる研磨が行なわれ、光沢を有する。石材は滑石で、重量は14.6 gを測る。



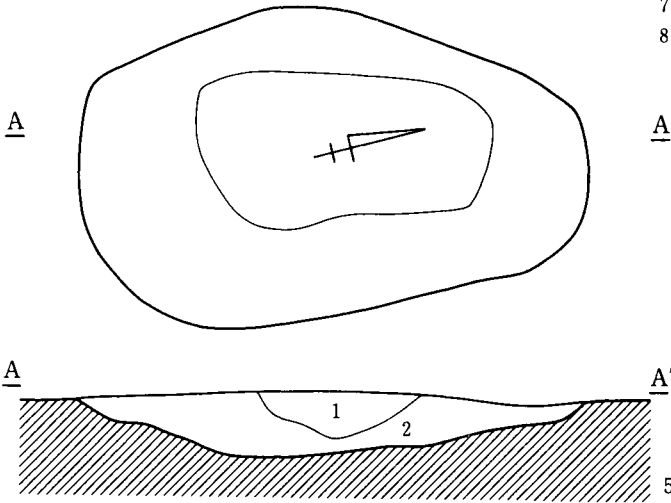
第16図 4号住居址実測図



第17図 8号住居址(左), 40-B(右)号址実測図



1. 褐色土層
2. 明褐色土層(焼土粒混入)
3. 黄褐色土層(ローム粒混入)
4. 褐色土層(ローム粒混入)
5. 褐色土層(ローム粒, ロームブロック混入)
6. 黄褐色土層(ローム粒, ロームブロック混入)
7. 暗褐色土層(ローム粒混入)
8. 明褐色土層(ローム粒, ロームブロック混入)



第18図 15・28・39・51号址実測図

28号址 (第18・23図, 図版5・16)

本址はC区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が140 cm×105 cmの隅丸長方形、底部が90 cm×63 cmの長方形を呈する。長軸方向はN-25°-Wを指す。底面は平坦で、確認面からの深さは80 cmを測る。本址のほぼ中央に位置して、縄文時代前期初頭に位置付けられる深鉢形土器が、底部を除いてほぼ復原できる状態で検出された。出土層位は、覆土第2層下位から第3層で、土器は横に置かれて埋納されていた。

遺物 10は比較的大形の深鉢形の土器で底部を欠く。口唇部は肥厚し、断面三角形を呈する。口縁部には幅10 cmほどの文様帯を有し、アナガラ属の貝殻を羽状に刺突している。胴部はまばらに条痕が認められ、内面は上半が横、下半が縦の条痕である。胎土には植物繊維を混入し、焼成はあまり良くない。色調は黄褐色を呈する。時期は花積下層式土器でも古い時期に位置付けられよう。

39号址 (第18・22図, 図版15)

本址はC区に位置する土坑で、東側は調査区域外に至るため未調査である。平面形態は、おそらく楕円形を呈していたものと思われる。底面は凹凸が目立ち、確認面からの深さは57 cmを測る。出土遺物は、覆土上層及び下層から縄文式土器破片と小礫を検出した。土器破片は、多くが同一個体で3に帰属する。

遺物 3は胴部以下を欠失している。口唇部整形はやや雑であるが斜めに刻んでいる。器面は、縦ないし斜方向のやや細かい条痕で覆われる。内面は上部で横、以下斜方向の条痕で、いくぶん凹凸が目立つ。色調は赤褐色ないし褐色を呈し、胎土への植物繊維の混入はあまり多くない。茅山上層式土器としてよいであろう。

51号址 (第18・27図)

本址はC区に位置する土坑で、その規模は、開口部が270 cm×163 cm、底部が155 cm×80 cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-30°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは33 cmを測る。覆土上層では、焼土の混入が認められたため炉穴の可能性もある。出土遺物は、覆土下層から4点の縄文式土器破片が出土した。

遺物 4点のうち1点を採拓した。42は加曾利E式土器でも新しい時期のもので、連弧文が描かれる。口縁部には2列の円形刺突文をめぐらし、地文は縦方向の細沈線を施す。色調は褐色を呈し、器面の風化は著しい。

4. 炉 穴

21号址 (第19図, 図版6)

本址はC区東側の15-21Gに位置する炉穴で、3基の火床と足場を検出した。確認面においては、焼土が密に分布していた。調査時の所見及び土層断面等の検討から、火床に対して南側から順番に、A~Cの名称を付した。足場については、全体の掘り方以外には明確な壁は検出されず、

土層断面を中心に推定復元した。

21-A号址

本址は15-21Gの南西、本炉穴群の南側に位置し、B号址火床埋没後その覆土を掘り込んで構築されている。火床の規模は径 35 cm の円形を呈し、焼土の堆積は 17 cm を測る。足場は東方向に設けられる。規模は、開口部が 250 cm×150 cm の楕円形、底部が 180 cm×60 cm の長楕円形を呈する。長軸方向はN-60°-Eを指す。底面の足場はほぼ平坦で、確認面からの深さは 30 cm を測る。出土遺物は、確認面で縄文式土器破片 5 点を出土したのみである。

21-B号址

本址は上面をA号址によって切られる。火床規模は、径 70 cm の円形を呈し、焼土の堆積は 12 cm を測る。足場は北方向に設けられたらしい。推定規模は、開口部が3.0m×1.6mの長楕円形、底部が2.5m×1.0m程となろう。長軸方向は約N-10°-Wで、ほぼ北方向を指す。底面の足場は、火床に近い南側が深く 42 cm を測り、北側に向かって徐々に浅くなる。出土遺物は、縄文式土器破片が、底面直上から 3 点、底面から 4 cm 浮いて 1 点出土した。

21-C号址

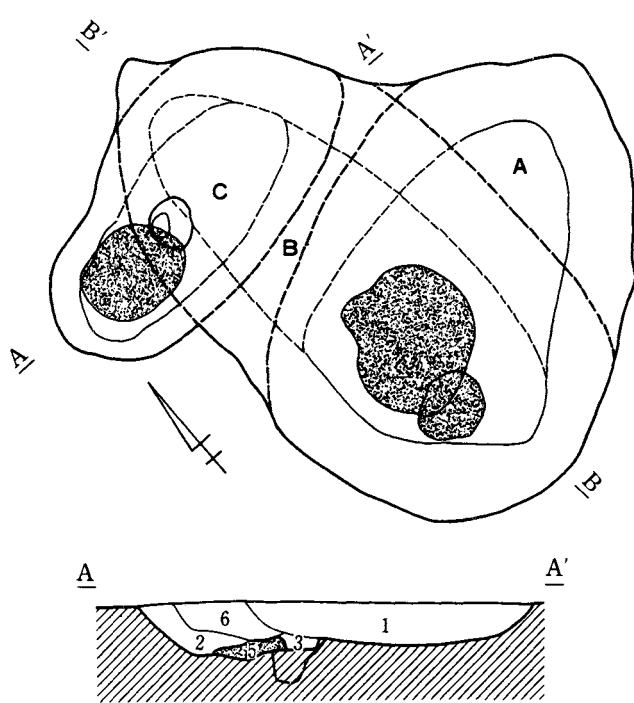
本址は本炉穴群の北側に位置し、火床及び足場の一部をB号址に切られている。火床の規模は 55 cm×45 cm の楕円形を呈し、焼土の堆積は 10 cm を測る。足場は東方向に設けられる。平面規模は、開口部が 195 cm×90 cm、底部が 140 cm×40 cm の長楕円形を呈する。長軸方向はN-80°-Eとほぼ東西方向をさし、B号址の長軸と直交する。底面の足場は全体的に浅く、火床の東側で約 20 cm を測る。出土遺物はない。

33号址（第19・22・28図、図版6・14・15）

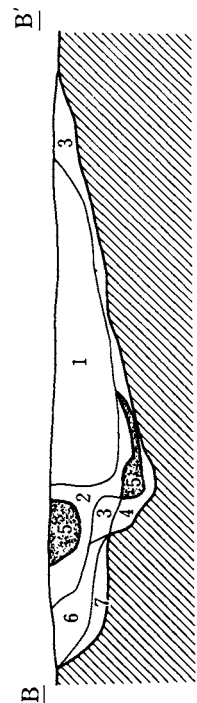
本址はC区東側の25-8・25-9・25-13・25-14Gにわたって位置し、炉穴及び土坑 5 基が切り合い関係を持つ。D・E号址は炉穴で、A・B・C 3 基は土坑である。確認面においては、D・Eの火床部上面に焼土の含有が認められたのみで、ほぼ同様な黒褐色土が見られた。調査時の所見及び土層断面等の検討から、新旧関係を考慮してA～Eの名称を付した。Aは最も新しく、Bは次に新しい。Cについては、D・Eとの新旧関係が不明で、DはEよりも新しい。個々の遺構の平面形態等については、土層断面等から推定復元した。なお、本址については著しい重複が認められたため、本項で一括して説明することとした。

33-A号址

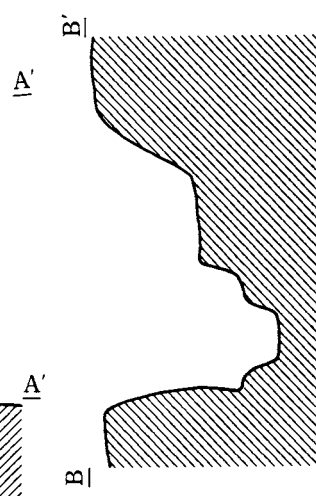
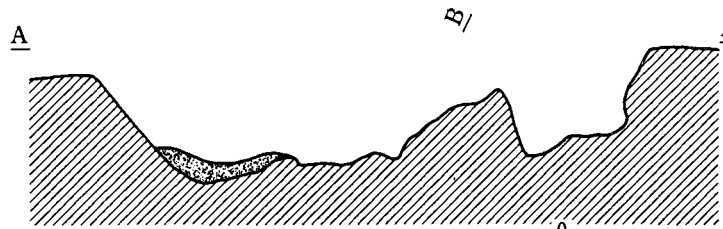
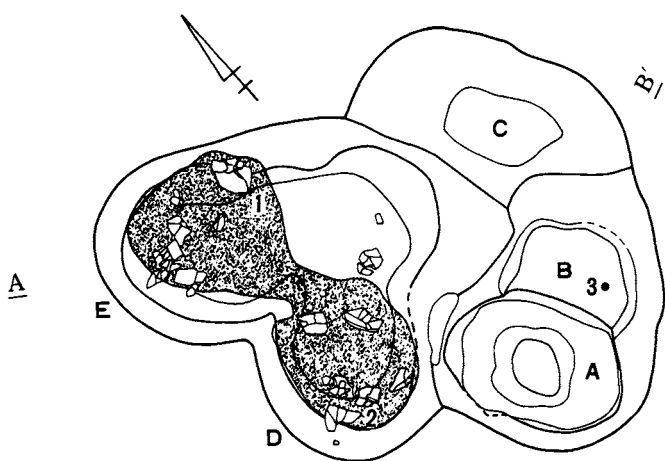
本址は、25-13Gと25-8Gにわたって位置する土坑でBを切る。平面形態は、開口部が 115 cm×80 cm、底部が 88 cm×62 cm の楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さが 82 cm を測り、中央にピットが 1 か所穿たれている。ピットは開口部が径 45 cm の不整形円形、底部が 32 cm×25 cm の楕円形を呈し、底面からの深さ 16 cm を測る。出土遺物はないが、B号址の遺物から考えてA～C号址は土坑墓となる可能性が高い。



21号址



1. 暗褐色土層(焼土粒混入)
2. 赤褐色土層(焼土混入)
3. 褐色土層(焼土粒, ローム粒混入)
4. 赤褐色土層(加熱ローム)
5. 焼土層
6. 褐色土層(焼土粒混入)
7. 黄褐色土層



33号址

0 2 M

第19图 21・33号址実測図

33—B号址

本址は25—13・25—8・25—14Gに位置する土坑で、西側でA号址に切られ、北側及び東側でD・C号址を切る。平面形態は、開口部が径110cm、底部が径60cmの円形と推定される。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さ55cmを測る。遺物は、南側の底面から3cm浮いた状態で石製品が出土した。

遺物 本址の出土遺物は石製品一点である。第28図3は塊状耳飾の半欠で、全長30mm、幅23mm、厚さ6mmを測る。本来塊状耳飾として製作されたものであり、実測図左側縁に見られるくぼみが旧状を示している。また上端には、欠損後左右を紐で結ぶために穿たれた径3mmの孔が部分的に残っている。しかし補修孔部分において再度破損したため、残存部中央に径5mmの孔を両面から穿ったものである。表面は入念なる研磨が施され光沢を帯びる。滑石製である。重量は5.1gである。

33—C号址

本址は25—9・25—8Gに位置する土坑で、西側でE号址と重複し、南側をB号址に切られる。従って遺構の全体は知り得なく、推定径150cmの楕円形あるいは円形のプランが想定される。底部は長径1m程の楕円形を呈しほぼ平坦である。確認面からの深さは55cmを測り、壁の立ち上がりはやや緩かである。遺物は、覆土中から礫が1点出土しただけであった。

33—D号址

本址は25—8・25—13Gに位置する炉穴で、33—E号炉穴を切っている。火床は、E号址の火床の約20cm上に作られるが、北側でつながっている。その連結部分を除いた規模は、径70cmの円径を呈し、焼土の堆積は8cmを測る。足場は北東方向に設けられる。平面規模は、開口部が175cm×110cm、底部が140cm×70cmの楕円形を呈する。長軸方向はN—50°—Eを指す。足場の底面はやや凹凸がある。火床に近い北西側が深く、55cmを測り、東側に向かって徐々に浅くなる。出土遺物は、覆土内及び焼土中、床面直上から出土し、ほぼ同一個体となった。

遺物 本址の出土遺物は、図示した他にも20片ほどの土器片がある。2はやや小形の土器で、底部を欠くが尖底になると思われる。口唇部の整形は雑で平坦でない。器面にも凹凸が目立ち、縦及び斜めの条痕で覆われる。内面は風化が著しいが、口縁部内側で横、以下縦方向の条痕が認められる。色調は赤褐色ないし黒褐色を呈し、胎土には植物繊維を混入する。茅山上層式土器としてよいであろう。

33—E号址

本址は25—8Gに位置する炉穴で、西南側をD号址に切られている。火床は、径80cmの不整形円形を呈し、焼土の堆積は18cmと厚い。足場は南東方向に設けられる。平面規模は、開口部が200cm×110cm、底部が160cm×80cmの楕円形を呈するものと推定される。長軸方向はN—50°—Wを指す。底面の足場はやや凹凸がある。火床に近い北西側が深く、62cmを測り、南東

側に向かって徐々に浅くなる。出土遺物は、覆土下層及び焼土中、床面直上から出土し、ほぼ同一個体となった。

遺物 本址からの出土遺物は、図示した他にも10片ほどの土器片がある。1はやや大形の土器で底部を欠失する。口唇部は小波状を呈し、器面は縦ないし斜めの粗い擦痕で覆われる。内面の調整は、口縁部内面が横、以下縦方向にナデている。色調は褐色を呈し、胎土への植物繊維の混入はあまり多くない。茅山上層式土器としてよいであろう。

38号址（第20図，図版7）

本址は34-10Gに位置する炉穴である。長軸 150 cm，短軸 72 cm を測る長楕円形のプランを呈し、長軸はN-25°-Eを指す。底部は 122 cm×36 cm の長楕円形を呈し、底面は比較的平坦である。確認面からの深さは 20 cm を測る。焼土の堆積は 130 cm×50 cm の範囲に認められ、15 cm の厚さを有するものの、あまり良好な焼土ではない。また、焼土は掘り方南側に厚く、足場となるテラスは北側に設けられたようである。出土遺物はない。

45号址（第21・22・26図，図版7・15）

本址はC区東側の23-6・7・11・12Gにわたって位置する炉穴群で、18基の炉穴及び、1基の土坑から構成される。複雑な切り合い関係のため、各炉穴の輪郭が不明確なものがほとんどであるが、火床部分に対してA～Sの記号を付した(第21図)。足場や掘り方については、土層断面や調査時の所見を基に推定復元した。その結果、次のように先後関係が確認された。

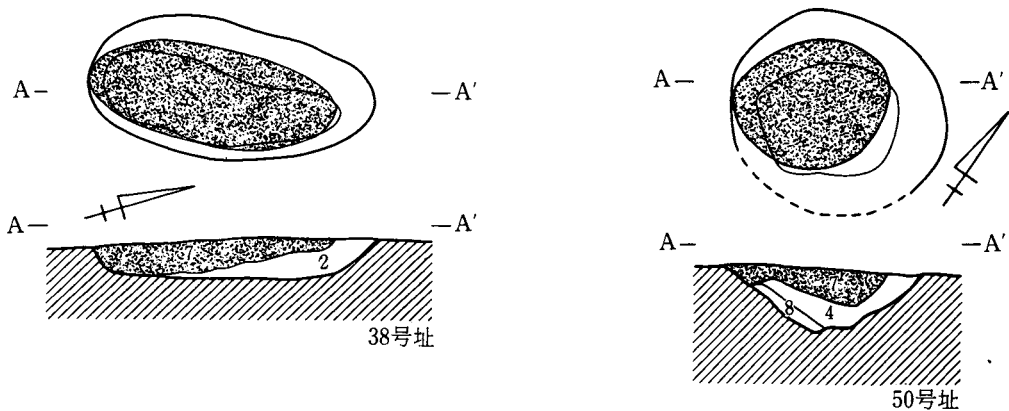
B→A・D→G→C・E，N→D・F・H→M→L，J・K→I

45-A号址

本址は23-7・12Gに亘り、本群の東側に位置する。B号址を切り、C号址に切られる。平面形態は、開口部が 140 cm×95 cm の楕円形、底部が 125 cm×68 cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-75°-Wを指す。火床はB号址の火床の約 10 cm 上に作られるが、上面第3層で連結している。その連結部分を除いた火床の規模は、径 50 cm の不整形円形を呈し、焼土の堆積は 10 cm を測る。足場は西側に設けられ、その西端をC号址の掘り方によって切られる。足場の底面はB号址の火床の上面に位置し、凹凸を有す。確認面からの深さは 25 cm を測る。出土遺物は、火床上面の焼土層からつぶれた状態で土器が出土した。

45-B号址

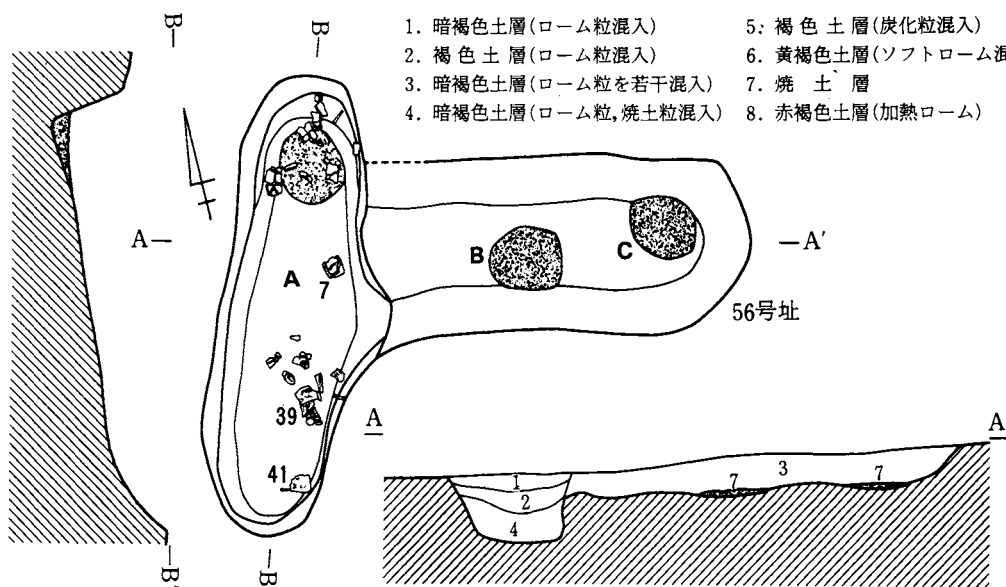
本址は23-7・12Gに亘り、本群の東側に位置し、A・C号址に切られる。火床はA号址の火床の約 10 cm 下に作られ、上面の第3層でつながっている。その連結部分を除いた火床の規模は、50 cm×38 cm の楕円形を呈し、焼土の堆積は 12 cm を測る。足場は西側に設けられるが、その大部分をC号址によって切られるために詳細は不明である。平面プランは、150 cm×90 cm ほどの楕円形のプランを呈していたものと推定される。長軸方向はA号址と一致し、N-75°-Wを指す。出土遺物は、火床上面の第3層の赤褐色土から、土器片がつぶれた状態で出土した。



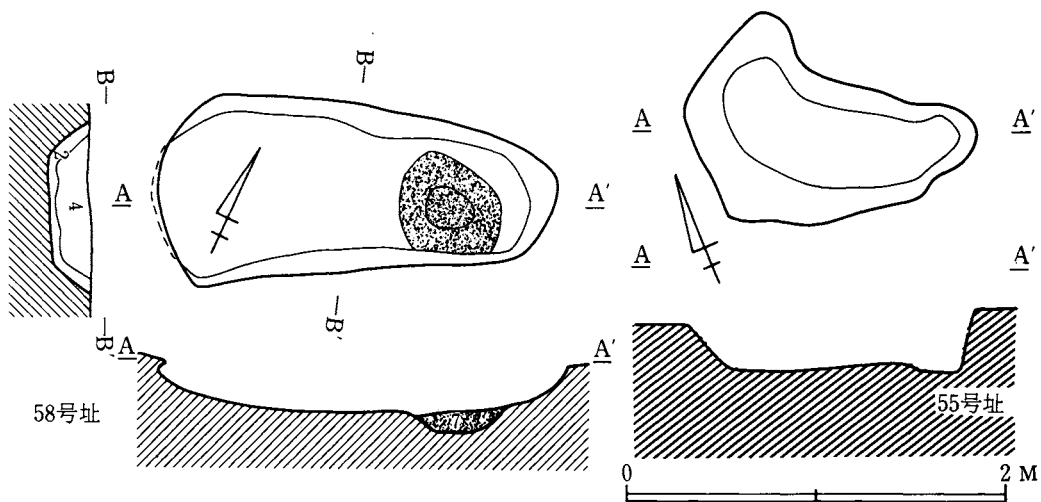
38号址

50号址

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| 1. 暗褐色土層(ローム粒混入) | 5. 褐色土層(炭化粒混入) |
| 2. 褐色土層(ローム粒混入) | 6. 黄褐色土層(ソフトローム混入) |
| 3. 暗褐色土層(ローム粒を若干混入) | 7. 焼土層 |
| 4. 暗褐色土層(ローム粒, 焼土粒混入) | 8. 赤褐色土層(加熱ローム) |



56号址

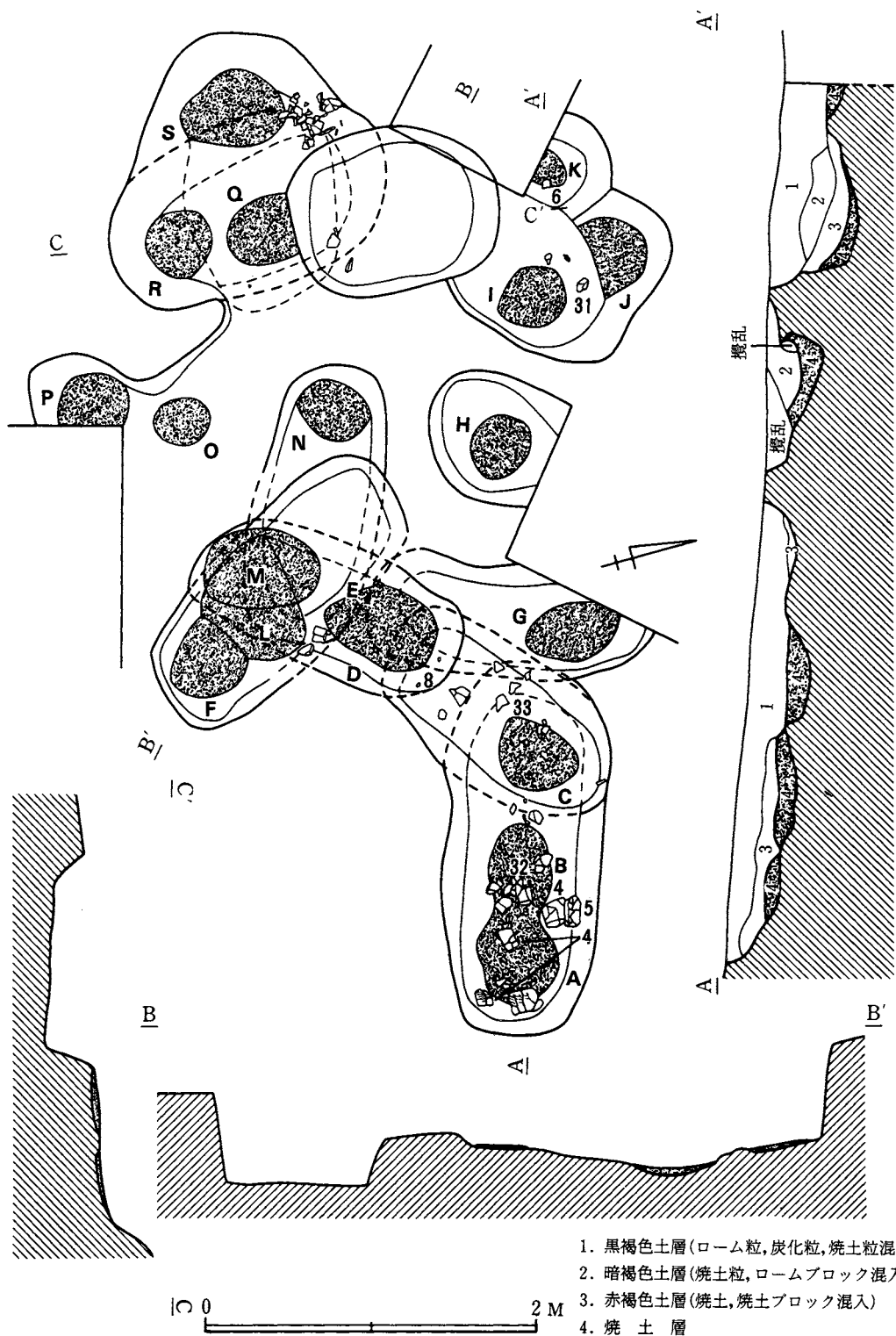


58号址

55号址

0 2 M

第20图 38・50・55・56・58号址表测图



第21図 45号址実測図

45-C号址

本址は23-7・12Gに亘り、本群の北東側に位置し、A・B・D号址を切っている。火床はB号址の足場を切って構築される。規模は50cm×40cmの楕円形を呈し、焼土の堆積が15cmを測る。足場は南西の方向に設けられ、D号址の北端部と重複する。掘り方の平面形態は、開口部が160cm×80cm、底部が135cm×55cmの楕円形と推定される。長軸方向はN-48°-Eを指す。出土遺物は、足場覆土内からややまとまって土器片が出土したが、A・B号址ほどの量ではなかった。

45-D号址

本址は23-7・12Gに亘り、本群の東側に位置し、C・E号址に切られている。また、他にもG号址などと重複し、本址の規模・形態は全く不明である。従って本址の存在も、調査時における平面観察及び土層観察によって確認したものである。火床はE号址に切られ残存状態が悪く、また足場についても同様C号址に切られ、殆ど不明である。長軸の方向はC号址と同じくN-48°-Eを指すと考えられる。

45-E号址

本址は23-7・12Gにわたって位置し、D号址を切っている。火床は、C号址の足場の30cm下に設けられ、L号址の足場の20cm下にあたる。火床の規模は65cm×40cmの楕円形を呈し、焼土の堆積は30cmと厚い。平面形態は、開口部で165cm×75cm、底部が135cm×50cmの楕円形と推定される。長軸方向はN-38°-Eを指す。足場は南西方向に設けられたと推定され、M号址と重複する。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは40cmを測る。明確に本址に伴う出土遺物はない。

45-F号址

本址は23-12Gに位置し、本群の南東側にあたり、L・M号址に切られ、N号址を切る。火床は、規模が径45cmの不整円形を呈し、焼土の堆積は6cmを測る。掘り方の平面形態は、開口部が180cm×80cm、底部が165cm×65cmの楕円形と推定される。長軸方向はN-34°-Wを指す。足場は北西方向に設けられ、L・M号址の火床及びD号址の足場と重複する。足場の底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは約30cmを測る。出土遺物はない。

45-G号址

本址は23-7Gに位置し、本群の北東側にあたり、C号址に切られ、D号址を切る。また、北西部分を攪乱によって切られる。火床は規模が55cm×35cmの楕円形を呈し、焼土の堆積は7cmを測る。掘り方の平面形態は北側を攪乱によって切られるが長軸は現存165cm、短軸65cm、底部が150cm×50cmの不整楕円形を呈する。長軸方向はN-10°-Eを指す。足場は南方向に設けられ、D号址火床の上面約30cmに作られる。足場の底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは25cmを測る。出土遺物はない。

45-H号址

本址は23-6・7Gに亘り、本群の中央北寄りに位置する。火床は、規模が径35cmの円形を呈し、焼土の堆積は15cmを測る。足場が設けられていたと考えられる北側部分は、攪乱を受けているため詳細は不明である。出土遺物はない。

45-I号址

本址は23-6Gに位置し、J号址の火床の一部と足場、K号址の掘り方の一部を切り、南西側を攪乱によって切られている。火床は、規模が径35cmの不整円形を呈し、焼土の堆積は8cmを測る。掘り方の平面形態は、残存部で開口部が105cm×80cmの楕円形を呈し、底部は明確に把握されなかった。長軸方向はN-33°-Eを指す。底面の足場はほぼ平坦で、確認面からの深さは40cmを測る。出土遺物は、覆土上層から土器片が若干検出された。

45-J号址

本址は23-6Gに位置し、本群の北西側にあたり、足場及び火床の一部をI号址によって切られる。火床は、残存部から径50cmの円形と推定され、焼土の堆積は6cmを測る。他についての詳細は不明である。出土遺物はない。

45-K号址

本址は23-6Gに位置し、本群の北西側にあたり、掘り方の東側をI号址によって切られ、火床の南端及び足場を攪乱によって切られている。火床の規模は、残存部から径20cmの円形が推定され、焼土の堆積は10cmを測る。攪乱のため他についての詳細は不明である。出土遺物は少なかった。

45-L号址

本址は23-12Gに位置し、本群の南東側に属し、D・N・M・F号址を切っている。火床は、F号址の火床と隣接し、M号址火床の上面に構築される。火床の規模は、63cm×61cmの不整楕円形を呈し、焼土の堆積は15cmを測る。

45-M号址

本址は23-12Gに位置し、本群の南東側に属し、L号址に切られ、D・F・H号址を切っている。火床は、L号址火床の下に作られ、D号址の足場の上面に設けられている。火床の規模は、65cm×50cmの楕円形を呈し、焼土の堆積は7cmを測る。掘り方は、D号址の掘り方とほぼ一致し、D号址の上面に作られている。掘り方の平面形態は、開口部が165cm×75cm、底部が135cm×50cmの楕円形と推定される。長軸方向はN-38°-Eを指す。足場は、D号址火床の上面に設けられ、本火床の北東方向に当る。足場の底面は、ほぼ平坦で、確認面からの深さが30cmを測る。出土遺物は少ない。

45-N号址

本址は23-11・12Gに亘り、本群のほぼ中央に位置し、D・F号址、M・L号址に切られてい

る。火床の規模は、45 cm×35 cm の楕円形を呈し、焼土の堆積は 5 cm を測る。掘り方の平面形態は、開口部が 160 cm×75 cm、底部が 140 cm×57 cm の楕円形と推定される。長軸方向はN—50°—Wを指す。足場は、D・F号址の上面、M・L号址の火床の下位に営まれ、本火床の東南方向に設けられる。足場の底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 40 cm を測る。出土遺物はない。

45—O号址

本址は23—11Gに位置し、本群の中央、南側に属し、火床のみが確認されている。本址の北側は、既に火床確認面まで削平されており、南及び南東側には攪乱坑が存在する。本址の火床は、規模が 35 cm×28 cm の楕円形を呈し、焼土の堆積は 4 cm を測る。出土遺物はない。

45—P号址

本址は、23—11Gに位置し、本群の南端に設けられる。北側のO号址と同様に、火床のみが明確であり、西側の掘り方の一部を検出したのみである。火床の規模は、残存部から径 40 cm の円形が推定され、焼土の堆積は 7 cm を測る。出土遺物はない。

45—Q号址

本址は23—11Gに位置し、本群の西側に属する。R号址を切りS号址と重複するが、新旧関係は不明である。本址は、火床の北端部と足場の存在が推定される北側部分を攪乱によって切られている。火床の規模は、残存部から 40 cm×40 cm の楕円形と推定され、焼土の堆積は 6 cm を測る。

45—R号址

本址は23—11Gに位置し、本群の南西側に属する。北側をQ号址及び攪乱坑によって切られ、S号址とも重複するが新旧関係は不明である。本址の火床の規模は、径 40 cm の円形を呈し、焼土の堆積は 4 cm を測る。足場は北方向に設けられ、掘り方の長軸はほぼ南北を指すと推定されるが、他の詳細は不明である。

45—S号址

本址は23—11Gに位置し、本群の西端に属する。Q・R号址と重複するが新旧関係は不明である。火床の規模は、63 cm×48 cm の楕円形を呈し、焼土の堆積は 4 cm を測る。足場は東方向に設けられ、掘り方の長軸方向はほぼ東西を指すことが推定される。他についての詳細は不明である。出土遺物は、Q～Sが重複するためその帰属は不明であるが、Q号址足場、S号址火床近くから土器片がややまとまって出土した。

遺物 本址からの遺物は量的にも多く、また各炉穴の切り合いが複雑であるため、個々の遺物の帰属を明確にし得なかった。従って45号址を一括して、個々の遺物について述べることにする。4は比較的大形の土器で、胴下半部を欠く。口唇部は小さく波状を呈し、整形はかなり雑である。器面は口縁部を横に、以下縦方向に走る条痕で覆われる。内面の調整はナデ調整で、いくぶん凹

凸がある。色調は褐色を呈し、胎土には植物繊維を混入する。5は内外面ともにナデ調整されるもので、整形は雑なものである。口唇部は斜位に刻み、整形はいくぶん雑である。胎土には植物繊維を混入する。4・5はともにAないしB号址に伴うと考えられる。6は口縁部及び底部を欠く。器面の調整は内外面とも斜め方向の明瞭な条痕で覆われ、外面は下位を縦方向のナデで消している。色調は褐色を呈し、胎土への植物繊維の混入はあまり多くない。8は底部破片で、内外面とも条痕は認められず、縦方向のナデ調整である。胎土には植物繊維を混入する。31は内外面とも条痕で覆われ、外面は斜めないし縦方向、内面は横・縦方向である。口唇部の整形は雑である。32, 33は条痕が認められず、ともに粗いナデ調整である。口唇部は縦に刻まれる。

50号址 (第20図)

本址はC区に位置する炉穴である。火床の規模は、径 80 cm の円形を呈し、焼土の堆積は 20 cm を測る。規模は、開口部が径 110 cm の円形、底部が 70 cm×57 cm の楕円形を呈する。底面は凹凸がみられ、確認面からの深さは 32 cm を測る。出土遺物は火床上面から縄文式土器破片を検出した。

55号址 (第20・26図)

本址はC区に位置する炉穴で、東側部分に後世の攪乱を受けている。覆土中には 150 cm×40 cm の規模で長楕円形に焼土の散布が薄く認められた。平面形態は、開口部が 153 cm×108 cm、底部が 125 cm×55 cm の不整楕円形を呈する。長軸方向はN-58°-Wを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 48 cm を測る。出土遺物は、覆土中から縄文式土器破片7点を検出している。

遺物 本址の出土遺物のうち4点を採拓した。35~38とも内外面を条痕で覆うものである。内面はやや凹凸が目立つ。また胎土への植物繊維の混入はあまり多くない。

56号址 (第20・22・27図, 図版8・15)

本址は12-19Gに位置する炉穴である。本址は3基の炉穴が重複しており、便宜上A~Cとした。調査時における所見及び土層断面の観察の結果B・C→Aの先後関係が確認された。但し、土層断面の観察からはB号址とC号址の関係は把握できなかった。

56-A号址

B・C号址を切断して構築され、B・C号址とはその長軸方向が90度異なる。確認面でのプランは、240 cm×80 cm の長楕円形を呈し、底部も 200 cm×58 cm の長楕円形を呈する。火床は遺構北端部に存し、35 cm×40 cm、厚さ 8 cm に焼土が堆積する。火床が最も低位置にある。足場となるテラスは火床南側に設けられ、掘り込みも徐々に浅くなる。長軸はN-19°-Eを指す。出土遺物は、火床及び足場から土器片がまとまって出土した。

56-B号址

本址はA号址に端部を切断されるが、火床及び足場の一部分は残存している。現存部分の規模

は、105 cm×90 cm を測り、本来楕円形のプランを呈していたものと思われる。火床には 39 cm×33 cm の範囲に焼土が堆積し、厚さは 5 cm と薄い。足場は火床の西側に設けられ、比較的平坦で、確認面からの深さは 45 cm を測る。長軸の方向は A 号址と 90 度近く異なり N-59°-W を指す。出土遺物はない。

56-C 号址

本址は B 号址火床の東側に伸びる炉穴であるが、土層断面の観察からは B 号址との関係を明確にし得なかった。長軸長は B 号址との重複のため不明であるが 100 cm 以上、短軸は 90 cm を測る。火床は径 33 cm の範囲に焼土が堆積し、厚さは 5 cm と薄い。足場は火床の西側に設けられ、底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 16 cm を測る。長軸の方向は B 号址に近く N-83°-W を指す。出土遺物はない。

遺物 本址出土の遺物は、全て A 号址に伴うものである。7 は口縁部及び底部を欠失する。器面は内外面とも粗い条痕で覆われ、かなり凹凸が目立つ。胎土への植物繊維の混入は少ない。9 は底部破片で、8 に比べ開いている。器面の風化が著しく調整は不明であるが、条痕は認められない。39~41 は外面を縦及び斜め方向の条痕で覆うもので、条痕は粗い。内面は擦痕が認められる。ともに植物繊維の混入はあまり多くない。いずれも茅山上層式土器としてよいであろう。

58 号址 (第 20 図, 図版 8)

本址は 23-6 G に位置する炉穴である。南東 2.4 m には 45 号址が存在する。確認面におけるプランは、210 cm×85 cm の長楕円形を呈し、底部は 195 cm×65 cm の規模を有する。火床部は、径 40 cm ほどの範囲が周囲より 8 cm ほど低くくぼみ、その中に 50 cm×45 cm の範囲で焼土の堆積をみる。厚さは 10 cm ほどである。足場は火床の西側に設けられ、底面は比較的平坦であるが、長軸端部がオーバーハングする。確認面からの深さは 20 cm 程度である。出土遺物はない。

5. グリッド出土遺物

(1) 土器 (第 29~38 図)

次に遺構以外から検出された土器について触れる。ここに紹介する多くは、良好な遺物包含層が残されていた B 区出土の土器が主体を占め、またその所属時期も早期から後期に及ぶものであるが、その中でも前期の土器が最も多く含まれている。以下に記す分類に基づいて説明を加える。

第 I 群土器 縄文時代早期撚糸文系土器

第 II 群土器 胎土に植物繊維を混入するもの

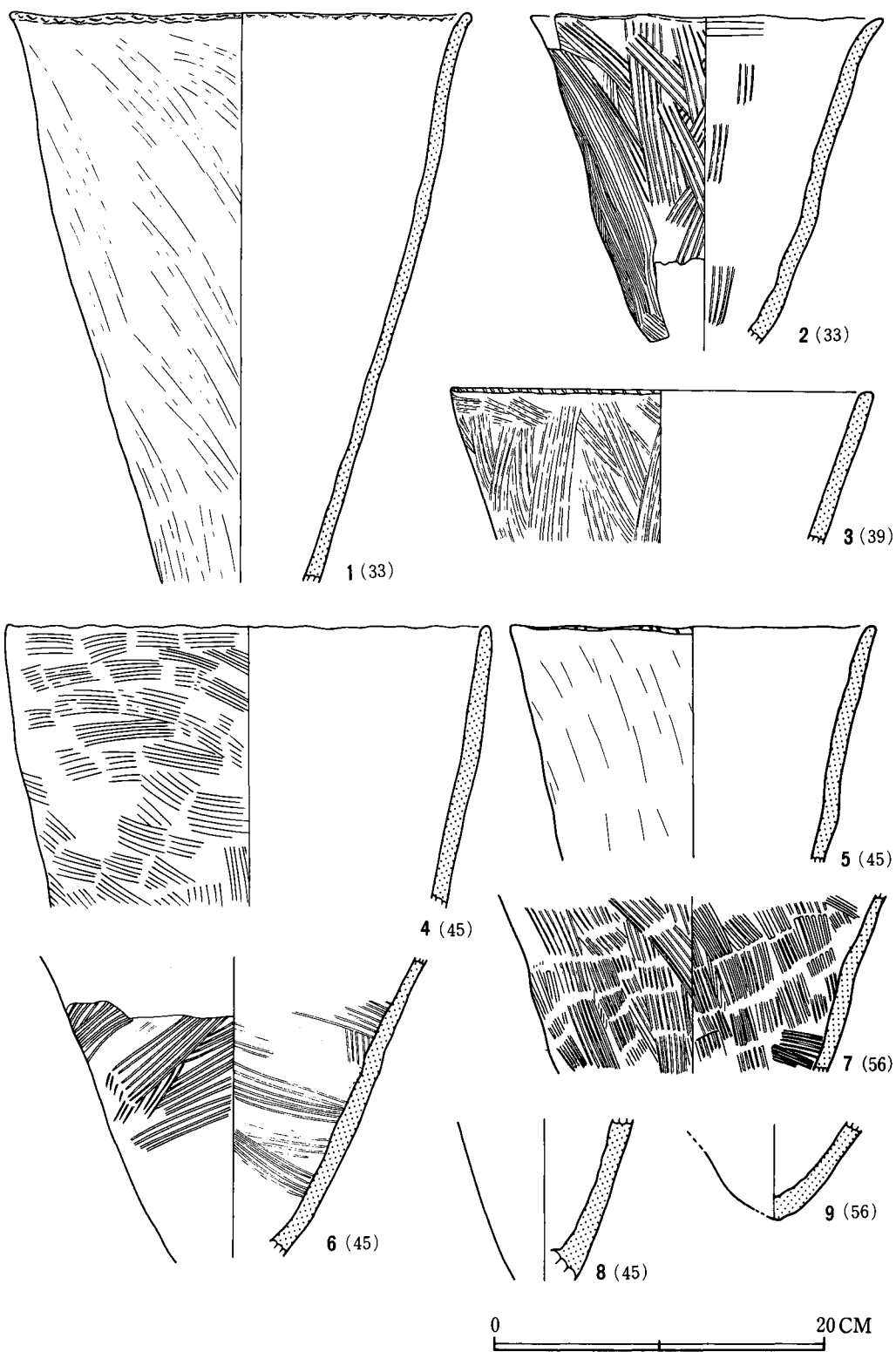
第 III 群土器 縄文時代前期後半の土器

第 IV 群土器 縄文時代中期の土器

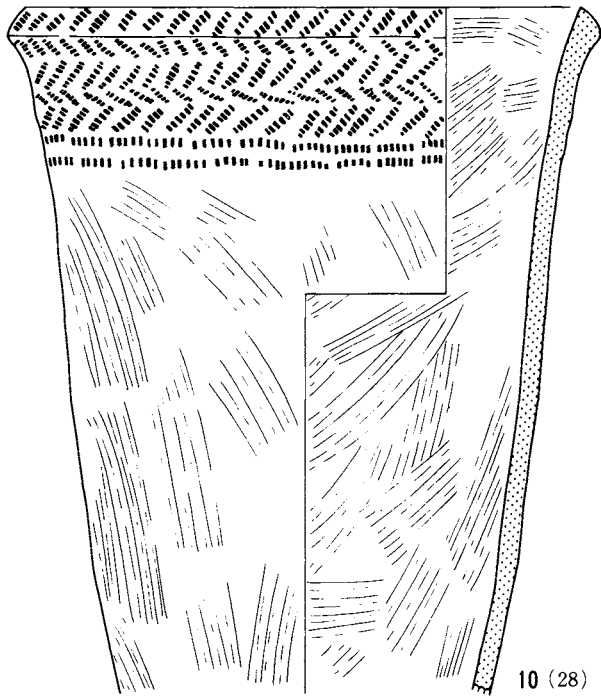
第 V 群土器 縄文時代後期の土器

第 I 群土器 (43~50)

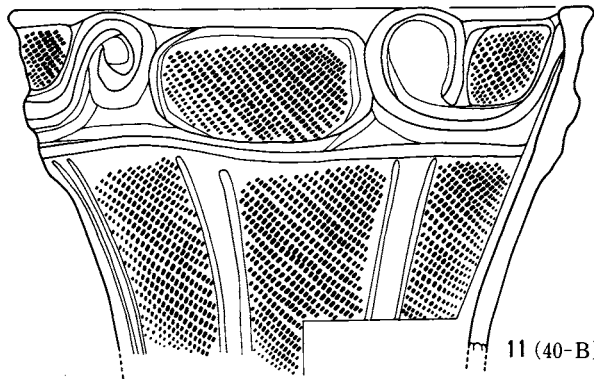
縄文時代早期撚糸文系の土器群である。出土量はあまり多くはないが、全体で約 20 片ほど検出



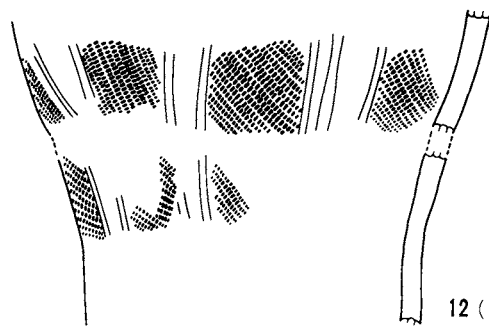
第22図 縄文式土器実測図 (1)



10 (28)



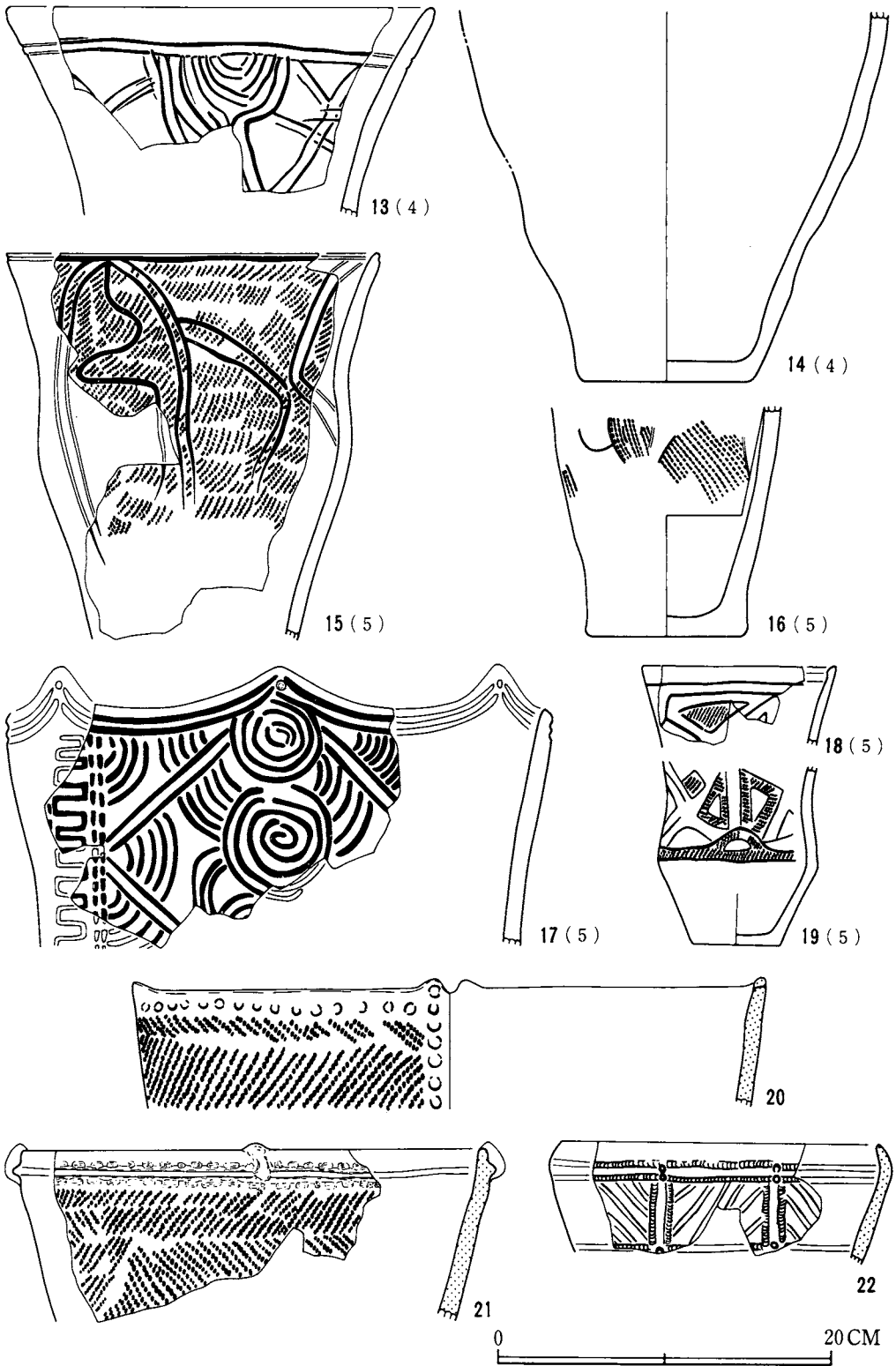
11 (40-B)



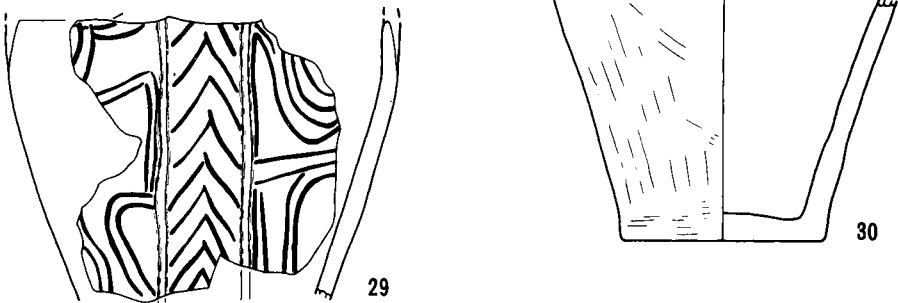
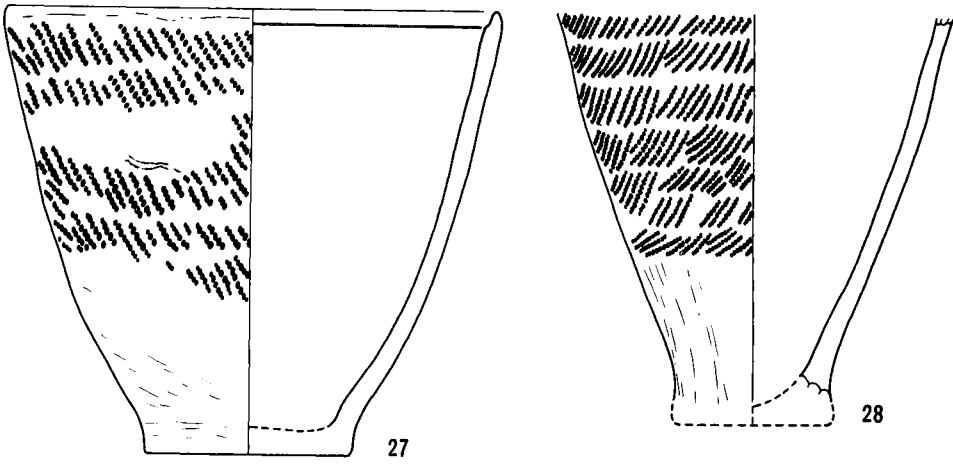
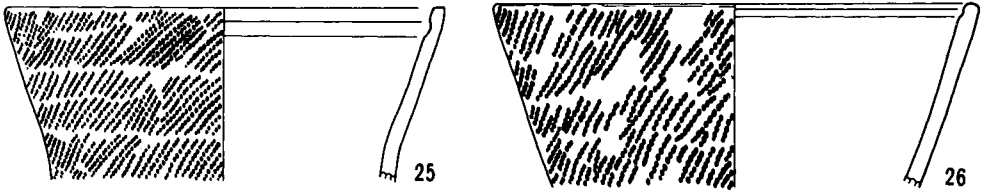
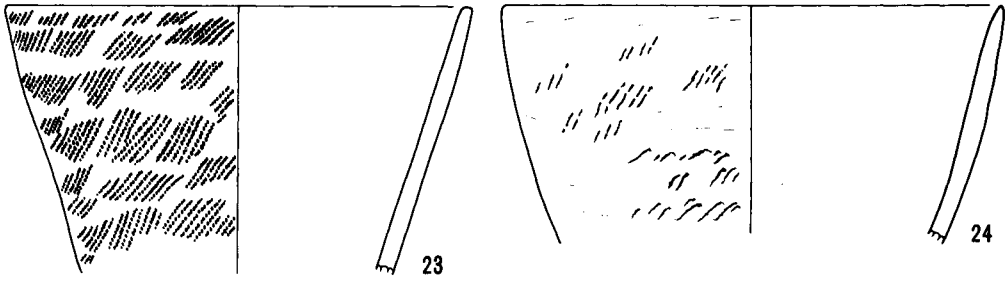
12 (8)



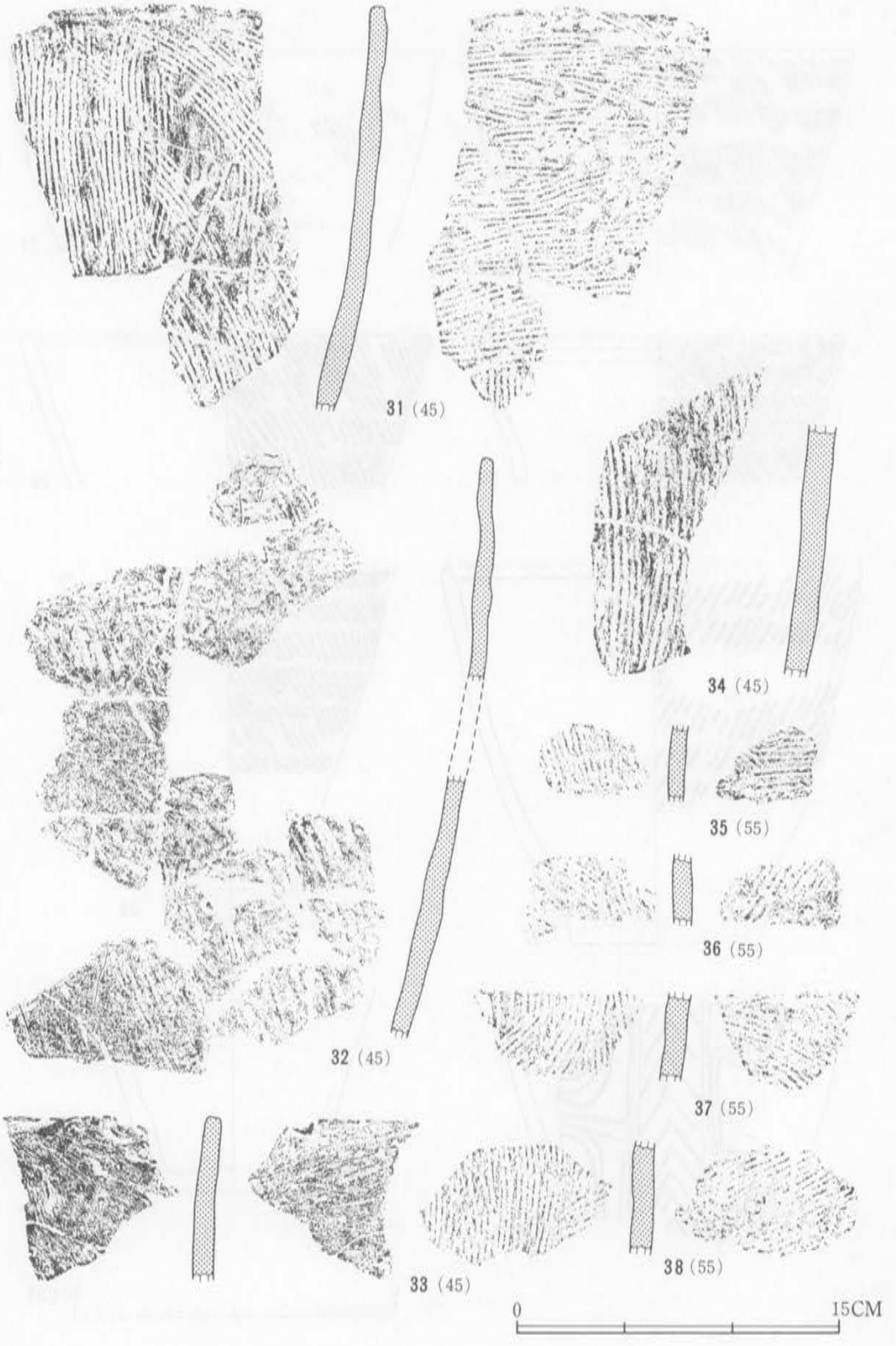
第23図 縄文式土器実測図(2)



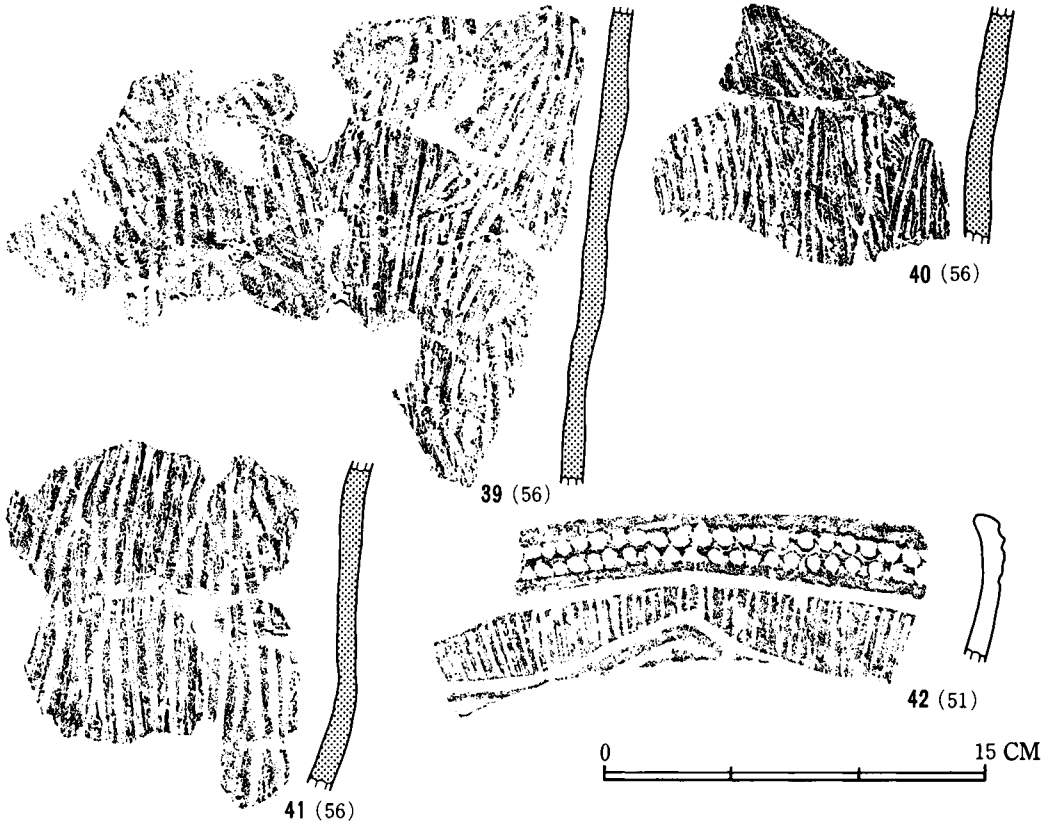
第24図 縄文式土器実測図 (3)



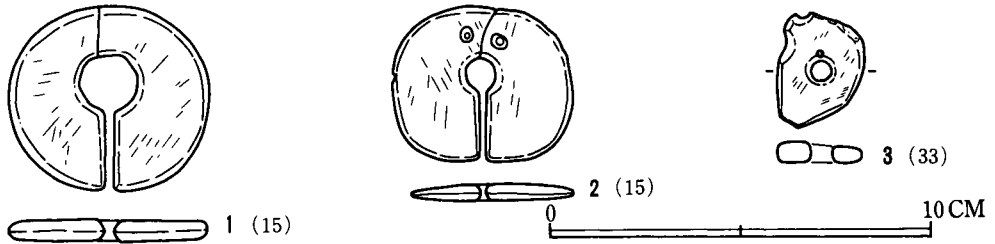
第25図 縄文式土器実測図 (4)



第26図 縄文式土器拓影図(1)



第27図 縄文式土器拓影図 (2)



第28図 石製品実測図

されている。いずれも口唇部が肥厚し、口唇部にも縄文を転がしているが、口唇部形態は大きく二類に分けられる。

1 類 (43~45)

口唇部が外方へ突出するように屈折するもので、口唇上端部にも縄文を転がしている。胴部は条縦走する縄文が認められ、原体はR { $\frac{L}{L}$ }である。色調は褐色を呈し、焼成は良い。

2 類 (46~50)

口唇部は同様に肥厚するが、外方へ突出するようなものではない。口唇上端部に縄文を転がす

が49は羽状を呈し、48には認められない。胴部は条縦走る縄文が認められ、原体はいずれもR { $\frac{L}{L}$ }である。色調は50を除いて黄褐色を呈し、焼成は1類より劣る。

第II群土器 (20~22, 51~110)

本群は胎土に植物繊維を混入するものを一括したが、その中には、早期末の条痕文系の土器群と、前期前半の土器群が含まれており大きく二分される。

1 類 (51~56)

早期末葉の条痕文系の土器群であるが、比較的多くの炉穴が検出されている割には包含層からの出土は少ない。51~53は器面に条痕以外の施文が認められる。52・53は同一個体である。51・52ともに口唇端部に刻目を有し、口唇部整形は内側から主に行なわれる。器面はともに角押文様の施文で口縁部文様帯を形成し、胴部とは稜をなして区画している。51の稜は低い隆帯様であるが、52は比較的シャープである。51は内面にも条痕が施される。54~56は条痕及び擦痕のみが認められるものである。54は口縁部破片で、口唇端部に刻目を有するが整形はやや雑である。表裏とも条痕で覆われる。55, 56は表裏とも擦痕である。

2 類 (20~22, 57~110)

前期前半の土器群である。胎土への植物繊維の混入は多く、内面を平滑に磨くものが殆んどである。縄文のみの施文のものが大勢を占めるが、刺突文を伴うもの、沈線を伴うものも認められ、また量的には少ないが、縄文が施されないものも存在する。

a種 57~59 縄文は施されず、竹管状工具による刺突と波状を描く沈線によって口縁部文様帯を形成している。全体に整形は雑で、器表は凹凸が目立つ。色調は外面褐色、内面黄褐色を呈し、焼成は比較的良好である。

b種 20・21, 60~63 縄文地に刺突文を伴うものである。いずれも口縁部破片であるが、刺突文によって口縁部文様帯を形成するものと思われる。口縁部の形態は20, 60に見られるように部分的に波状を呈するようで、端部は平坦な面を有する。また21は口縁部に突帯をめぐらし、瘤状の突起を付する。原体は60~62がR { $\frac{L}{L}$ }, 63がL { $\frac{R}{R}$ }で、20, 21は羽状を呈する。

c種 64~69 縄文地に沈線を伴う土器である。64~67は口縁部破片で口縁部の形態は、66, 67のようにゆるく波状を呈し、また端部には平坦な面を有する。口縁部にそって半截竹管により沈線を引き、口縁部文様帯を形成している。沈線は間隔が広いが有節である。縄文は羽状を呈し、67は撚りの戻りを防ぐため端部を糸で結んだものである。

d種 70・71 極めて出土量の少ないものであるが、撚糸文を菱形に配したものである。撚糸は二本一単位で施され、撚りの方向は同じである。

e種 72~103 縄文のみ観察されるもので、本群の主体をなす土器である。図示したうち口縁部破片は2点だけであり、86は端部に平坦な面を有する。縄文は殆んどが羽状を呈する。また単節が主体であるが、72~74は無節である。77, 83には撚りの戻りを防ぐための紐が観察される。

f種 22, 104・105 図示した3点のみの出土であるが、縄文は施されず、沈線による施文が行なわれるものである。104は櫛描様の文様を表出している。22, 105は有節平行沈線とともに肋骨文が描かれている。22は口縁部が内傾する鉢形土器で、植物繊維の混入はあまり多くない。二条の連続爪形文と円形刺突文で文様帯を区画し、その間を斜位の平行沈線で埋めている。

g種 106～110 貝殻腹縁文が施される土器である。いずれもアナグラ属の貝殻であり、106～108, 110は縦、109は斜めに施文するが、それ以上に規則性は認められない。焼成は概して良くない。

第Ⅲ群土器 (111～219)

本群は縄文時代前期後半の土器を一括したもので、植物繊維の胎土への混入は見られない。

1 類 (111～130)

平行沈線で幾何学的文様を描く一群で、文様構成の上で第Ⅱ群土器 f 類との類似性も認められるが、本類は胎土に植物繊維を混入しない。

a種 111 一点だけであるが、所謂肋骨文と称されるものである。色調は褐色を呈し、焼成はあまり良くない。

b種 112～122 所謂鋸歯状文と称されるものである。112～118の平行沈線は鋸歯状に描かれるが、119～121は曲線となっている。口縁部は121のように把手が付されることもあり、端部はわずかに平坦な面を有する。また、鋸歯状文とは別に、器面に縦方向の刺突が加えられることが多く、118, 120, 121は円形の刺突が見られる。全体的に胎土はやや粗く、焼成もあまり良くない。

c種 123～127 木の葉状文と称されるもので、123が有節沈線で描く他は、平行沈線である。124は地文にまばらな捺糸文が認められ、127にみるように胴部は擦痕様の平行沈線が施される。全体的に褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。なお、128～130は1類に伴うと思われる土器で、L {
R
Rの縄文が施されている。

2 類 (131～219)

浮線文及び平行沈線で、直線あるいは曲線的な文様を描く一群である。

a種 131～150 浮線文を貼付する土器である。口縁部は大きく内彎し、131, 136, 137等に見るように口唇端部にも浮線文を配している。地文は多く縄文を施すが、150のように施されない例も少ないながら存在する。浮線文自体は、頂部に縄文を転がすもの (131～137)、無飾のもの (138)、斜位に刻むもの (139～150) の三様が認められ、その配置も口縁部で曲線的なモチーフを取り入れ、胴部以下は135, 149のように直線的である。

b種 151～175 平行沈線を施すものであるが多彩である。151～159はあまり密集せずに平行沈線を施すもので、151, 153は地文に縄文を有している。171, 172も文様構成は曲線的であるが、同じ類として捉えられる。160～170は平行沈線を直線的に密集して施す。160だけが口縁部破片であるが、他は口縁部を欠き、161, 170にみるように変形爪形文が施されると考えられる。173～175

は文様構成上前者と変らないものの、地文にややまばらな燃糸文を施している。

c種 176～207 竹管の刺突，あるいは押し引きによって得られる爪形文，有節沈線が施される土器である。176～182は曲線的に施文されており，178，179は木の葉状文に近い構成をとる。また176は刺突のみが観察され，平行沈線を伴っていない。183～207は直線的な文様構成である。口縁部は平縁なものが主体的であるが，184のように大きく波状を呈する例，186のように小さく波状を呈する例が存在する。また口唇部はやや四角く納められ，196～199のように刻目を有することもある。爪形文自体は押し引きによる有節平行沈線が主体であるが，189，199のように単に刺突する例も見られる。また201～207のように竹管の先端を交互に支点として施文する変形爪形文も少なくない。185，197はまばらな燃糸文を地文に有し，200はL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$ である。204には綾絡文が観察される。

d種 208～210 所謂三角文と称されるもので，208は明瞭である。210は不鮮明ではあるが同種のものであろう。

e種 211～213 貝殻腹縁文を有するものである。211，213はアナグラ属の貝殻によるもので，特に211は密に施文している。212は貝殻の両端を交互に支点として，連続した施文を行ったもので，ハマグリであろうか。

f種 214・215 2点であるがS字状の結節が認められる。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ である。

g種 216～219 a種同様浮線文が施されるが，胎土は粗く肉薄で，文様構成も明らかに異なり，一見して区別されるものである。ともに浮線頂部を斜位に刻み，器面には羽状を呈する縄文が施される。

第IV群土器 (220～231)

縄文時代中期の土器を一括した。

1 類 (220～227)

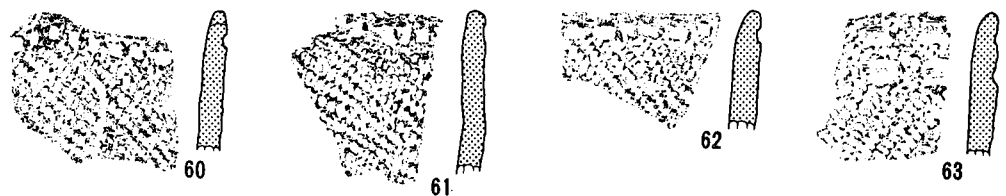
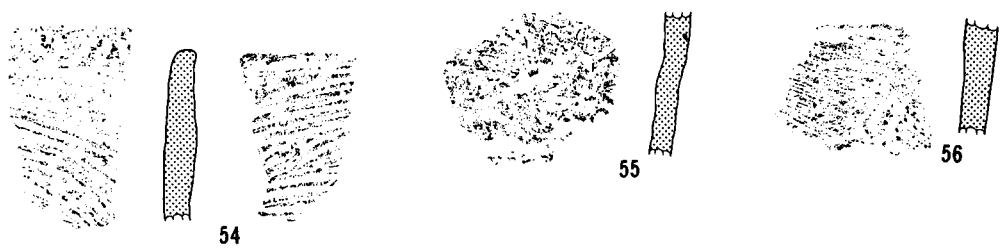
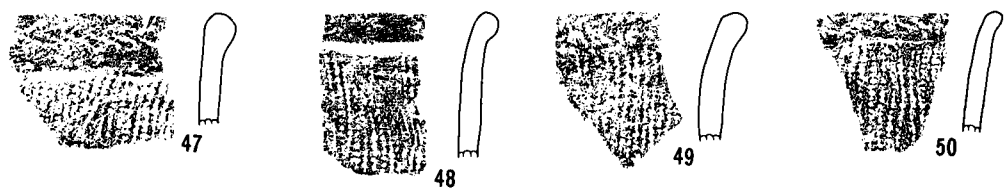
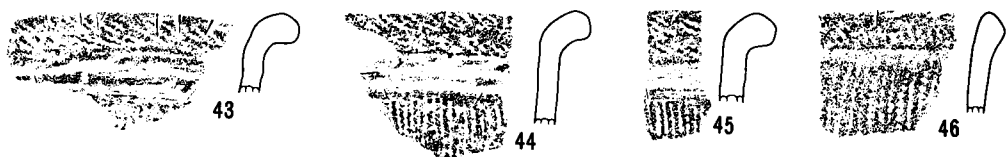
胎土中に雲母粒を混入するものであり，阿玉台式土器とされるものである。221～225は口縁部破片で，いずれも内面に稜を有する。隆帯を多用し，隆帯にそって角押文を施すことが一般的である。227は浅鉢形を呈する。

2 類 (228～231)

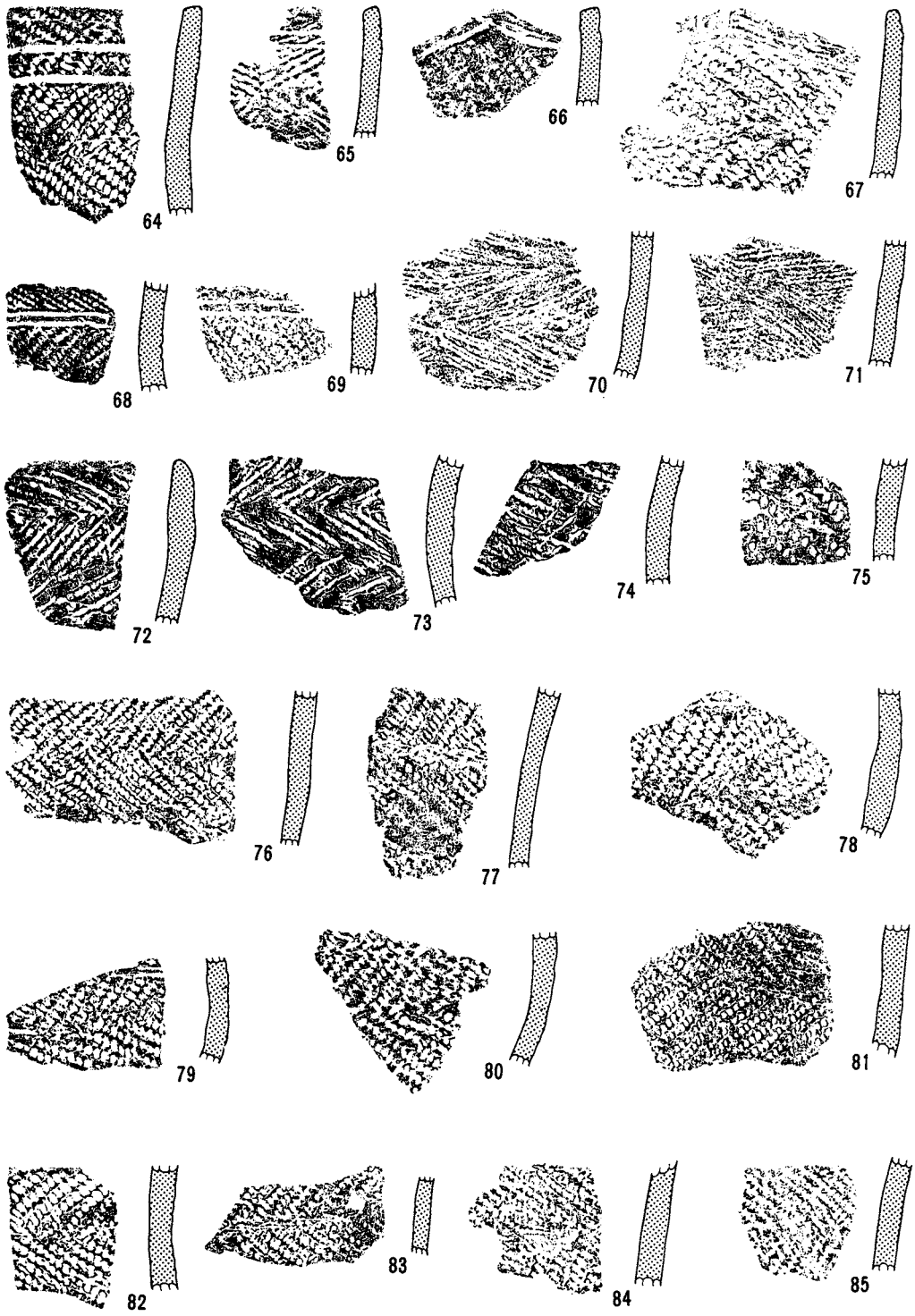
中期後半の土器で，加曾利E式土器でも新しい部類に入るものである。228はその中でも古く位置付けられるもので，口縁部内面に稜を有する。口縁部文様帯は明確な隆帯で区画され，縄文はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ である。229，230の口縁部文様帯はかなり退化した様相を呈し，230は連弧文を描いている。231には橋状把手が付される。

第V群土器 (23～30，232～249)

縄文時代後期の土器を一括した。29，232～237は堀之内I式土器とされるもので，口縁部に凹線をめぐらし，蛇行沈線等で懸垂文を配する。229～242は加曾利B1式土器とされるもので，口

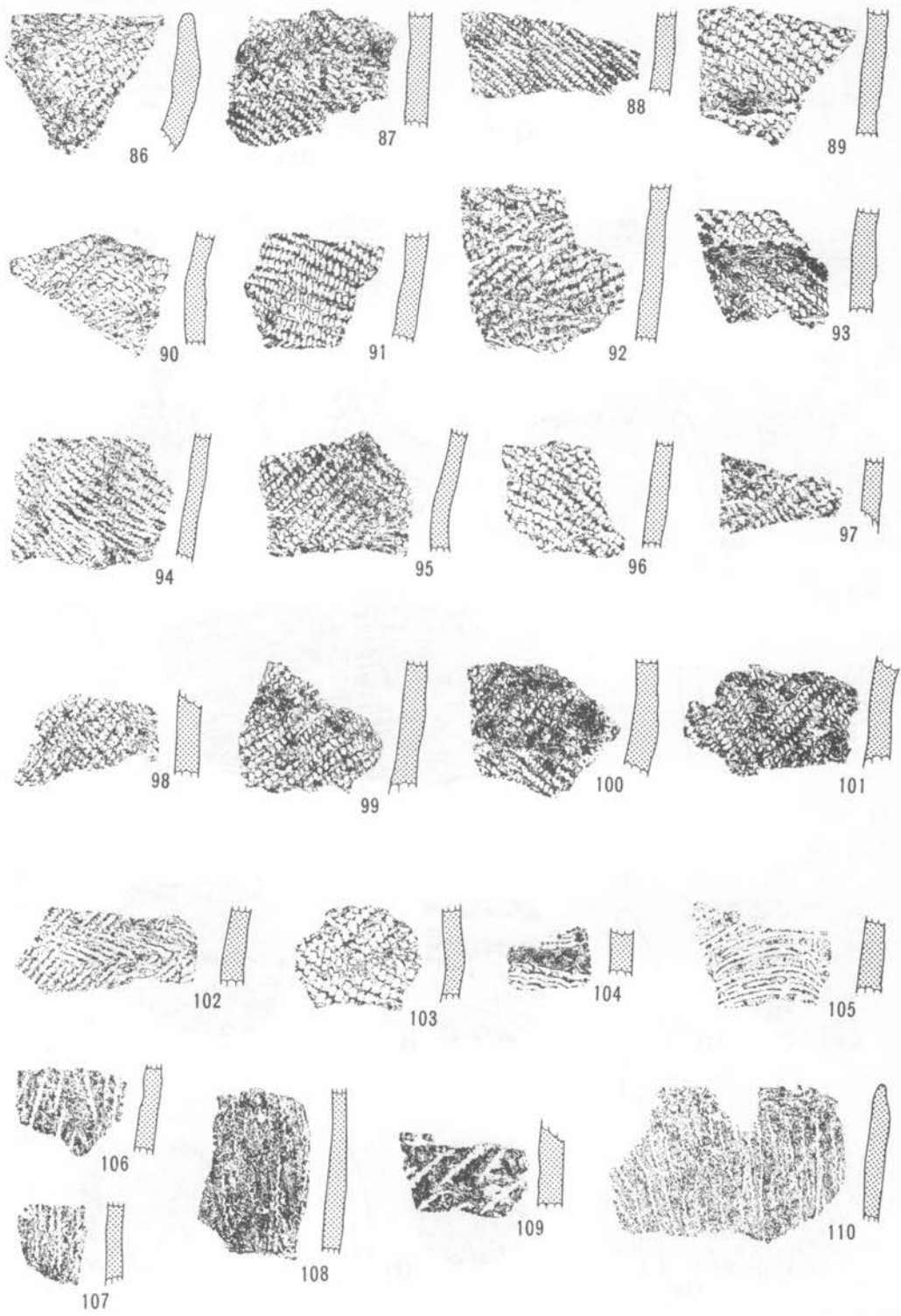


第29図 縄文式土器拓影図 (3)

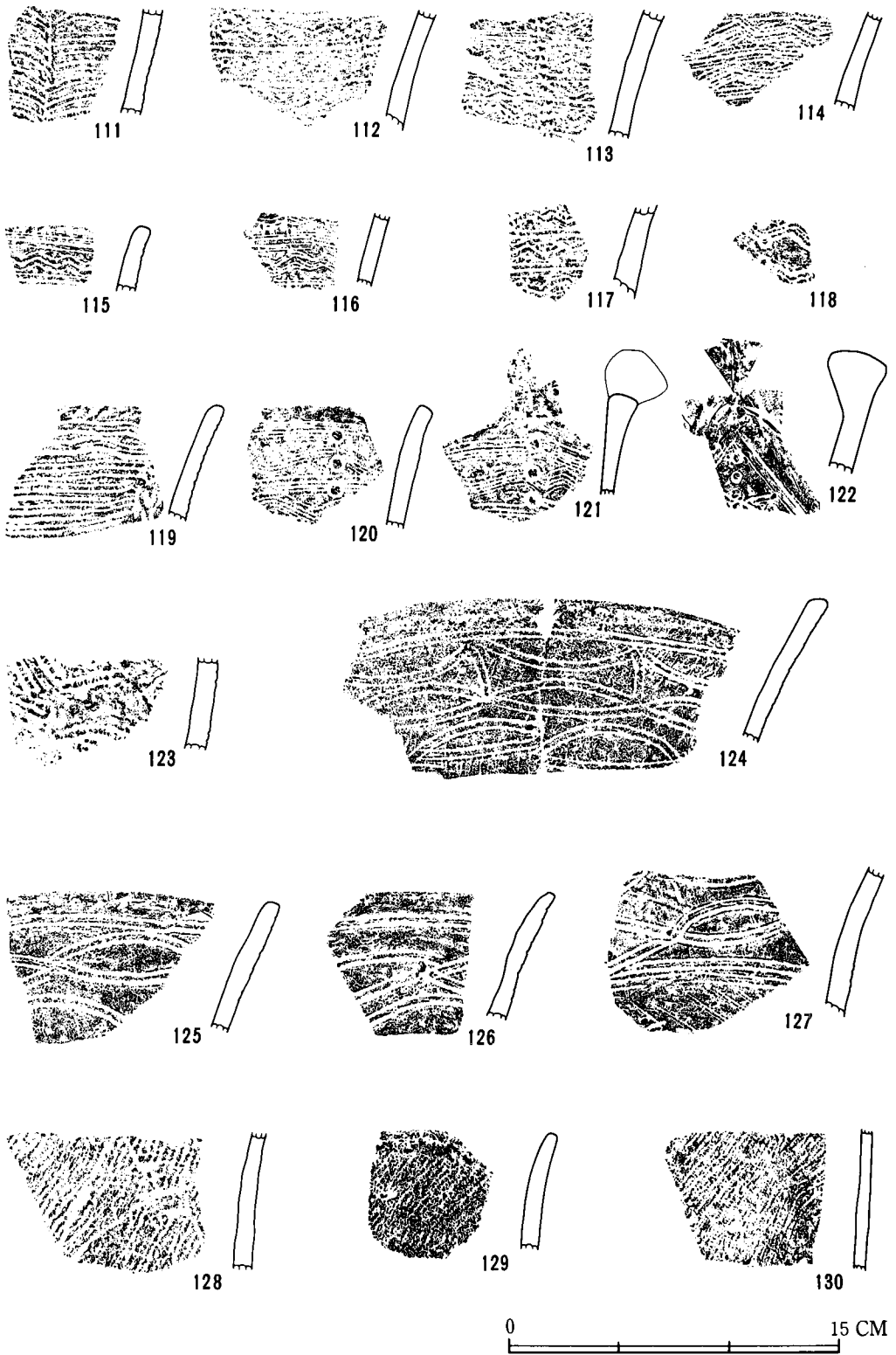


0 15 CM

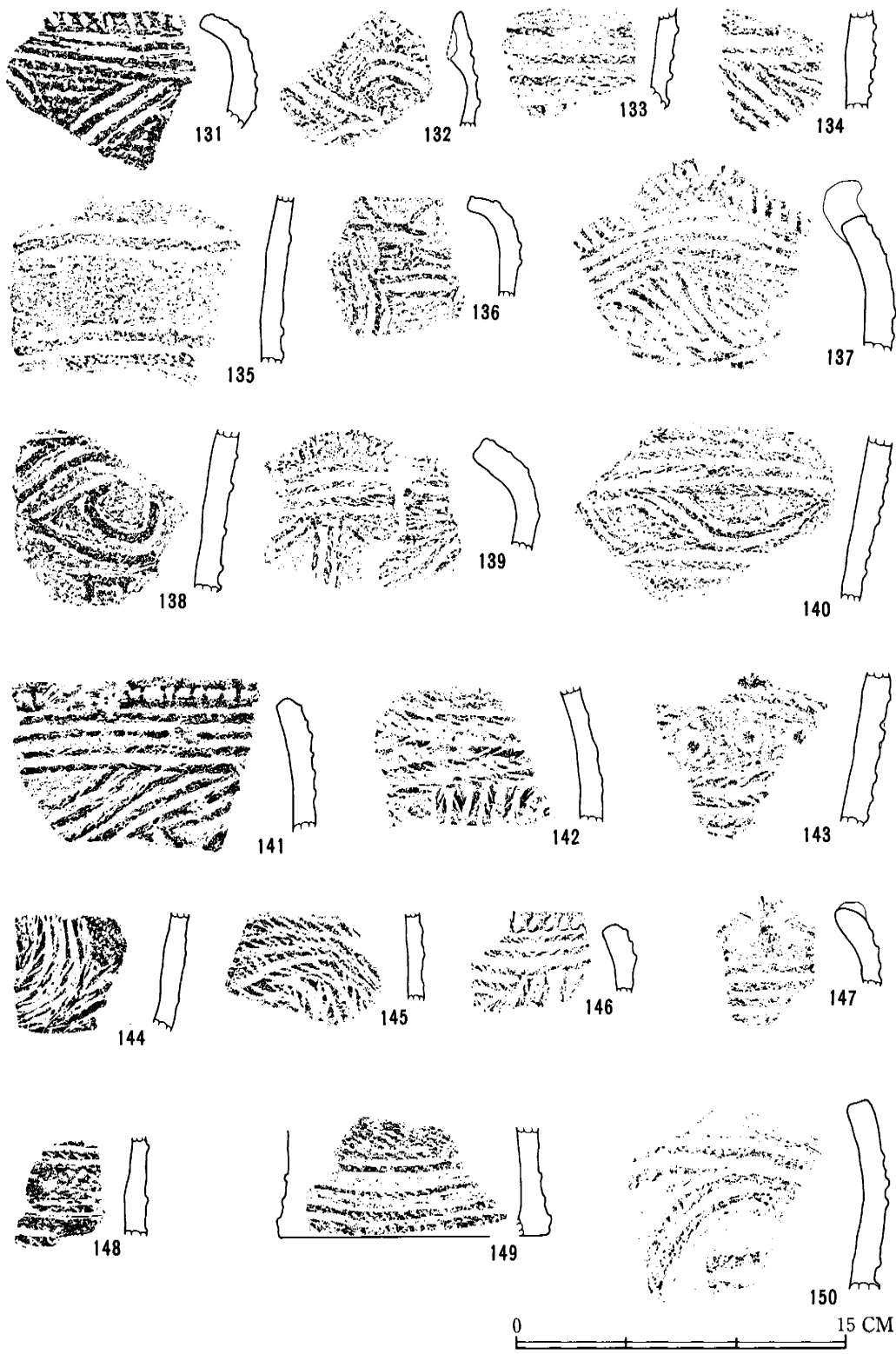
第30図 縄文式土器拓影図 (4)



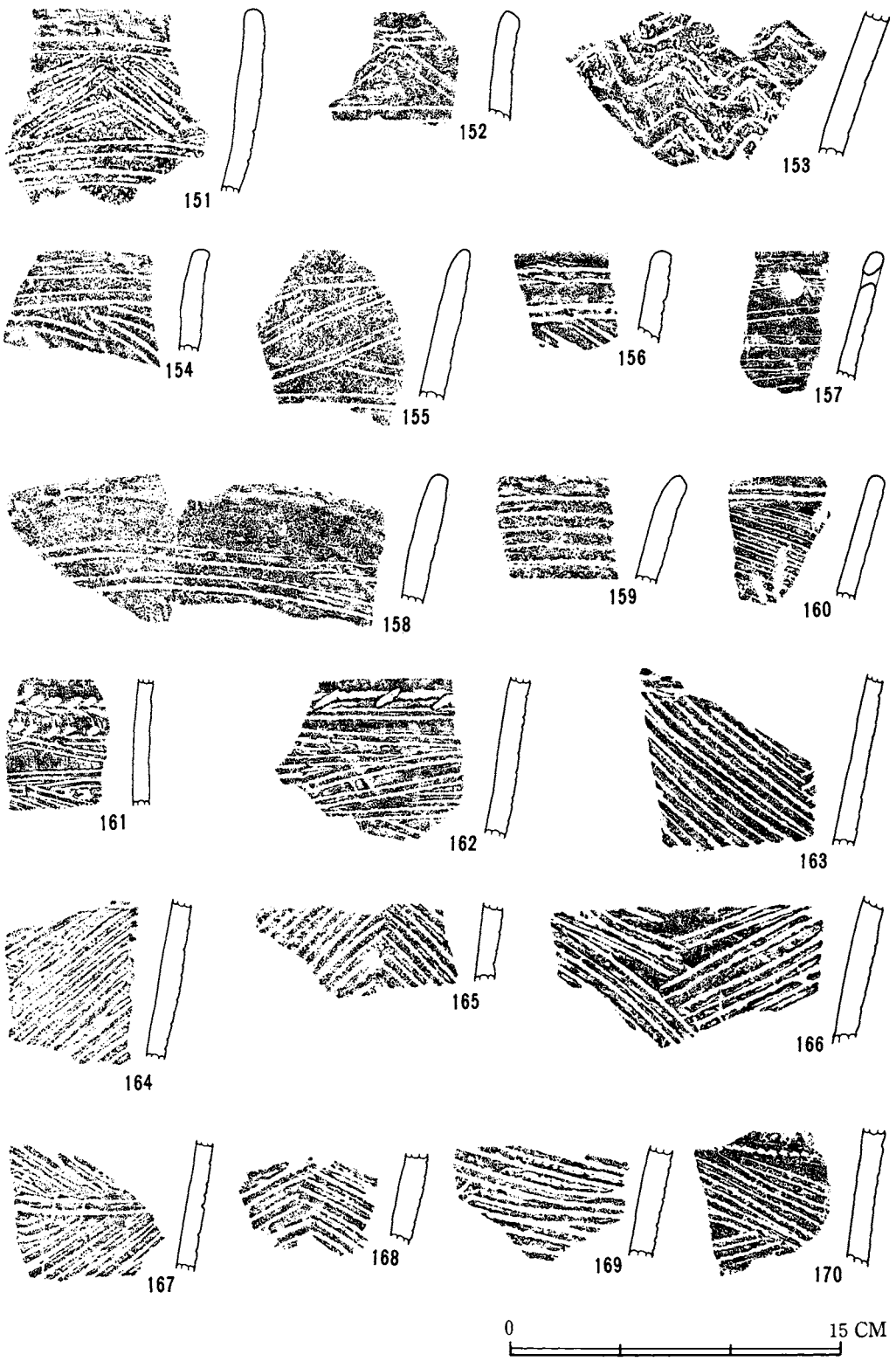
第31図 縄文式土器拓影図 (5)



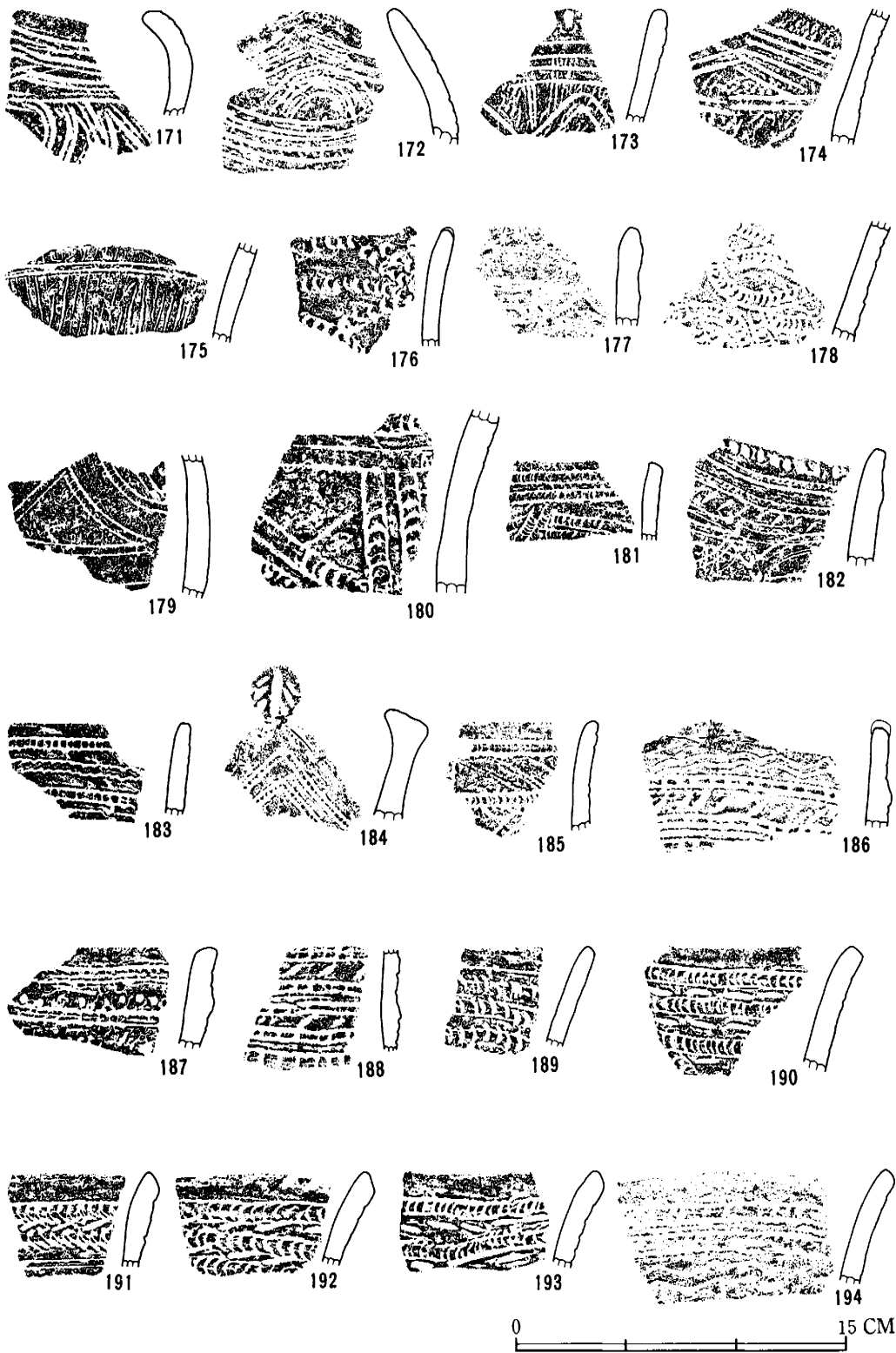
第32図 縄文式土器拓影図(6)



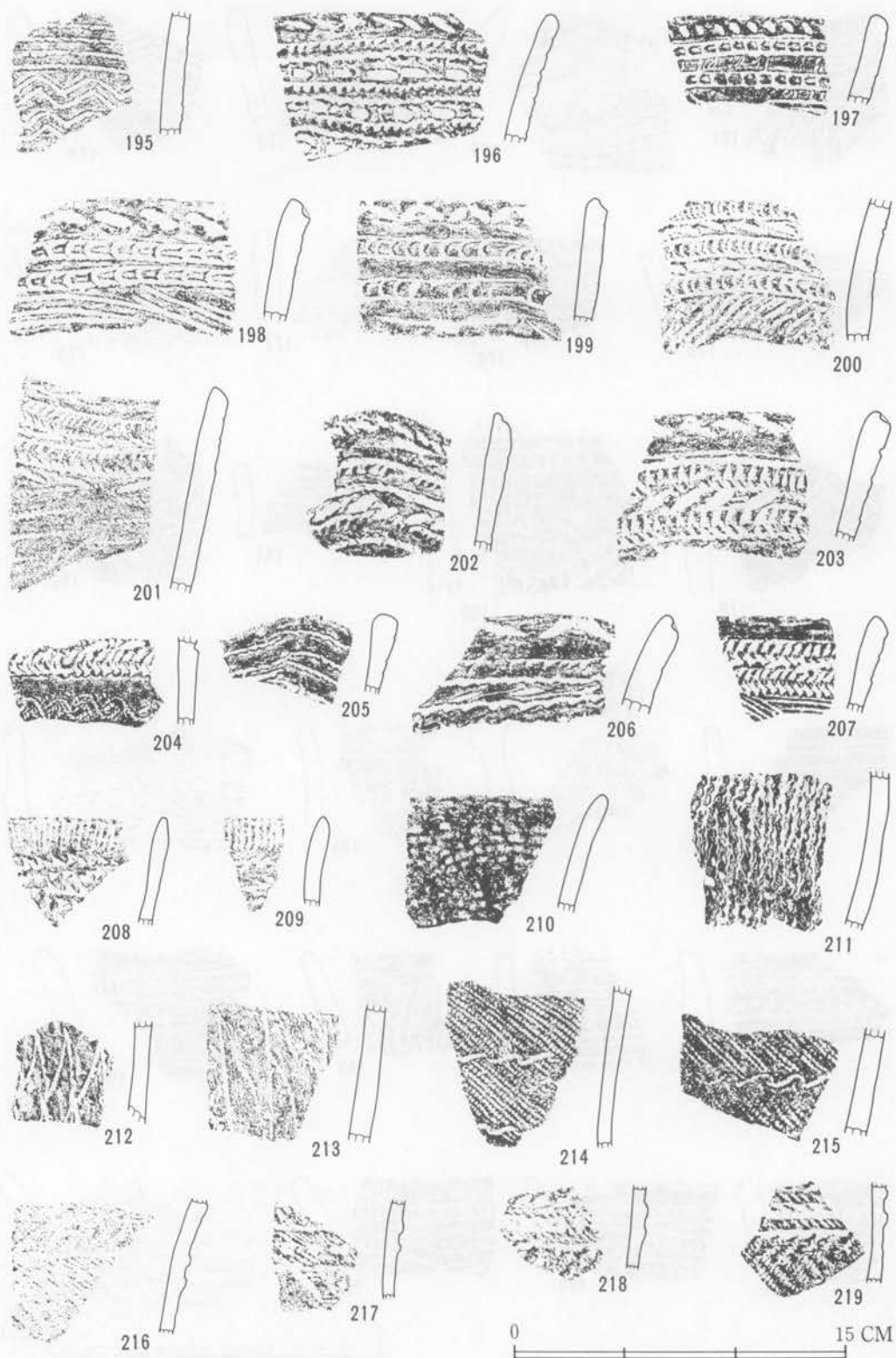
第33図 縄文式土器拓影図 (7)



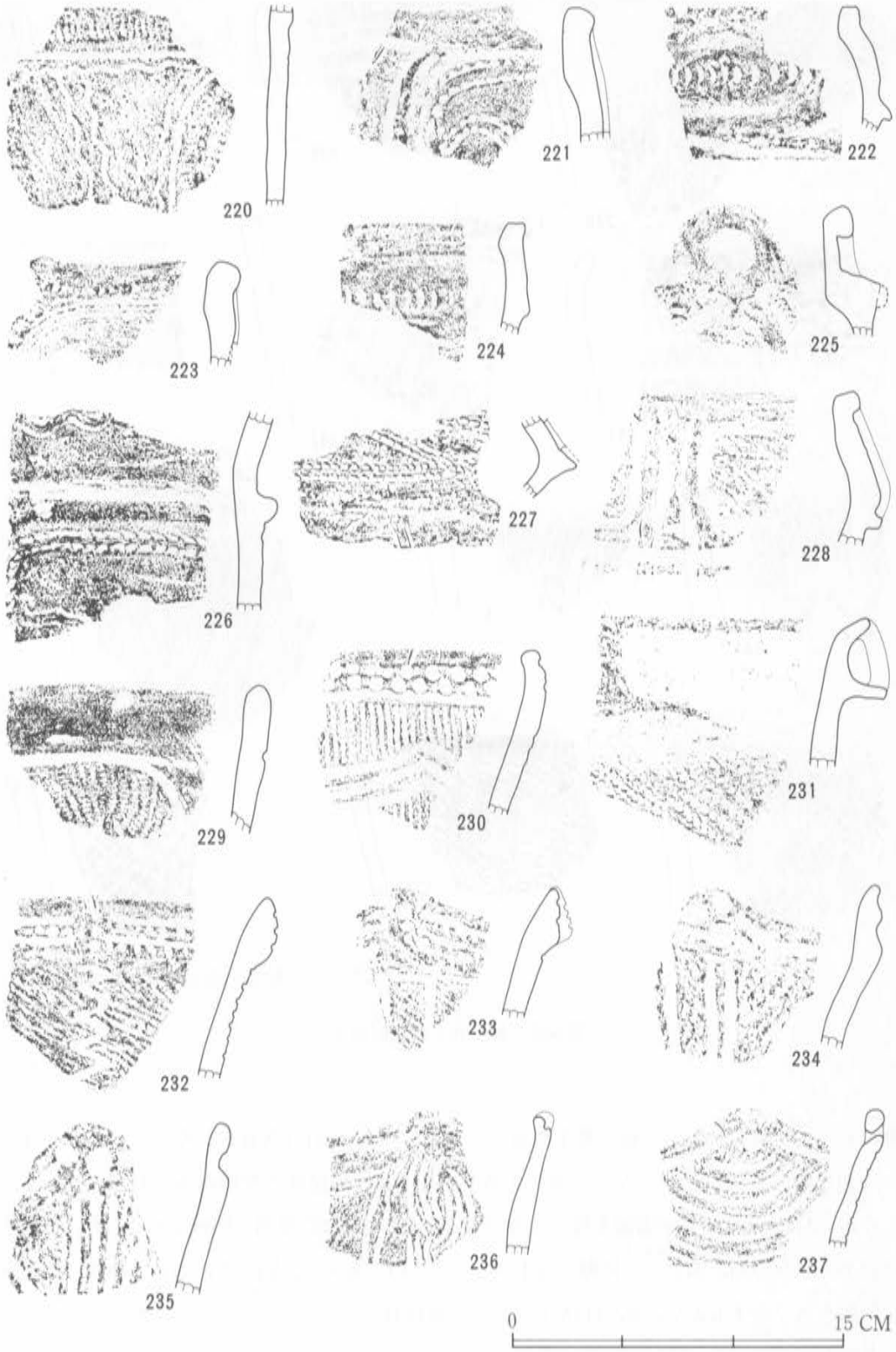
第34図 縄文式土器拓影図 (8)



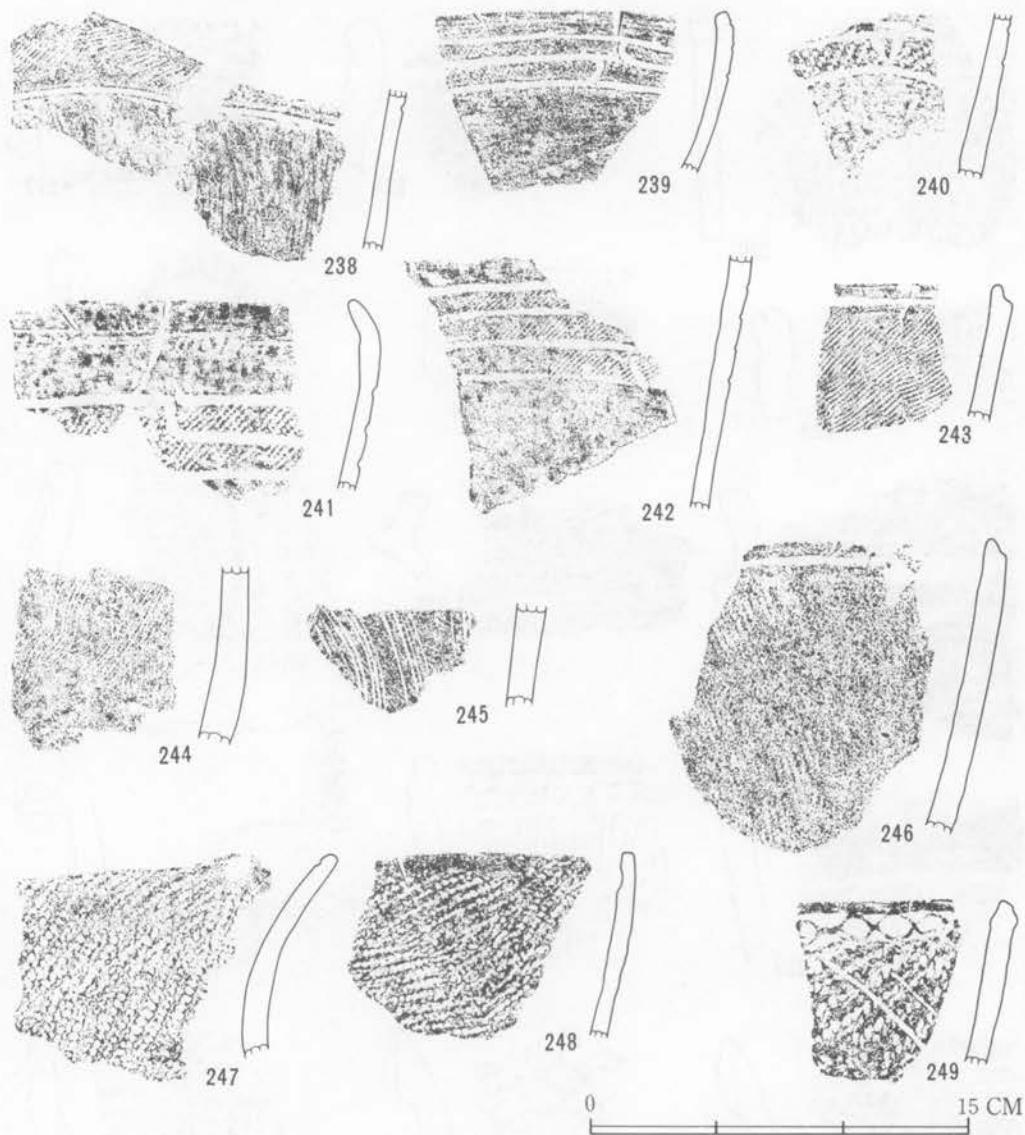
第35图 繩文式土器拓影图 (9)



第36図 縄文式土器拓影図 (10)



第37図 縄文式土器拓影図 (1)



第38図 縄文式土器拓影図 (12)

縁部にそって沈線で区画した縄文帯を数条めぐらしている。241は浅鉢形になろうか。23~28, 243~249は器面装飾が豊かでない土器である。244, 245は櫛描様の文様がみられる。23~28, 243, 246~248は縄文のみが器面を覆うものである。243, 246は口縁部に凹線をめぐらし、特に凹線の認められない23, 24とともに堀之内I式としてよいであろう。25~27, 247, 248は口縁部内面に凹線をめぐらすもので、28, 249をも含めて加曾利B式としてよいであろう。27を除いて全て $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right.$ である。

以上B区包含層を中心に出土した土器を5群に分類して説明を加えたが、最後に編年的位置付

けについて簡単に触れておきたい。

第I群土器としたものは、1類に見られるような外方へ突出する口縁部形態を有し、1類、2類ともに口唇上端部にも縄文を転がしており、井草I式としての特徴をそなえた土器である。第II群土器は胎土に植物繊維を混入するものを一括したが、1類を早期末葉の条痕文系土器とし、2類は前期黒浜式土器としたい。1類としたもののうち51～53は口縁部に稜を有し、口唇部の成形も内側から行なわれ、茅山下層式土器としてよいであろう。54は茅山式土器である。2類は黒浜式土器に比定されるものである。57～69は刺突文及び有節平行沈線を用いて口縁部文様帯の形成が見られ、時間的には鴻ノ巣遺跡^{*}2号住居址から3号住居址の間に位置付けられる。22, 105はすでに肋骨文が施され、新出要素を含んでいる。また、70, 71のような菱形に配される撚糸文も黒浜式土器に伴うことが知られ、大木II式土器の影響が窺える。第III群土器は縄文時代前期後半の諸磯式土器である。1類は諸磯a式として問題はない。2類はややバラエティーに富むが浮線文、爪形文等諸磯b式土器の特徴的要素を含んでおり問題はない。しかし、2類d種とした三角文は浮島式土器に見られる施文であり、2類d種を浮島式土器として分離する必要がある。また2類c種までの土器の中にも173～175, 185, 197等地文にまばらな撚糸文が観察されるものを含み、浮島I式土器の影響が考慮される。2類g種として分離したものは、胎土、焼成が他の土器と明確に異なるもので、北白川下層II式土器である。

(2) 石器 (第39図)

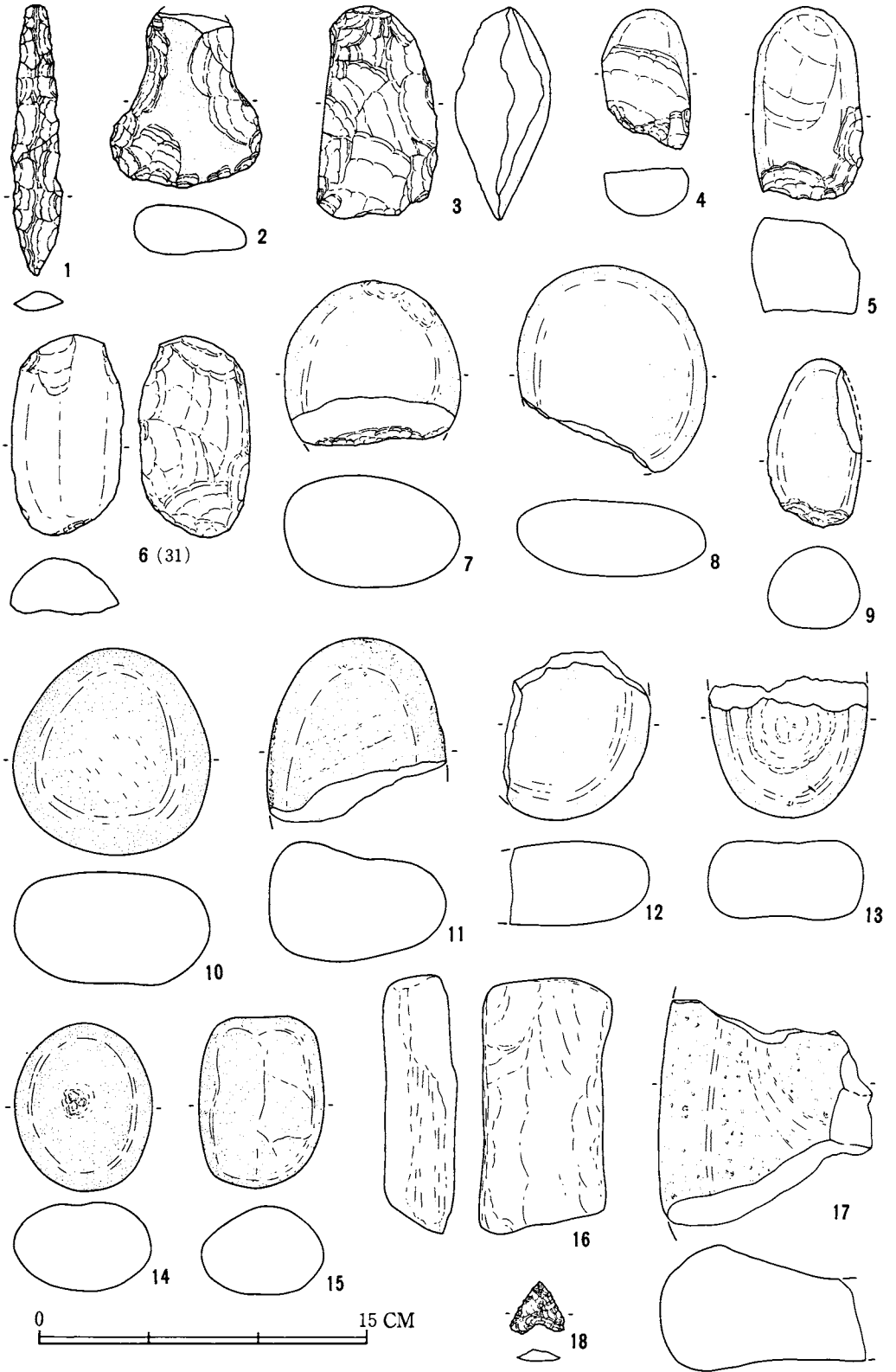
本遺跡から出土した石器は、図示した18点の他に若干の磨石片が検出されているにすぎない。概して少量と言えよう。器種の内訳は打製石斧2点、礫器3点、敲石2点、磨石7点、砥石1点、石皿1点、石鏃1点となる。ただ、1の石槍については図面作成上、時期的には異なるが一括した。

石槍 単独の出土品で、先端部をわずかに欠損する。いわゆる柳葉形を呈した典型的な石槍となろう。表裏両面ともに粗雑ではあるが、全面に加工が施される。最大幅は基部の付近にあるところから有舌尖頭器に近い形状とも言えよう。時期的には縄文時代草創期の所産と考えたほうが妥当であろう。石材には安山岩を使用している。

打製石斧 2は砂岩製で、頭部を若干欠損する。彎曲する側面には固定のための磨耗痕が認められ、顕著な使用を物語っている。表面には自然面が認められ、下端部では小さな剝離で入念な加工を施し、鋭利な刃部を作出している。3はせん緑岩で、その側面は菱形に近く、がっちりとした出来ばえとなる。裏面はほとんど自然面のままであり、全体として雑な作りと言える。刃部の小剝離は、おそらく使用の際にできたものであろう。

礫器 4～6は礫器となろう。石材はそれぞれ異なり、4が砂岩、5が安山岩、6が緑泥片岩と

* 古内・矢戸 (1974) 柏市鴻ノ巣遺跡 千葉県都市公社



第39图 石器实测图

なる。4は原石の節理面を利用しており、数回の剥離を施し刃部を作出している。5は拳大の原石を素材とし、両面から簡単な剥離を施し、約60°の角度で刃部を作出している。6は表面が若干研磨されているものの、平坦な自然面を利用し礫器としており、上下両端の使用も著しい。

磨石 完形品は2点と少なく、それぞれ顕著な使用痕が認められる。とりわけ10の磨石の表裏面は磨耗により滑らかな面になっており長期間にわたる使用を物語る。7は欠損面を利用して敲打具としても使用していたらしい。石材は12, 14が砂岩で、その他は安山岩となる。

敲石 いずれも上下両端に使用痕が認められる。9の下端はその使用がもっとも著しい。石材は2点とも安山岩である。

砥石 表面は風化によりザラザラとした面に変化しているものの、側面には砥石として使用したと思われる滑らかな面が一部に残る。石材は脆く、若干雲母を含んでいるため絹雲母片岩となる。

石皿 欠損品で一部の遺存でしかない。石材には安山岩を使用。

石鏃 両面がきれいに調整された黒曜石製の石鏃で、この1点だけ縮尺は $\frac{1}{2}$ とする。

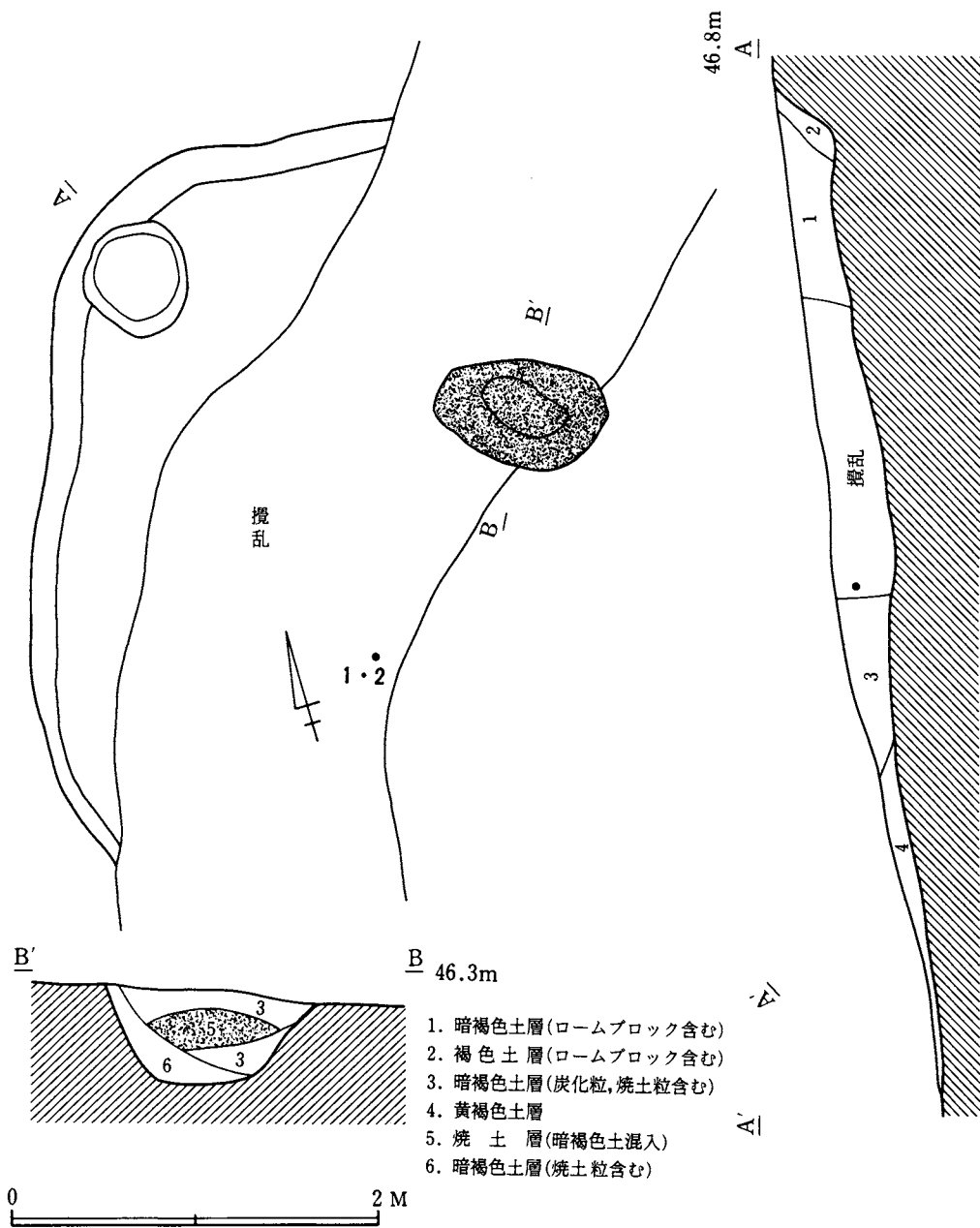
以上が本遺跡から出土した石器であり、ここから検出された土器群と比較すれば総じて貧弱な内容と解してもよいであろう。また、これらの石器群は6の礫器を除いたすべてが表土あるいは包含層からの出土品で、時期を判別するまでには至らなかった。おそらく縄文時代中期から後期初頭までの間に使用されたものが多いと考えられるが、検討を加えるほどの資料とは言いがたい。つまり、本遺跡における縄文時代人の活動は、土器型式によれば各期の遺物は認められるものの継続的に長期にわたる居住とは結びつかないであろう。生産具としての石器類の少なさがそれをよく物語っている。ただ、ここでは触れなかったが、3点の石製品(球状耳飾)が検出されたことは特記できる内容のものであり、これについては稿を改めて述べることにしたい。

第4節 弥生時代の遺構と遺物

11号住居址(第40・41図, 図版9・18)

本址はB区の北東端に位置し、壁の一部、炉址、ピット、遺物の出土が見られたのみである。中央部が攪乱を受け、東側が既に流失しているため平面形は確定できなかった。残存する壁からは隅丸方形が推定できるようである。壁は北壁の一部と西壁が検出され、北西隅で28cmを測り、緩やかに外側に傾斜する。壁溝はない。柱穴は、北西隅にP1が1か所確認されたが、規模や掘り込みがしっかりしていることから貯蔵穴等の可能性もある。ピットの規模は、開口部が径60cm、底部が46cmの円形を呈し、深さは50cmを測る。床面は溝状攪乱部分の西側に遺存し、若干凹凸が見られ軟弱である。

炉址は半分以上攪乱部分に含まれるが確認できた。平面形態は95cm×58cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-70°-Wを指す。覆土は全てに焼土粒の含有が見られるが、中でも特に第5層

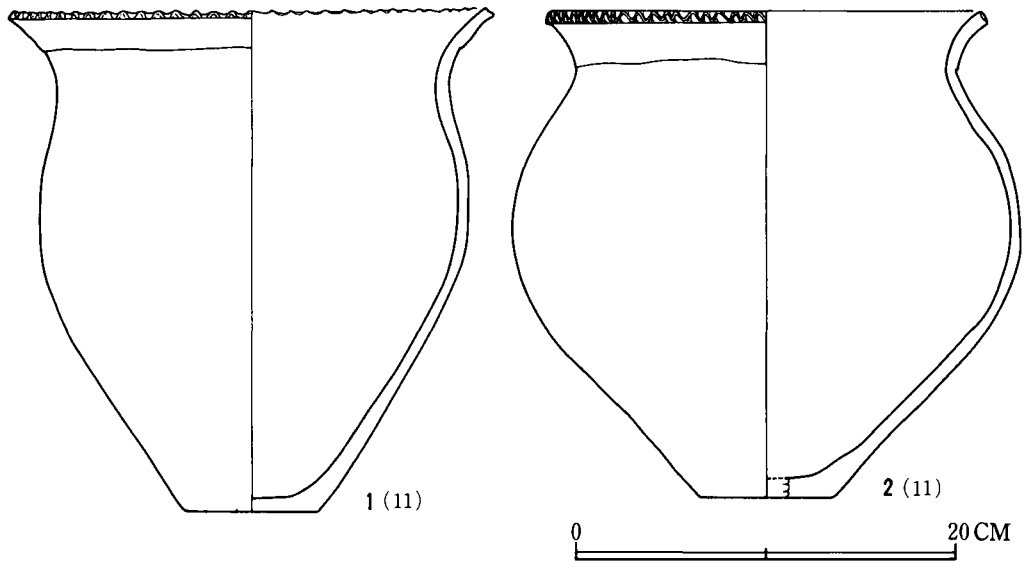


第40図 11号住居址実測図

に集中する。遺物は、覆土中から甕2個体分が検出された。

遺物 本址出土の遺物は、炉の南西側から甕形土器2点が検出された。1, 2ともに攪乱塚にかかっていた出土であったが、本址に伴うものと判断した。なお本址からは図示した他にも100片近くの土器片が出土しているが、縄文式土器の混入も多い。

1, 2とも同様な器形を呈する甕形土器である。1は口径 25.6 cm, 底径 7 cm, 器高 26.1 cm



第41図 住居址出土土器実測図

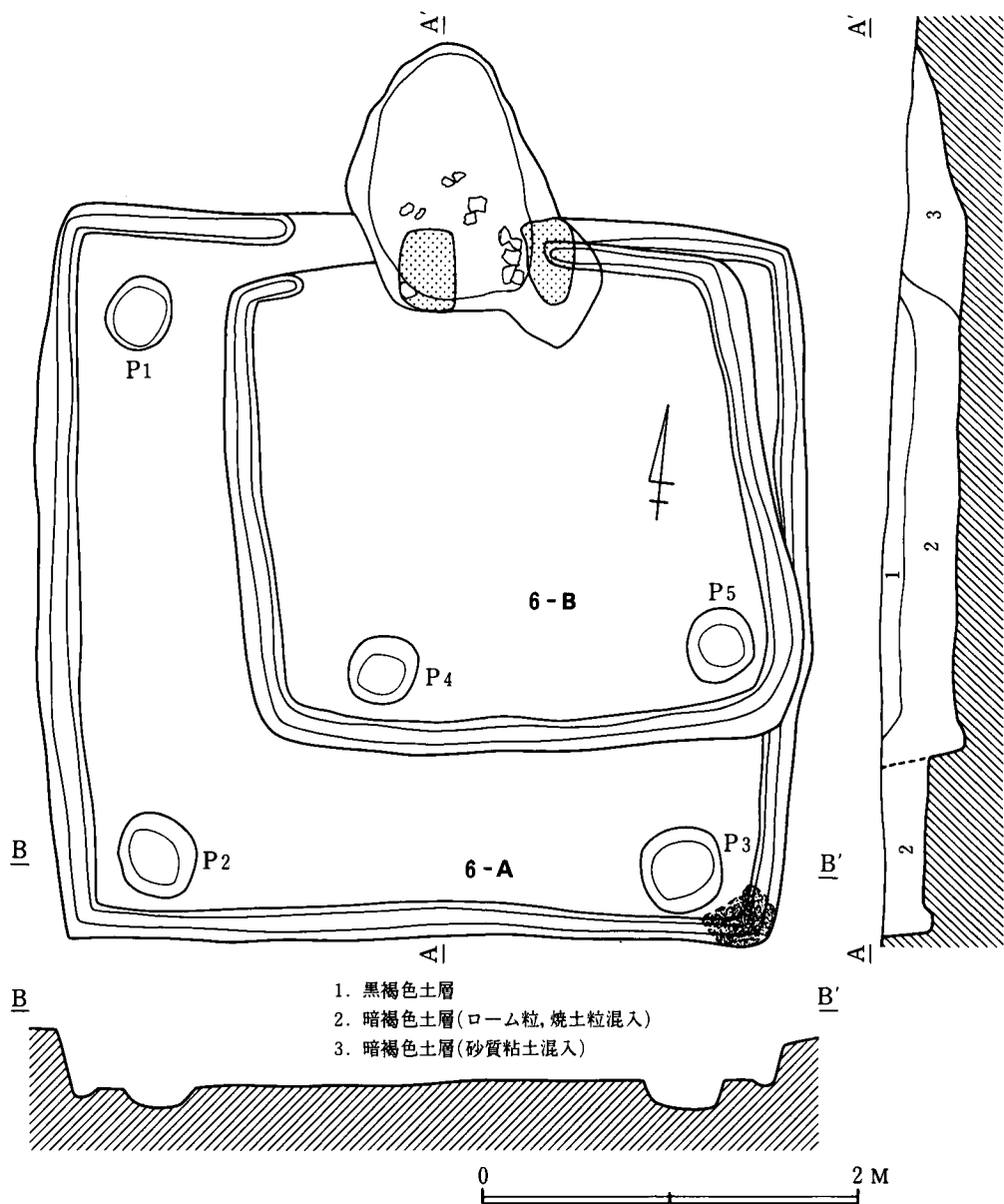
を測り、約 $\frac{1}{2}$ を欠失している。口縁部は輪積痕を残すような複合口縁で、口唇端部を両側から押圧し小さな波状を形成する。器面の調整は内外面とも横方向のヘラナデで仕上げられている。胎土には小石、雲母粒を含み、焼成は比較的良い。2は口径23.3 cm、底径7 cm、器高25.2 cmを測り、約 $\frac{1}{2}$ を欠失している。口縁部は1と同様な作りで、複合口縁を呈し端部を両側から押圧している。胴下半はいくぶん風化するが、器面の調整は内外面とも横方向のヘラナデで仕上げられる。胎土は粒子が細かく、焼成は普通である。1、2ともに色調は黄褐色を呈するが、底部内面だけ黒変している。いずれも弥生時代後期の土器である。

第5節 歴史時代の遺構と遺物

1. 住居址

6-A号住居址（第42図、図版9）

本址はA区の中央南寄りに位置する住居址であり、B号住居址と重複関係を持つ。両者の新旧関係は土層断面からは不明である。B号住居址床面の土層に貼り床が無いこと、本址のカマドが破壊されていることから、本址がB号住居址より古いと推定される。また両者の時間差は、覆土の状態、出土遺物から、あまり隔らないようである。平面形態は、4.0m×3.8mのやや東西に長い方形を呈する。長軸方向はN-0°と北方向を指す。壁はほぼ垂直で、高さ25~35 cmを測る。壁溝は、カマドのある北壁中央部を除き全周し、上端12~24 cm、下端5~12 cmの断面「U」字形を呈し、深さ4~8 cmを測る。柱穴はP1~3の3か所で、規模は直径38~48 cmの円形を呈し、深さは13~15 cmといずれも浅い。床面は、B号住居址を除く部分に比較的良好な貼り



第42図 6-A・B号住居址実測図

床を施し、ほぼ平坦である。南東コーナーには焼土が堆積していた。カマドは住居址北壁の中央に設けられていたと推定されるが、B号住居址のカマドの構築により本址のカマドは残存していなかった。

6-B号住居址 (第42図, 図版9)

本址はA区の中央南寄りに位置する住居址で、A号住居址を切ると推定される。平面形態は、3.0m×2.7mのやや東西に長い方形を呈する。長軸方向はN-10°-Wを指す。側壁は検出できな

かった。壁溝は、カマドの位置する北壁の一部を除いて全周し、上端 10~24 cm、下端 5~10 cm の断面「U」字形を呈し、深さ 2~3 cm を測る。柱穴は P 4、P 5 の 2 か所で、規模は径 36 cm の円形を呈し、深さは 13 cm と 17 cm を測る。床面はほぼ全面に良好な貼り床が確認され、ほぼ平坦で堅緻である。

カマドは北壁のほぼ中央に位置する。壁外への張り出しは 80 cm を測る。長軸方向はほぼ北方向を指す。底面は緩やかに傾斜し、煙道へと続く。掘り方のプランは A 号住居址と一部重複しており、本址のカマド本体は掘り方の東側に若干ずれる。東側袖部の下には 57 cm×32 cm の不整楕円の掘り込みが見られ、深さ 5 cm と浅く緩やかに傾斜している。袖部は粗悪な砂質粘土で作られているため遺存状態は悪い。両袖とも構築の際に下にソフトロームが敷かれ、特に住居址内（カマドの南側）は床面がよく焼けている。出土遺物は、カマド内から土師器破片が出土した。**遺物** 本址出土の遺物はカマド内において、土師器坏、甕破片がわずかに出土したが、細片であったため特に図示しなかった。いずれも国分式土器である。

7号住居址（第43・49図、図版19）

本址は、B 区の中央やや北西寄りに位置し、3 か所の柱穴、カマドの痕跡、床面の一部が確認されたのみである。柱穴は P 1~P 3 で、規模は直径 40 cm の円形を呈し、深さが 52~71 cm を測る。床面は、カマドの痕跡の東南に接して 80 cm×54 cm の楕円形の範囲に確認された。ほぼ平坦で比較的堅い。カマドの痕跡は、87 cm×68 cm の楕円形を呈し、深さは 16 cm を測る。覆土に砂質粘土の混入が見られたこと、遺物の出土等から、炉ではなくカマドの痕跡と推定される。出土遺物は、前述のカマドの痕跡から 2 点の土師器坏破片が出土した。

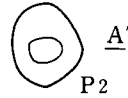
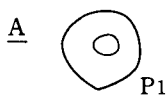
遺物 本址出土の遺物は、遺構南側のカマド痕跡と考えられる部分から土師器坏 2 点が出土した。

1 は坏で体部はロクロ成形される。底部は一定方向のヘラ削りがなされ、体部下位も手持ちヘラ削りされる。2 も坏で体部はロクロ成形される。底部はやや突出するような感があり、回転糸切り痕が残る。ロクロは左回転。1、2 ともに国分式土器である。

10号住居址（第44・49図、図版10・19）

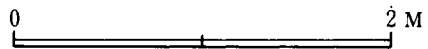
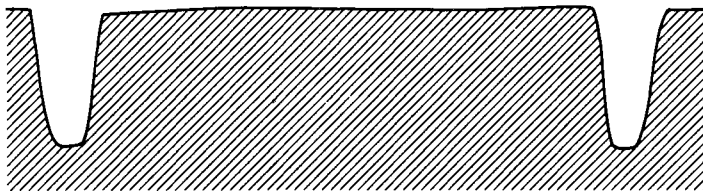
本址は B 区のほぼ中央に位置する住居址である。平面形態は、4.0m×3.3m の隅丸長方形を呈する。長軸方向は N-30°-W を指す。側壁は南西・南東コーナーを除いて確認され、高さが 1~17 cm を測り、ほぼ垂直に構築される。壁溝はない。柱穴は 1 か所のみで、規模が 26 cm×20 cm の楕円形で、深さは 40 cm を測る。床面はほぼ平坦で比較的堅い。

カマドは北西側に位置し、上部が削平されているため詳細は不明となる。床面からの深さは 10 cm を測る。またカマドを中心にして人為的な掘り込みが認められた。掘り込みは、規模が 110 cm×78 cm の不整楕円形で、深さは 24 cm を測る。カマドは掘り込みの上面にロームを敷き、その上に良質の砂質粘土を積んで構築される。カマドの内部には、甕が裾えられた形で検出された。出土遺物は他にも多数あり、壁に沿って出土したものが多い。



A

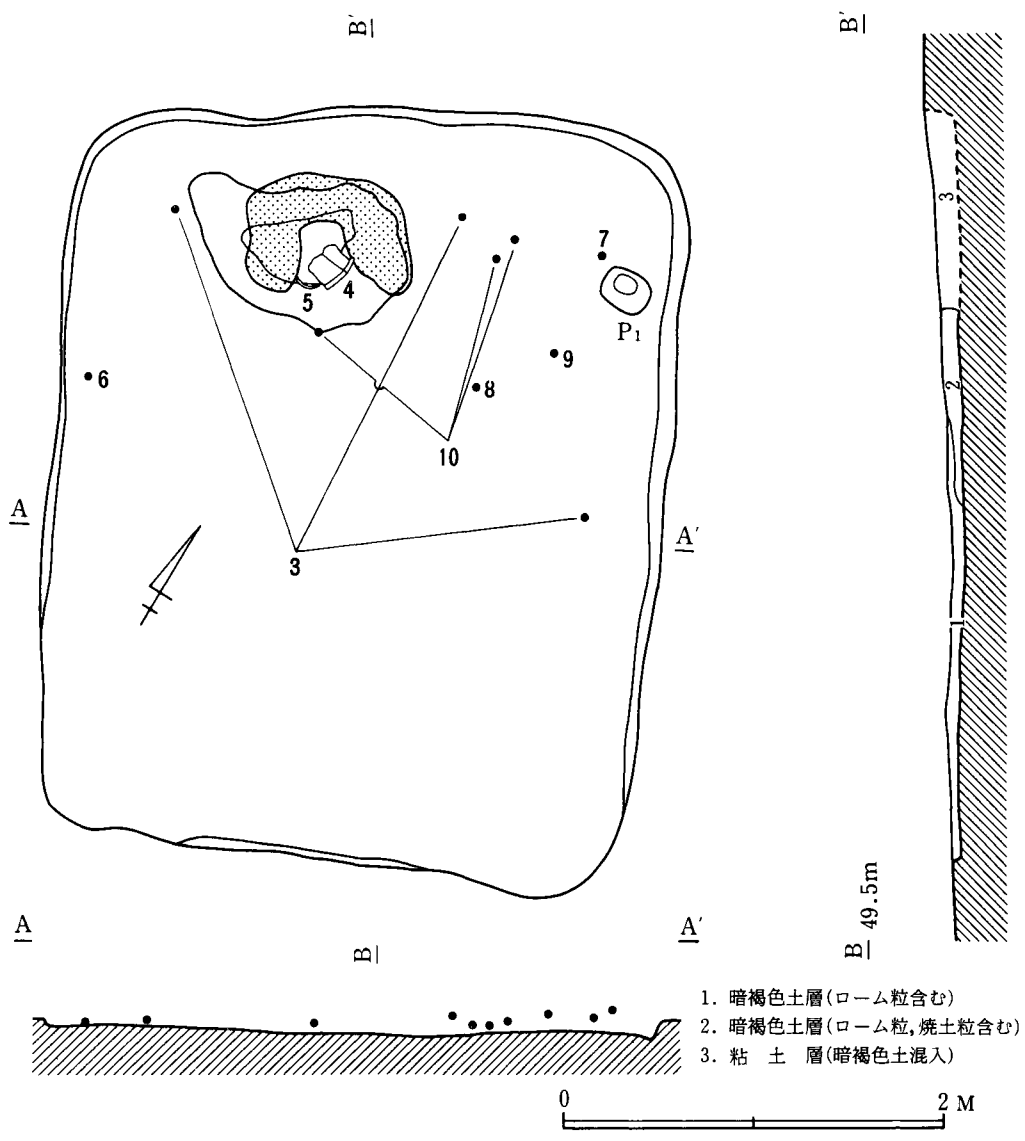
A'



第43図 7号住居址実測図

遺物 本址出土の遺物は住居址北側に多く、南側に少ない傾向にある。カマド内には甕（4・5）が残されており、カマド東側で坏（7～10）が床面から5～10 cm 浮いた状態で出土した。また灰釉陶器片（6）は住居址西壁付近の床面から2 cm ほどの所で出土している。なお図示した他にも約50片ほどの土器片が出土したが、本址出土の土師器は全て国分式であり、灰釉陶器は細片であるため、時期決定はしがたい。

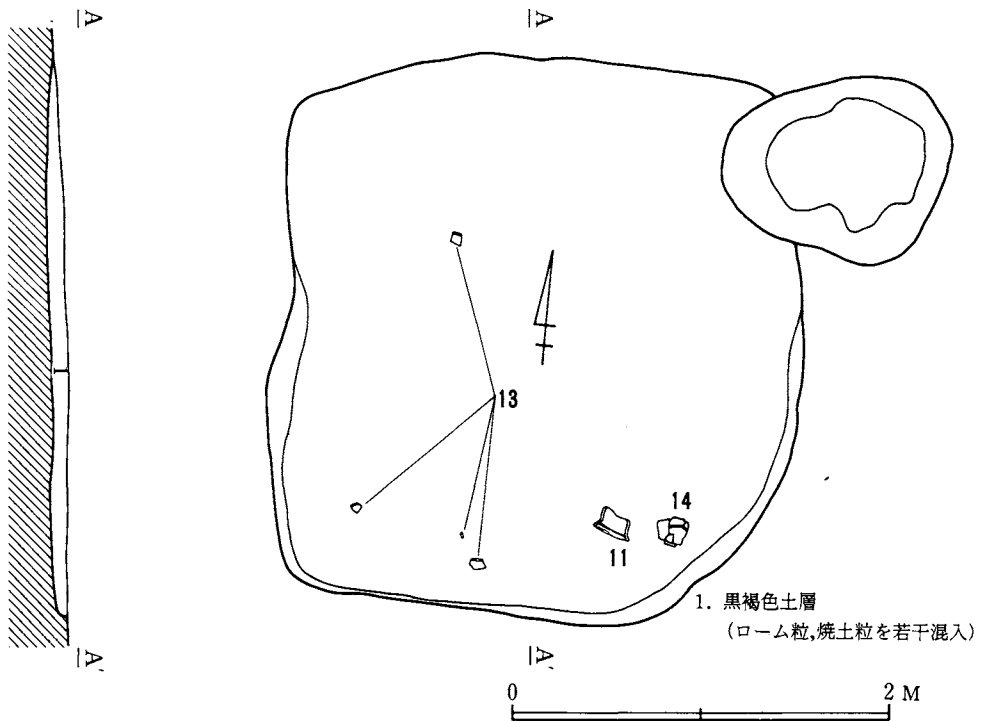
3は甕である。胴下半を欠失し、残存部も全周の約 $\frac{1}{4}$ 程度しか残っていない。口縁部は横ナデで外傾するが、先端で直立し断面三角形を呈する。胴部はタタキ調整の後、タタキ痕をナデ消している。4も甕でカマド内から出土した。ほぼ完形である。口縁部は外方へ短く開き、口唇部は



- 1. 暗褐色土層(ローム粒含む)
- 2. 暗褐色土層(ローム粒, 焼土粒含む)
- 3. 粘土層(暗褐色土混入)

第44図 10号住居址実測図

断面三角形を呈する。胴部はタタキ調整が行なわれ、下半は横方向のヘラ削りがなされる。底部は中央が凹む。内面は横方向のナデ調整である。5も甕でカマド内から出土した。胴部上半及び底部を欠損し、残存部も全周の約 $\frac{1}{2}$ 程度である。外面は縦方向のヘラ削り、内面は横方向のナデが観察される。6は灰釉陶器であり、器表には淡緑色の釉がかかる。内面にはシボリ目が残る。おそらく浄瓶の破片であろう。7~10は坏である。8・9は完形、7は約 $\frac{1}{3}$ 、10は約 $\frac{1}{4}$ が現存する。いずれもロクロ成形がなされ、底部は一様に一定方向のヘラ削りが行なわれる。体部のヘラ削りは10に認められず、7~9は下端に手持ちでヘラ削りされている。



第45図 25号住居址実測図

25号住居址 (第45・49図, 図版10・19)

本址はC区の14-19・14-24Gに位置し、その大部分に風倒木による攪乱を受けている。平面形態は、2.9m×2.8mのわずかに南北に長い方形を呈する。長軸方向はN-4°-Wを指す。側壁は僅かに一部残存し、南側で7cmの高さを測る。壁溝・柱穴はない。床面は一部で確認できたものの、軟弱で凹凸が見られる。カマドも風倒木による攪乱を受け、その痕跡がピットとして検出されたのみである。覆土にはレンガ状の焼土や砂が充満していたところからおそらくカマドとしてよいであろう。

出土遺物は、住居址南東コーナー付近で土師器甕破片、坏等がわずかにまとまって出土した。

遺物 本址の出土遺物は住居址南側に偏在しており、甕・坏が出土した。図示した他にも約50片ほどの土器片が出土しているが、半数近くは縄文式土器の混入である。図示したもののうち12は覆土上層からの出土であるが、他は床面に近いレベルから出土した。

11は甕である。胴下半を欠き、全周の約 $\frac{1}{4}$ が残っている。口縁部は横ナデで外方へ短く開き、口唇端部は内傾している。胴部は縦方向のヘラ削りが施される。12は小形の甕で口縁部を欠損する。現存部は底部で全周の約 $\frac{1}{2}$ 、胴部で約 $\frac{1}{3}$ 程度である。器面は横方向のナデ調整が行なわれ、下端は横方向のヘラ削りがなされる。底部は一定方向のヘラ削りで調整される。14も小形の甕で

胴下半を欠失している。全周の約 $\frac{3}{4}$ が現存している。胴部はやや丸味を有し、口縁部はわずかに開く程度である。器面の調整は内外面とも横方向のナデ調整である。13は坏である。体部はロク口成形で口唇部は丸くおさめられる。底部には回転糸切り痕が残るが、周縁はヘラ削りが行なわれ、糸切痕を部分的に消している。体部下端は手持ちヘラ削りがなされる。いずれも国分式土器である。

40—A号住居址（第46・50図，図版11）

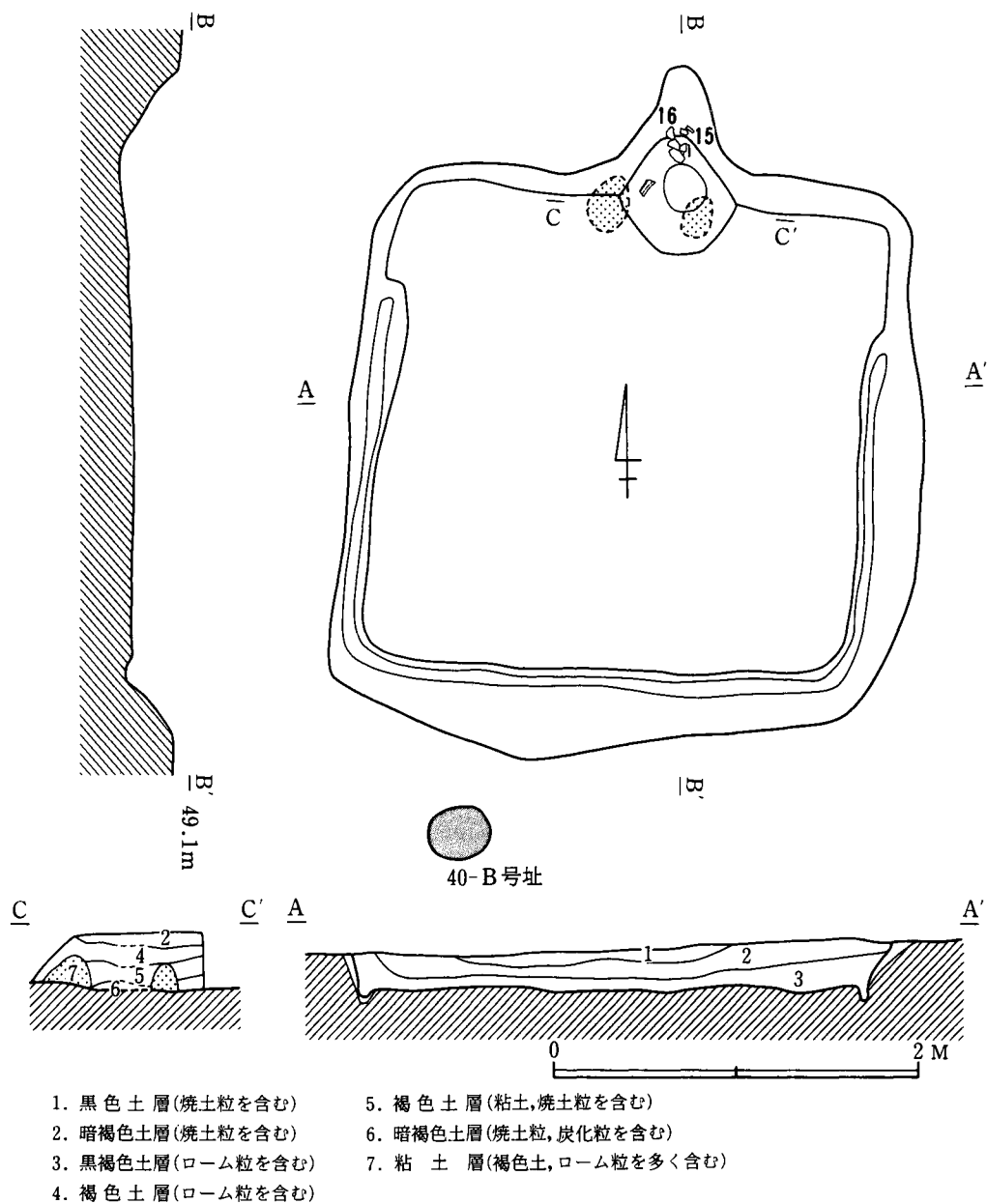
本址はC区の南側33—19Gに位置する住居址である。平面形態は、3.2m×3.1mの方形を呈する。長軸方向はN—4°—Eを指す。側壁は全面で確認され、高さ20~30cmを測り、東・南側で外方に広がる傾向が強い。壁溝はカマドの位置する北壁及び北東、北西両隅を除いて全周する。規模は上端13~48cm、下端4~10cmを測り、断面が「V」字形を呈し、深さは5~8cmを測る。柱穴は検出しなかった。床面は所々傾斜しており、やや軟弱である。カマドは北壁の中央、やや東寄りに位置し、壁外に約70cm張り出している。袖は、土層断面で第7層とし、若干の砂質粘土の含有が見られたのみでほとんど遺存せず、形状も不鮮明であった。出土遺物は、カマド内から土師器甕破片が出土した他は特に見るものはなかった。

遺物 本址からの出土遺物は極めて少ない。覆土内からは約20片ほどの土器片が出土したが、若干の縄文式土器の混入もある。また住居址南東コーナー近くの床面からスラグが2点出土した。カマド内からは図示した他にも数点の土器片が出土している。

15・16ともにカマド内からの出土である。15は甑で胴下半部を欠損する。また現存部も全周の約 $\frac{1}{3}$ 程度である。口縁部は外方へ開き、口唇端部の整形は雑で単純に丸い。胴部は縦方向にヘラ削りが行なわれ、円錐形のつまみが付される。内面は横方向のナデ調整であるがわずかに輪積痕が残される。16は小形の甕で底部を欠く。現存部は全周の約 $\frac{3}{4}$ 程度である。口縁部は外方へ短く開き、端部は直立する。胴部はやや丸味をおび、最大径は上半に位置する。器面の調整は内外面とも横方向のナデで、口縁部は特に横ナデで整えられる。

52号住居址（第47・50図，図版11・19）

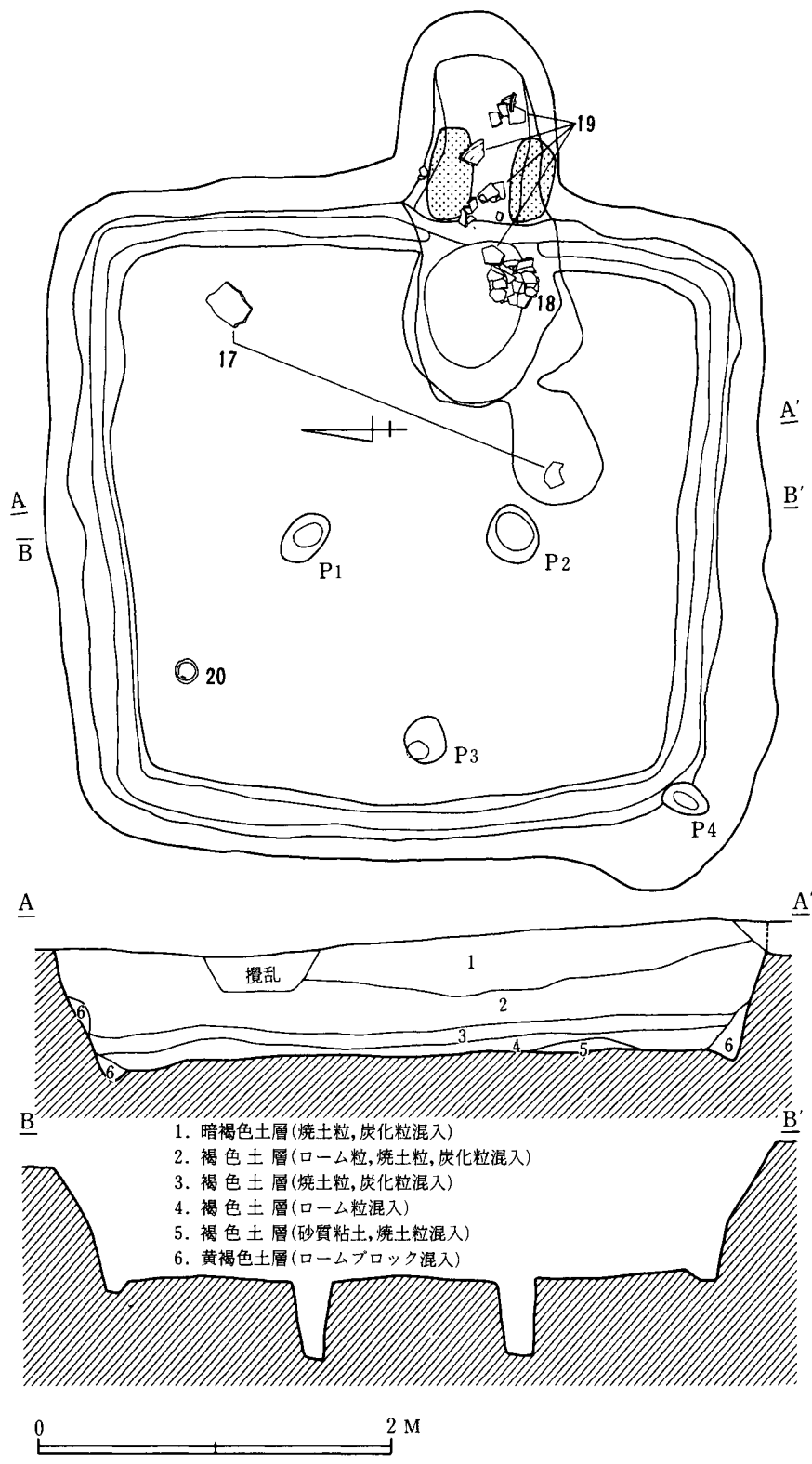
本址はC区の西側22—21Gに位置し、東側のカマド部分で49号址を切っている。平面形態は4.1m×3.8mの隅丸方形を呈する。長軸方向はN—5°—Eを指す。側壁は東壁のカマド部分を除いて明瞭に検出され、高さ65~85cmを測り、ほぼ垂直にしっかりと掘り込まれている。壁溝は全周しており、上端18~28cm、下端6~17cmの断面「V」字形を呈し、深さ7cmを測る。柱穴はP1~P4の4か所で、規模は24~33cmの円形または楕円形を呈し、深さは22~44cmを測る。床面はほぼ全面に良好な貼り床が確認され、平坦で堅緻である。また、カマドの西側は、壁溝の上面と1.0m×2.0mの楕円形の範囲に、焼土、砂、炭化物が広がっていた。カマドは東壁の中央、やや南寄りに位置する。大部分が壁外への張り出し部にあたる。このことから国分期の特徴がよく表われている。掘り方の東側には壁溝に接して、100cm×90cm、深さ15cmの円



第46図 40-A号住居址実測図

形のピットが作られ、その上にカマド本体が構築される。袖は砂質粘土で作られ、「ハ」の字状を呈する。出土遺物は、カマド内及びカマド前面から土師器甕が2個体分出土した他、北東コーナーから須恵器甕破片、北西コーナー付近から土師器坏が出土した。

遺物 本址の出土遺物はカマド内、カマドの前方部にかたまって検出された(18, 19)。それ以外からの遺物は、住居址北西コーナー付近から坏が床面から約 10 cm 上で、北東コーナー付近及び



1. 暗褐色土層(焼土粒,炭化粒混入)
2. 褐色土層(ローム粒,焼土粒,炭化粒混入)
3. 褐色土層(焼土粒,炭化粒混入)
4. 褐色土層(ローム粒混入)
5. 褐色土層(砂質粘土,焼土粒混入)
6. 黄褐色土層(ロームブロック混入)

第47図 52号住居址実測図

P 2 脇から須恵器甕破片 (17) が床面から 20 cm ほど上で出土した。その他には約10片ほどの土器片が出土しただけである。

17は須恵器の大形の甕で、肩部の破片である。外面は斜め方向の平行叩き目が認められるが、内面はきれいにナデ消している。色調は灰白色を呈し、器表にはうっすらと淡緑色の自然釉がかかる。18は甕である。底部を欠く他はほぼ完形であり、全体に薄い作りである。口縁部は横ナデでやや長く開き、端部は丸くおさめる。胴部は斜めないし縦方向のヘラ削りが行なわれる。内面は平滑にナデている。19も甕である。全体に粗雑な作りで、形状もゆがんでいる。底部を欠く他はほぼ完形である。口縁部は短く立ち上がり、横ナデが観察されるが決して整ってはいない。胴部は縦方向のヘラナデを行っている。20は坏でほぼ完形である。体部はロクロ成形が行なわれ、わずかに外方へ開く。底部は回転ヘラ削りで調整され、「卍」とヘラ描きされている。ロクロ回転方向は右である。なお体部及び内面は赤色の塗彩がなされる。また口縁部内面に焼芯が付着する。17は部分的な破片である。他は真間式土器である。

54号住居址 (第48・50図, 図版12・19)

本址はC区の北西端22-1Gに位置し、南側コーナーを中心に一部が遺存するのみである。さらに全体的にロームへの掘り込みは浅く、西壁の立ち上がりは不明瞭である。東側の壁は、比較的遺存が良く、その方向はN-30°-Eを指す。側壁は南東・南西側壁が検出でき、遺存状態の良い南側コーナー付近ではほぼ垂直に掘られ、高さは48cmを測る。壁溝は残存部で全周するが、南西側は壁と同様北側でくずれ、幅が極端に広がる。南側コーナー及び南東側壁での壁溝は、上端12~26cm、下端8~16cmの緩やかな断面「U」字形を呈し、深さは4~6cmを測る。ピットは南側コーナーと北東端に2か所検出したが、北東端のピットは大部分が削平面にあり、くずれた痕跡を残すのみである。P1は、開口部が40cm×35cm、底部が径28cmの円形を呈し、深さは13cmと浅い。床面は南側コーナーを中心に遺存し、凹凸が見られ、ロームを固めて構築している。出土遺物は、土師器坏、甕破片等が出土した。

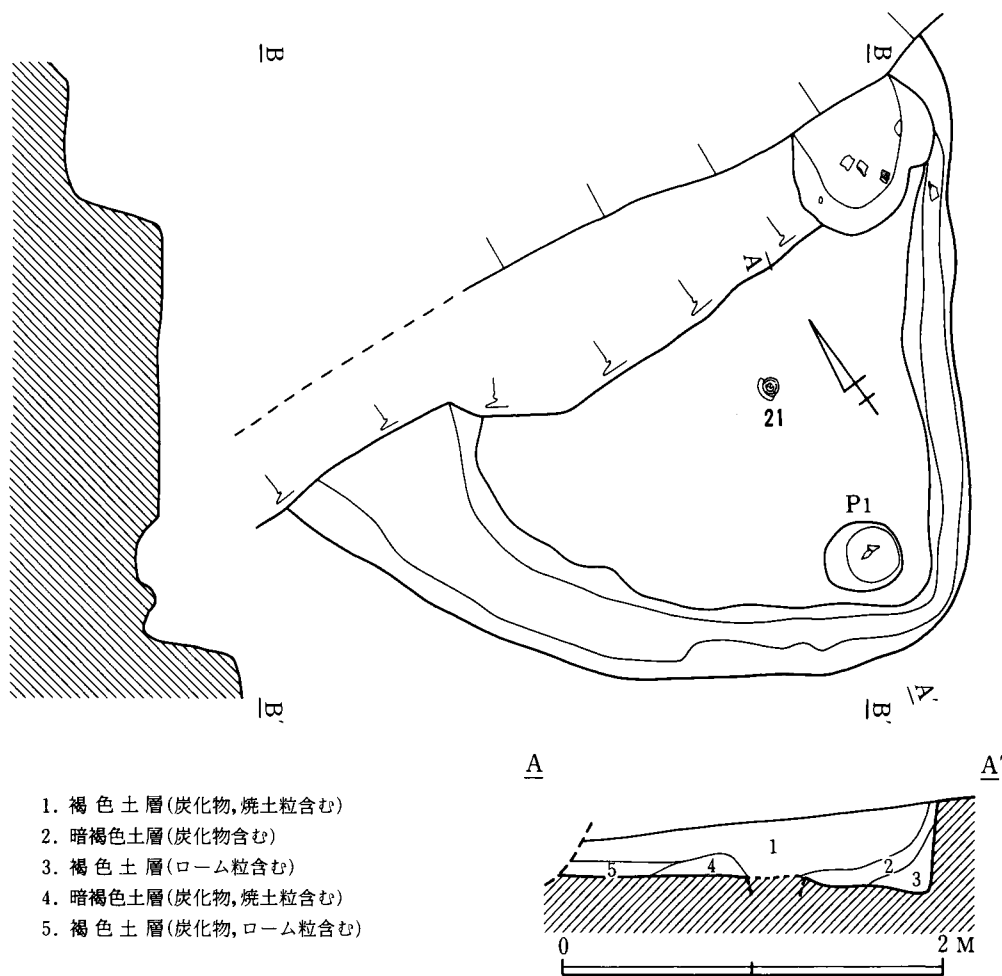
遺物 本址の出土遺物は住居址中央から坏(21)が床面から10cmほど上で、また西壁に接して甕が出土した他、覆土内から約30片ほどの土器と2点のスラグが検出された。

21は坏で口縁部を $\frac{2}{3}$ ほど欠損する。体部はロクロ成形であるが、全体に歪んで底部も凹凸を有する。底部には回転糸切痕が残され、ロクロ回転方向は左である。国分式土器である。

2. 土 壇

1号址 (第51図)

本址はB区に位置する土壇である。平面形態は、開口部が216cm×90cmの長楕円形、底部が165cm×50cmの隅丸長方形を呈する。長軸方向はN-35°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは62cmを測り、径17cmの円形で底面からの深さ32cmのピットが穿たれている。出土遺物はない。



第48図 54号住居址実測図

2号址 (第51図)

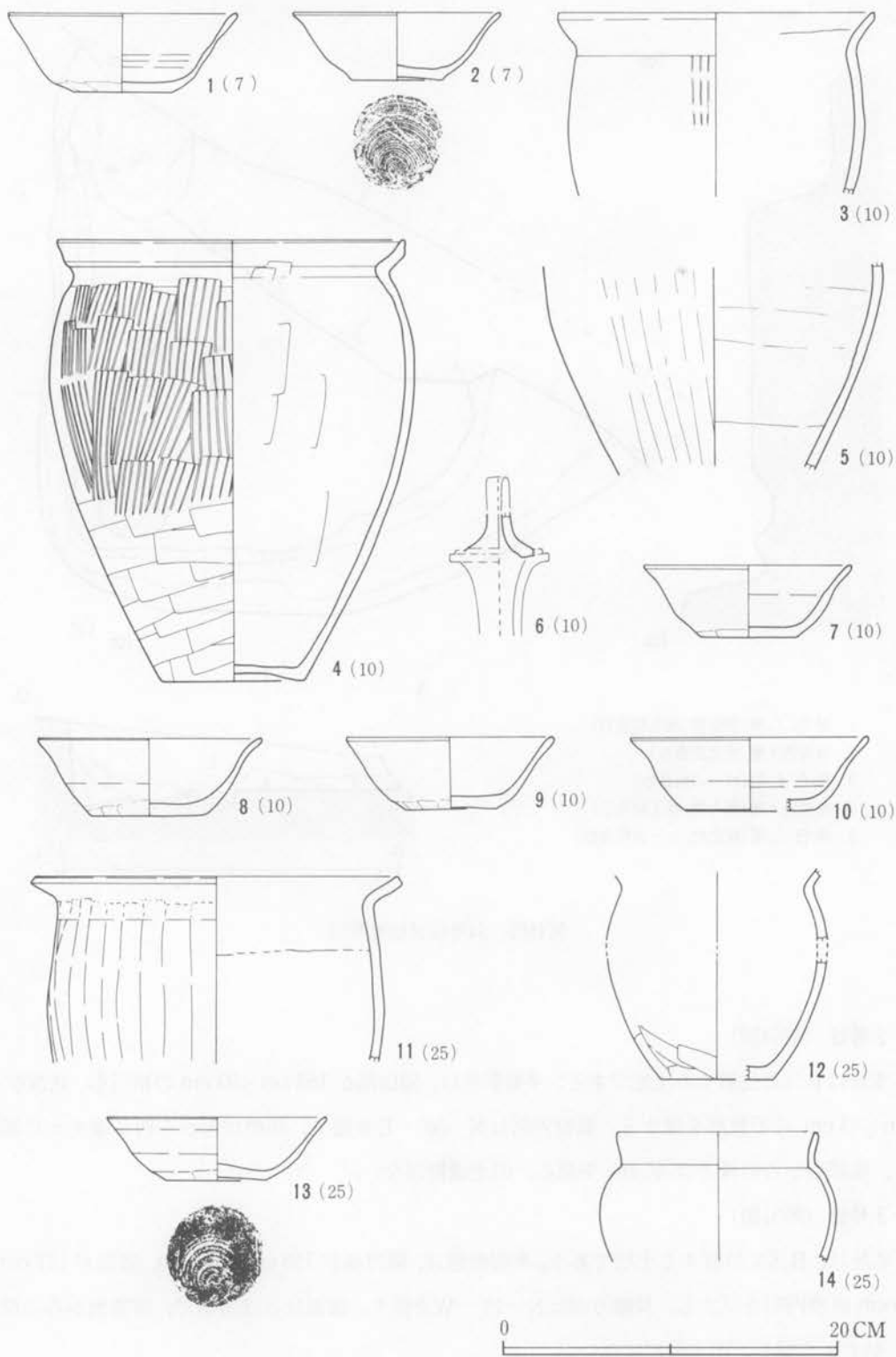
本址はB区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が153 cm×93 cmの楕円形、底部が70 cm×43 cmの不整形を呈する。長軸方向はN-50°-Eを指す。底面は東から西に緩やかに傾斜し、確認面からの深さは60 cmを測る。出土遺物はない。

3号址 (第51図)

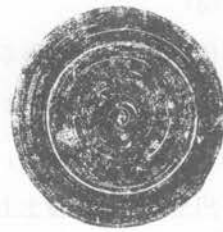
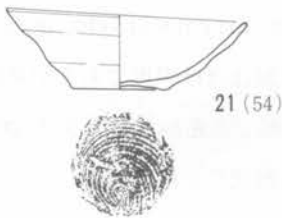
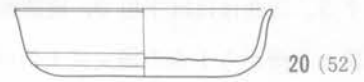
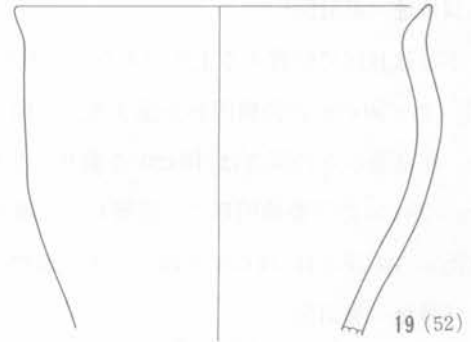
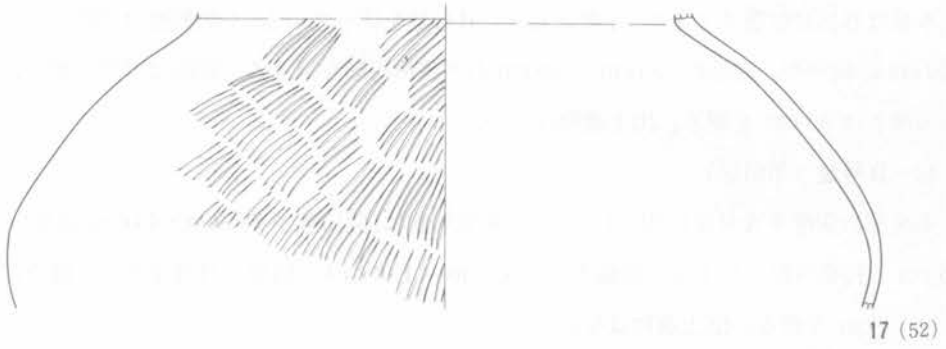
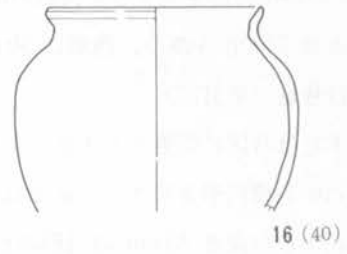
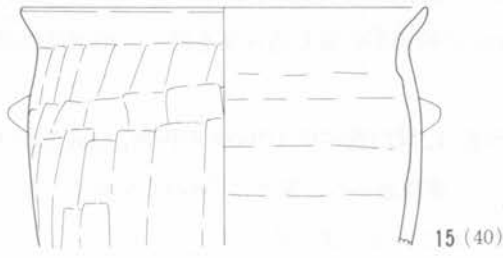
本址は、B区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が158 cm×112 cm、底部が127 cm×80 cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-75°-Wを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは48 cmを測る。出土遺物はない。

9号址 (第51図)

本址はB区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が198 cm×62 cm、底部が160 cm×22



第49図 住居址出土土器実測図 (1)



第50图 住居址出土土器实测图(2)

cm の長楕円形を呈する。長軸方向はN-70°-Eを指す。底面は中央がやや高く、確認面からの深さは 33 cm を測り、西側に 50 cm×20 cm の楕円形の落ち込み部を持つ。出土遺物はない。

12号址 (第51図)

本址はB区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が径 170 cm の円形、坑底部が 112 cm×88 cm の楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 50 cm を測る。径 28 cm で底面からの深さ 33 cm の円形のピットが穿たれている。出土遺物はない。

13-A号址 (第51図)

本址はB区に位置する土坑で、東南部分でB号址を切っている。平面形態は、開口部が 195 cm×120 cm の楕円形、底部が 155 cm×100 cm の不整楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 43 cm を測る。出土遺物はない。

13-B号址 (第51図)

中央部の側壁をA号址に切られている。平面形態は、開口部が 285 cm×43 cm、底部が 275 cm×26 cm の長楕円形を呈する。長軸方向はN-40°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 74 cm を測る。出土遺物はない。

14号址 (第51図)

本址はB区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が 175 cm×105 cm の楕円形、底部が 137 cm×50 cm の長楕円形を呈する。長軸方向はN-30°-Wを指す。底面は比較的凹凸が見られ、確認面からの深さは 48 cm を測り、2か所のピットが穿たれている。ピットは、北側が 38 cm×35 cm の不整楕円形で、底面からの深さは 27 cm、南側が 40 cm×28 cm の不整楕円形で、底面からの深さは 34 cm を測る。出土遺物はない。

16号址 (第51図)

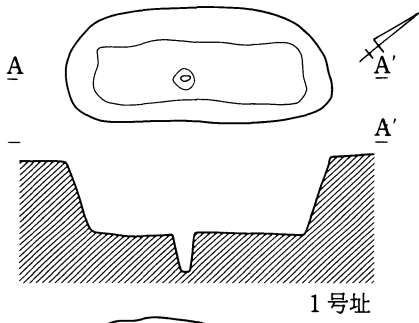
本址はC区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が径 120 cm、底部が径 110 cm の円形を呈する。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 35 cm を測る。出土遺物は、覆土上層から4点、覆土下層から1点の縄文式土器破片を検出した。

18号址 (第51図)

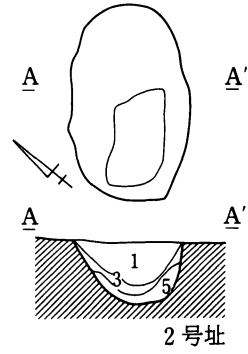
本址はC区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が 153 cm×113 cm、底部が 94 cm×55 cm の楕円形を呈する。長軸方向はN-2°-Eを指す。底面はほぼ平坦であるが北側でより深く、確認面からの深さは 65 cm を測り、57 cm×30 cm の楕円形で底面からの深さ 25 cm のピットが穿たれている。出土遺物は、覆土上層から1点の縄文式土器破片を検出した。

19号址 (第52図)

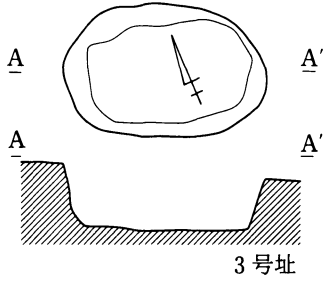
本址はC区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が 210 cm×145 cm の楕円形、底部が 100 cm×45 cm の不整長方形を呈する。長軸方向はN-35°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 55 cm を測り、2か所にピットが穿たれている。ピットは、北側が径 25 cm の



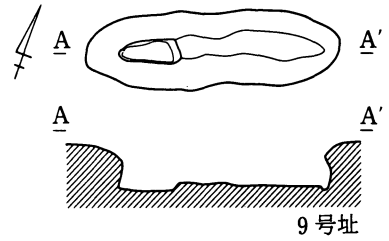
1号址



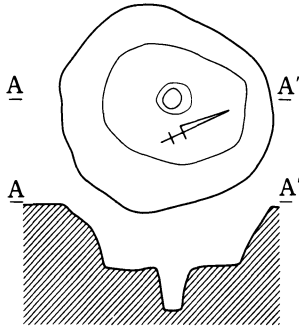
2号址



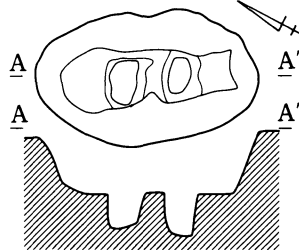
3号址



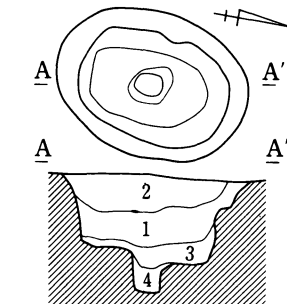
9号址



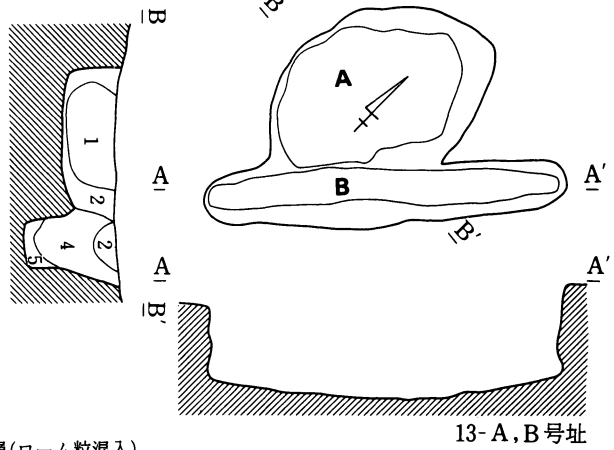
12号址



14号址

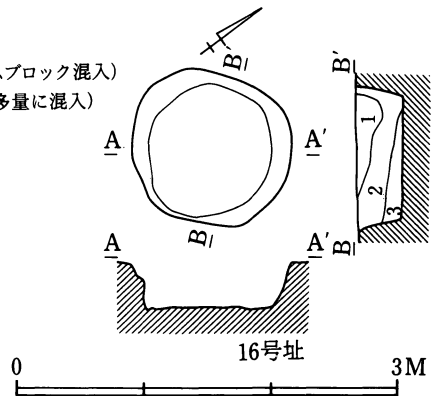


18号址



13-A, B号址

1. 黒褐色土層(ローム粒混入)
2. 暗褐色土層(ローム粒混入)
3. 褐色土層(ローム粒混入)
4. 黄褐色土層(ソフトローム, ロームブロック混入)
5. 黄褐色土層(ロームブロックを多量に混入)



16号址



第51図 1・2・3・9・12・13-A, B・14・16・18号址実測図

円形で底面からの深さは 25 cm、南側が 26 cm×20 cm の長方形で底面からの深さは 33 cm を測る。出土遺物はない。

20号址 (第52図)

本址はC区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が 193 cm×116 cm の隅丸長方形、底部が 145 cm×46 cm の長方形を呈する。長軸方向はN-30°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 53 cm を測り、2か所にピットが穿たれている。ピットは共に 42 cm×32 cm の長方形で底面からの深さが 35 cm を測る。出土遺物はない。

22号址 (第52図)

本址はC区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が 138 cm×111 cm の楕円形、底部が 104 cm×35 cm の長楕円形を呈する。長軸方向はほぼ北を向く。底面は凹凸が見られ、確認面からの深さは 155 cm を測る。出土遺物はない。

23号址 (第52図)

本址はC区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が 223 cm×103 cm の隅丸長方形、底部が 168 cm×45 cm の長方形を呈する。長軸方向はN-85°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 74 cm を測る。出土遺物は、覆土から検出した縄文式土器破片2点であった。

24-A号址 (第52図)

本址はC区に位置する土坑で、B号址の東側を切っている。平面形態は、開口部が 165 cm×100 cm、底部が 115 cm×65 cm の隅丸長方形を呈する。長軸方向はN-25°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 65 cm を測り、30 cm×16 cm の不整楕円形で底面からの深さ 20 cm のピットが穿たれている。出土遺物はない。

24-B号址 (第52図)

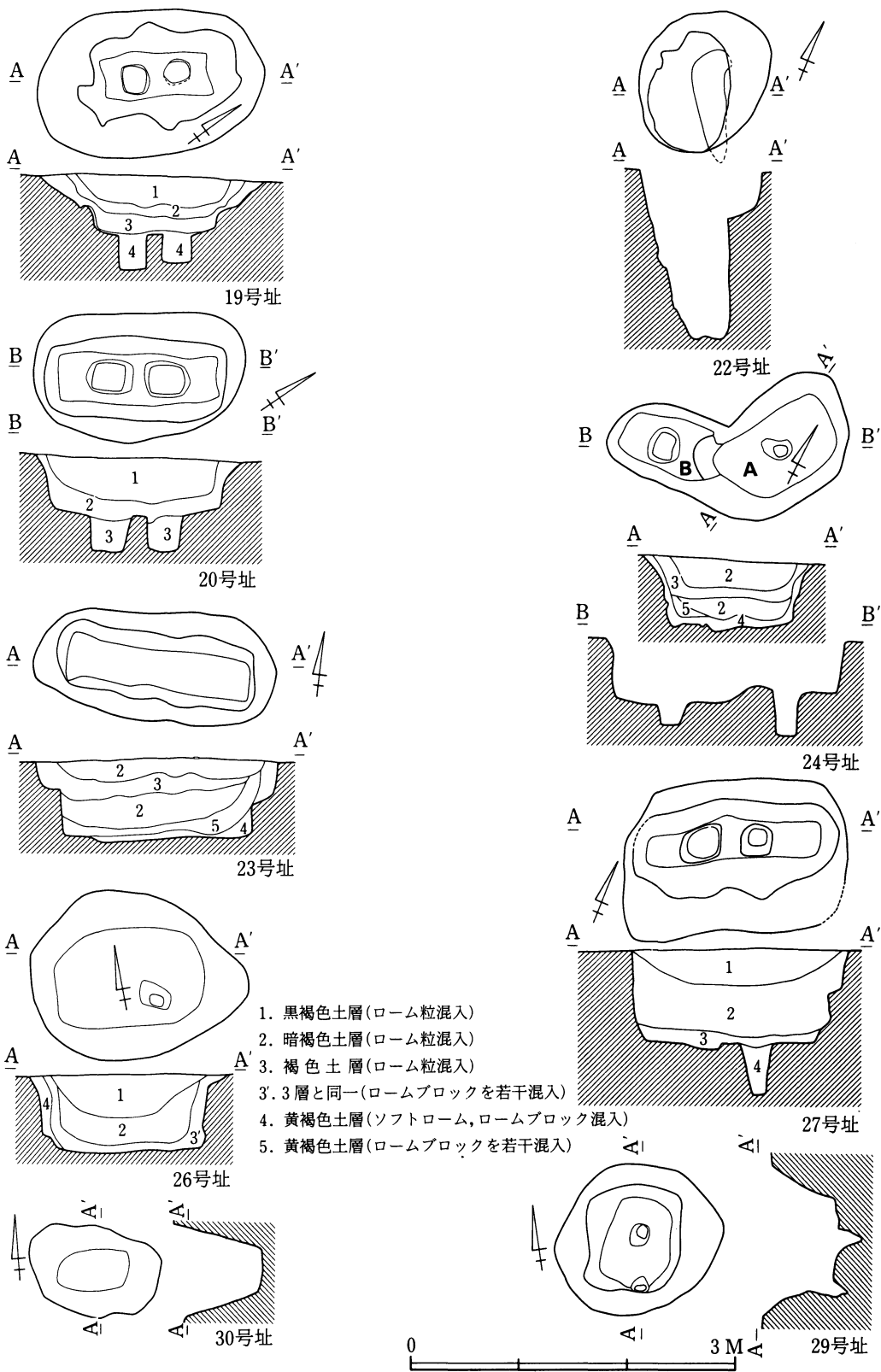
本址はC区に位置する土坑で、A号址に東側を切られている。平面形態は、開口部、底部とも隅丸長方形が推定される。長軸方向はN-80°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 46 cm を測り、34 cm×28 cm の不整楕円形で、底面からの深さ 40 cm のピットが穿たれている。出土遺物はない。

26号址 (第52図)

本址はC区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が 195 cm×156 cm の不整楕円形、底部が 135 cm×90 cm の隅丸長方形を呈する。長軸方向は東西方向を指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 70 cm を測り、30 cm×20 cm の長方形で底面からの深さ 30 cm のピットが穿たれている。出土遺物はない。

27号址 (第52図)

本址はC区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が 205 cm×135 cm、底部が 160 cm×40 cm の長方形を呈する。長軸方向はN-63°-Eを指す。底面は、中央が陸橋状に 5 cm 高く、



第52図 19・20・22・23・24-A, B・26・27・29・30号址実測図

東寄りに一辺 28 cm の隅丸長方形で底面からの深さ 45 cm のピットが穿たれている。出土遺物は、覆土 1 層から縄文式土器破片を 1 点検出した。

29号址 (第52図)

本址はC区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が径 140 cm の不整形円形、底部が 82 cm×62 cm の胴張り隅丸長方形を呈する。底面の長軸方向はN-17°-Eを指す。底面はやや凹凸が見られ、確認面からの深さは 65 cm を測り、中央と南壁際に 2 か所のピットが穿たれている。ピットは、中央が径 20 cm の円形で底面からの深さ 27 cm、壁際に径 15 cm の円形で底面からの深さが 17 cm を測る。出土遺物はない。

30号址 (第52図)

本址はC区に位置する土坑であり、上面には植物根の攪乱が認められる。残存部の平面形態は、120 cm×80 cm、底部は 65 cm×37 cm の不整形楕円形を呈する。底面の長軸方向はほぼ東西を指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 65 cm を測る。出土遺物は、覆土中から 3 点の縄文式土器破片が検出されている。

31号址 (第53図)

本址はC区に位置する土坑で、上面に攪乱を受けている。残存部の平面形態は、開口部が 185 cm×135 cm、底部が 148 cm×82 cm の不整形楕円形を呈する。長軸方向はN-27°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 28 cm を測り、57 cm×40 cm の不整形楕円形で底面からの深さ 15 cm のピットが穿たれている。出土遺物は、覆土中から 3 点の縄文式土器破片を検出した。

32号址 (第53図)

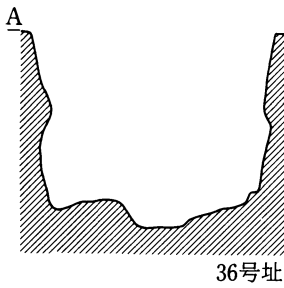
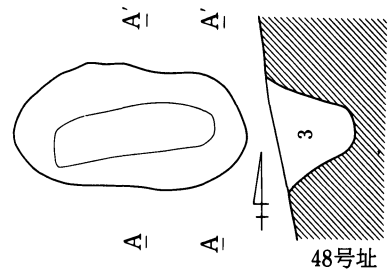
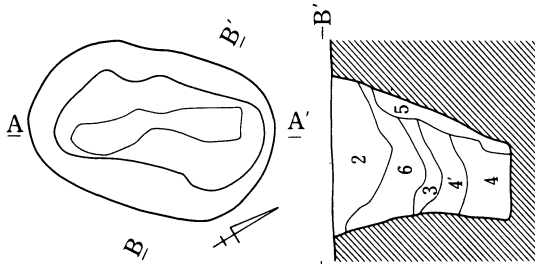
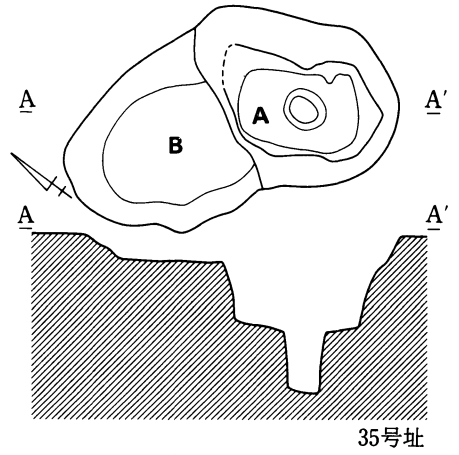
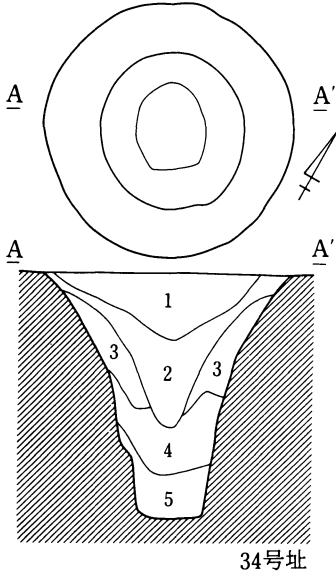
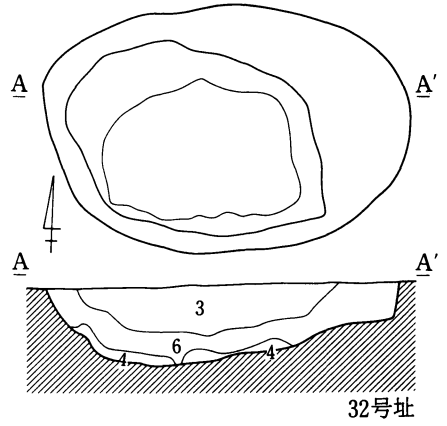
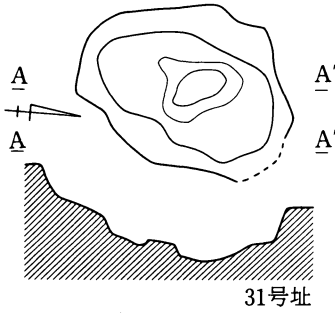
本址はC区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が 282 cm×195 cm の楕円形、底部が 150 cm×118 cm の不整形楕円形を呈する。底面はやや凹凸があり、確認面からの深さは 75 cm を測る。出土遺物はない。

34号址 (第53図)

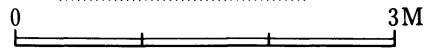
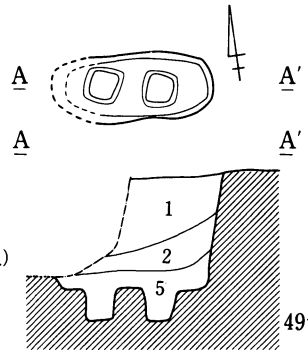
本址はC区に位置する土坑である。平面形態は、開口部が径 198 cm の円形、底部が 67 cm×55 cm の楕円形を呈する。底部の長軸方向はN-4°-Wを指し、北向きに近い。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 190 cm を測る。出土遺物は、覆土中から黒曜石製の剥片が 2 点出土した。

35-A号址 (第53図)

本址はC区に位置する土坑で、北側でB号址を切っている。平面形態は、開口部が 170 cm×126 cm、底部が 95 cm×60 cm の隅丸長方形を呈する。長軸方向はN-20°-Wを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは 75 cm を測り、径 34 cm の円形で底面からの深さが 46 cm のピットが穿たれている。出土遺物はない。



1. 黒褐色土層(ローム粒混入)
2. 暗褐色土層(ソフトローム混入)
3. 暗褐色土層(ローム粒混入)
4. 黄褐色土層(ソフトローム, ロームブロック混入)
- 4'. 4層と同一(若干の粘土ブロック混入)
5. 黄褐色土層(ロームブロックを多量に混入)
6. 褐色土層(ローム粒混入)



第53図 31・32・34・35-A, B・36・48・49号址実測図

35-B号址 (第53図)

本址はC区に位置する土塚で、西南部分がA号址に切られている。平面形態は開口部、底部とも楕円形が推定される。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは22 cmを測る。出土遺物は、底面直上から1点、覆土中から1点の縄文式土器破片を検出した。

36号址 (第53図)

本址はC区に位置する土塚である。平面形態は、開口部が192 cm×126 cmの楕円形、底部が134 cm×26 cmの不整長方形を呈する。長軸方向はN-45°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは142 cmを測る。出土遺物はない。

48号址 (第53図)

本址はC区の最も南側に位置する土塚である。平面形態は、開口部が185 cm×93 cm、底部が128 cm×37 cmの楕円形を呈する。長軸方向はほぼ東西を指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは63 cmを測る。出土遺物はない。

49号址 (第53図)

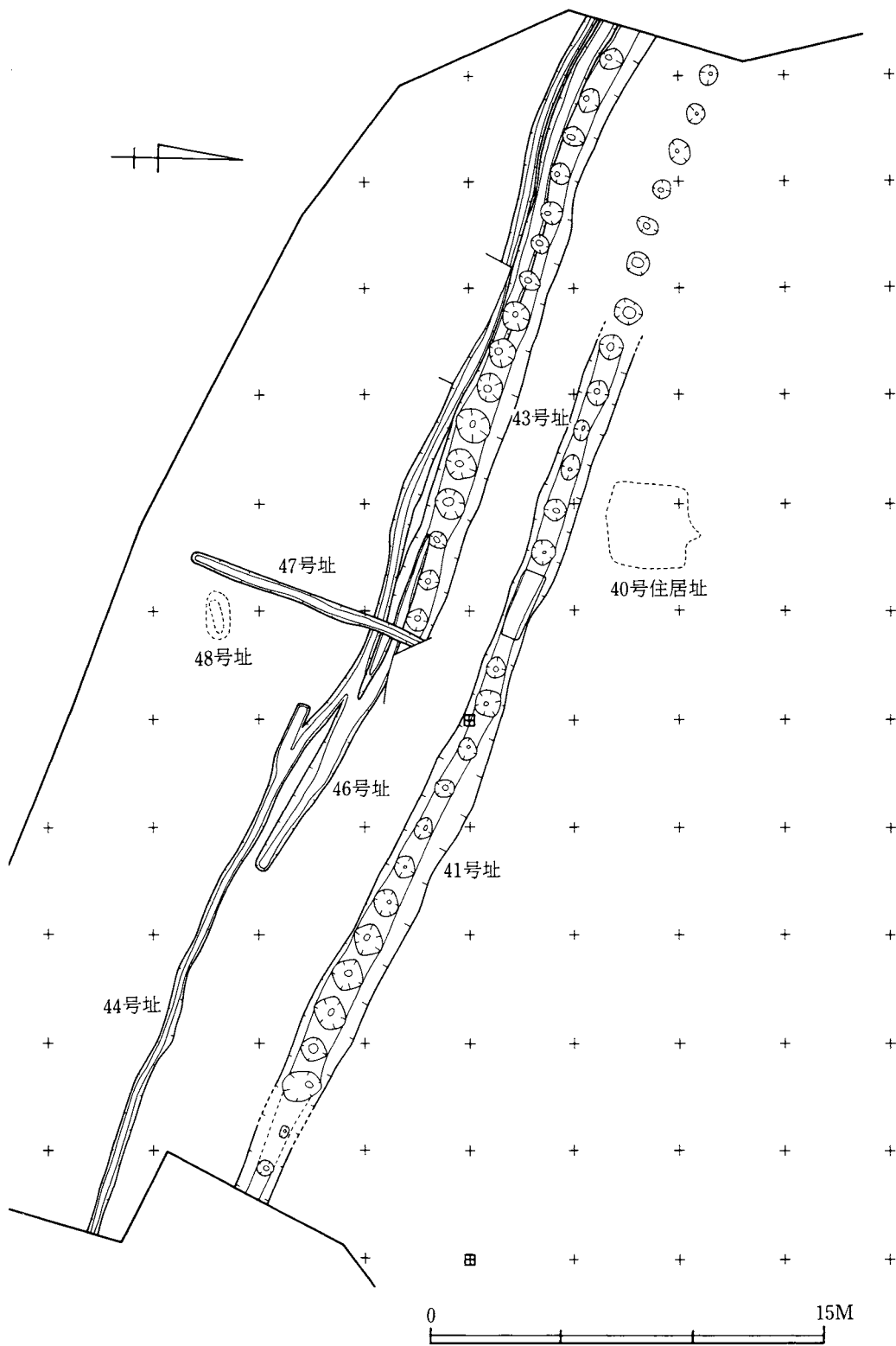
本址はC区に位置する土塚で、52号住居址のカマドに西側を切られている。平面形態は、開口部が130 cm×50 cm、底部が105 cm×45 cmの楕円形を呈する。長軸方向はほぼ東西を指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さ95 cmを測り、2か所のピットが穿たれている。ピットは、西側が30 cm×28 cmの隅丸方形で底面からの深さ24 cm、東側が28 cm×28 cmの隅丸方形で、底面からの深さ23 cmを測る。出土遺物はない。

以上が土塚に関する説明であるが、これらはそのほとんどが時期不詳であるため、ここで一括して述べることにした。また、中にはいわゆる縄文期の落とし穴とも言われる土塚も含まれていることを付記しておく。

3. 溝状遺構

41号址 (第54図, 図版12)

本址はC区の南側に検出した溝状遺構群の内、最も北側に位置する。本址の南側である調査区域外は、本遺跡が立地する台地の南西斜面に当り、急な勾配を持つ。溝としての形態が明らかなのは33-17G以東である。溝底にほぼ等間隔に穿たれたピット群は、覆土が溝の埋土と同じで、本址に伴うものである。そのため33-16G以西のピット群を含めて扱えられる。また、33-24・25Gでは攪乱を受け、46-10G(本址検出面東端)では、ピットが極端に小さい他はほぼ同様な状況を呈している。溝は、幅が上端140~200 cm、下端64 cmを測り、確認面からの深さは64~125 cmを測る。ピットは検出総数27か所を数え、規模は上端が36~140 cm、下端が10 cm内外、溝底面からの深さが20~38 cmを測る。ピットの平面形態は、円形6か所、楕円形8か所、隅丸方形13か所に分けられる。このピット列の形態は43号址のものと類似しており、しかも溝の規模も同様なところから2溝一組の柵列とも考えられた。



第54图 41・43・44・46・47号址实测图

43号址 (第54図, 図版12)

本址はC区の南側, 41号址の約2.2m南にほぼ平行して横走するが, 45-5 G以東は消滅しており, 既に削平された可能性がある。また, 南側壁には46号址が重複関係にあり, 本址は46号址に切られている。溝は, 幅が上端で200 cm, 下端で140 cm, 確認面からの深さは60 cmを測る。ピットは検出総数16か所を数え, 規模は上端が60~110 cm, 下端が30 cm, 溝底面からの深さは25~35 cmを測る。

44号址 (第54図, 図版12)

本址はC区の南側, 41号址の約4.6m南にほぼ平行して横走し, 45-5 Gに端を発して, 46-20 G以東は調査区域外へ続いていく。溝は, 幅が上端で40~60 cm, 下端20~30 cm, 確認面からの深さは15 cmを測る。

46号址 (第54図, 図版12)

本址はC区の南側, 43号址検出面東端から調査区南端に亘って検出した。45-5 Gの本址北端部分は北東方向の攪乱坑に切られている。溝は, 幅が上端80~100 cm, 下端40~70 cm, 確認面からの深さは4~7 cmを測る。

47号址 (第54図, 図版12)

本址はC区の南端45-9, 10, 14Gにわたる溝で, 43・44・46号址と直交している。また, 南から入る小支谷に向って走り, 45-14Gに至って消失している。現存長は約9.5mである。幅は上端で40~60 cm, 下端で20 cmほどあり, 確認面からの深さは最も遺存のよい北側で33 cmを測り, 南下するにつれて浅くなっている。

第6節 小 結

前述したごとくバクチ穴遺跡は, 先土器時代から歴史時代に至るまで長期間にわたり人間生活の場として利用されてきた。しかし, 遺跡全体を調査したわけではないためその全貌を把握するまでには至っていない。そのため遺構・遺物の整理課程で二・三の興味深い事実が提供されているものの考察を加えるためには時期尚早と言えなくもない。そこで, ここでは中でも良好な資料が得られた先土器時代の石器群を取り上げて結びとしたい。

石器と石材 本遺跡で使用されている石材は, 黒曜石, メノウ, 頁岩, チャート, 砂岩となり比較的単純な構成となっている。そして目的とする成品によって石材を使いわけてもいたらしい。とくにG, Hユニットにおいてナイフ形石器にはメノウを使用し, スクレイパー類には黒曜石, 頁岩を使用していた事実がある。これは反面気泡の多い劣悪な黒曜石を敬遠したのかもしれない。

ではG, Hユニットでの使用石材を数量で比較すると以下ようになる。

総数558点 (黒曜石312点, メノウ123点, 頁岩81点, チャート35点, 砂岩7点)

Gユニット 総数207点 (黒曜石95点, メノウ50点, 頁岩50点, チャート10点, 砂岩2点)

Hユニット 総数351点（黒曜石217点，メノウ73点，頁岩31点，チャート25点，砂岩5点）

さて，ここで器種について見ると，Gユニットではスクレイパー類しか出土せず，Hユニットではナイフ形石器，尖頭状石器，スクレイパー，ドリル，敲石と変化に富む構成を示す。中でもナイフ形石器は他器種よりも多く，ユニットの性格をよく表わすものとなろう。さしずめ東京都野川遺跡における前者がAタイプ，後者がBタイプのユニットとなろう。

石器の製作 次にもっとも興味ある事実を提供した石器製作についても触れておきたい。まず第1に，第8図27，30例に示すように石器と剝片の接合例がある。この事実はGユニットで明確にスクレイパーが製作されていたことを示すとともに，大形剝片については意識的に分割し，その後石器に加工する。この意識的な折断は県内でも若干類例が認められており，埼玉県砂川遺跡^{**}での類例とは少し異なろう。これらの事例を参考にすれば，おおよその時期は把握できよう。

次に石核と剝片の接合例も取り上げて見ると，第12図に示した資料がもっとも多量に剝片が接合した例であり，これらの中にはチャート製の唯一の石器（第6図4）が含まれてもいる。第12図62に示した図は外縁部の接合状態であり，そのほとんどはGユニットから検出されている。にもかかわらず，良好な石質に変化する同図63の接合例はすべてHユニットにおいて検出された剝片であり，このことは明らかに石核の移動と言う貴重な事実を示す例となろう。つまり石器を製作し得る剝片を剝取する時点でG→Hへ移動され，ナイフ形石器が製作されている。この移動は故意によるものか，偶然なのかははっきりしないが，Hユニットでのナイフ形石器の卓越と言う事実が示唆的である。

* 小林・小田・羽鳥・鈴木（1971）「野川先土器時代遺跡の研究」第四紀研究10—4

** 戸沢充則（1968）「埼玉県砂川遺跡の石器文化」考古学集刊4—1

表1 バクチ穴遺跡検出遺構一覧表

遺番	構号	遺構名	時代	備考
1		土 塚	—	
2		土 塚	—	
3		土 塚	—	
4		住居址	縄文時代	炉址のみ
5		住居址	縄文時代	
6-A		住居址	歴史時代	
6-B		住居址	歴史時代	
7		住居址	歴史時代	柱穴のみ
8		住居址	縄文時代	炉址のみ
9		土 塚	—	
10		住居址	歴史時代	
11		住居址	弥生時代	
12		土 塚	—	
13-A		土 塚	—	
13-B		土 塚	—	
14		土 塚	—	
15		土 塚	縄文時代	
16		土 塚	—	
17		—	—	欠番
18		土 塚	—	
19		土 塚	—	
20		土 塚	—	
21		炉 穴	縄文時代	重複(A~C)
22		土 塚	—	
23		土 塚	—	
24-A		土 塚	—	
24-B		土 塚	—	
25		住居址	歴史時代	
26		土 塚	—	
27		土 址	—	
28		土 塚	縄文時代	
29		土 塚	—	

遺番	構号	遺構名	時代	備考
30		土 塚	—	
31		土 塚	—	
32		土 塚	—	
33		炉 穴	縄文時代	重複(A~E)
34		土 塚	—	
35-A		土 塚	—	
35-B		土 塚	—	
36		土 塚	—	
37		—	—	欠番
38		炉 穴	縄文時代	
39		土 塚	縄文時代	
40-A		住居址	歴史時代	
40-B		埋 甕	縄文時代	住居址の 可能性あり
41		溝	歴史時代	
42		—	—	欠番
43		溝	歴史時代	
44		溝	歴史時代	
45		炉 穴	縄文時代	重複(A~S)
46		溝	歴史時代	
47		溝	歴史時代	
48		土 塚	—	
49		土 塚	—	52号住居址と 重複
50		炉 穴	縄文時代	
51		土 塚	—	
52		住居址	歴史時代	
53		—	—	欠番
54		住居址	歴史時代	
55		炉 穴	縄文時代	
56		炉 穴	縄文時代	重複(A~C)
57		—	—	欠番
58		炉 穴	縄文時代	

第3章 有吉遺跡（第3次）

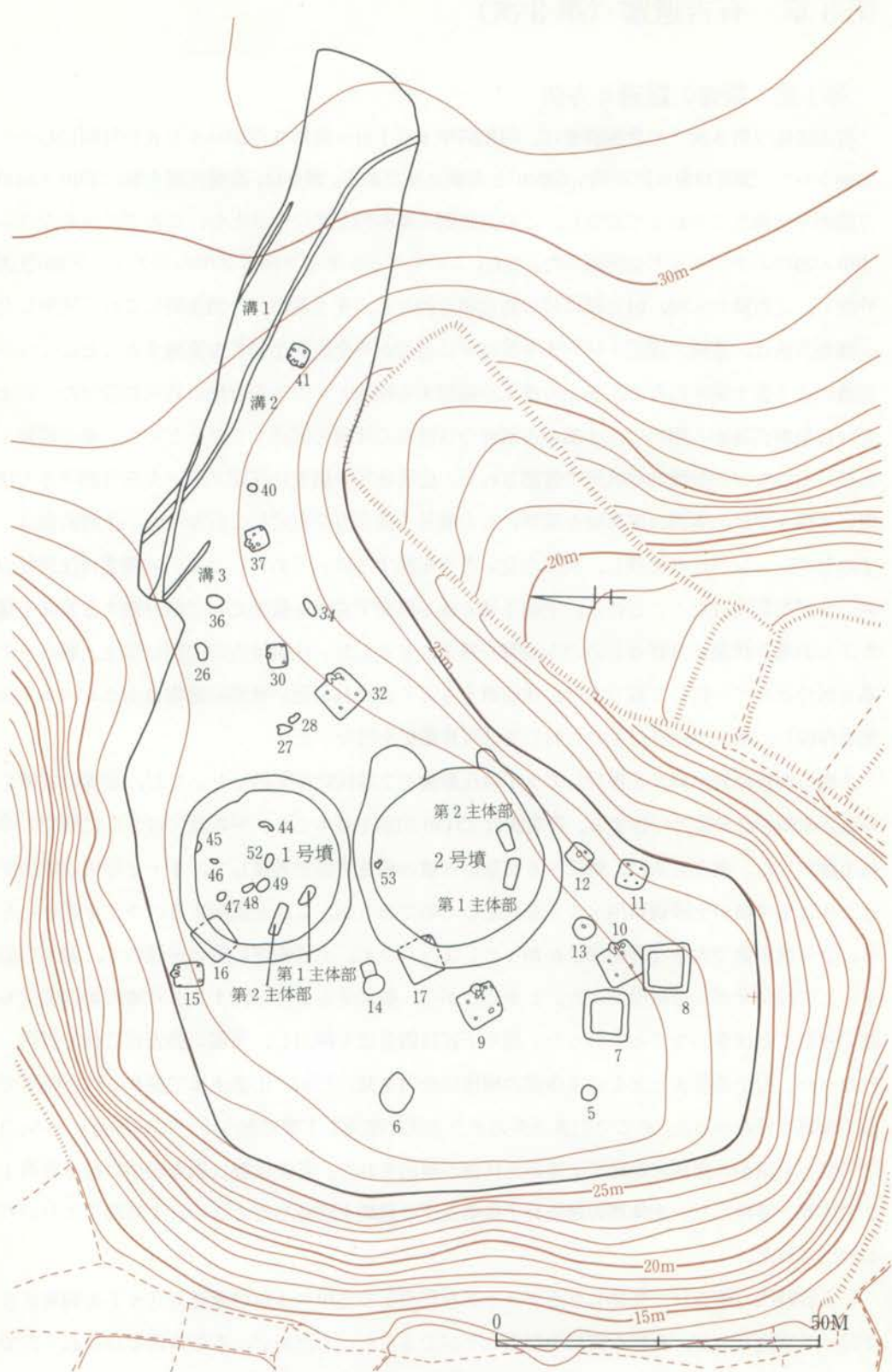
第1節 調査の経過と方法

有吉遺跡（第3次）の発掘調査は、昭和55年4月1日～同年9月30日まで6か月間にわたって実施された。調査対象は総面積5,000m²と古墳2基である。調査は、発掘区域全域に40m×40mの方眼網を座標北にあわせて設定し、この方眼網を基本的なグリッドとし、このグリッドをさらに20m×20mの中グリッドに区画した。また、この中グリッドを2m×2mの小グリッド100区画に分割し、北西隅から00、01と順に付し南東隅を99とし、先土器時代の調査時にこれを使用した。

調査方法は、遺構の確認トレンチを設けずに当初から全面表土剥ぎを実施することにしたが、重機による表土剥ぎのため、表土の厚さを確認する補助トレンチを台地の各所に設けた。表土剥ぎは台地南西端から開始し、2基の古墳部分は周堀の外端を確認するにとどめた。その結果、住居址、土壇などが散慢的な状況で確認された。住居址等の調査は確認プランを四分割する方法を用いて掘り下げ、実測は座標軸を基準にした簡易な遣り方を設定して行なった。土層断面は、十字のセクションベルトを残し、状況の良い方を記録するにとどめた。カマドの調査は住居址の実測、全景撮影後行なうことにし、主軸を通る線と直交する線を基準にして四分割する方法を採った。なお遺存状況の良好なもののみ袖等を残すこととした。住居址内の遺物は覆土上層のものは適宜区分けして一括して取り上げ、床面直上もしくはそれに近い状態の遺物は出土レベル・平面図を作成し、状況の良好なものに対しては写真撮影を行なった。

古墳の調査は表土剥ぎと併行してまず墳丘測量を2基同時に開始した。なお、北側の古墳を1号墳、南側を2号墳と呼称する。等高線は25cm間隔を基本とし、平坦面にはさらに補助の等高線を設定した。調査方法は、隣接する2基の古墳の相互関係を考慮して、1・2号墳の墳頂を通るように1m幅の土層観察用ベルトを設定したのであるが、これと直交するベルトを設けたところ、2号墳東側で大きな攪乱部にかかってしまったため、土層観察に重点を置いて、若干方位をずらして設定せざるを得なかった。しかしながら、後述するように、1・2号墳の新旧関係も確認できたことは幸いなことであった。掘り下げは四分法を採用し、周堀の調査はこれと併行して行なった。封土の除去とともに主体部の検出に全力を傾けたが、旧表土まで掘り下げた時点では全く確認されなかった。そこで旧表土外のテラス状の部分を丁寧に掘り下げていったところ、1・2号墳とも南から西側にかけて2基の主体部が検出された。各主体部は調査順序に従って第1・2主体部と呼称した。主体部の調査終了後墳丘下の遺構を確認したところ、1号墳下より炉穴群が検出された。

先土器時代の調査は、先述した小グリッドを利用して2m×4mの確認グリッドを調査区全域に設けて実施したが、良好な資料を得ることができなかつたために、本報告書ではこれを割愛した。9月30日に現地を撤収し、調査をすべて終了した。



第55図 有吉遺跡(3次)全体図

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1. 炉 穴

27号址 (第56図, 図版22)

本址は1号墳東側7m程に位置し、28号址とともに一つの群を形成する。最大長2.3m, 最大幅1.6mを測り、2基(A・B)が重複する。A・Bの新旧関係は断面図では明確ではないが、A址の埋没後にその足場を拡張しさらに北側にB址を設けたものと思われる。足場にみられる焼土はBの火床からかき出されたものであろう。本址の掘り込みはAが5cm, Bが15cmで、焼土の堆積もBの方がやや厚い。遺物は土器片1片のみの出土である。

28号址 (第56図)

本址は27号址の東側に隣接して構築される。長軸2.2m, 短軸1.1mを測り、不整楕円形を呈す。北側に火床、南側に足場を設ける。断面図で観察する限りでは焼土の堆積が不自然であり、あるいは3層上面を底面とすべきものかもしれない。そうすると火床の掘り込みは10cm程となる。遺物はまったく検出されなかった。

44号址 (第56図, 図版22)

本址は1号墳墳丘下に検出された炉穴群の東端に位置する。南北長1.8m, 東西長1.4mを測り、2基の炉穴(A・B)が重複する。北側の炉穴Aが埋没した後にAの足場を利用してさらに西側に新しい火床Bを形成したものである。Aの火床は2段に掘り込まれ、足場からの深さは25cmを測る。焼土は火床全面に広がり、20cm程の厚さで堆積し、かなり使用されたことが推測される。これに対してBの火床は掘り込みも浅く、焼土の堆積も5cm程にすぎない。遺物はまったく検出されなかった。

45号址 (第56図, 図版22)

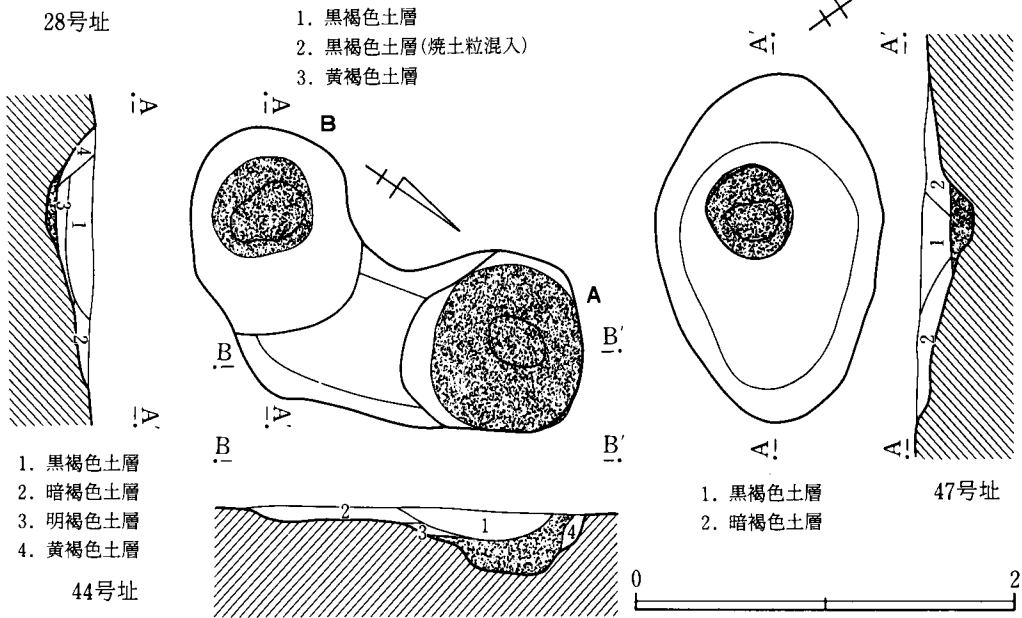
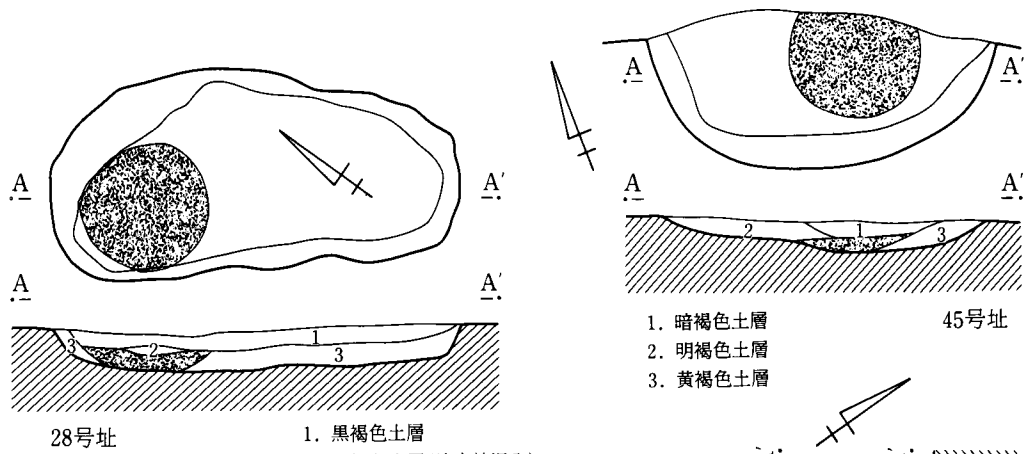
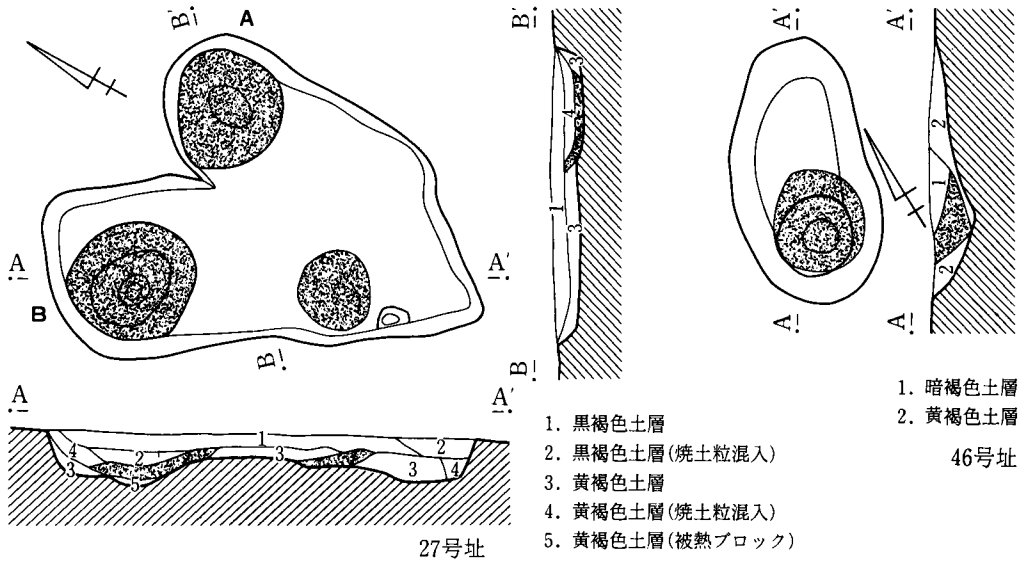
本址は1号墳墳丘下の北端に位置し、北側を周堀により切られる。長軸長1.8mを測り、北側が切られるもののほぼ楕円形のプランを呈するものと思われる。西側に足場を置き、火床は皿状に5cm程掘り込まれる。焼土の堆積は火床の足場側にレンズ状に認められ、厚さ8cm程と比較的少量である。遺物はまったく検出されなかった。

46号址 (第56図)

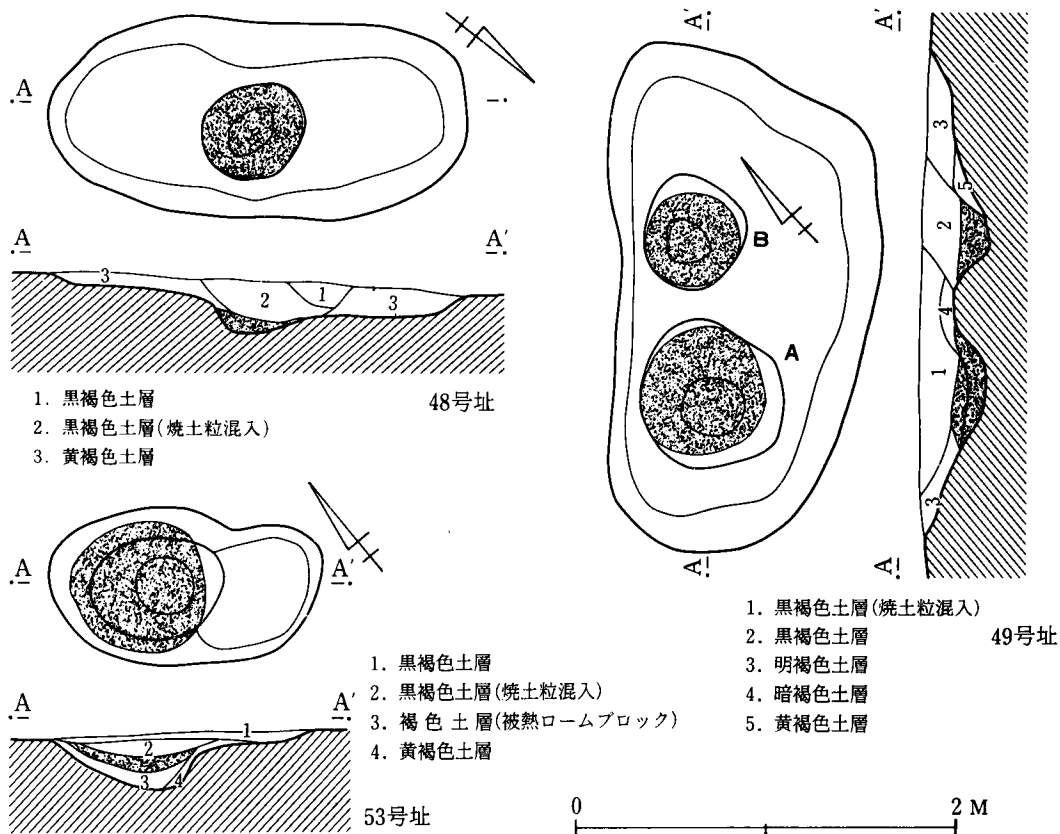
本址は45号址の南側2mに位置する。長軸1.4m, 短軸0.8mを測るきわめて小規模の楕円形プランを呈す。足場を北側、火床を南側に有し、火床の掘り込みはなだらかである。焼土は火床内に厚さ15cm程で比較的多量に堆積する。遺物はまったく検出されなかった。

47号址 (第56図, 図版23)

本址は1号墳墳丘下炉穴群の北西端に位置する。長軸1.8m, 短軸1.2mの略楕円形プランを呈す。足場を東側、火床を西側に置き、火床は15cm程の深さで掘り込まれる。焼土は火床内全体に厚さ13cm程で堆積する。遺物はまったく検出されなかった。



第56図 27・28・44・45・46・47号址実測図



第57図 48・49・53号址実測図

48号址 (第57図, 図版23)

本址は47号址の南3m程に位置する。長軸2.2m, 短軸1.0mを測る楕円形プランを呈す。火床は中央部に設けられており, 特異な構造を示している。これは, 当初足場を北側に火床を南端に置いたものと, 足場のみ何らかの理由で南側に拡張した結果であろうと思われる。火床の掘り込みは10cm程で内部に焼土が充満する。遺物はまったく検出されなかった。

49号址 (第57図, 図版23)

本址は48号址の南側1.5mに位置する。長軸2.6m, 短軸1.4mを測り, 不整な楕円形プランを呈す。火床は2か所(A・B)検出された。Aの方がやや規模は大きいものの深さはいずれも15cm程を測る。焼土はA・Bとも火床内に充満する。A・Bの新旧関係は断面観察では判明しないが, 位置からみてA→Bという順序が想定できそうである。遺物は覆土中に土器片を若干出土したのみである。

53号址 (第57図, 図版24)

本址は2号墳墳丘下北端の周堀と接する位置に構築される。長軸長1.4m, 短軸長0.8mを測り,

略楕円形プランを呈す。火床を西側，足場を東側に置き，火床の幅が足場よりやや大きくなる。火床は足場より 20 cm 深く掘り込まれ，焼土は底面から 10 cm 程浮いて内部全体に堆積する。遺物はまったく検出されなかった。

2. グリッド出土遺物 (第58～70図)

今回の調査では，先述した11基の炉穴以外からも数多くの縄文式土器が出土した。これらは，縄文時代前期後半の土器が主体をなすが，器形を知りうるものは少ない。以下5群に分類して説明する。

第I群 縄文時代早期の土器

第II群 縄文時代前期の土器で胎土に植物繊維を混入するもの

第III群 縄文時代前期後半の土器

第IV群 縄文時代中期の土器

第V群 縄文時代後期の土器

第I群土器 (1～21)

1類 (1～9)

縄文時代早期撚糸文系の土器である。口唇部の形態・施文の手法によってさらに細分される。

a種 1～6 砲弾形を呈するものと思われ，口唇部は外方へ著しく肥厚する。口唇部には羽状に縄文を施し，胴部は口縁下数 cm を横走，その下位を縦走する縄文で覆う。全体に黒褐色ないし暗褐色を呈し，胎土には砂粒を多く含み，焼成は比較的良好である。原体は1・2・4が右撚り，3・5・6が左撚りである。特に2は横走する縄文が他と比べて著しく細く，また下位の縦方向施文とも太さが異なっている。

b種 7 口唇部は突出するように外方に屈折し，内面頂部に縄文原体を押圧する。外面は斜走する撚糸文を施している。器厚は比較的薄手で5～6 mm を測る。胎土は砂粒を多く含むが焼成は良好である。

c種 8・9 口唇部は僅かに肥厚するのみで，器面は原体L $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right.$ の縄文で覆う。胎土・焼成は7までと変わらない。8は胴部破片で，口縁部形態が不明のためその属性は不明であるが，原体L $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right.$ を縦位に施文する。

2類 (10)

縄文時代早期沈線文系の土器で，1点のみの出土である。横走する沈線帯と斜走する沈線帯とが交互に配され，沈線の間隔は密である。胎土には石英粒をやや多く含み，焼成は比較的良好である。

3類 (11～21)

縄文時代早期条痕文系土器である。いずれも胎土に植物繊維を混入し，内外面とも条痕を施すことを基本とする。色調は褐色ないし黒褐色を呈し，焼成も概して良くない。これらの土器は，

施文法・口縁部形態によりさらに類別が可能である。

a種 11 内外面とも横走する条痕を施すが、条痕は以下に述べるものとは異質で、極めて細く、幅 1.0～1.5 mm ほどである。口唇部は内側から削ぎ先端は尖る。胎土は砂粒を多く含み、植物繊維の混入はあまり多くない。補修孔を有するが、両側からの孔がくいちがい貫通にいたっていない。

b種 12 内外面とも斜走する条痕が観察されるが、外面はその上に沈線を施す。沈線は 6 mm 前後の太い沈線を骨格とし極めて細かい沈線で器面を埋めるようである。口唇部の整形は雑で斜位に刻む。胎土は粗く繊維の混入はあまり多くない。

c種 13～21 内外面とも条痕だけのものである。器面は縦走ないし斜走する条痕に覆われ、口唇部整形は全体に雑である。13は外面縦走・内面斜交する条痕が残され、口唇部は雑であるが斜位に刻む。また、口縁下に焼成前に穿った孔を有する。14・15は内外面とも、縦・斜走する条痕で覆い、口唇部にまで条痕を有する。16は内外面ともおおむね斜走する条痕で覆れ、口縁は薄く仕上がり、かるく外反する。17～19は、内外面とも口縁部付近を横に、以下を斜位ないし縦位に条痕を施すもので、口唇部は他と同様雑な整形である。このうち19は口縁部内面だけに横方向の擦痕が認められ、器面の荒れも少ない。20は外面に縦走する条痕が認められるが内面は擦痕である。また21は内外面とも擦痕であり、口唇部を刺突する。

第II群土器 (22～26)

本群は胎土に植物繊維を混入するものを一括した。いずれも胎土は粗く、植物繊維の混入も多い。また、風化して器面の荒れも著しい。

1類 (22～25)

1類としたのは器面を縄文で覆うものである。22は原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の斜縄文を施し、口縁は平縁で先端が尖っている。23・24はともに原体L $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の大粒であらい縄文を施し、植物繊維の混入も特に多い。25はR $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ とL $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の2本の原体を使用して羽状縄文を作る。砂粒を多く含み焼成も不良である。

2類 (26)

同じく胎土に植物繊維を混入するが、半截竹管による有節沈線を施すものである。有節沈線は口縁にそってめぐらし、同様に頂部を押圧様に刻む隆帯もめぐらしている。

第III群土器 (27～277)

本群は縄文時代前期後半の土器を一括した。施文工具には半截竹管を多用し、バラエティに富む文様を表出している。胎土には植物繊維の混入はみられない。

1類 (27～48)

半截竹管を施文具として文様を表出するもので、所謂「木の葉状文」「肋骨文」等の幾何学的文様が主体をなす。以下モチーフにより細分した。

a種 27~31, 41・42 口縁に向けてかるく外反する器形を呈するもので、端部は平坦で、僅かに外方へ突出する。施文は、細く浅い沈線を波状に数条めぐらし、同一原体による刺突を連続させ垂下させている。色調は褐色ないし灰褐色を呈し、胎土には細砂粒を多く含む。また41・42も同一のモチーフを有するが、沈線は太く深いもので、胎土に含まれる砂粒も粗く、色調も暗褐色を呈するなどやや異質の感がある。

b種 32~35 所謂「木の葉状文」と称されるもので、平行沈線を弧状に配している。いずれも有節沈線を伴い、その構成は34~39に共通する。また34・35は直線的な平行沈線を施すが、やはり同じグループに入るものである。

c種 36~39, 45 半截竹管による平行沈線を鋸歯状に配するものである。36は鋸歯状文を上下に配して個々は菱形をなす。37~39は鋸歯状文がそろい、上下をともにする。また36~38は上下に有節沈線を施し、鋸歯状文の下には調整によって作り出した低い隆帯をめぐらし、その端部を斜沈線で刻む。39は36~38とはやや異なり、鋸歯状文下には半截竹管を刺突する。45も同じ範疇に含まれるかもしれない。

d種 40 平行沈線・押し引き沈線・ヘラ状工具による刺突文をめぐらし、その下部には無雑作にヘラ状工具を刺突している。

e種 43・44 半截竹管による平行沈線と竹管刺突文を組み合わせるものである。いずれも波状口縁を呈し、口縁下 2.0~2.5 cm で小さく稜をなす。

f種 46~48 あまり深くない鉢形土器であり、同一個体と思われる。口縁は直線的に開き胴部でゆるく屈折する。胴下半は原体L $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の斜縄文を施し、上半は口縁直下と屈折部に細かく半截竹管を刺突している。

2類(49~51, 53~111)

本類は細い粘土紐を貼付した所謂浮線文を施す土器である。この一群の土器は、浮線文自体の特徴からさらに4種に細分した。

a種 49~51, 53~66 浮線文は無文のもので、地文には多く縄文が施される。色調は全体に褐色を呈するものが多く、胎土もやや粗いのが普通である。49, 53~56は単一方向に横走する浮線で構成され、このうち49・53・54は地文に原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の斜縄文を施す。器形は、胴部に最大径を有し扁平なものであろう。胴下半は横方向に磨いているようであるが、器面の荒れが著しい。また内面は、ヘラ状工具で削った後に雑に磨いている。55は口唇部及び浮線頂部を斜位に刻むが、浮線は幅広で単に横走するのみであり本類に含めた。56も地文にR $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の斜縄文を施す。50・51, 57~59も無文の浮線を施すグループであるが、直線に加えて複雑な文様を構成する。地文には縄文を施し、浮線をはしご状に配する。50・57は原体L $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の斜縄文を施し、50にみられるように口縁は波状を呈する。また、はしご状の浮線は横方向を基調としているが、口縁波頂部には縦位にも配し上下を連結している。58は器面の荒れが著しく不鮮明ではあるが、地文はR $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$, L $\left\{ \right.$

$\frac{R}{R}$ の羽状縄文のようである。また本類は51の如き獸形把手を伴うことが知られる。60～65は曲線的に浮線文を配する。60～62・64・65は口唇部を縦ないし斜めに刻む。62・64は波状口縁を呈し、特に62は突起状で、その部分も縦に刻んでいる。62・63は原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の斜縄文を施し、64は竹管を刺突している。

b種 67～77 曲線的に浮線を配し、浮線上に縄文を施すものである。67・68・70・71は口唇部を斜めに刻み、また74は縦に押圧様に刻む。さらに75は口唇部にも浮線を鎖状に配している。地文に縄文が観察されるのは67・68・71・76・77でいずれも原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ である。

c種 78～104 浮線文頂部を斜めに刻むものである。全体に色調は褐色ないし暗褐色を呈し、胎土粗く焼成もさほど良くない。浮線文の構成は、口縁上部を横に、以下曲線的に配し、渦巻状を呈することも少なくない。78～82は口縁が大きく内彎するもので、口縁上端には特殊な文様を、その下位は格子目状に浮線を貼付する。81は波状口縁を呈し、波頂部に孔を有する。85・86は突起状の把手を有するもので、把手は粘土紐を巻き上げただけのものを付着させている。地文はともに原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の斜縄文を施す。87の浮線は著しく太く、器面には棒状工具を刺突している。88・89は75同様口縁頂部に浮線を鎖状に配し、地文は原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の斜縄文を施している。88の口縁には小突起が存する。90～94は浮線の構成は変わらないものの、焼成は本類の中では最も良い一群である。90～92は原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の斜縄文を、93・94・98は原体L $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の斜縄文をそれぞれ施す。96は竹管による円形刺突文を伴う。97・99～104は浮線を単一方向へ施すものである。しかし、これらはいずれも胴部破片であり、口縁部には曲線的な浮線も施されているものと思われる。地文には縄文を施すことが普通で、原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ を基本とするが、97・99・103はS字状結節文を伴い、さらに99はR $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の附加条である。浮線頂部は斜めに刻み、浮線ごとに刻む向きを変えたり、X字状に刻んでいる。

d種 105～111 その他のものを一括した。106は著しく外傾した口縁の内側に加飾のない浮線を施すものである。口唇は尖り、口縁内面に大きな稜を有している。105・109・110は口縁が内彎する浅鉢形を呈するもので、口縁部には浮線に囲まれた孔文を1列めぐらしている。孔は外側から一気に穿たれている。111も同様な器形を呈するものである。107・108は器形が異なるものの、同様に小孔を穿っている。

3類 (52・112～189)

本類は半截竹管による平行沈線文を主体とするもので、無地のものa種、縄文を有するものb種、撚糸文を有するものc種に細分される。

a種 112～149 無文地に半截竹管による平行沈線を施すものである。平行沈線は細く、直線と曲線の組み合わせを基本としている。色調は全体に黒褐色ないし暗褐色を呈し、胎土も粗いものが多い。112～114はやや密に沈線を施すもので、口縁部に数条を横走させ、その下位は斜走させている。斜行沈線の末端は112・113に見るように、同一工具を刺突し、U字状を呈することもあ

り、また113のようにヘラ状工具を行間に刺突することもある。115～119はいくぶん間隔をあけて沈線を施す。119は押し引き沈線である。120～137は単一方向の沈線が観察される。全体に細砂粒が目立ち、焼成も良くない。124・125は口唇部整形のためにのせた最終段階の粘土紐接合痕を明瞭に残している。126・132は119同様押し引き沈線である。142～144は口縁にそって沈線を施すもので沈線はやや太めである。胴部には縦ないし斜めに沈線を施し、142は同一工具を刺突している。146・147も刺突を伴い、146はヘラ状工具を、147は沈線と同一工具を沈線末端部に113・114とは逆向きに刺突している。

b種 52, 150～159 半載竹管による平行沈線を主体とするが、地文に縄文を施すグループで、量的には少ない。色調は褐色ないし暗褐色を呈し、胎土は粗く焼成も概して不良である。150は原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の斜縄文を施し、口縁部に2条の押し引き沈線をめぐらす。151は、原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ を縦にころがしている。152～154は曲線的な沈線が施され、縄文原体は同じくR $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ である。155は、原体L $\left\{ \frac{F}{F} \right\}$ で、その上に波状に沈線を施す。52, 156～159は、沈線を直線のおよび連弧状に配している。156～158は、原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の斜縄文を施し、154はヘラ状工具で刺突する。外面は、いずれも褐色ないし暗褐色を呈するが、内面は赤褐色で、丁寧な調整をしている。52は最大径27.0 cm、現存高25.0 cmを測り、やや胴部が膨む深鉢形を呈する。口縁端部は欠失するが、口縁部だけに沈線を施し、胴部は原体L $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の縄文で覆う。

c種 160～189 撚糸文を地文に有し、その上に半載竹管による平行沈線を施すものである。沈線は連弧状に配されるものが主体を占め、その構成は撚糸文が施されることを除けば、a・b種とあまり変ることはない。色調は、褐色ないし暗褐色を呈し、胎土は若干粗いものの焼成は全体にそれほど悪くないグループである。160・161は撚糸文上に直線あるいは曲線的に半載竹管を押し引きしている。また、161は同一工具を刺突している。162～164は沈線により幾何学的文様を表出し、円形刺突文を伴う。165は直線的に、166は眼鏡状に沈線を配する。167～182は平行沈線を連弧状に施すもので、本類では一番多いモチーフである。撚糸文はあまりまばらなものは少なく、比較的密に施すことが多い。内面はいずれも平滑で入念に磨くものもある。183は爪形文を施す。184～187はややまばらな撚糸文である。このうち187～189は沈線も太く、施文は雑である。

4類 (190～267)

本類は半載竹管による所謂爪形文を施すものである。以下2種に細分した。

a種 190～225 所謂爪形文で、半載竹管の刺突あるいは押し引きによって表出される。色調は全体に黒褐色ないし暗褐色を呈し、胎土も粗いものが多い。190～202は比較的細い爪形文である。このうち190～192は単一方向に爪形文をめぐらし、190は口縁に突起を有する。また、192は爪形文にそって突起を付する。193はゆるい山形の口縁を呈し、爪形文も口縁にそって山形に配する。さらに爪形文との間にはヘラ状工具を刺突する。194～201は爪形文を弧状あるいは曲線的に配すもので、195は原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の斜縄文を施し、197・199・201は頂部を刻む隆帯を伴う。203～225は

比較的太い爪形文が施されている。このうち219までは直線・曲線を組み合わせている。206～208・211のように山形の波状口縁を呈するものも多く認められ、208は頂部に浮線を貼付している。また209は原体L $\left\{ \frac{r}{r} \right\}$ 、218は原体R $\left\{ \frac{l}{l} \right\}$ の斜縄文を地文に有している。220～225は爪形文の行間に円形の押圧文を配する。また220～222・224は口唇部も押圧したものである。

b種 226～267 半截竹管の先端を交互に支点とすることにより施文するもので、所謂変形爪形文と称されるグループである。これらは口縁部にそって2～3条をめぐらし、その下位は斜走する細く鋭い沈線で覆うのが普通である。また、口縁部を斜めに刻むものもしばしば見られる。胎土は細砂粒をやや含み、焼成はさほど悪くない。226・227は山形に突出する波状口縁を呈する。変形爪形文も同様に波状を呈し、空白部にはヘラ状工具を刺突する。さらに226は口唇部を、227は波頂部をそれぞれ刻んでいる。228～233は口縁部に2～3条の変形爪形文をめぐらし、口縁は平縁である。そのうち228・229は口唇部が外方へ肥厚する。変形爪形文以下は半截竹管による平行沈線を斜位あるいは弧状に施す。234～247は同様に口縁部にそって変形爪形文をめぐらし以下細く鋭い沈線で覆うものである。234～236・239・240は口唇を刻み、うち239・240は八字状に刻んでいる。また240は変形爪形文を伴わない。237・241・242～247は口唇部を刻まず、変形爪形文はやや小刻みである。248～253は同様に変形爪形文をめぐらす、その上を連続的に同一方向から刺突しているものである。下位は他と同じく斜行沈線で覆うのが普通であるが、250はS字状結節文が施されており注意する必要がある。254・255は変形爪形文が崩れ、波状の沈線様を呈している。また255は口唇部を斜めに刻み、さらに頂部に竹管を刺突する隆帯を付する。256、257も同じようなものであろう。260～262はすでに変形爪形文の端部のみが列点状にしか残っていない。なお、特殊なものとして、266・267のように縦位施文がある。263～265は変形爪形文が施されず、横走あるいは斜走する沈線に覆われている。263は口唇を、264・265は口縁下に付された隆帯上をそれぞれ刻んでいる。

5類 (268～271)

本類は器面に貝殻腹縁文を施すグループである。268・270・271はアナガラ属とみられ、268・271はさらに半截竹管によって沈線を施している。269は変形爪形文をめぐらし、貝殻腹縁文はハマグリであろうか。

6類 (272～277)

その他のものを一括したが、いずれも刺突、押圧による施文である。272は口縁部に1列の円形押圧文を、273は粘土紐接合部に指頭圧痕を有する。274～277はいずれも刺突文で、刺突は不規則である。274・275は竹管の背で、276・277は内側を器面にあてたものである。ともにゆるい稜を有し、頂部を276が押圧、277は同様に刺突している。

第IV群土器 (278～299)

本群は縄文時代中期の土器を一括した。これらは文様、胎土等の特徴によりさらに細分される。

1類 (278~284)

S字状結節文を伴う縄文を施す一群であるが、S字状結節文が横走するものと、縦走するものとの2タイプが認められる。

a種 278~281 S字状結節文が横走するものである。278・279は口唇部を押圧様に刻み、また279は磨消帯を有する。いずれも黒褐色を呈し、胎土は粗く焼成も不良である。

b種 282~284 縦走するS字状結節文が施されるものである。口縁は外反し、先端で「く」字状に内側に屈折する。口唇から屈折部までは縦に、屈折部は横に沈線を施し、それ以下にS字状結節文を伴う縄文を施している。282は交互に磨消帯を垂下させ、283は縄文が施されない。色調はいずれも黒褐色を呈し、胎土はやや粗い。

2類 (285~299)

本類は縄文時代中期後半の土器を一括した。

a種 285~297 阿玉台式土器とされるものである。全体に黒褐色を呈し、胎土には雲母の微細粒子をやや多く含んでいる。285~292は口縁部の破片で角押文を施す。289は扇状の把手である。いずれも内面に明瞭な稜を認める。290~293にはYないしV字状の隆起線が付されている。296・297は胴部破片で、波状の沈線と爪形文が施される。

b種 298 1点のみであるが、勝坂式土器とされるものである。細隆起線を垂下させ、その間を爪形文で埋めている。胎土はやや緻密で焼成もあまり悪くない。

c種 299 加曾利E式土器である。口縁部文様帯が僅かに観察され、原体R $\left\{ \frac{1}{L} \right\}$ の斜縄文上に太い隆帯を曲線的に付している。色調は黒褐色を呈し、焼成は比較的良好である。

第V群土器 (300~301)

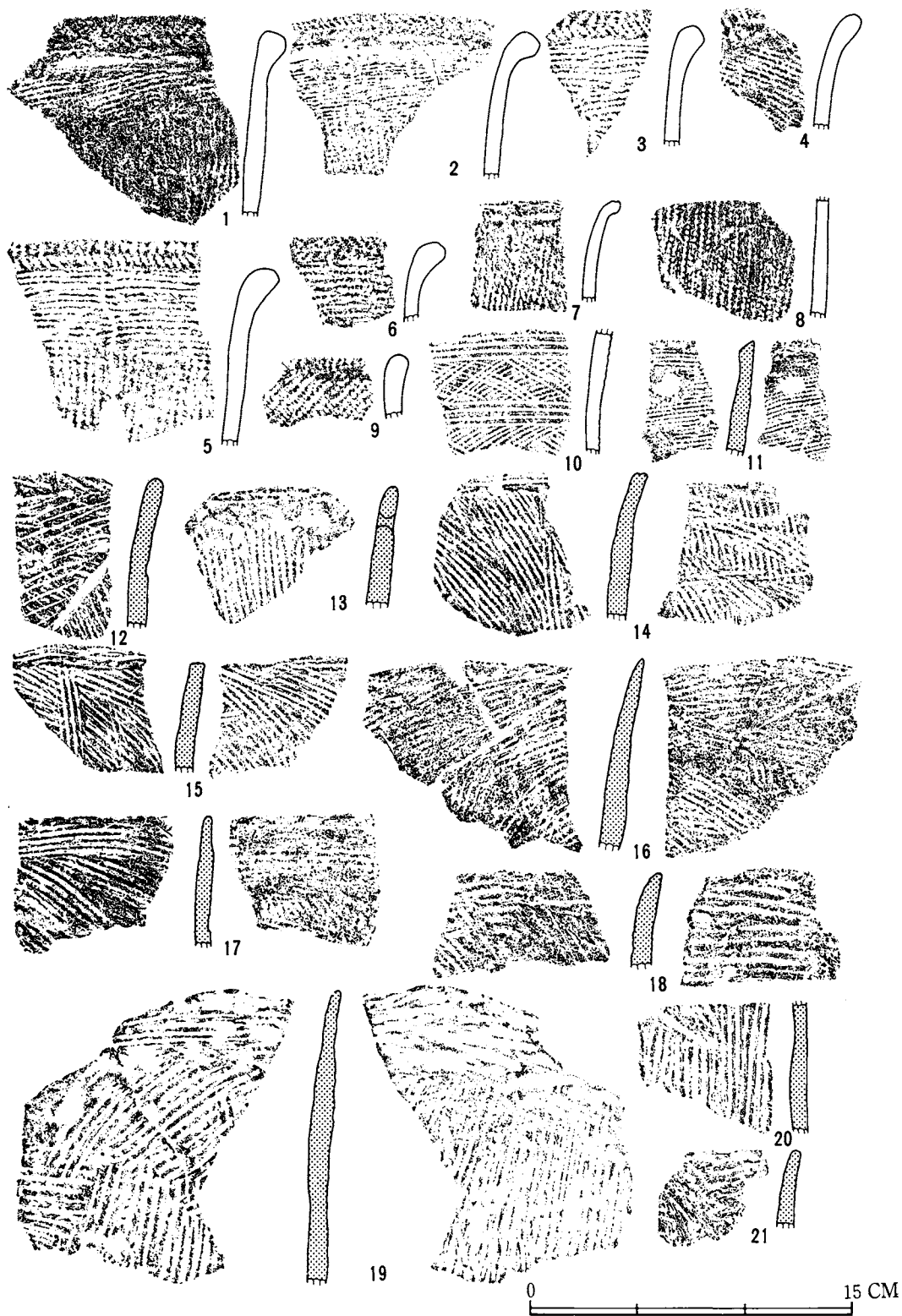
本群は縄文時代後期の土器を一括した。2点のみで、安行I式土器である。口唇部はいくぶん肥厚し、縄文帯と磨消帯を交互にめぐらすもので、縄文帯は一段高くなっている。原体R $\left\{ \frac{1}{L} \right\}$ 粒は細かい。300は縦位に隆帯を付する。胎土はいずれもやや粗いが、焼成は比較的良好で黒褐色を呈する。

土器について

今回の調査により出土した縄文式土器は、早期から後期の多くの土器型式にまたがるもので、今回これらを5群に分類したが、最後に編年的位置づけについて簡単に検討を加えたい。

第I群土器 1類では全体的に胎土に砂粒が目立つものの、焼成は良好で器面に撚糸文を施すものである。口唇部の形態、施文等に僅かながらの相違が認められるものの、1つのカテゴリ内に捉えて問題はないものである。井草I式土器に比定される。2類は早期沈線文系の土器で、1片のみであるが伏見遺跡3群1類(小野他1979)に共通し、^{*}『常陸伏見』にならえば三戸式と

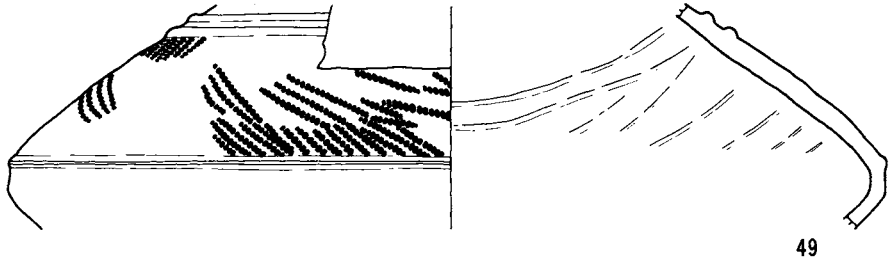
*小野 真一 他1979『常陸伏見』伏見遺跡調査会 なお、報文中に「これは層位的に田戸下層式とほぼ明確に区別された」とある。



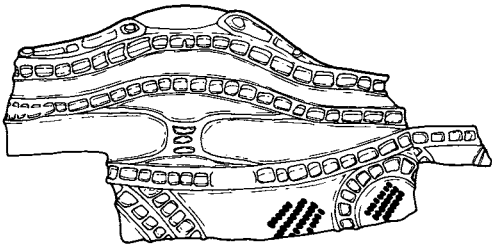
第58図 縄文式土器拓影図(1)



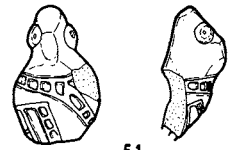
第59图 縄文式土器拓影图(2)



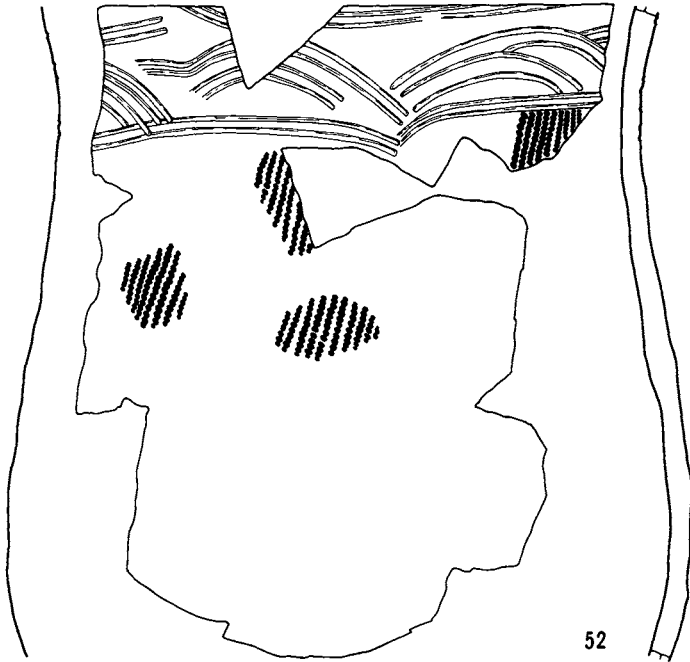
49



50



51



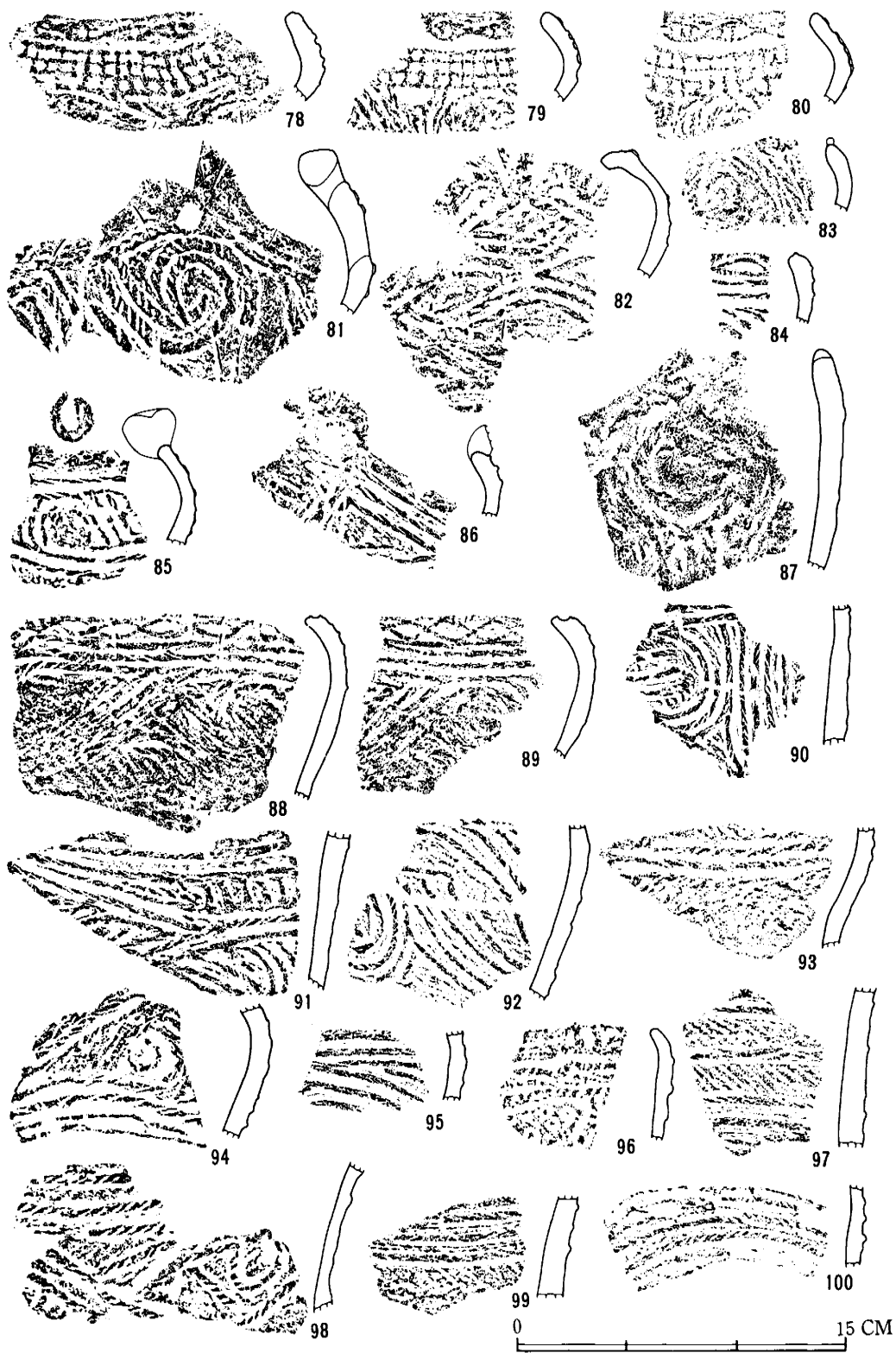
52



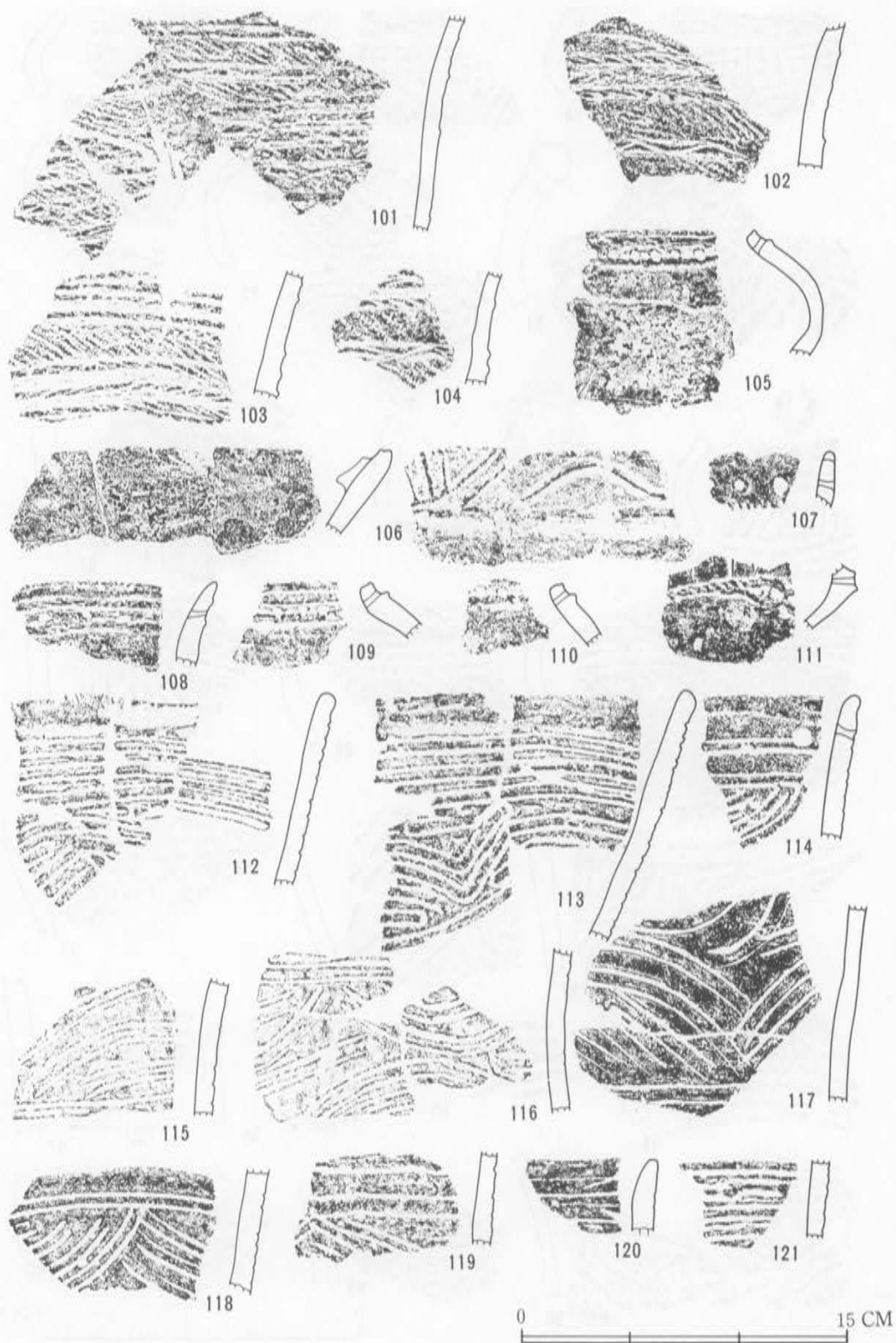
第60図 縄文式土器実測図



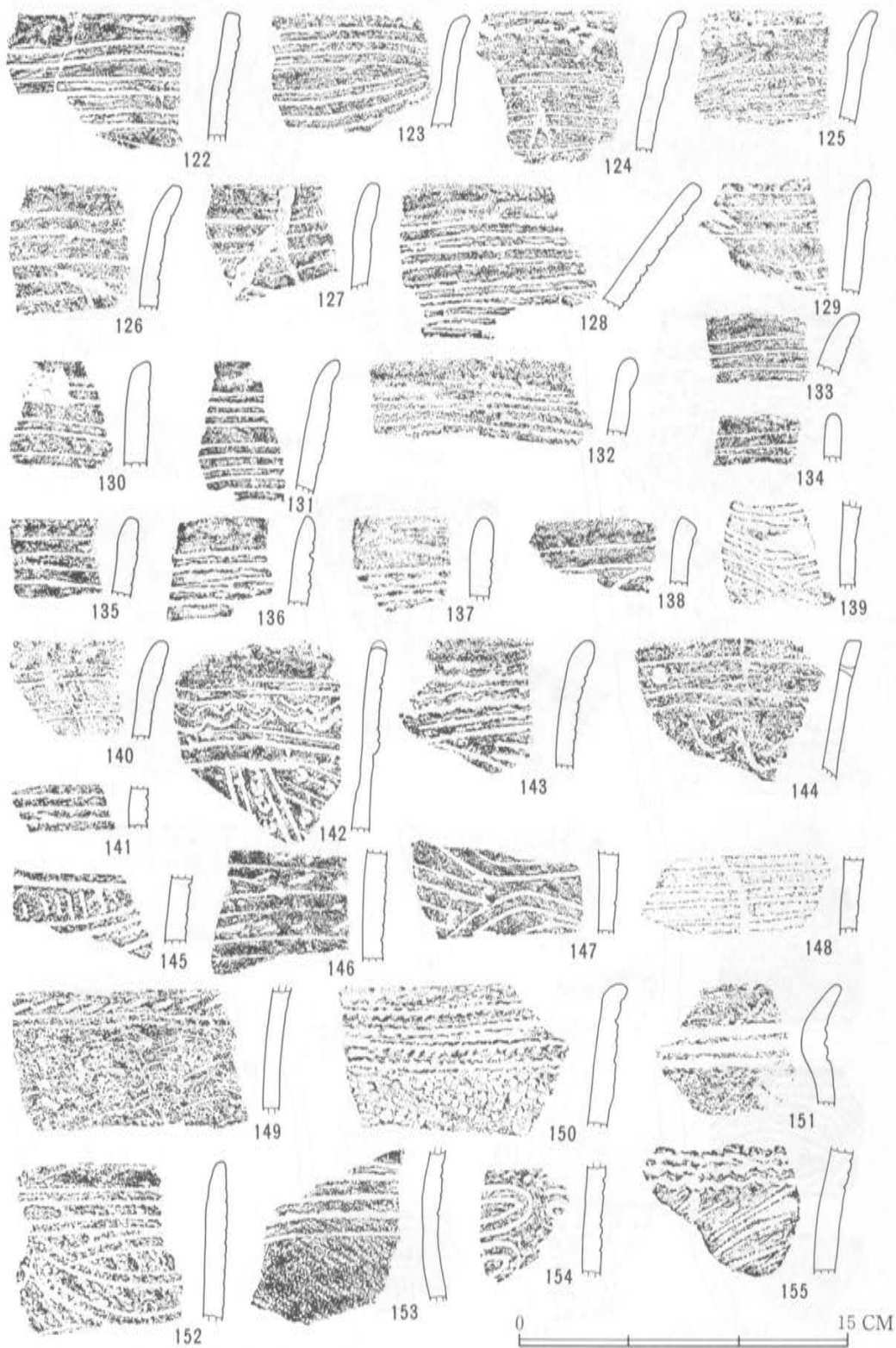
第61図 縄文式土器拓影図(3)



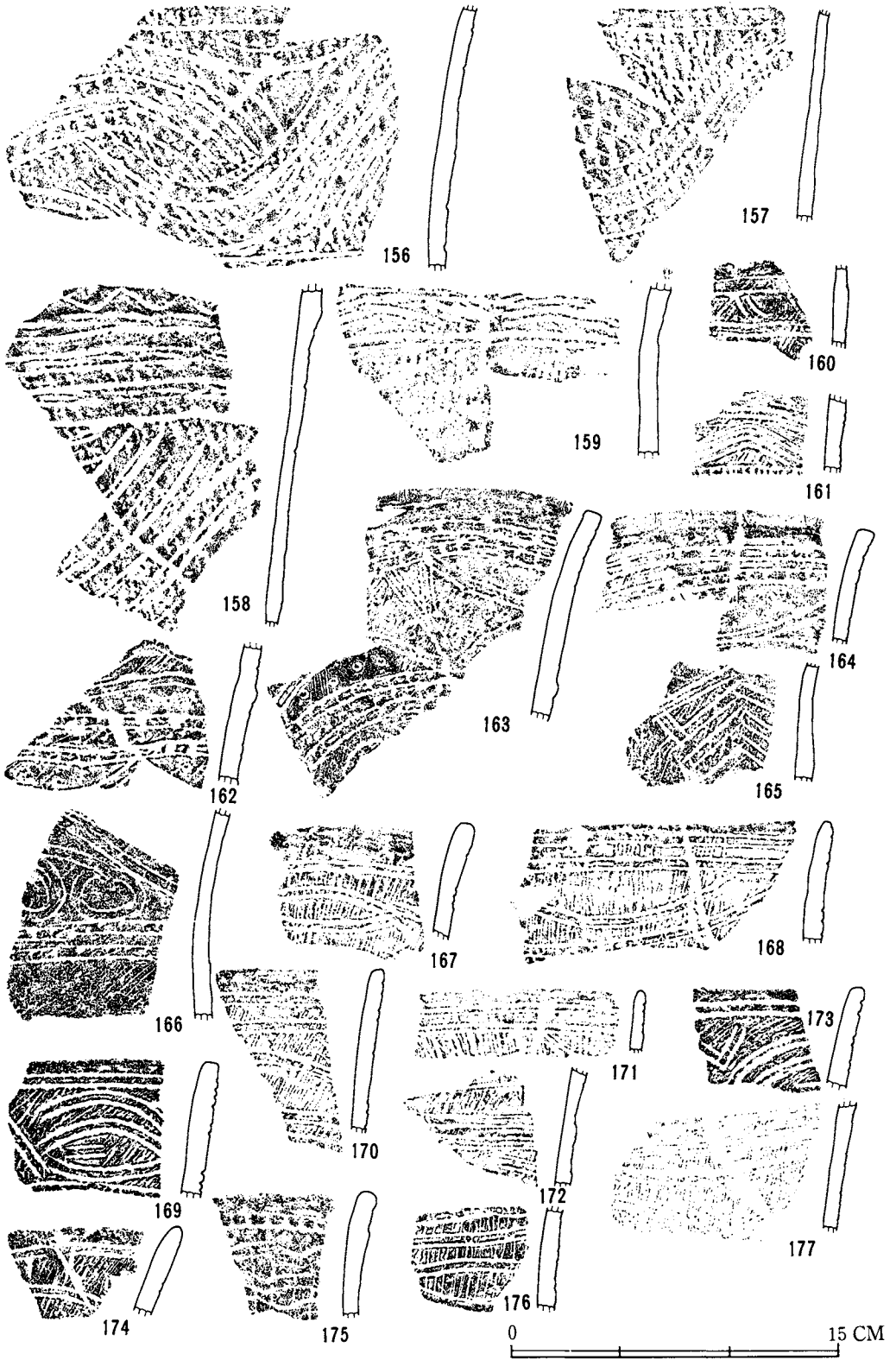
第62图 縄文式土器拓影图 (4)



第63図 縄文式土器拓影図(5)



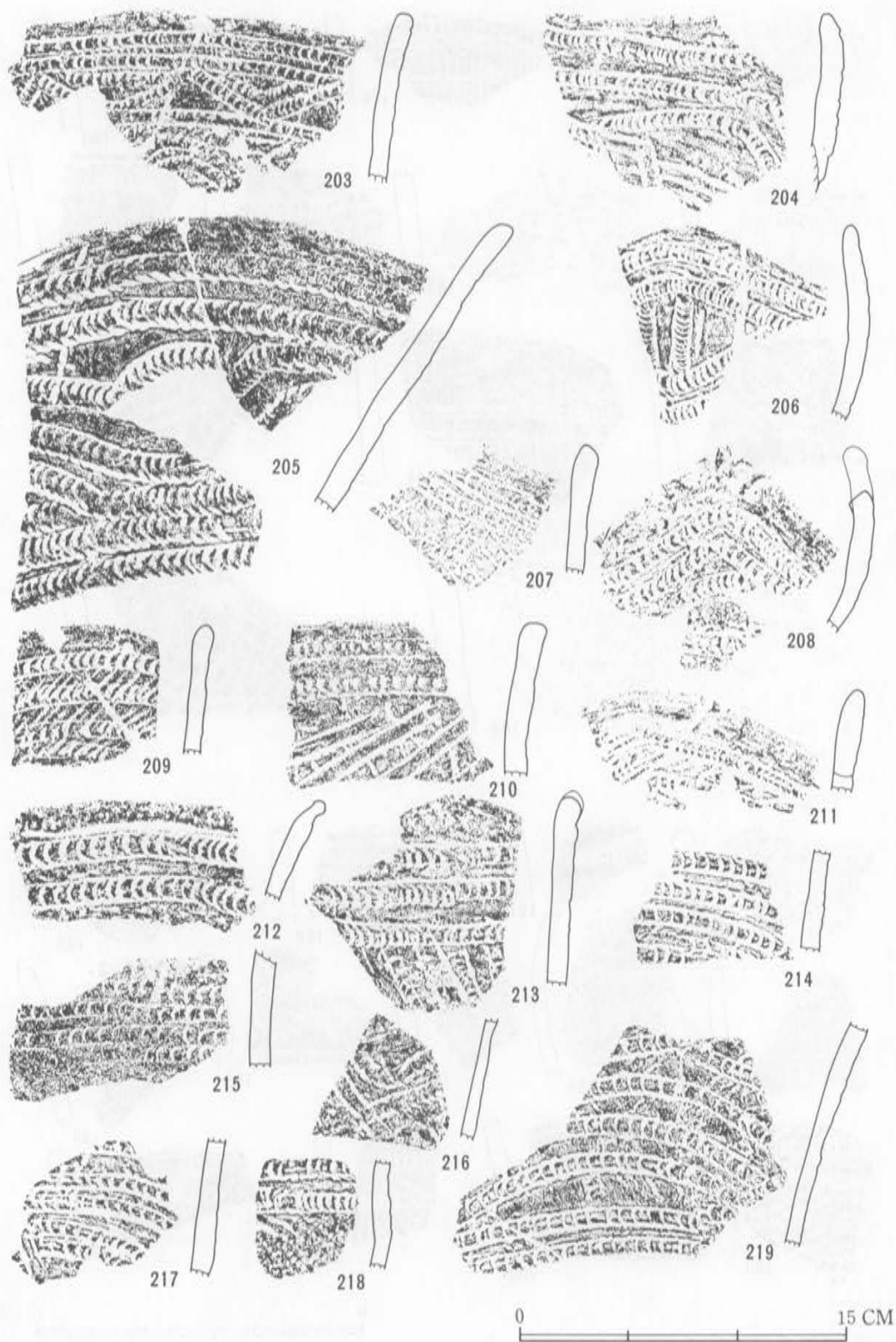
第64图 繩文式土器拓影图 (6)



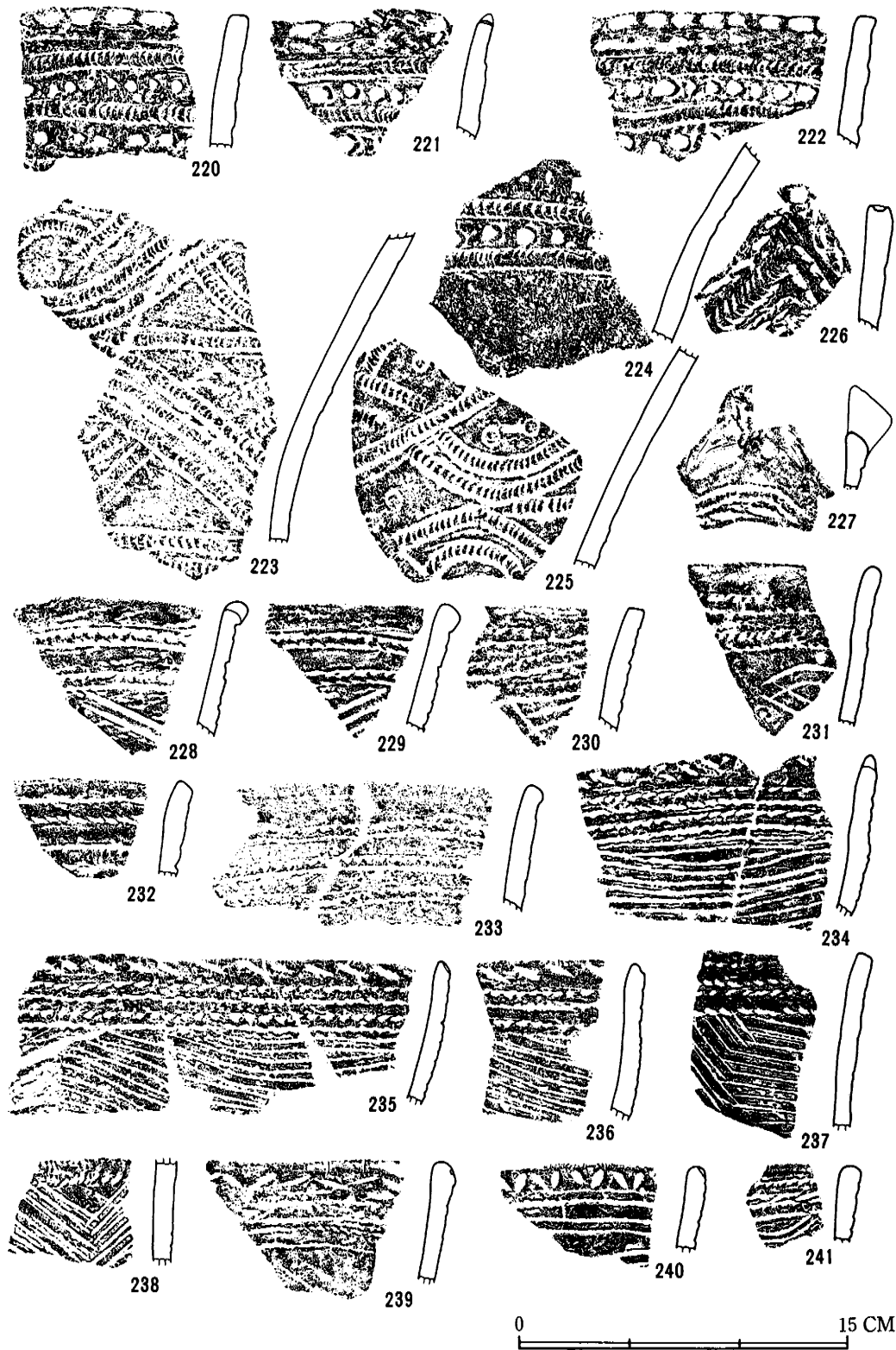
第65図 縄文式土器拓影図 (7)



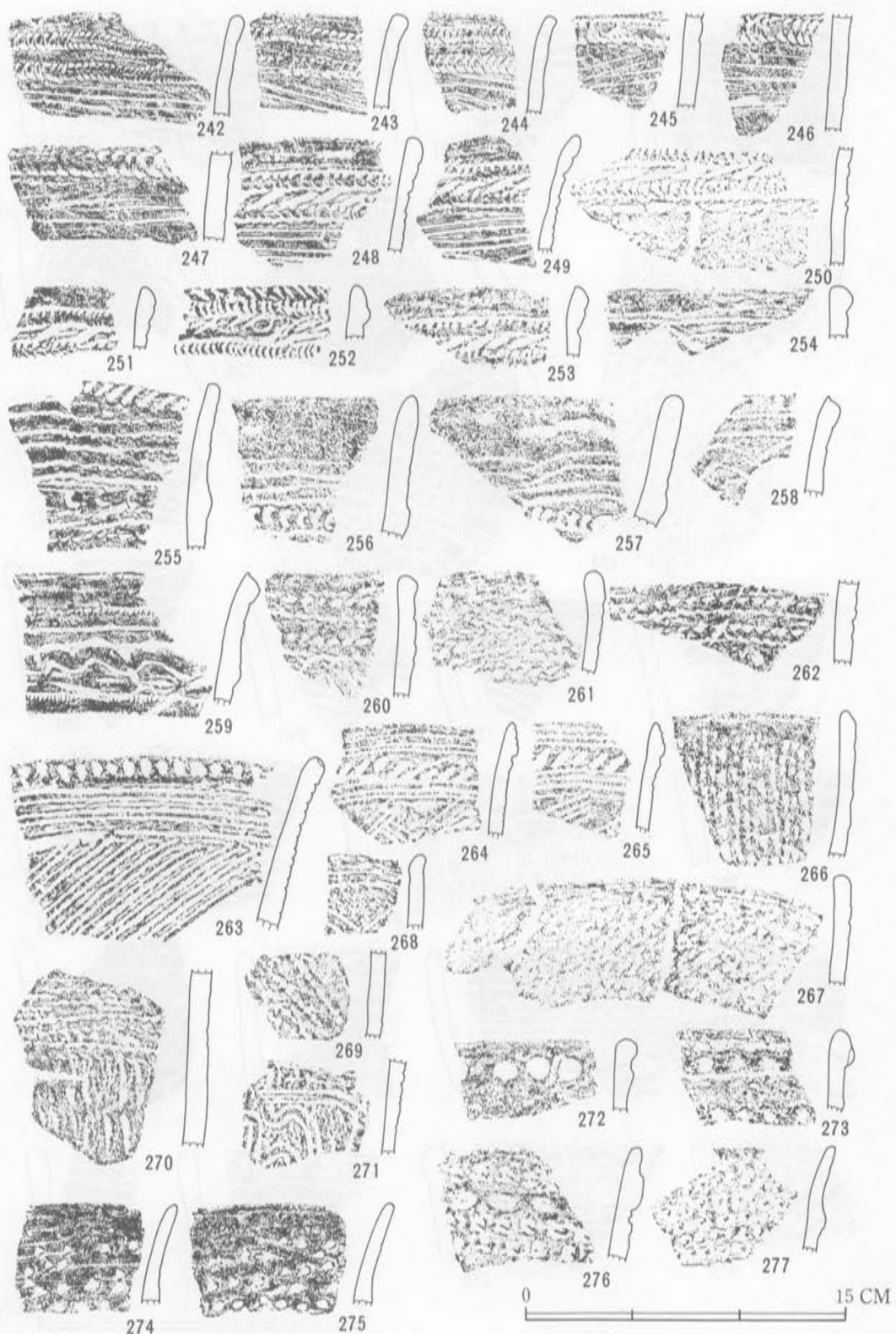
第66図 縄文式土器拓影図(8)



第67图 繩文式土器拓影图 (9)



第68図 縄文式土器拓影図 (10)



第69図 縄文式土器拓影図 (1)



第70図 縄文式土器拓影図 (12)

れる。3類は胎土に植物繊維を混入し、器面には貝殻条痕文が施されるものである。条痕のみでその他の施文は少なく、茅山上層式に近いものであろう。

第II群土器 胎土中に植物繊維を混入するもので、I群3類を除いたものである。1類としたものは縄文のみの施文であり、黒浜式土器としてよい。2類としたものは有節沈線が横走するものであり、諸磯a式土器と関係を有するものである。

第III群土器 縄文時代前期後半の土器で、出土量は最も多かったものである。本群は1～6の6類に細分したが、この中には諸磯a式、諸磯b式、浮島式土器が含まれている。1類としたものはIII群中では少ないものであったが、所謂木の葉状文、鋸歯文、肋骨文など諸磯a式土器の典型的モチーフが含まれている。2類は浮線文を施す土器である。浮線文は諸磯b式土器の1つのメルクマールであることはすでに周知の通りである。この浮線文は諸磯b(中)段階に著しく発達するとされ、後述の3類、4類よりは後出的な要素が含まれるものである。さらに浮線文自体も、a～c種と分類したようにバラエティーがある。一般に、縄文が施されるものがより古く、頂部を刻むものは新しいとされており、b種→c種の変遷が確認される。3類は半截竹管による平行沈線を施す土器を一括したもので、3種に細分した。a・b種はほぼ諸磯b式土器として問題のないものである。c種は地文に撚糸文を施し、一般に浮島I式とされているものである。浮島式土器と諸磯式土器の関係については多くの論考がなされているが、多くは浮島I式土器を諸磯a式ないし、同b式古段階に対応するものとして捉えている。また、地文の撚糸文を除外すれば、文様構成は諸磯式土器と変ることがないことも指摘されている。162・164・166等は平行沈線により幾何学的文様を表出し、明らかに諸磯a式土器と共通するモチーフを有し、165も諸磯a式からb式への移行期と考えられるモチーフを有している。しかし、c種で中心的モチーフである167～182はa種115～119と基本的に变りなく、さらに183にみられる爪形文も諸磯b式にみられるものである。このようなことから、当遺跡における浮島I式土器は諸磯a式後半からb式前半に併行するものとされよう。このことは、当遺跡における諸磯式土器の推移と同様な傾向にあると言える。4類は所謂爪形文を施す土器を一括したが、3類同様諸磯b式土器、浮島式土器の相方が含まれている。結論を先に言えば、a種は諸磯b式土器に、b種は浮島式土器に比定される。

a種の爪形文は、基本的に半截竹管の「刺突」,「押し引き」,「平行沈線を引いた後に刺突」の三タイプから構成されると言う(岡野1973)*。これらはいずれも諸磯a式土器にすでに見られるものであり、現段階では時間的先後関係を示すものとしては捉えにくい。

b種の爪形文は、竹管の先端を交互に支点とすることにより表出される所謂変形爪形文である。今回は資料の呈示にとどめるが、250のようにS字状結節文を伴う縄文を施すものは本来浮島式土

* 岡野 隆男 1973『平台貝塚』ここでは、a種からi種の9種に細分されているが、基本的には氏の言うa・b・c・g・iの5タイプである。即ち、d・e・f・hは1つのモチーフであり、そこに用いられる爪形文は、先の5タイプが使用される。

器に含まれない要素であり、諸磯式土器との融合の結果生じたものと解せる。また、266・267のような縦位施文が存在するが、これは飯山満東遺跡^{*}（清藤他1975）にても類例が知られる。

5類も同じく浮島式土器とされるものである。

第IV群土器 1類は本類はS字状結節文を伴う縄文を施すグループで、a種は横走、b種は縦走するもので、いずれも縄文時代中期初頭の土器群である。a種は下小野式土器に、b種は口縁部形態からしても五領ヶ台式土器に比定される。2類のa種は阿玉台式土器で、文様の発達も未熟で、やや古式な様相を呈する。b種は勝坂式土器に比定される。c種は加曾利E式土器であり、E I式とするよりE II式に近いものであろう。

第V群土器 これは縄文時代後期安行I式土器であり、量的にも少なく取りたてて述べるほどではない。

第3節 弥生時代の遺構と遺物

6号住居址（第71図）

本住居址は台地の東端部に位置する。平面形はやや不整の隅丸長方形形状を呈し、規模は5.3m×4.8mを測る。壁の立ち上がりは各部により不定であるが、南側の壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁の掘り込みは一定で確認面から60cmを測るが、状態は不良である。床面はほぼ平坦で比較的良好に固められている。ピットは南側で1か所検出されたが、深さ15cm程と浅く柱穴かどうか疑問である。覆土は自然堆積である。床面ほぼ中央から炉が検出された。長径1.0m、短径0.7mを測り、楕円形を呈す。2段に掘り込まれており、底面に密着して焼土が堆積する。

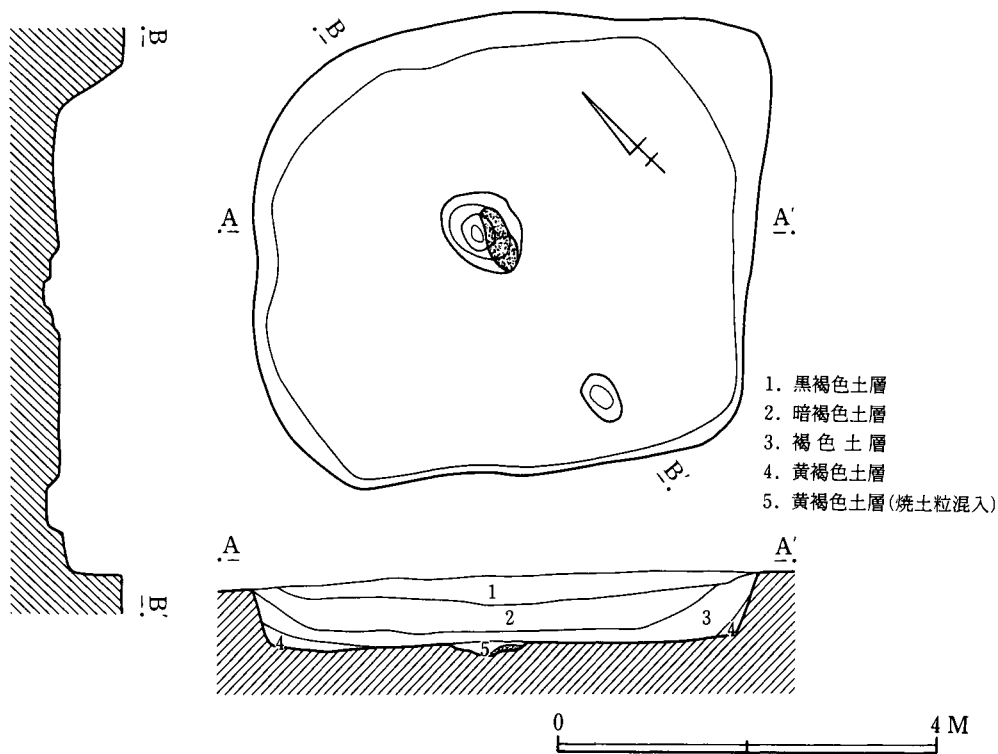
遺物は少なく、西側コーナー付近で床面から若干浮いて甕・鉢の破片が出土したのみである。

11号住居址（第72・75図、図版24・39・40）

本住居址は台地南東端の傾斜面に位置し、12号住居址の南側4m程に構築される。遺存は良好である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は4.7m×4.4mを測る。炉を通る主軸はN-16.5°-Eを指す。壁は床面より斜めに立ち上がり、壁高は斜面に掘り込まれるため東側で90cm、西側で20cmを測る。床面はほぼ平坦で良好に固められている。ピットは5か所検出され、P1～P4は径20cm程の略円形を呈し、掘り込みもP2が最も浅く8cm、P4が最も深く30cmを測るにすぎないが、床面上に丁寧に配置されていることから柱穴に相当する。覆土は自然堆積で、東側より流れ込む。P5は炉で、P1とP4の間のややP1寄りに位置する。長径80cm、短径50cmの不整楕円形を呈し、床面から10cm程掘り込まれる。炉内には底面より若干浮いて焼土が堆積する。

本址から出土した遺物はかなり多量であるが、ほとんどが覆土1層から2層にかけて検出され

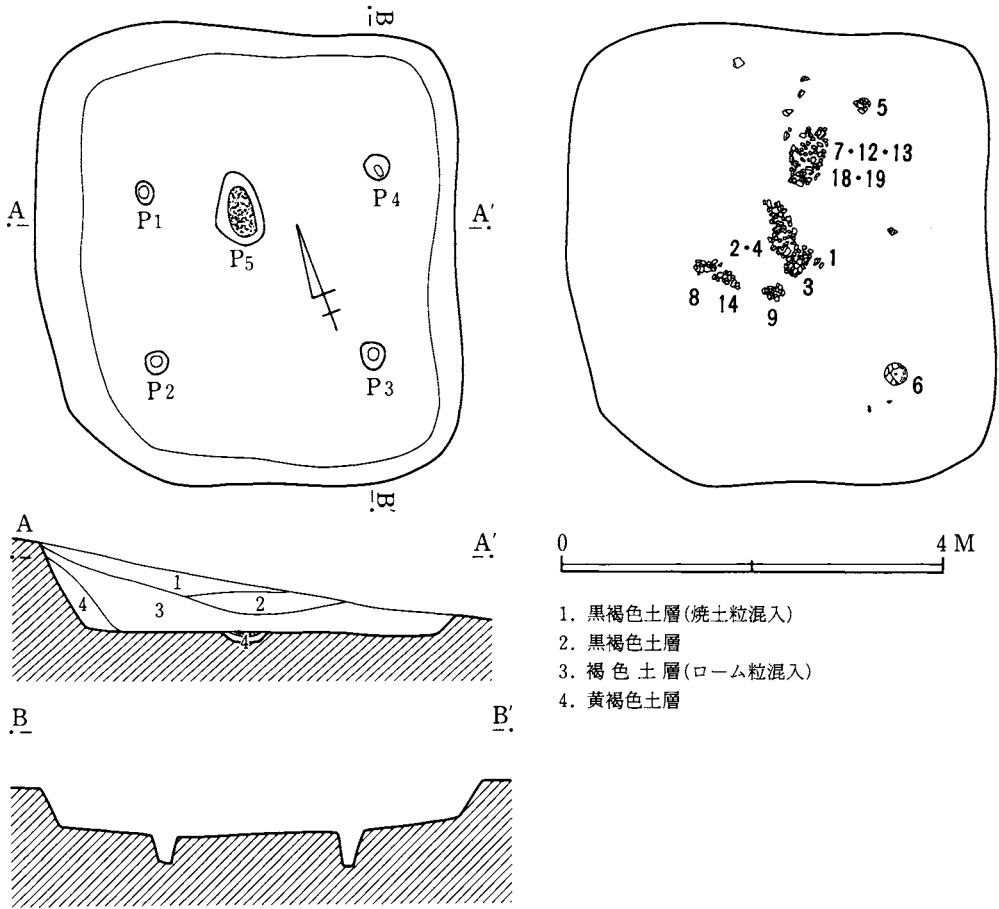
* 清藤 一順 他1975『飯山満東遺跡』千葉県都市公社



第71図 6号住居址実測図

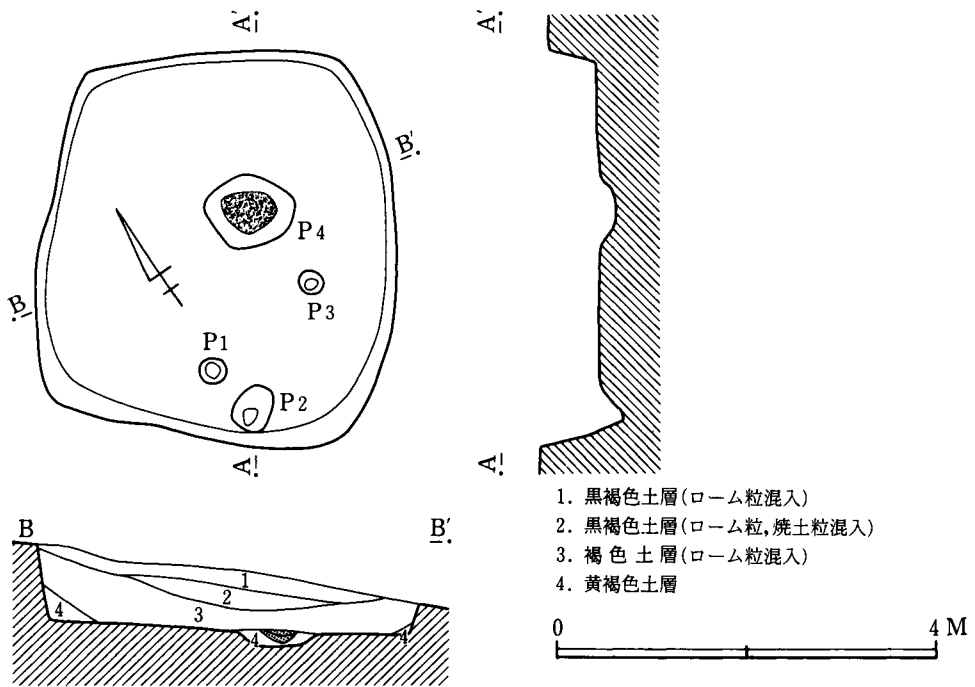
たものであり、本址に伴うと考えられる土器は、壺（1・2）・高坏（6）・甕形土器（5）の4点のみである。

遺物 1は壺の口縁部片である。折り返しを呈す口縁部は直立し、口唇端は平坦となる。R { $\frac{L}{L}$ } 及びL { $\frac{R}{R}$ } の縄文が羽状に配され、さらに刻目を施す3本1単位の棒状浮文が貼付される。内面は刷毛様の強い痕が残り、下端に円形の刺突を配す。頸部内外面に赤彩が施される。2は壺の下半部であろう。胴部は球形を呈す。底部はやや突出し、上げ底となる。外面には丁寧なへら削りが施される。器肉は薄く、胎土・焼成とも良好であるが、内面の荒廃が著しい。3・4は甕で、3はほぼ完形となる。3の口縁部は「く」の字状に外反し、胴部の膨らみは弱い。底部は突出し、上げ底を呈す。4の口縁部は「く」の字状を呈し、胴部は欠損するものの3より膨らみを有すものと思われる。3が暗褐色、4が明褐色を呈す。5は図示の $\frac{1}{2}$ 程を欠損する小形の甕である。口縁部は緩く外反し、口唇部に刻目を有す。胴部最大径と口径がほぼ一致する。内外面ともへら削り後ナデを施す。胎土・焼成とも良好であるが、内面の荒廃が著しい。暗褐色を呈す。6は口径22.2 cmを測る大形の高坏の坏部である。内彎ぎみに大きく開き、下端に稜をもつ。外面はへら削り後ナデ、内面はナデが丁寧に施される。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。内外面ともに赤彩が認められるがあまり明瞭ではない。7～9はほぼ完形の高坏である。口径13～13.5 cm、器



第72図 11号住居址実測図

高 9.5~10.5 cm とほぼ同様である。坏部に稜をもたず、脚柱部が短く裾部が大きく開く。7の脚柱部がやや太い。調整もほぼ同様で、全体に丁寧仕上げられる。8の胎土がやや粗い他は緻密で、焼成も良好である。3点とも脚部内面以外に赤彩が施されるが明瞭ではない。10・11は高坏脚部で、7~9とは形態が異なる。脚柱部がきわめて短く、裾はほぼ水平に大きく開く。11には脚部と坏部の接合痕が明瞭に残り、ホゾを差し込んで接合したことが窺える。赤彩が比較的明瞭に観察される。12~18は鉢である。18が略完形、12~14が $\frac{1}{3}$ 程、15~17が $\frac{1}{2}$ 程欠損する。口縁部は直立かやや外傾し、底部は平底となる。体・底部とも外面の調整が雑で、ヘラ削り痕や指頭による押さえが明瞭に残る。内面のナデは丁寧である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。14を除き、内外面とも赤彩が施される。19は坏で、口縁部を $\frac{1}{2}$ 程欠損する。口縁部は直立し、稜が明瞭に形成される。内外面とも丁寧な調整である。胎土・焼成とも良好で褐色を呈す。外面に赤彩が施されるが、遺存はあまり良くない。以上が本址から出土した図示できる土器であるが、大半はその形態から鬼高期のものであり、その頃まで本址は凹地として残っていたものと思われる。



第73図 12号住居址実測図

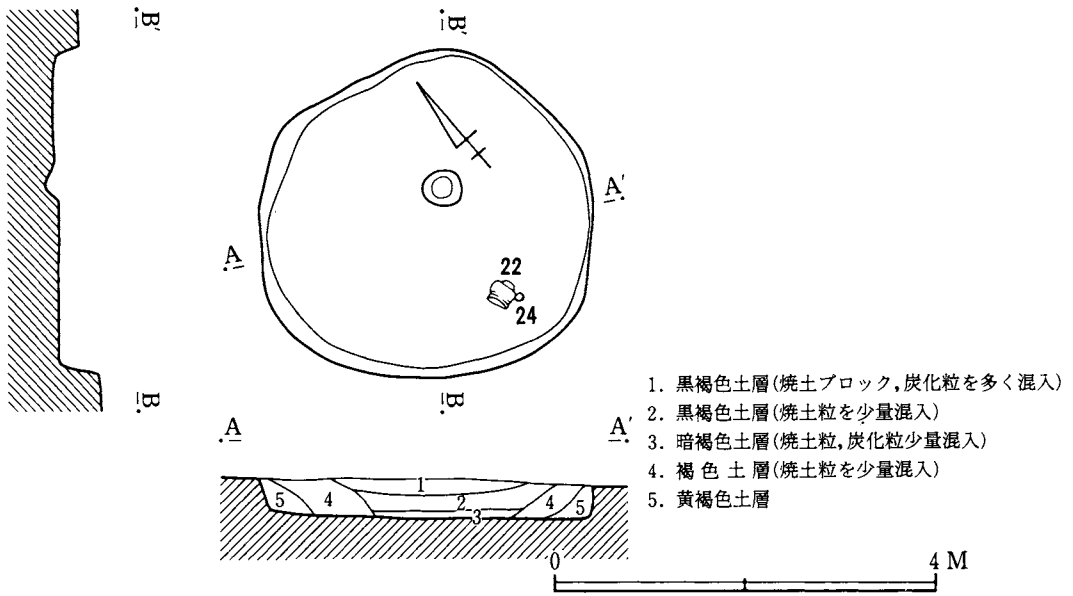
12号住居址 (第73・75図, 図版25・40)

本住居址は11号住居址同様台地南東端の斜面に位置し、2号墳周堀に隣接して構築される。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は4.0m×3.7mを測る。壁は床面からやや斜位に立ち上がり、壁高は斜面部に位置するため、西壁で80cm、東壁で30cmを測る。床面は平坦で比較的良好に固められる。ピットは4か所検出された。P1・P2は径25cm程の円形を呈し、深さ20cmを測る柱穴であろう。P4は床面中央よりやや西側に寄った位置に設けられる炉である。長径90cm、短径80cmの楕円形を呈し、床面から15cm掘り込まれる。炉内の焼土は底面より若干浮いて堆積する。覆土は自然堆積で西側から流入する。

本址からの遺物は少なく、伴うと思われる土器はP2上より検出された台付甕の破片のみである。

遺物 20は台付甕の台付部である。台部は甕の底部より直線的に開き、端部は平坦な面を形成する。外面は縦位の細かいヘラ削りによって整形され、内面には丁寧なナデが施される。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈す。21は高坏の脚部で、裾を $\frac{1}{2}$ 程欠損する。脚柱部は鼓状を呈し、裾が水平に近く拡がる。つくりはやや粗雑であり、胎土に砂粒を多く含む。脚部内面以外にも赤彩が施されるが、遺存はあまり良くない。これも11号住居址同様典型的な鬼高期の土器となろう。



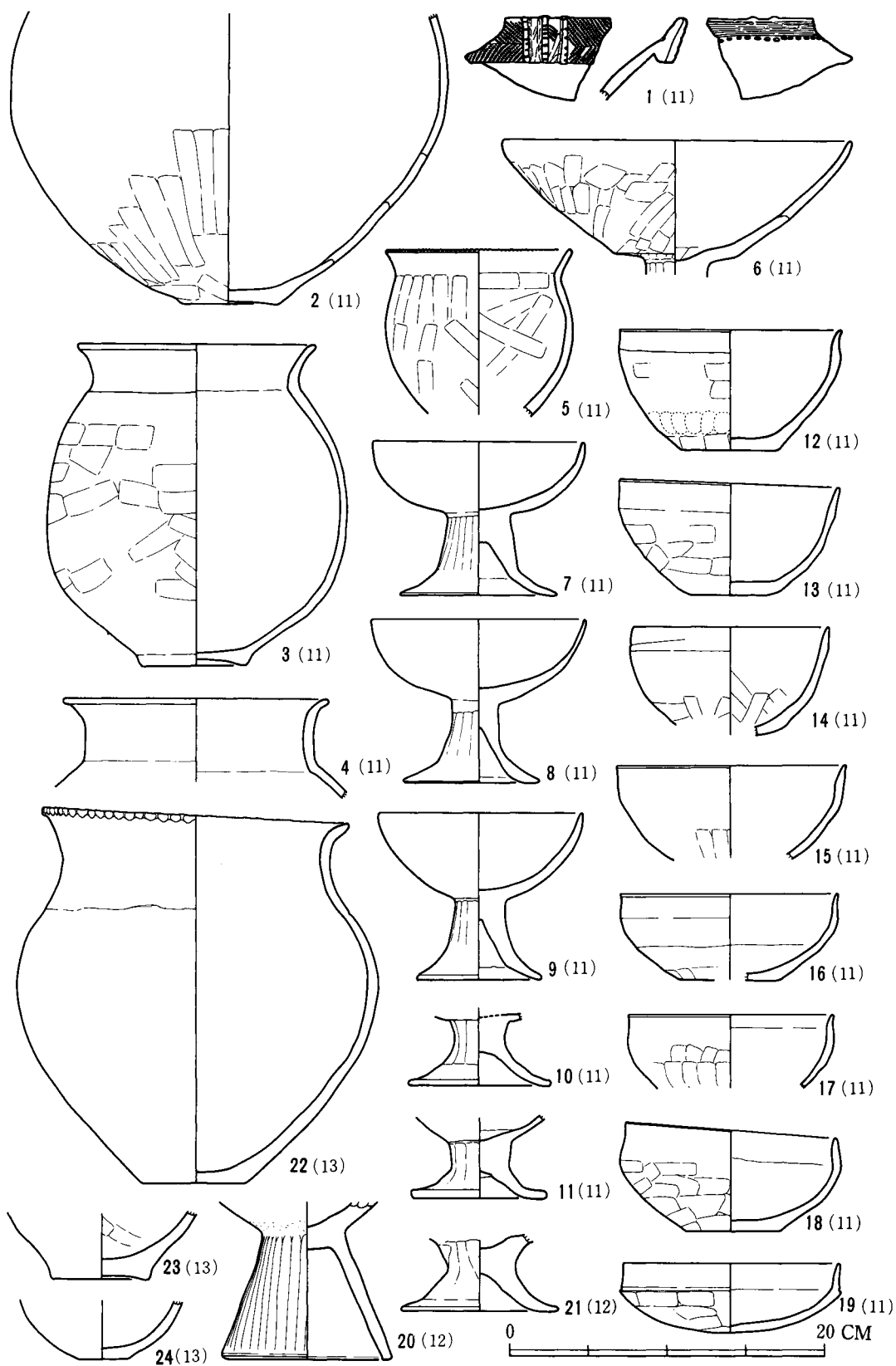
第74図 13号住居址実測図

13号住居址 (第74・75図, 図版25・39・40)

本住居址は台地の南東側で10号住居址の北東3m程に位置する。平面形は径3.5m程を測る不整形円形を呈す。壁は床面からやや斜位に立ち上がり、確認面からの壁高は30~40cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、あまり良好な状態ではない。炉は床面中央よりやや東側に寄って設けられる。径40cm程の円形プランを呈し、床面より10cm掘り込まれる。柱穴と思われるピットは検出されなかった。覆土は自然堆積で5層に分離でき、土層中には比較的多く焼土が含まれることが特徴といえた。

本址からの出土遺物は、床面よりほぼ完形の甕1点と底部片を検出したのみで、土器片等も少なかった。

遺物 22は甕で、口縁部を $\frac{1}{2}$ 程欠損する。口縁部は緩く外反し、口唇部で大きく開く。口唇端部には棒状工具による刻目が施される。胴部は上半部に最大径を有し、ゆるやかに底部へと続く。肩の部分には粘土の輪積み痕が一条みられる。胴部外面にはヘラ削り後ナデ、内面には丁寧なナデが施される。胎土は砂粒を含むが緻密で、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈す。23は甕の底部であろう。若干突出し、上げ底となる。内面は黒色を呈す。21は小形の壺か罎の下半部であろう。胴部はほぼ球形を呈すものと思われる。底部は小さく平底となる。内外面とも丁寧なナデ整形が施される。胎土・焼成とも良好である。色調は赤褐色を呈し、赤彩とも思われるが、胎土自体赤味を帯びるためこの可能性は少ない。以上が本址から出土した主な土器となるが、22の甕は確実に本址に伴うものとなる。肩部の輪積痕や口唇部の作りは明らかに弥生期の特徴を有するものである。また23・24については遺存度が少なく断定はできないがより後出となる。



第75图 住居址出土土器实测图

第4節 古墳時代の遺構と遺物

1. 古墳

第1号墳

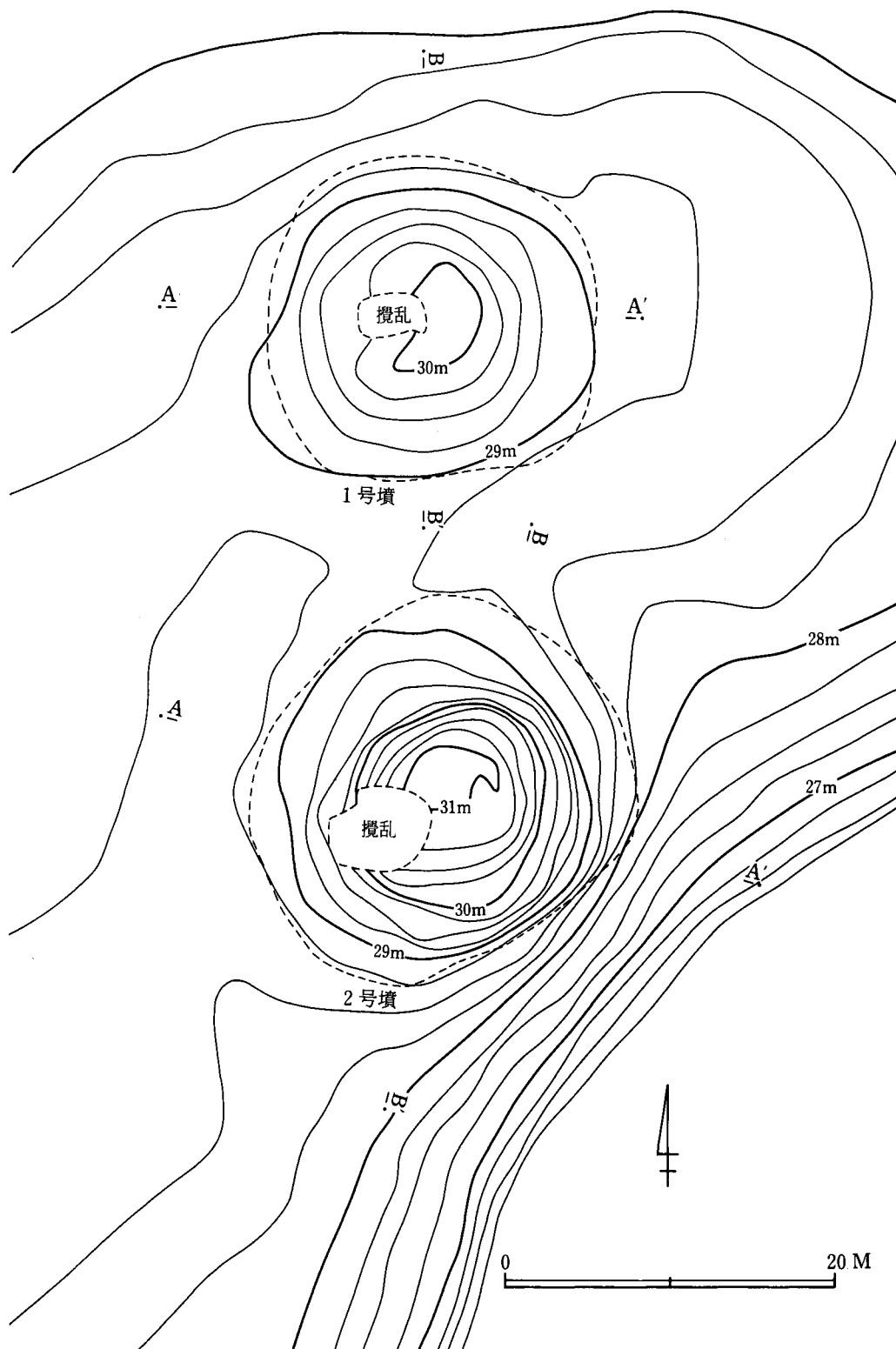
(1) 墳丘と周堀 (第76・77・78図, 図版26・27)

本墳は2号墳の北側に隣接して構築される。1・2号墳とも調査前は山林中に存在しており、伐木後全容が明らかになるとともに、いずれも円墳であることが予想された。本墳の墳頂部から東西側にかけては旧表土下まで攪乱され、また、墳頂部がなだらかな状況を呈することより、墳丘が当初より低くなっていることは考えられるものの、遺存度は比較的良好と言えるだろう。墳頂部は標高30.2m、周囲の平坦面との比高は1.4mを測る。

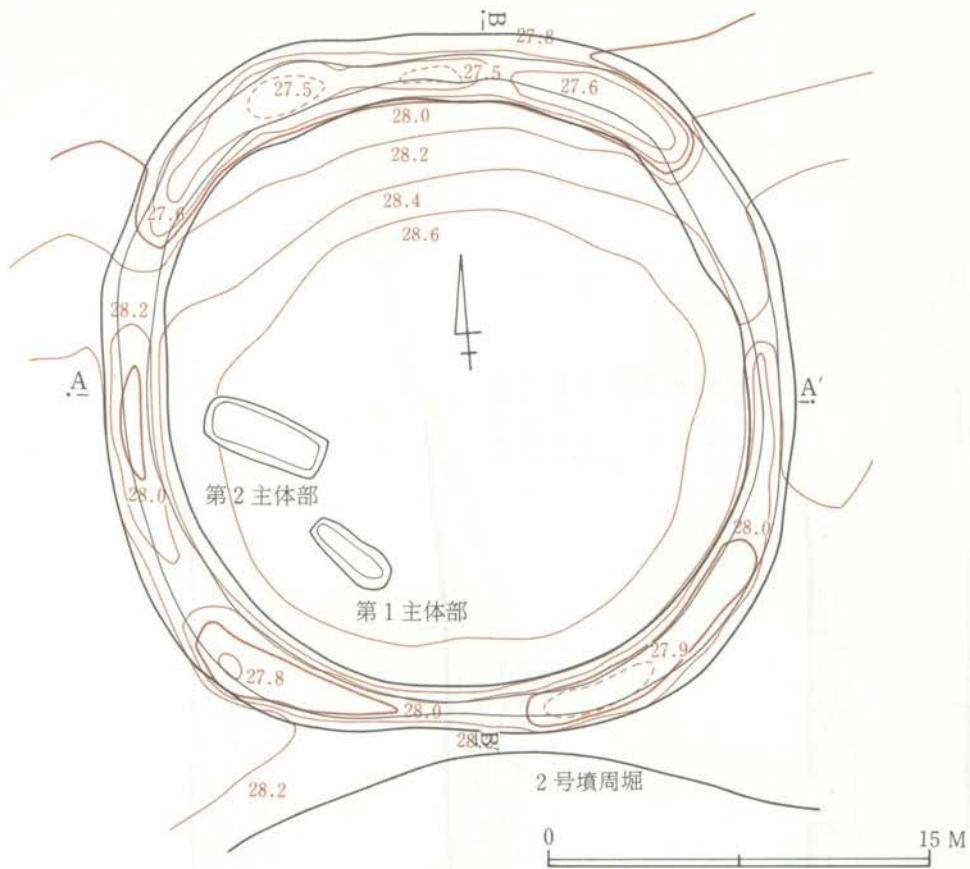
墳丘は腐植土である旧表土上に積み上げて形成される。旧表土は攪乱により一部削平されるが、範囲は、東西径15m、南北径15mを測り、円形を示す。厚さはほぼ均一で10～15cmを測り、レベル的にもほぼ水平状態を呈す。墳丘構築はまず、この旧表土の範囲設定とそれに伴う周囲の削平が基本となる。墳丘北側は斜面に続き、南側は2号墳と隣接するため、この部位での旧表土削平状況は明確ではないが、墳丘の東・西側ではソフトローム面と旧表土面との比高が50cm前後を測る。削平がどれ程の範囲まで及んでいたかは把握することができなかったが、墳丘範囲外の旧表土の削平が行われたことは確実である。

盛土はまず、旧表土の北側縁に沿って幅3.5～4.5m、高さ0.6mの規模で半円状を呈す土堤が築かれる(8)。この土堤は北側の斜面に面するところに設けられており、墳丘の流出を防ぐ工夫が採られたものと言えよう。なお、この土堤は粘性の強い黒褐色土を利用しており、周囲削平の上部で得られたものである。次の段階では、中央部に黒褐色土を1層敷いた後に(9)、旧表土の南側縁に幅3m、高さ50cm程の土堤が築かれる(8')。この段階で旧表土縁部を廻る土堤が完成する。断面図の東側は攪乱のため不明であるが、おそらくこのような状況を呈するのではないかと思われる。土堤完成後は、内部への継ぎ足しの状況がみられる(3～7)。これにより土堤は幅・高さとも増していき、墳丘の規模が決定される。継ぎ足された土は、内側に向けて徐々にローム粒・ロームブロックを多く含むようになり、墳丘外削平がローム層に達したことを明示している。最後に土堤内への土の充填が行われる。この土はロームブロックを主体とした層であり、周堀の掘り下げによって得られたものであろう。充填方法は土堤形成法と異なり、水平積み的手法を採る。墳丘が構築時より低くなっていることからすれば、工程の各段階における規模には若干の変更も生じてこようが、基本的にはこの段階で墳丘の構築が終了したと言えよう。

墳丘と周堀の間には盛土が全く認められない。この部分は旧表土およびローム漸移層を削平して形成され、墳丘端部より周堀にかけてゆるやかに傾斜する。北側で幅5m、南側で3m程を測り、周堀内側に沿って環状に廻るテラスを形成する。墳丘構築の基盤となる旧表土が略円形を呈し、旧表土外側に存するテラス状の面が北側でやや幅広となることは、墳丘全体が若干南側にず



第76图 1・2号墳填丘实测图



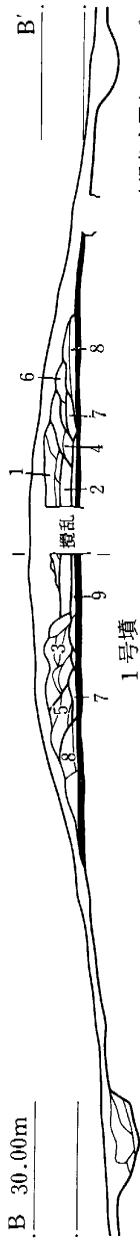
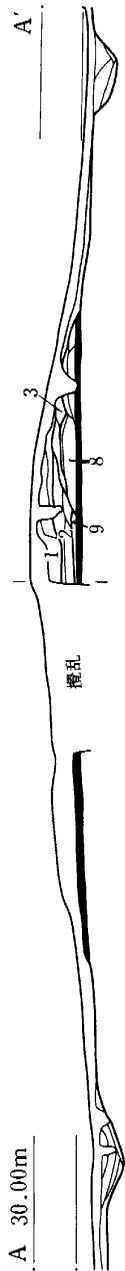
第77図 1号墳周堀実測図

れて位置するものと考えられる。なお、この部分には後述する2基の主体部が穿たれる。

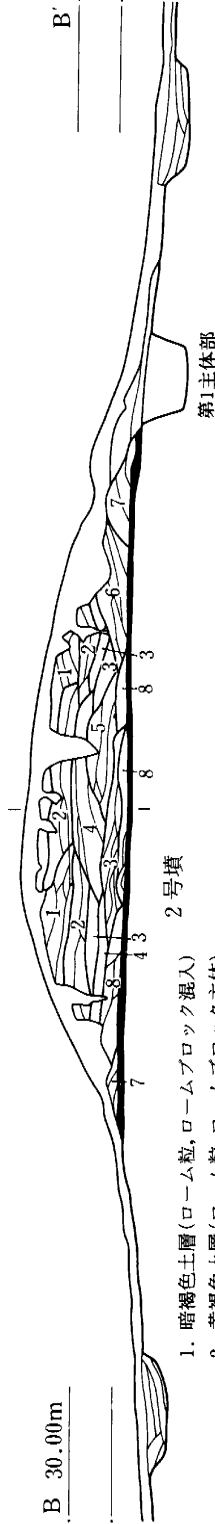
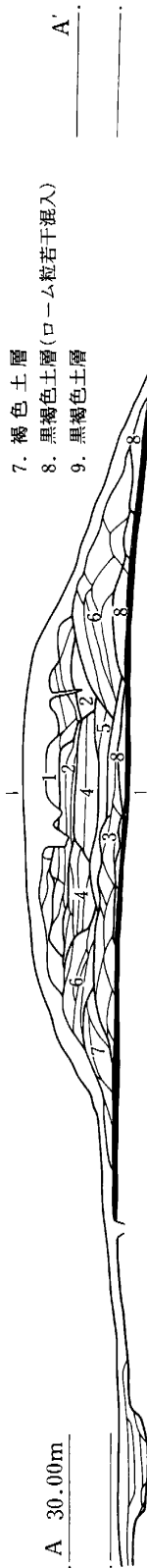
周堀は略円形を呈して全周するが、北側および南側で若干直線状を呈す部位が認められる。これは、北側においては傾斜面による地形的制約、南側では2号墳周堀の制約を受けたために生じた結果であろう。周堀外縁径および内縁径は、南北26.7m、22.5m、東西27.2m、22.8mを測る。幅は一定ではなく、北西側で最大3.5m、南側で最小1.7mを測る。底面は平坦ではなく、深く掘り込まれた場所が5か所認められる。このことから、周堀は全体に無造作に穿たれたのではなく、何らかの計画のもとに何度かに分けて掘り進められたことが推測される。また、周堀の北東および北西部には掘り込みのきわめて浅い部分が認められ、いわゆるブリッジ状を呈す。深さはブリッジ状部分で最も浅く10cm、北側部分で最深60cm程を測る。覆土は自然堆積である。

1号墳墳丘出土遺物 (第79図, 図版45)

1～4は坏で、いずれも1/4程の遺存である。1は全体に球状を呈し、口縁部は弱い稜をもって内彎する。2・3は明瞭な稜を有し、口縁部がほぼ直立する。1～3とも赤褐色を呈し、1の内外面に赤彩が施される。4は体部が直線的に開くもので、全体にナデ調整される。内黒を呈す。



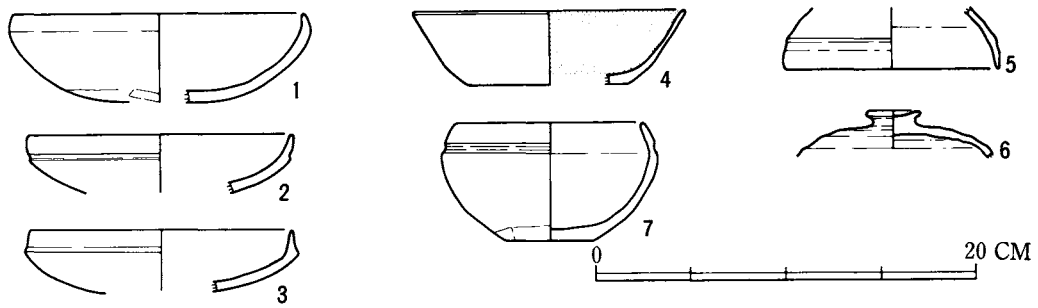
1. 暗褐色土層(ロームブロック混入)
2. 明褐色土層(ローム粒,ロームブロック主体)
3. 黒褐色土層(ローム粒,ロームブロック混入)
4. 明褐色土層(ローム粒主体)
5. 褐色土層(ソフトローム粒混入)
6. 黒褐色土層(ローム粒混入)
7. 褐色土層
8. 黒褐色土層(ローム粒若干混入)
9. 黒褐色土層



1. 暗褐色土層(ローム粒,ロームブロック混入)
2. 黄褐色土層(ローム粒,ロームブロック主体)
3. 黒褐色土層(ローム粒,ロームブロック混入)
4. 褐色土層(ロームブロック多く混入)
5. 褐色土層
6. 黒褐色土層(ローム粒若干混入)
7. 黒褐色土層



第78図 1・2号墳丘断面図



第79図 1号墳墳丘・周堀出土土器実測図

5・6は須恵器の坏蓋であるが、5は小片、6は図示の $\frac{1}{3}$ を欠損する。5は全体が半球状を呈すもので、口縁下に太くて浅い沈線が廻る。6は全体に扁平で、天井部に低いつまみが貼付される。外面に濃緑色の自然釉が観察される。7は碗で、図示の $\frac{1}{3}$ 程を欠損する。体部に膨らみを有し、口縁部は太く浅い沈線を廻らして内彎する。底部は平底となる。内外面とも丁寧にナデ調整が施され、体下部および底部はヘラ削りとなる。胎土はやや粗く、暗褐色を呈す。焼成はきわめて良好である。

(2) 主体部 (第80・81図, 図版28・29)

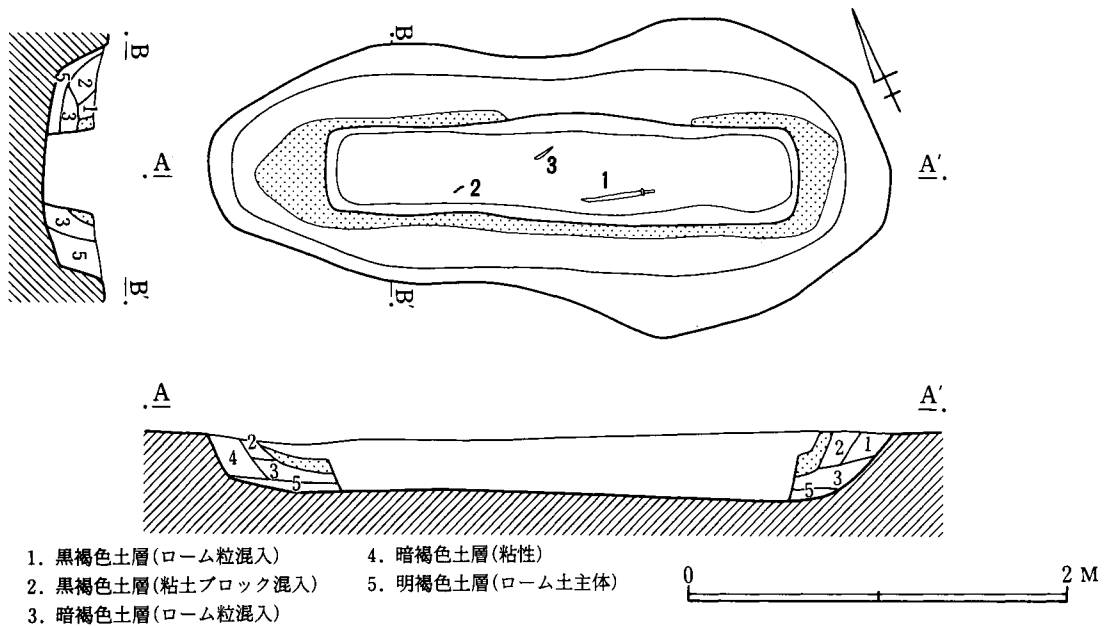
本墳からは2基の主体部が検出された。いずれも墳丘の東から東南にかけての裾部に位置する。第1主体部は周堀とほぼ平行するものの、第2主体部は墳丘の主軸方向とほぼ一致する。後述する第2号墳とはその位置を若干異とするものである。

第1主体部

本主体部は墳丘の南西裾部に位置し、周堀内縁より4 m程内側に構築される。この部分は旧表土と周囲に廻るテラスの境界に当り、旧表土を若干掘り込んでいる。墳丘裾部を若干削ることになるが、本主体部は墳丘完成後に設けられたものであろう。

土壇の平面形は不整の楕円形を呈すが、壁自体あまり明瞭でなく、若干プランに変動があるかもしれない。規模は長さ3.6m、最大幅1.7m、深さ0.4mを測る。主軸方位はN-55°-Wを指す。土壇内部には幅5 cm程で長方形に廻る粘土帯が確認された。調査の結果、この帯は土壇内に埋置された木棺の輪郭を示すことが判明した。これによると、木棺の規模は長さ2.5m、幅0.4~0.5 mを測る。木棺の底面は土壇底面と同一のレベルに置かれており、確認面からの深さは0.4mを測る。木棺の形態は断定できないが、周囲に厚さ10~20 cmで観察される粘土は両小口側で多く使用されており、小口板の存在が想定できそうである。そうすると、割竹形のような木棺の可能性が強い。南北側壁にみられる粘土帯は、木棺の身と蓋のつなぎ目に充填されたものであろうか。

主体部内より出土した遺物は少なく、中央部に直刀1振、刀子2点が検出されたのみである。直刀は東側小口部に茎を、刃部を側壁に向けた状態である。



第80図 1号墳第1主体部実測図

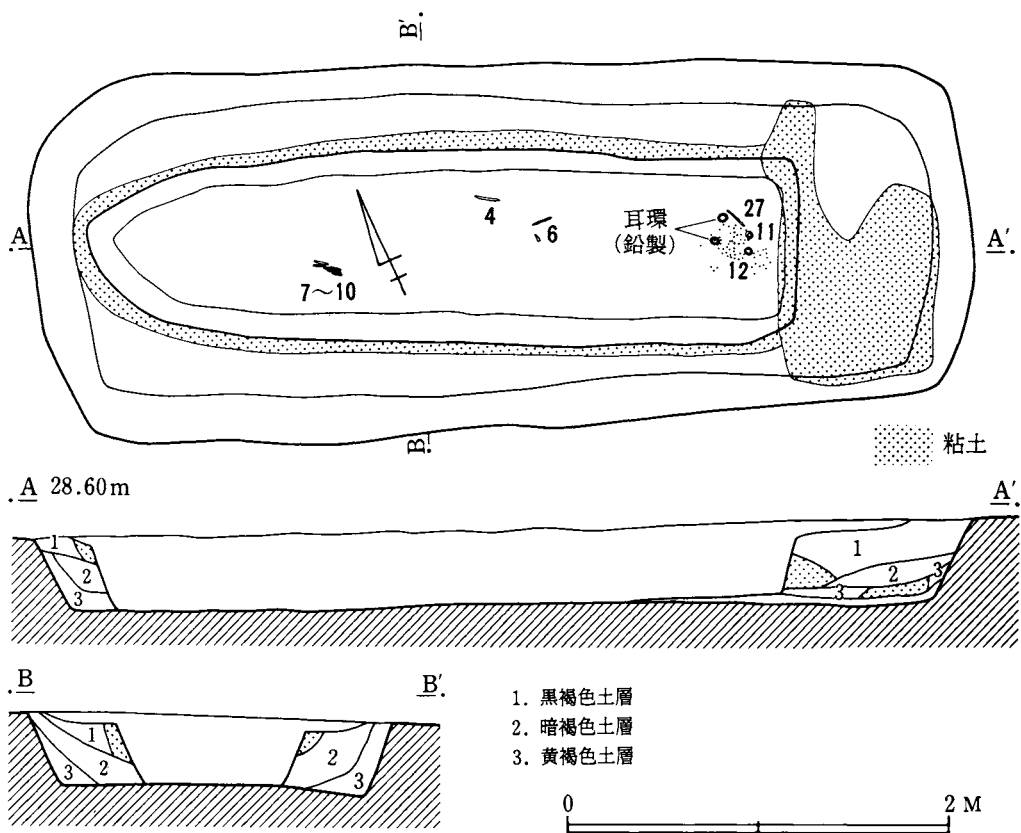
第1主体部内出土遺物 (第82図, 図版41)

直刀 1の直刀は茎尻を欠損するもののほぼ完形に近い。平棟・平造りで鋒はややふくらの枯れた形を呈す。刀身長 30.5 cm, 幅 2.4 cm, 棟幅 0.5 cm を測り短刀に近い。関部ははっきりしないが両関となるであろう。茎は断面台形状を呈し、幅 2 cm と刀身に比べてあまり差はない。関部より 7 cm の位置に断面方形の目釘が片側のみ遺存する。現存長 0.9 cm を測る。鐔・縁金具とも刃側にのみ遺存する。鐔は推定長 4 cm, 幅 3.1 cm を測り倒卵形を呈す。小形の喰出鐔である。木質は刀身部のほぼ全面に良好に遺存する。

刀子 2は鋒および茎尻を欠損する。関は棟・刃側につくが形態は異なる。身部は幅 1.0 cm, 棟幅 0.3 cm を測り、関部から徐々に幅を狭める。茎は断面長方形状を呈し、棟幅 0.3 cm を測る。木質は茎部に若干付着する。3は身部を欠損する。関は棟・刃側ともわずかに認められる。茎部は長さ 5.0 cm を測り、断面長方形状を呈す。関部より徐々に幅を狭め、茎尻部は若干欠損するが鋭く尖る形を採るものと思われる。関部には縁金具が断片ながら遺存する。目釘孔は認められなかった。

第2主体部

本主体部は墳丘の西側裾部に構築されるが、第1主体部のように周堀に沿うものではなくややずれて位置する。そのために、墳丘およびテラス部分にまたがっており、墳丘構築のどの段階で掘り込まれたものかは残念ながら確認できなかった。ただし、墳丘構築前の段階に設けられたとするならば部分的に盛土を覆うことは不自然であり、第1主体部同様墳丘完成後に掘り込まれた

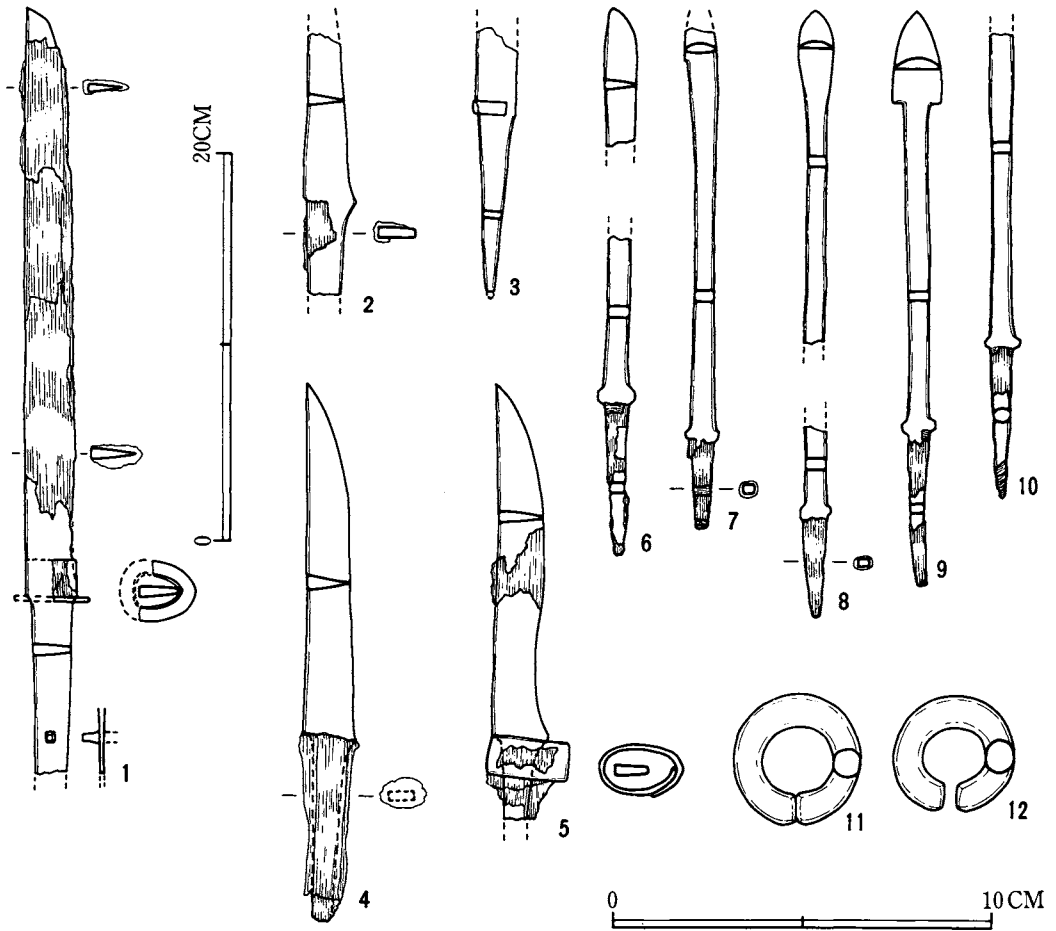


第81図 1号墳第2主体部実測図

ものと考えたい。

土塚の平面形は隅のやや丸い長方形を呈し、規模は長さ4.9m、幅1.9m、深さ0.4mを測る。主軸方位はN-66°-Wを指す。底面はほぼ平坦である。土塚内側に幅5cm程の粘土帯が認められることより木棺の存在が確認された。木棺の規模は長さ3.8m、幅1.0mを測り、底面は土塚と同一のレベルに存する。木棺の形態は不明であるが、西側小口部に向かって幅を減少していき、小口部は平坦な面を形成していない。小口部の粘土の存在からみて掘り過ぎはなく、棺の形態がこのような形を呈していたものと思われる。なお、木棺は土塚の西側に寄って埋置されている。

本主体部内から出土した遺物は刀子・鉄鏃・耳環・玉類である。鉄鏃は中央やや西寄りにまとまった状態であり、刀子は4が棺の北壁沿いに、5が玉類付近に認められた。耳環4点と玉類77点は東側小口部に集中している。西側の耳環2点は鉛製ゆえにほとんど風化してしまい痕跡をとどめる程度であったが、これらが一対になることは確実である。そうすると、11・12の耳環は鉄製と銅地金張製の違いがあるものの、これらが一対となることもまた当然であろう。ただ、材質の異なる耳環を対としたことには疑問が残る。また、人骨は遺存しないものの、耳環が2対副葬



第82図 1号墳主体部出土遺物実測図

されている状況から被葬者が2体存在していたことが想定される。本来追葬が不可能な木棺直葬であることからすれば、当初より2体埋葬していたことが想定されよう。これは、第1主体部の木棺幅より本棺が2倍程の広さを有していることからもうかがうことができよう。ただ、本主体部が封土の存在しないテラス面に構築されることは、木棺の蓋を外せば追葬が可能であり、この状況も否定できない。

第2主体部内出土遺物（第82・83図、図版40・41）

刀子 4は全長 13.8 cm を測る完形品である。身部長 9.0 cm，身幅 1.1 cm，棟幅 0.3 cm を測る。鋒はややふくらの枯れた形を呈し、刃部に明瞭な肩をもたない。茎は長さ 4.8 cm を測り、断面長形状を呈す。関は両側にあり、棟側は直角に近く切り込まれている。木質は茎部全体に良好に遺存する。縁金具・目釘孔等は認められなかった。5は茎尻部を欠損する。身部長 9.0 cm，身幅 1.2 cm，棟幅 0.2 cm を測る。鋒は4とほぼ同様であるが、棟は中央から鋒にかけてやや外

反し、刃部は関部から中央にかけて大きく彎曲する。これは使用による磨滅を示すものであろうか。関は両側にあり、4と同様の形態を呈す。縁金具が2.2 cm×1.3 cm、厚さ0.1 cm程で完存する。これは幅1.3 cmの一枚の鉄板をまるめて造ったものであり、刃側で1 cm程合わせ目が重なる。木質は身部および基部に若干遺存する。

鉄鏃 出土位置は集中するものの、本数は少なく形態的にもまとまりがない。身の形態で分けると、6は無関片刃箭式、7は片関、8は無関の鑿箭式、9は三角形式となり、7～9の断面は片丸造りを示している。10は身部を欠損する。いずれも長い篋被ぎと棘状突起を有す。茎は10がやや丸味をもつ他は方形の断面を呈し、木質が遺存する。

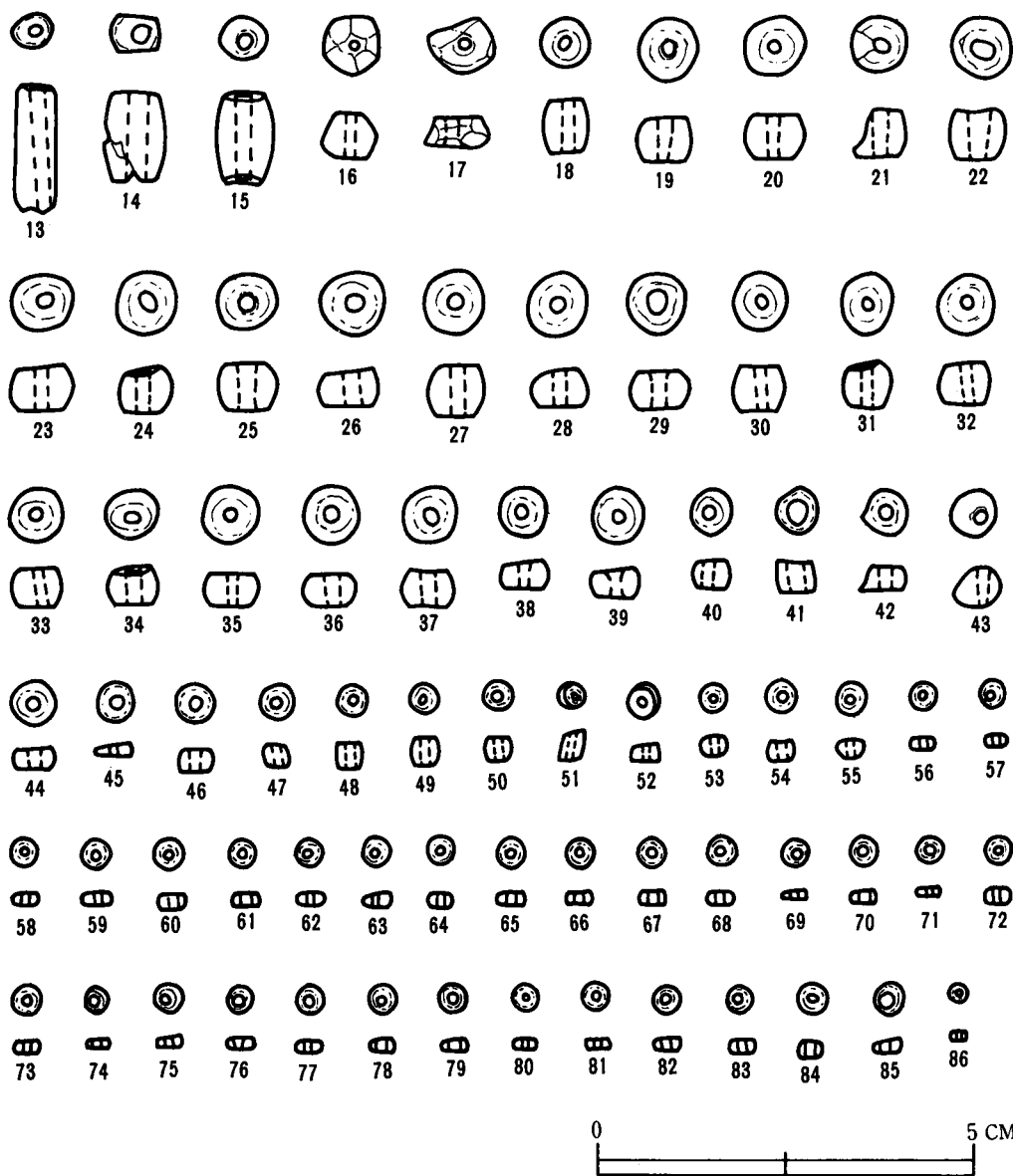
耳環 底面から4点出土し、前述したように11・12が一对、図示し得なかった鉛製の耳環が一对をなす。11は鉄製で、外径3.4 cm、内径1.9 cmの正円形を呈す。断面も径0.7 cmの円形を示す。環体の隙間は銹膨れのため付着しているが、本来存在していたものである。12は銅地に鍍金したものであるが金膜は完全に剝落している。外径3.2 cm×2.9 cm、内径1.6 cm×1.4 cmを測り、11よりやや小形となる。断面は0.9 cm×0.7 cmで楕円形を呈す。隙間は0.3 cm開く。鉛製の2点は腐蝕が著しく、法量、形態とも不明であるが、環体の断面は径0.7 cmの略円形を呈すものである。

玉類 玉類は計77点検出されたが3点は図示し得なかった。その出土状態は全体に雑然としているが、詳細に観察すると2群のまとまりがみられる。先述したように、被葬者が2体存在することからこれは当然考えられることであるが、どの被葬者(対となる耳環)に帰属するものであるかは判明しない。さらに、外側の輪郭が円形を呈することから、埋葬時に玉の緒を切ることはなかったことが想定される。13は土製の管玉で、長さ16.3 mm、径5.3 mm、孔径1.8 mmを測る。穿孔は両側から施される。胎土に砂粒を多く含むが、比較的丁寧に整形される。部分的に破損しており、その箇所には鼠によるものと思われる噛み痕が認められる。14・15とも琥珀製の棗玉であるが、14は表面に光沢がなくあまり良好な質ではない。15は黒緑色を呈し表面につやがみられる。いずれも両側から穿孔され、規模も同様であるが、14が扁平な断面を呈すのに対し、15は丸味をもつ。16～52は白玉である。16・17が琥珀製、45・52が滑石製となる以外はすべてガラス製である。形態的にややばらつきがみられ、16・43のように算盤玉状を呈すもの、18・49・51のように縦長となるもの等が存在する。

第2号墳

(1) 墳丘と周堀(第76・78・84図、図版29・30)

本墳は第1号墳の南側に隣接して位置する。伐木後全容が明らかになると、旧状を比較的良好に遺存する円墳であることが想定された。ただ墳丘の東側部分は大きく削平される。土層断面観察用のベルトは本来1、2号墳を通して行うべきであるが、この削平を避けた結果、1号墳とはややずれた方位でベルトを設定しなければならなかった。墳頂部は標高31.2 m、北西側平坦面と



第83図 1号墳第2主体部出土玉類実測図

の比高は2.5mを測る。

墳丘は腐植土である旧表土上に積み上げて形成される。旧表土は、南北径16.5m、東西径19.5mの範囲で遺存しており、略円形のプランを呈す。厚さはほぼ均一で5~10cmを測るが、断面図(第78図)で明らかなように東側に向けて徐々に傾斜する。これは墳丘東側が斜面に面する立地からみて、墳丘築造当時の旧地形を表わしているものである。

墳丘構築はまず、この旧表土の範囲設定とそれに伴う周囲の削平が行われる。削平の範囲がど

れ程まで及んでいたかは明確にすることはできなかったが、平坦面である墳丘西側の周堀をみると、墳丘側の上端が外側にくらべて15cm程高いレベルに存することから、削平範囲が周堀外側まで及んでいたことは予想されよう。また、旧表土面と墳丘西側の周堀外端との比高は1号墳同様0.5m前後を測る。

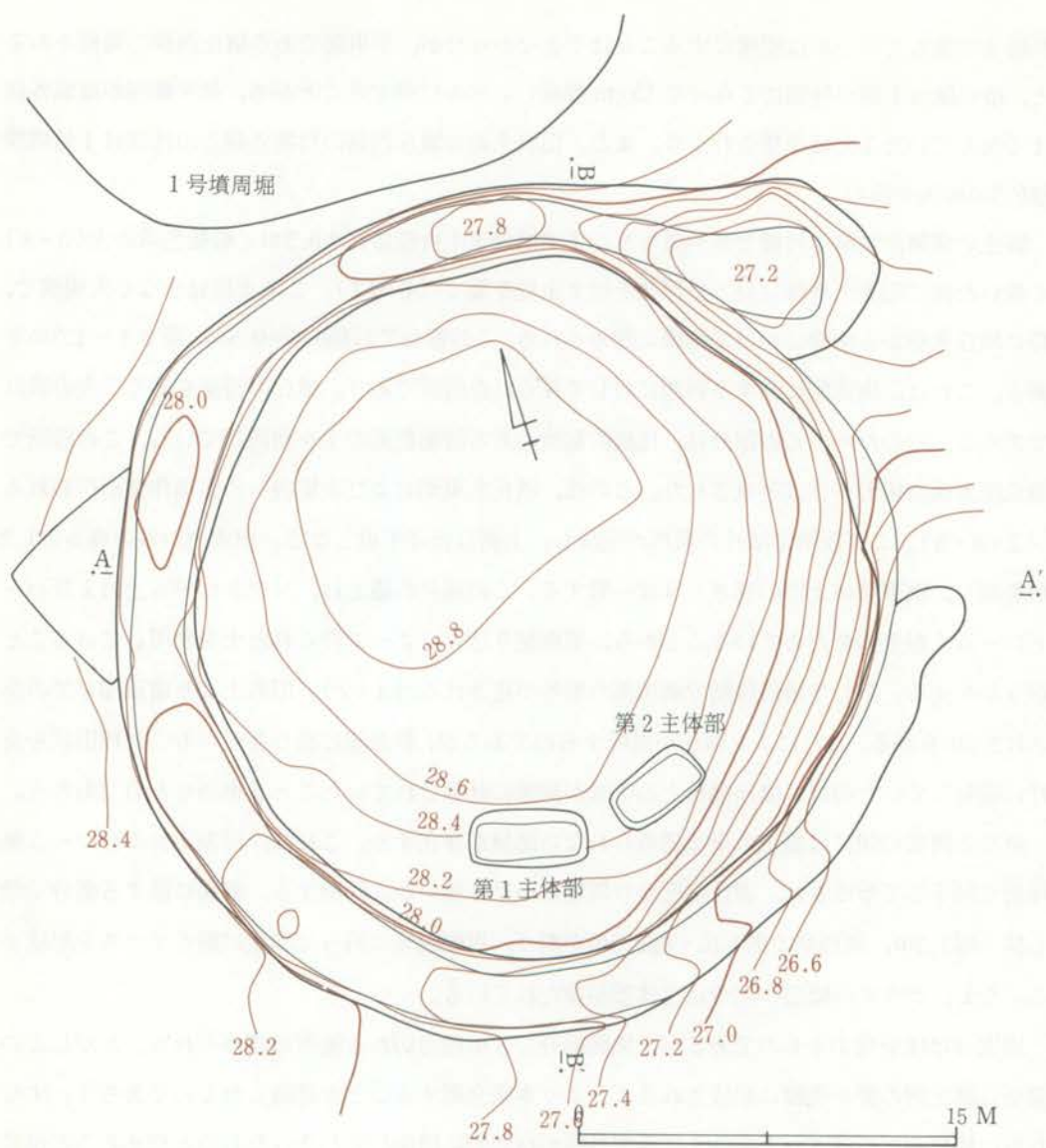
盛土の構築法は第1号墳とやや異なり、まず旧表土中央部に高さ0.5mで暗褐色系の土(3・8)を敷いた後に旧表土外縁に沿って環状を呈す土堤を築く(6・7)。この土堤はかなり大規模で、特に墳丘東側から南側にかけて明瞭に認められる。この部分では幅0.6~0.8m、高さ1~1.3mを測る。これは、南東側に面する斜面に対して採られた措置であり、墳丘の滑落を防ぐ工夫の表れであろう。そのためにこの部分は、比較的粘性のある暗褐色系の土を利用している。この段階で墳丘南東側の墳形がほぼ形成された。この後、墳丘北東部および土堤内への充填作業が行われる(2・4・5)。この段階で墳丘の概形が完成し、上面はほぼ平坦となる。旧表土からの高さは1.2mを測り、南東側の土堤の高さとほぼ一致する。この部分の盛土は、ソフトローム土およびハードローム土が主体を占めていることから、周堀掘り込みによって得られた土を利用していることがうかがえる。そして最終段階で墳頂部の整形が施される(1・2)。旧表土より墳頂部までの高さは2.5mを測る。これにより墳丘が完成するのであるが、斜面部に面しながらもこれ程旧状を良好に遺存していたのは、墳丘構築上の工夫が綿密に計画されていたことを物語るものであろう。

墳丘と周堀の間には盛土の全く認められない部分が存在する。これは、旧表土およびローム漸移層を削平して形成され、墳丘端部から周堀にかけて緩やかに傾斜する。斜面に面する部分で最も狭く幅3.5m、南西側で最も広く幅5.5mを測り、周堀内側に沿って環状に廻るテラスを形成する。なお、テラスの幅広の部分に主体部が穿たれている。

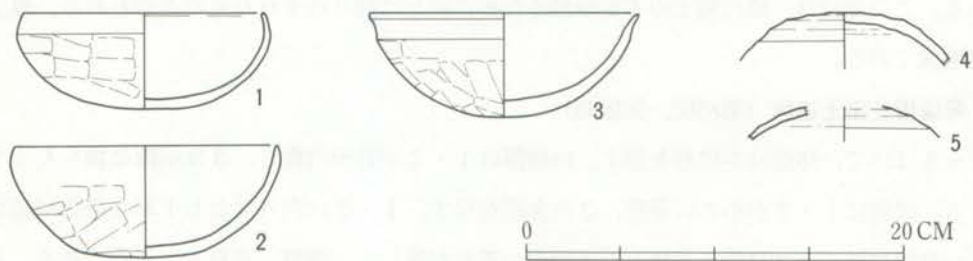
周堀はほぼ全周するものであるが、東側部分で3m程途切れる箇所が認められる。ただしこの箇所は墳丘側の壁が明瞭に形成されることより本来全周することを意識したものであろう。すなわち、傾斜面に形成されるがゆえに周堀外端が自然的に消失してしまったものと捉えることが妥当であろう。周堀内縁径は南北27m、東西26m、外縁径は南北32.5mを測る。幅は3~4m、深さ0.4~0.5mとほぼ一定であるが、墳丘の北東側で傾斜地に移行する部分は広く深く掘り込まれている。この部分は、墳丘盛土の不足を補うために新たに掘り込まれたものと思われる。覆土は自然堆積である。

2号墳墳丘出土遺物(第85図、図版45)

1~3は坏で、体部は半球形を呈す。口縁部は1・2が若干内彎し、3は明瞭な稜をもって外反する。底部は1・2が小さい平底、3が丸底を呈す。1・2は内外面とも丁寧な調整が施され、赤彩が鮮明に残る。3は胎土が粗いため器面の荒れが著しく、調整、赤彩とも不明である。4・5は須恵器の坏蓋で、図示の¼程遺存する。天井部は回転ヘラ削りが施される。胎土・焼成とも良好で、灰褐色を呈す。



第84图 2号墳周堀実測図



第85图 2号墳墳丘・周堀出土土器実測図

(2) 主体部 (第86・87図, 図版30・31)

本墳からは第1号墳同様2基の主体部が検出された。いずれも墳丘南側のテラス面に位置し、周堀と併行する。周堀内縁より3mに南壁を置き、両者は1.2mの間隔をもって構築される。なお、土壇北壁は旧表土の端部に相当する。

第1主体部

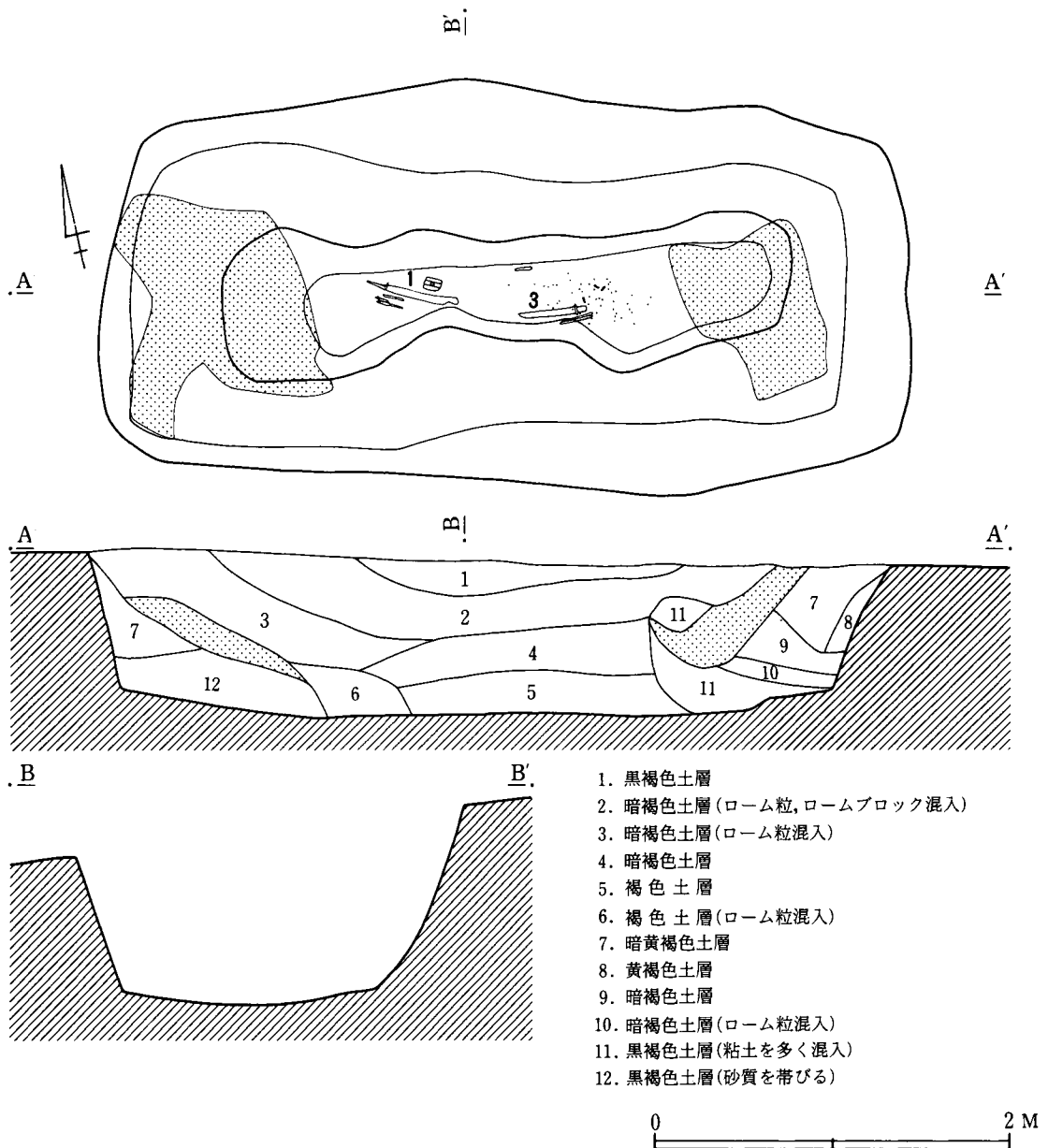
本主体部は墳丘外側のテラス面にローム漸移層を切り込んで構築される。

土壇の平面形は略長方形を呈す。規模は長さ4.6m、幅2.2m、深さ0.9mを測り、主軸方位はN—77.5°—Wを指す。土壇内部には比較的多量の粘土が検出された。位置からみると木棺の両小口部に充填されたようであるが、木棺の腐朽に伴いやや移動したような状況である。木棺の形態・規模は不明である。

本主体部内から出土した遺物は、直刀3振、刀子2点、鉄鏃16本、小札、耳環3点、玉類54点である。遺物はその出土状態よりほぼ2群に分かれており、1の直刀を中心に鉄鏃・小札が、2・3の直刀を含んで鉄鏃・刀子・耳環・玉類が認められる。玉類および耳環が土壇の東側に存することから、被葬者の頭位を東に置いたことは明確であり、また耳環が3点（鉛製のため原状を復元することが不可能な程風化していることから、本来は4点副葬されていたのではなかろうか。）検出されたことは、第1号墳第2主体部と同様に2体埋葬されていたことを示唆するものであろう。さらに、1の直刀付近にみられる10本程の鉄鏃の形態が同一であることから、これらをセットとして把えることも可能である。そうすると、玉類とこの遺物群の位置関係が不自然であり、あるいは追葬ということが考えられるかもしれないが断定はできない。

第1主体部内出土遺物 (第88・89・90図, 図版41・42・43)

直刀 1は茎尻を若干欠損するが、全長39.2cmを測る平棟・平造りの短刀である。刀身長29.9cm、身幅3.1cm、棟幅0.8cmを測り、鋒に向けて徐々に幅を減少する。鋒はややふくらの枯れた形態を呈し、棟が若干内反りとなる。茎は幅2cm程でほぼ一定で断面長方形を呈す。関は両側に存し、いずれもほぼ直角に切り込まれる。縁金具が遺存する。鐔・目釘孔は認められなかった。木質は身部に遺存する。2は推定長22cmを測るきわめて短い刀である。刀身長14.8cm、身幅2.0cmを測り、鋒はふくらを有す。茎は関部から急激に幅を狭めるもので、端部は鋭く尖る。茎尻より1.5cmの位置に断面方形で長さ1.4cmの目釘が完存する。関は両側に施されると思われるが明瞭ではない。小形の縁金具が断片ながら遺存する。3は全長30.1cmを測る完形品で、平棟・平造りの短刀である。刀身長23.0cm、身幅2.7cm、棟幅0.5cmを測り、先で幅を狭める。鋒はふくらの枯れたカマス鋒に近くなる。茎部は幅1.7cmで尻は丸味をもっておさめられる。茎尻より1.5cmの位置に断面略円形、長さ2.0cmの目釘が完存する。関は両側に認められ、いずれもほぼ直角に切り込まれる。鐔・縁金具とも遺存する。鐔は外径6.2cm×4.2cmの倒卵形を呈し、窓は開いていない。木質は刃部に若干遺存する。



第86図 2号墳第1主体部実測図

刀子 8の刀子は鋒を欠損する。茎は長さ 5.1 cm, 幅 0.8 cm を測り, 断面長方形状を呈す。関部より直線的に外反し, 尻は丸味をもっておさめられる。身部は遺存状況から判断すると, 茎にくらべてかなり短くなり, 何度か研ぎ返されたことが想定される。関は両側に施される。木質は茎に遺存する。9は片関の刀子で, 茎および鋒を欠損する。

鉄鏃 11~19が2・3の直刀に伴って, 20~23が1の直刀に伴って出土しており, 形態の差異からこの2つのグループが考えられる。24は単独出土で帰属が不明であるが, 形態からすれば後

者のグループに含まれるものであろう。11～20は無関の片刃箭式で、11・17・18の身部には肩が形成される。いずれも長い篔被ぎと棘状突起を有す。11は全長 17.5 cm を測り、良好な遺存状態である。茎尻には地鉄への巻きつけが明瞭に観察される。21は鍔身を欠損するために明瞭ではないが、平造りに近い無関の鑿箭式となるものである。22はいわゆる剣身形と呼ばれる形態を呈し、身の長さ 4.3 cm を測る。これは篔被ぎおよび茎と同様の長さである。両丸造りとなる。茎には木質が良好に遺存する。23は長三角形、24は三角形の身を有し、両丸造りとなる。いずれにも腸袂りは認められない。25・26は篔被ぎから茎にかけての部分である。

小札 10の小札は4枚のみ重なって出土した。紐は認められないものにつづられた状態である。小札は長さ 7.2 cm、幅 2.9 cm でほぼ一定である。厚さは 1 mm 程である。孔は錆のため不明な部分もみられるが、観察される孔の配置からすると図のようになるであろう。孔径は 2 mm 程である。

玉類 50がメノウ製、51～103はガラス製である。すべて白玉の形態を採るものである。径は最大 8.0 mm、最小 2.6 mm を測り、ややばらつきがみられるものの、ほとんどが 3.0～4.0 mm の範囲に含まれており、ある程度統一されていたものである。厚さも同様に最大 5.4 mm、最小 1.6 mm となるものの、ほとんど 2.0～3.0 mm となる。孔径はほとんどが 1.2 mm 前後を測る。穿孔方法は、すべて片側となるようである。色調は紺系統が主体を占め、緑色を呈すものが5個のみである。孔のまわりに存在する気泡から引き延ばしによって作られたことが想定される。

第2主体部

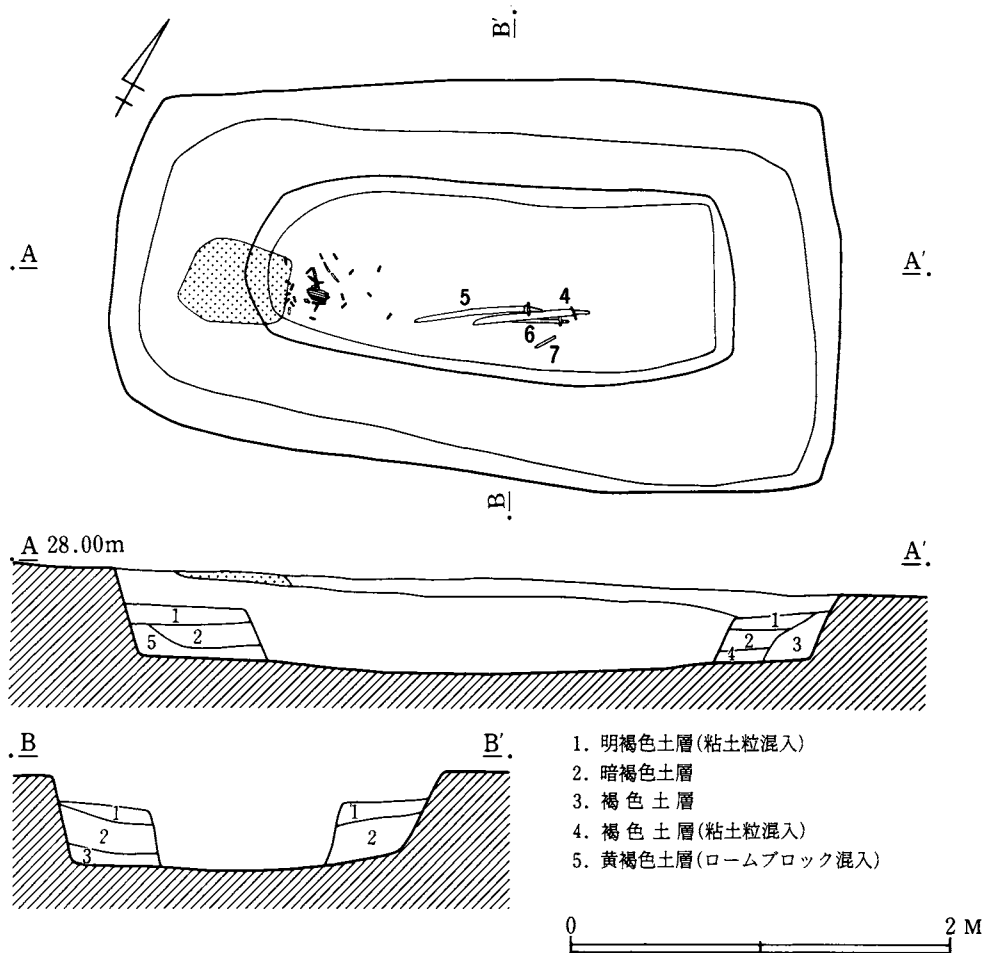
本主体部も第1主体部同様、旧表土端に接してテラス面にローム漸移層を切り込んで構築される。

土壇の平面形はやや不整の長方形を呈し、規模は長さ3.9m、幅2.1m、深さ0.5mを測る。主軸方位はN-116.5°-Wを指す。底面はほぼ平坦である。土壇内には若干の粘土が検出されたが、本来の使用目的を示すような状況は認められない。ただ土壇中央部に木棺の痕跡が明瞭に検出された。棺底面を土壇と同一のレベルに置き、規模は長さ2.6m、幅1.0mを測る。木棺自体の形態は不明であるが、1号墳第2主体部と相似するものであろう。

本主体部内から出土した遺物は比較的多く、直刀3振、刀子1、鉄鍔23本以上、土製丸玉8点が検出された。直刀は棺中央の南壁側に、茎を東向きに、刃部を内側に向けた状態でまとまって出土した。鉄鍔は西側小口部に集積されたような状態である。土製丸玉は散在するものの東側小口部に近く認められる。これらの副葬状況からみると、被葬者は東側に頭位を置いたものと思われる。

第2主体部内出土遺物（第88・89・90図、図版41・42・43）

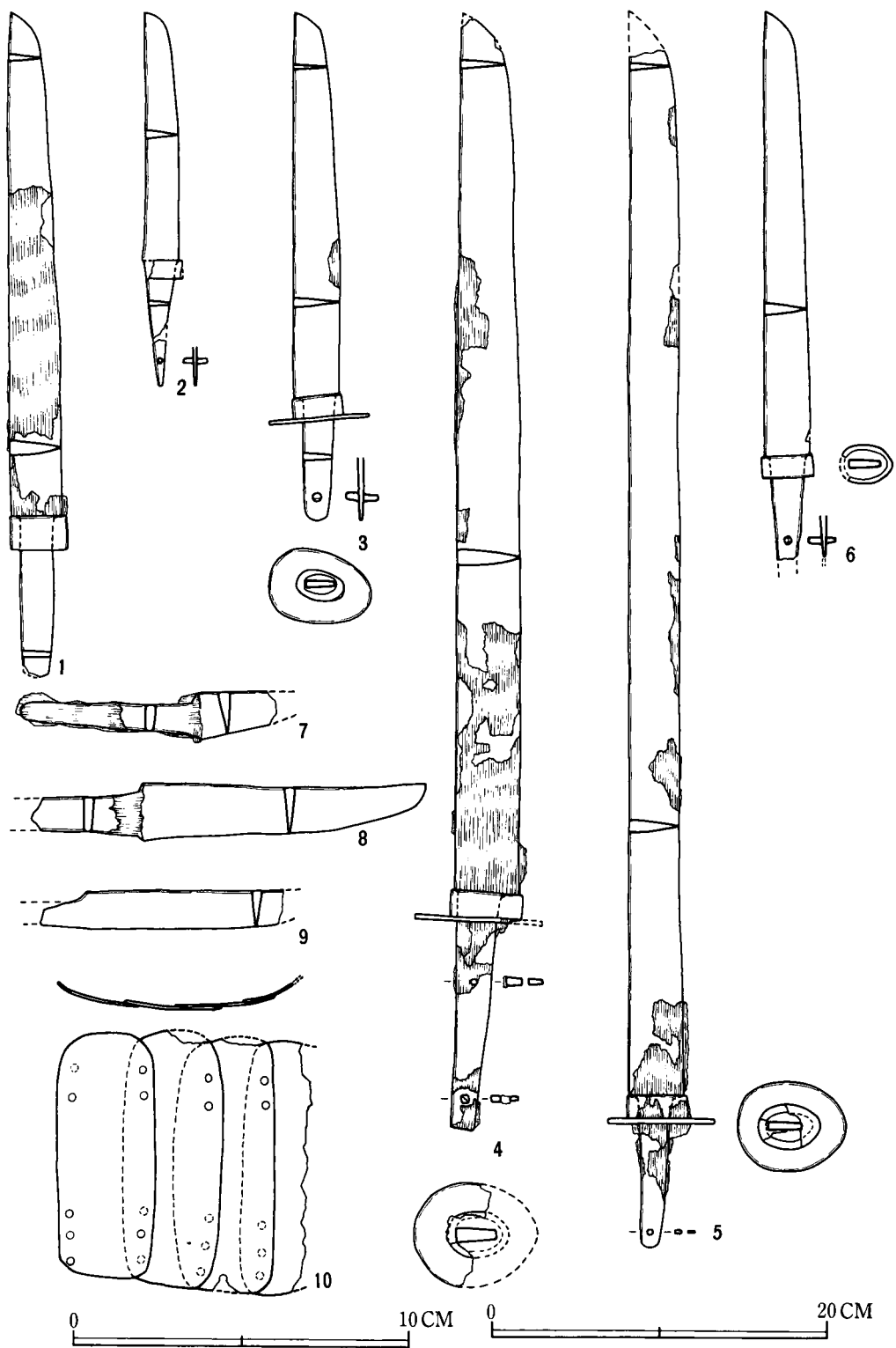
直刀 4は平棟・平造りで全長 65.5 cm を測る。刀身長 51.5 cm、身幅 3.8 cm、棟幅 0.8 cm を測り、鋒に向けて徐々に幅を狭める。鋒はややふくらの枯れた形態を呈す。関は両側に存し、い



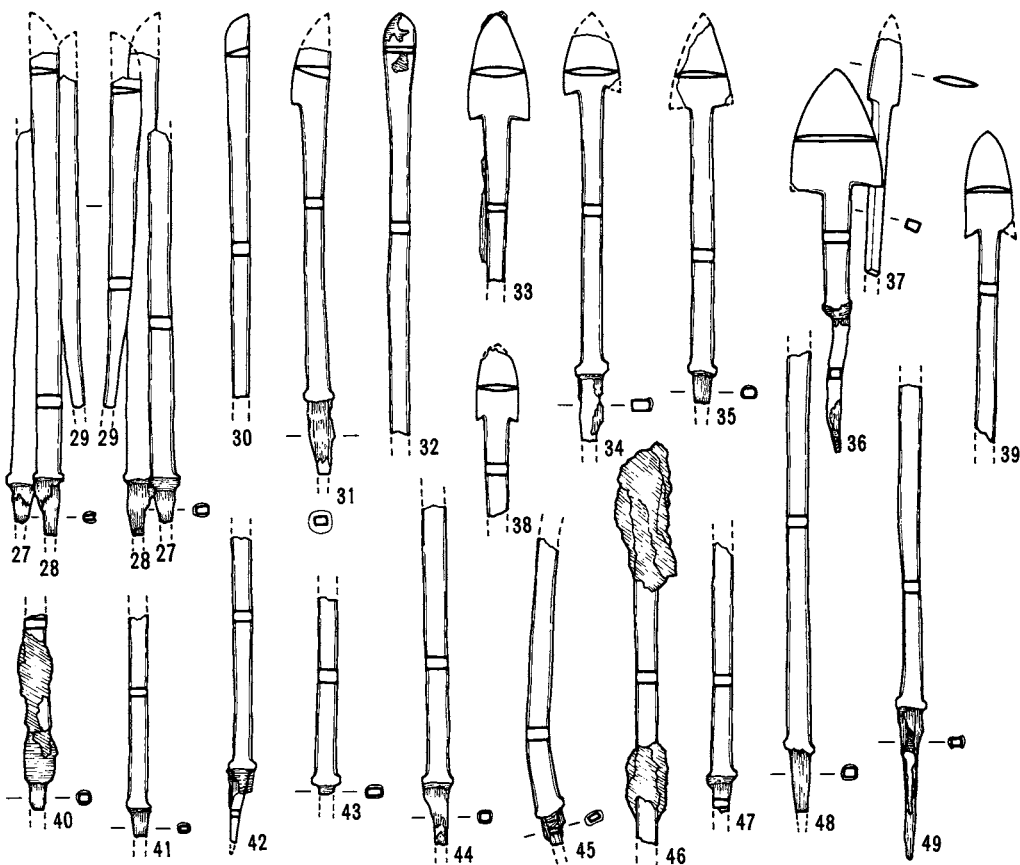
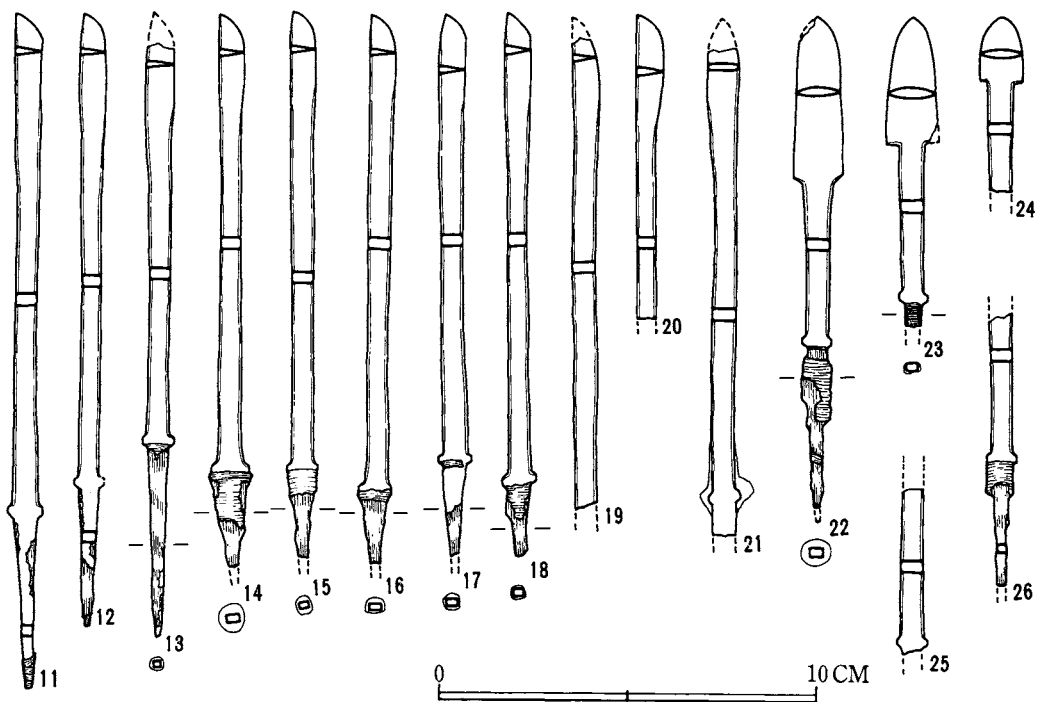
第87図 2号墳第2主体部実測図

ずれもほぼ直角に切り込まれる。茎は尻に向けて幅を減じる。関部より 5.3 cm と 12.2 cm の位置に目釘孔が穿たれる。尻側の孔内には目釘が折れて遺存する。鐔・縁金具とも認められるが、鐔は半分以上欠損するために形状・規模は不明である。木質は若干付着する。5 は鋒を欠損するものの、全体に良好な遺存状態である。平棟・平造りとなる。身部は推定長 63.5 cm, 身幅 3.0 cm, 棟幅 0.7 cm を測る。全体的に細身である。茎は刀身に比して短く、やや外反する。茎尻より 0.9 cm の位置に目釘孔が穿たれる。関は両側にほぼ直角に切り込まれる。縁金具・鐔とも良好に遺存する。鐔は外径 6.5 cm × 5.2 cm を測り、無窓の倒卵形を呈す。木質は若干付着する。6 は茎尻を欠損する。刀身長 26.3 cm, 身幅 2.5 cm, 棟幅 0.7 cm を測る短刀である。平棟・平造りで鋒はふくらのある形態を示す。関は両側に切り込まれ、縁金具が遺存する。茎は関部より尻に向けて幅を減じる。関より 5 cm の位置に断面方形で長さ 1.7 cm を測る目釘が遺存する。

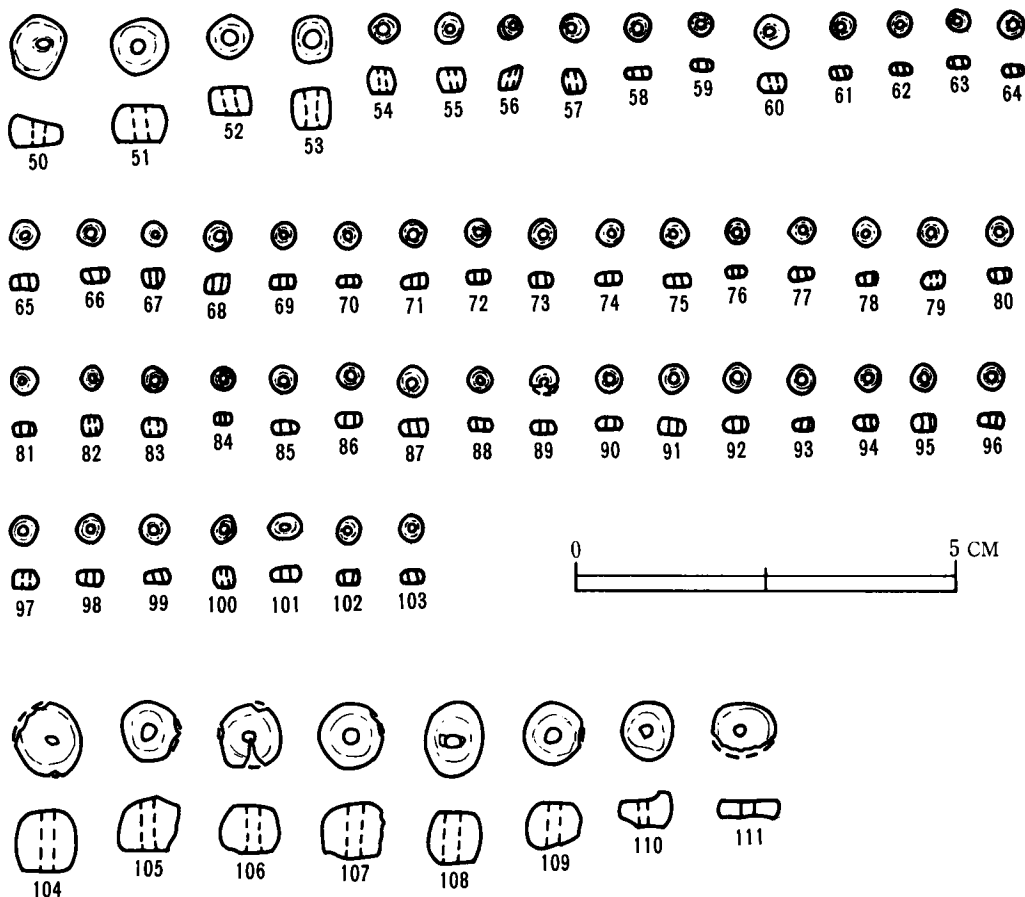
刀子 7 の刀子は茎尻を欠損するが、遺存は比較的良好である。身部長 8.5 cm, 身幅 1.3 cm, 棟



第88图 2号墳主体部出土遺物実測図(1)



第89图 2号墳主体部出土遺物実測図(2)

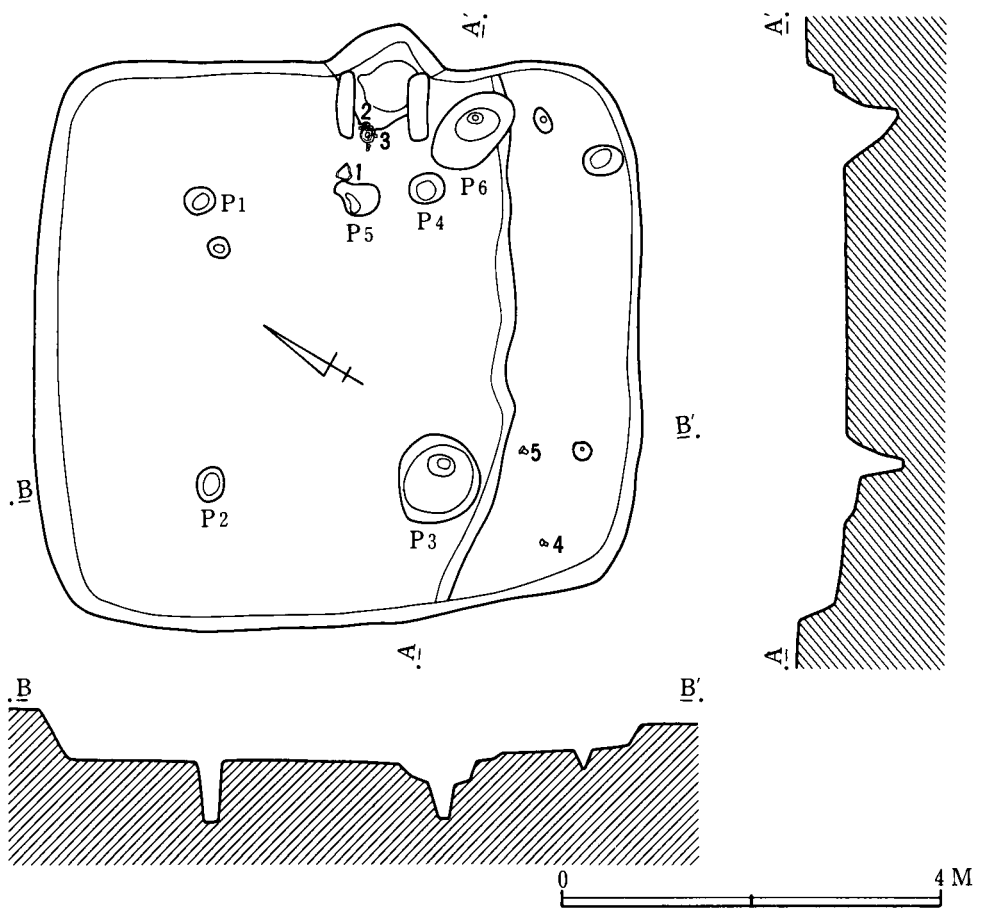


第90図 2号墳第1主体部(上)・第2主体部(下)出土玉類実測図

幅 0.3 cm を測り、中央から鋒にかけてやや外反する。関は両側に切り込まれる。茎は断面長方形で、木質は関部のみに遺存する。縁金具等は検出されなかった。

鉄鏃 28・29は鏃身を若干欠損するが、その断面形態より30とともに無関の片刃箭式となるものである。31も鏃身を若干欠損するが、平造りの片関片刃箭式である。32は平造りの無関鏃箭式で、鏃身に木質が若干遺存する。いずれも長い筥被ぎと棘状突起を有す。33～36は三角形式、37・38は長三角形式を呈す。両丸造りが主体であるが、35は平造りに近くなり、36は平造りに近い片丸造りとなる。36の鏃身は長さ 3.0 cm、幅 2.4 cm とかなり大きく、茎も扁平で短くなる。33・34・37・38には若干腸挟りが認められる。39は逆刺の小さい腸挟りの抑葉式で、片丸造りとなる。40～49は筥被ぎから茎にかけての部分である。40・46の筥被ぎには斜走する木質が認められ、32の鏃身の木質とともに棺材の付着したものと考えられる。33の筥被ぎにみられる木質も同様である。

玉類 本主体部出土の白玉は第1主体部と異なり、すべて土製となる。径 7.4～9.3 mm、厚さ 2.9～7.7 mm を測り、やや大形となる。孔径も 2 mm 前後である。色調はすべて黒色を呈し、胎土はきわめて良好である。



第91図 9号住居址実測図

2. 住居址

9号住居址 (第91・96図, 図版32・45)

本住居址は2号墳の西側3m程に位置する。平面形はやや隅の丸い正方形を呈し、5.9m×6.4mの規模を測る。カマドを通る主軸はN-62.5°-Eを指す。壁はやや斜めに立ち上がり、確認面からの深さは北コーナーで50cm、南コーナーで20cmを測る。壁溝は認められない。床面はやや軟弱でほぼ平坦であるが、南東壁から1.3m程のところに10cm程の段差が認められる。この段差が何を意味するのかは不明である。ピットは計10か所検出されたが、このうち支柱穴となるものはP1~P4である。P3のみ2段掘り込みである以外は、径30cm程の略円形を呈す。深さはすべて60cm前後を測る。貯蔵穴はカマドの右側に隣接して穿たれる。長径1m、短径0.7mの楕円形のプランを呈し、深さ55cmを測る。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の中央よりやや南側に位置する。遺存状態は不良である。壁外への掘り込みは40cmで三角形状を呈す。煙道部の立ち上がりは緩やかで、底面は5cm程掘り込まれているにす

ぎない。袖部はローム土を基盤とした上に山砂を積んで形成される。天井部は崩落しており、火床上部に痕跡が認められる。焼土の堆積はあまり顕著ではなく、焚口部付近に若干みられる程度である。

本址から出土した遺物は鉢・高坏のみで、カマド前面および南コーナー部に集中する。

遺物 1・2は鉢形土器で、1は図示の $\frac{2}{3}$ 、2は図示の $\frac{1}{3}$ 程を欠損する。口縁部はいずれも短く、2はほぼ水平に開く。1は体部に張りを有し、最大径が口径とほぼ一致するが、2は張りがなく最大径を口縁部にもつ。1は調整が丁寧で、体部外面に横位のヘラ削り、内面にナデが施される。2は内外面ともナデ調整されるが、つくりが粗く体部外面に粘土の輪積み痕が残る。口縁部に歪みがみられる。胎土・焼成とも良好で、色調は赤褐色を呈すが、1の内面のみ黒色となる。3は完形の高坏である。口径 13.0 cm、器高 10.3 cm を測る。坏部に稜をもたず、口縁部が若干内彎する。脚柱部は筒状を呈し、裾部でほぼ水平に大きく開き端部はやや反り返る。坏部内外面とも丁寧にナデられるが、器面の荒廃が著しい。脚柱部の調整も丁寧である。胎土・焼成とも良好である。脚部内面以外に赤彩が施されるが遺存はあまり良くない。4・5は高坏脚部である。「ハ」の字状に開き、裾部との境は不明瞭である。外面に赤彩が施される。

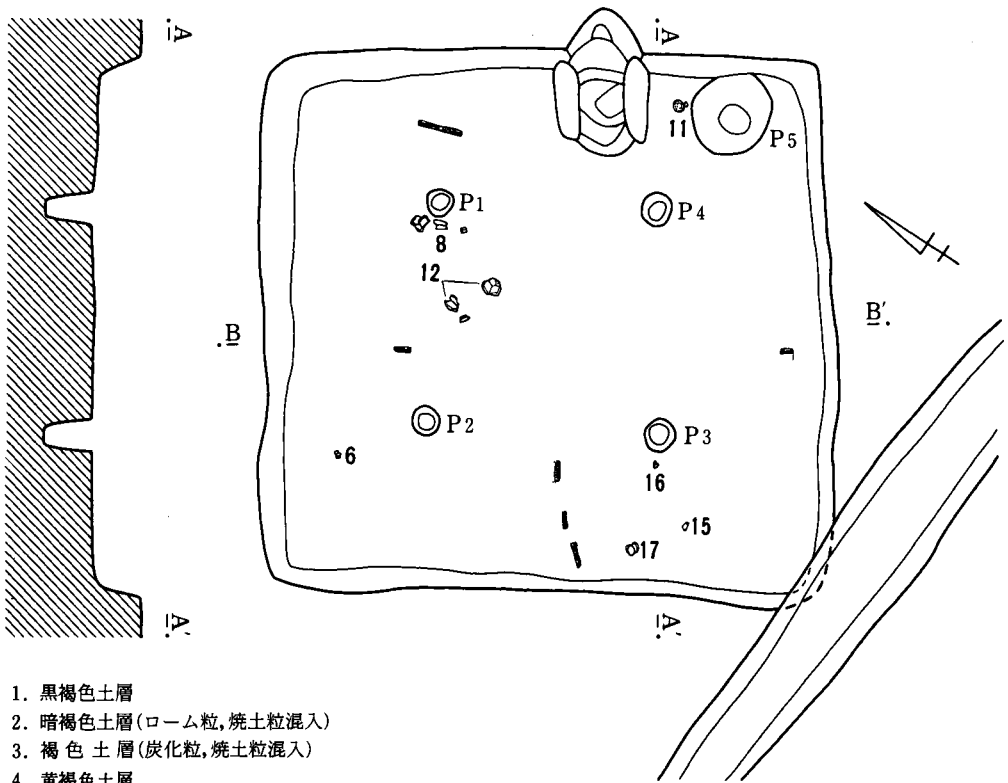
10号住居址（第92・96図、図版32・45）

本住居址は台地の南側に位置し、8号方形周溝遺構により南側コーナー部分を若干切られる。平面形はほぼ正方形を呈し、6.0m×5.6mを測る。カマドを通る主軸はN-58.5°-Eを指す。壁は床面からやや斜位に立ち上がり、確認面からの深さは50cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面は平坦で良好に固められている。ピットは5か所検出され、P1～P4は対角線上に丁寧に配置される柱穴である。径30cm程の円形プランを呈し、深さは50cm前後を測る。貯蔵穴P5はカマドの右側に北東壁に接して穿たれる。径90cm程の略円形のプランを呈し、深さは35cmを測る。覆土は自然堆積である。

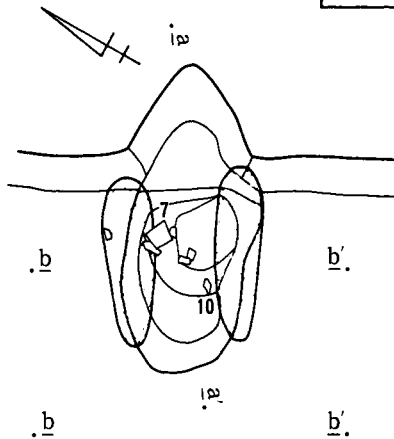
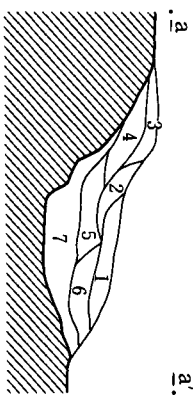
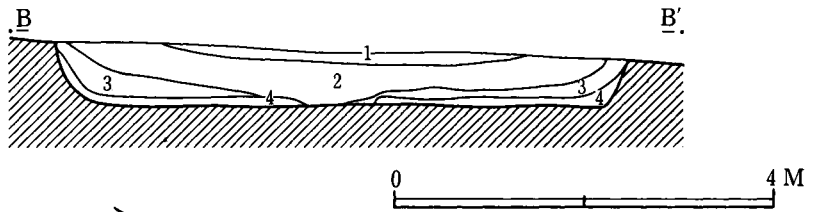
カマドは北東壁の中央よりやや南側に位置する。遺存状態は不良である。壁外への掘り込みは45cmを測り、三角形のプランを呈す。底面は楕円形状に10cm程掘り込まれ、煙道部の立ち上がりは緩やかとなる。袖部は暗褐色土を基盤とした上に山砂を積んで形成される。天井部は完全に崩落している。焼土は火床部から若干浮いた状態で比較的少量に認められる。

本址から出土した遺物は比較的多く、甕・甑・高坏・壺が検出された。カマド内にやや集中する以外は床面全体に散在する。

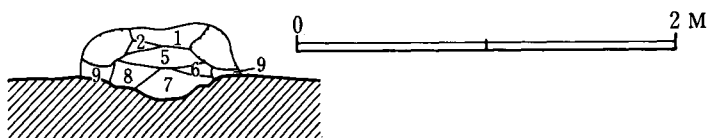
遺物 6・7は甕で、図示の $\frac{1}{4}$ 程の遺存である。6の口縁部は短く、緩く外反する。7の口縁部も短く、「く」の字状に外反する。胴部の張りは弱い。6が明褐色、7が赤褐色を呈す。8は口縁部が「コ」の字状を呈すもので、胴部を欠損するものの球形胴となるものであろう。内面に輪積み痕が明瞭に残る。9は小形の甕で、図示の $\frac{1}{3}$ 程欠損する。口縁部は直立し、上方でやや外反する。胴部外面には粗いヘラ削り、内面には横ナデが施される。胎土・焼成とも比較的良好で、暗



1. 黒褐色土層
2. 暗褐色土層(ローム粒, 焼土粒混入)
3. 褐色土層(炭化粒, 焼土粒混入)
4. 黄褐色土層



1. 明褐色土層(砂質)
2. 明褐色土層(やや砂質)
3. 黒褐色土層
4. 黒褐色土層(やや砂質)
5. 赤褐色土層(砂質の焼土)
6. 暗赤褐色土層
7. 黄褐色土層(ブロック状)
8. 褐色土層
9. 暗褐色土層



第92図 10号住居址・カマド実測図

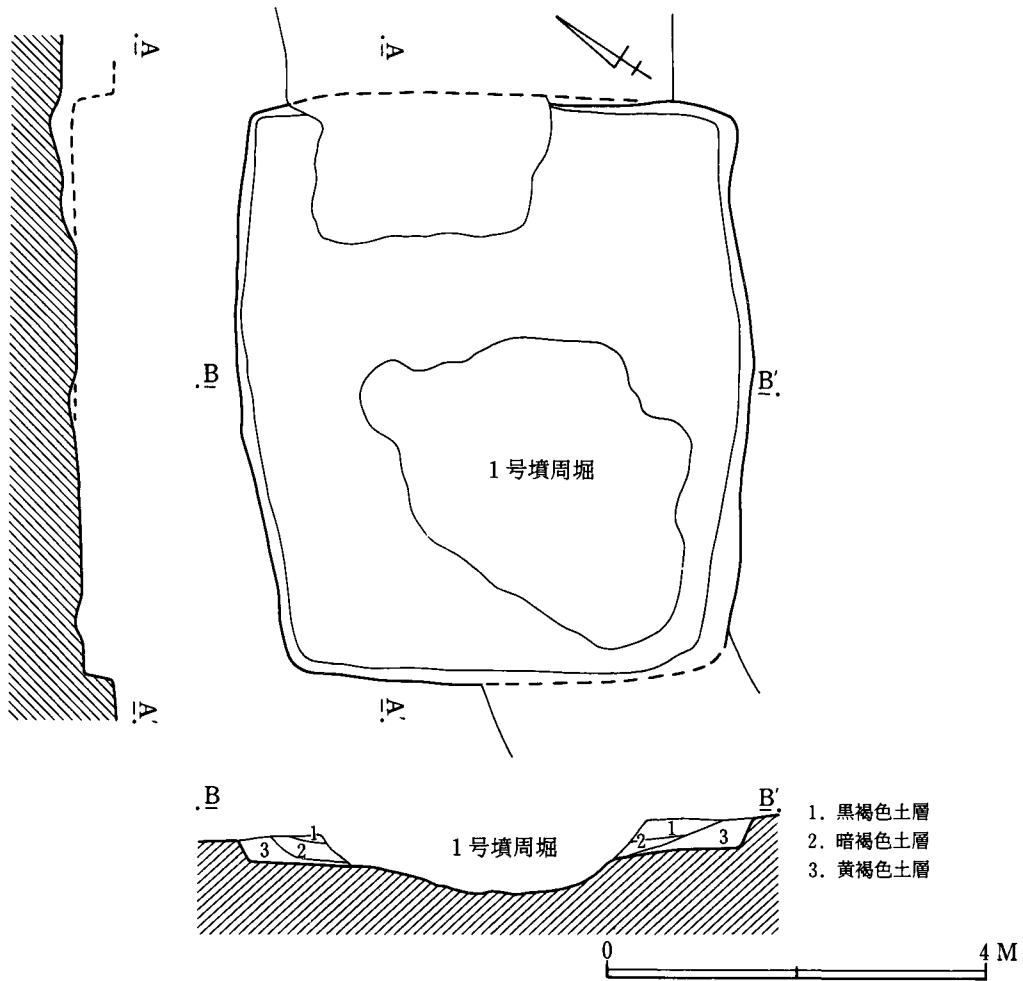
褐色を呈す。10は甕の胴部，11は甕の底部である。12は甕で，図示の $\frac{1}{2}$ 程の遺存である。口縁部は短く外反する。胴部は膨らみをもたず，下半で急にすぼまる。孔部はやや突出ぎみに整形される。胴部外面下位に粘土の輪積み痕が突帯状に残るが，内面はナデにより調整される。胎土に砂粒を含むが堅緻で，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈し，部分的に黒変が観察される。13は高坏の坏部で， $\frac{1}{3}$ 程遺存する。口縁部は大きく開き，ほぼ中位に明瞭な稜を有す。接合部が露呈しており，ホゾを差し込んで成形したことが窺える。内外面ともナデ調整されるが器面の荒廃が著しい。全体に赤彩が施される。14・15は高坏の脚柱部のみ遺存する。調整はいずれも丁寧であるが，胎土はやや粗く，焼成もあまり良くない。内外面に赤彩が施されるが14の方は遺存が良くない。17は埴で，口径 13.0 cm，器高 5.5 cm を測る。口縁部は短くわずかに外反する。底部は平底となる。体部外面・底部はヘラ削りで，内面には丁寧なナデが施される。胎土に砂粒を多く含むが焼成は良好である。底部以外に赤彩が施される。16は手捏ねのミニチュア土器で， $\frac{1}{4}$ 程欠損する。胎土に砂粒を多く含み暗褐色を呈す。

16号住居址（第93図，図版33）

本住居址は台地の北側，15号住居址の南東側に位置するが，1号墳周堀によって削平されており遺存状態はきわめて不良である。平面形は略正方形を呈すが，6.0m×5.5mと南北にやや長く全体的にやや歪みが認められる。主軸方位は不明であるが，他の住居址との関連から北東壁にカマドを有すものと思われる。壁は周堀によって北東壁および南西壁が大きく削平されるが，遺存部は，床面よりやや斜位に立ち上がり，確認面からの壁高は 30 cm を測る。ただし，1号墳構築の際に周囲の削平が行なわれていることを考えると，壁高は当然高くなることが予想される。床面も中央部が周堀によって削平されるがほぼ平坦となる。状態は比較的軟弱である。柱穴・貯蔵穴・カマド等は検出されなかった。遺物はまったく出土しなかった。

17号住居址（第94・96図，図版33）

本住居址は台地中央部，9号住居址の北東 5 m 程に位置する。2号墳周堀により東半分程を削平され，遺存状態はきわめて不良である。平面形は略正方形を呈し，6.4m×5.5mを測る。主軸方位はカマドが削平されるため明確ではないが，貯蔵穴の位置および他の住居址との関連から北東壁にカマドが付設されたものと考えられる。これからすると主軸方位はN-63°-Eを指すことになる。壁は床面からやや斜位に立ち上がり，確認面から 40 cm を測るが，16号住居址同様2号墳周囲の削平が考えられ，本来の壁高はさらに高いものであろう。床面はほぼ平坦で堅緻であり，周堀による削平が床面まで達していないため遺存は比較的良好である。ピットは5か所検出された。P1～P4は対角線上に丁寧に配置された柱穴で，径 30 cm 程の円形プランを呈す。深さはP1・P2・P4が 70 cm～80 cm，P3が 120 cm を測る。P5は貯蔵穴で東コーナー部に位置する。長径1.0m，短径0.7mの楕円形を呈し，深さは 70 cm を測る。覆土は自然堆積で，層中に焼土粒を多く含む。



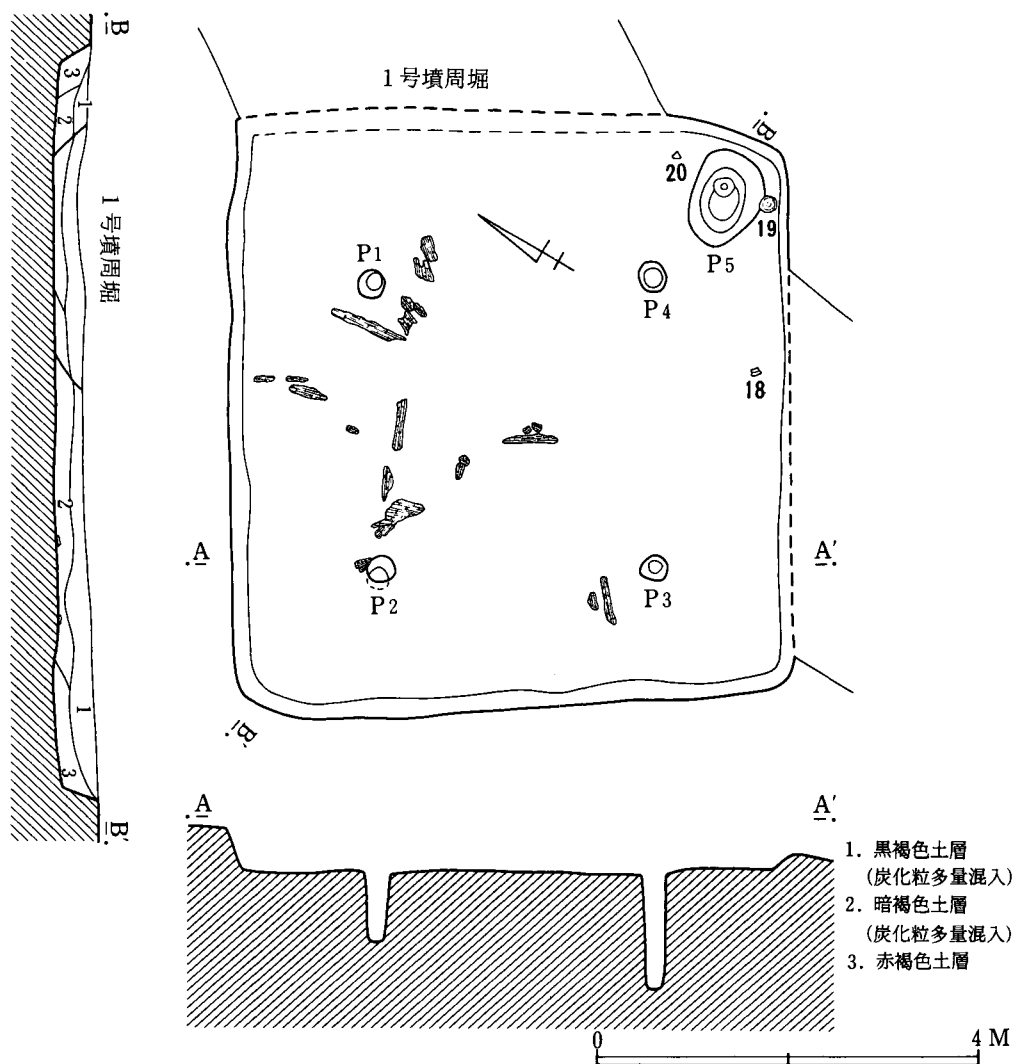
第93図 16号住居址実測図

本址より出土した遺物は少なく、西コーナー付近の床面より甕形土器の破片を3点出土したのみである。なお床面には炭化材が散在しており、あるいは焼失した可能性も強い。

遺物 18は甕の口縁部で、図示の $\frac{1}{4}$ 程遺存する。口縁部は短く直立する。胎土に砂粒を多く含むが、焼成は良好で淡褐色を呈す。19・20は甕の底部である。外面にヘラ削り、内面にナデが施される。19が暗褐色、20が赤褐色を呈すが、19の底部のみ赤彩が認められる。

32号住居址 (第95・97図, 図版33・34・44)

本住居址は台地のつけ根に近く、30号住居址の南西6m程に位置し、若干南に傾斜する面に構築される。平面形はやや歪みをもつものの、6.3m×6.3mを測る正方形を呈す。カマドを通る主軸方位はN-41°-Eを指す。壁は床面からやや斜位に立ち上がり、壁高は緩斜面に位置するため確認面から北側で45cm、南側で10cmを測るにすぎない。床面はほぼ平坦で良好に固められている。ピットは5か所検出された。P1~P4は径20~30cmの略円形を呈し、深さは80~100

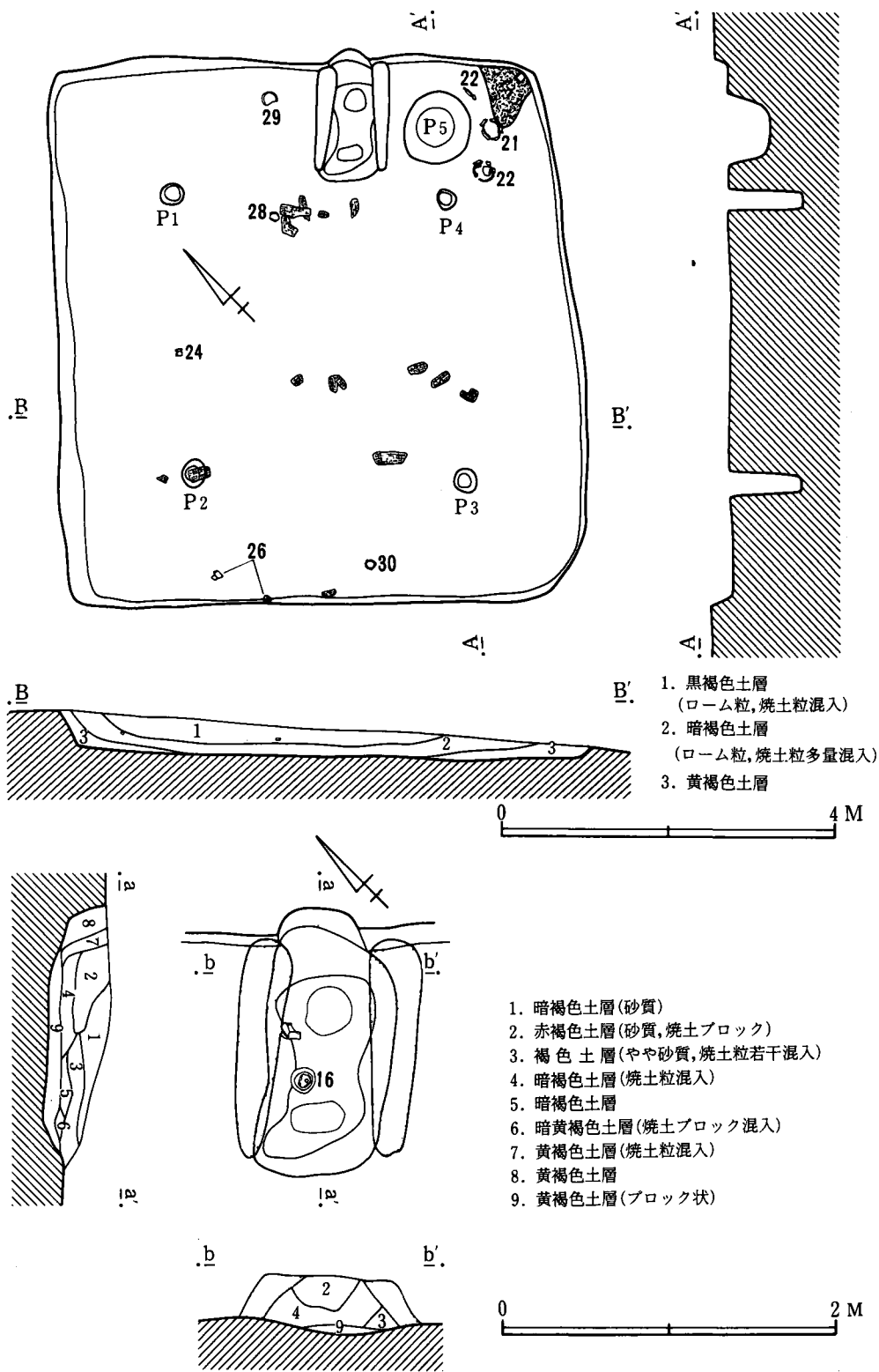


第94図 17号住居址実測図

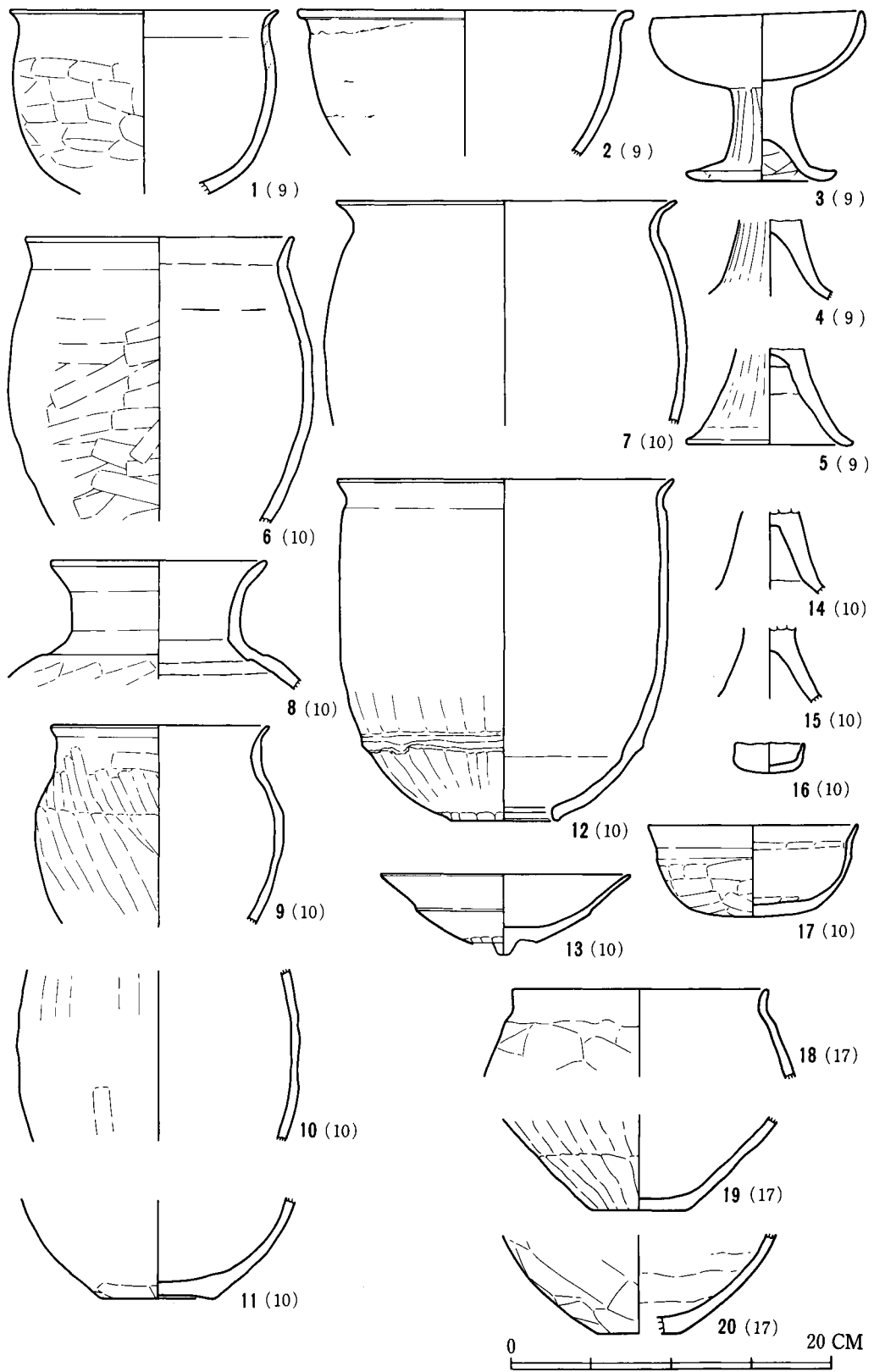
cm を測る。対角線上に丁寧に配置された柱穴である。P5 はカマドの右側に位置する貯蔵穴である。径 80 cm の円形プランを呈し、深さ 50 cm を測る。覆土は自然堆積で、層中に焼土粒が多く含まれる。

カマドは北東壁の中央よりやや東側に位置する。遺存状態は比較的良好である。壁外への掘り込みは浅く 10 cm を測るのみである。火床部の掘り込みは縦長の隅丸長方形を呈し、床面から 10 cm 程掘り込まれる。煙道部および火床部との明瞭な区別は認められない。天井部は崩落するものの、袖部は比較的良好に遺存しており、山砂を利用したことがうかがえる。

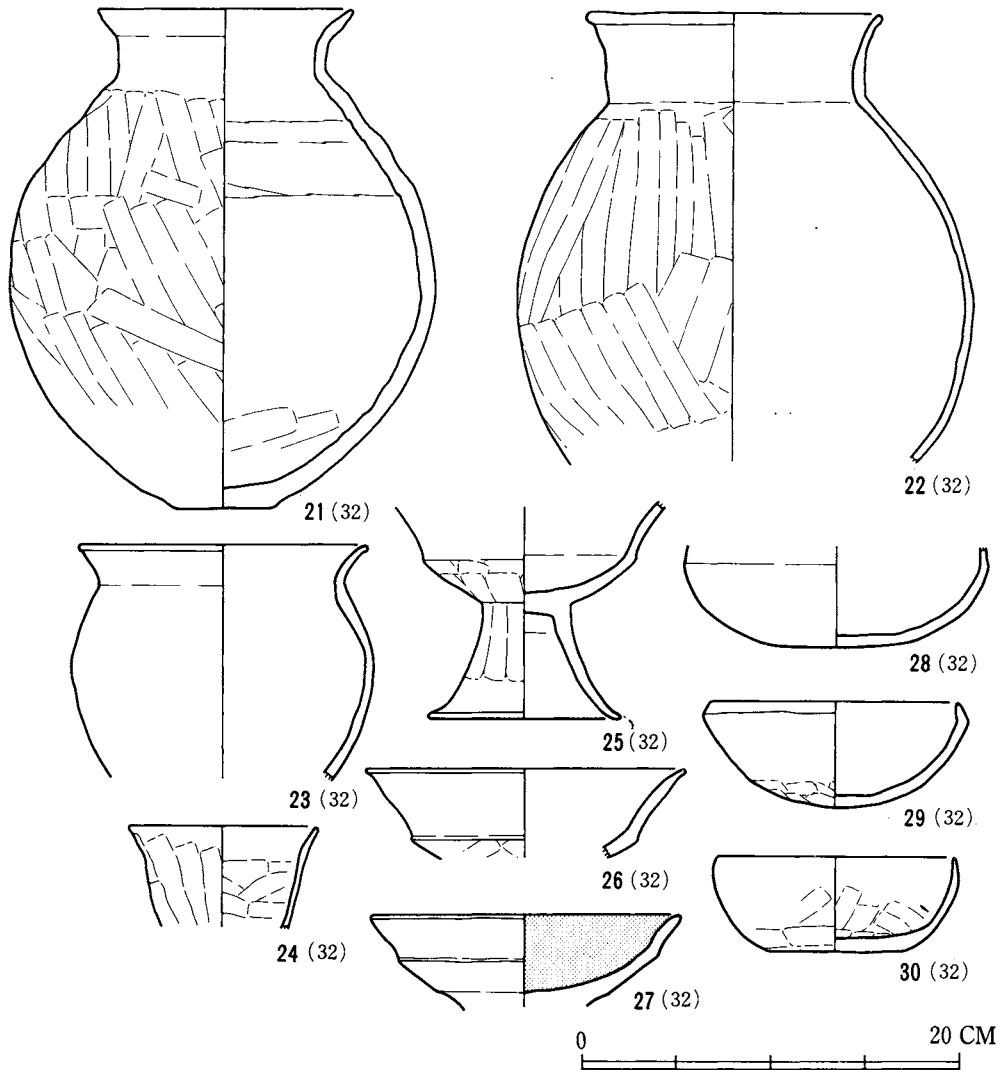
本址から出土した遺物は比較的多く、カマド周囲から甕・坏、カマド対面の壁沿いに高坏・坏、カマド内から支脚・高坏が検出された。カマド内の遺物の状態は特徴的で、支脚を据えた上に高



第95図 32号住居址実測図



第96図 住居址出土土器実測図 (1)



第97図 住居址出土土器実測図(2)

坏を倒位にしてかぶせる状況を呈している。

遺物 21は甕で、口縁部を $\frac{1}{2}$ 、胴部を $\frac{1}{4}$ 程欠損する。口縁部は「コ」の字に近い形を呈す。胴部は略球形を呈し、ほぼ中位に最大径をもつ。胴部最大径が口径より1.5倍程大きい。底部は径5.0cmときわめて小さく、若干突出ぎみとなる。胴部外面は、ヘラ削り後弱いナデが施され比較的平滑であるが、内面の調整は粗雑で輪積み痕が明瞭に残る。上半の器面は荒廃が著しい。器肉は厚く胎土に砂粒を含む。焼成はやや不良で色調は淡～赤褐色を呈す。22は底部を欠損する甕である。直立する口縁部がきわめて長い点特徴的である。胴部は球形を呈し、最大径をほぼ中位に有す。外面のヘラ削り、内面のナデとも丁寧である。胎土・焼成とも良好で暗褐色を呈す。23は小形の甕で $\frac{1}{4}$ 程遺存する。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部の上位に最大径をもつ。調整は全体に

丁寧で明褐色を呈す。24は小形の鉢となろうか。胎土・焼成とも良好であるが、つくりは粗雑である。内面のヘラ削りは比較的丁寧である。暗褐色を呈す。25は口唇部を欠損する高坏である。坏部は深くほぼ中位に明瞭な稜を有す。脚部は太く、接合部より緩やかに開き、裾部との明瞭な境をもたない。坏部の稜以下と脚柱部にはヘラ削り、他にはナデが丁寧に施される。胎土に砂粒を多く含む。26・27は脚部を欠損する高坏で、口径は26で17.0 cm、27で16.5 cmを測る。いずれも坏部に明瞭な稜を有すが、26は下位、27はやや上位に形成される。調整は丁寧なナデが施される。胎土・焼成とも良好である。26は全体に、27は外面のみに赤彩が施され、27の内面は黒色となる。28～30は坏で、28がやや大形となる。口縁部は短く若干内傾する。29が丸底となる以外は平底である。調整は全体的にやや粗い。30の底部には木葉痕がみられるが、ヘラ削りにより部分的に消失される。胎土はいずれもやや粗い。底部を除いて全体に赤彩が施される。

第5節 歴史時代の遺構と遺物

1. 住居址

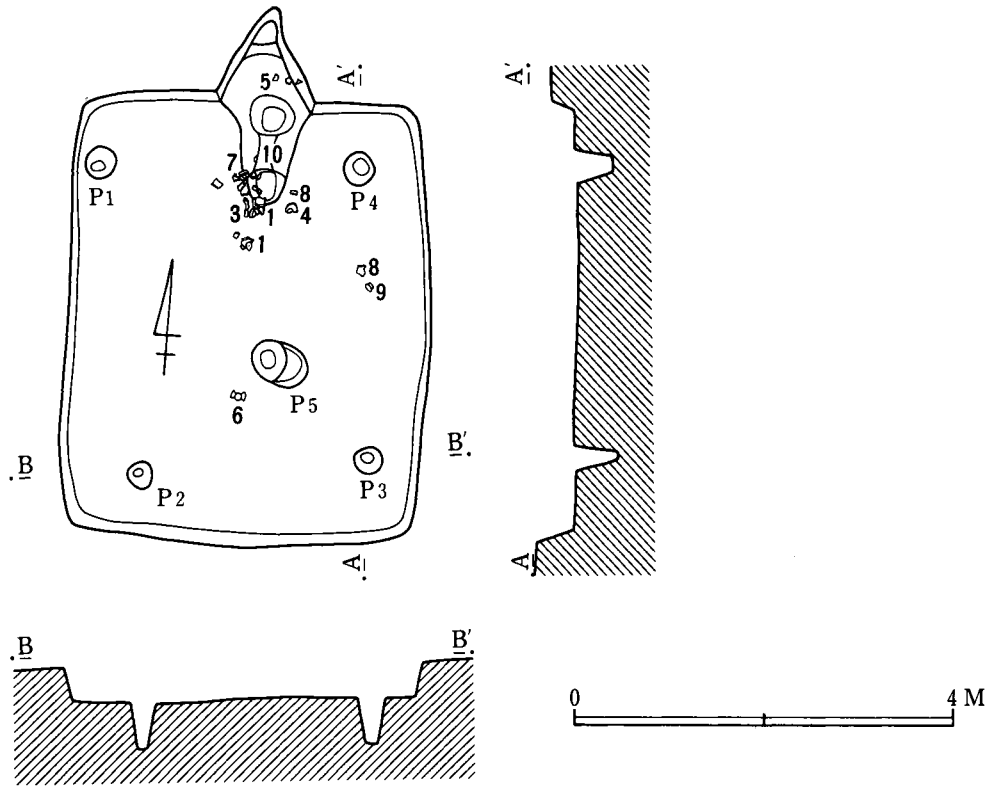
15号住居址（第98・102図，図版35・47）

本住居址は台地の北端で、1号墳周堀の北西3 mに位置する。平面形は南北にやや長い長方形状を呈し、4.6 m×3.8 mを測る。カマドを通る主軸はN-3.5°-Wを指す。壁は床面からやや斜位に立ち上がり、確認面からの壁高は斜面に面する北側で20 cm、南側で40 cmを測る。床面はやや北側に傾斜するもののほぼ平坦で、全体的に固められている。特にカマド前面から中央部にかけては、山砂・ローム土を利用して貼り床状に踏まれている。ピットは5か所検出されたが、P5は貼り床面をはがした段階で確認した。径30～40 cmの不整円形を呈し、深さは40～50 cmを測る。いずれも柱穴であろう。覆土は自然堆積である。

カマドは北壁の中央よりやや東に寄って構築される。遺存状態は不良である。壁への掘り込みは90 cmと比較的長く三角形状を呈す。火床部は縦長の楕円形を呈し、床面からの掘り込みはなだらかで10 cmを測るのみである。焚口部および火床部には浅い落込みがさらに掘り込まれる。煙道部は煙出し部で急激に立ち上がる。焼土はあまり遺存せず、焚口部付近で認められる程度である。袖部および天井部は完全に崩落しており、状況は不明であるが山砂を利用していたようである。

本址から出土した遺物は甕・坏形土器のみでカマド焚口部に集中する。

遺物 1は長胴の甕で、図示の¼程遺存する。口縁部は大きく外反し、口径が最大径となる。胴部の膨らみは弱い。内外面とも調整は丁寧であるが、内面には若干凹凸が残る。胎土・焼成とも良好で明～赤褐色を呈す。2・3は甕の口縁部で遺存度は良くない。2は外反度が弱く、口唇部が平坦となり、内側に若干折り返される。3は「く」の字状に外反し、口唇部は尖る。2は器肉が厚く明褐色を呈す。3は器肉が薄く赤色を呈す。4～9は坏で、4～8はやや上げ底を呈す平



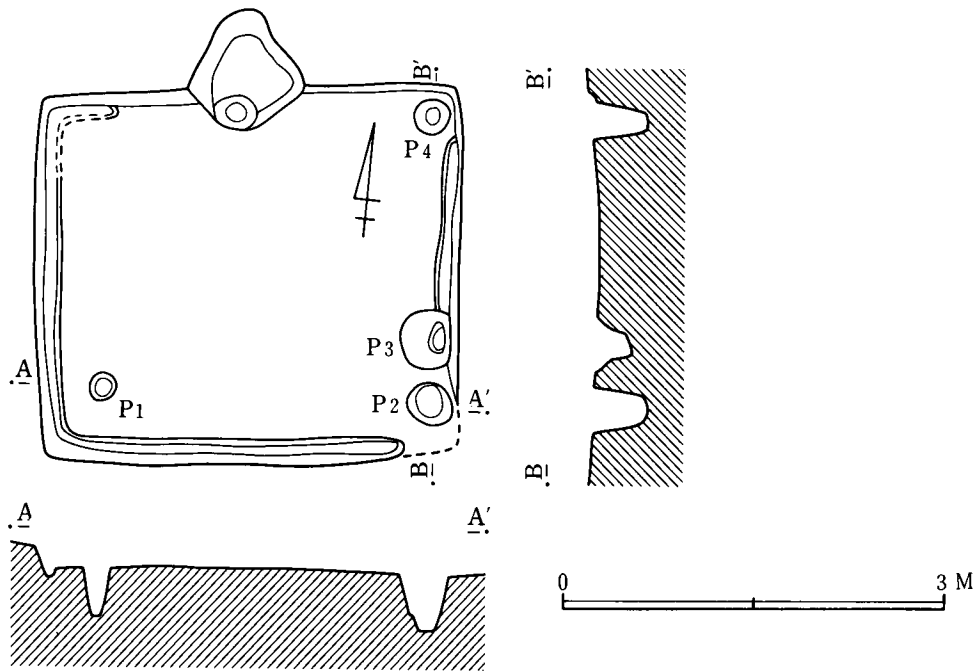
第98図 15号住居址実測図

底，9には高台が付く。体部は大きく直線的に開き，口唇部でさらに外傾する。すべてロクロ整形で，体部にはナデが加えられる。底部は4～7が回転糸切り，8はヘラ削りとなる。9の切り離しは不明であるが，高台は後に接合したものである。高台にはやや歪みが認められる。胎土・焼成とも良好で，色調はほぼ赤褐色を呈す。10は甕の底部である。

30号住居址（第99・102図，図版35・47）

本住居址は台地のつけ根の部分に位置する。平面形は，3.3m×2.9mを測り東西にやや長い正方形プランを呈す。壁は上面が削平されているためか掘り込みがきわめて浅く，西壁で20cmを測る他は明確な立ち上がりは認められない。壁溝はカマド側の壁を除いて「コ」の字状に掘り込まれる。幅20cm，深さ5cmでほぼ一定である。床面は全体的に堅緻で平坦であるが，部分的に攪乱が認められる。ピットは4か所検出された。P1・P2・P4は深さ40cm前後を測り，各コーナーに配された柱穴と考えられる。P3は深さ35cmを測る補助柱穴であろうか。

カマドは北壁のほぼ中央に位置する。壁外への掘り込みは60cmを測り楕円形状を呈す。火床部および煙道部の明瞭な区別はなく，全体が皿状の掘り方を呈す。床面からの掘り込みは8cmで，焚口部に深さ5cm程のピットが穿たれる。袖・天井部とも完全に崩落しており詳細は不明



第99図 30号住居址実測図

である。

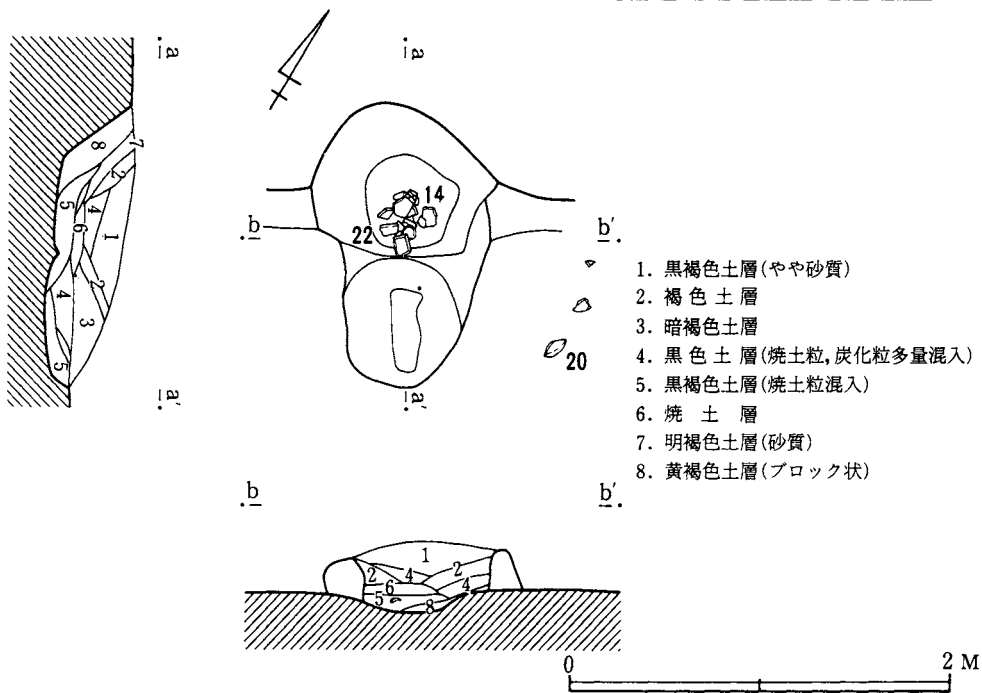
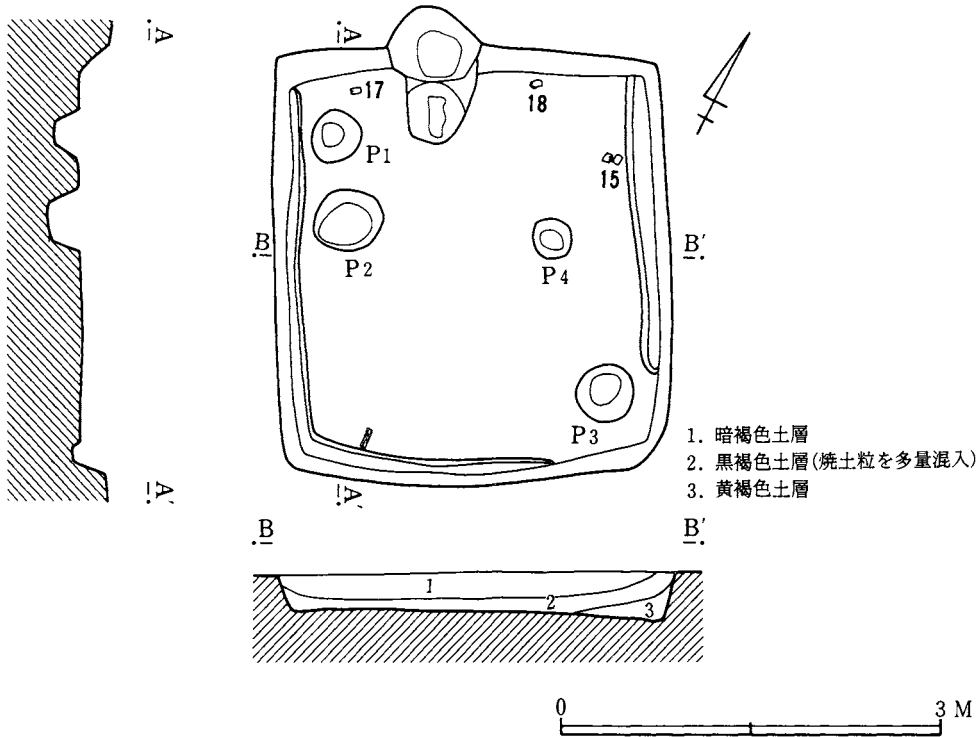
本址からの遺物は少なく、カマド前面の焚口部付近より坏3点が一括出土したのみである。

遺物 11～13は坏でそれぞれ形態が異なる。遺存度は良くない。12は丸底となるもので明らかに時期が異なる。11は体部が大きく開き口唇部でさらに外反する。ロクロ整形でナデが施される。赤褐色を呈す。13は推定口径 17.0 cm，器高 5.8 cm を測る大形の坏で，底部は高台状を呈す。体部は直線的に開く。ロクロ整形でナデが加えられる。胎土に砂粒を多く含み，明～赤褐色を呈す。

37号住居址（第100・102図，図版36・46）

本住居址は台地のつけ根部に位置し，30号住居址の東側15m程に構築される。平面形は，3.2m×3.1mを測る正方形を呈す。カマドを通る主軸はN-24°-Wを指す。壁は床面からやや斜位に立ち上がり，確認面からの壁高は30cm程を測る。壁溝は東側コーナー部で途切れるものの，カマド側の壁以外に「コ」の字状に設けられる。幅10～20cm，深さ6cmを測る。床面は平坦で比較的良好に固められている。ピットは4か所検出された。P1・P4が径30cm，P3が径40cm，P2が径50cmを測り，略円形を呈す。深さは20～30cmと浅い。P1・P3はその位置から柱穴と考えられるが他は断定できない。覆土は自然堆積で，下層には焼土粒が多量に含まれる。

カマドは北西壁の中央よりやや西側に位置する。遺存状態はあまり良好ではない。壁外への掘り込みは40cmを測り，半円形を呈す。焚口部と火床部を区別するかのように掘り込み，煙道部



第100図 37号住居址実測図

は火床部から直線的に壁外へ立ち上がる。焼土は底面より浮いて若干堆積する。袖部は山砂の単一層より形成されるが、天井部は崩落のため不明である。

本址から出土した遺物は比較的少なく、カマド外より甕、カマド内より甕・坏・支脚が検出された。

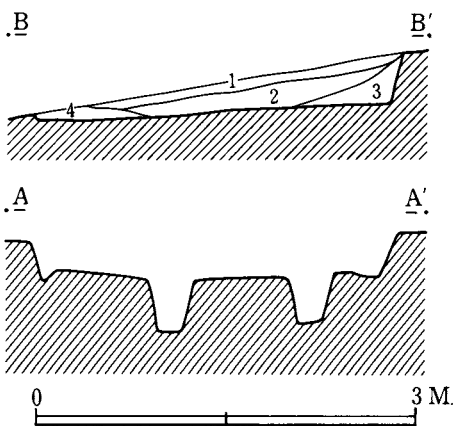
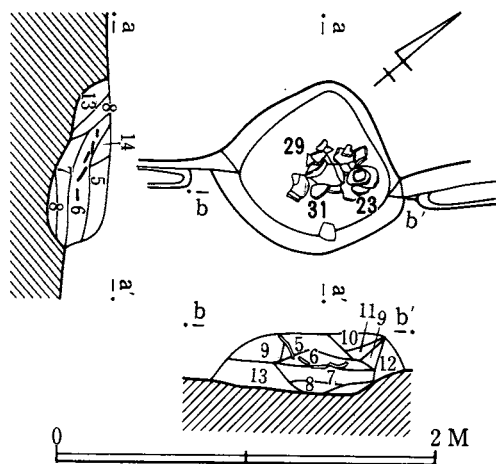
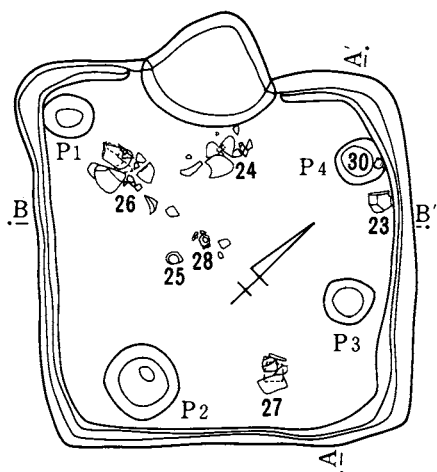
遺物 14は甕で、図示の $\frac{1}{3}$ 程遺存する。口縁部は緩く外反し、上半が折り返し状となる。胴部は上位に最大径を有し、下半が直線的にすぼまる。胴部外面上半は叩き目、下半には横位のヘラ削りが施される。胎土は砂粒を多く含み粗い。焼成は比較的良好で明褐色を呈す。15はやや小形の甕で、図示の $\frac{1}{3}$ 程遺存する。口縁部は外反し、胴部は膨らみをもたない。胴部外面は叩き目を施した後ヘラ削りを加える。内面はナデ調整されるが、器面の凹凸が上部にみられる。胎土に砂粒を多く含み赤褐色を呈す。16～18は甕の口縁部の破片である。口縁形態はほぼ同様である。16・17の外面には縦位の叩き目がみられる。18は叩き目を施した後にナデを加えているようである。色調は16が赤褐色、17が暗褐色、18が明褐色を呈す。19・20は甕の底部で、19は叩き目をナデで磨消し、下位にヘラ削りを施す。色調はいずれも赤褐色を呈す。21は須恵器の坏蓋で、図示の $\frac{1}{4}$ 程の遺存である。天井部を欠損する。口唇部は平坦となる。胎土・焼成とも良好で灰白色を呈す。23は土師器の坏で図示の $\frac{1}{3}$ 程欠損する。体部は直線的に開き、底部はやや上げ底となる。切り離しはヘラによるものであろうか。ロクロ整形でナデが施され、体部下端は手持ちヘラ削りが加えられる。胎土・焼成とも良好で明褐色を呈す。

41号住居址（第101・103図、図版37・38・47）

本住居址は調査区の東端で、南西より入り込む小谷津の頭部斜面上に位置する。平面形は3.0m×3.0mを測り正方形を呈す。カマドを通る主軸方位はN-65°-Wを指す。壁は床面からやや斜位に立ち上がり、壁高は斜面上に位置するため北東壁で40cm、南西壁で5cmを測る。壁溝はカマドの部分を除いて全周するが、幅10～30cm、深さ4～10cmと一定しない。床面は比較的堅緻であるが、北東から南西に向けて10cm以上も傾斜する。ピットは4か所検出された。径40～60cmの略円形を呈し、深さ30～50cmを測る。その位置はやや不規則であるが、壁に沿っていることからすべて柱穴と考えられる。斜面上に位置するためにこのような配置を採ったものであろうか。覆土は自然堆積である。

カマドは北西壁のほぼ中央に位置する。壁外への掘り込みは40cm程で三角形状を呈する。火床部は床面から10cm程掘り込まれ皿状を呈す。煙道部と火床部の明瞭な区別はない。焼土は火床部に比較的多く認められる。袖および天井部は崩落して不明であるが、断面に砂質土層が多くみられることより、山砂を利用していたことがうかがわれる。

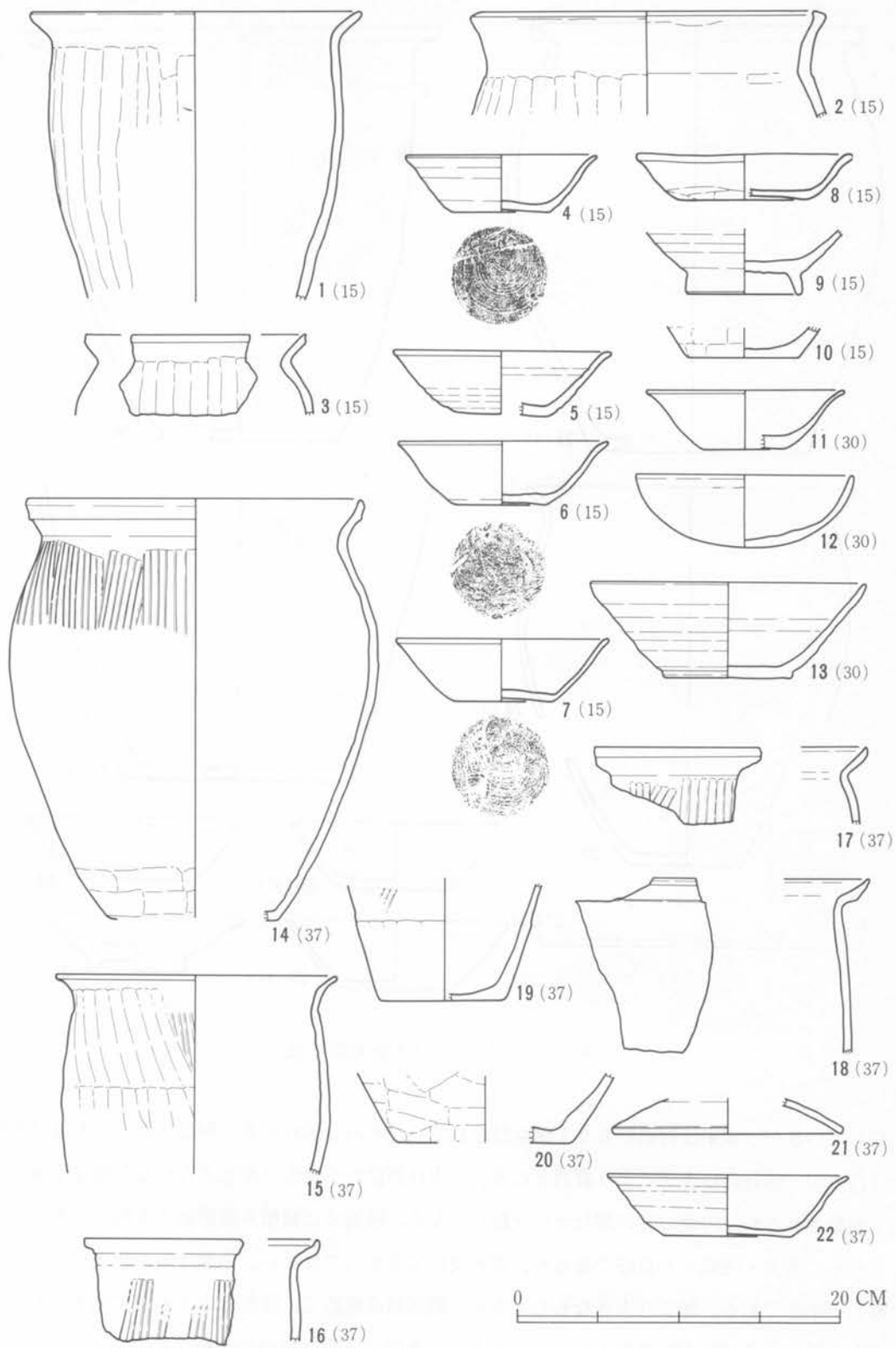
本址から出土した遺物は比較的多く、すべて床面・カマド内から検出された。カマド火床部から甕・坏が一括で、27の甕がカマド対面の壁付近で、他の甕・甗・坏はカマド周囲から中央部にかけて出土した。



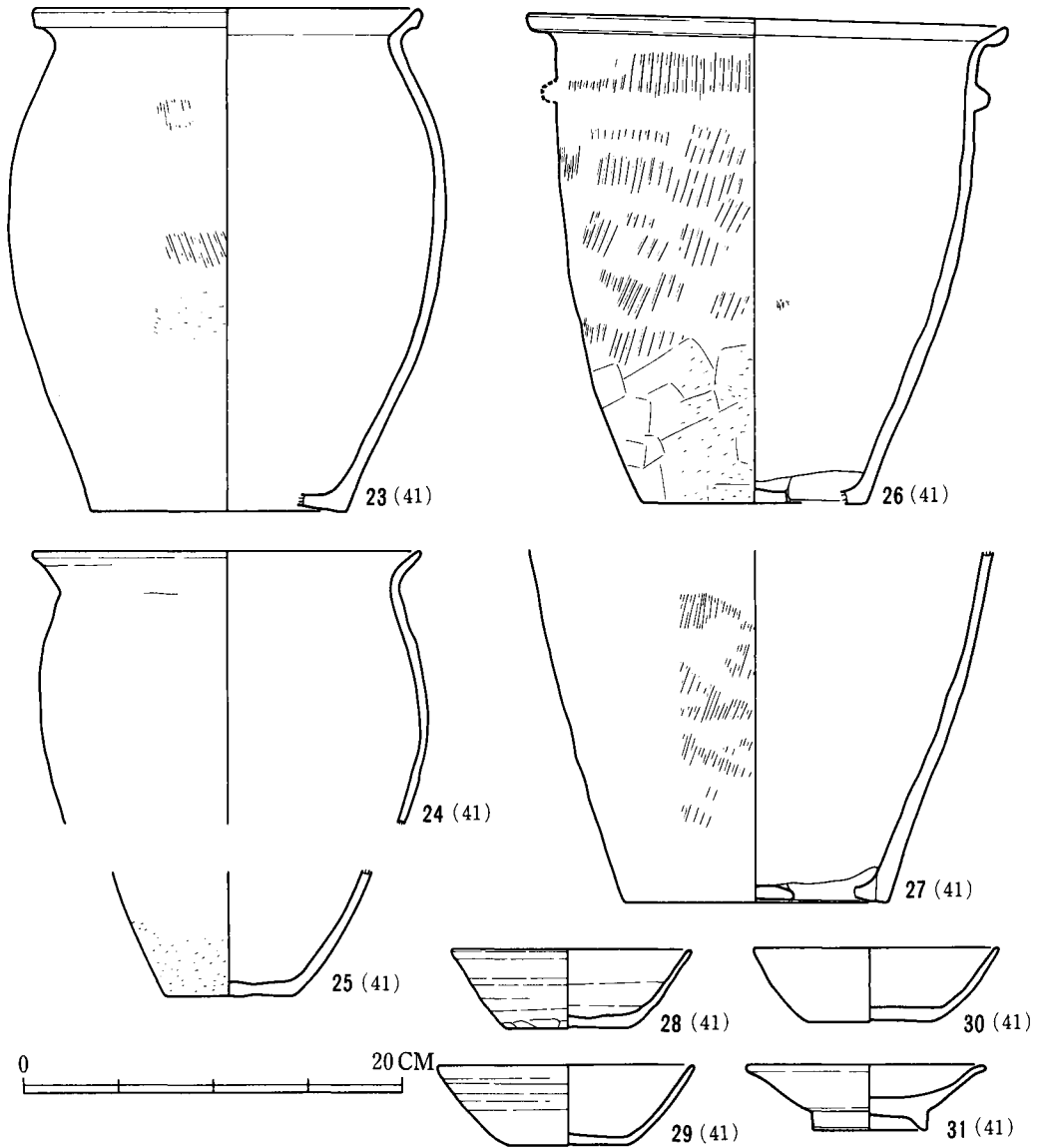
1. 黒褐色土層
2. 褐色土層(粘性を帯びる, 焼土粒混入)
3. 褐色土層(粘性はやや弱い)
4. 黄褐色土層
5. 暗褐色土層(破質, 焼土粒混入)
6. 暗赤褐色土層(焼土粒多量に混入)
7. 暗褐色土層(砂質, 灰, 焼土粒多量に混入)
8. 焼土層
9. 赤褐色土層(砂質, 焼土粒多量に混入)
10. 明褐色土層
11. 黒褐色土層(灰を多量に混入)
12. 明褐色土層(砂質)
13. 粘質黒褐色土層
14. 砂質土層

第101図 41号住居址・カマド実測図

遺物 23は甕で図示の $\frac{1}{2}$ 程欠損する。口径 20.2 cm, 器高 26.3 cm を測る。口縁部は大きく外反し, 口唇部は肥厚して突帯状を呈す。胴部は膨らみを有し, 最大径が口径より大きくなる。底部はかなり大きい。胴部外面は, 叩き目を施した後に全体に横位のナデを加える。他には丁寧なナデ調整を施す。胎土に砂粒を含み, 焼成は還元炎によるものと思われ色調は灰褐色を呈す。下位は赤褐色となるが, これは二次的焼化によるものであろう。24は甕の上半部である。口縁部は「く」の字状に外反し, 胴部は膨らみを有す。内外面ともナデ調整されるが器面の荒廃が著しい。器肉がきわめて薄く, 口縁部外面に胎土の輪積み痕が若干残る。色調は赤褐色を呈す。25は甕の底部で, 外面のヘラ削り, 内面のナデとも丁寧である。胎土・焼成ともきわめて良好である。明褐色を呈し部分的に赤化がみられる。26は甕で, 口縁部を $\frac{1}{2}$ 程欠損する。口縁部は短く大きく外反し, 折り返し状を呈す。胴部の膨らみは弱くほぼ直線的に底部へ移行する。底部はほとんど欠損するものの, その遺存状況からすると5孔を有するものであろう。口縁下には台形状の把手が1個現



第102图 住居址出土土器实测图(1)



第103図 住居址出土土器実測図 (2)

存しているが、本来は対面にもう1個貼付されていたものと思われる。胴部外面には叩き目が施されるが、部分的にナデにより磨消される。下方は斜位のヘラ削りが加えられる。他は丁寧にナデ調整されるが、内面の孔の部分はヘラ削りとなる。器面には輪積み成形による凹凸が若干認められる。胎土・焼成とも良好であるが、還元炎によるものではない。色調は暗褐色を呈す。27は甑の下半部である。26より大きなものである。胴部は直線的で、底部はほとんど欠損するものの遺存状況からすると5孔を有するものであろう。外面には叩き目が施され、下端にはヘラ削りが加えられる。内面はナデ調整となる。輪積み成形による凹凸が内面に観察される。胎土は良好で、

焼成は還元炎によるものでほとんど須恵器に近くなる。灰褐色を呈す。28～30は坏で、29が完形、28・30が体部を $\frac{1}{2}$ 程欠損する。28・29はロクロ整形によるもので、体部には横ナデ、下端には手持ちのヘラ削りが施される。内面は丁寧なナデ調整である。31は内外面ともナデ調整される。底部はいずれもヘラ削りとなる。28・29は還元炎焼成によるもので灰褐色を呈す。30は胎土に砂粒をほとんど含まず、きわめて粒子が細かい。暗赤褐色を呈す。31は高台付の皿で、体部を $\frac{1}{2}$ 程欠損する。高台は貼り付けとなる。全体にナデ調整が施され、胎土・焼成・色調とも30に似る。

2. 方形周溝遺構

7号址（第104・106図，図版38・47）

本址は台地の南側で、10号住居址の西側に隣接して構築される。平面プランは略正方形を呈し、外縁径・内縁径は南北8.0m・5.4m，東西8.0m・5.3mを測るが、西辺が東辺より長いために北辺にやや歪みを有す。周溝の上端幅は1.0～1.4m，溝底幅は0.3～0.5m，深さは0.4～0.6mで北へ行くに従い徐々に深くなる。これは、地山面が南側に若干傾斜しているために各辺の溝底レベルをそろえることを意図した結果と思われる。覆土は自然堆積を示す。埋葬施設等は検出されなかった。遺物は覆土中から縄文土器片，高坏，坏の破片を数点検出したのみである。

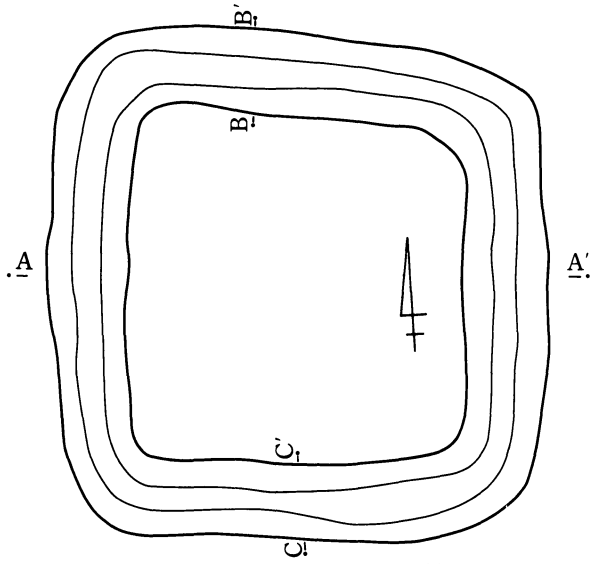
遺物 5は高坏で、裾および坏部を $\frac{1}{2}$ 程欠損する。坏部は接合部より直線的に開き，明瞭な稜を有す。脚柱部はやや膨らみをもち，裾部は脚柱部との境を明瞭にして大きく開く。全体にナデ調整が施される。脚部内面以外に赤彩が認められる。6は高坏の脚柱部で器肉が薄い。器面が磨耗しているため調整は不明である。7は坏で， $\frac{1}{2}$ 程遺存する。体部は直線的に開き，底部は大きい。体部は内外面ともナデ，体部下半と底部には，回転ヘラ削りが施されている。また，底部外面に「田」と読める墨書が描かれる。胎土・焼成とも良好で，明褐色を呈す。

8号址（第104図，図版38）

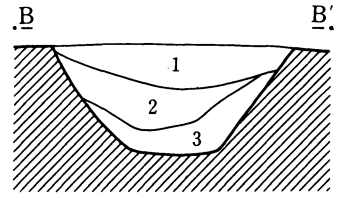
本址は台地の最南端に位置し，北辺の一部が10号住居址の南コーナー部を切って構築される。平面形は略正方形を呈し，外縁径・内縁径は南北7.4m・5.3m，東西7.6m・5.6mを測るが，南辺がやや長いと東辺に若干ひずみを生じる。周溝の上端幅は0.8～1.1m，溝底幅は0.5～0.7mで南辺，東辺がやや幅広を呈す。深さは0.3～0.4mを測り，南東側に向けて徐々に深くなる。地山面が南側に傾斜するために，7号址のように溝底のレベルをそろえるのが本来であろうが，本址は南側をさらに掘り窪めており，溝底のレベル差は最高0.5mを測る。覆土は自然堆積の様相を呈す。埋葬施設等は検出されなかった。遺物は少なく，覆土中から若干の土器片を出土したのみである。

3. 溝状遺構（第106図，図版47）

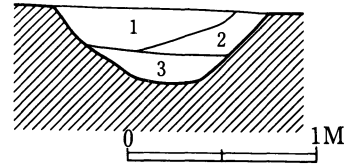
台地のくびれ部北端から調査区東側に向けて3条の溝（溝1・2・3）が走る。溝1は溝2・溝3のいずれも切り込んでおり，溝1が最後に掘り込まれたことが明らかである。溝1・溝2は東側で2次調査区の溝とつながる。西端は区域外のため明らかではないが，おそらく北側斜面部



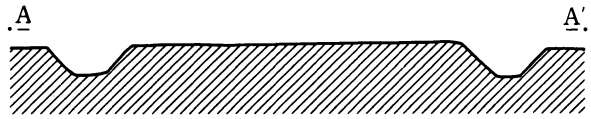
7号址



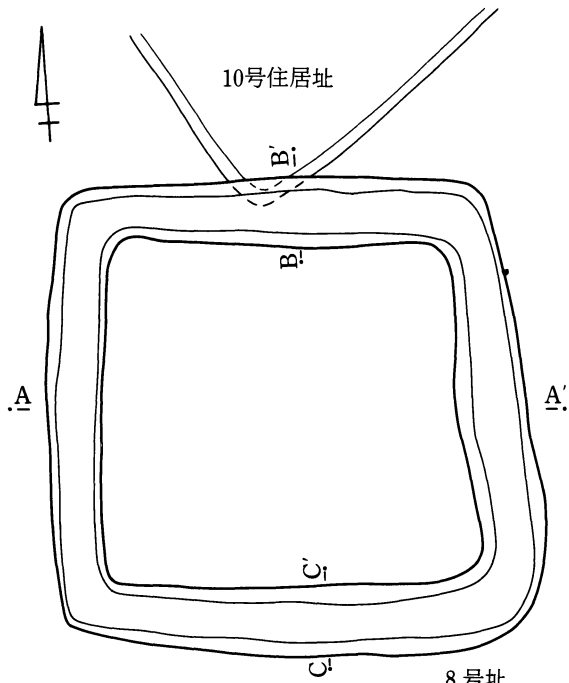
C-C'



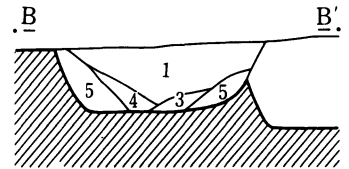
- 1. 黑褐色土層
- 2. 褐色土層
- 3. 黄褐色土層



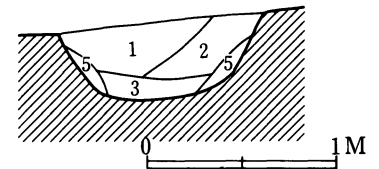
0 6M



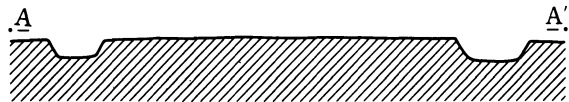
8号址



C-C'



- 1. 黑褐色土層
- 2. 黑褐色土層(ローム粒混入)
- 3. 暗褐色土層
- 4. 暗褐色土層(黑色土混入)
- 5. 黄褐色土層



0 6M

第104图 7・8号址実測図

で消失してしまうものであろう。幅は溝3が0.5m 溝1・溝2が1m程で、深さは0.2~0.4mを測る。横断面形はいずれもレンズ状を呈す。遺物はすべて覆土中のもので、溝2に含まれるものが多い。溝1と溝2の交差点から15m程東側の溝2に貝の堆積がみられ、土器も多く出土した。

遺物 8~12は坏で、特に8は推定口径22.4cm、器高7.3cmを測る大形のものである。体部は直線的に開くもの(8~10)と口唇部で若干外反するものに大別される。ロクロ整形で、体部は内外面ともナデが施され、体下部に手持ちヘラ削りが加えられる。底部は10・12が回転ヘラ切りとなり、他は不明であるがヘラ削りが加えられる。胎土・焼成とも良好で、色調は8・10・12が明~赤褐色、9・11が黒色を呈す。13は皿で1/2程を欠損する。胎土はやや粗く焼成も不良である。

4. 土 壇

5号址 (第105・106図)

本址は台地の南西側で、7号址の西側7m程に位置する。平面形は長径2.6m、短径2.5mを測る略円形を呈す。確認面からの深さは60cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。壇底の南側に焼土塊を検出したが性格は不明である。覆土は自然堆積である。遺物は少なく、覆土中に土師器片が若干みられる程度である。本址に伴うものではない。

遺物 1は甕の底部である。胴部は直立し、底部は上げ底となる。ナデ調整で器肉は厚い。赤褐色を呈す。2は高坏の接合部、3は坏の底部片である。色調は褐色を呈す。

14号址 (第105・106図, 図版47)

本址は17号住居址の北西4m程に位置し、東側壁が攪乱により若干削平される。平面形は長径3.4m、短径3.3mを測る不整形円形を呈す。底面は平坦であるがやや軟質である。壁は底面からやや斜めに立ち上がり、壁高は確認面より40cmを測る。覆土は自然堆積である。遺物はすべて覆土中のもので、土器片が50片程出土している。本址に伴うものではなく、流れ込みであろう。

遺物 4は高坏で完形である。坏部は深く半球状を呈し、口唇部が若干外反する。脚部は低く、短い脚柱部より裾が内彎ぎみに大きく開く。調整は比較的丁寧であるが、つくりが粗く全体に歪みを有す。胎土に砂粒を含み焼成は良好である。脚部内面以外に赤彩されるが、遺存は良くない。

26号址 (第105図)

本址は台地のくびれ部の北側に位置する。平面形は長軸2.6m、短軸1.7mを測る不整形の隅丸長方形を呈す。底面はほぼ平坦であるが軟質である。壁の立ち上がりは一定せず、確認面からの深さは30cmと浅い。覆土は自然堆積である。遺物は検出されなかった。

34号址 (第105図)

本址は台地のくびれ部に近い南端に位置する。平面形は長径2.7m、短径1.4mを測る楕円形を呈す。底面には若干起伏が認められ、壁はやや斜めに立ち上がる。確認面からの深さは40cmを測る。壇底東側には1辺80cm程の方形のピットがみられるが、断面図でも明らかなように後世に掘り込まれたものである。覆土は自然堆積である。遺物は検出されなかった。

36号址 (第105図)

本址は26号址の東6m程に位置する。平面形は長軸2.4m、短軸2.1mを測る隅丸の不整な方形状を呈す。底面には若干起伏が認められ、壁はやや斜めに立ち上がる。確認面からの深さは15cmと浅い。坩堝の西壁近くに長方形のピットがみられるが、断面図でも明らかなように後世に掘り込まれたものである。覆土はピット部を除けば自然堆積である。遺物は覆土中より土器片が1片だけ検出された。

40号址 (第105図)

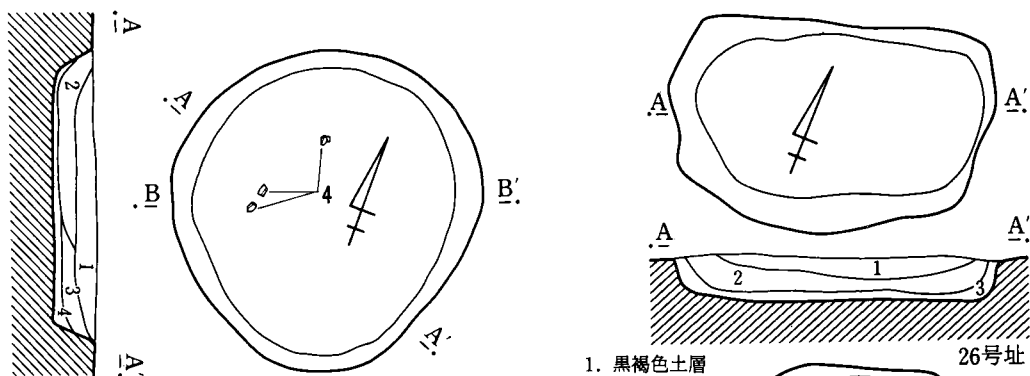
本址は、台地のくびれ部で、37号住居址の東5m程に位置する。平面形は長径1.5m、短径1.2mの略円形状を呈す。底面はほぼ平坦で堅緻である。壁は底面から垂直に立ち上がり、確認面からの深さ60cmを測る。覆土は自然堆積の状況を示す。遺物は、覆土中より土器片10片程検出されたが小片のため図示し得なかった。

52号址 (第105図)

本址は1号墳墳丘下のほぼ中央に位置する。平面形は長径1.9m、短径1.2mを測る略楕円形を呈す。覆土は自然堆積である。遺物は覆土中から茅山式の土器片を数点検出したが図示し得なかった。付近に茅山式期の炉穴群が存在することから、この時期にあてはめられるようであるが明確ではない。

5. グリッド出土遺物 (第107図, 図版47)

1は須恵器の広口壺の口縁部片である。口唇部は突帯状を呈す。外面に5本1組の波状を呈す縞模様が描かれる。胎土・焼成ともきわめて良好で、暗灰褐色を呈す。2は甕で、図示の $\frac{1}{2}$ 程欠損する。口縁部は緩く外反し、胴部は球形を呈す。胴部外面は横位のヘラ削り後ナデ、他には丁寧なナデが施される。器肉は薄く胎土に砂粒を多く含む。色調は赤褐色を呈す。3も甕で下半部を欠損する。口縁部は直立ぎみとなり、上方で外反する。胴部は上位に最大径を有し、口径とほぼ一致する。調整は全体に丁寧であるが器面の荒廃がみられる。胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。赤褐色を呈す。4は大形の甕の底部である。5は高坏で、坏部を $\frac{1}{2}$ 程欠損する。坏部は深く半球状を呈し、口縁部が弱い稜をもって内傾する。脚部は接合部より大きく開く。全体に丁寧にナデ調整されるが器面の荒廃が著しい。胎土に砂粒を多く含む。脚部内面以外に赤彩が施されるが遺存は良くない。6～11は高坏の脚部である。6の接合部が露呈しており、ホゾを差し込んだことが明瞭に観察される。9以外の外面に赤彩が施されるが、いずれも遺存はあまり良くない。12は坏で体部に丸味を有す。底部は平底ぎみとなる。内外面とも調整はやや雑で、胎土に砂粒を多く含む。内面に赤彩が施される。13は須恵器の坏身で、 $\frac{1}{6}$ 程の破片である。口縁部はやや内傾し、口唇内面に浅い沈線が廻る。受部はほぼ水平に外へ突き出し体部の膨らみは弱い。胎土・焼成とも良好で、外面が黒色、内面が燈色を呈す。外面に自然釉が付着する。14は土師器の坏で、 $\frac{1}{2}$ 程の遺存である。



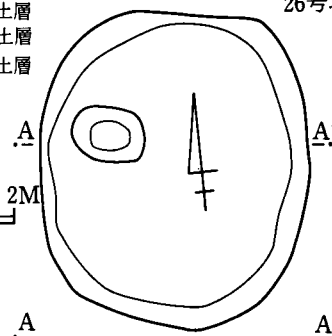
1. 黑褐色土層
2. 暗褐色土層
3. 黄褐色土層

26号址



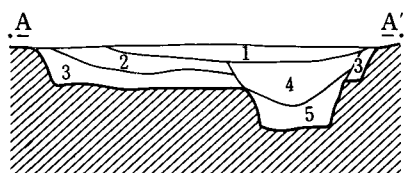
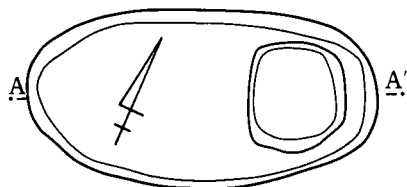
1. 黑褐色土層
2. 暗褐色土層
3. 褐色土層
4. 黄褐色土層

14号址



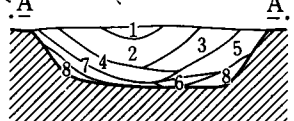
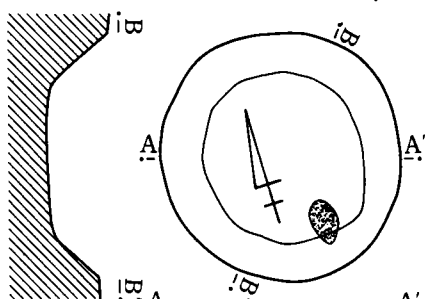
1. 黑褐色土層
2. 暗褐色土層
3. 黄褐色土層

36号址



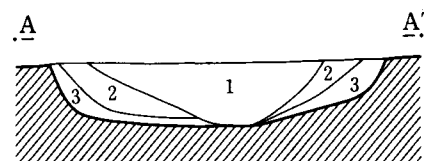
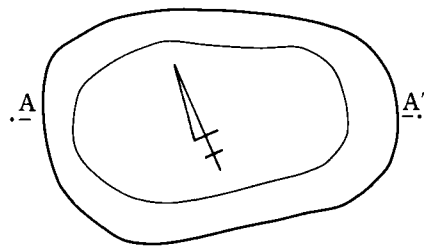
1. 黑褐色土層
2. 暗褐色土層
3. 黄褐色土層
4. 黑褐色土層
(ローム粒混入)
5. 暗褐色土層
(烧土粒混入)

34号址



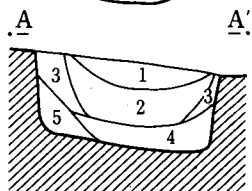
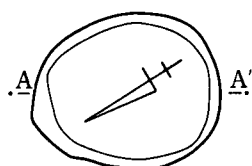
1. 黑褐色土層
2. 黑色土層(烧土粒, 炭化粒混入)
3. 暗褐色土層(烧土粒, 炭化粒混入)
4. 暗褐色土層
5. 褐色土層
6. 褐色土層(烧土粒, 炭化粒混入)
7. 褐色土層(烧土粒混入)
8. 黄褐色土層

5号址



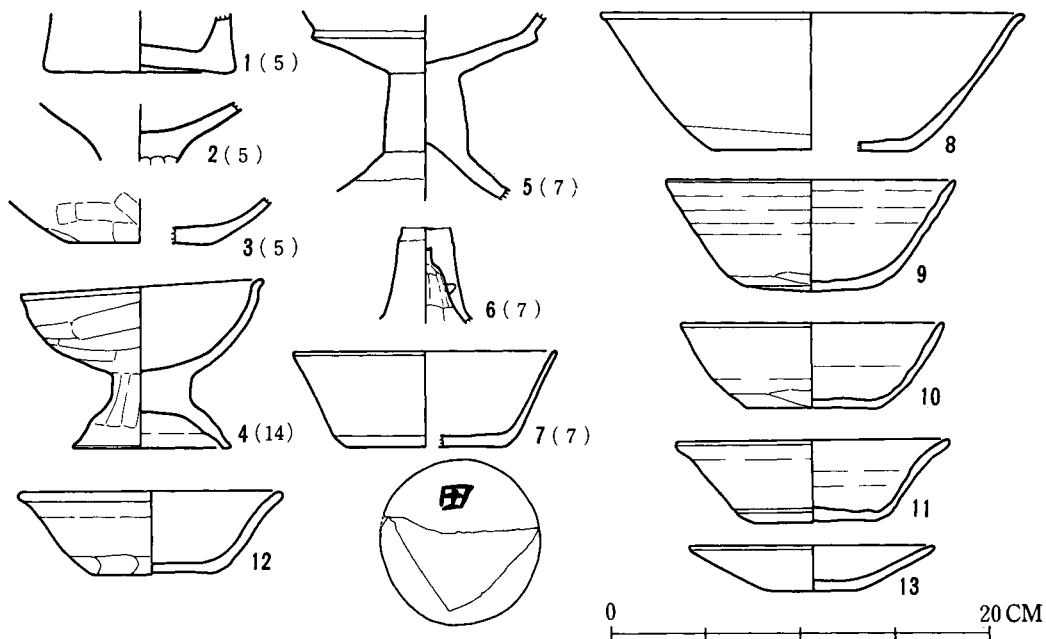
1. 黑褐色土層
2. 暗褐色土層
3. 黄褐色土層

52号址

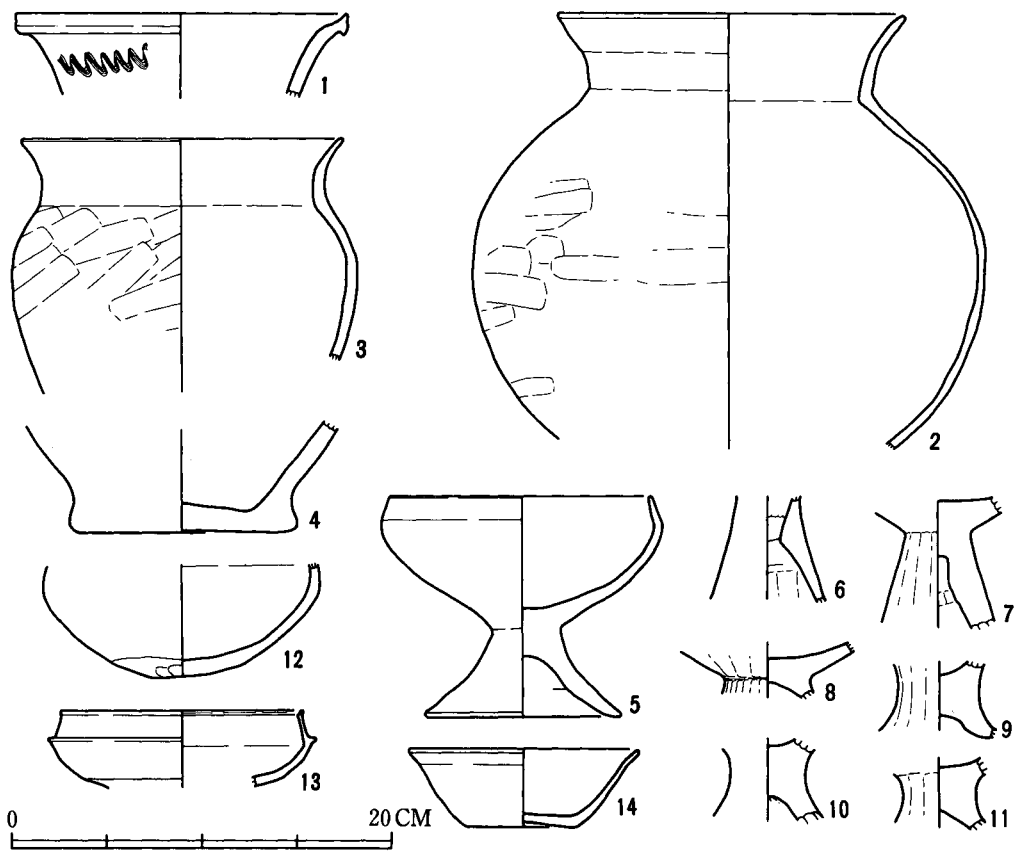


40号址

第105图 5·14·26·34·36·40·52号址実測図



第106図 土壇・方形周溝遺構・溝出土土器実測図



第107図 グリッド出土土器実測図

第6節 小 結

1. 古墳群について

3次調査区内から検出された古墳は2基である。いずれも円墳で、墳丘は2基とも遺存する。特に2号墳はその墳形を良好に保持していたものである。この2基の古墳は、本遺跡が存在する舌状に伸びる台地のほぼ中央部に南北に隣接して占地しており、古墳の西側に開く平坦面をささぎるかのような感を呈している。ただし、これによって古墳構築以後の西側平坦面の利用がなかったわけではなく、15号住居址や7・8号の方形周溝遺構のように明らかに時代の下降するものも存在する。

墳丘の構築法は、整形した旧表土上の縁辺に土堤を廻らし、内部に盛土を充填する方法を採っている。さらに、墳丘裾と周堀内縁の間には盛土を施さない面、すなわちテラス状の面が環状に廻っている。これらの状況は東南部地区において普遍的にみられるものであり、ひいては後期古墳に通有に認められる現象である。周堀は2基とも円形に一周することを基本としている。ただし、2号墳南東側は斜面に面するためにこの部分で周堀外縁が消失している。さらに1号墳と2号墳の周堀の近接している部分は、1号墳周堀が2号墳周堀を避けて掘り込まれているようであり、これにより1号墳が2号墳よりも後出であることが予想される。

主体部は1号墳が南西側、2号墳が南側にそれぞれ2基構築されている。その位置は墳丘裾に接したテラス面上にある。埋葬方法は、あらかじめ掘り込んだ土壇の底面に木棺を置き、土壇と木棺の間をローム土あるいは褐色土で充填する木棺直葬の形態を採っている。木棺の形態は断定できないが、割竹形かあるいはそれに類似したものであり、両小口部に粘土の使用が顕著に認められる。なお土壇の側壁沿いにみられる粘土帯は、木棺の身と蓋を固定させるためのものと思われる。主体部内の副葬品は、直刀・刀子・鉄鏃を基本的なセットとしており、数量的にはそれ程多くない。これらの状況は後期古墳に普遍的にみられるものであるが、1号墳第2主体部、2号墳第1主体部には耳環が2対副葬され、同一棺内に2体の被葬者の埋葬が想定されることは注目に値する。本来一棺一葬を前提とする木棺直葬の機能を考えると、別の主体部を設けることがより妥当であると思われる。南二重堀遺跡^{*}(伊藤1983)内の古墳群には裾部に3基の主体部を有する円墳が2基確認されており、本墳にもこのような状況が存在しても不思議ではないのである。それでは、なぜこのように2体を埋葬する必要があったのであろうか。これは各主体部出土の副葬品が一つの手掛りになると思われる。2基の主体部とも同一墳内の他の主体部には存在しないガラス玉を所有しており、単純に考えれば女性の被葬者が想定される。また、2号墳第1主体部から出土した小札は武具としての機能を有しており、男性の被葬者が想定される。副葬品が少なく、類推の域を脱し得ないが1号墳にも同様のことが言えよう。そうするならば、2体を埋葬し

*伊藤 智樹 他 1983『東南部ニュータウン』12—南二重堀遺跡—

た主体部の被葬者は男女1体づつということになる。これは当然夫婦に置き換えてもよいものである。

2. 集落について

本調査区は有吉遺跡の第3次調査として実施された範囲であり、第1次・第2次の調査区はすでに調査報告されている（種田・阪田1975^{*}、種田1978^{**}）。詳細は報告書に委ねるとして、ここでは一応概略を呈示しておく。

1次・2次の調査区は、本調査区の東側に広がる台地を対象としたものであり、ほぼ全域に遺構が検出された。これを時期別にみても、住居址では和泉期1軒、鬼高期56軒、真間期39軒、国分期87軒で、他に時期不明の住居址が25軒存在すると報告されている。その他の遺構としては、縄文時代早期の炉穴群、前期の石鏃製作址と考えられる竪穴遺構1基、円形周溝遺構5基、方形周溝遺構2基、溝状遺構、土壇等が検出された。住居址群の構成としては全体に雑然とした感を呈しているが、真間期・国分期のものが台地の北側に、鬼高期が南側に多くみられる傾向が強い。さらに詳細に検討することにより、集落内の構成単位等興味深い事象を抽出することも可能であろうが、第4次調査も予定されており、全体の調査が終了した時点で明らかにされることを期待する。

さて本調査区の調査の結果検出された遺構は古墳2基、竪穴住居址12軒、縄文時代早期の炉穴群、溝状遺構、土壇等である。

3. 竪穴住居址について

本調査区から検出された住居址は12軒と少なく、しかも時期的に連続性をもたないことが出土土器より明白である。そこで、時期別に住居址に説明を加えていく。

住居址群中で最も古く位置づけられるのは、11～13号住居址で弥生時代の末期に相当する。3軒とも2号墳の南側で、台地の南西端に集中する。特に11・12号住居址は緩斜面部に位置する。平面プランは11・12号が隅丸方形、13号が不整円形を呈する。11号住居址は柱穴が四隅に配され、炉が北側の柱穴間に位置するが、12・13号住居址は炉の存在により住居址と断定せざるを得なかった。これらの弥生末期の住居址群は第1・2次調査区でも認められなかったものであり、付近の遺跡でも類をみないものである。

次の段階は鬼高期となり、9・10・16・17・32号住居址が相当する。平面形は略正方形を呈し、規模は6m前後である。カマドは、16・17号住居址が古墳周堀により削平されているが、すべて北東壁のほぼ中央に位置している。さらに、貯蔵穴はカマドの右側に設けられる点で共通している。これらは第1・2次調査区でも普遍的にみられるものであり、時期的な隔たりは少ないよう

* 種田・阪田 他 1975『東南部ニュータウン』3—有吉遺跡（第1次）—

** 種田 齊吾 他 1978『東南部ニュータウン』5—有吉遺跡（第2次）—

である。遺跡内における分布は散在的であり、古墳の西側で台地の中央部を南北に縦断するかのように並んでいる。ただ32号住居址のみ古墳の東側で独立した状態である。

最後に出現するのが15・30・37・41号住居址で、国分期に相当する。カマドの方向は鬼高期ほど一定せず、北～北東方向を向く。柱穴は15号住居址がほぼ四隅に配される以外は一定していない。遺跡内における分布はやはり散在的であり、台地北側を東西に横断するかのように並んでいる。

以上のように本調査区内の住居址は、それぞれ隔絶して3つの時期に分けられることは明白である。ここで問題となってくるのは、鬼高期の住居址群と古墳との関係である。5軒の鬼高期の住居址は前述したように相互に時間的差異をもたないようであり、16・17号住居址が周堀によって切られていることから、当然古墳群が住居址群より時期的に後出であることが想定される。また、古墳群は確定的な年代を付与することができないが、前述したように7世紀の後半代に含まれることが予想される。とするならば、鬼高期の終末頃に古墳群が造営されることとなる。古墳群の被葬者を第1・2次調査区内の鬼高期集落の居住者に比定することは間違いではなかろう。2次調査の報告書では、鬼高期の新しい時期の住居址群が台地の南側に集中することが指摘されており、おそらくこれらの集落の墓域として本調査区の台地が利用されたのであろう。

表2 有吉遺跡(第3次)検出遺構一覧表

遺番	構号	遺構名	時代	備考
1~4	—	—	—	欠番
5	土 塚	歴史時代		
6	住居址	弥生時代		
7	方形周溝状遺構	歴史時代		
8	方形周溝状遺構	歴史時代	10号住居址と重複	
9	住居址	古墳時代		
10	住居址	古墳時代		
11	住居址	弥生時代		
12	住居址	弥生時代		
13	住居址	弥生時代		
14	土 塚	歴史時代		
15	住居址	歴史時代		
16	住居址	古墳時代	1号墳周堀と重複	
17	住居址	古墳時代	2号墳周堀と重複	
18~25	—	—	—	欠番
26	土 塚	—		
27	炉 穴	縄文時代		
28	炉 穴	縄文時代		
29	—	—	—	欠番
30	住居址	歴史時代		
31	—	—	—	欠番
32	住居址	古墳時代		

遺番	構号	遺構名	時代	備考
33	—	—	—	欠番
34	土 塚	—		
35	—	—	—	欠番
36	土 塚	—		
37	住居址	歴史時代		
38・39	—	—	—	欠番
40	土 塚	—		
41	住居址	歴史時代		
42・43	—	—	—	欠番
44	炉 穴	縄文時代	1号墳内	
45	炉 穴	縄文時代	1号墳内	
46	炉 穴	縄文時代	1号墳内	
47	炉 穴	縄文時代	1号墳内	
48	炉 穴	縄文時代	1号墳内	
49	炉 穴	縄文時代	1号墳内	
50・51	—	—	—	欠番
52	土 塚	縄文時代		
53	炉 穴	縄文時代	2号墳内	
溝1	—	歴史時代	溝2, 溝3と重複	
溝2	—	歴史時代		
溝3	—	歴史時代		

第4章 有吉南遺跡

第1節 調査の経過と方法

有吉南遺跡の発掘調査は、昭和56年4月1日～同年9月30日まで6か月間にわたって実施された。調査対象は総面積7000㎡である。調査は発掘区全域に40m×40mの方眼網を座標北にあわせて設定し、この方眼網を基本的なグリッドとし、さらにこのグリッドを20m×20mの中グリッドに区画した。また、中グリッドを2m×2mの小グリッド100区画に分け、北西隅より00・01…99と称し先土器時代の調査にこれを使用した。

発掘調査は、表土層を確認するためのテストピットを数か所設定し、その後重機による表土剥ぎを西側より開始した。表土の浅い部分については手掘りによった。その結果カマドをもつ住居址と土壇が確認され、西側より順次調査を開始した。住居址は全体的に掘り込みが浅く、後世に何らかによる台地の整形が行われたことも予想された。実際この台地は近くに所在する有吉城跡が立地する台地に続くものであり、当初有吉城に関する何らかの施設の可能性が想定されたが、それを示唆するような遺構も検出されず性格は不明と言わざるを得なかった。ただ、表土中より中世の土器片が若干検出されたことは台地の利用があったことを意味するかもしれない。

住居址の調査は、表土剥ぎで検出したプランをもとにカマドを通る主軸線とそれに直交する線を基準にして十字のベルトを設けて掘り下げた。実測は座標軸を基準にした簡易な遣り方を設定して行なった。遺構の調査終了後航空撮影を行ない、その後先土器時代の調査に移行した。調査方法は先述した2m×2mの小グリッドを利用し、台地全体に確認グリッドを配して基本的に武蔵野ローム上面まで掘り下げた。この結果、剥片がわずかに検出されたのみで成果となるものは得られなかった。9月30日に現地を撤収し、現地調査をすべて終了した。

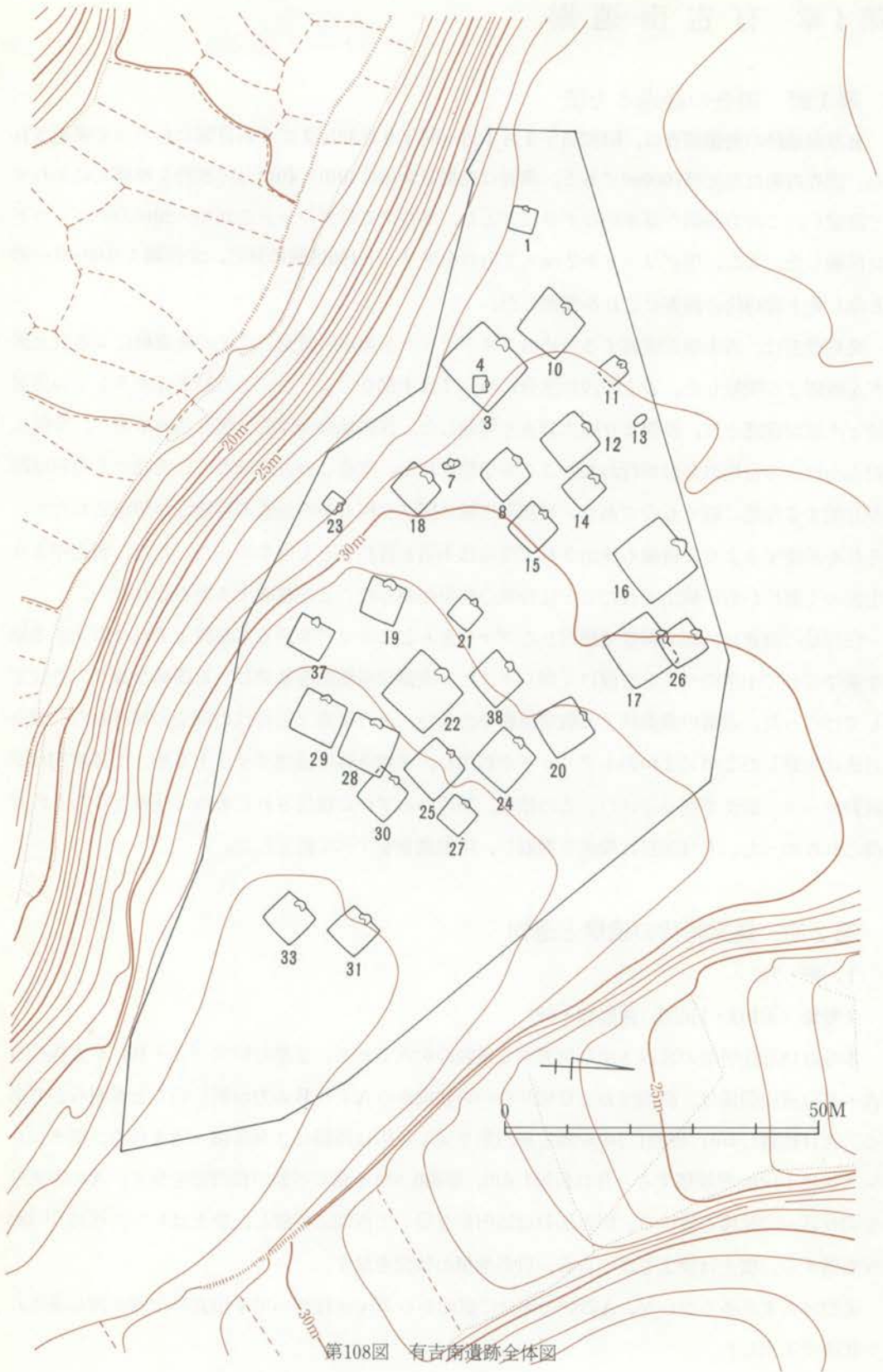
第2節 縄文時代の遺構と遺物

1. 炉 穴

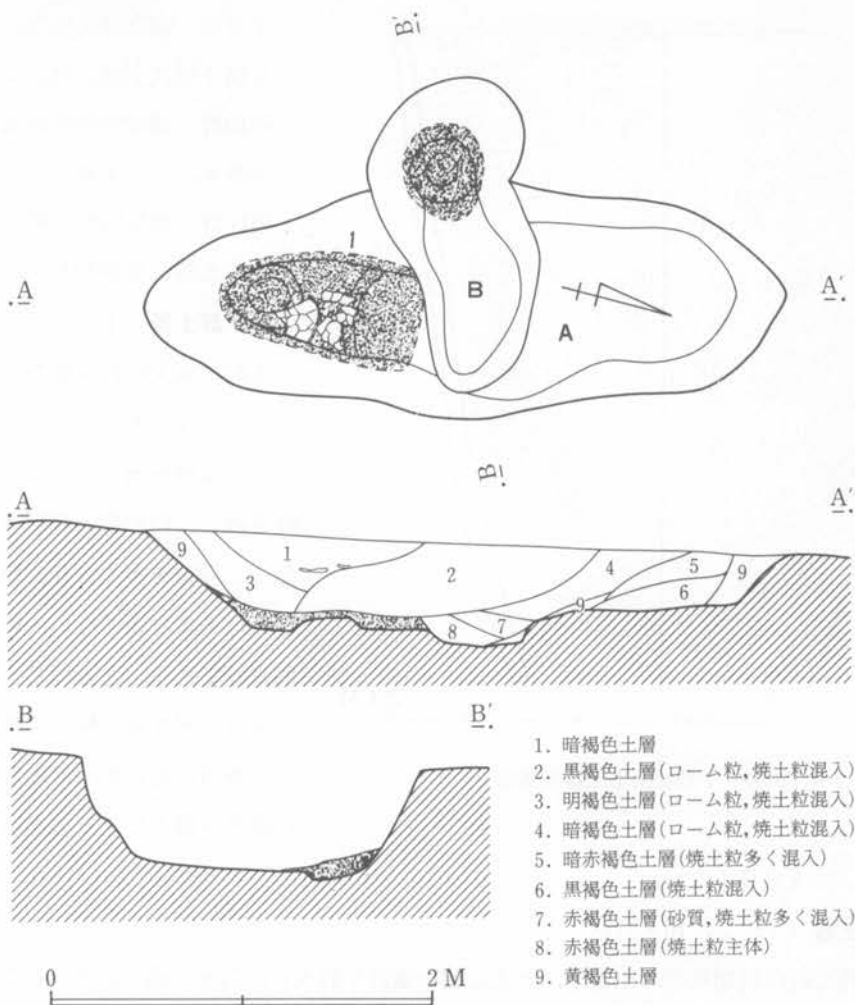
7号址（第109・110図，図版49・62）

本址は18号住居址の北西3mに位置する単独の炉穴である。2基の炉穴（A・B）が重複する。A・Bの重複関係は、断面図および切り合いの状況からAよりBの方が新しいことが明らかである。Aは長軸3.4m，短軸1.2mを測る楕円形を呈し、炉は南側に2か所掘り込まれる。焼土はレンズ状に10cm程堆積する。Bは長軸1.6m，短軸0.8mを測る不整の楕円形を呈す。Aの中央部を切り込んで足場を設ける。炉の部分は略円形を呈して西端に位置し、焼土はレンズ状に10cm程堆積する。覆土は焼土を多く含み、自然堆積の状況を呈す。

遺物はあまり多くないが、Aの炉の部分に底面から25cm程浮いて茅山式の土器が押し潰された状態で出土した。



第108图 有吉南遺跡全体图



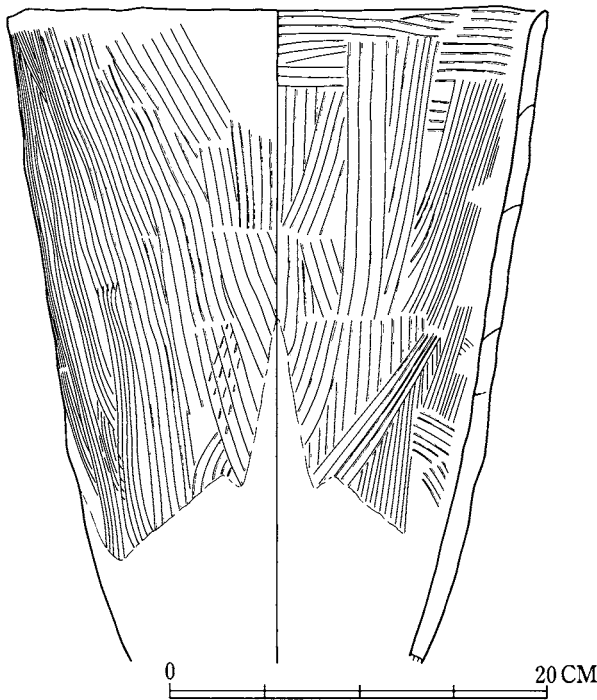
第109図 7号址実測図

遺物 口径 28.7 cm, 現存高 34.0 cm を測る。器形は底部からほぼ直線的に開くものであるが、底部を欠き底部の形状は不明である。口縁は平縁で整形は雑である。器面は内外面とも条痕で覆うもので、外面は斜走、内面は上部を横走、以下縦ないし斜走する。胎土には植物繊維を混入し、焼成は不良である。色調はおおむね黒褐色を呈する。

2. グリッド出土遺物 (第111図)

今回の調査によって得られた縄文式土器は、先述した炉穴出土の土器を除くと、表土及び他の時期の住居址の覆土から出土したものである。これらはいずれも破片であり、全体形を知りうるものはなく、またその時期も縄文時代早期末から中期後半にわたる断片的なものである。以下4群に分けて説明する。

第I群 縄文時代早期条痕文系土器



第110図 7号址出土土器実測図

第II群 縄文時代前期初頭の土器

(花積下層式土器, 黒浜式土器)

第III群 縄文時代前期後半の土器

(諸磯 a, b 式土器を主とする)

第IV群 縄文時代中期の土器 (阿玉台式土器, 加曾利E式土器)

第I群土器 (1・2)

本群は縄文時代早期条痕文系土器である。1, 2とも内外面に条痕を施す。1は内外面ともかなり明瞭な条痕を残し, 口唇部の整形は雑である。胎土は砂粒を多く含み, 植物繊維の混入はあまり多くない。焼成は比較的良好である。2も同じく内外面とも条痕を施すが, 極めて不鮮明でむしろ擦痕に近いものである。口縁下に隆帯を廻らし, その上端を縦に刻

んでいる。焼成は良くない。

第II群土器 (3~7, 10・11)

本群は縄文時代前期初頭の土器で, 胎土に植物繊維を混入し, 器面全面にわたり縄文を施すものである。3は口縁下にやや突出した感じの隆帯を廻らし, 隆帯から上には原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の縄文, 隆帯及びそれ以下にはアナガラ属のものと思われる貝殻背圧痕を施している。色調は褐色を呈し, 焼成はあまり良くない。4は円形の押圧文と原体L $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の斜縄文を施すもので, 内面は丁寧に磨いている。5は原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ で, 胎土には砂粒を多く含む。6はR $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ とL $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の羽状縄文で, R原体だけが附加条である。7, 10, 11は同一個体と考えられ, 11に見られるように縄文は羽状を呈し, さらに原体を反転させ菱状をなす。また7にて顕著であるが, 縄文原体は多少太さの異なる2本の原体を撚り合わせている。内面はおおむね横方向に丁寧にナデており, 焼成も比較的良好。

第III群土器 (8・9, 12~24)

縄文時代前期後半の土器で, 施文方法の特徴によりさらに細分される。

1類 (15・16)

器面全面に縄文を細かくかつ雑然と施すもので, 胎土には植物繊維の混入を見ないものである。15はR $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$, 16はL $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の原体を用い, 口縁はともに直線的に開く。胎土は砂粒を多く含み, 焼

成はさほど悪くないが器壁はやや荒れている。

2類 (8・9, 12~14)

半截竹管を施文具に使用するものであるが、後述の3類とは時期的に区別される。また、本類は胎土に植物繊維を混入するもの(9, 14)と、しないもの(8, 12, 13)とが存在し、本来は区別すべきものであり、前者は黒浜式土器とされるものである。以下3種に分ける。

a種 8・9 竹管による円形刺突文を有するもので、8は地文に原体L $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の縄文を施し、その上に平行沈線と刺突文を配す。9は胎土に植物繊維を混入する。いずれも赤褐色を呈する。

b種 12・13 所謂肋骨文と呼ばれるもので、12は弧状に、13は直線的な斜行沈線を配する。

c種 14 有節沈線を施すもので、波状口縁を呈する。胎土には植物繊維を混入し、内面は丁寧にナデている。

3類 (17~24)

縄文時代前期後半の土器で、諸磯b式土器を主体とする。その施文方法によりさらに4種に細分される。

a種 17~19 器面にソーメン状の粘土紐を貼付し、所謂浮線文と称されるもので、いずれも頂部を斜位に刻んでいる。17は口唇部にも浮線を有し、17, 18は地文に原体R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の縄文を施す。

b種 20 平行沈線を施すもので、沈線は横走り細く浅い。胎土は粗く焼成も不良である。

c種 21~23 連続爪形文を施す土器で、21, 22はその施文工程から有節沈線様であるが、23は沈線を伴わない。また23は波状口縁をなし、波頂部下位に孔を有する。胎土・焼成は21が良好で、口唇及び内面を丹念に磨くが、22, 23は砂粒を多く含み器面は荒れている。

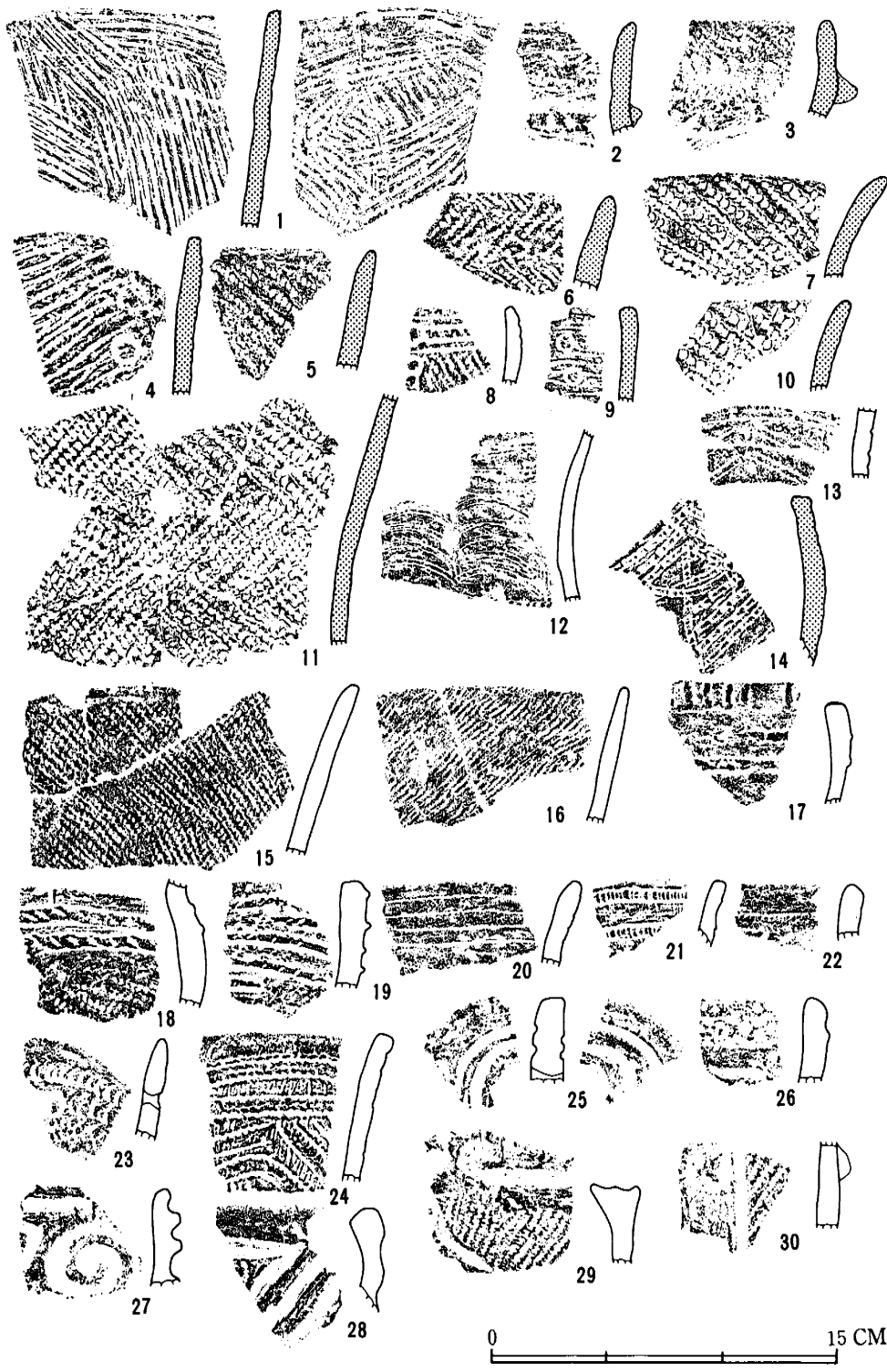
4類 24 撚糸文を地文に有するもので、浮島式土器に見られる手法である。撚糸文の上には半截竹管を押し引きし、内面は横方向に磨いている。胎土には石英粒子を含み、焼成は比較的良い。

第IV群土器 (25~30)

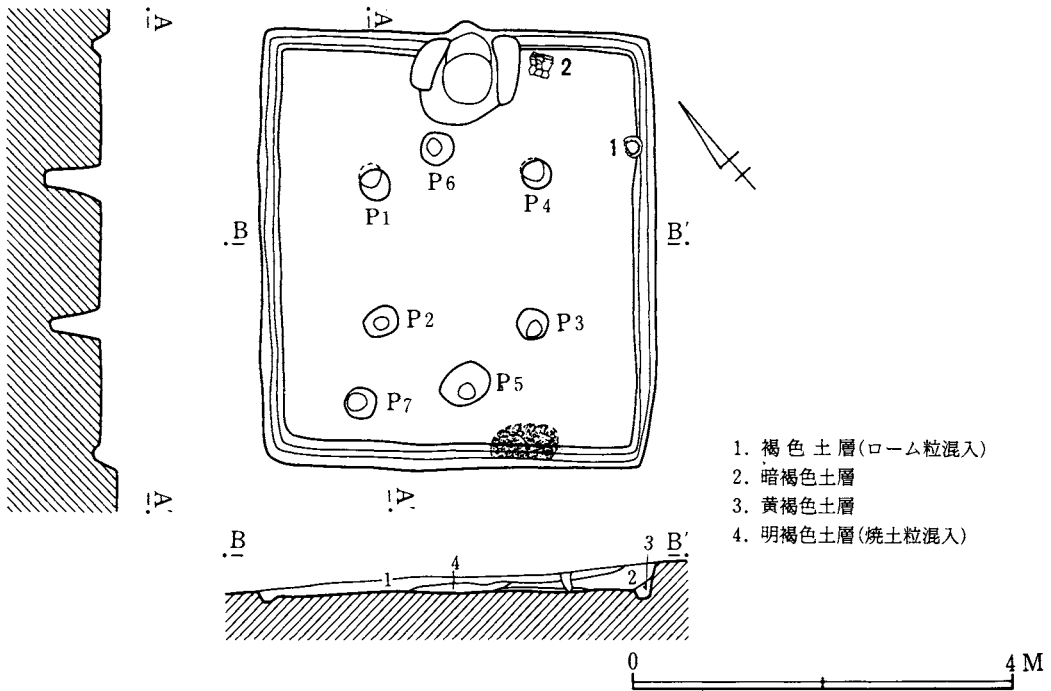
本群は縄文時代中期の土器を一括した。25は把手の破片である。孔を中心として両面とも太い沈線で同心円を描いている。胎土は砂粒及び白色粒子を含み、また雲母微粒子を僅かに含む。焼成はさほど悪くない。阿玉台式土器に比定されよう。26~30は所謂加曾利E式の中に含まれる。26は波状の微隆帯と円形の刺突を組み合わせる。27~29は口縁部文様帯に渦巻文を用いるもので、27は典型的なものとして捉えられる。28はやや退化したもので、隆帯もだらしなくなる。29は口唇上端に渦巻文を配しており、器表は原体L $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の縄文を施す。30は胴部懸垂文ですでに磨消帯を有するが、瘤状の貼り付けを有する点特異である。原体はL $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ である。

最後に簡単に編年的位置付けに触れておく。

第I群は胎土に植物繊維を混入し、器面を貝殻条痕で覆うものである。広義の茅山式土器である。



第111図 縄文式土器拓影図



第112図 1号住居址実測図

第II群は同じく胎土に植物繊維を混入するが、器面に縄文を施すものである。3は貝殻背圧痕が認められ花積下層式土器に、他は黒浜式土器に比定されよう。

第III群は前期後半の土器である。このうち1類、2類は諸磯a式土器に、3類は諸磯b式土器に、4類は浮島式土器に比定される。即ち、1類の縄文は細かく雑然としたもので、諸磯a式土器に特徴的な縄文であり、また2類も平行沈線による肋骨文、幅の細い有節沈線文等諸磯a式土器にみられるモチーフを有している。3類は浮線文、爪形文等諸磯b式土器のメルクマールとして捉えられるものである。4類は地文に燃糸文を有し、一般に浮島式土器の範疇に含まれる。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

1号住居址 (第112・137図, 図版49・62・63)

本住居址は遺跡の最西端に位置し確認面は南側にやや傾斜する。規模は4.6m×4.2mで主軸側がやや長い略正方形を呈す。カマドを通る主軸はN-32°-Wを指す。壁はやや斜めに立ち上がり、確認面から床面までは約30cmを測る。壁溝は全周しており、深さは10cm程である。床面は全体に固く踏み締められた状態である。ピットは7か所検出されたが、対角線上に存するピットが主柱穴と思われる。柱穴の深さはまちまちで、P2が最浅53cm、P1が最深80cmを測る。貯蔵穴はカマドの対面に設けられ、深さ38cmを測る。覆土は自然堆積で、北側から流入す

る様相が認められる。

カマドは北東壁のほぼ中央に設けられる。遺存状態は悪く袖部のみが検出された。煙道部は壁を 20 cm 程掘り込んだだけで、約50°の傾斜で立ち上がる。燃烧部は円形のプランを呈し、床面から 17 cm 掘り込まれる。ブロック化した焼土が 10 cm 程堆積している。

出土遺物はあまり多くなく、北東コーナー部分からの甕 2 個体分とカマドの袖部からの坏が図示できたのみで、50片ほどの土器片が覆土中から検出された。

遺物 本址からの遺物は少なく、土器片の他に石器が若干認められるのみである。このうち図示し得たものは甕・坏の 4 点である。

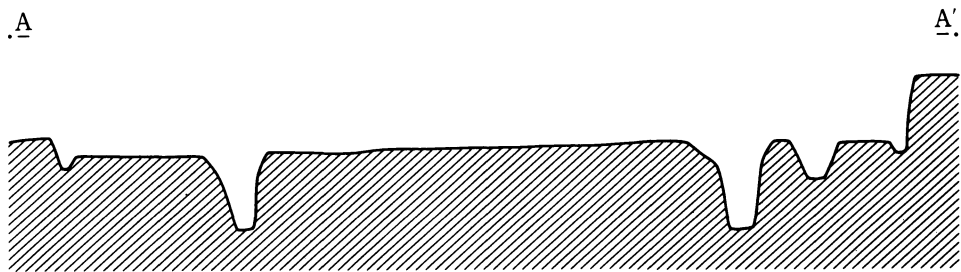
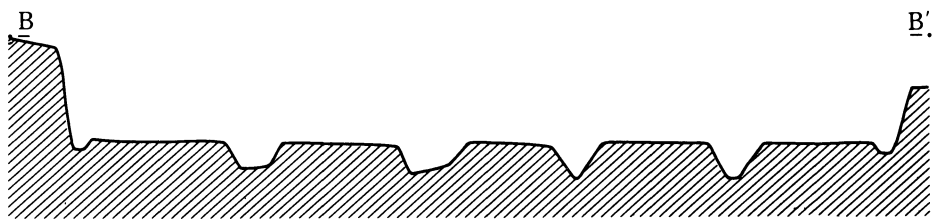
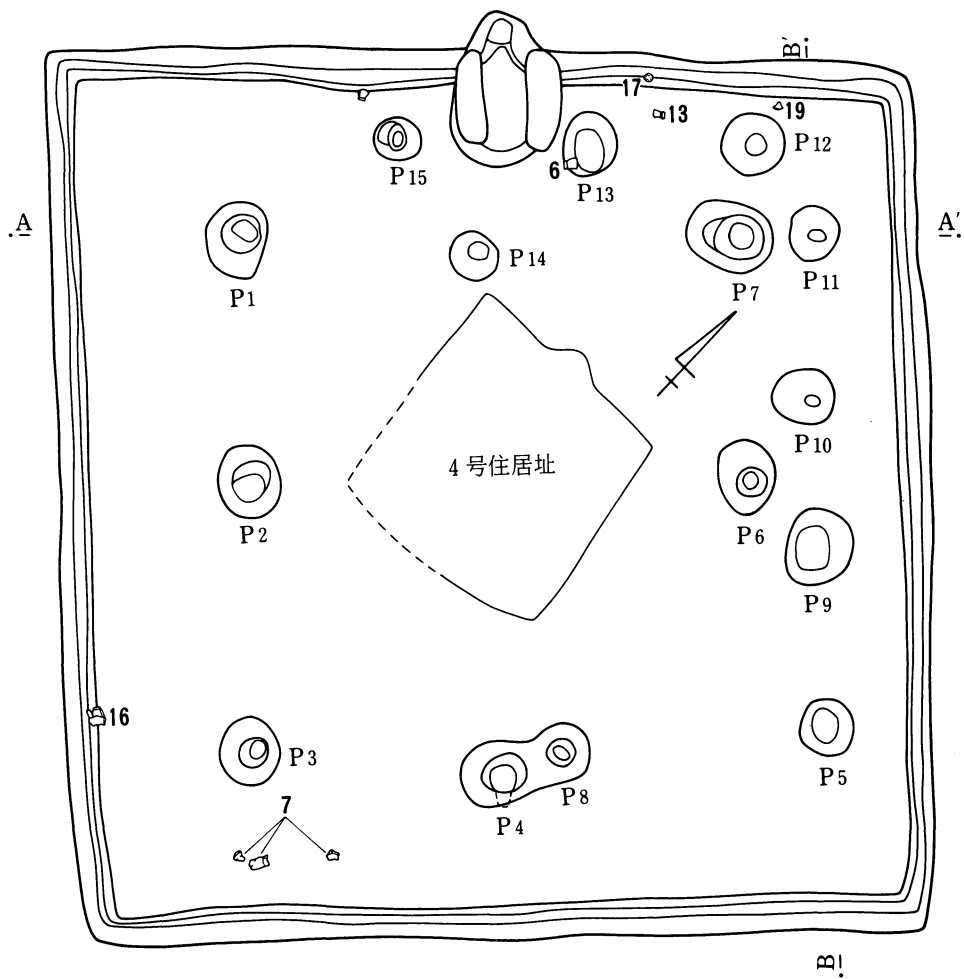
1・2 は甕で底部を欠損する。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部はやや受け口状を呈す。胴部はやや長胴ぎみになる。2 の口縁下には沈線様の明瞭な肩が形成される。胴部上半には縦位、下半には斜位のヘラ削りが施され、さらに簡単なナデが加えられる。口縁部内外面にはナデ調整が丁寧な施される。胎土には砂粒が含まれるが、焼成は比較的良好である。1 は褐色、2 は赤褐色の色調を呈し、2 には二次焼成による黒変が多く観察される。3・4 は坏で全体の 1/3 程の遺存である。口径 13.3 cm とほぼ同一である。口縁部はやや外反し、下位に稜を有す。底部は平底状を呈す。口縁部内外面および体部内面には丁寧な横ナデ、体部外面にはヘラ削りが施されるが、3 はナデにより磨消される。胎土には砂粒を多く含む。色調は暗褐色を呈す。

3号住居址 (第113・114・137・138・153・154図, 図版50・62・63・74・75)

本住居址は10号住居址の南東約 3 m に位置する大形の住居址である。覆土中に小形の 4 号住居址が構築される。平面プランは正方形を呈し、規模は 9.2m×9.2m を測る。本遺跡中で最も大形の住居址である。カマドを通る主軸は N-45°-W を指す。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、全周する壁溝を有す。壁高は、緩斜面に位置するため、東コーナーで最深 102 cm、西コーナーで最浅 22 cm を測る。壁溝は幅 20 cm、深さ 15 cm 程でほぼ一定である。床面は堅緻でほぼ平坦であり、特に中央部分は良好にしまっている。ピットは床面で計 15 か所検出された。このうち P 13~P 15 は深さ 14 cm 前後と浅く、その位置からカマドに付属する何らかのピットと考えられる。P 1~P 7 は深さ、位置から考えて支柱穴となるであろう。P 6 が最浅 45 cm、P 7 が最深 93 cm を測る。P 8~P 12 は補助柱穴に相当するものであり、深さは 26~43 cm である。貯蔵穴と断定できるピットは不明であるが、あるいは位置からして P 12 が相当するかもしれない。覆土は自然堆積の様相を示すが、4号住居址の部分には黒褐色土の堆積が認められる。

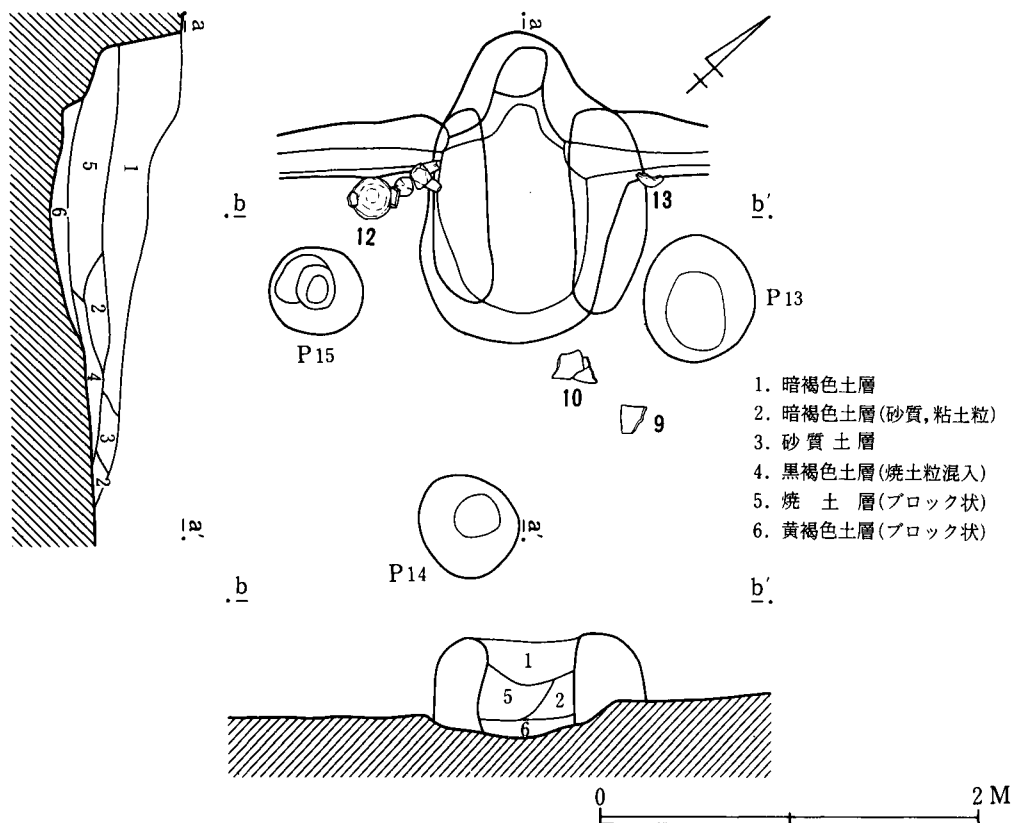
カマドの遺存は比較的良好であるが、天井部は近世の攪乱により破壊される。壁を 40 cm 程掘り込んで煙道部が設けられ、燃烧部から急激な角度で立ち上がる。燃烧部は大きく、壁にまで及ぶが、床面から 15 cm 程掘り込んでいない。袖はやや粘性を有す山砂を用いている。

遺物 本址から出土した遺物はかなり多いが、破片となるものがほとんどで完存する土器は少なかった。他にカマド左側より支脚が 2 個体分と、カマド内より鉄鏃 1 点が検出された。



0 4 M

第113图 3号住居址实测图



第114図 3号住居址カマド実測図

5は甕の胴部，6～8は甕の上半部，9～12は下半部である。これらは接合する可能性もあるが，現時点では接合し得なかった。6・7の口縁部は短く，「く」の字状に外反する。胴部にはやや膨らみを有す。8は肉薄となり，口縁部は短く直立する。口縁下のくびれはなくそのまま胴部に移行する。胴部は6・7より長胴となるものであろう。口縁部内外面および胴部内面には横ナデ，胴部外面には縦位のヘラ削りが施されるが，8の外表面は荒廃が著しいため調整不明である。いずれも多量の砂粒を胎土に含み，6・8は焼成不良である。二次焼成のためか全体に赤化が認められる。5は肉薄で中位に最大径をもつ球形胴を呈す。外面上部には縦位，下部には斜位のヘラ削りが丁寧に施される。内面はナデ調整であるが，器面の剝離が著しい。胎土・焼成とも良好で，色調は褐色を呈す。9～12は若干上げ底を呈す。調整はほぼ同様に，10にはヘラ削り後弱いナデが加えられる。内面には輪積み痕が比較的明瞭に認められる。胎土には砂粒を多く含む。色調は二次焼成のためか全体に赤化する。特に12は著しく黒変および器面の剝離が認められる。13は高坏で口径 14.6 cm，器高 10.0 cm を測り，坏部および裾部 $\frac{1}{2}$ 程を欠損する。坏部は浅く，口縁部は直線的に開くが口唇部でやや内彎する。坏下位に明瞭な稜を有す。脚部は太く，裾に向けてやや開き，裾部は脚柱部との界に不明瞭な稜を形成して大きく開く。坏部全面に丁寧なナデが

施され、脚柱部外面は縦位のヘラ削り後弱いナデが加えられる。内面にはヘラ状工具による掻き取り痕が残る。胎土は緻密で焼成は良好である。色調は明褐色を呈すが、脚部に部分的な黒斑が観察される。14は高坏坏部で $\frac{1}{3}$ 程遺存する。調整・胎土・色調とも13と同様である。15は高坏脚柱部である。13よりもつくりが粗く、開きがほとんどみられなくなる。胎土には砂粒を多く含み黒褐色を呈す。調整は不明である。16は口径 19.6 cm, 器高 8.6 cm を測る大形の鉢形土器である。短い口縁部は直線的に内傾する。体部はやや丸味を有し、底部は平底となる。器内外面ともに丁寧なナデが施される。胎土・焼成・色調とも13・14と同様であるが、器面には剝離が顕著に認められる。17~19は口径 12.5 cm 程の坏である。器高は17が 4.5 cm, 18・19が 3.5 cm を測る。口縁部はいずれもやや外反する。口縁下の稜はやや鈍い。底部は17が丸底状, 18・19が平底状を呈す。調整はほぼ同様で、口縁部に横ナデ、体部外面にヘラ削りが施されるが、19の体部外面には比較的丁寧なナデが加えられ、内面にはナデ後細かいヘラ磨きが観察される。胎土には砂粒を多く含むが焼成は良好である。色調は暗~黒褐色で、17・19の内面は黒色を呈す。

1 はほぼ完形の腸状のある長三角形式の鉄鏃で、平造りに近い両丸造りである。茎に木質が付着する。

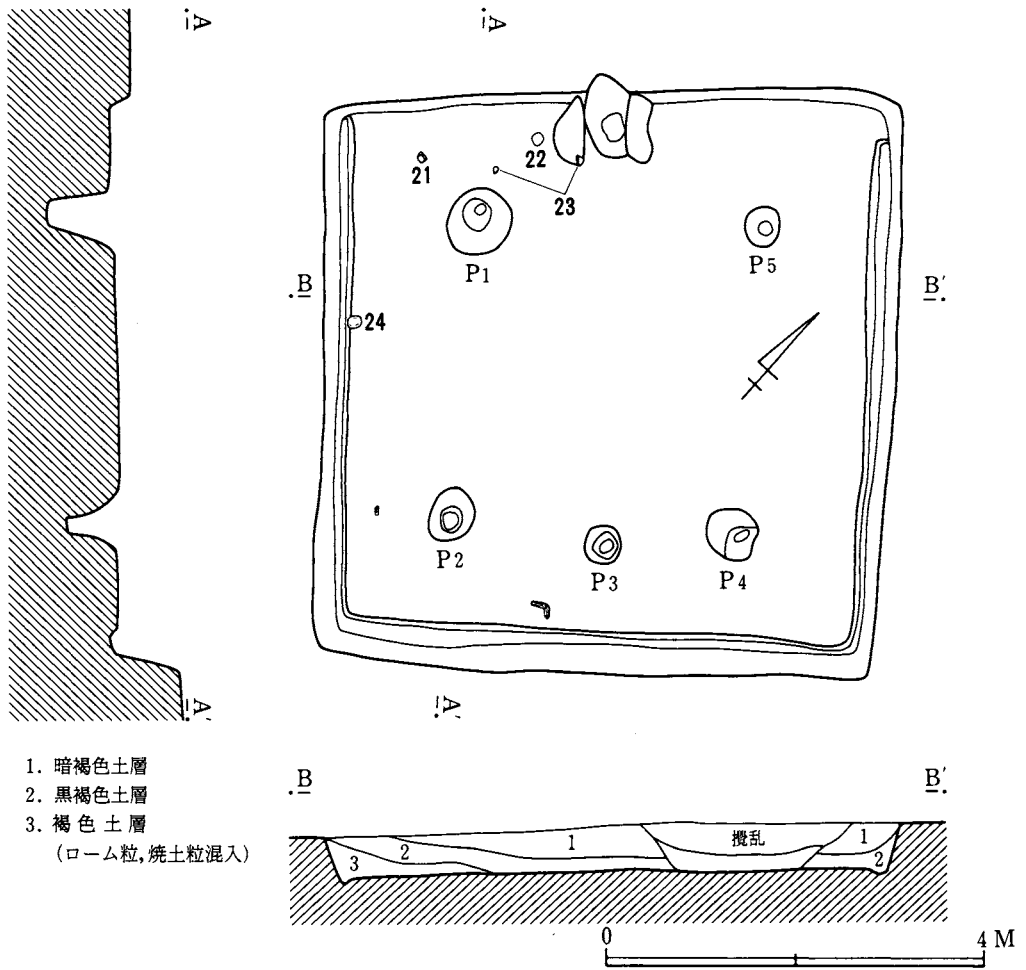
1, 2 は土製支脚である。1 はほぼ完形で、器高 19.0 cm を計る円柱状を呈す。焼成を受けているが器面は比較的しっかりとしている。明褐色を呈す。2 は破損品である。胎土に砂を混入し、赤褐色を呈す。

8号住居址 (第115・138図, 図版51・64)

本住居址は15号住居址の南西 3 m程に位置する。遺存状態は良好であるが、カマド側壁付近は攪乱により上面が削平される。平面プランは正方形を呈し、6.0m×6.0mの規模を示す。カマドを通る主軸はN-42.5°-Wを指す。壁はしっかりとしているが、カマド付近が削平されており 20 cm 程の深さを測る。カマド対面の壁が最も高く 64 cm を測る。壁溝は幅 10~20 cm, 深さ 5 cm 前後と浅くカマド側の壁を除いた部分に廻っている。床面は堅緻で特に中央部分は良好である。ピットは 5 か所検出された。P 1 が最も深く 72 cm, P 4 が最浅 41 cm を測る。これらは、その位置、深さからすべて柱穴と思われ、典型的な 5 本柱の形態を示すものである。貯蔵穴は確認されなかった。覆土は 3 層で自然堆積であるが、部分的に近世の溝による攪乱が認められる。

カマドは攪乱により上部が消失しており、掘り方と袖部が検出されたのみである。煙道部は壁を 18 cm 程三角形に掘り込んだだけで燃焼部から 35°の角度でなめらかに移行する。燃焼部の掘り込みも床面から 10 cm 程と浅く、煙道部とともに楕円形のプランを呈す。袖部は粘性の強い土層を基盤として、その上に山砂を積んで構築しているようである。

遺物は僅少で、床面から坏類のみ出土しただけで、カマド内からの出土は認められなかった。他に鉄鏃の小片が 1 点検出された。坏は土師器がほとんどで須恵器が 1 点認められたが、図示し得なかった。



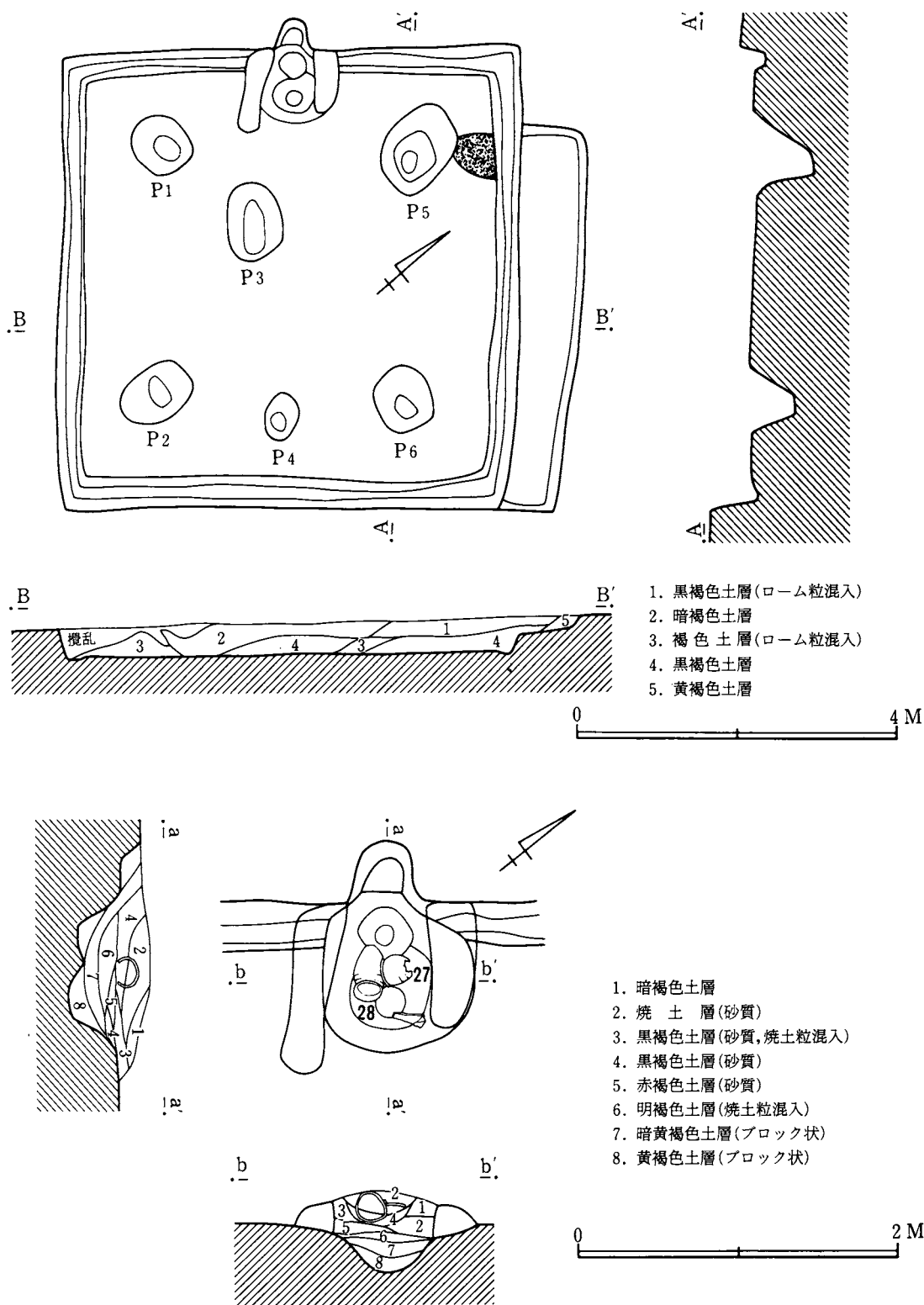
1. 暗褐色土層
2. 黒褐色土層
3. 褐色土層
(ローム粒, 焼土粒混入)

第115図 8号住居址実測図

遺物 20・21は粗製の坏である。口縁部は明瞭な稜をもたずに体部から直立あるいは内傾する。20は手捏ね的につくりで、体部外面には粘土の積み上げ痕が明瞭に残る。体部下半には粗いヘラ削りが深く施される。20・21とも内面には丁寧なナデが加えられる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は不良である。色調は黒褐色を呈す。22～25は明瞭な稜を有す坏である。口径 13.5～14.5 cm, 器高 4.5～5.0 cm を測る。口縁部は各様で、22が内彎ぎみに開き、23は内傾、24は直立する。底部はいずれも丸底状を呈し、24・25の稜は突出する。調整はほぼ同様で、口縁部内外面には丁寧な横ナデ、体部外面にはヘラ削りが施される。体部内面には丁寧なヘラ磨きが観察されるが、23のみ全体に丁寧なヘラ磨きを加えられる。胎土・焼成とも良好で、色調は暗褐色を呈す。24は二次焼成を受けたのであろうか、器内外面に剝離が顕著に認められる。

10号住居址 (第116・138・139・154図, 図版51・64・74)

本住居址は、調査区の東側で3号住居址から3 m程北西に位置する。南西壁側は近世の溝によ



第116図 10号住居址・カマド実測図

る攪乱のため若干削平されている。なお、北東壁の外側に長方形を呈する 10~20 cm の落ち込みが検出されており、あるいは他の住居址の重複とも考えられるが断定はできない。平面プランは正方形を呈し、規模は 5.7m×5.6m を測る。壁外の遺構は主軸方向で 4.8m を測る。カマドを通る主軸は N-53.5°-W を指す。壁は南西側が攪乱されているが、南東壁で 50 cm 程を測る。壁溝は幅 20 cm、深さ 5~10 cm 程で全周する。床面は全体的に良好で、特に中央部分はよくしまった状態である。なお、壁外の遺構はやや軟弱となる。ピットは 6 か所検出されており、カマド前面以外はすべて柱穴と考えられる。深さは P 5 が最深 73 cm、P 3 が最浅 33 cm を測る。貯蔵穴は確認されなかった。覆土は 4 層に分けられ、東方向からの流入が顕著である。

カマドは北西壁のほぼ中央に設けられる。煙道部は壁を 36 cm 程楕円形状に掘り込み、燃烧部から一旦テラスを形成した後、50°の角度で壁外に続く。燃烧部は床面から 30 cm 程深く掘り込まれ、底面には 2 か所のくぼみが認められる。袖部は比較的良好に遺存しており、山砂で形成される。焼土層は底面よりかなり上位で多量に確認されており、砂質を帯びるところから天井の崩落による層と思われる。

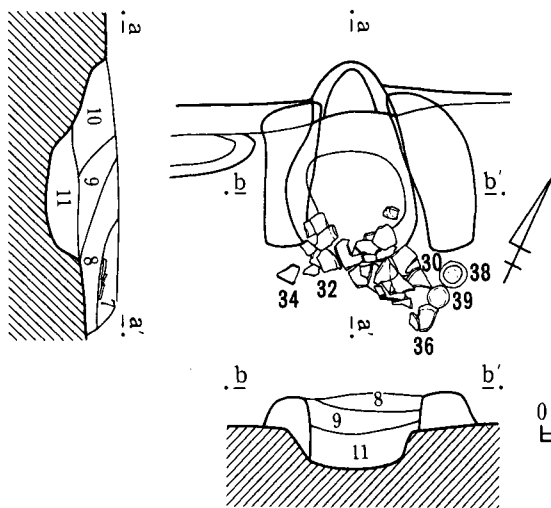
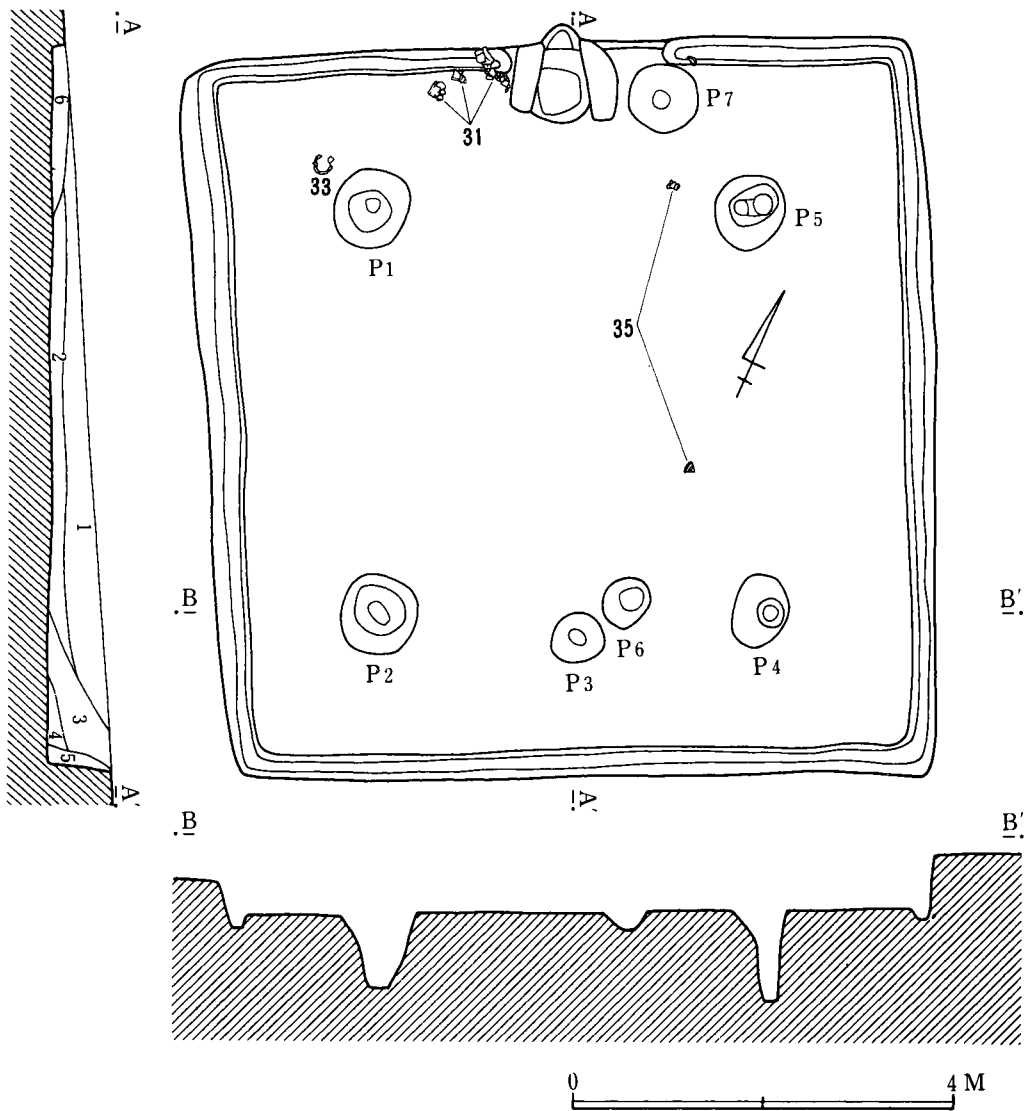
遺物 本址出土の遺物は少ないが、カマド内から遺存の良好な甕 2 個体と支脚が検出された。他に鉄製品および石製品が認められた。

26・27は胴部に最大径を有し、その位置が上位に存する甕でほぼ完形である。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁下に明瞭な稜が形成される。底部は26が上げ底。27が平底となる。口縁部内外面には丁寧な横ナデ、胴部内面にはナデが施される。胴部外面および底部にはヘラ削りが認められる。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈す。27の胴部外面は二次焼成による器面の荒廃が顕著である。28は口径 19.0 cm、器高 28.3 cm、底径 6.0 cm を測る長胴の甕で、遺存状況はきわめて良好である。器肉は薄く、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部でさらに外傾する。胴部はあまり膨らみをもたず、最大径は口径と一致する。底部は平底となる。口縁部内外面・胴部内面には非常に丁寧なナデが施される。胴部外面はくびれ部から底部にかけて長い縦位のヘラ削りが施され、底部近くでさらに横位のヘラ削りが加えられる。胎土・焼成とも良好で、色調は明褐色を呈す。二次焼成により黒変・赤化が部分的に観察される。胴部には山砂が付着する。29は推定口径 15.5 cm を測る盤状の坏である。胎土・焼成とも不良で、色調は黒褐色を呈す。

3は支脚である。器高 22.5 cm を測る大形品で、下端が広がる円柱状を呈す。指頭による調整がみられる。胎土に砂を混入し、焼成を受けているために赤褐色を呈す。

12号住居址（第117・139・153図、図版52・64・65・75）

本住居址は、14号住居址の南西 1 m に近接して構築されている。確認面は北西方向にやや傾斜する。平面プランは正方形を呈し、規模は 7.6m×7.6m を測る。カマドを通る主軸は N-28°-W を指す。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、南東側で最も深く 60 cm 程を測る。壁溝はほぼ全



1. 褐色土層(ローム粒, 焼土粒混入)
2. 暗褐色土層(焼土粒, 砂粒混入)
3. 明褐色土層
4. 黒褐色土層
5. 黄褐色土層
6. 砂質土層(カマド)
7. 砂質土層(焼土粒混入)
8. 黒褐色土層(砂質, 焼土粒混入)
9. 赤褐色土層(ブロック状焼土混入)
10. 焼土層
11. 黄褐色土層(ブロック状)

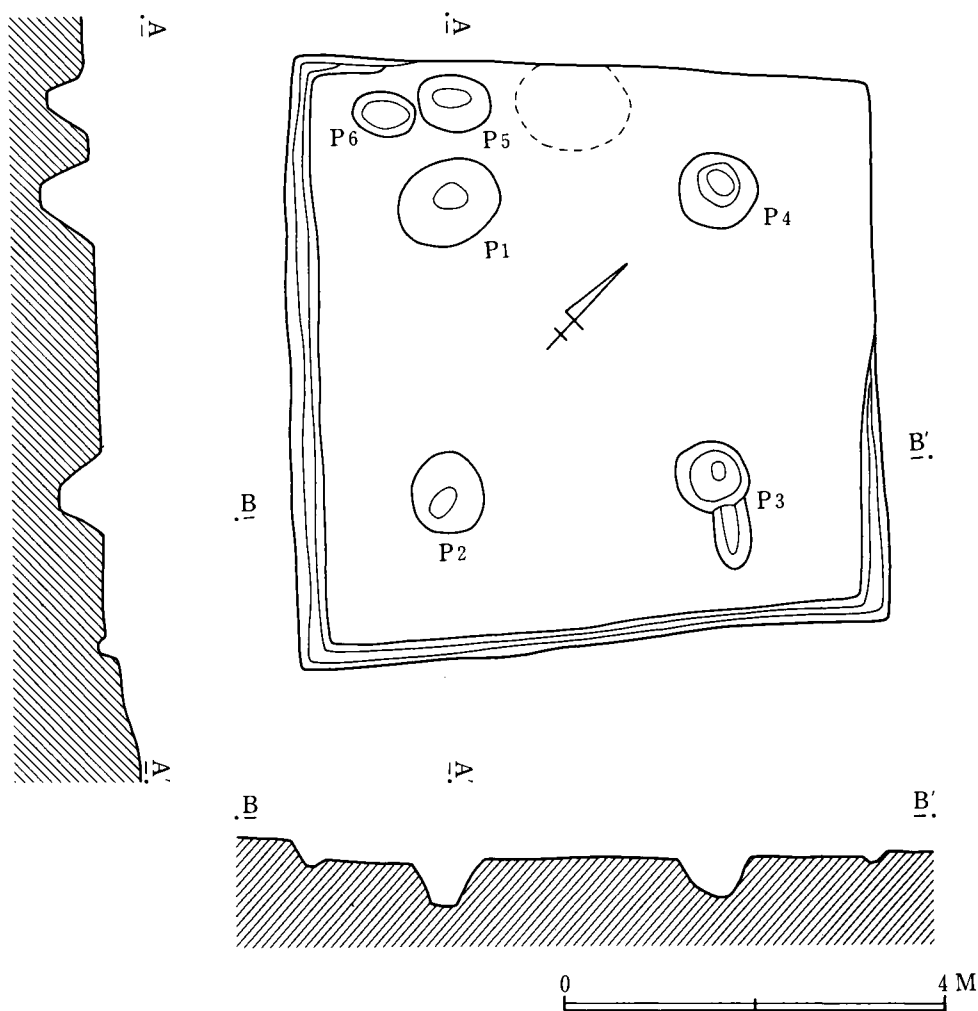
第117図 12号住居址・カマド実測図

周しており、幅 20 cm、深さ 10 cm 程を測る。床面は全体的に堅緻で平坦である。ピットは計 7 か所検出されたが、P 1～P 5 が柱穴に相当するものである。深さは P 1・P 4 が 80 cm 強、P 2・P 5 が 70 cm 強を測り、カマドと対置する P 3 は 37 cm となる。なお、P 3 に近接する P 6 は深さ 20 cm 程で性格は不明であるが、あるいは補助の支え的な役割を背っていたのかもしれない。貯蔵穴はその位置からみて P 7 がこれに相当するものであろう。プランは略円形を呈し、すり鉢状の断面を有す。深さは 68 cm を測り、遺物は検出されなかった。覆土は 5 層に分かれ自然堆積の状況を示す。

カマドは北西壁のほぼ中央に位置しており比較的良好な遺存状況であるが、天井部は崩落している。煙道部は壁を 15 cm 掘り込んで半円形状に設けられる。燃焼部はほぼ円形のプランを呈して煙道部へ続く。掘り込みは床面から 20 cm 程と比較的深い。カマド内堆積土の上層は焼土化した砂質土層が多量に認められ、これが天井部の崩落した層と思われる。焼土層は煙道部側に集中する。袖部はやや粘性を有す山砂により構築される。

遺物は床面出土のものが少なく、カマド付近に集中して検出された。特にカマドの焚口部に坏・甗・甕・支脚が一括して出土した。土玉は 2 点とも壁際で床面から若干浮いて検出された。

遺物 30は甗で口縁部 $\frac{1}{2}$ 程を欠損する。口縁部は大きく外反し、胴部は下半で急激にすぼまる。口縁部内外面には横ナデ、胴部外面には斜位のヘラ削りが施される。内面は丁寧なナデ後縦位の細かいヘラ磨きを加えられる。器肉はやや厚く、胎土・焼成とも良好である。色調は褐色を呈し、外面には黒変が認められる。31は口径 22.8 cm、器高 29.0 cm、底径 8.5 cm を測る甗で、胴部を $\frac{1}{3}$ 程欠損する。口縁部はやや短くゆるく外反する。胴部には若干膨らみを有し、長胴ぎみの形を呈す。胴部外面には数方向のヘラ削りが施される。胎土には砂粒を多く含むが焼成は良好である。色調は褐色で、部分的に黒変が観察される。32・33は甗の上半部で、32の口縁部が「コ」の字状に外反するのに対し、33は「く」の字状を呈す。調整は同様である。34は比較的大形の甗の底部である。上げ底を呈す。35は口径 18.0 cm、器高 15.7 cm を測る大形の高坏で、坏部 $\frac{1}{2}$ ・裾部 $\frac{1}{3}$ 程を欠損する。坏部の口縁は内彎ぎみに大きく開き、中位で明瞭な稜を形成する。脚柱部は長くなだらかに広がり、裾部で大きく開く。脚柱部と裾部の間に明瞭な稜をもたない。坏部外面にはナデ、内面はナデ後弱いヘラ磨きを加えられる。脚柱部外面は縦位のヘラ削り後弱いナデ、内面はヘラ削り後横位のナデが施される。内面には粘土の巻き上げ痕が明瞭に観察される。胎土・焼成とも良好で、坏部は内黒となる。外面には全体に赤彩が認められる。36～38は坏である。36・37は口径 13 cm 前後で稜は下位に形成される。口縁部は直線的に外反し、底部は丸底状を呈す。体部外面がヘラ削りで、他は弱いヘラ磨きが施される。色調は黒褐色を呈す。38は突出する稜を有し、口縁は短く内傾する。体部外面はヘラ削り後ナデ、他には丁寧なヘラ磨きを加えられる。胎土・焼成とも良好で褐色を呈す。39は完形の須恵器の坏蓋である。口径 11.0 cm、器高 4.7 cm を測る。口縁部は内彎ぎみに開き、端部は丸くなる。体部は球形を呈し、天井部は平坦である。



第118図 14号住居址実測図

体部と口縁部の境、口縁部内側に一条の浅い沈線が廻る。全体に丁寧な横ナデが施されるが、体部上端および天井部には回転ヘラ削りが観察される。

9・10は土玉である。整形は比較的丁寧で砂粒を多く含む。色調は9が黒色、10が褐色を呈す。

14号住居址（第118・140図、図版52・65・66）

本住居址は12号住居址の北東1mに近接して構築されているが、上面をほぼ削平されており、遺存はあまり良好でなかった。平面プランはほぼ正方形を呈し、規模は6.3m×6.1mを測る。カマドを通る主軸はN-39°-Wを指す。壁は削平されてほとんど遺存していないが、南側で20cm程の深さで認められる。壁溝は幅10~20cm、深さ6cm程で設けられる。北側部分では確認されていないが、削平されていることからみると本来は全周していたものであろう。床面は全体的に堅緻であるが、特に柱穴間の中央部分は良好に固められている。また、床面はほぼ平坦である

が北側方向に若干傾斜している。ピットは6か所検出された。このうちP1～P4は柱穴で略円形のプランを呈す。深さは本遺跡中の住居址のなかでは比較的浅く、P1が最深59cm、P3・P4が41cmを測る。P5・P6は貯蔵穴に相当するものと思われる、カマド左側に並んで位置している。なおP6は床面を若干掘り下げた時点で検出された。いずれも横長の楕円形のプランを呈し、内部に遺物が含まれている。カマドは削平されていて状況は不明である。掘り方が明瞭でない点からすれば、壁への掘り込み、床面への掘り込みはあまり顕著でなかったものと思われる。

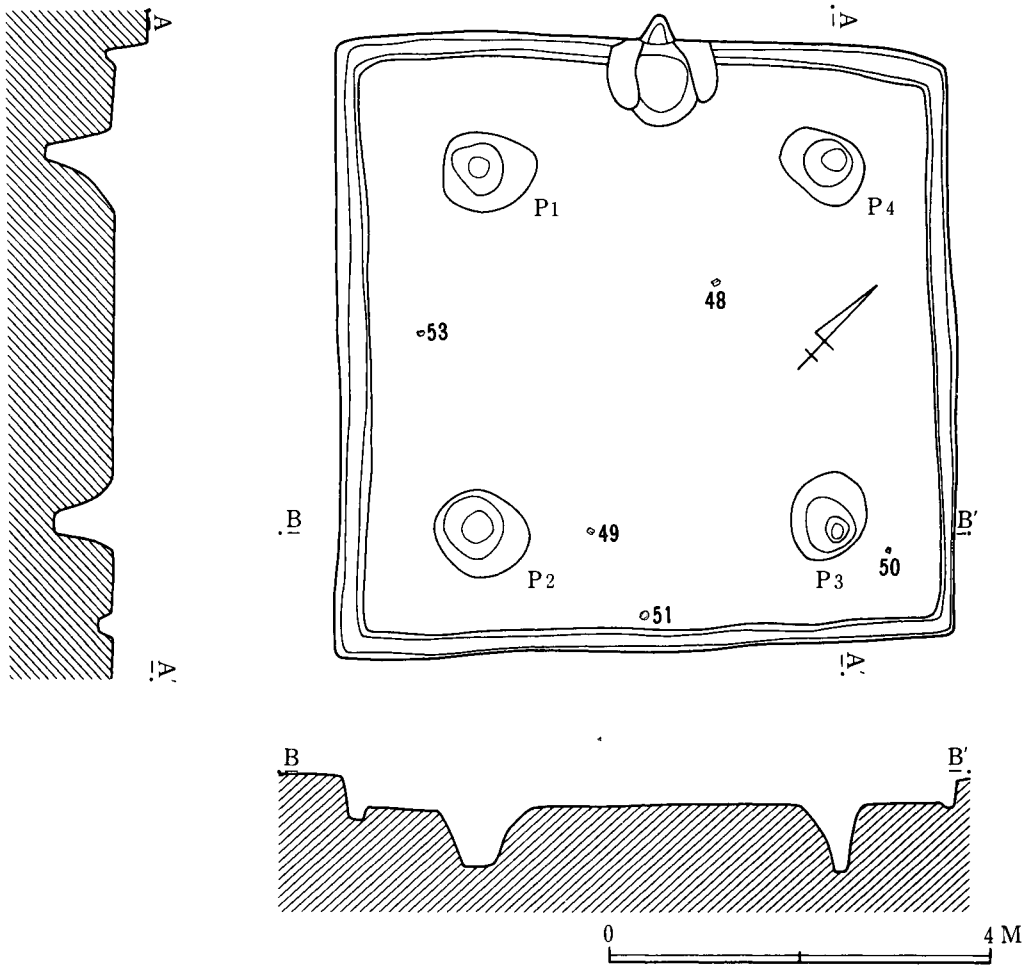
床面出土の遺物は少ないが、P5内から甕・坏、P6内から坏が出土した。覆土中の遺物も少ない。他に鉄鏝片が床面から出土したが図示には至らなかった。

遺物 40は甕で口縁部を $\frac{1}{2}$ 程欠損する。口縁部は短くゆるやかに外反する。胴部は下半で膨らみを有し、底部にかけて急激にすぼまる。胴部外面はヘラ削り後ナデ、内面には横位のヘラナデが施される。胎土に砂粒を多く含むが、焼成は良好で暗褐色を呈す。42は小形の甕の下半部である。底部はやや上げ底となり、胴部は球形を呈す。外面はヘラ削り、内面は丁寧なナデを加える。胎土・焼成とも良好で、褐色を呈すが、外面には黒変が多くみられる。43は推定口径17.3cmを測る大形の坏である。半球状を呈し、口縁部は短く外反する。底部は小さい平底である。外面はヘラ削り、内面には丁寧なナデが施される。胎土に砂粒を多く含むが良好な焼成で褐色を呈す。44～47は坏である。45は比較的明瞭な稜を有し、口縁部が内彎ぎみに大きく開く。二次焼成のため器面の荒廃が著しく調整は不明であるが、口縁部から体部にかけて赤彩が認められる。46・47は肉薄の坏で、突出する稜を形成する。口縁部は直立あるいは外傾する。調整は同様で体部外面はヘラ削り、他には丁寧なナデが施される。胎土・焼成とも非常に良好で、46が暗褐色、47が明褐色を呈す。47の体部内面にはネズミによるかみ痕が観察される。

15号住居址（第119・140・153図、図版53・66・75）

本住居址は調査区の中央寄りで、8号住居址の北東3m、14号住居址の南東5m程に位置する。規模は主軸と直交する壁で6.5m、南西壁で6.5m、北東壁で6.0mを測り、北東側がやや短くなるもののほぼ正方形を呈す。カマドを通る主軸はN-45°-Wを指す。壁は全体的に低く、確認面から南側で最深41cmを測り、北側ではほとんど壁が確認されなかった。これもやはり後世の削平があったものであろう。壁溝は幅10～20cm、深さ10cm程で全周する。床面は堅緻で、特に中央部分は良好に固められておりほぼ平坦となる。ピットは4か所検出され、すべて柱穴である。プランは不整円形を呈し2段掘り込みの形態を採る。規模は径80～100cm、深さはP2が最浅で61cm、P1・P3が最深81cmを測るもので、かなり大きな柱穴である。貯蔵穴は確認されなかった。覆土は自然堆積である。

カマドは北西壁のほぼ中央に設けられているが、この部分は削平が激しいために遺存状態はきわめて不良である。煙道部は壁を25cm程三角形状に掘り込んで設けられ、燃焼部から急激に立ち上がった後にゆるやかに壁外へと続く。燃焼部はほぼ円形のプランを呈し、焚口部から徐々に



第119図 15号住居址実測図

深くなり、煙道部との接点で最も深く床面より 25 cm 低い。カマド内堆積土の上層にはしまりの強い砂質土層が認められ、天井部の崩落と思われる。焼土層はこの砂質土層直下に堆積しており、底面からはかなり浮いている。袖部は下半部が遺存しており、粘性の強い土を基盤としてその上に山砂を積んで構築したようである。

床面出土の遺物は少なく、坏・高坏類がカマドの反対側で検出されたのみである。鉄鏃と須恵器の高坏片は P 3 の壁寄りの出土である。カマドからは遺物はまったく出土しなかった。

遺物 48は口縁部が「コ」の字状に外反する甕で、胴部が肉薄となる。褐色を呈すが黒斑が多くみられる。49・50は高坏の坏部片である。49の坏部には稜が形成されず、接合部より内彎ぎみに大きく開く。丁寧なナデ調整が施される。胎土には砂粒をほとんど含まず緻密で焼成は良好である。褐色を呈す。50には弱い稜が形成される。調整は49と同様であるが胎土は粗い。51は須恵器の高坏脚柱部である。ロクロ整形で丁寧な横ナデが施される。胎土・焼成とも良好で灰褐色を呈

す。52～54は丸底を呈す坏である。体部は略球形となり、口縁下に明瞭な稜を形成しない。調整はいずれも同様で体部外面にヘラ削り、内面には磨き様の丁寧なナデが施される。52の内面にはヘラ状工具による暗文が放射状に施される。胎土・焼成とも良好で褐色を呈す。55は口径 8.0 cm を測る小形の坏で器肉が厚い。内面には丁寧なナデが施され赤彩される。胎土には砂粒を多く含み、褐色を呈す。

2は有茎の柳葉鏃で、平造りとなる。逆刺は鈍い。

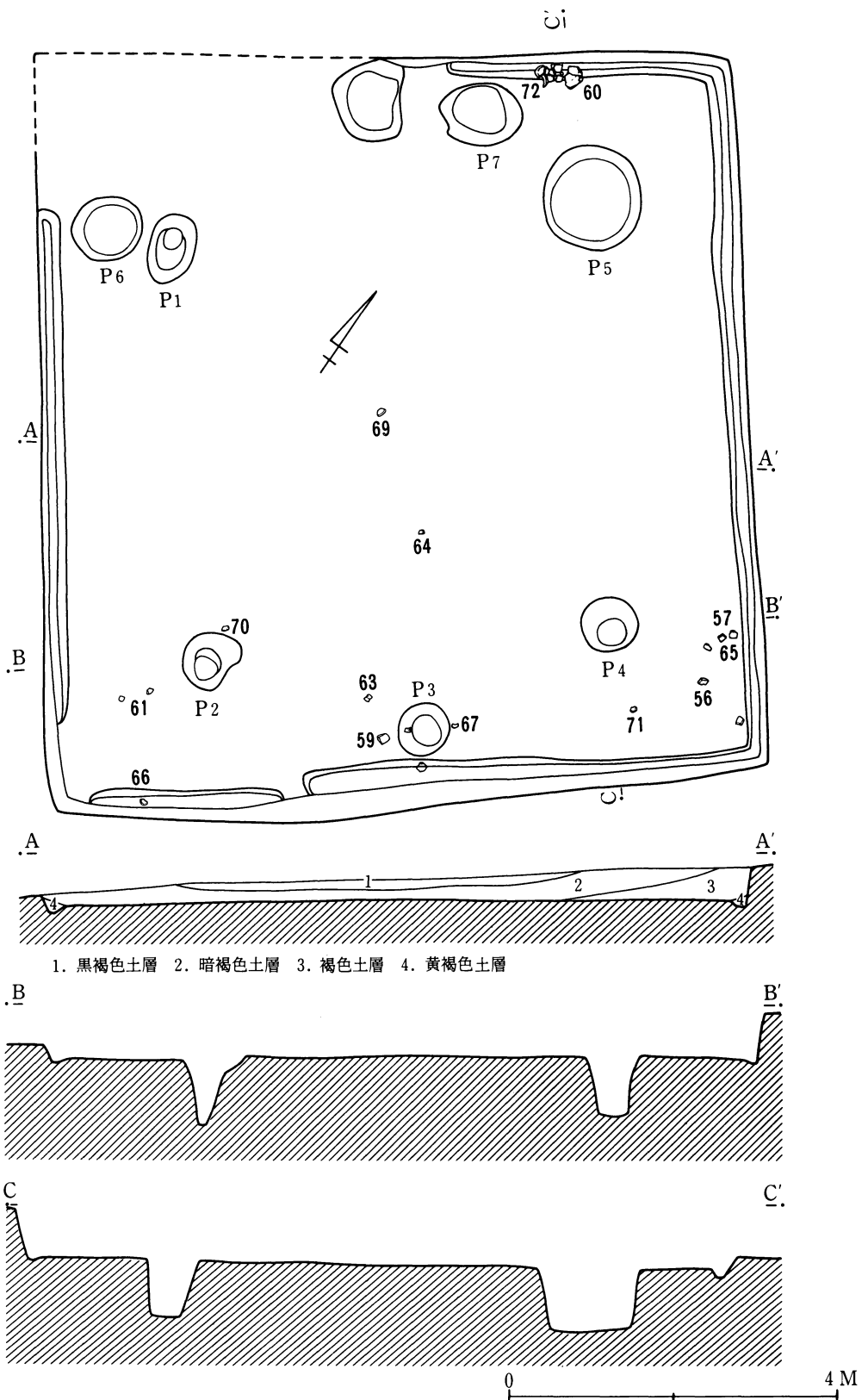
16号住居址（第120・140・141・153図，図版53・66・67・75）

本住居址は17号住居址の北西方向で、調査区の北端に位置する。遺存状況は比較的良好であるが、確認面が西側に傾斜しており壁が削平されている。平面プランは正方形を呈し、規模は8.2m×8.2mを測り、本遺跡のなかでは大形の住居址となるものである。カマドを通る主軸はN-39.5°-Wを指す。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、東側コーナー部分で最も深く61cmを測る。カマドから西側コーナー付近は壁が削平されている。壁溝は南側コーナー付近で部分的に途切れる他は、削平箇所にも本来設けられたものと思われ全周する状況である。幅は10cm前後、深さ5cm程を測る。床面はほぼ平坦で堅緻であり、特に柱穴間の中央部分は良好に固められている。ピットは計7か所検出された。このうちP1～P5は支柱穴と考えられるが、P5は径1.2mを測り、下端も広いところから形態的には若干疑問もあるが、位置からみて柱穴と考えるのが妥当であろう。P6はP1の支柱穴の壁側に深さ25cm程で付設される。補助の柱穴と思われる。P7は100cm×80cmを測る楕円形のプランを呈し、深さ63cmを測る。内部には遺物が含まれないものの位置からみて貯蔵穴に相当するものと思われる。覆土は4層に分かれレンズ状に自然堆積する。

カマドは削平が著しく掘り方のみを検出するにとどまった。燃焼部の深さは床面より20cm程を測り、やや隅丸方形に近いプランを呈す。煙道部のプランは不明であるが、状況からみるとあまり深くない掘り込みのようである。

遺物は本遺跡中の住居址のなかでは最も多い出土量であるが、完形出土のものはなくほとんど破片の状態である。器種としては甕・坏が主体を占め、高坏は脚部が2点検出されたのみである。遺物の集中はカマドの反対側にみられる。カマドの右側には、床面に接して甕・坏が一括出土、カマド内には甕の破片が検出された。なお、南東壁に近く床面から若干浮いた状態で完形の鉄製鎌が1点と、床面中央寄りに土玉が1点出土している。

遺物 56～58は甕の上半部である。56・57は「く」の字状に外反する口縁部が口唇で突帯状に反り返る形を呈す。胴部は球形となる。口縁部には丁寧な横ナデ、胴部にはヘラ削り後弱いナデが加えられる。胎土・焼成とも良好で、色調は褐色を呈す。58は長胴の甕となるであろう。口縁部はきわめて短く若干外反する。胴部は中位下に最大径をもつものと思われる。ヘラ削り後弱いナデ調整がみられる。器肉は厚手で胎土に砂粒を多く含む。二次焼成のためか全体に赤化する。59



第120图 16号住居址实测图

は胴部最大径 34.5 cm を測る大形の甕で口縁部を欠損する。胴部は扁平球形を呈す。外面にはヘラ削り、内面には横ナデが観察される。胎土に砂粒を含み焼成は良好である。色調は暗褐色で部分的に黒斑がみられる。61は球形胴の小形甕であろう。底部は若干突出する。胎土に小石を含むが緻密である。明褐色を呈す。60は甕の下半部である。底部内側はヘラにより削り取られ、断面三角形を呈す。外面には縦位のヘラ削り後、横位の調整的なヘラ削りが施される。胎土・焼成とも良好で、赤褐色を呈し一部分黒斑が認められる。63・64は高坏脚柱部であるが、63が大きく「ハ」の字状に広がるのに対して、64は短く柱状を呈す。胎土・焼成とも良好で、63が黒色、64は内外面に赤彩される。65～73はいずれも稜を有す坏であるが、口縁形態から、直立あるいは外傾するものと、内傾するものに分けられる。前者は65～68で稜は弱い。後者は69～73で稜は明瞭でなかには突出するもの(71～73)もみられる。全体的にみれば前者より後者の方が調整は丁寧である。69・70には内外面に赤彩が施される。

7は完形の鎌である。全長 12.5 cm、基部幅 2.4 cm、棟幅 0.3 cm を測る。基部の折り返しはわずかで、先端が内彎する。曲刃鎌となる。

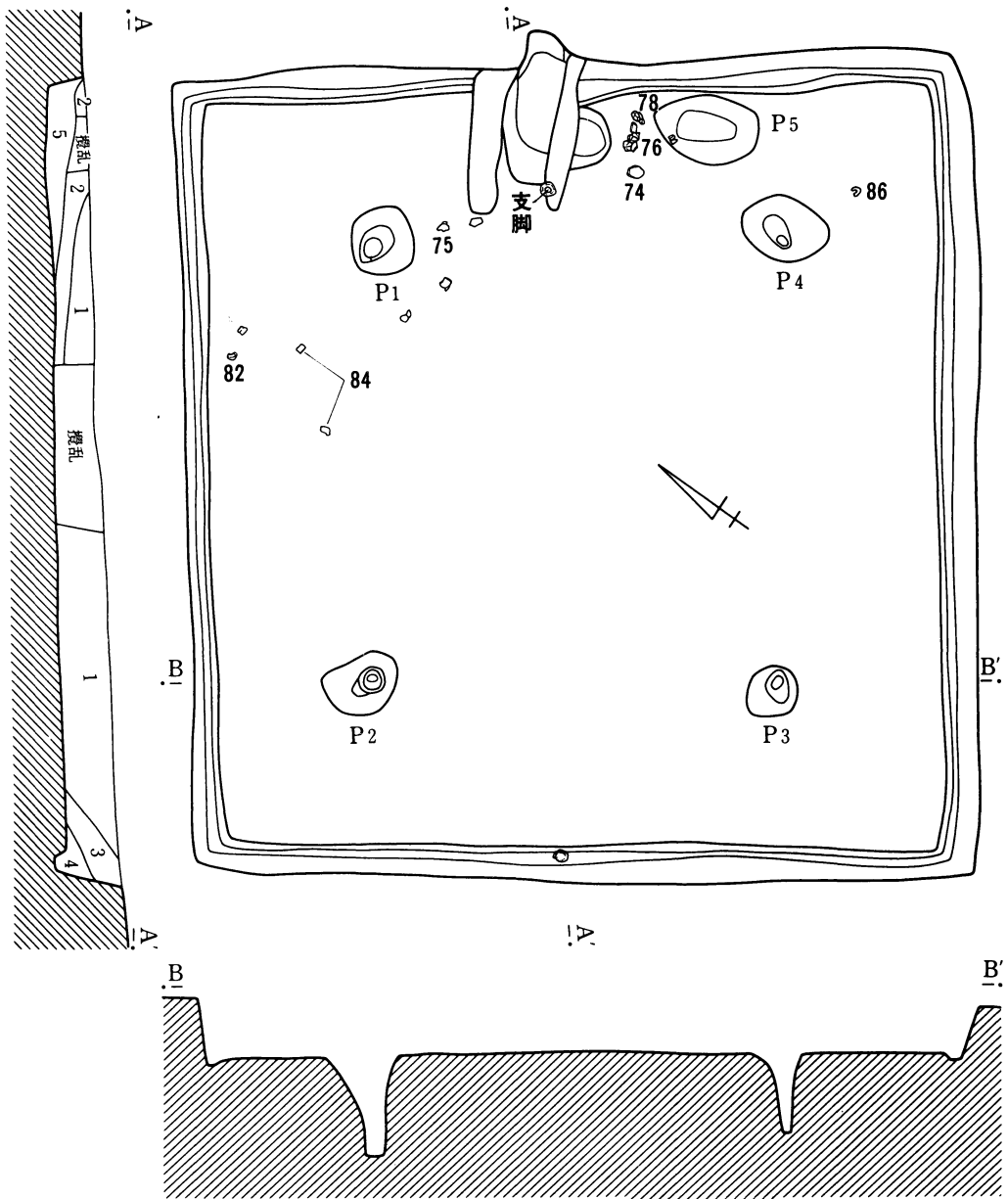
17号住居址 (第121・141・142・154図, 図版54・67・68・74)

本住居址は16号住居址の南東 1 m程に近接し、26号住居址と一部重複する。なお、26号住居址の方が新しいために一部切られるが、掘り込みが浅いためにプランは明瞭に確認された。平面プランは正方形を呈し、規模は8.6m×8.6mを測る。16号住居址同様かなり大形の住居址である。カマドを通る主軸はN-34.5°-Wを指す。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、良好な状態を呈す。確認面からの深さはカマド側で若干低くなるものの50～60 cm を測る。壁溝は幅 10～15 cm、深さ 5～10 cm を測り全周する。床面はほぼ平坦で全体的に堅緻である。特に柱穴間の中央部分はかなり強く固められている。ピットは5か所検出され、P 1～P 4は支柱穴である。P 1がややカマド寄りになる以外は、整然と配置されている。支柱穴はかなり深く掘り込まれており、カマドと対置するP 3が 25 cm を測る以外は、P 2が 107 cm、他が 70～80 cm を測る。いずれも2段に掘り込まれる。P 5は 112 cm×72 cm を測り、横長の楕円形を呈す。深さは床面から 45 cm となる。壁に密着して土器が検出されており、貯蔵穴に相当するものである。覆土はレンズ状に自然堆積する。

カマドは北西壁の中央よりやや西側に寄って構築される。煙道部は壁を 35 cm 程台形状に近いプランで掘り込まれる。燃烧部は長楕円形を呈し、床面から 9 cm 程と掘り込みは浅い。袖部はかなり攪乱を受けているが、遺存状況からみると粘性の強い山砂で構築されているようである。

遺物はカマド周辺に多く検出され、坏・甕類を主体とする。カマドの燃烧部内からの出土はなく、両袖から坏および支脚が出土する。なお、カマドと対峙するP 3付近の壁際にほぼ完形の高坏が検出された。

遺物 74は底部を欠損する甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部でその度合いを強



1. 暗褐色土層(ローム粒混入) 2. 黒褐色土層(焼土粒混入) 3. 褐色土層 4. 黒褐色土層 5. 砂質土層(カマド)

0 4 M

第121図 17号住居址実測図

める。胴部は上方に最大径を有し長胴となる。胴部のヘラ削りは縦位を主とし、他にはナデ調整が施される。胎土に砂粒・小石を多く含み粗い。焼成は良好で褐色を呈す。二次焼成のためか器面の荒廃が著しい。75~77は甕の上半部で、75は球形胴、76は長胴を呈すものであろう。口縁部

は短い。77は口唇部が突帯状を呈し、中央に一条の沈線が廻る。器肉は薄い。これも器面の荒廃が顕著である。78・79は小形甕である。口縁部の外反は弱い。78は胎土が粗く焼成も不良であるのに対して、79は胎土・焼成ともきわめて良好である。色調はそれぞれ赤褐色・褐色を呈す。80はほぼ完形の高坏である。口径 15.5 cm, 器高 8.6 cm を測る。坏部に比して脚部が小さい。坏部は内側に弱い稜を有し、脚部は「ハ」の字状に広がる。脚部および坏部下半にはヘラ削り、他にはナデ調整が施される。器面の各所にネズミによるかみ痕が観察される。胎土は砂質を帯び、色調は明褐色を呈す。器面にススが付着する。81は小形の高坏の坏部であろう。中央部に明瞭な稜を有し、口縁部は大きく外反する。胎土・焼成とも80と同様であるが色調は暗褐色を呈す。82～87は坏である。82は浅く口縁下の稜も明瞭でない。器肉が厚く粗製である。外面には粘土の巻き上げ痕が明瞭に観察される。83・84は口縁部が内彎ぎみに直立し、底部は平底状となる。85～87は口縁が内傾し丸底となる。調整はいずれも同様で、体部外面にヘラ削り、他には丁寧なナデが施される。85のみ磨きが加えられる。83・84の体部外面には粘土の巻き上げ痕が認められる。胎土・焼成とも良好で83が黒色、他は暗～明褐色を呈す。

5は支脚で下端を欠損する。器高に比して幅が広く、安定した形を示す。器面調整が粗く、ひび割れが認められる。胎土はスサを混入し、比較的堅緻である。焼成はあまり受けていない。褐色を呈す。

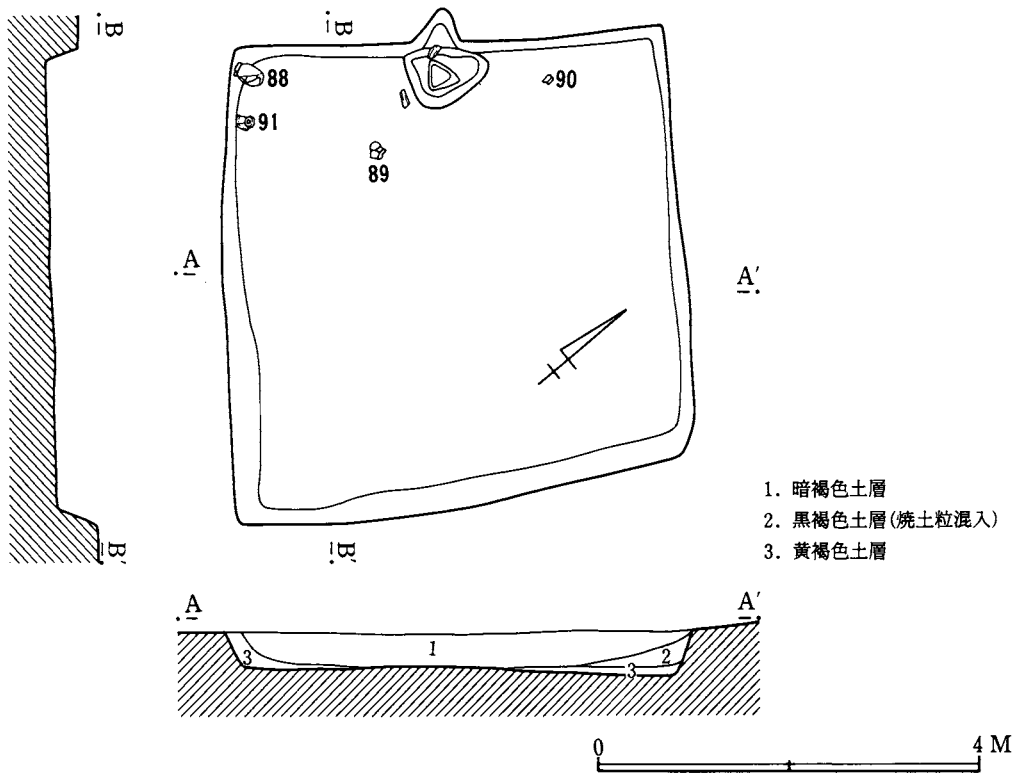
18号住居址（第122・142・154図，図版54・55・68・74）

本住居址は調査区の南側に位置し、19号住居址の西側10m、8号住居址の南側6m付近に構築される。平面プランは略正方形を呈すが、カマド側の壁と北東壁が4.5mを測るのに対して、南東壁が4.7m、南西壁が4.9mとやや長くなる。カマドを通る主軸はN—56.5°—Wを指す。壁は床面から40cm程の高さでやや斜めに立ち上がる。壁の状況は他の住居址と比較してあまり良好ではない。壁溝は確認されなかった。床面はやや起伏があるものの全体的に平坦であるが、壁と同様あまり固められた状況は認められなかった。柱穴等のピットも検出されなかった。覆土は3層に分かれ、レンズ状に自然堆積する。

カマドは北西壁のほぼ中央に設けられるが、遺存状況はきわめて不良で掘り方のみを検出したにとどまり、袖等の状況は不明である。煙道部は壁を35cm程三角形に掘り込み、燃焼部から一旦テラス状を呈して壁外へと続く。燃焼部は床面から20cm程掘り込まれ、三角形に近いプランを呈す。焼土の堆積はあまり顕著ではない。燃焼部の両側に山砂の層が認められることより、これが袖の部材として使用されたのであろう。

遺物はあまり多くないが、カマド付近から支脚・甕・甕、西側コーナー付近で甕・高坏が出土しており、他の住居址で多くみられた坏が一点も検出されない点特徴的である。

遺物 88は肉薄の長胴甕である。口縁部 $\frac{1}{2}$ 程を欠損する。口縁部は短く、「く」の字状に外反する。縦位のヘラ削りを基本とし、底部近くで斜位のヘラ削りを施す。胎土・焼成とも良好で暗褐



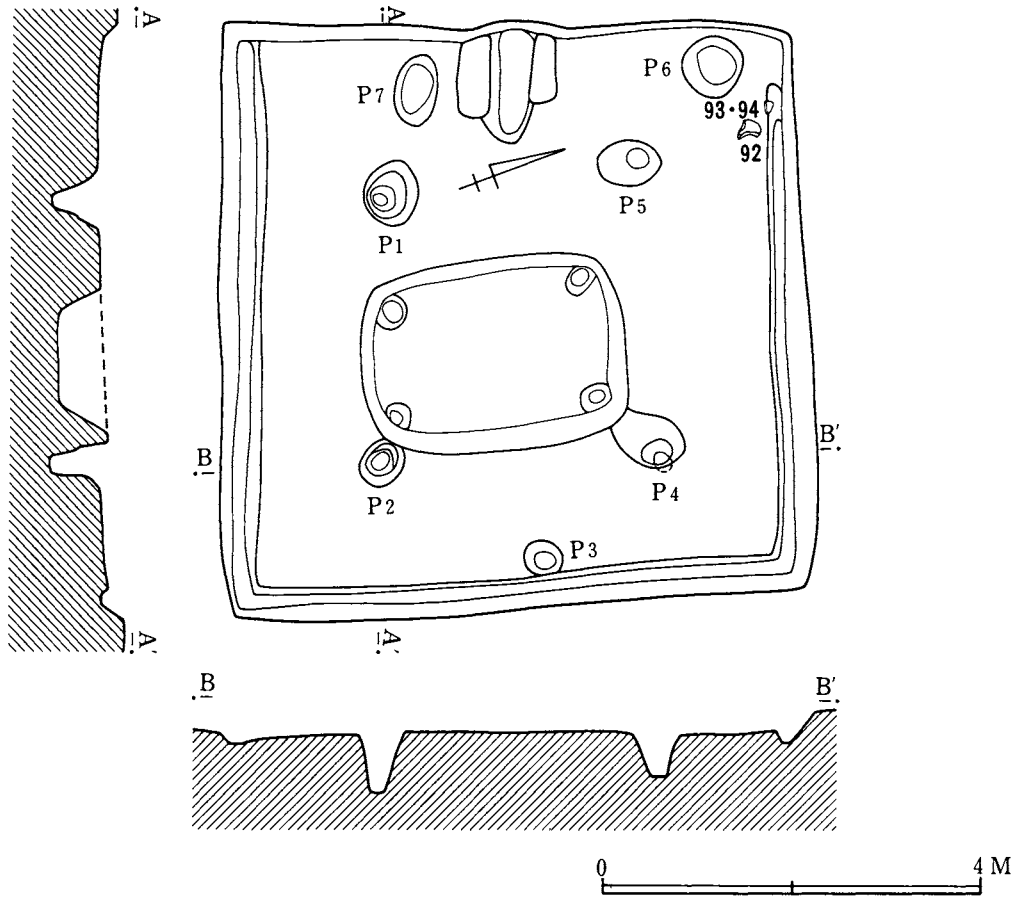
第122図 18号住居址実測図

色を呈す。89は口径 10.5 cm, 器高 12.5 cm を測る完形の小形の甕である。口縁部は若干外傾する。外面はヘラ削り, 内面には丁寧なナデが施される。胎土に砂粒を多く含み黒色を呈す。90は口径 21.8 cm, 器高 23.5 cm を測る甕である。胴部を $\frac{1}{2}$ 程欠損する。口縁部は短くわずかに外傾する。胴下方で肥厚し, 端部は丸味をもっておさめられる。外面にヘラ削りが認められるが, 器面が粗いため詳細は不明である。胎土に砂粒・小石を多く含むが, 焼成は良好で暗褐色を呈す。91は均整のとれた高坏で, 坏部および裾部を $\frac{1}{2}$ 程欠損する。坏部は浅い碗形を呈し稜をもたない。脚部は太く, 「ハ」の字状に開き安定した形である。坏部内面のナデは磨き様に丁寧である。脚柱部内面もヘラ削り痕がみられない程丁寧な横ナデが加えられる。胎土はやや砂質を帯び緻密で, 焼成は良好である。色調は明褐色を呈す。

4は支脚で下端を欠損する。比較的小形で円柱状を呈す。調整は丁寧である。胎土は堅緻である。焼成はあまり受けてなく, 褐色を呈す。

19号住居址 (第123・143図, 図版55・69)

本住居址は調査区の南側で, やや南に傾斜する面に構築される。上面が削平されているために掘り込みはかなり浅くなる。平面プランは正方形を呈し, 規模は6.1m×6.2mで中形の住居址の部類にはいる。カマドを通る主軸はN-72°-Wを指す。壁は床面からやや斜めに立ち上がり, 良



第123図 19号住居址実測図

好な状況であるが、削平が激しいため壁高 10~20 cm を測るのみである。壁溝はカマド側の壁以外に廻らされており、幅 15~25 cm、深さ 5~10 cm を測る。床面は全体的に堅緻であるが、中央部分は方形状を呈する落ち込みにより攪乱される。この落ち込みは覆土中に炭・焼土を多く含んでおり、近世に掘り込まれたものと思われる。本住居址に伴うピットは7か所検出された。このうち、P1~P5は支柱穴に相当するものである。いずれも楕円形のプランを呈し、P1・P3が深さ 64 cm、P5が 111 cm、P2・P4が 95 cm 程を測り、全体的に深くなっている。P6は略円形のプランを呈し、深さ 100 cm 程を測る。遺物は含まれていないものの位置からみて貯蔵穴になるものであろう。

カマドは北西壁のほぼ中央に位置し、天井部は存在しないものの比較的良好な遺存状況である。煙道部は壁を 20 cm 程横長に掘り込み、燃焼部からなだらかに続く。燃焼部は長さ 1.2 m 程の長楕円形に掘り込まれる。床面からの深さは 22 cm を測る。焼土層の堆積はあまりみられず、焚口部付近に若干堆積しているのみである。なお上層にはうすく砂質土層の堆積が認められる。天井

部の崩落であろう。袖部は粘性のある暗褐色土を基盤とし、山砂を積みあげているようである。

遺物は少なく、貯蔵穴付近で甕と須恵器の坏蓋、カマド右袖の外側から坏が出土しているのみである。

遺物 92は大形の甕の上半部で½程遺存する。口縁部は大きく反り返り、端部は受け口状を呈す。胴部は球形となるものであろう。口縁部内外面には丁寧な横ナデ、胴部には斜位のヘラ削り後弱いナデが加えられる。胎土・焼成とも良好で褐色を呈す。93は須恵器の坏蓋で½程を欠損する。推定口径 13.6 cm を測る。口縁部は稜をもたず内彎する。天井部は丸味を有するが、歪みが激しい。ロクロ成形で全体に横ナデが施される。天井部には回転ヘラ削りが観察される。胎土に砂粒を多く含みあまり良好ではない。色調は灰白色を呈す。94は口径 14.8 cm、器高 3.8 cm と浅い坏である。口縁部は短く直立する。ヘラ削り後ナデが施される。胎土に砂粒を含み暗褐色を呈す。

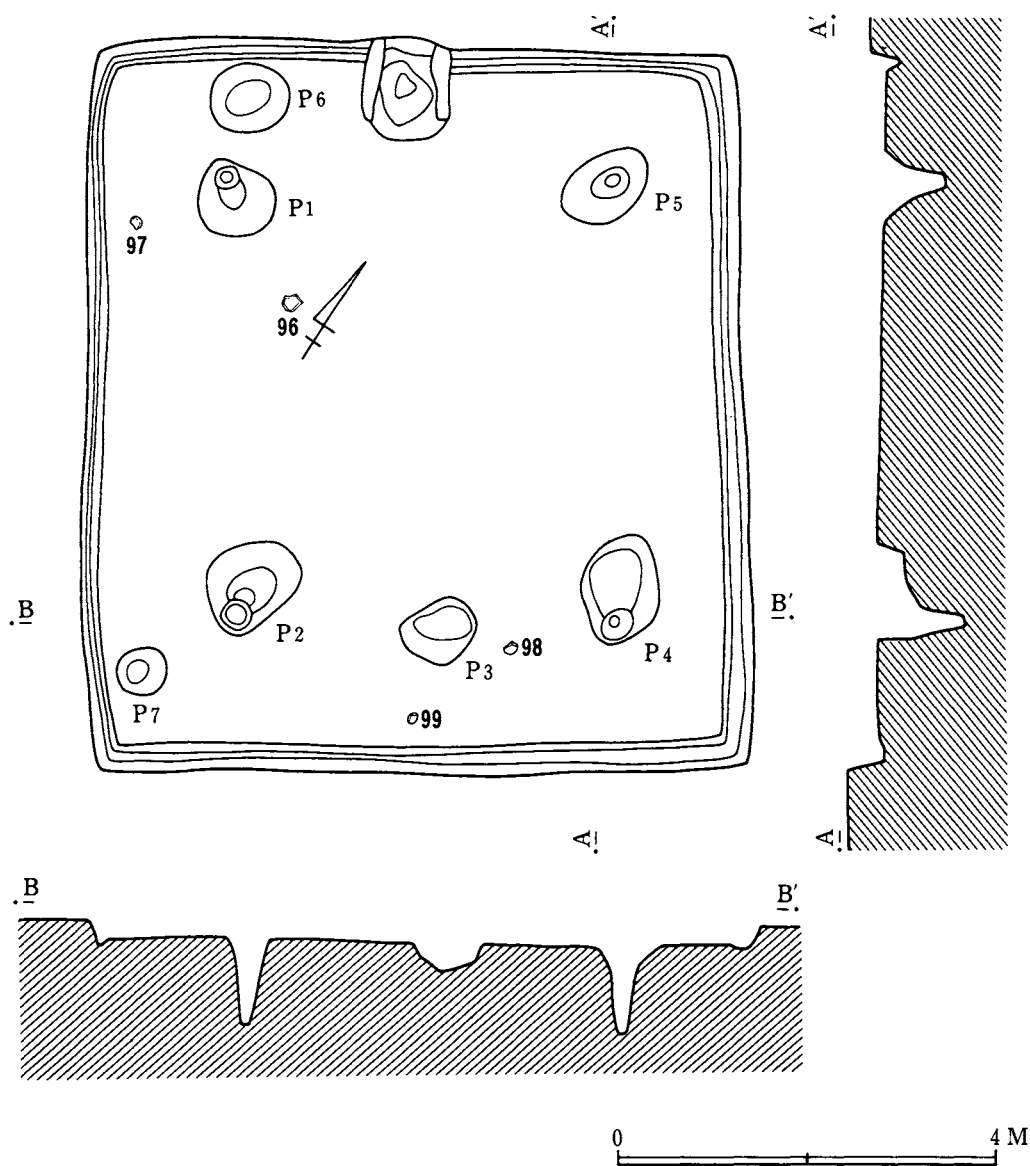
20号住居址（第124・143図，図版55・69）

本住居址は24号住居址の北西3 m程に位置し、上面が削平されるために掘り込みは浅い。規模は主軸上で7.5m、直交する壁で7.0mを測り、主軸側がやや長くなる方形を呈す。カマドを通る主軸はN-32.5°-Wを指す。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり良好な状態であるが、上面が削平されるために壁高は 10~30 cm を測るのみである。壁溝は幅 10~20 cm で全周し、深さは 5~10 cm を測る。床面は全体的に堅緻で、特に柱穴間の中央部分は良好に固められており、ほぼ平坦であるが北側に若干傾斜する。ピットは7か所検出された。このうちP 1~P 5は主柱穴に相当するものであり、カマドと対置するP 3が深さ 28 cm を測る以外はすべて二段掘り込みで深さは 70~90 cm となる。さらにP 3以外の柱穴は柱痕が掘り方の壁側に位置する。80 cm×70 cm のやや横長の楕円形を呈すP 6はカマドの左側に位置しており、貯蔵穴と考えられる。覆土は自然堆積である。

カマドは北西壁の中央に設けられ、天井部を崩落するものの比較的遺存は良好である。煙道部は壁を幅 88 cm、長さ 12 cm で掘り込み、燃烧部より40°程の角度で立ち上がる。燃烧部は2段に掘り込まれており、床面からの深さは 24 cm を測る。焼土層の堆積は顕著ではないが、焚口部付近に多くみられる。堆積土の上部には砂粒を多く含む層がみられることより、これが天井部の崩落土と考えられる。袖部は粘性のある暗褐色土を基盤として山砂を積み上げて形成される。

遺物は少なく、床面から坏・埴、カマド内から埴が出土したのみで完形品はない。

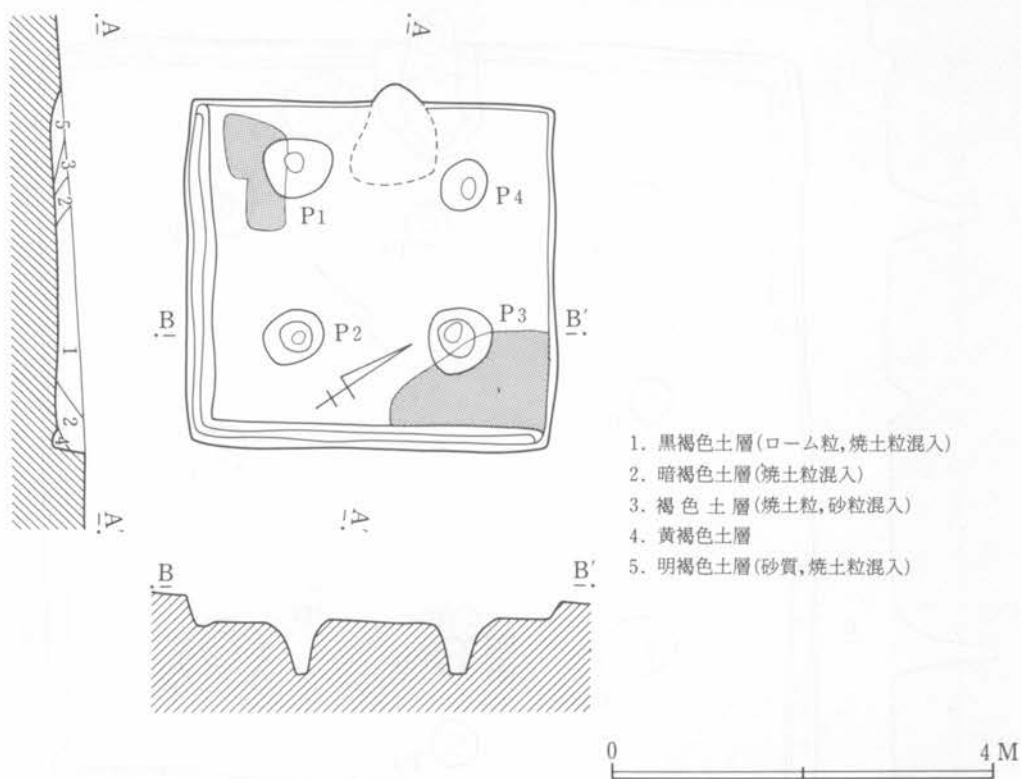
遺物 95・96は埴であろう。95は半球形の深い胴部を有し、口縁部はわずかに外反する。96は胴部に膨らみをもたず、下方で一旦くびれて底部へ移行する。口縁部は直立する。いずれも粗いつくりで、胎土も砂粒・小石を多く含む。95は二次的焼成のため赤化が激しい。97~99は坏で、97・98は外傾する口縁部を有す。99は半球形の深い体部を呈す。口縁部はきわめて肉薄で内傾し、突出する稜を有す。調整はいずれも同様で、内面のナデは丁寧である。胎土に砂粒を含み焼成良好である。



第124図 20号住居址実測図

21号住居址 (第125図, 図版56)

本住居址は遺跡のほぼ中央に位置しており, 19号住居址の北側6m程に構築される。上面の削平が激しいために掘り込みは浅い。規模は3.6m×3.8mを測り, 横に若干長い方形を呈す。壁は削平されており状況は不良であるが, 遺存部分は床面から20~30cmを測り, やや斜めに立ち上がる。壁溝は南西壁と南東壁下に検出され, 幅15~25cm, 深さ5cm程を測る。床面は全体的に堅緻である。東コーナーと西コーナー部分には焼土の堆積が認められるが, 東側の焼土は流れ込んだ可能性が高い。ピットは4か所検出されすべて柱穴に相当する。略円形のプランを呈し,



第125図 21号住居址実測図

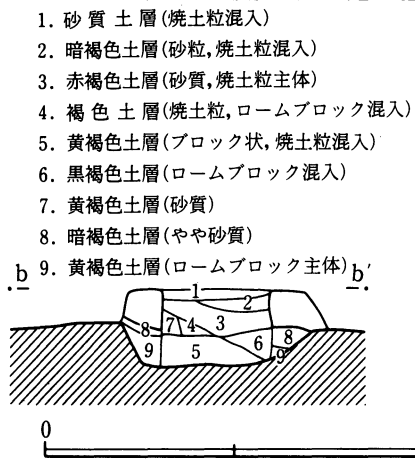
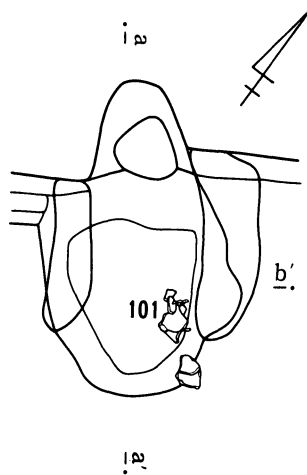
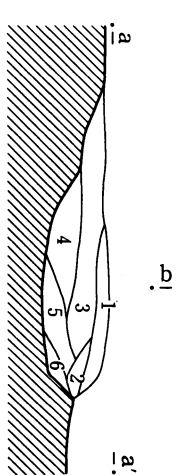
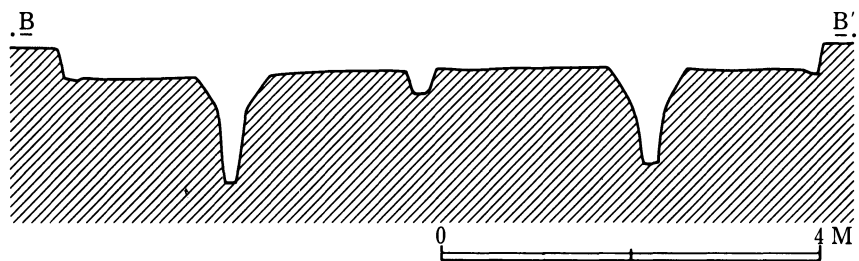
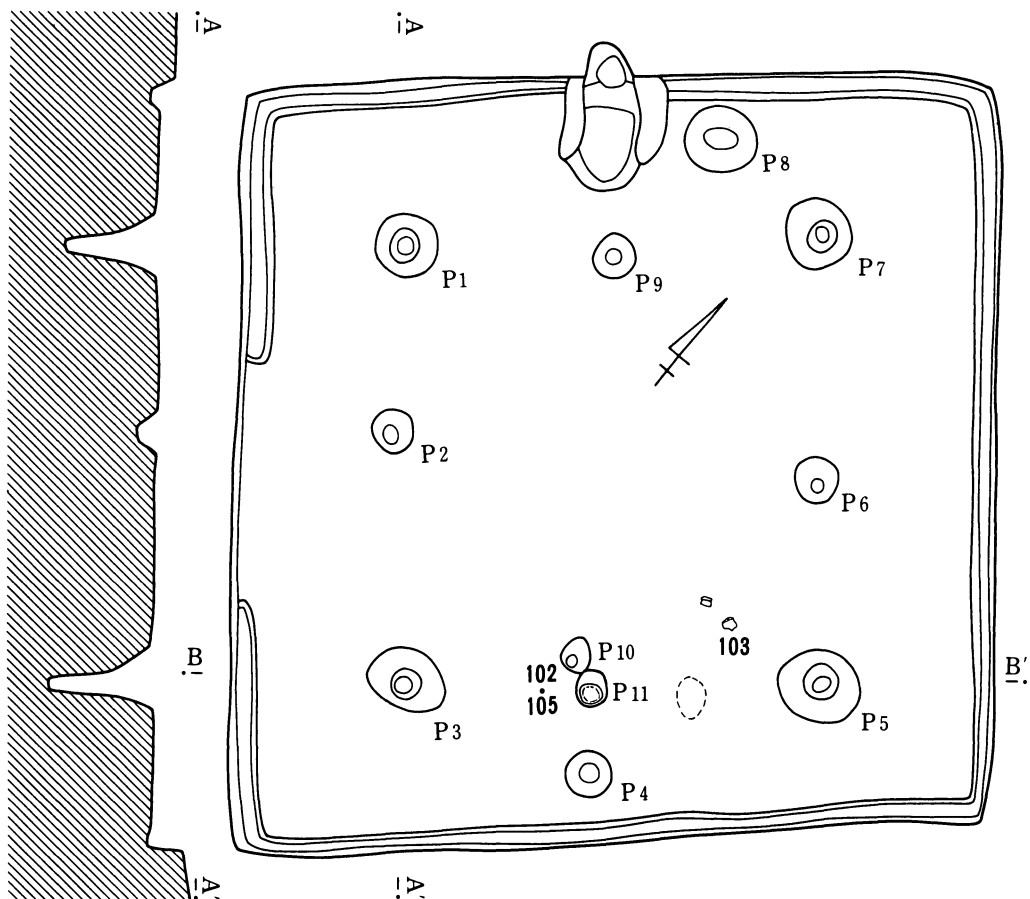
深さは 50 cm 程を測る。貯蔵穴は確認されなかった。

カマドはほとんど削平されており、痕跡のみを確認するにとどまった。北西壁の中央よりやや北東側に位置し、煙道部は壁を 15 cm 程の長さで掘り込む。掘り方のプランは不明瞭であるが、状況からみると掘り込みはかなり浅いようである。

削平が著しいため遺物はほとんど検出されず、小片が若干認められるにすぎない。

22号住居址 (第126・143・153・154図, 図版56・69・70・74・75)

本住居址は調査区の南東側に位置する住居址群の北西端に構築される。上面の削平が著しく掘り込みは浅い。平面プランは正方形を呈し、規模は8.0m×8.1mを測る。カマドを通る主軸はN-39°-Wを指す。壁は床面から垂直に立ち上がり、堅緻であるが削平されるため確認面からの深さは15~30 cmを測るのみである。壁溝は幅20 cm、深さ5 cm程でほぼ全周するが、南西壁の中央で部分的に途切れる。床面は全体的に堅緻で、カマド前面から柱穴間の中央部分にかけては特に良好に固められている。ピットは計11か所検出されており、このうち対角線上に存在するピットは、深さ90~110 cm程の円柱状の掘り込みで支柱穴に相当する。また、支柱穴間のP2・P6は深さ22 cm程で補助柱穴となり、カマドと対置するP4は深さ62 cmを測る。P8は径80



1. 砂質土層(焼土粒混入)
2. 暗褐色土層(砂粒, 焼土粒混入)
3. 赤褐色土層(砂質, 焼土粒主体)
4. 褐色土層(焼土粒, ロームブロック混入)
5. 黄褐色土層(ブロック状, 焼土粒混入)
6. 黒褐色土層(ロームブロック混入)
7. 黄褐色土層(砂質)
8. 暗褐色土層(やや砂質)
9. 黄褐色土層(ロームブロック主体)

第126図 22号住居址・カマド実測図

cm 前後の略円形を呈し、深さ 68 cm を測る。カマド右側に位置する P 8 は貯蔵穴と思われる。

カマドは北西壁のほぼ中央に位置し、遺存は比較的良好である。煙道部は壁を 40 cm 程掘り込んでおり、本遺跡中では最も長い煙道部である。燃焼部は比較的広く、深さは床面から 20 cm 程を測る。煙道部の傾斜は燃焼部からなだらかに続く。カマド内堆積土の上部には砂質土層が検出されており、これは天井部の崩落層であろう。袖部はロームブロック土と粘性のある暗褐色土を基盤として山砂を積み上げて形成される。

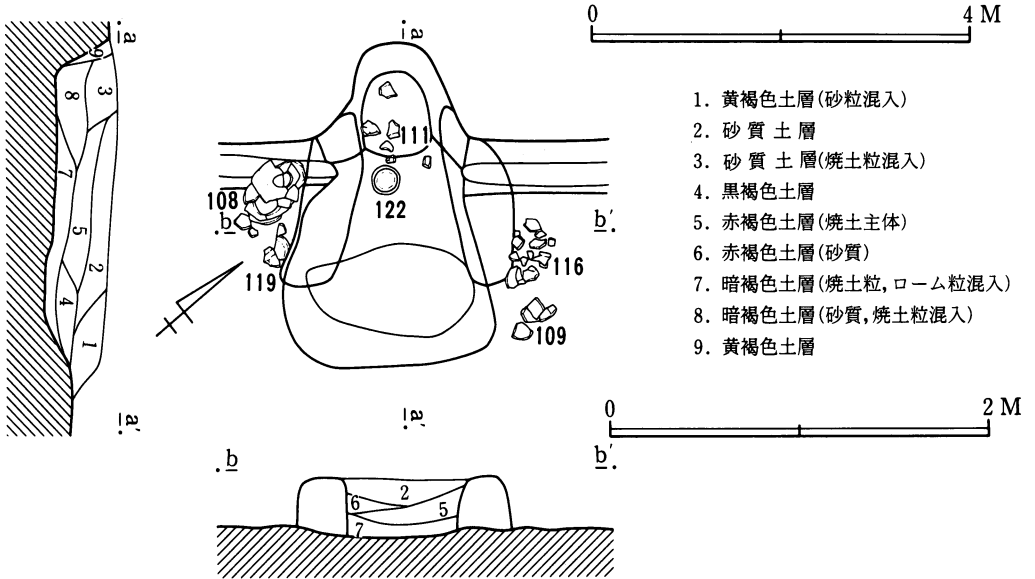
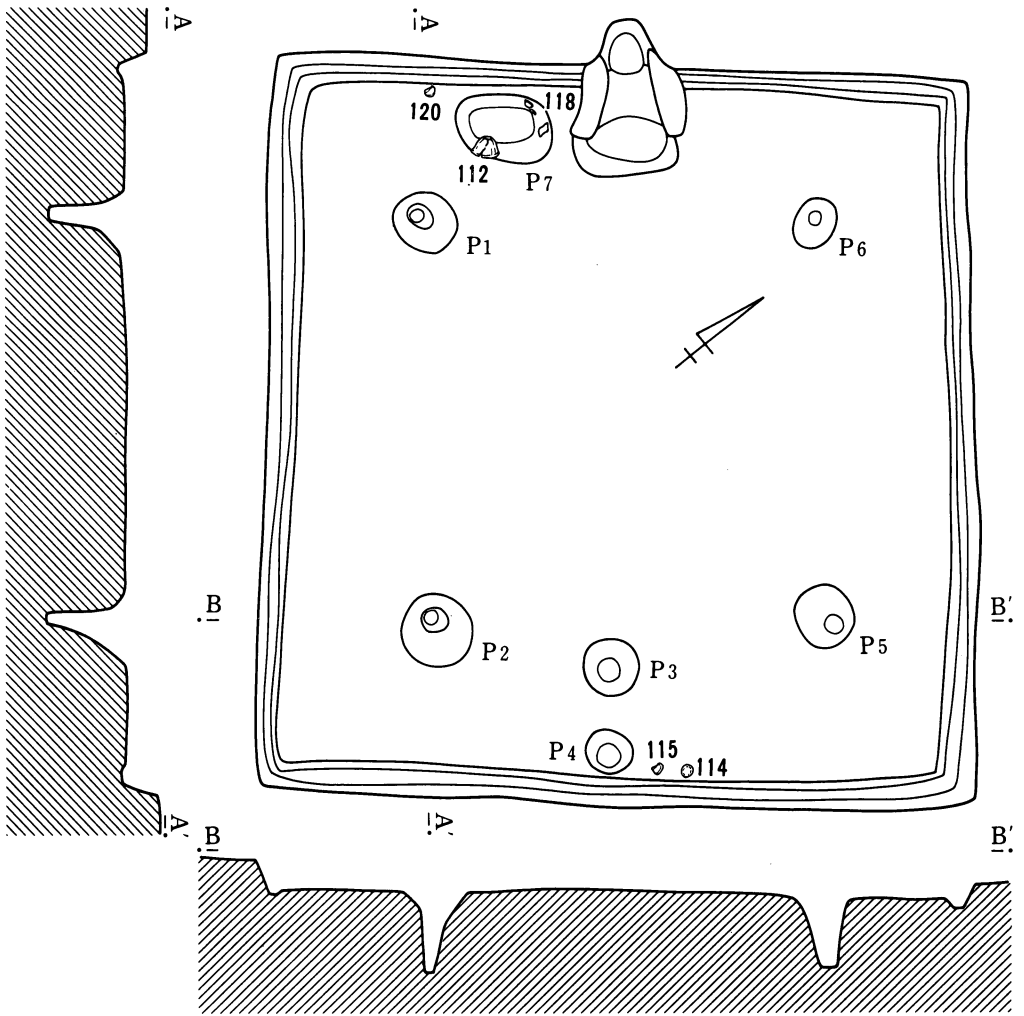
遺物は床面出土の土器が多く、カマド内からは甕と支脚が検出されたのみである。甕・甑が主体を占め、坏は少なかった。なお北東壁際でミニチュア土器 2 個体、中央部で刀子が 1 点、P 11 からは 103 の甑の中に 100 の甕が入った状態で検出された。

遺物 100・101 は甕の上半部で $\frac{3}{4}$ 程欠損する。口縁部は短くやや外反する。100 の胴部は球形を呈すものであろう。色調は暗褐色を呈す。102・103 は小形甕でほぼ完形である。口縁部はゆるやかに外反し、102 の口唇は平坦となる。胴部は 102 がほぼ中位に最大径を有し膨らみをもつものに対し、103 は膨らみが弱くなる。調整は同様で、胴部上半に縦位のヘラ削り、下半に斜位のヘラ削りを施す。口縁部および胴部内面のナデは丁寧である。胎土・焼成とも良好で色調は褐色を呈すが、二次的焼化のため部分的に赤化する。104 は小形甕の底部であろうか。器面が荒廃している。105 は甑で胴部から口縁部にかけて $\frac{1}{3}$ 程欠損する。口縁部は外反し、口唇部でやや肥厚する。口縁下に明瞭な稜を有す。胴部は口縁下から直線的に底部へすぼまる。下端は断面三角形を呈す。胴部に縦位のヘラ削りを施した後には口縁部へ強い横ナデを加え、これにより稜が形成される。内面はヘラ削り後弱いナデが施される。胎土は砂粒を多く含みやや粗い。色調は褐色を呈し一部黒変がみられる。二次的焼化のため器面の剝離が下半に観察される。106・107 は柑のミニチュアである。106 は口径 3.0 cm、器高 4.5 cm を測る。107 の胴部は膨らみをもつものに対し、106 は直線的となる。いずれも平底を呈す。106 の口縁部および胴部内面のナデは丁寧である。107 の胴部には全面に刷毛目が残る。胎土・焼成とも良好で褐色を呈す。

6 は刀子で茎尻および鋒を欠損する。両関造りである。茎に比して身部が小さく、何度か研ぎ返されたものと思われる。6 は支脚で、下半を欠損するが安定した形となるものであろう。器面の調整は粗く荒廃が著しい。胎土は堅緻で明褐色を呈す。

24号住居址 (第127・144・153・154図, 図版57・70・71・74・75)

本住居址は20号住居址の南東 3 m 程に位置する。やはり上面が削平されるため確認面からの掘り込みは浅くなる。平面プランは正方形を呈し、規模は 7.6 m × 7.6 m を測る。カマドを通る主軸は N-48.5°-W を指す。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり良好な状態であるが、上面を削平されるために壁高は 20~35 cm を測るにすぎない。壁溝は幅 20 cm、深さ 5 cm 程で全周する。床面はほぼ平坦で堅緻であり、カマド前面から柱穴間の中央部分にかけては特に良好に固められている。ピットは 7 か所検出された。主柱穴は対角線上に正確に配置される。P 1・P 2 は深さ



第127図 24号住居址・カマド実測図

80 cm 程、P 5・P 6 は 50～70 cm と南西壁沿いの柱穴の方がやや深い。カマドに対置するピットは主軸線上に 2 か所並んで穿たれる。P 3 は深さ 48 cm、P 4 は深さ 37 cm を測る。カマドの左側には 1.0 m × 0.7 m を測る隅丸長方形を呈する貯蔵穴が配される。貯蔵穴の覆土中にはカマドから流れ込んだ山砂・焼土等が含まれる。覆土は自然堆積で 4 層に分かれる。

カマドは北西壁のほぼ中央に位置し、遺存は比較的良好である。煙道部は壁を 50 cm 程楕円形状に掘り込み、60°の角度で立ち上がる。燃烧部の規模は大きい、掘り込みは浅く床面から 15 cm 程を測るにすぎない。焚口部は広くなる。堆積土上部には砂質土層が比較的厚く認められ、天井部の崩落層と思われる。袖部は粘性の強い暗褐色土を基盤として山砂を積み上げて形成される。

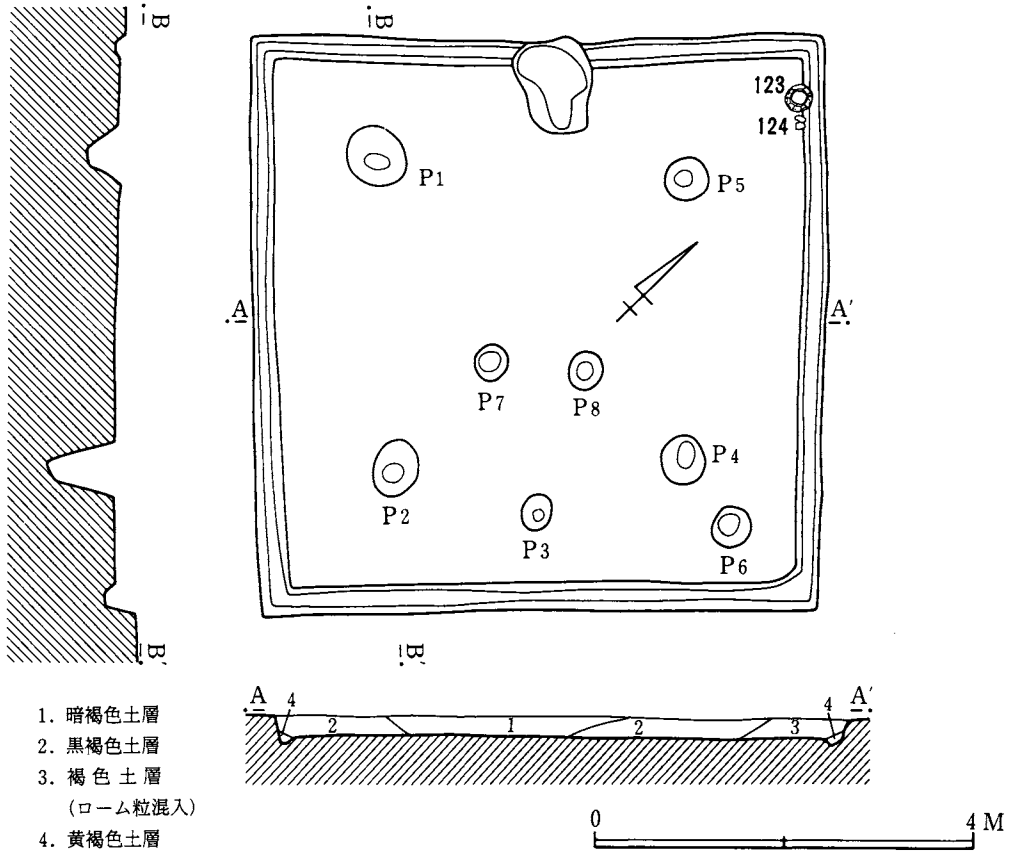
遺物は比較的多く検出された。特にカマド内と両袖の外側に集中する。P 1 に近く鉄鏝片が 1 点出土した。

遺物 108 は口径 16.0 cm、器高は 26.9 cm を測る大形の甕で完形である。口縁部は直立ぎみに若干開く。胴部はほぼ中央に最大径を有す扁平の球形を呈し、下半で急激にすぼまる。底部は上げ底となる。胴上半は斜位、下半は横位のヘラ削りが施される。胎土・焼成は良好で、色調は褐色を呈す。109 は 1/2 程欠損する甕で、短い口縁が直立する。内外面に粗いヘラ削りが施される。胎土に砂粒を多く含み赤褐色を呈す。110・111 は小形の甕で、褐色を呈す。112 は、口径 27.2 cm、器高 19.0 cm、孔径 7.8 cm を測る完形の甑である。口縁部は若干外反し、口唇部は大きく開き突帯状に形成される。端部は平坦となり浅い沈線が一条廻る。胴部は膨らみを有しながら下半で急激にすぼまる。胴部外面には縦位のヘラ削り後ナデが加えられる。他には丁寧なヘラ磨きが全面に施される。胎土・焼成ともきわめて良好で、色調は赤褐色を呈すが一部黒斑が認められる。113～122 は坏である。113 は大形で碗に近くなる。器肉が厚くつくりは粗い。114・115 は半球形状の深い体部を有す。114 は平底となり木葉痕がみられる。115 のつくりがきわめて丁寧であるのに比して、114 は粗くなる。116～118 は口縁が外傾、119 は直立、120～122 は内傾するものである。底部は 118・122 が平底となる以外はすべて丸底を呈す。胎土・焼成とも比較的良好で、色調は 121 が黒色、116・117・120 が暗褐色、119・122 が赤褐色を呈す。118 には全面に赤彩が認められる。

3 は鉄鏝の篋被ぎから茎にかけての破片である。7 は支脚の破片である。胎土は粗く砂を多く混入する。色調は褐色を呈す。

25号住居址 (第128・145・153図、図版58・71・75)

本住居址は 22 号住居址の東側 2 m 程に位置する。やはり上面を削平されるために掘り込みは浅い。平面プランは正方形を呈し、規模は 6.1 m × 6.1 m を測る。カマドを通る主軸は N-47°-W を指す。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、カマド西側で 5 cm、カマドの対壁で 25 cm を測る。壁溝は幅 20 cm、深さ 5～10 cm で全周する。床面はほぼ平坦で堅緻であり、特に中央部分は良好に固められる。ピットは 8 か所検出された。対角線上に等間隔で配されるピットは、P 2 が深さ 71 cm を測る以外は、すべて 30～40 cm の掘り込みの支柱穴である。カマドと対置



第128図 25号住居址実測図

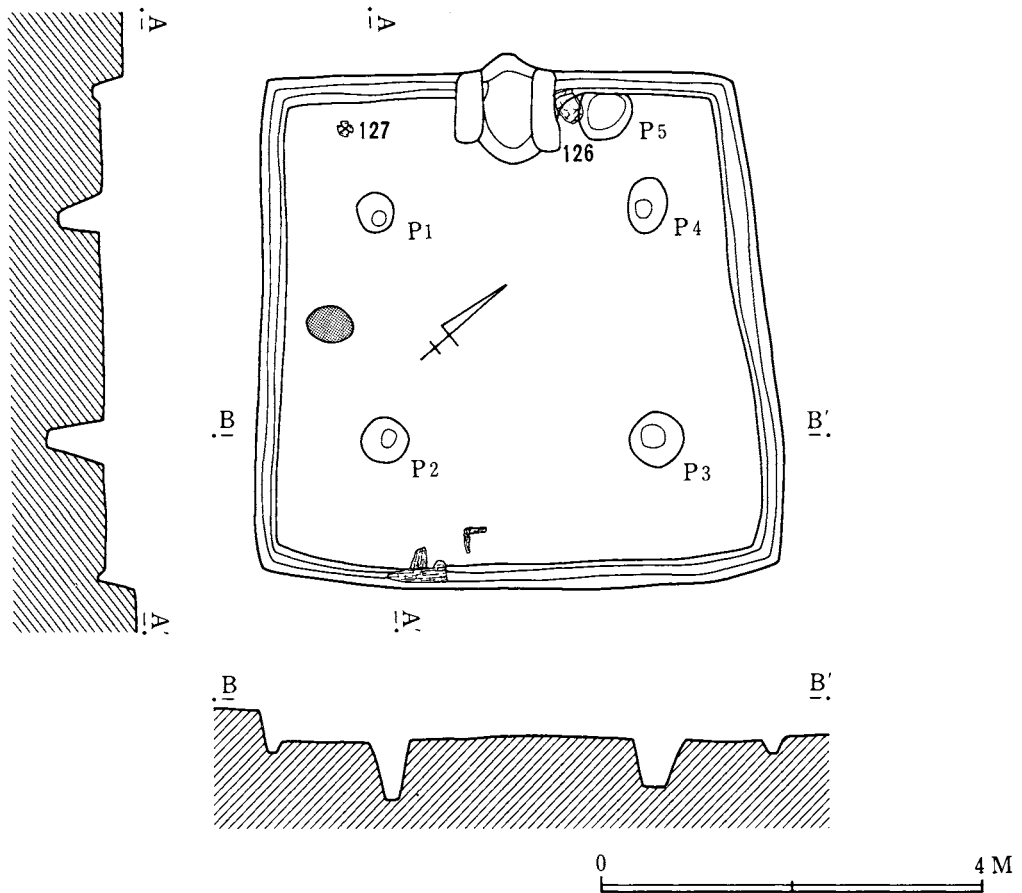
するP3およびP6・P8は深さ20cm弱、P7は45cmを測る。P6は補助柱穴であろうが、P7・P8はほぼ中央に並んで穿たれており、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は検出されなかった。覆土は自然堆積で4層に分けられる。

カマドは北西壁のほぼ中央に位置するが、削平されるため掘り方のみを検出するにとどまった。煙道部の壁への掘り込みはわずかで、燃焼部からやや斜めに立ち上がる。燃焼部は長楕円形のプランを呈し、床面から20cm程の掘り込みである。焼土層の堆積は比較的厚い。

遺物は少なく、カマドの右側からコーナーにかけて坏・甕・支脚が、南側コーナー部から鉄鏃片が出土したのみである。

遺物 123は甕の上半部である。口縁部は大きく開き、口唇部でやや内彎する。胴部はほとんど張りをもたない。外面は縦位のヘラ削り、他はナデが加えられる。器肉は薄く褐色を呈す。胎土・焼成とも良好である。124・125は坏で、124は半球状、125は口縁部を欠損するものの内傾となる。全体にヘラナデされる。胎土はやや粗く褐色を呈す。

4は鏃身を欠損する鉄鏃で、茎に木質が良好に遺存する。



第129図 27号住居址実測図

27号住居址 (第129・145図, 図版58・71)

本住居址は25号住居址の北東1.5m程に隣接する。上面はやや削平される。平面形は略正方形を呈し、規模は5.6m×5.2mを測る。カマドを通る主軸はN-48°-Wを指す。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がるが、削平が著しいため、壁高は東側で5cm、南側で30cm程を測るにすぎない。壁溝は幅20cm、深さ5~10cm程で全周する。床面は平坦で堅緻であり、特に柱穴間の中央部分は良好に踏み固められている。ピットは5か所検出され、対角線上に配されるP1~P4が柱穴に相当する。P1が最浅42cm、P4が最深82cmを測り、円柱状に掘り込まれる。P5は径60cm、深さ25cmで円形のプランを呈す。覆土にはカマドから流れ込んだ山砂等を含む。カマド右側に設けられた貯蔵穴であろう。覆土は自然堆積である。

カマドは北西壁の中央に位置する。上部が削平されており、遺存はあまり良好ではない。煙道部は壁を半円形のプランで20cm程掘り込んで設けられ、燃焼部から55°の角度で立ち上がる。燃焼部の掘り込みは床面から10cmと比較的浅く底面は広い。堆積土上部には砂質を帯びた天井部

の崩落土層が確認された。

遺物は少なく、貯蔵穴の左側に甕1個体と西コーナー近くに埴が1個体出土したのみである。他に土玉が南西壁外から1点検出された。

遺物 126はほぼ完形の長胴甕である。口径 18.7 cm，器高 32.3 cm を測る。「く」の字状に開く口縁部は口唇で直立し受け口状を呈す。胴部の膨らみは弱く底部は小さい。胴部外面には縦位の長いヘラ削りが残る。器肉は薄く、胎土に砂粒・小石を多く含む。暗褐色を呈する。127は口唇部を欠損する鉢である。底部は平底となり、体部は内彎ぎみに開く。つくりが粗く、体部外面に粘土紐の痕が明瞭に残る。

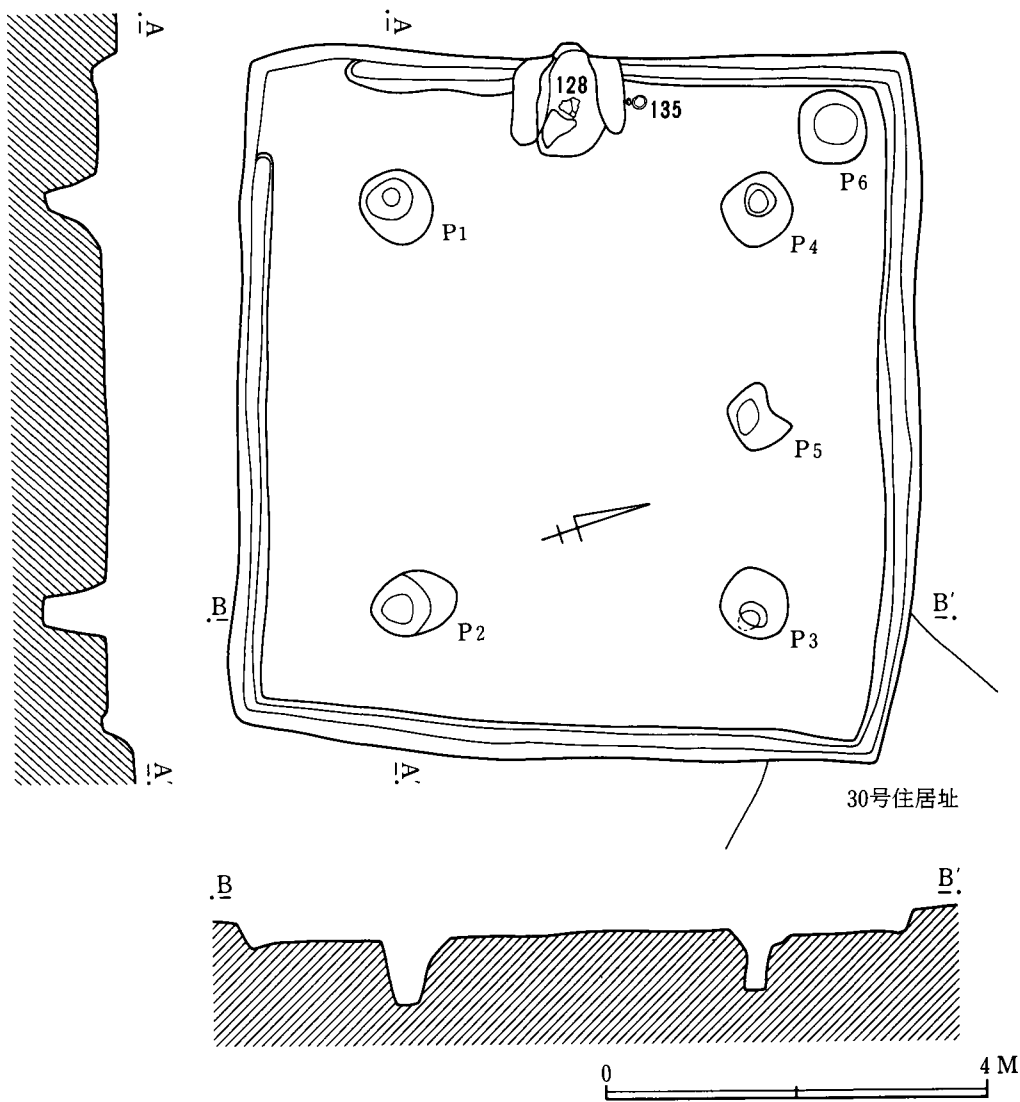
28号住居址（第130・145図，図版58・71・72）

本住居址は29号住居址の北東1mに併行し、30号住居址の西コーナー部分を切って構築される。平面プランは正方形を呈し、規模は7.2m×7.2mを測る。カマドを通る主軸はN-69°-Wを指す。壁は床面からやや斜めに立ち上がり、堅緻であるが上面を削平されるため壁高は20cmを測るにすぎない。壁溝は幅20cm，深さ5cm程で全周するが、カマド左側のコーナー部分で途切れる。床面はほぼ平坦で全体的に堅緻である。ピットは6か所検出された。対角線上に配されたP1～P4は二段に掘り込まれた主柱穴である。深さはP4が82cmを測る他は60～70cmである。P3とP4の間のP5は深さ39cmを測る補助柱穴であろう。P6は径80cm，深さ57cmを測り、略円形を呈する貯蔵穴である。カマド右側のコーナー部に位置する。

カマドは北西壁のほぼ中央に位置する。遺存は比較的良好である。煙道部は壁を半円形に17cm掘り込んで設けられ、燃焼部から60°の角度で立ち上がる。燃焼部の掘り込みはきわめて浅く、床面から8cmを測るにすぎず、熱効率はかなり小さいものであろう。焚口部は比較的広い。焼土層はあまり多くなく、焚口部近くに若干みられるものである。堆積土の上部には砂質の天井部崩落土が一層認められる。

遺物は少なく、貯蔵穴およびカマド付近から甕・鉢・坏が出土したのみである。

遺物 128・129は甕で、129は口縁部 $\frac{1}{4}$ 程の遺存である。胴部は球形を呈するものであろう。内面に粘土の接合痕が整形されずに残る。128は $\frac{1}{2}$ 程の遺存である。口縁部は直立し口唇で外反する。胴部は中位で外へ強く張り出し算盤玉状を呈す。内面のナデは粗い。器肉が厚く、胎土に砂粒を多く含む。内面は黒色，外面は暗褐色を呈す。130は完形の小形甕であろう。口縁部は直立し、胴部にやや膨らみを有す。全体に粗いナデを施す。胎土はやや粗いが焼成は良好で、黒褐色を呈す。二次焼成による赤化が部分的に認められる。131は口径21.5cm，器高10.5cmを測る大形の鉢である。体部は内彎ぎみに開き、口縁部でやや外反する。底部は平底で、器肉がきわめて厚い。外面にはヘラ削り後弱いナデ，内面には丁寧な横ナデが施される。胎土に砂粒を多く含むが、焼成は良好で黒褐色を呈す。132～135は坏で、132・133がほぼ完形，134・135が $\frac{1}{2}$ 程の遺存である。いずれも体部が球状を呈し深い，132・133の口縁は直立し，134・135はやや内傾する。132の口

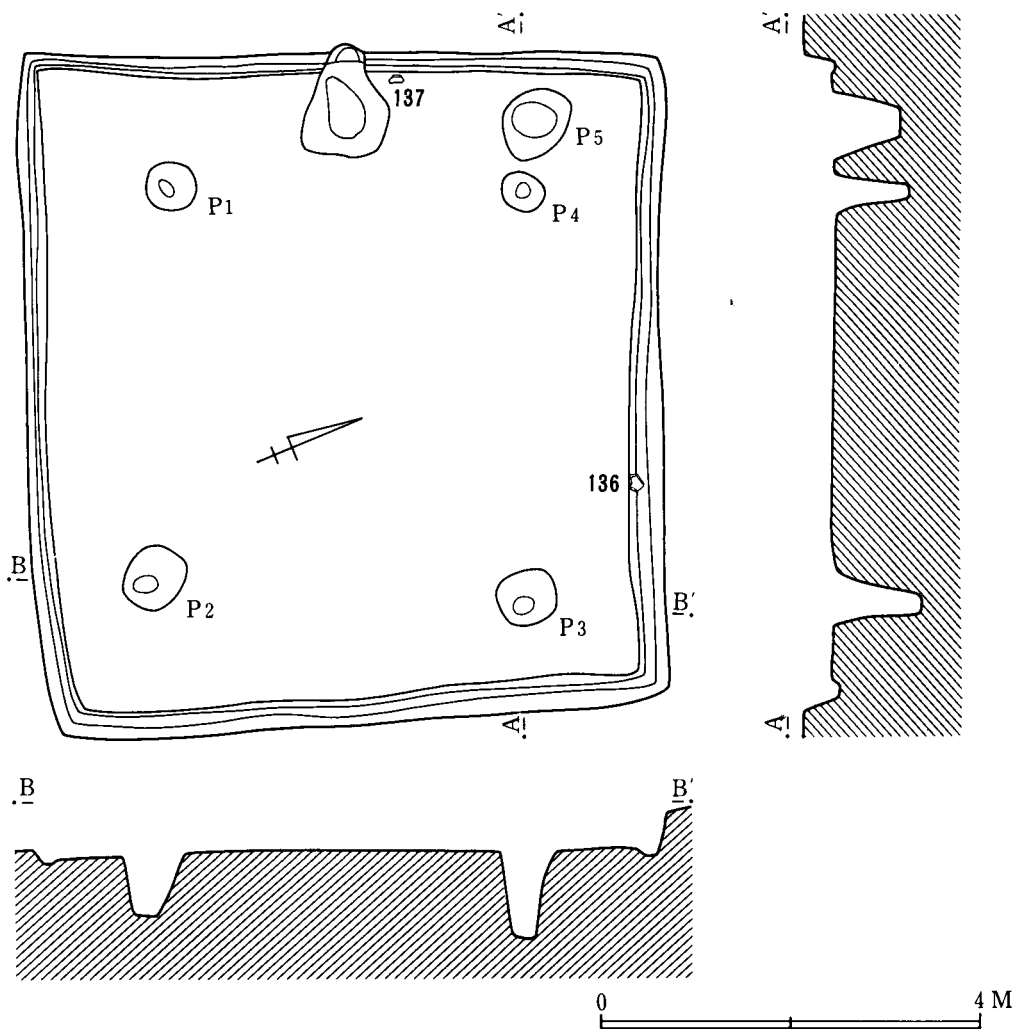


第130図 28号住居址実測図

縁部中位に弱い段が形成される。色調は暗～黒褐色を呈す。134の内面には赤彩が施されるが遺存はあまり良くない。

29号住居址 (第131・145・154図, 図版59・74)

本住居址は調査区の南側に位置し、28号住居址の南西1mに隣接する。平面プランは正方形を呈し、規模は6.7m×7.0mを測る。カマドを通る主軸はN-70.5°-Wを指す。壁は床面からやや斜めに立ち上がり堅緻であるが、上面を削平されるために壁高は南側で10cm、北側で40cmを測るのみである。壁溝は幅10~20cm、深さ5~10cm程で全周する。床面は南東側に若干傾斜するもののほぼ平坦で堅緻であり、特に柱穴間の中央部分は良好に固められている。ピットは5

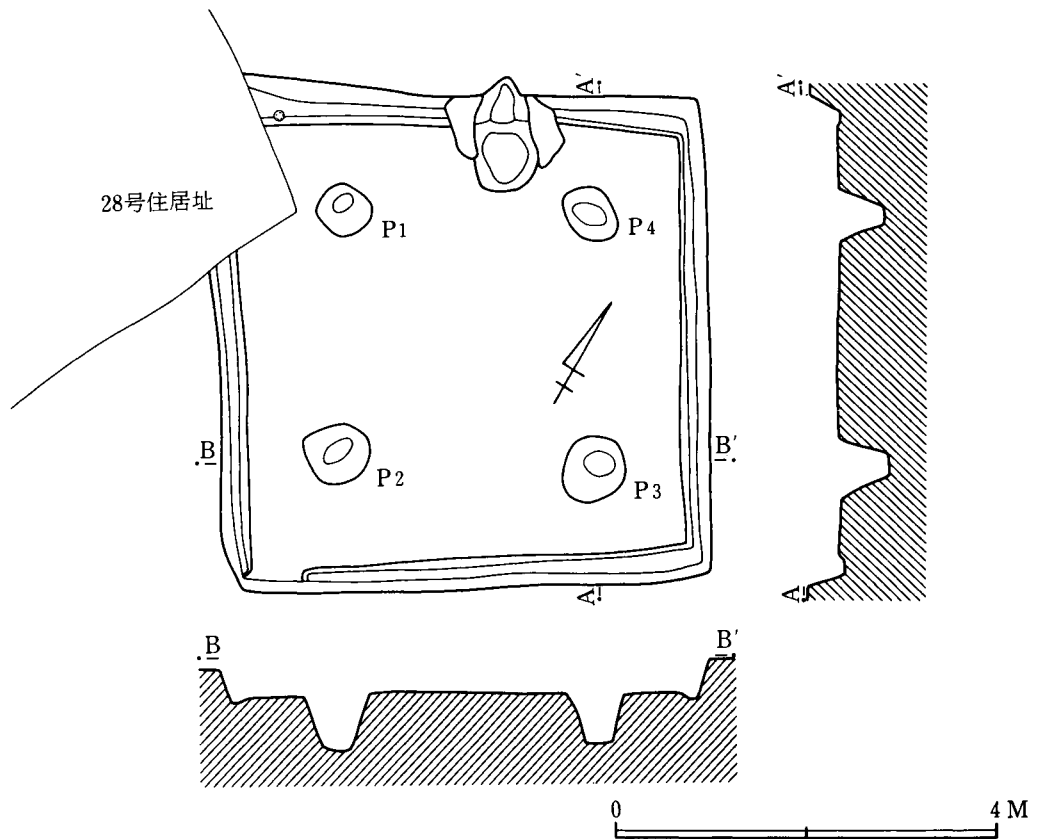


第131図 29号住居址実測図

か所検出された。対角線上に配されたP1～P4は支柱穴に相当する。プランは略円形を呈し、南東壁沿いのP2・P3がやや規模を大きくする。深さはP2が63cmを測る他はいずれも80～90cmを測る。P4の北西側に位置するP5は、80cm×60cmを測る不整形の貯蔵穴である。深さは69cmを測る。覆土は自然堆積である。

カマドは北西壁のほぼ中央に位置する。削平が著しく遺存は不良である。煙道部は壁をわずかに掘り込んで設けられる。燃烧部は焚口部に向けて徐々に広がる形を呈す。床面からの掘り込みは14cmを測る。焼土の堆積はあまり認められず、袖も山砂の痕跡が残るのみで、平面的なプランは確認されなかった。

遺物はきわめて少なく、カマドの右側から坏と、床面から甕の小片が出土したにすぎない。
遺物 136は長胴の小形甕となろう。上半部 $\frac{1}{2}$ 程の遺存である。口縁部は短くわずかに外反する。



第132図 30号住居址実測図

器肉は薄く、胎土・焼成とも良好である。137は盤状を呈する浅い坏である。図示の $\frac{1}{2}$ 程遺存する。口縁部は直立し、内外面ともナデが施される。口縁部および体部内面に鮮明な赤彩が認められるが、遺存はあまり良くない。

8は支脚の頭部片である。被熱が著しく器面が荒れている。色調は赤褐色を呈す。

30号住居址 (第132・145・153図, 図版59・71・75)

本住居址は調査区の南東側に位置し、28号住居址によって西コーナー部分を切られる。平面プランは正方形を呈し、規模は5.2m×5.2mを測る。壁は床面からやや斜めに立ち上がり、状態は良好であるが、上面を若干削平されるため壁高は25~35cmを測るにすぎない。壁溝は南側コーナー部で若干途切れる他は全周する。幅は10~20cm、深さは5cm程を測る。床面は平坦で堅緻であり、柱穴間の中央部分は特に良好に固められている。ピットは対角線上に4か所検出された。P1が最深60cm、P4が最浅46cmを測る。いずれも支柱穴に相当する。貯蔵穴は確認されなかった。覆土は自然堆積である。

カマドは北西壁の中央よりやや北東側に位置する。遺存は比較的良好である。煙道部は壁を三

角形状に 20 cm 程掘り込んで設けられる。燃烧部は略円形を呈し、床面から 11 cm 掘り込まれる。焼土層は煙道部から焚口部にかけて厚く堆積しており、かなり使用されたことが推定される。なお、堆積土上部には天井部の崩落土と思われる砂質土層が認められた。袖部はローム土をうすく積んで基盤とした上に山砂を置いて形成される。

遺物は少なく、床面から高坏・須恵器の坏身が出土しているにすぎない。須恵器の坏蓋および鉄製品は覆土中からの検出である。

遺物 138は高坏脚部で $\frac{1}{2}$ 程遺存する。脚柱部と裾部は明瞭に区別されず、緩やかに開き安定した形を呈す。内外面ともに丁寧なヘラ削りおよびナデが施される。胎土は緻密で、明褐色を呈す。139・140とも須恵器の坏身で、139は $\frac{2}{3}$ 、140は $\frac{1}{4}$ 程の遺存である。形態的にかなり異なる。139は口径 8.3 cm と小さく、受部がほぼ水平に開く。立ち上がりは低く大きく内傾し、端部は丸くおさまられる。140は推定口径 11.5 cm を測る。受部は140とほぼ同様であるが、立ち上がりは若干内傾し139よりも長くなる。いずれも整形は丁寧で、体下部および底部にはヘラ削りが施される。焼成・胎土とも良好で、色調は139が灰褐色、140が暗褐色を呈す。

8は小札であろうか。

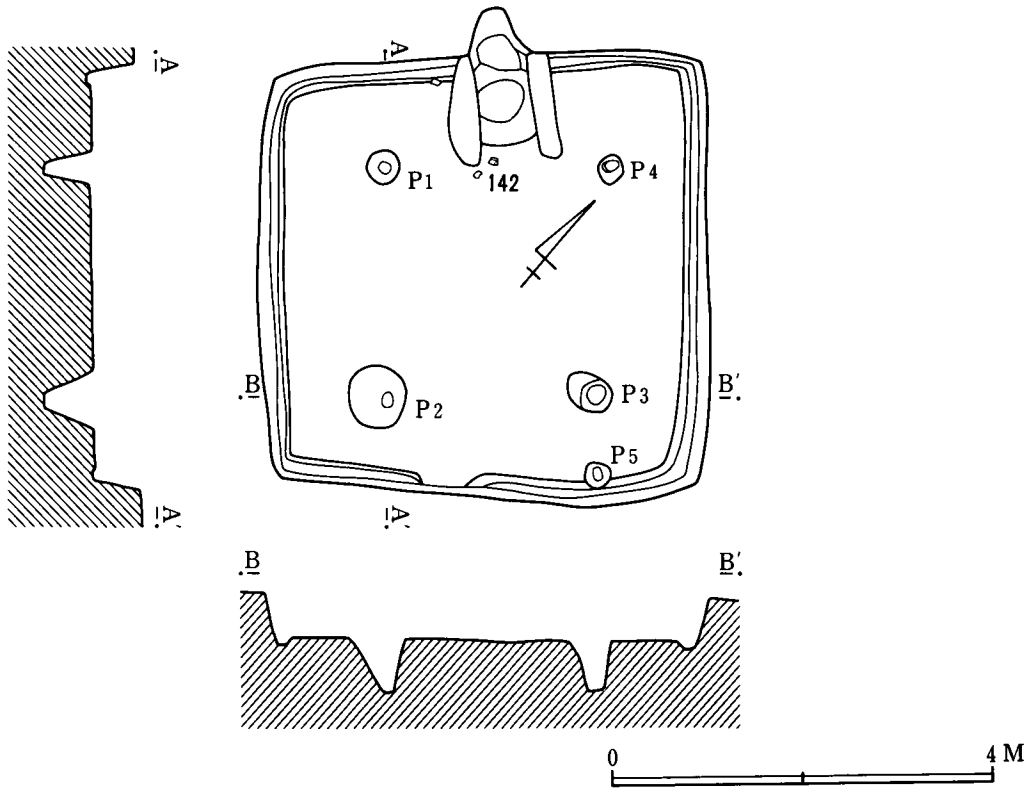
31号住居址（第133・145・146・153図、図版59・72・75）

本住居址は調査区の南東側に位置し、33号住居址の北 3 m 程に構築される。上面の削平はほとんどなく良好に遺存する。平面プランは正方形を呈し、規模は 4.8 m × 4.6 m を測る。カマドを通る主軸は N-44.5°-W を指す。壁は床面からやや斜めに立ち上がり、壁高は 45 cm 程を測る。壁溝は南東壁で部分的に途切れる他は幅 10~20 cm、深さ 5 cm 程で全周する。床面は平坦で、柱穴間の中央部分が良好に踏み固められている。ピットは 5 か所検出された。対角線上に配される P 1~P 4 は支柱穴に相当する。P 2 がやや大きな掘り方を示す以外はほぼ等一される。深さは P 4 が 20 cm と浅いが、他は 50 cm 前後を測る。貯蔵穴は確認されなかった。覆土は自然堆積である。

カマドは北西壁の中央よりやや北東にずれた位置に構築される。煙道部は壁を 55 cm 程台形状に掘り込み、燃烧部から 40° の角度で立ち上がる。燃烧部はほぼ円形のプランを呈し、床面から 18 cm 掘り込まれる。焼土層は燃烧部から煙道部にかけて堆積する。堆積土上部には天井部の流れ込んだ層が認められる。袖部は粘性のある暗褐色土を基盤として、上に山砂を積んで形成される。

遺物は少なく、しかも破片となるものが主である。図示し得た土器はカマド内からのものが多く、甕と坏のみである。須恵器の坏身は覆土中のものである。なお、本址からは土玉の出土が多く計 11 点検出された。

遺物 141~143は甕で、141・142は下半部、143は胴部 $\frac{1}{2}$ および底部を欠損する。形態はそれぞれ異なる。141は口縁が大きく開き、口縁部に最大径を有するものである。142は口縁部が緩く外反し、胴部が長くやや膨らみを有するものであろう。143は口径 18.5 cm、器高 31.6 cm を測る長胴甕



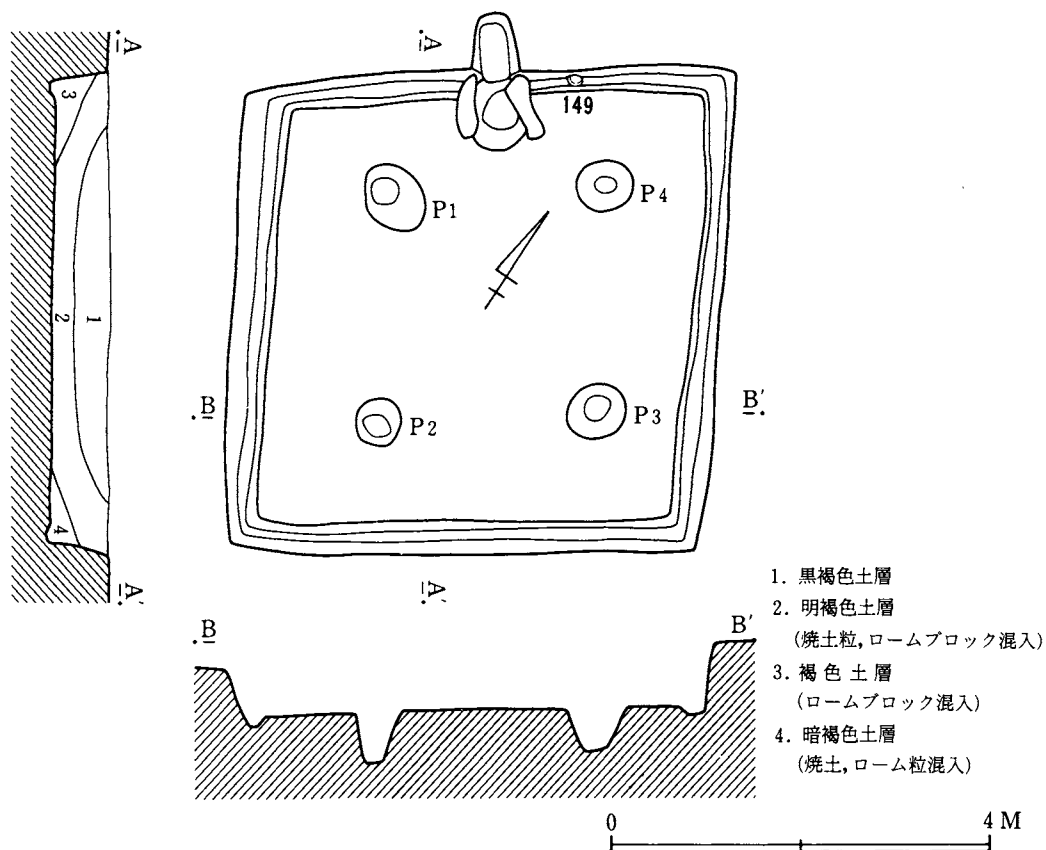
第133図 31号住居址実測図

である。口縁部は「く」の字状に外反する。胴部の膨らみは弱い。縦位の長いヘラ削りが認められる。器肉は薄く、胎土に小石を多く含む。焼成は良好で暗褐色を呈すが、部分的に黒変および赤化が観察される。144は小形の坏で $\frac{1}{2}$ 程の遺存である。底部は平底となる。145は須恵器の坏身で $\frac{1}{2}$ 程遺存する。推定口径 10.7 cm を測る。受部は斜め上方に突出し、口縁部は外彎ぎみに内傾する。体部外面は回転ヘラ削りが施される。胎土は緻密で焼成は良好である。灰褐色を呈す。

11~21は土玉で、17~21は欠損品である。大きさ・形態ともまちまちであるが整形は比較的丁寧で焼成も良好である。胎土に砂粒を多く含み、色調は褐色~暗褐色を呈す。

33号住居址 (第134・146図, 図版60・73)

本住居址は調査区の南東端に位置する。遺存は良好である。平面プランは正方形を呈し、規模は5.1m×5.0mを測る。カマドを通る主軸はN-35.5°-Wを指す。壁は床面からやや斜めに立ち上がり、壁高は50~65cmを測る。壁溝は幅20~25cm, 深さ10~20cmで全周する。床面はほぼ平坦で全体的に堅緻であり、柱穴間の中央部分が特に良好に固められている。ピットは対角線上に4か所検出され、いずれも支柱穴となる。略円形のプランを呈し、深さは40~50cmを測る。貯蔵穴は検出されなかった。覆土は自然堆積である。

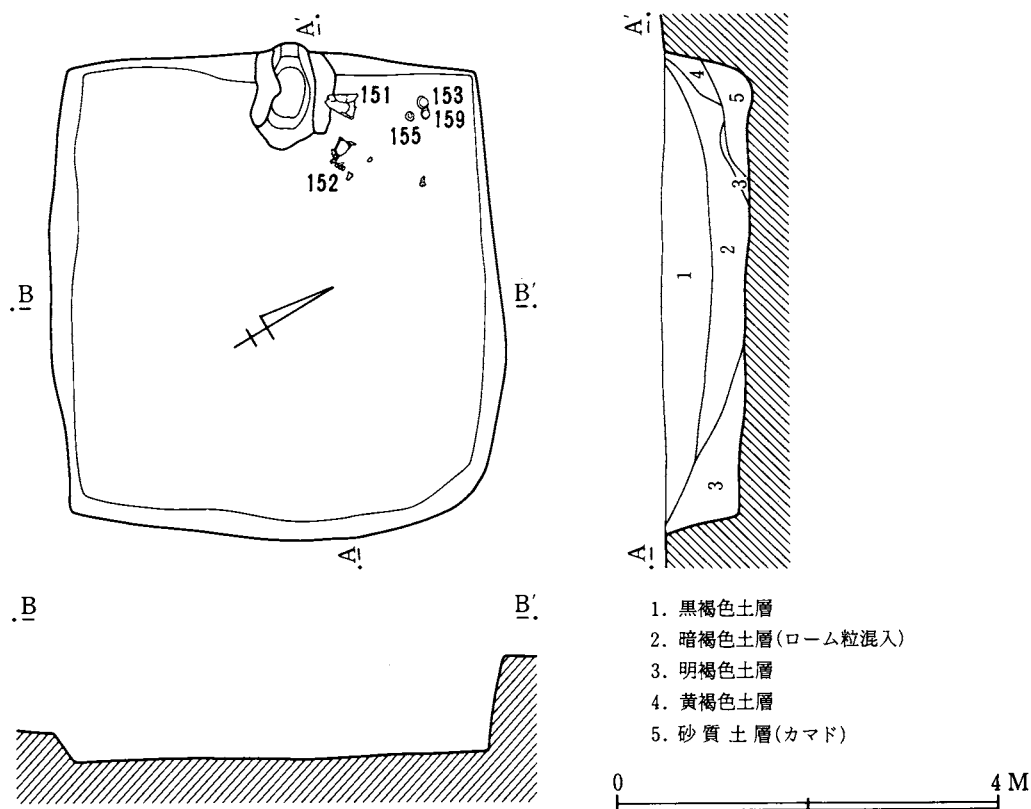


第134図 33号住居址実測図

カマドは北西壁のほぼ中央に位置し遺存は比較的良好である。煙道部は壁を60cm程砲弾状に掘り込んで設けられ、燃烧部から40°の角度で立ち上がる。燃烧部は略円形のプランを呈し、床面から15cm程掘り込まれる。焼土層は底面より10cm程浮いて多量に堆積する。天井部の崩落層が上部に認められる。袖部は粘性のある暗褐色土を基盤として、山砂を積みあげて形成される。

覆土中の遺物はほとんどなく、壁際の床面の出土の土器が主であるが比較的数量が少ない。須恵器の坏身はカマド右側の壁溝内から検出された。

遺物 146は甕で図の $\frac{1}{4}$ 程遺存する。口縁部は上方で大きく外反し、口唇部が直立する。端部は尖り、内側に稜を有する。胴部は若干球形を呈す。胴部外面には細かい刷毛目が遺存するが、胴上部の目がやや粗い。他には丁寧なナデが施される。胴部内面には凹凸が若干認められる。器肉は薄く、胎土・焼成とも良好である。赤褐色を呈す。147・148は小形甕の口縁部および胴下半部である。147はつくりが粗く器肉が厚い。口縁部は短く外反する。148はやや膨らみのある胴部に平底がつく。内面のナデがきわめて丁寧である。147は暗褐色、148は明褐色を呈す。149は丸底の坏で、口縁部がやや内彎する。外面はヘラ削り後ナデ、内面には丁寧なナデが加えられる。胎土は



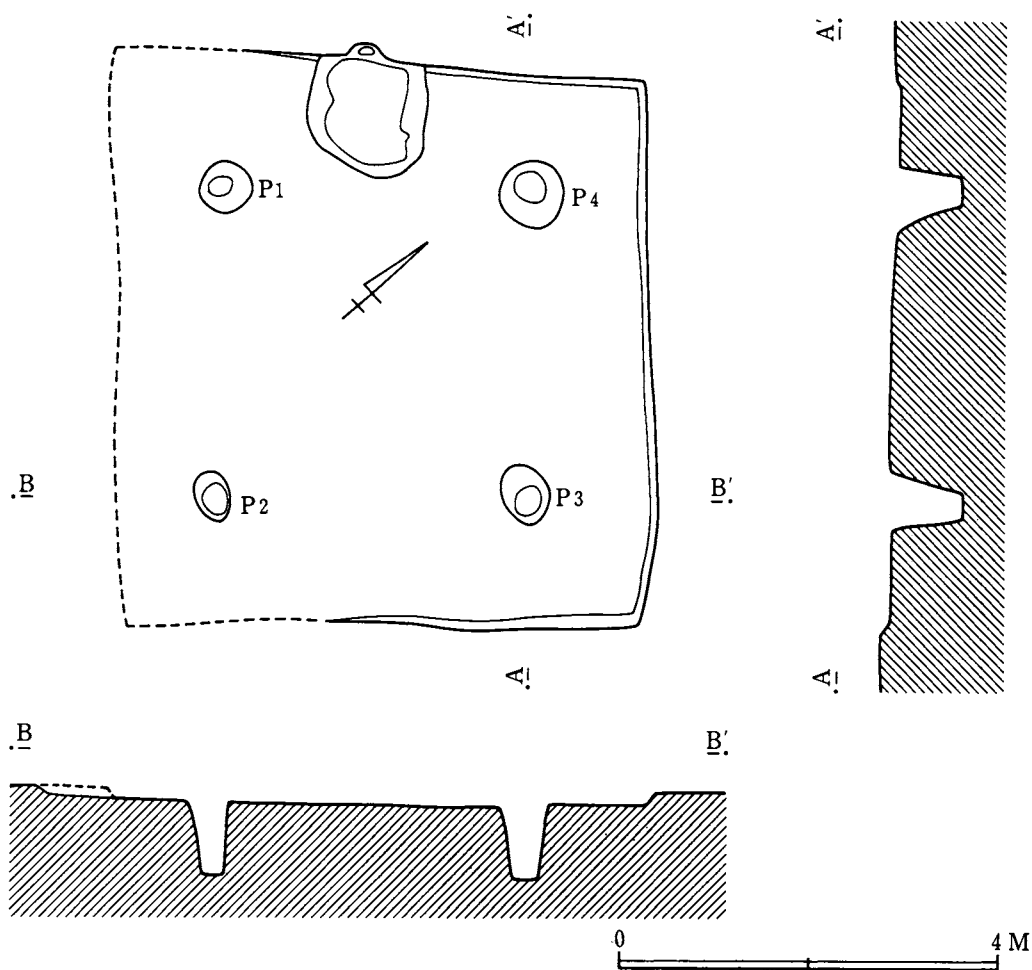
第135図 37号住居址実測図

緻密で焼成良好である。明褐色を呈す。150は須恵器の坏身で体部を $\frac{1}{3}$ 程欠損する。口径 13.0 cm, 器高 4.3 cm を測る。体部にはやや歪みがみられる。底部はつくりが粗く、胎土がやわらかい時点で粘土を貼り付けたようである。整形時の底部破損を補修したのであろうか。内外面ともに回転ナデで調整される。胎土は緻密で焼成良好である。暗灰褐色を呈す。

37号住居址 (第135・146・153図, 図版60・72・75)

本住居址は調査区の南端の北から南へ傾斜する面に位置する。傾斜面のため削平をまぬがれ遺存は良好である。平面プランはほぼ正方形を呈し、規模は4.4m×4.7mを測る。カマドを通る主軸はN-60.5°-Wを指す。壁は全体的に軟弱で、床面からやや斜めに立ち上がる。斜面に構築されるため、壁高は北側で95 cm, 南側で29 cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面は南側に若干傾斜するもののほぼ平坦で比較的堅緻である。柱穴・貯蔵穴等のピットは検出されなかった。覆土は自然推積である。

カマドは北西壁の中央よりやや北東にずれて位置する。煙道部の壁への掘り込みは10 cm程を測るにすぎず、しかも壁が高いために燃焼部からの立ち上がりはかなり急傾斜となる。燃焼部は楕円形を呈し、床面から30 cm程掘り込まれる。焼土層はあまり多くなく、上部に天井部の流れ

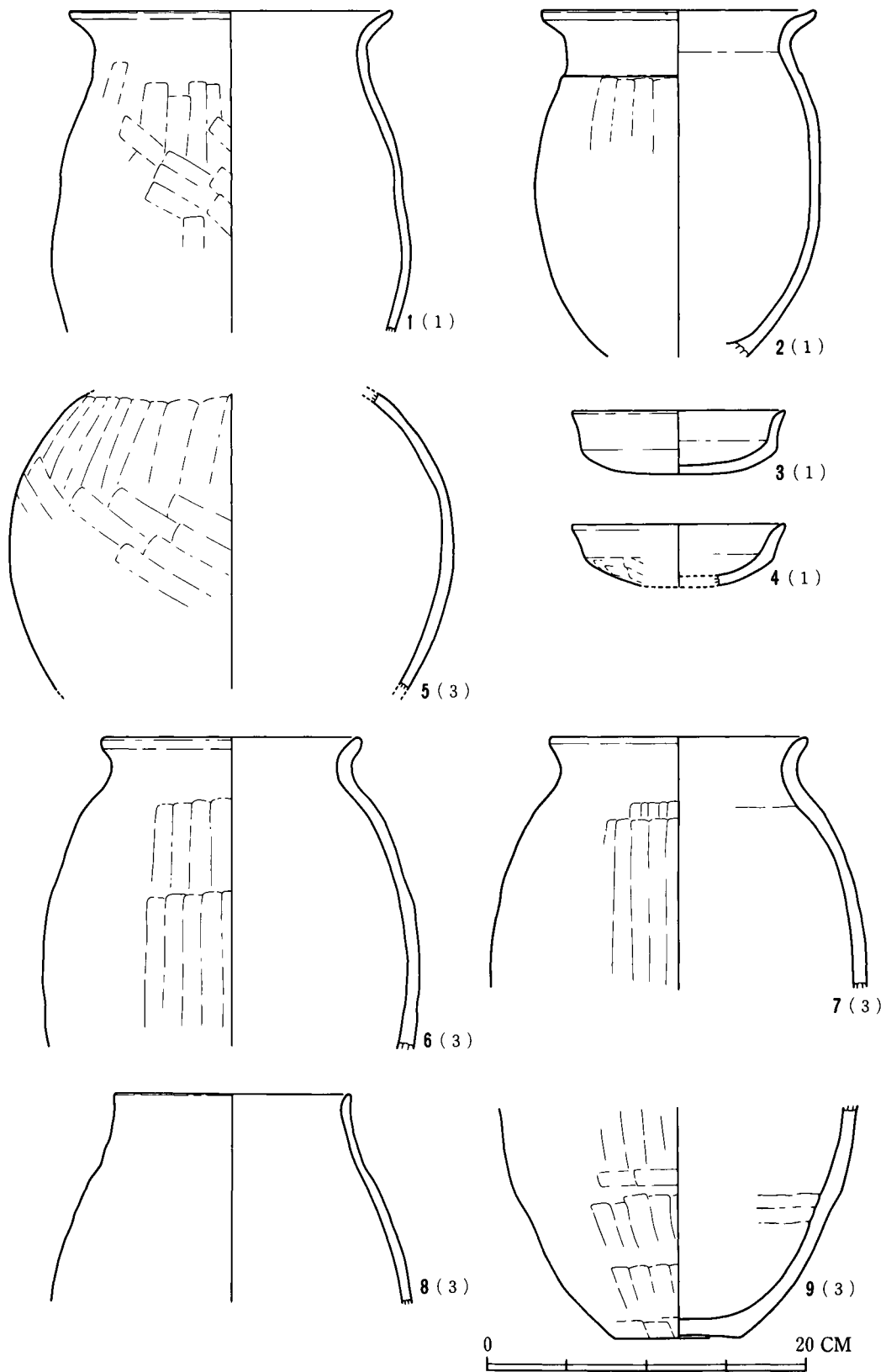


第136図 38号住居址実測図

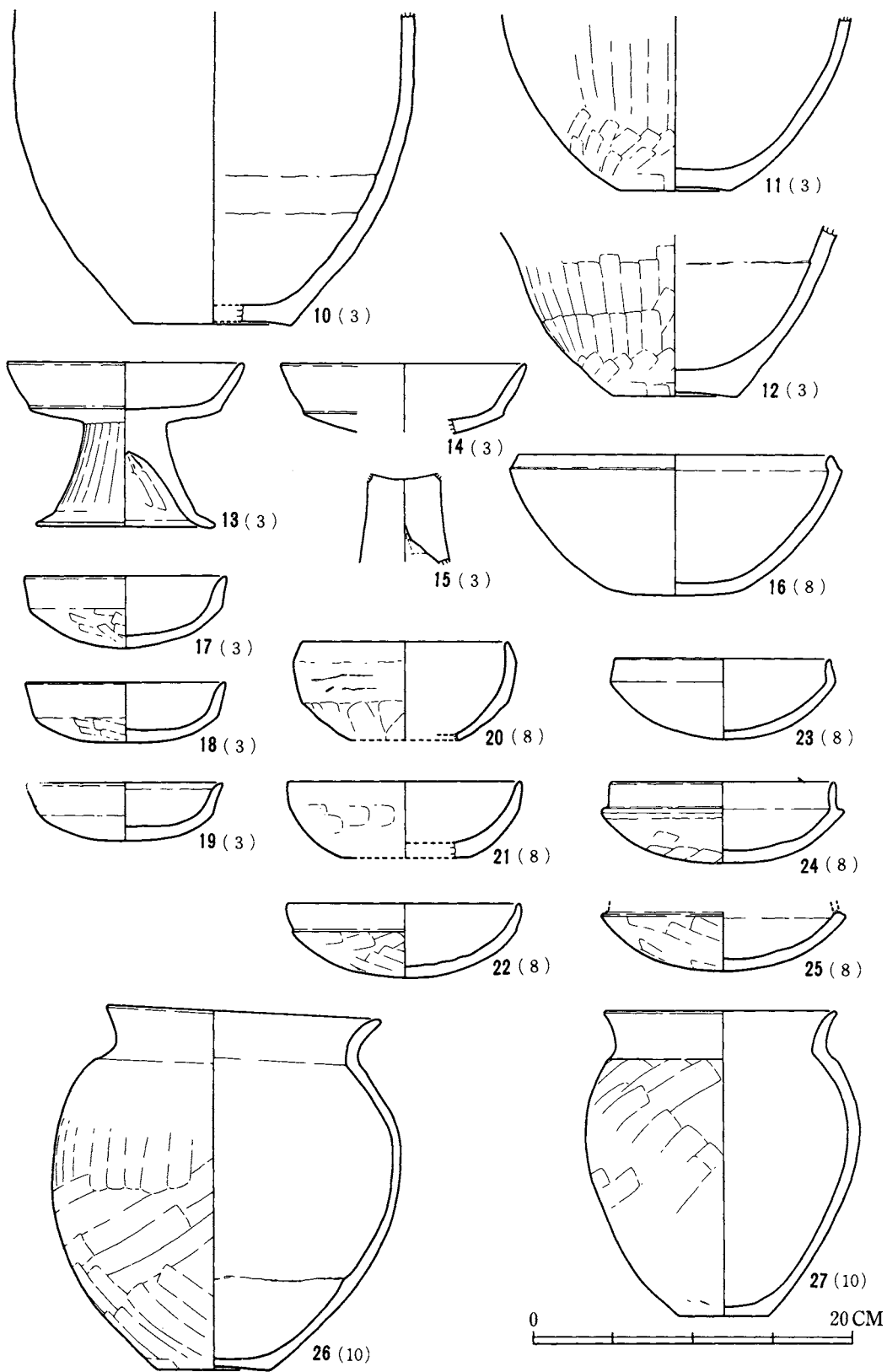
込んだ層が認められる。袖部は他と同様、粘性のある暗褐色土上に山砂を積んで形成される。

覆土中からの遺物は少ないが、カマドの右側部分から床面密着の状態で甕・坏・刀子が出土した。須恵器の坏蓋は覆土中から検出された。

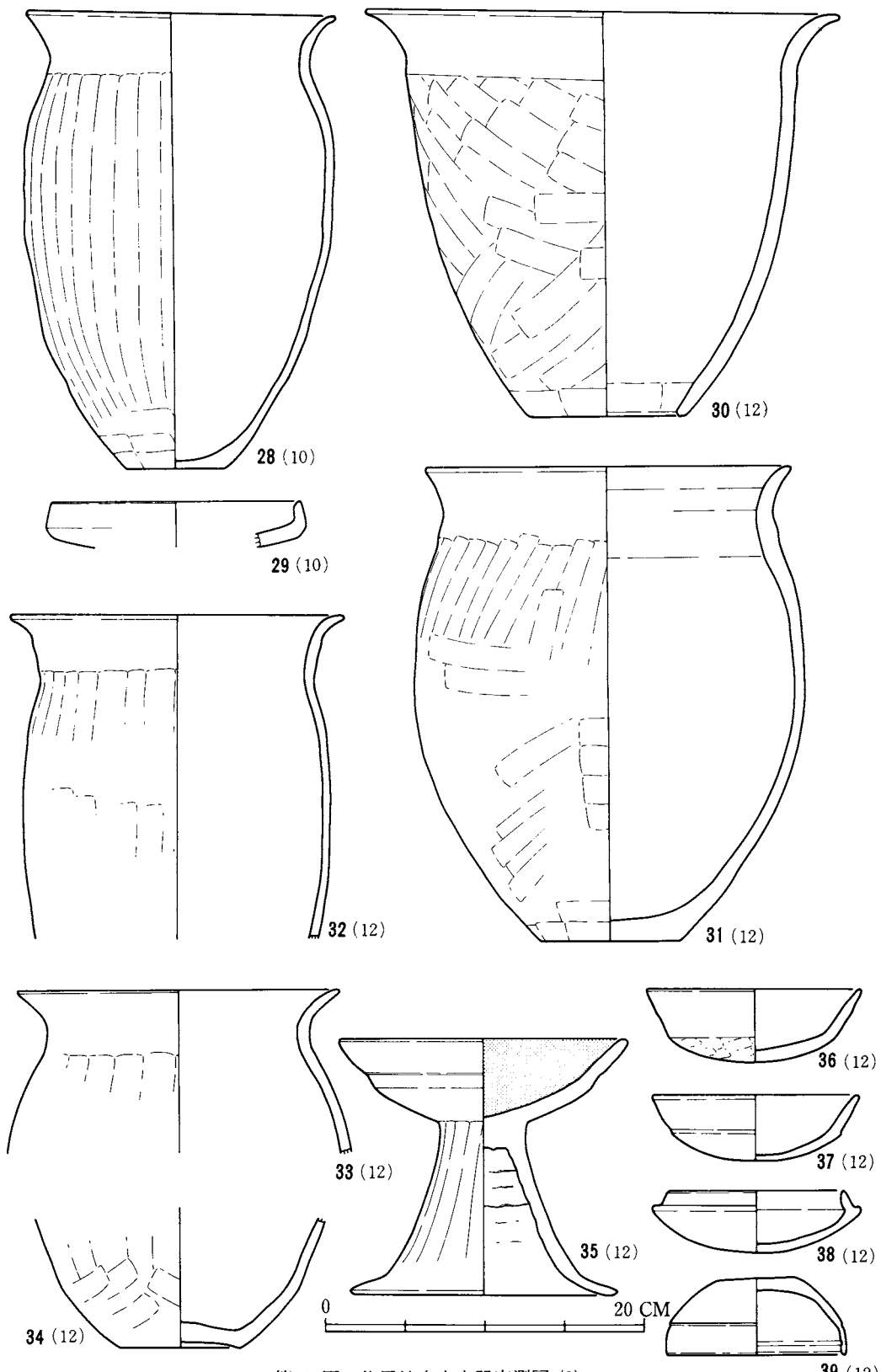
遺物 151は長胴甕で胴部 $\frac{1}{2}$ および底部を欠損する。緩やかに外反する口縁部は上半で外反の度を強める。胴部の膨らみは弱く、最大径が口径よりやや広い。底部付近で急にすぼまり、底部はかなり小さくなるであろう。縦位のヘラ削り痕が顕著に残る。口縁部および胴部内面のナデは丁寧である。胎土に小石を多く含むが、焼成は良好で暗褐色を呈す。152は小形の甕で胴部を $\frac{1}{4}$ 程欠損する。最大径を口縁部にもつ。口縁部は短くわずかに外反する。胴部には歪みが認められ、下半部で急にすぼまる。外面は縦位ヘラ削り後ナデが加えられる。器肉が厚く胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好で赤褐色を呈す。153～155はつくりの粗い坏である。154が口唇部を磨耗するものいずれもほぼ完形である。体部は内彎ぎみに開き、底部は平底となる。153・154の底部には木葉痕



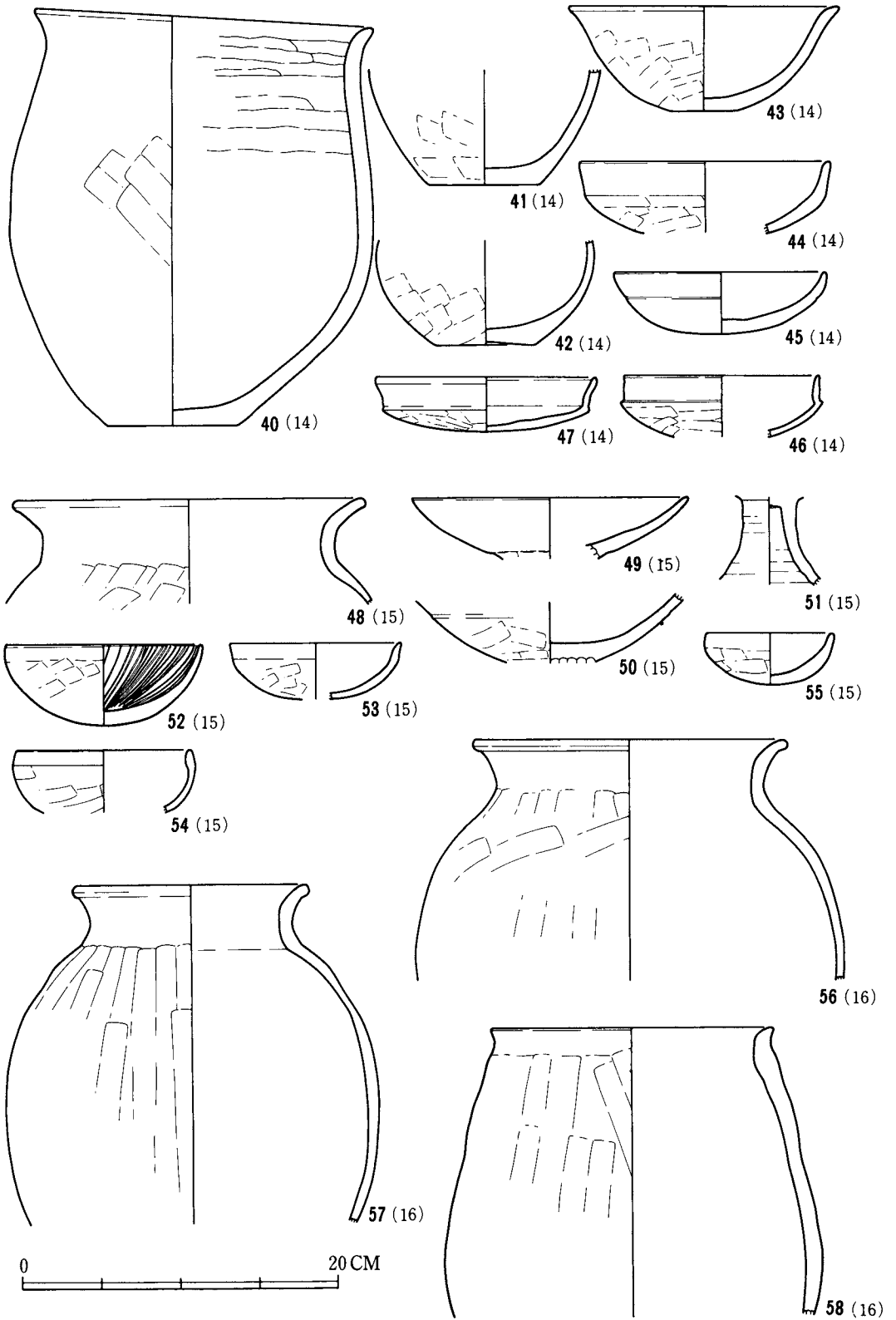
第137图 住居址出土土器实测图 (1)



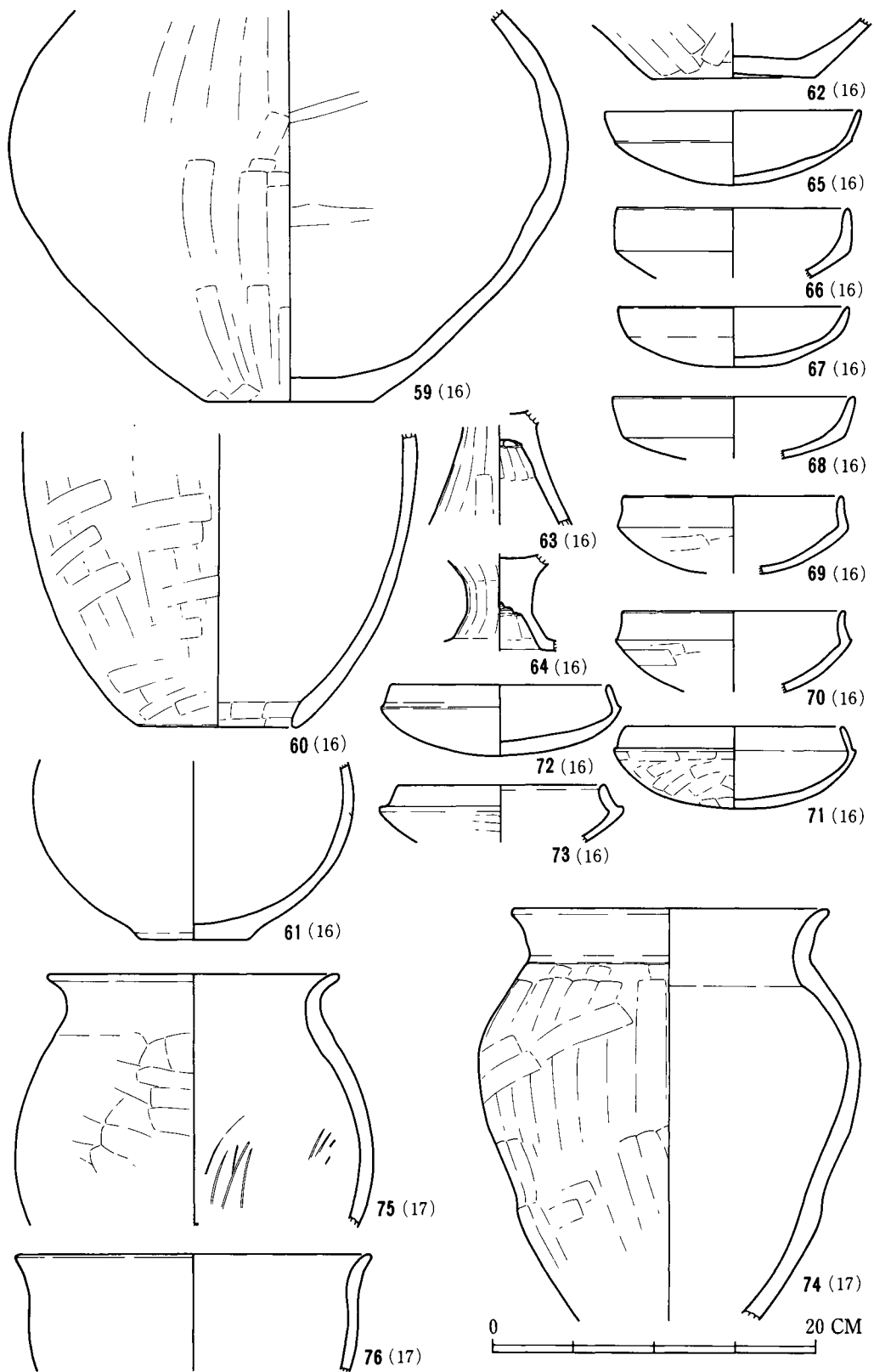
第138图 住居址出土土器実测图 (2)



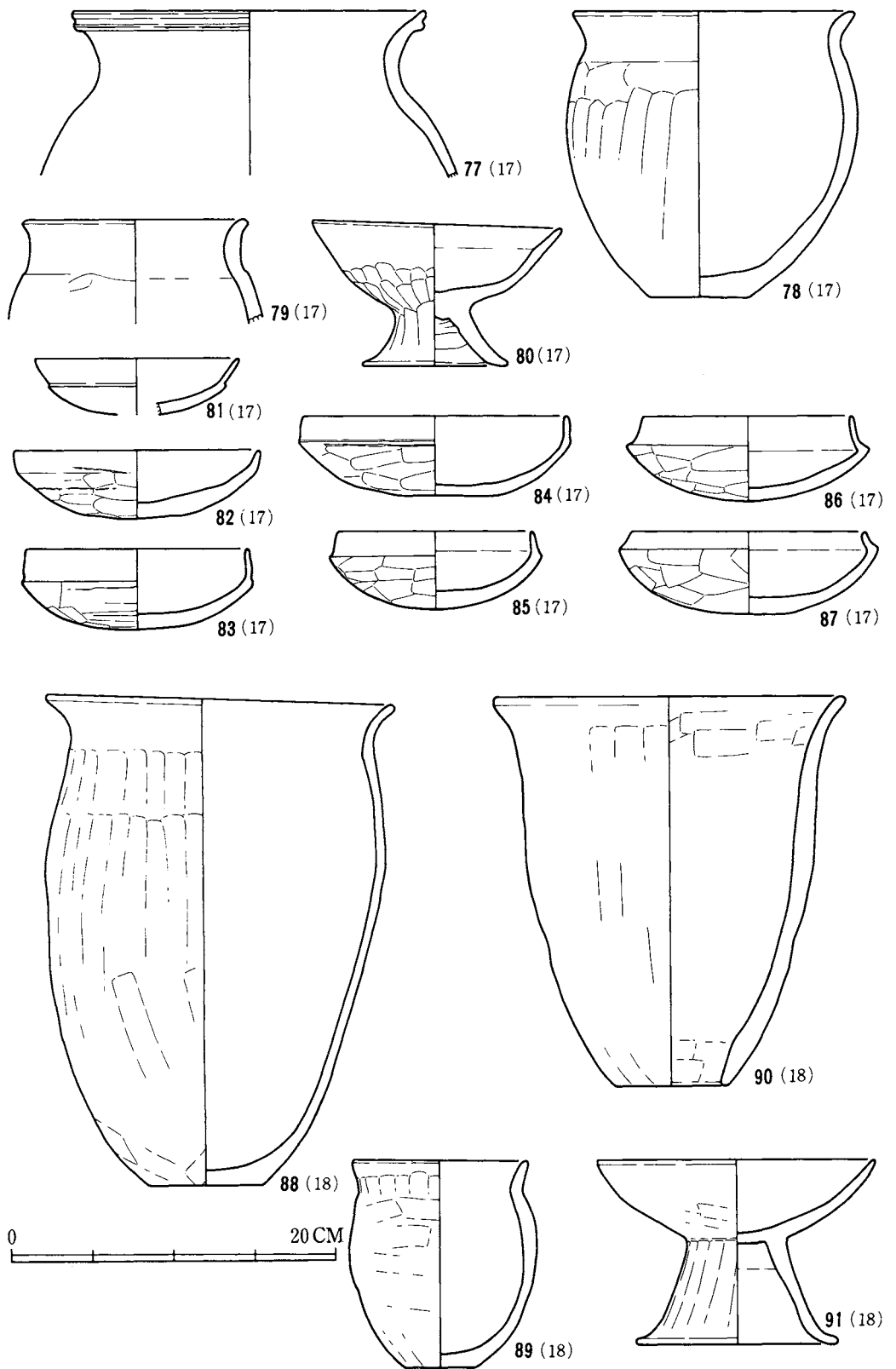
第139图 住居址出土土器实测图 (3)



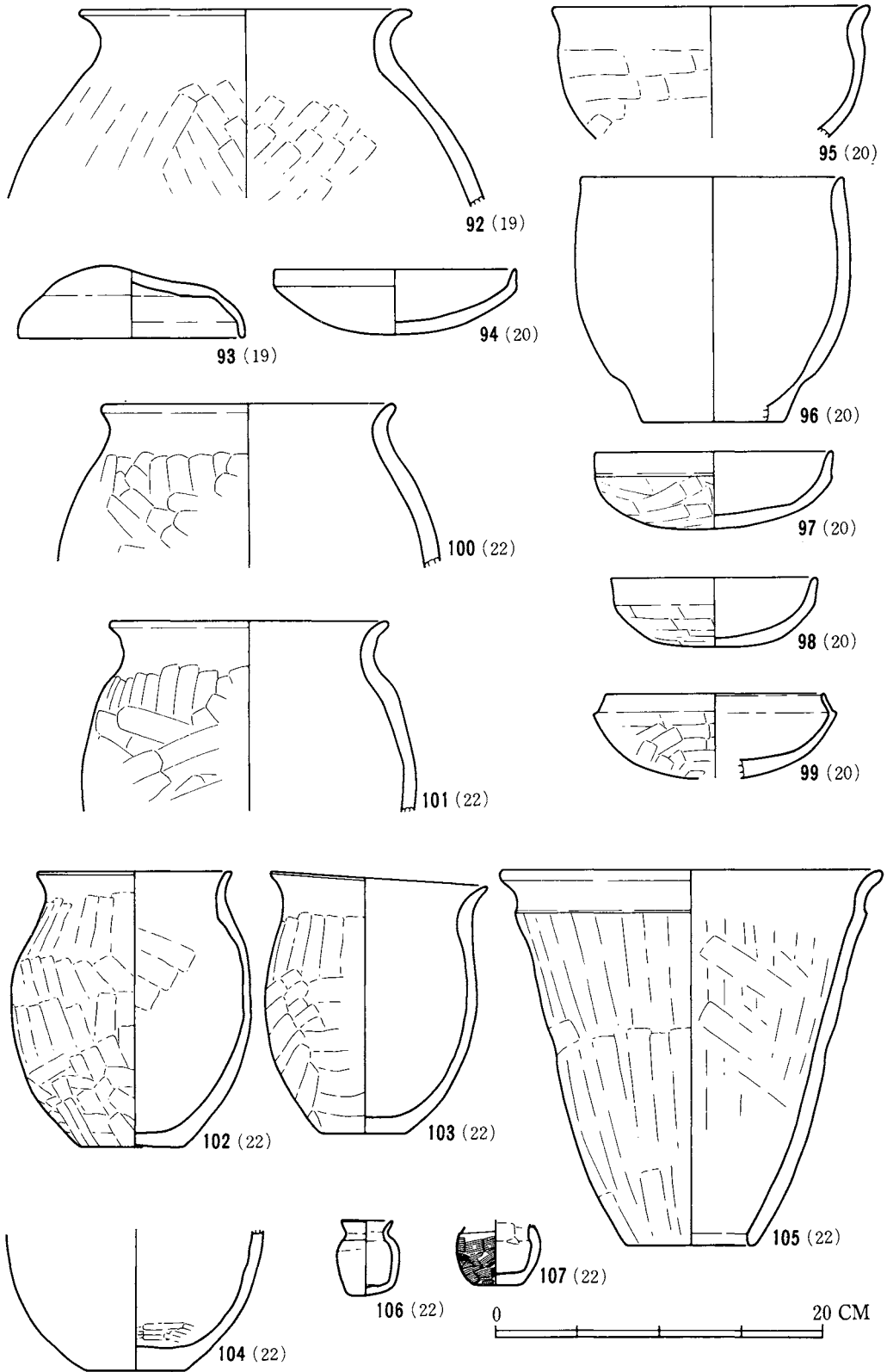
第140图 住居址出土土器实测图(4)



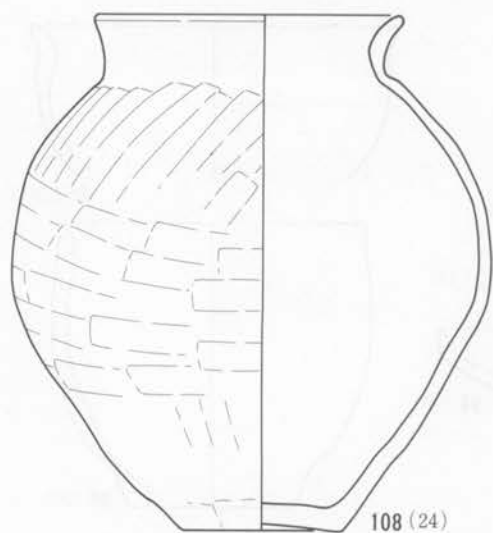
第141图 住居址出土土器实测图 (5)



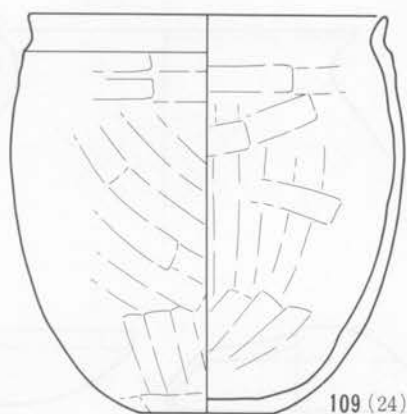
第142图 住居址出土土器实测图 (6)



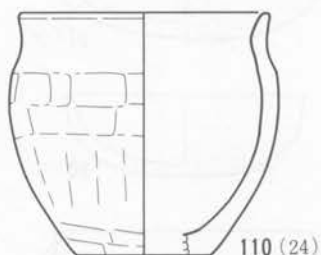
第143图 住居址出土土器実測图 (7)



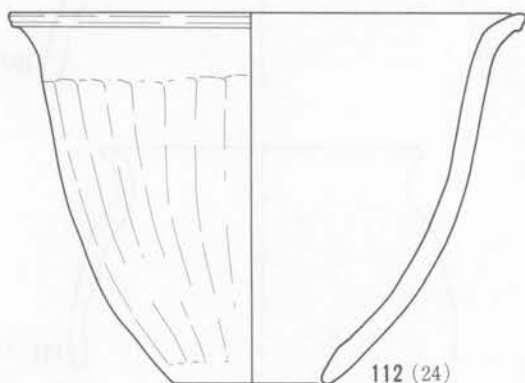
108 (24)



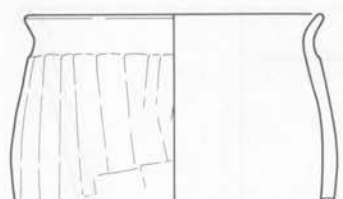
109 (24)



110 (24)



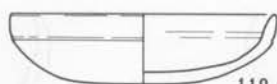
112 (24)



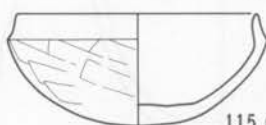
111 (24)



113 (24)



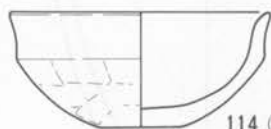
118 (24)



115 (24)



119 (24)



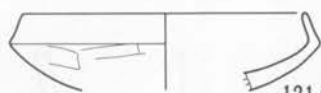
114 (24)



116 (24)



120 (24)



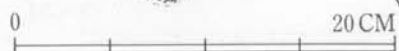
121 (24)



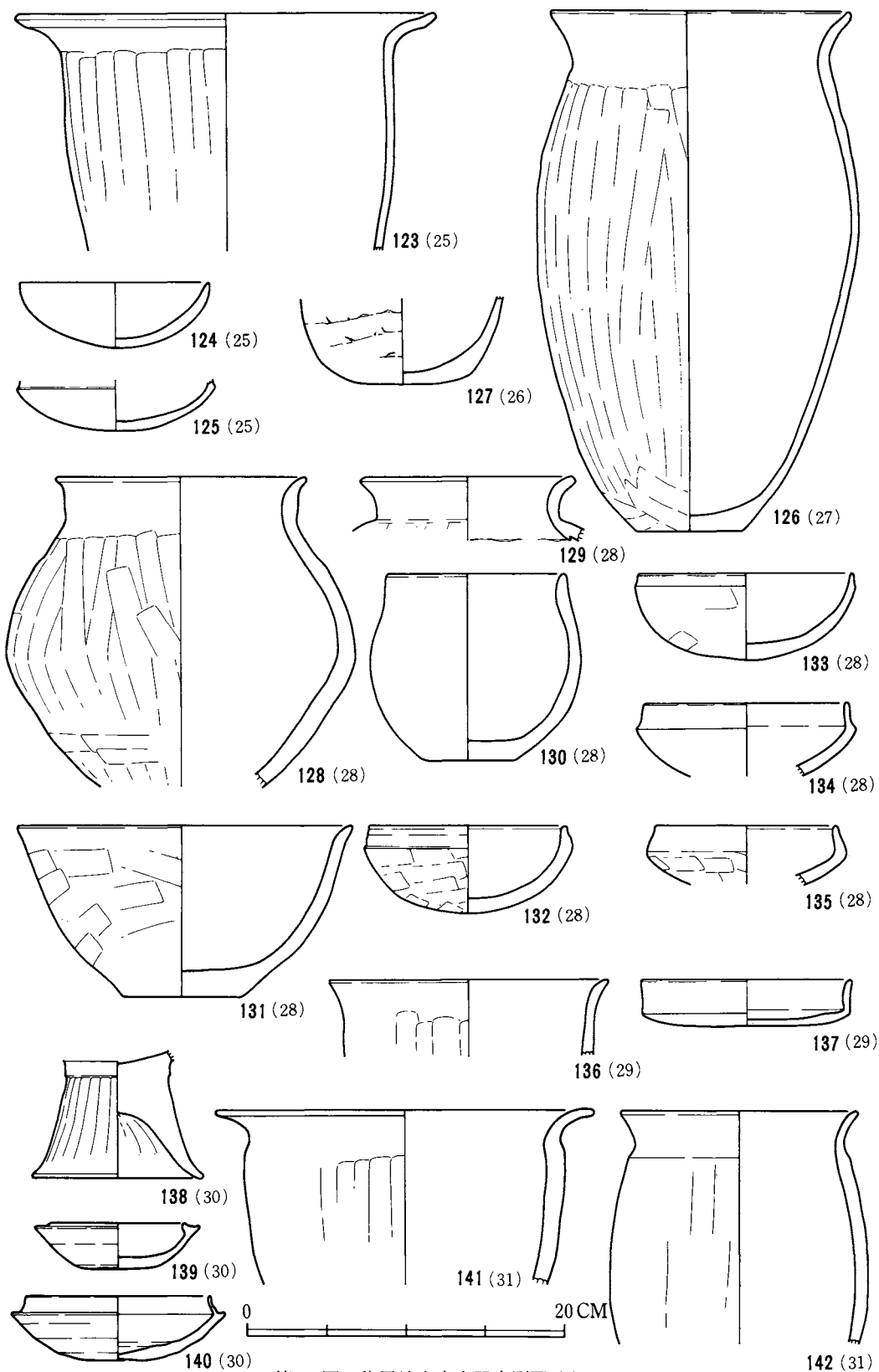
117 (24)



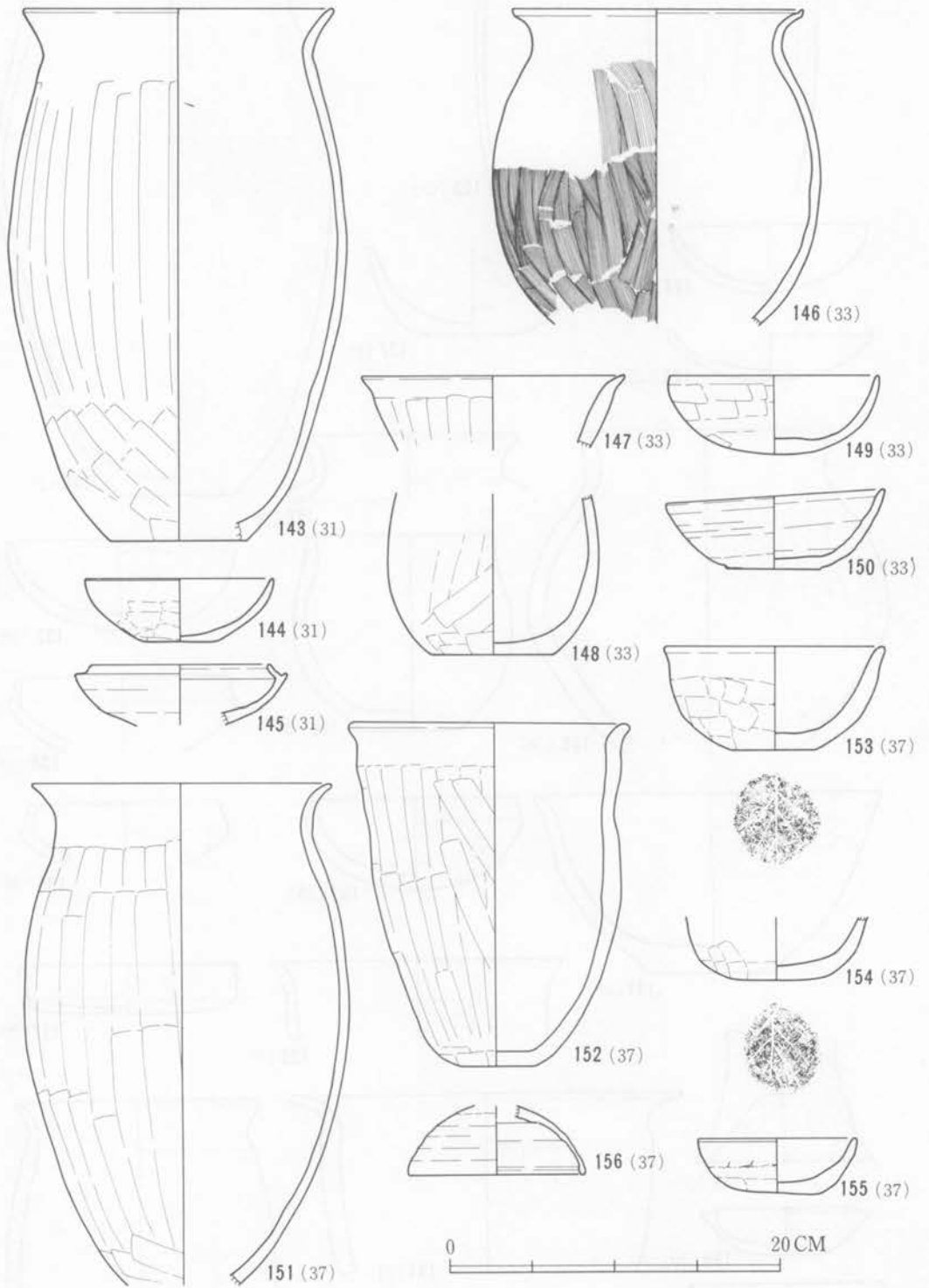
122 (24)



第144図 住居址出土土器実測図 (8)



第145图 住居址出土土器実測图 (9)



第146図 住居址出土土器実測図 (10)

が観察される。調整はほぼ同様で、ヘラ削りは粗雑である。155の体部外面に輪積み痕が一条みられる。胎土には砂粒を多く含み、色調は明～黒褐色を呈す。156は須恵器の坏蓋である。¼程の遺存である。天井部は不明であるが全体に半球状を呈すものであろう。口縁部は若干肥厚し内面に弱い稜を形成する。天井部付近には回転ヘラ削り、他には回転ナデが加えられる。胎土・焼成とも良好で、灰褐色を呈す。

5は鋒を欠損する刀子である。関部は明確ではないが、刃側にのみ関を有するものと思われる。卵倒形を呈す縁金具が完存する。茎には木質が良好に遺存する。

38号住居址 (第136図)

本住居址は調査区のほぼ中央に位置する。上面はほとんど削平されており、特に南西側はピットのみを確認した状況である。平面プランはほぼ正方形を呈し、規模は5.6m×5.8mを測る。カマドを通る主軸はN-48.5°-Wを指す。壁はほとんど遺存せず状態は不明である。壁溝は検出されなかった。床面の遺存もあまり良好ではないが、中央部分は特に固められているようである。ピットは対角線上に4か所検出された。いずれも支柱穴で略円形を呈し、深さ70cm前後を測る。貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは北西壁のほぼ中央に位置するようであるが、削平のため遺存状態は不良である。煙道部の壁への掘り込みは短かく、燃烧部は大きく設けられる。

遺物は削平のため土器片が若干出土したにすぎず、図示し得なかった。

第4節 歴史時代の遺構と遺物

1. 住居址

4号住居址 (第147・151図, 図版61)

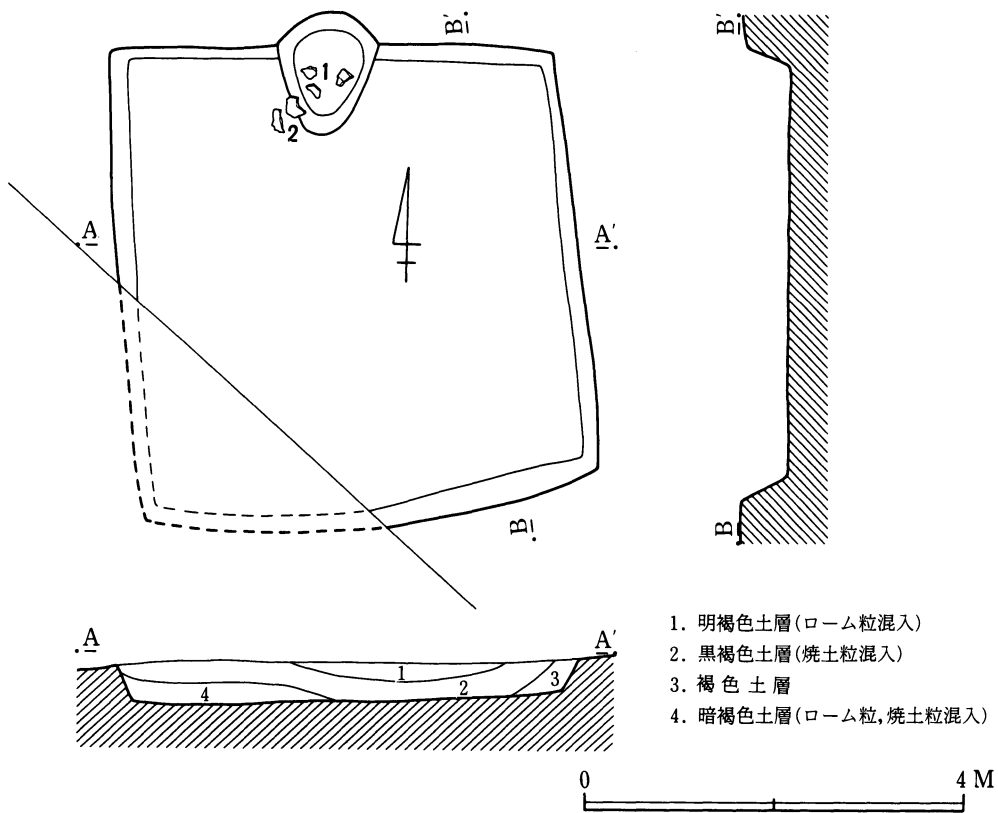
本住居址は3号住居址の覆土上層中に検出された。覆土中に構築されているため、床面・壁とも良好な状態ではなかった。平面プランはほぼ正方形を呈し、規模は2.4m×2.5mを測る。カマドを通る主軸はN-6.5°-Wを指す。壁はやや斜めに立ち上がり、3号住居址の確認面からの深さは20cm程であった。壁溝は確認されなかった。床面はほぼ平坦であるがしまりは弱く、ピットは検出されなかった。覆土は自然堆積で4層に分かれるものの黒色土を主体とした層である。カマドの遺存状態は極めて悪く、痕跡のみを検出したにすぎなかった。

遺物はきわめて少なく、カマド内から甕の破片が出土したのみである。

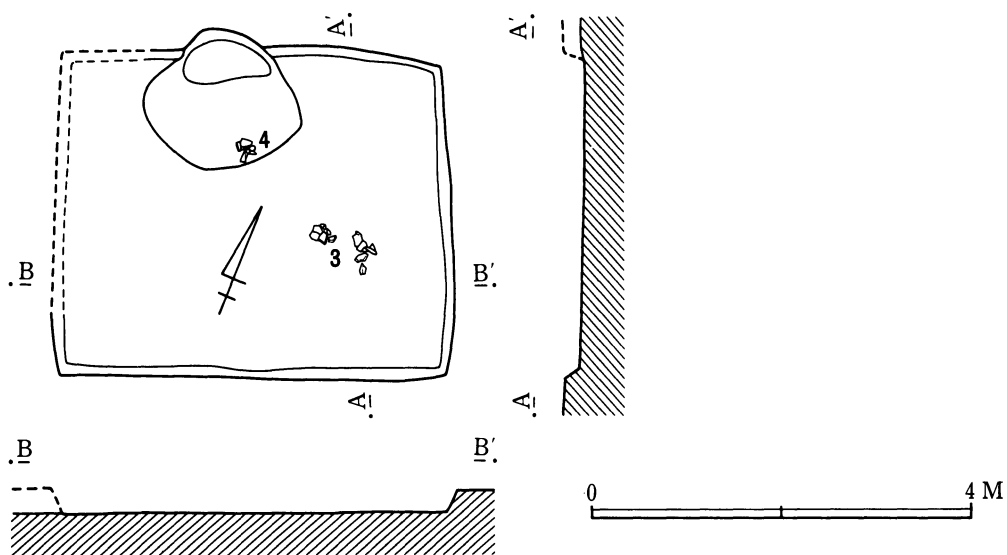
遺物 1・2は甕の口縁部から胴部にかけてで、1は¼、2は½の遺存である。口縁部は内彎ぎみに大きく開く。胴部外面には叩き目が明瞭に残る。器肉は薄く、胎土・焼成とも良好である。1は胎土そのものが赤く、2は黒褐色を呈す。

11号住居址 (第148・151図, 図版73)

本住居址は調査区の北西端に位置する。上面はほとんど削平されており、壁の痕跡が残るのみ



第147図 4号住居址実測図



第148図 11号住居址実測図

である。平面プランは若干横長の方形を呈しており、規模は3.2m×2.4mを測る。カマドを通る主軸はN-29°-Wを指す。壁は深さ10cm程しか遺存せず、壁溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦でかなり踏み固められた状態である。柱穴等のピットは認められない。カマドは北西壁のやや西側寄りに設けられるが、遺存はかなり悪く袖等は不明である。煙道部は壁を長さ15cm、幅75cm程掘り込んで形成される。燃烧部の掘り込みは顕著ではなく、床面を8cm程下げているにすぎない。

遺物の量も少なく、カマド付近から甕・坏が出土したのみである。

遺物 3・4は甕で図示の1/2程の遺存である。口縁部は大きく外反し、口唇部でやや肥厚する。胴部上半は叩き目後ナデ、下半には斜位のヘラ削りが施される。胎土・焼成とも良好で、特に3の焼成が良く硬質となる。色調は3が黒色、4が赤褐色を呈す。

23住居址（第149・152図、図版73）

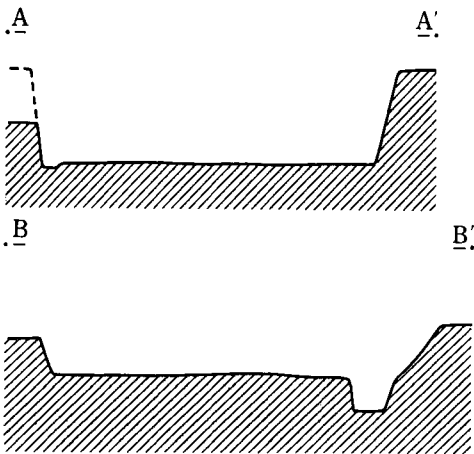
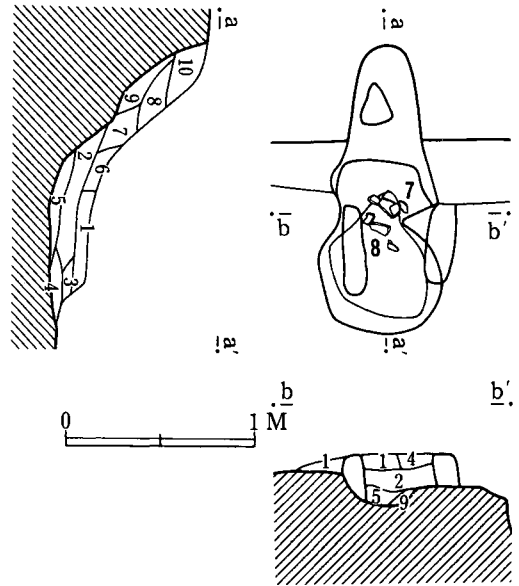
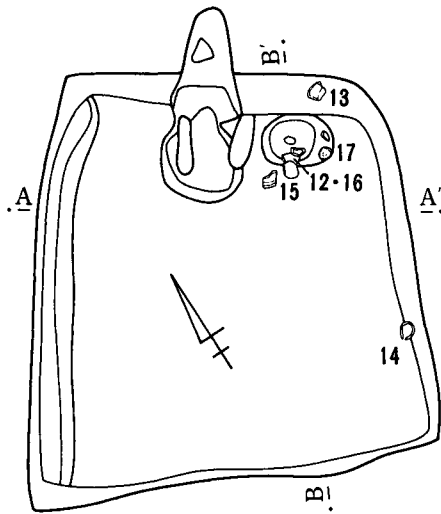
本住居址は調査区の南側に位置し、北から南へ傾斜する面に構築される。規模は北東壁で2.5m、南西壁で3.2m、北西壁で3.4m、南東壁で2.9mを測り、やや台形状のプランを呈す。カマドを通る主軸はN-34°-Eを示す。壁は軟弱で床面からほぼ垂直に立ち上がる。傾斜面に構築されるために壁高には大きな差があり、カマド付近で80cm、南側で25cm程を測る。壁溝は北西壁にのみ幅20cm、深さ5cm程で設けられる。床面は軟弱で中央部分が若干窪む。ピットはカマドの右側に1か所掘り込まれており、55cm×40cmの隅丸長形状を呈す。深さは26cmを測る。ピットの内部および周辺から土器が多量に出土していることから、貯蔵穴に相当する施設であろう。覆土は自然堆積で北側からの流入が著しい。

カマドは北東壁のほぼ中央に位置するが、天井部は崩落する。煙道部は壁を50cm程掘り込んで細く設けられる。燃烧部は略円形を呈すが、壁際で一旦くびれて煙道部へと続く。掘り込みはきわめて浅く、床面から5cmを測るのみである。袖部の遺存はあまり良好でないが、粘性の強い暗褐色土上に山砂を積みあげているようである。

遺物は比較的多く出土し、貯蔵穴およびカマド内に集中する。器種は坏・甕に限定される。

遺物 本址からの遺物は多く、図示した以外にも数個体の甕あるいは甗の口縁部がみられるが小片のため省略した。

5～8・10・11は甕で、5以外はあまり遺存は良好でない。口縁部のつくりはそれぞれ異なり、内彎ぎみに開くもの（5・7）、「く」の字状に外反するもの（8・10）、水平近くを開き、口唇部が直立するもの（6・11）に大別できよう。5・6の外面には叩き目がみられるが、部分的にナデにより磨消される。8・10・11は器肉がきわめて薄い。いずれも胎土・焼成とも良好で、色調は淡～暗褐色を呈す。12は小形甕の下半部であろう。底部はやや上げ底となる。内面にみられる起伏から、ロクロを利用して整形したことが窮える。胎土・焼成とも良好である。9は比較的小形の甗である。底部を欠損するが、その遺存状況から5孔を有す甗と思われる。「く」の字状に外



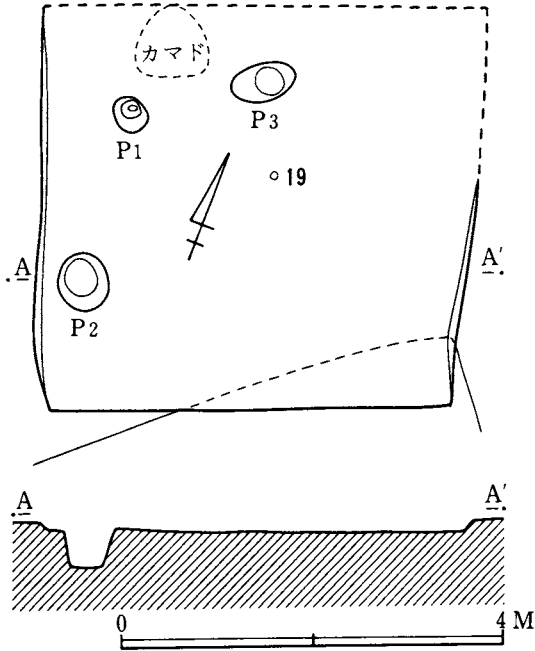
1. 暗褐色土層
2. 暗褐色土層(砂質, 焼土粒混入)
3. 黒褐色土層(粘土粒混入)
4. 褐色土層(ローム粒混入)
5. 黒褐色土層(ローム粒, 焼土粒混入)
6. 焼土層
7. 暗褐色土層(焼土粒混入)
8. 赤褐色土層(焼土粒混入)
9. 褐色土層(ローム粒混入)
10. 淡褐色土層

第149図 23号住居址・カマド実測図

反する口縁部は上方で肥厚し突帯状を呈す。口縁下には相対する2個のつまみが貼付される。叩き目はナデにより磨消され、下半部には横位のヘラ削りが施される。胎土に砂粒を含む。焼成は還元炎となり須恵器に近くなる。暗灰褐色を呈す。13~17は坏で、14・15・17はほぼ完形、13・16は½程の遺存である。底部は平底で、15・17がやや上げ底となる。体部は直線的に開く。体部はナデ調整が主で、下端に手持ちヘラ削りが施される。底部は15が静止糸切り、他はヘラ削りとなる。胎土・焼成とも良好であるが、二次的に火熱を受けたために器面の損傷が著しい。色調は暗~黒褐色を呈す。

26号住居址 (第150・152図)

本住居址は調査区の北側に位置し、17号住居址の上面を一部切って構築される。上面はほとんど削平される。平面プランは略正方形を呈し、規模は4.6m×4.2mを測る。カマドを通る主軸は



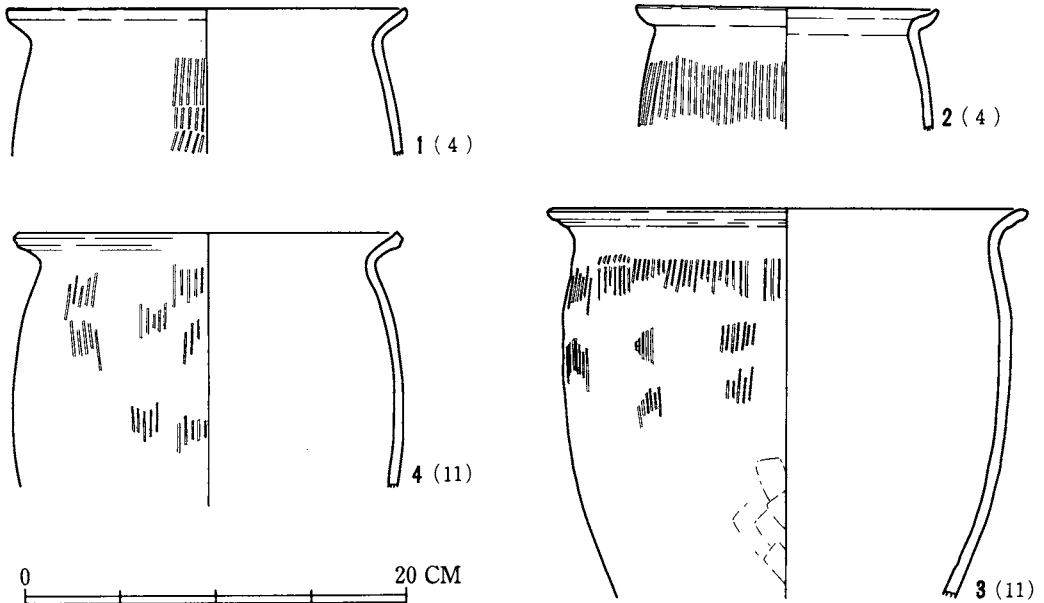
第150図 26号住居址実測図

N-19°-Wを指す。壁はほとんど削平され、壁溝は検出されなかった。床面はあまり良好ではないが、中央部分は比較的踏み固められている。レベルは北東方向に若干傾斜する。ピットは3か所検出され、P1が深さ76cm、P2が38cm、P3が24cmを測る。

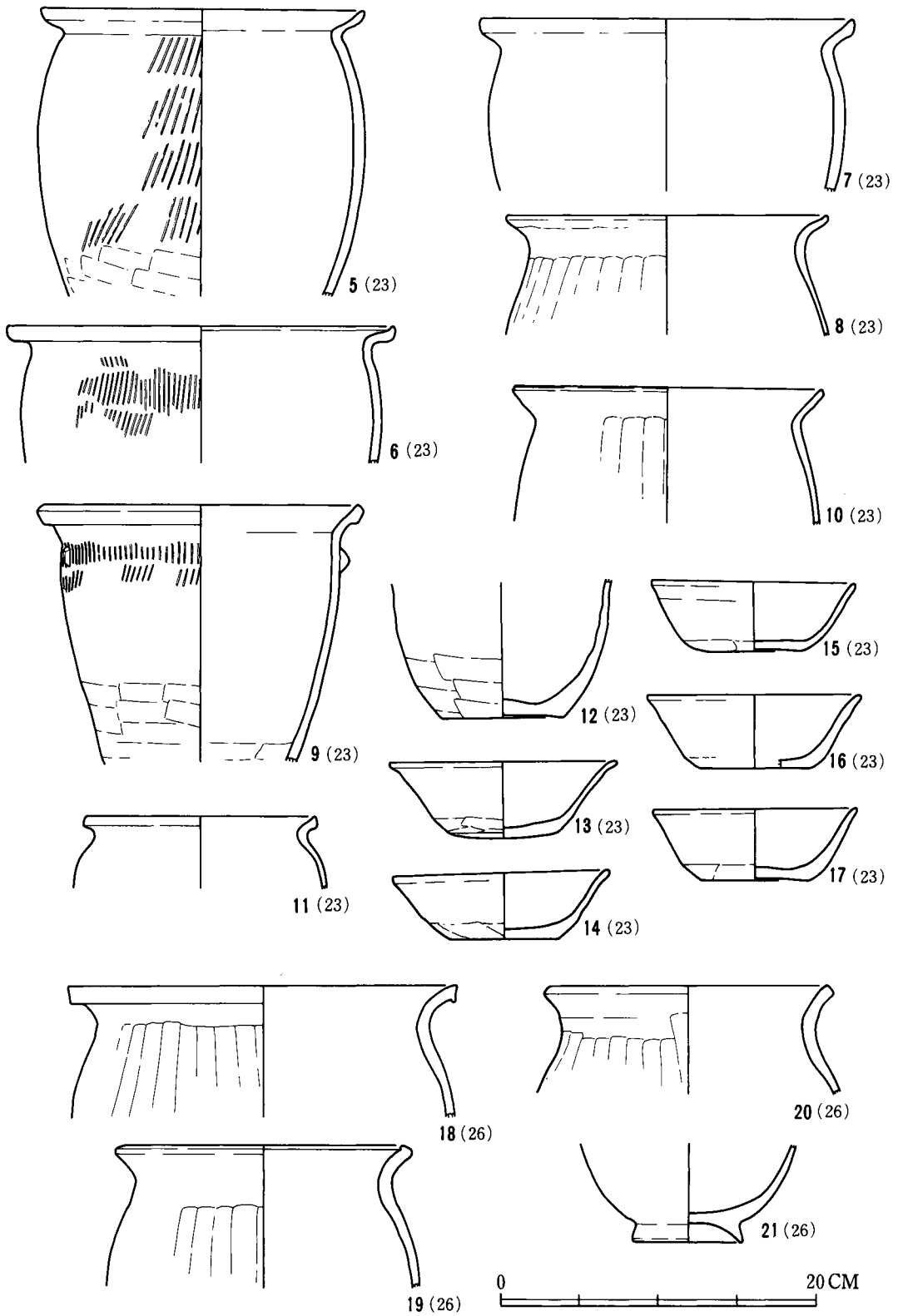
カマドは北西壁の東側寄りに位置するが、削平されるため詳細は不明である。遺物も少なく、底面およびカマド内から甕・壺が出土したのみである。

遺物 18~20は甕の口縁部から胴部にかけての部分である。図の1/4程遺存する。口径より胴部最大径が大きくなる。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は平坦になるがそれぞれつくりが異なる。調整はほぼ

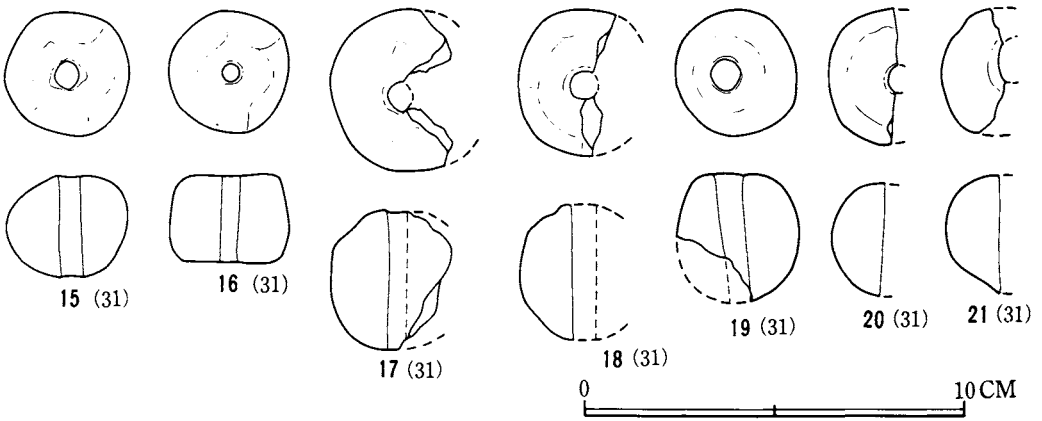
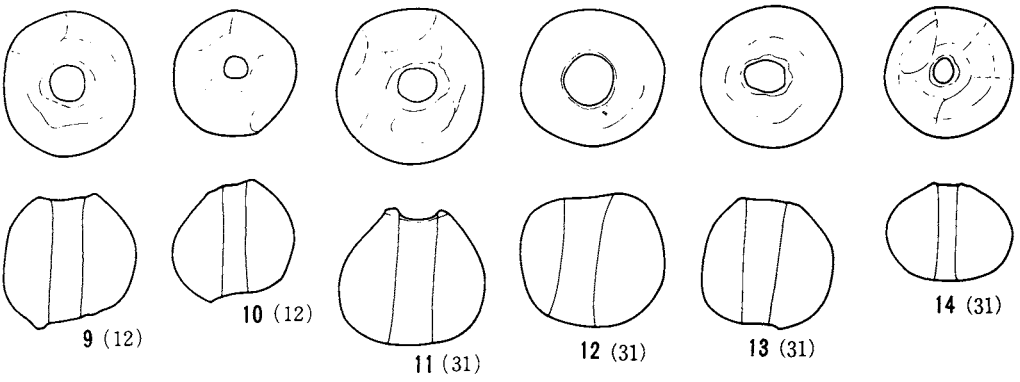
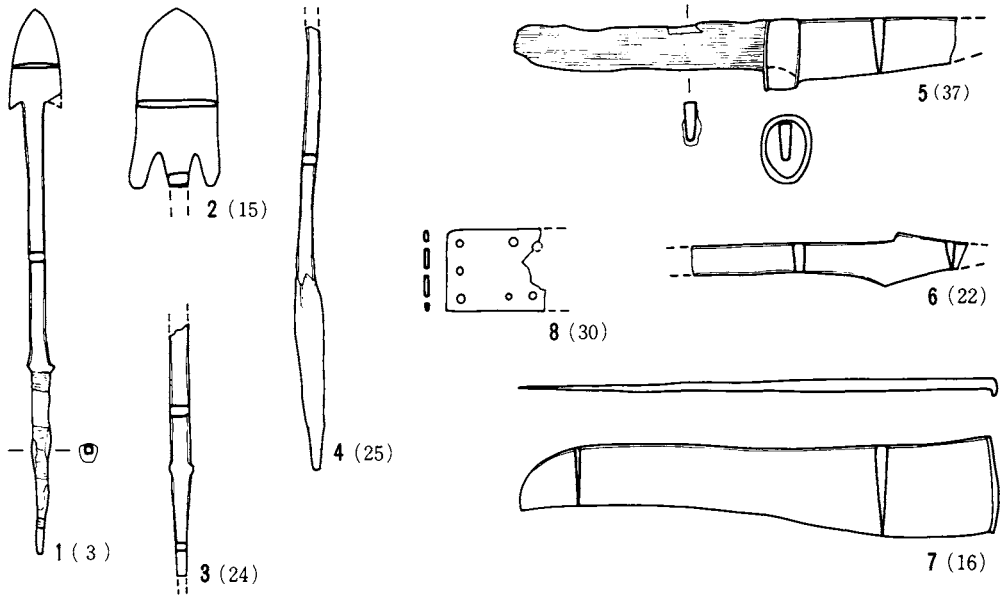
同様である。胎土・焼成とも良好で明褐色を呈す。21は高台付きの壺であろうか。図示の1/2程遺存する。体部は半球形を呈し、高台部は先細りとなる。二次的に火熱を受けたため器面の荒廃が著しい。



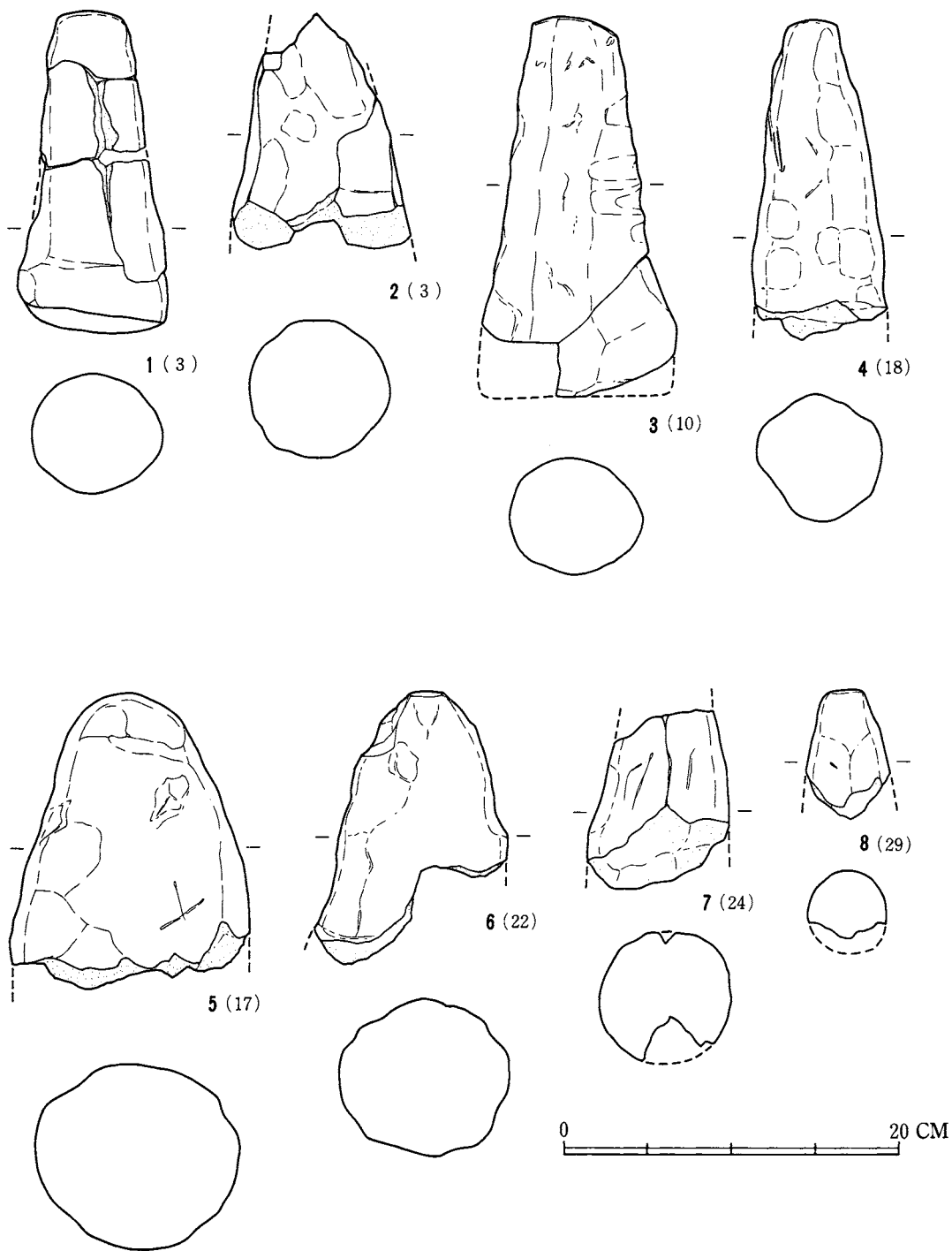
第151図 住居址出土土器実測図(1)



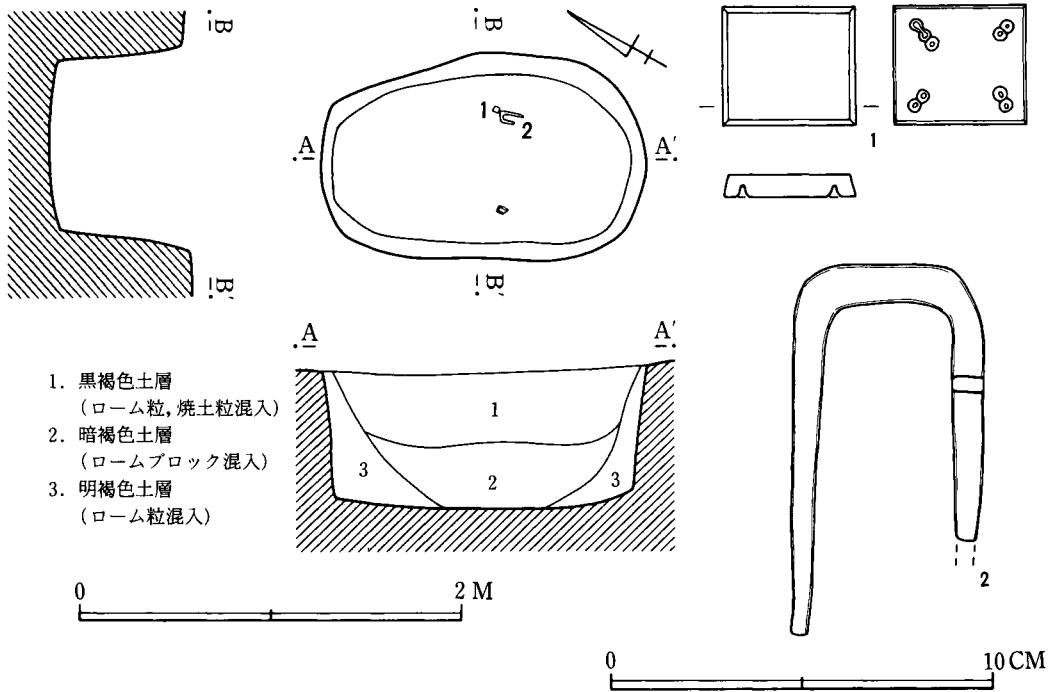
第152图 住居址出土土器実测图 (2)



第153图 住居址出土鉄製品・土玉実測図



第154图 住居址出土支脚实测图



第155図 13号址・出土遺物実測図

2. 土 壇

13号址 (第155図, 図版61・75)

本址は調査区の北西端で、11号住居址の北東6m程に位置する。平面形は長軸1.7m、短軸1.1mを測る隅丸長形状を呈す。確認面からの深さは0.7mを測る。底面はほぼ平坦で堅緻である。壁は底面から垂直に立ち上がり遺存は良好である。覆土は自然堆積の状況を呈す。土層は3層に分かれ、各土層中にローム粒が混入する。

遺物 本址から出土した遺物は少ないが、底面から石帯、鏃、土師器の坏片の3点が検出された。土師器片は少片のため図示し得なかったが、ロクロ整形となるものである。1は滑石系統の材質の石帯で、巡方となる。長辺35mm、短辺31mm、厚さ6mmを測る。断面は台形を呈す。裏側には紐を通す孔が2個1対で四隅に穿たれるが、図の左上のみ、孔の破損により内側にさらに一つの孔が設けられている。表面および側面はきわめて丁寧に研磨されており、黒色を呈し光沢を有す。側面と裏面の間には若干面取りが施される。2は鉄製の鏃で先端部を欠損する。「コ」の字状に折り曲げられ断面は長方形を呈す。木質の付着は観察されなかった。表面および側面と裏面は仕上げの段階で異なっており、裏面には擦痕が残ったままであるが、他には何度か仕上げを施したようで、きわめて良好な感を呈している。本遺物が土壇内より出土したという点に注目しておきたい。

第5節 小 結

1

本遺跡は、住居址内から出土した土器等からみると、鬼高期を中心とした集落であることが明瞭である。計28軒検出された住居址の时期的な内訳は、鬼高期24軒、国分期4軒ということになる。東南部地区における鬼高期の集落はそれ以前に比較して爆発的に増大する。和泉期以前の集落としては、南二重堀遺跡^{*}(伊藤1983)、馬ノ口遺跡においてみられるのみであるが、鬼高期になると有吉遺跡^{**}(種田他1975)、椎名崎遺跡^{***}(上村1979)では大集落が形成され、他にもいくつかの集落が確認されている。該期における集落の増大は、その時期が6・7世紀の200年にも及ぶことから窺えるが、背景には鉄製品の普及等社会環境の変化によるものが大きな影響を与えていることは周知の事実である。本遺跡はその膨大な鬼高期集落の1つであるに過ぎないが、ここでは住居址内の出土土器を検討して、本集落が鬼高期のどの時期に形成されたのかを考えてみたい。

2

そこでまず、住居址内から出土した土器を検討することによりその位置づけを試みてみたい。前述したように、本遺跡から出土した土器をみれば集落が鬼高期と国分期に形成されたことは明確であるが、主体を占める鬼高期の住居址はかなり隣接したものも存在しており、同時に形成されたとは考えられず、ある程度の時間差がそこに存在しているはずである。そこでここでは、鬼高期を便宜的に第Ⅰ～Ⅲ期に区分し、国分期を第Ⅳ期として説明し、伴出する須恵器からその実年代を明らかにしていきたい。ただし、21・38号住居址は遺物がほとんど確認されなかったために時期の確定は困難であるが、わずかに出土した土器の小片からみると鬼高期に相当するようである。

第Ⅰ期 該期の住居址として3・15・16・19・24号住居址があげられる。この中で最も古い時期は15号住居址であろう。土器の量はあまり多くないが、2点出土した高坏は坏部に稜をもたないものであり、坏にしても半球形を呈すものが多く、いわゆる須恵器を模倣した坏の出現をみない段階である。これに続くのが3・16・19・24号住居址である。攪乱の著しい19号住居址を除いていずれも土器の出土量が著しい。甕・甗・高坏・坏を基本的なセットとしている。甕は胴部が全体に球形を呈しながらも長胴化する傾向が強くなり、特に3号住居址で著しい。甗の出土数は少ないが、24号住居址例は非常に安定した形づくりもきわめて丁寧である。後にみられるような長胴化したものではなく、先行する形態であろう。坏は形態が多様化し、1つの住居址内に混在するようになる。以上の点からみれば、15号住居址以外は次の段階の第Ⅱ期へ移行する様相を

* 伊藤 智樹 他 1983『東南部ニュータウン』12—南二重堀遺跡

** 種田 齊吾 他 1975『東南部ニュータウン』3—有吉遺跡(第一次) —

*** 上村 淳一 他 1979『東南部ニュータウン』6—椎名崎遺跡—

むものであり、土器群を比較してもそれほど時間的な差を有すものではない。ここでは一応、甕と甗の形態的差異をもって第Ⅰ期のメルクマールとしたい。

第Ⅱ期 該期は住居址の数が増大し、1・8・12・14・17・18・20・22・28・30・33号住居址の11軒を数える。この時期は、第Ⅰ期から続く甕、甗の長胴化が顕著になり、さらに須恵器模倣の坏が主体を占めてくるのが特徴である。さらに12号・30号住居址には須恵器の坏蓋および坏身が伴出している。この須恵器はいずれも6世紀の後半に位置づけられるものであり、該期の実年代をおよそこの辺に適合することが可能である。もちろんこの時期にも第Ⅰ期および後出の第Ⅲ期に相似する土器が含まれていることは当然である。

第Ⅲ期 この時期には住居数の減少が目立ってくる。10・25・27・29・31・37号住居址があげられる。各住居址とも土器の出土量が少なく、時期の決定には困難を伴うが、定形化した長胴甕を含むものをこの期のメルクマールとした。さらに、31・37号住居址には須恵器の坏身および坏蓋が伴出しており、7世紀の前半から中葉の範疇と思われる。また29号住居址出土の坏は、真間期における盤を連想させるものであり、本期のなかでは最も後出のようである。

第Ⅳ期 第Ⅲ期との間に空白期間をもって形成される国分期の集落で、4・11・23・26号住居址がこれに当たる。遺物は23号住居址において数多く出土した。4・11・23号住居址は、叩き目をもつ甕および甗を含む点で共通しており、さらに23号住居址出土の坏類は、底部がヘラ削りとなっている点で26号住居址の甕および高台をもつ碗よりは前出であろう。

3

本遺跡の集落は以上のようにⅣ期に区分されるのであるが、第Ⅳ期の国分期は別としても、第Ⅰ～Ⅲ期の鬼高期はそれ程時間的差がないこと、さらに伴出須恵器よりⅡ期が6世紀後葉、Ⅲ期が7世紀前～中葉に比定されることからすれば、本遺跡の鬼高期の集落は7世紀を中心として前後四半世紀に形成されたことが想定されよう。

次に各期の住居址の立地および形態について触れてみたい。まずその立地からみると、Ⅰ・Ⅱ期は中央に空白場所をもってそれを取り囲むような配置の状況を呈している。これに対し、第Ⅲ期は10号住居址が1軒だけ離れている以外は、台地のつけ根部分に片寄る傾向が強くなっている。ただし、調査範囲が台地全体に及ぶものではなく、住居数の増加が考えられることからすれば、これらに若干の変化が生じる可能性はきわめて強いであろう。住居址のプランはすべて正方形で、鬼高期の他の遺跡でみられるようなカマド対壁の張り出しは認められなかった。大きさは1辺4m～9m程の範囲に含まれるが、時期的に概観すれば、第Ⅰ期から第Ⅲ期へ移行するに従いその規模を小さくする傾向がみられる。特に1辺8mを超す大形の住居址は3・16・17・22号住居址で、これらは第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけての移行期のものである。

カマドは国分期を除いてすべて北西壁の中央に設けられており、その格一性がうかがわれるが、

主軸方向をみでみると若干バラつきが生じる。このバラつきが時期によって区別されることはないようである。貯蔵穴は鬼高期において一般的に設けられるものであるが、本遺跡の場合半数の住居址には認められなかった。住居址内の貯蔵穴の位置は、カマド右コーナー付近のもの3軒、カマド右側のもの7軒、カマド左側のもの3軒となっている。カマドの対壁近くに存在するものはなく、この点からも本遺跡の鬼高期集落が比較的新しく位置づけられることが想定される。柱穴は床面の対角線上に4本配することを基本とし、カマド対壁の柱穴間に第5ピットをもつ例も多い。さらに3号住居址のように主柱穴に対する補助柱穴をもつ例もみられる。

4

以上のような様相をもとに本遺跡の集落を整理してみよう。住居址内出土の土器から本集落は、大まかに言えば鬼高期と国分期に大別される。そのうち大半が鬼高期となる。鬼高期は土器の検討により3つの段階に区分されるものの大きな差はなく、7世紀を中心とした比較的短い期間に形成されたようである。これは住居址の形態でも時期別にそれほど差がないことからうかがわれる。

これ以後は真間期を空白期間として国分期の集落が形成される。この時期は調査区の北西側に伸びる可能性が大きく、あるいはもっと大きな国分期の集落が存在していたかもしれないし、欠落する真間期の住居址が含まれていた可能性もある。

表3 有吉南遺跡検出遺構一覧表

遺番	構号	遺構名	時代	備考
1		住居址	古墳時代	
2		—	—	欠番
3		住居址	古墳時代	4号住居址と重複
4		住居址	歴史時代	
5・6		—	—	欠番
7		炉 穴	縄文時代	
8		住居址	古墳時代	
9		—	—	欠番
10		住居址	古墳時代	
11		住居址	歴史時代	
12		住居址	古墳時代	
13		土 坎	歴史時代	
14		住居址	古墳時代	
15		住居址	古墳時代	
16		住居址	古墳時代	
17		住居址	古墳時代	26号住址と重複
18		住居址	古墳時代	
19		住居址	古墳時代	

遺番	構号	遺構名	時代	備考
20		住居址	古墳時代	
21		住居址	古墳時代	
22		住居址	古墳時代	
23		住居址	歴史時代	
24		住居址	古墳時代	
25		住居址	古墳時代	
26		住居址	歴史時代	
27		住居址	古墳時代	
28		住居址	古墳時代	30号住居址と重複
29		住居址	古墳時代	
30		住居址	古墳時代	
31		住居址	古墳時代	
32		—	—	欠番
33		住居址	古墳時代	
34~36		—	—	欠番
37		住居址	古墳時代	
38		住居址	古墳時代	

終章 結 語

前述したように本書は、計3か所の調査報告書であり、それぞれの遺跡で特色のある遺構・遺物が検出された。

まず、バクチ穴遺跡はその小字名から希有な感を呈していた。これを地元の古老に聞くとバクチは馬口に通じるようであり、古来から馬との強い関連があったらしい。その証拠として、当地区には馬ノ口と言う字名も所在しているところからあながち否定はできまい。さて、調査の結果はといえば、本遺跡は全体から見れば約 $\frac{1}{3}$ の面積を調査したにとどまったが、きわめて多岐にわたる遺構・遺物が検出された。つまり先土器時代から縄文・弥生・歴史の各時代にわたっていた。ここでそれらの特徴について見ると、先土器時代ではG・Hユニット間の石器の移動には強く興味を引かれたし、縄文時代の前期初頭に位置づけられる花積下層式土器は遺構内から単独出土とは言え、器形まで把握できた貴重な類例と見做される。とりわけ当地区の調査においては前期初頭の遺物がほとんど認められなかったため良好な資料ともなり得た。そして、もう一つの事例として3点の珧状耳飾をあげることができる。いずれも土坑から出土し、伴出土器が存在しないため時期を限定することはできないが、おそらく前期の諸磯期に属するものと思われる。その優雅な作りは耳飾の極致に達したものと言えよう。ただ、本遺跡は約 $\frac{2}{3}$ 近い部分が未調査であるため次回の調査では不明部分を補うことができるかもしれない。

次に有吉遺跡（第3次）の調査結果であるが、これは主体が古墳時代後期に属することは前回の調査結果の報告からも窺われる。いわゆる鬼高期の一大集落であり、古墳群及び隣接して位置する高沢遺跡（昭和56・57年度調査）などとの関連で把えなければなるまい。しかも第四次調査約5,000m²を残しているため、全域調査が終了した時点で若干の考察を加えてみたい。その他の事例としては弥生期の集落が検出できた。すべて後期に属しているところから一時期の集落を構成していたものと思われる。この点、当地区の報告書12で述べた南二重堀遺跡よりも古い段階にあたるためその空白部分を埋めることのできる資料として注目したい。他には縄文時代の早期から前期にかけて多量の遺物が検出されている。遺構としては炉穴が検出されたにすぎず、この点、バクチ穴遺跡ほどバラエティーはないものの土器群の様相を把握するうえで一応の成果はあったものと考えられる。

最後に有吉南遺跡について見ると、ここでも古墳後期の鬼高期が主体となっており、他に若干の国分期の住居址で遺跡が構成されていた。とりわけ豊富な鬼高期の住居址は整然と配置され、広範に拡大するものと推定できた。一つの集落を全域網羅することはできなかったものの一部遺構の重複関係や配置及び土器の様相から三段階に時期区分し、当地区での鬼高期の変遷について考えてみた。もちろん本遺跡だけでは十分とは言えないが、今後の出土資料をもとにしてより詳細な土器群の変化を把えてみたい。

Chiba-Tōnanbu New Town No. 14

Contents

Preface

Explanatory Notes

Chapter I Site and Background

Chapter II Bakuchi-Ana Site

Section 1 Progress and method of excavation

Section 2 Artifacts of Preceramic Age

Section 3 Features and Artifacts of Jōmon Age

Section 4 Features and Artifacts of Yayoi Age

Section 5 Features and Artifacts of Nara-Heian Age

Section 6 Completion

Chapter III Ariyosi Site (The third investigation)

Section 1 Progress and method of excavation

Section 2 Features and Artifacts of Jōmon Age

Section 3 Features and Artifacts of Yayoi Age

Section 4 Features and Artifacts of Yayoi Age

Section 5 Features and Artifacts of Nara-Heian Age

Section 6 Completion

Chapter IV Ariyosi-Minami Site

Section 1 Progress and method of excavation

Section 2 Features and Artifacts of Jōmon Age

Section 3 Features and Artifacts of Kofun Age

Section 4 Features and Artifacts of Nara-Heian Age

Section 5 Completion

Final Chapter Conclusions

写真図版

バクチ穴遺跡

1. 遺跡遠景(北から)



2. 遺跡近景調査前
(B区)



3. 遺跡近景調査前
(A区)





バクチ穴遺跡

1. 先土器時代ユニット
(G区)遺物出土状況



2. 先土器時代ユニット
(H区)遺物出土状況



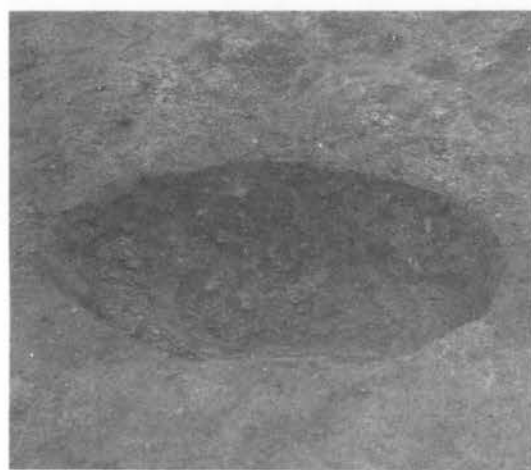
3. 先土器時代ユニット
(K区)遺物出土状況



1. 5号住居址全景



2. 5号住居址遺物出土状況



3. 4号住居址炉址全景(左)

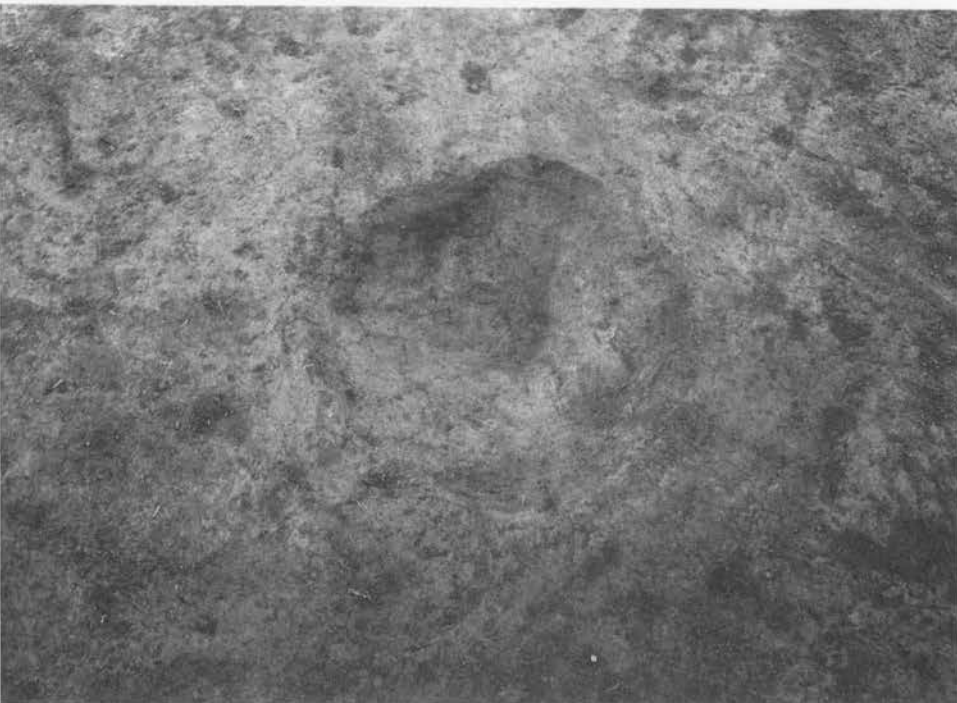


4. 4号住居址遺物出土状況(右)



バクチ穴遺跡

1. 8号住居址炉址内遺物出土状況(右)
2. 40-B号址遺物出土状況(左)

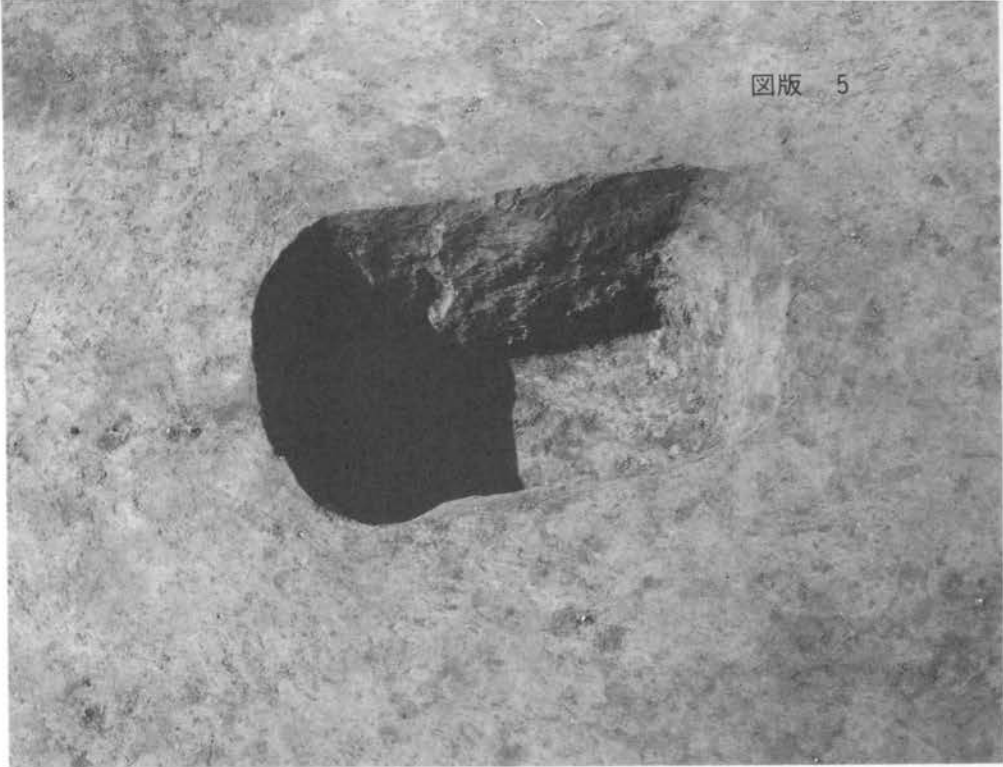


3. 15号址全景



4. 15号址遺物出土状況

バクチ穴遺跡



1. 28号址全景

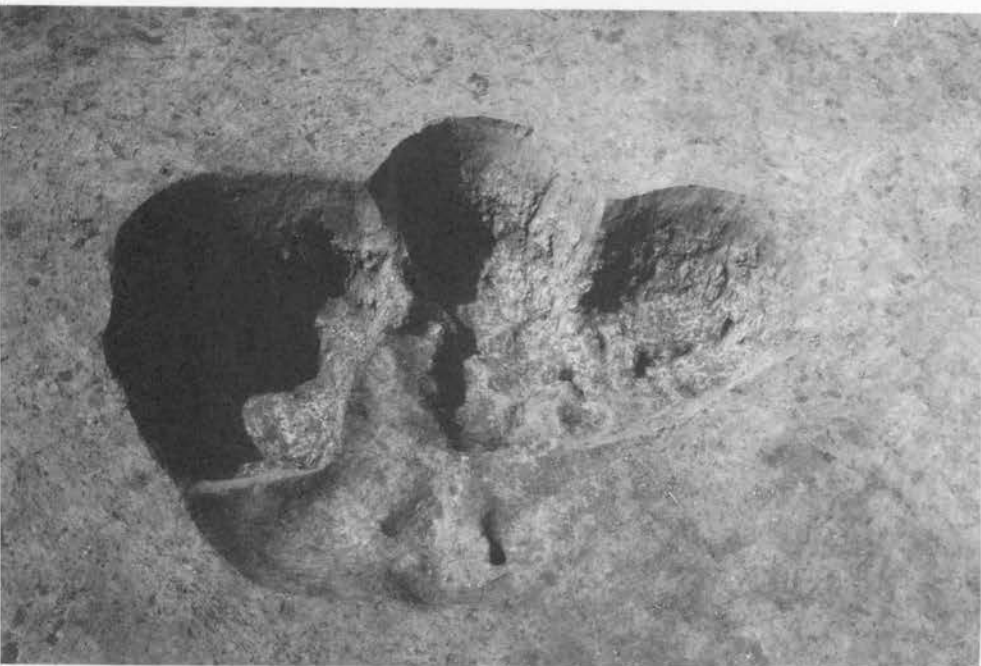


2. 28号址遺物出土状況

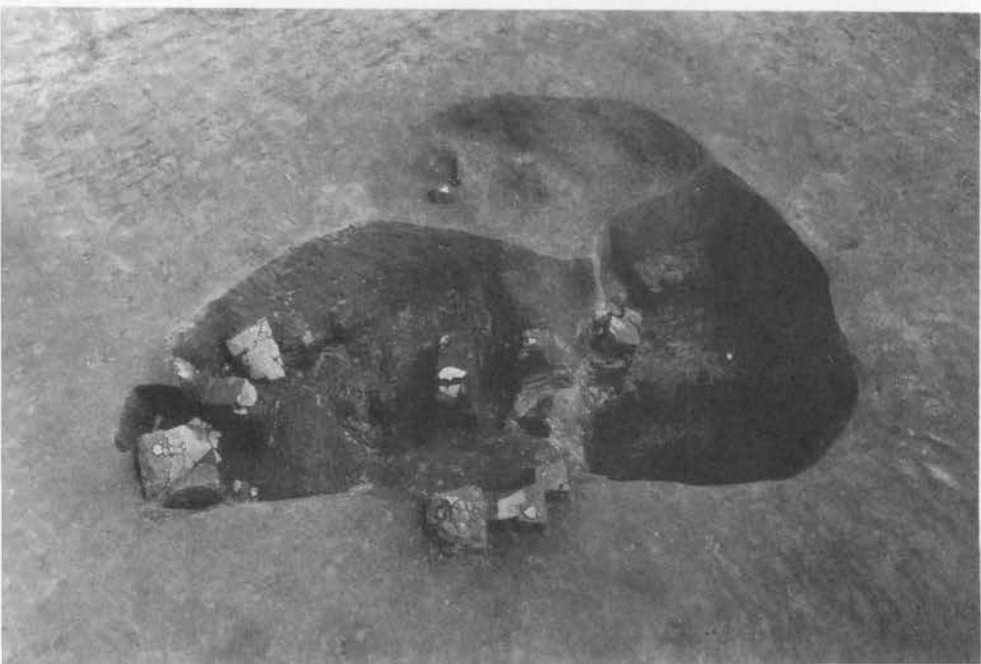


バクチ穴遺跡

1. 21号址全景



2. 33号址全景

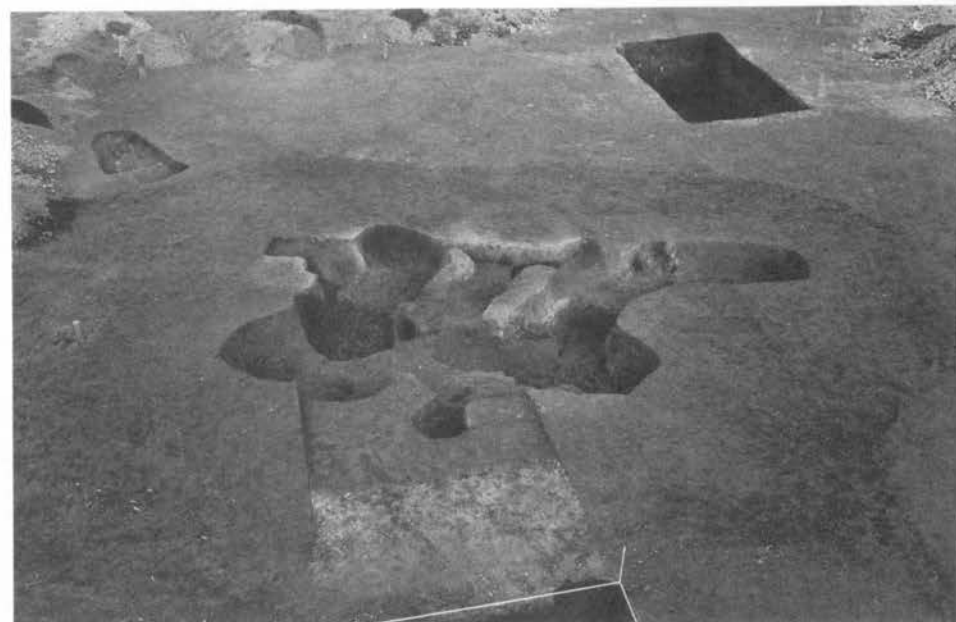


3. 33号址遺物出土状況

バクチ穴遺跡



1. 38号址全景



2. 45号址全景

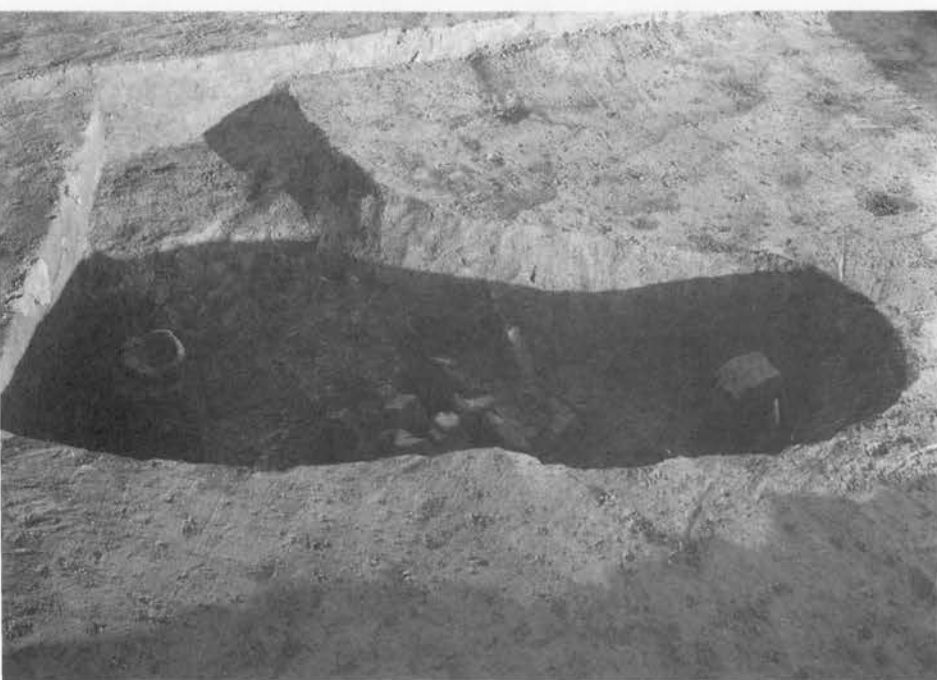


3. 45号址遺物出土状況

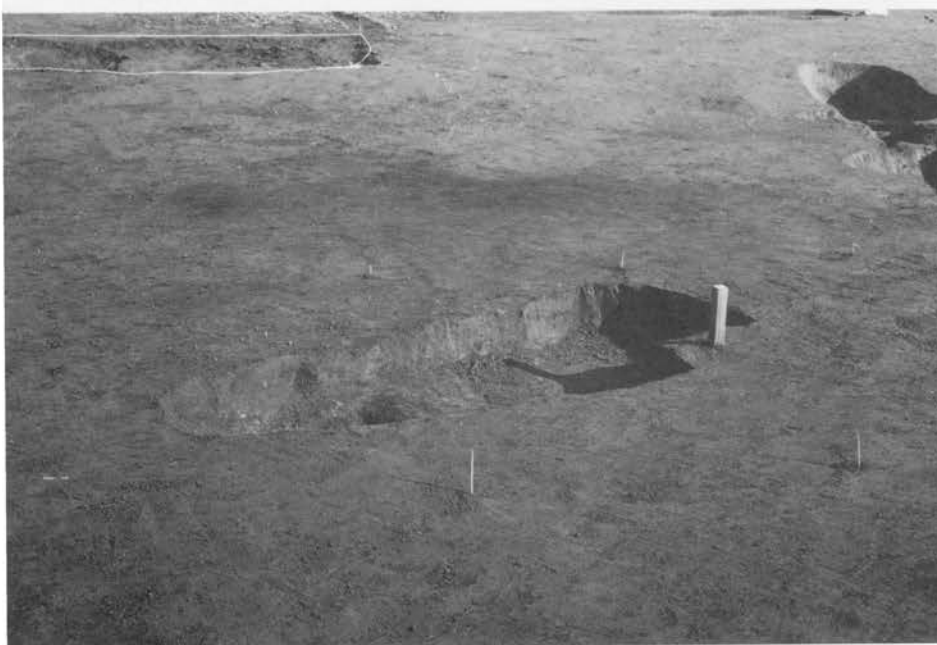


バクチ穴遺跡

1. 56号址全景



2. 56号址遺物出土状況



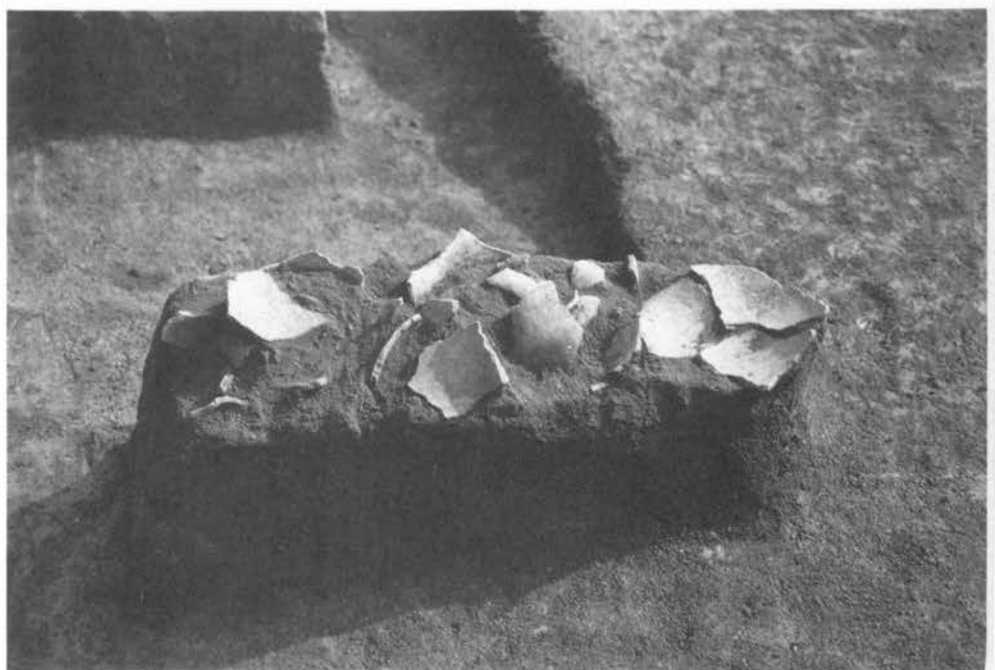
3. 58号址全景

バクチ穴遺跡

1. 11号住居址全景



2. 11号住居址遺物出土状況



3. 6号住居址全景



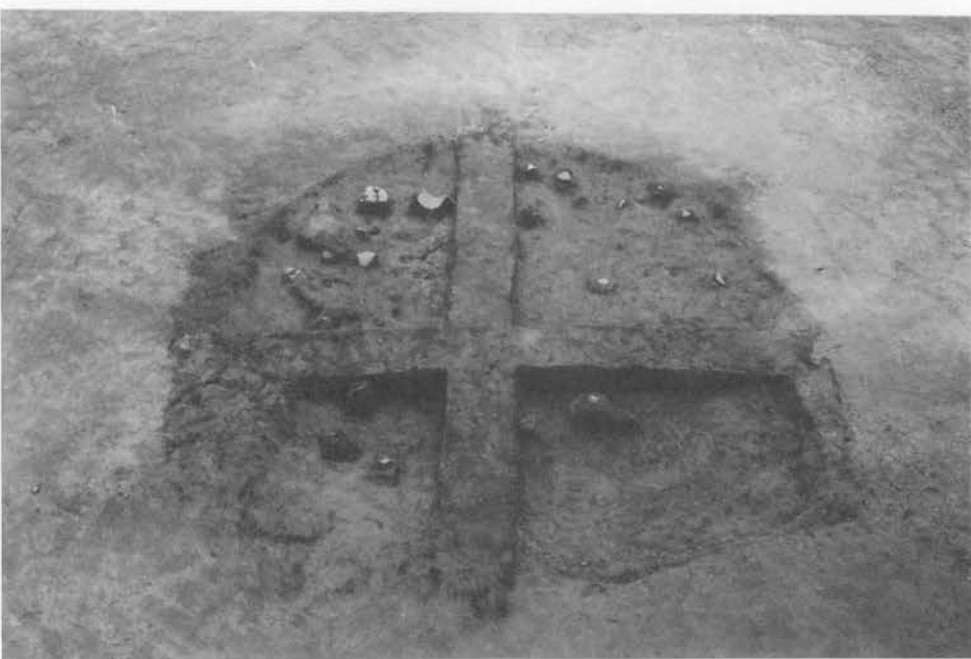


バクチ穴遺跡

1. 10号住居址全景



2. 10号住居址遺物出土状況(カマド内)



3. 25号住居址遺物出土状況

バクチ穴遺跡



1. 40号住居址全景



2. 52号住居址全景



3. 40号住居址遺物出土状況(左)



4. 52号住居址遺物出土状況(右)



1. 54号住居址全景



2. 41・43・44・46・47号址全景



3. 41・43・44・46号址全景

バクチ穴遺跡



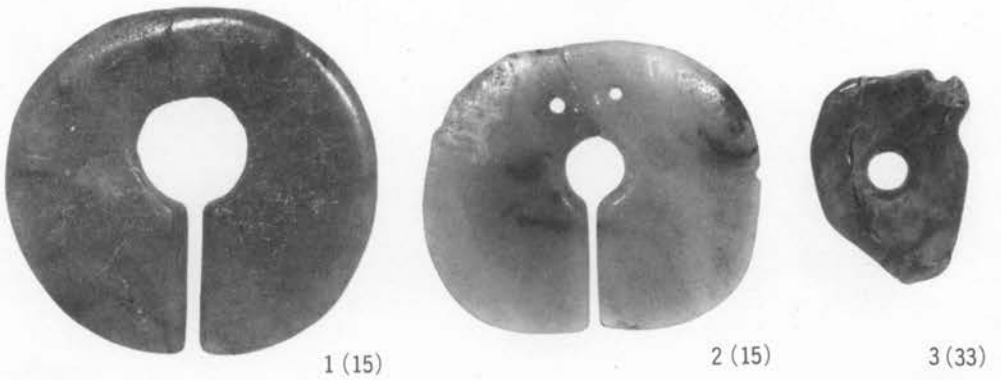
1. 先土器時代石器



2. 先土器時代石器



1. 先土器時代石器



2. 土壇出土遺物(15・33号址)

バクチ穴遺跡



1 (33)



2 (33)



6 (45)



3 (39)



7 (56)



39~41 (56)

炉穴出土土器(33・39・45・56号址)



10(28)



11(40-B)



13(4)



14(4)



15(5)



16(5)

住居址(4・5号住居址), 土塚(28・40-B号址) 出土土器

バクチ穴遺跡



18(5)



20



19(5)



22



17(5)



29



21



26

住居址(5号住居址), 包含層出土土器



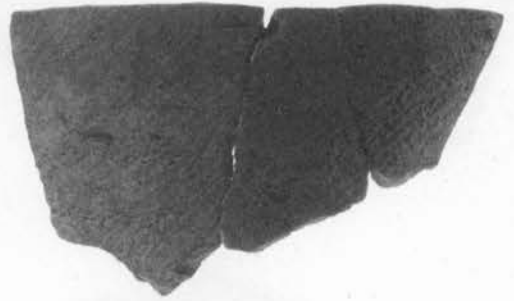
27



24



23



25



1 (11)



2 (11)

住居址(11号住居址), 包含層出土土器

バクチ穴遺跡



住居址出土土器(7・10・25・40・52・54号住居址)



1. 遺跡全景(南から)



2. 航空写真



航空写真



有吉遺跡(3次)

1. 27号址全景

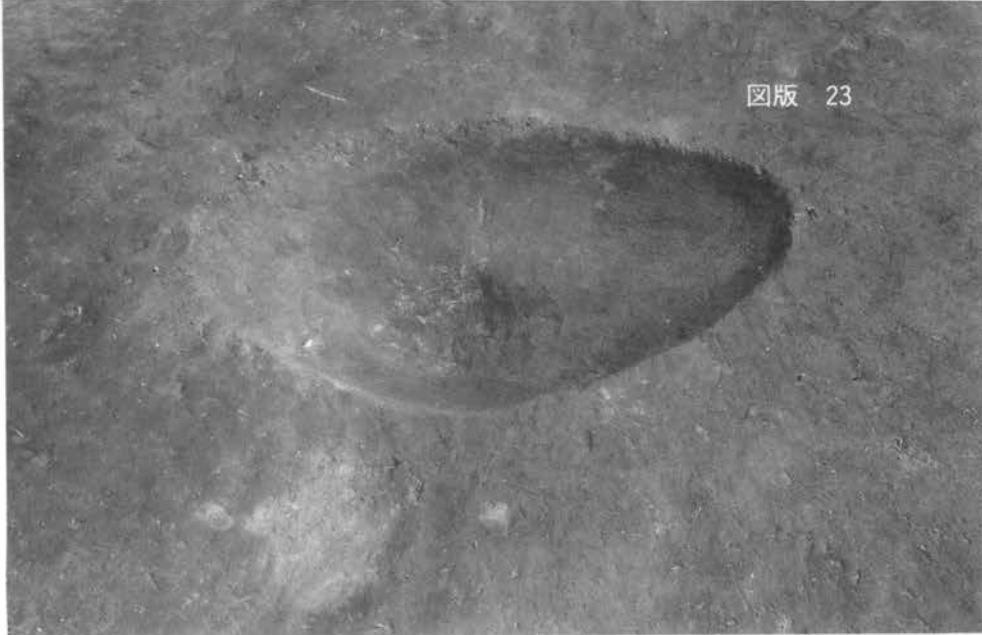


2. 44号址全景



3. 45号址全景

有吉遺跡(3次)



1. 47号址全景

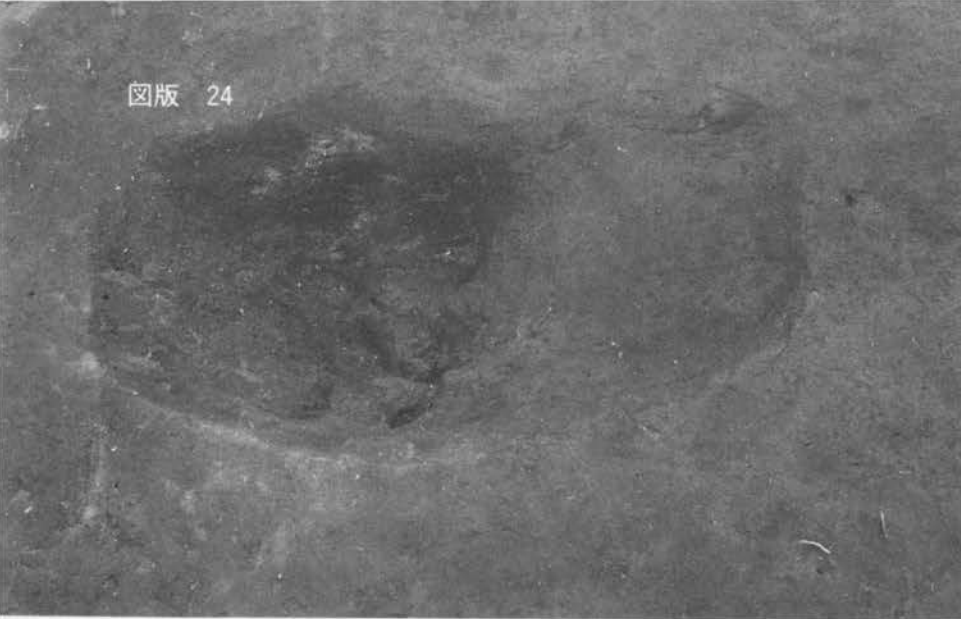


2. 48号址全景



3. 49号址全景

有吉遺跡(3次)



1. 53号址全景

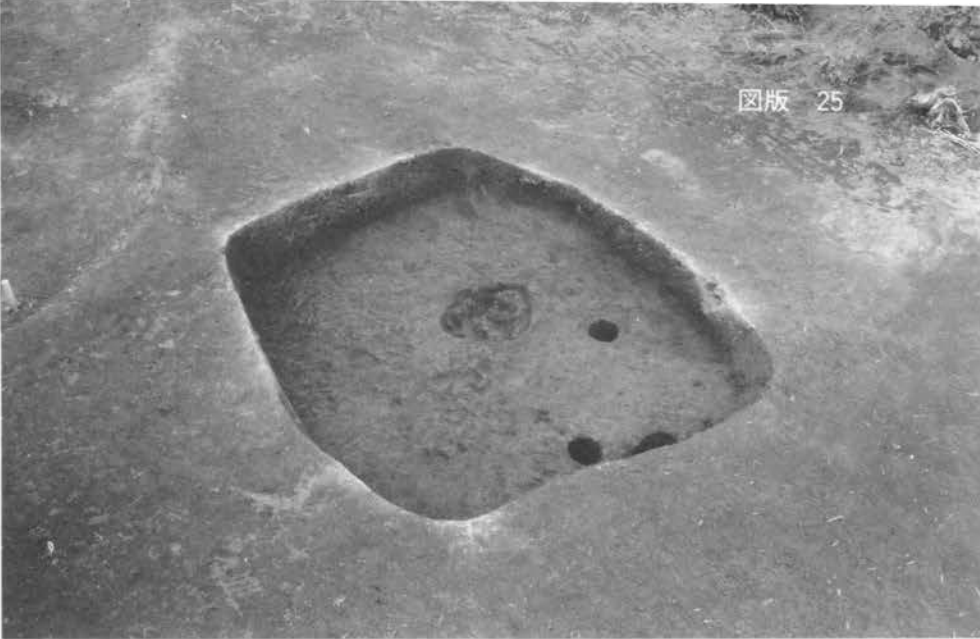


2. 11号住居址全景

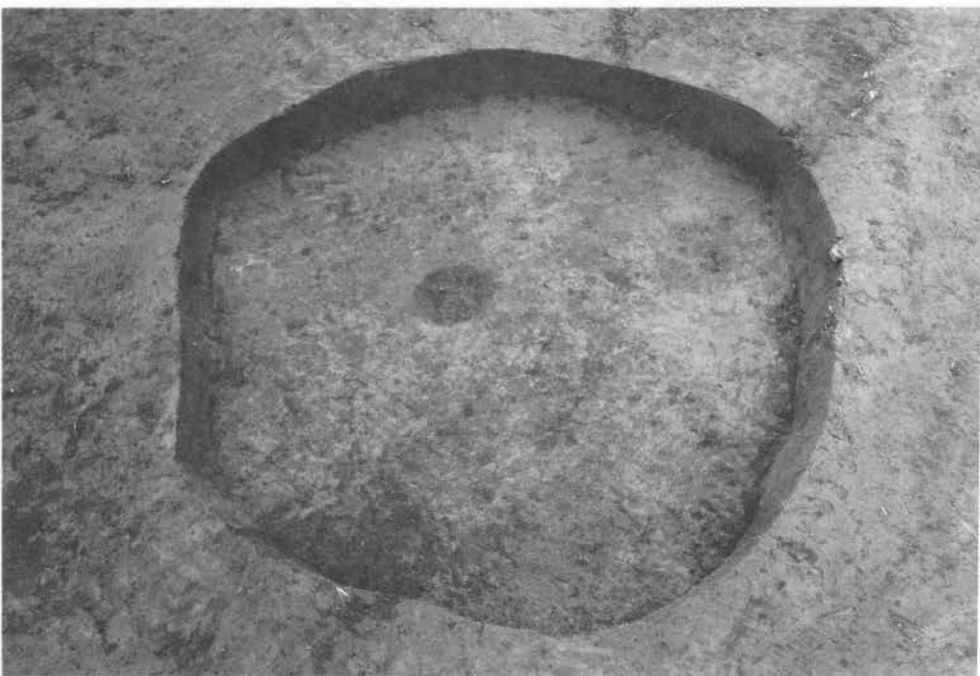


3. 11号住居址遺物出土
状況

有吉遺跡(3次)



1. 12号住居址全景



2. 13号住居址全景



3. 13号住居址遺物出土
状況



1・2号墳調査後全景

有吉遺跡(3次)



1. 1号墳調査前全景

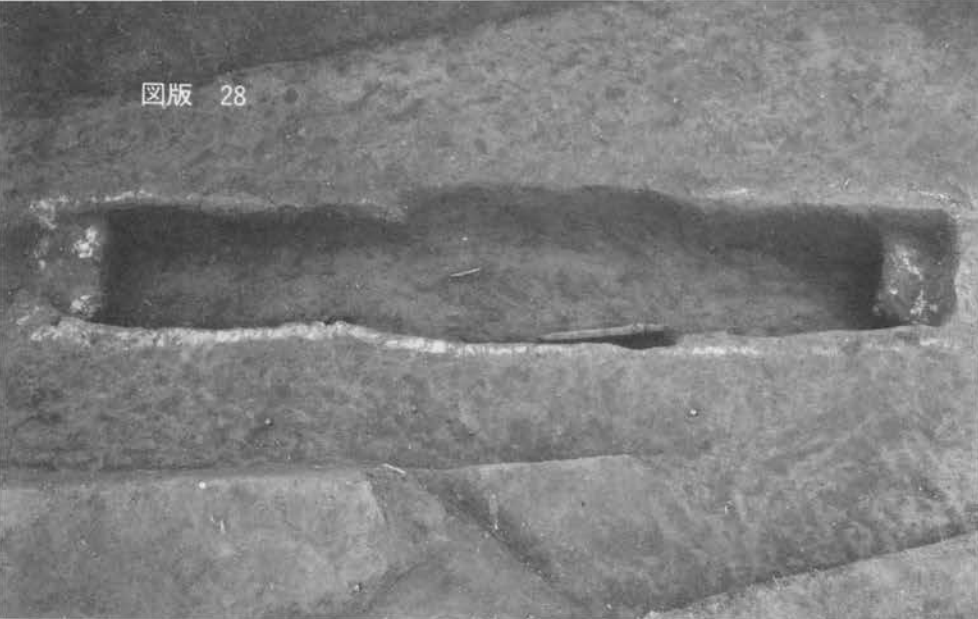


2. 1号墳調査後全景



3. 1号墳墳丘断面

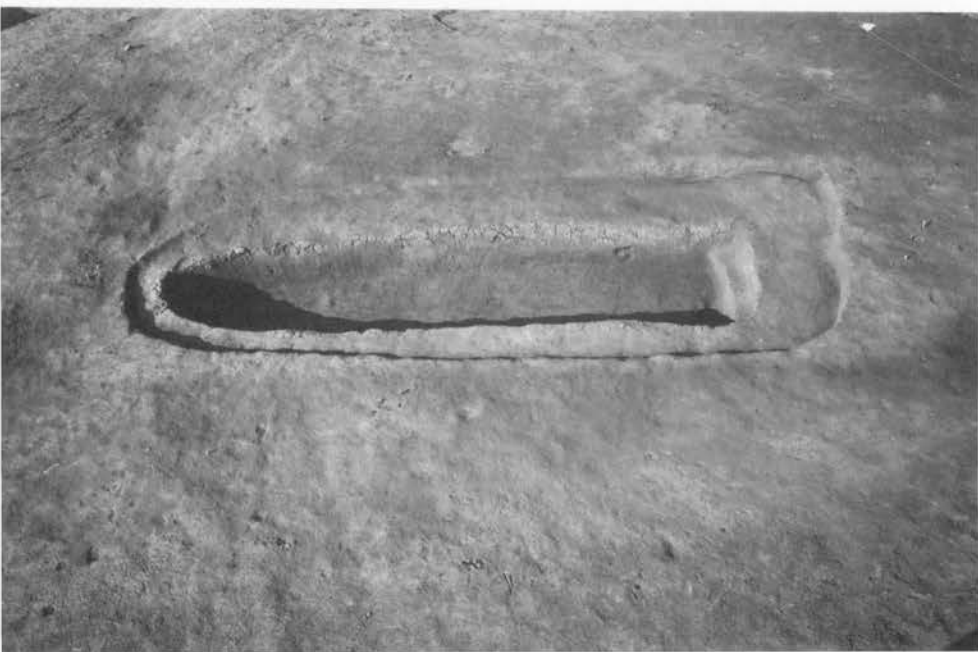
有吉遺跡(3次)



1. 1号墳第1主体部遺物出土状況



2. 1号墳第1主体部掘り方



3. 1号墳第2主体部全景

有吉遺跡(3次)



1. 1号墳第2主体部掘り方

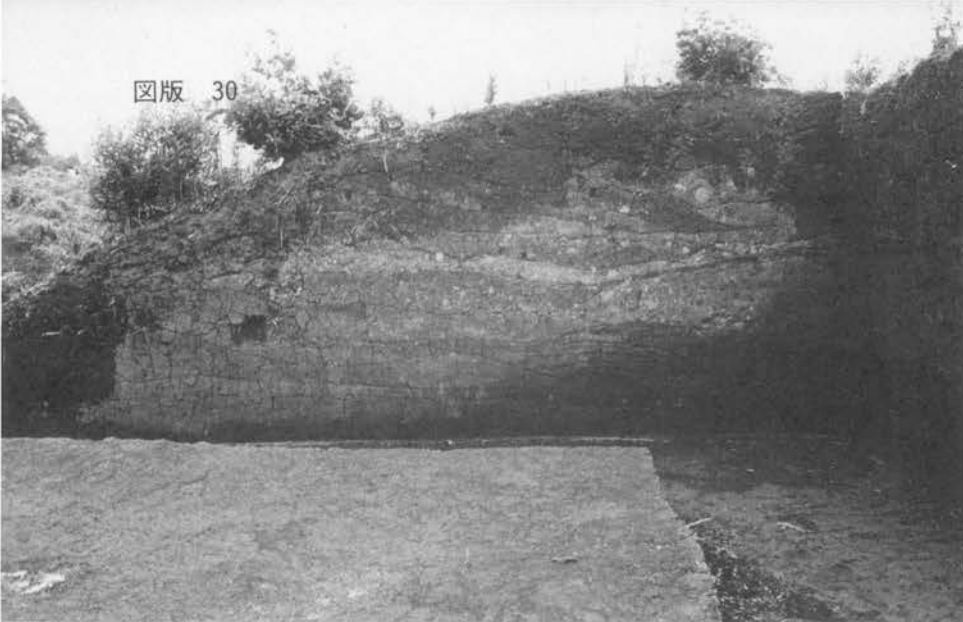


2. 2号墳調査前全景



3. 2号墳調査後全景

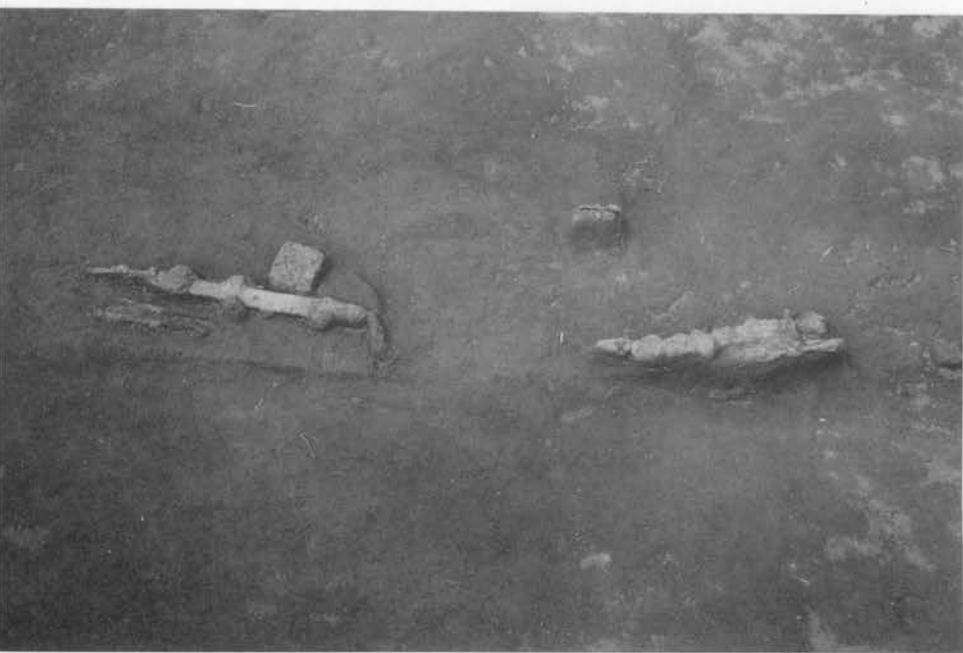
有吉遺跡(3次)



1. 2号墳墳丘断面

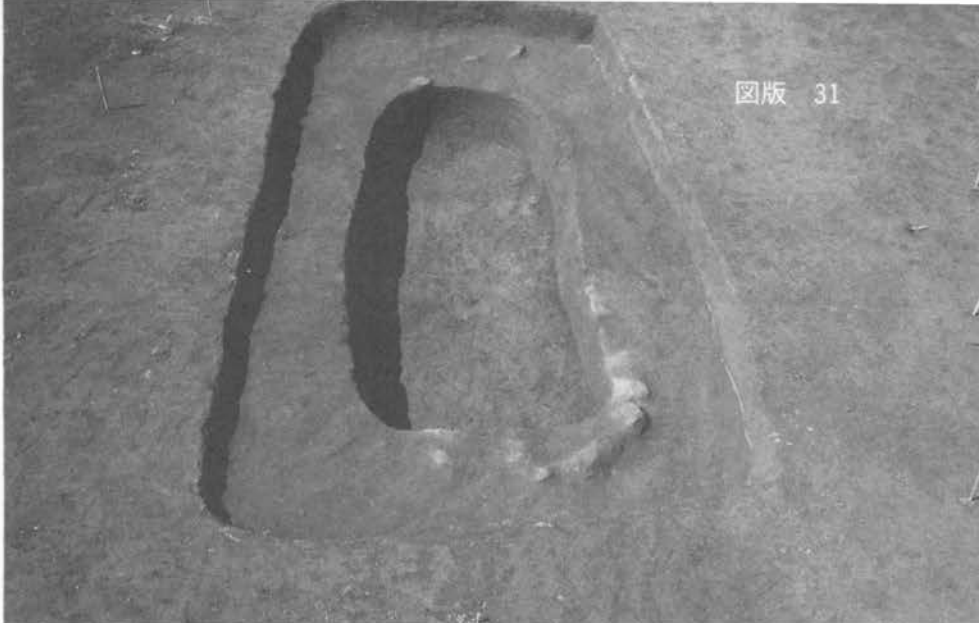


2. 2号墳第1主体部全景

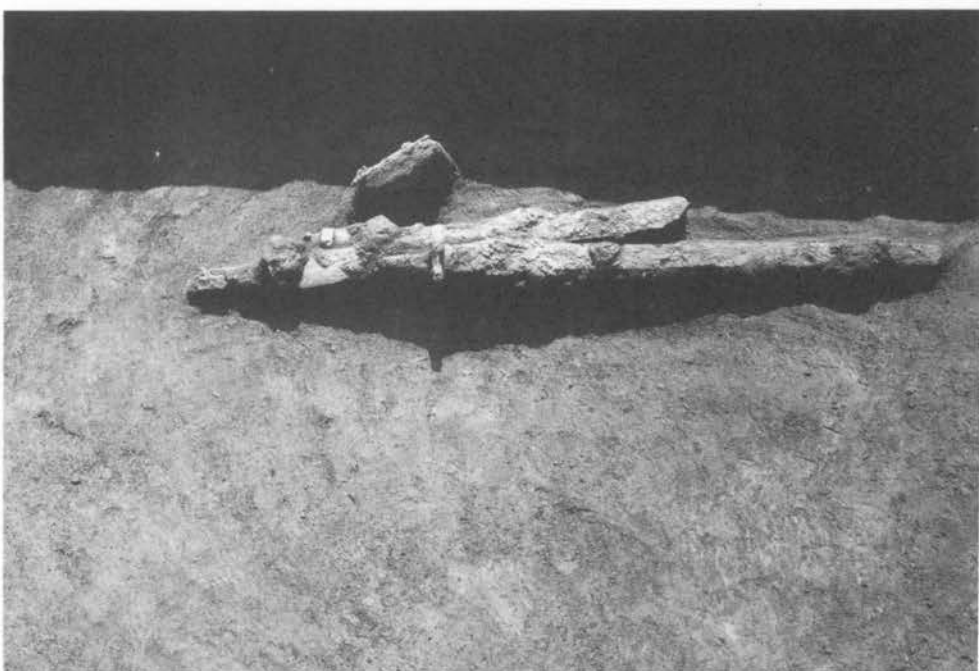


3. 2号墳第1主体部遺物出土狀況

有吉遺跡(3次)



1. 2号墳第2主体部全景

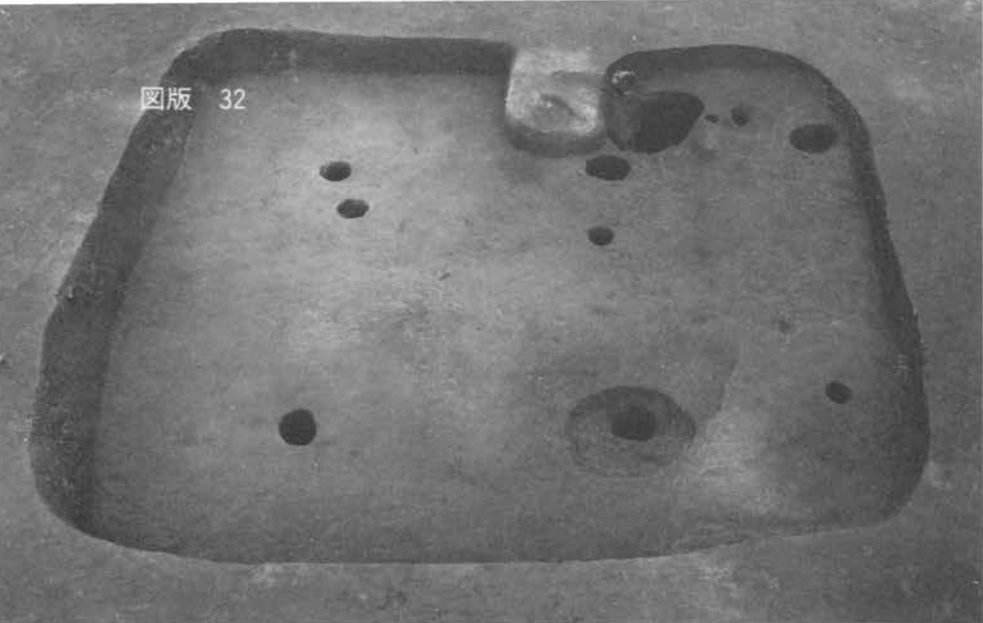


2. 2号墳第2主体部遺物出土状況



3. 2号墳第2主体部掘り方

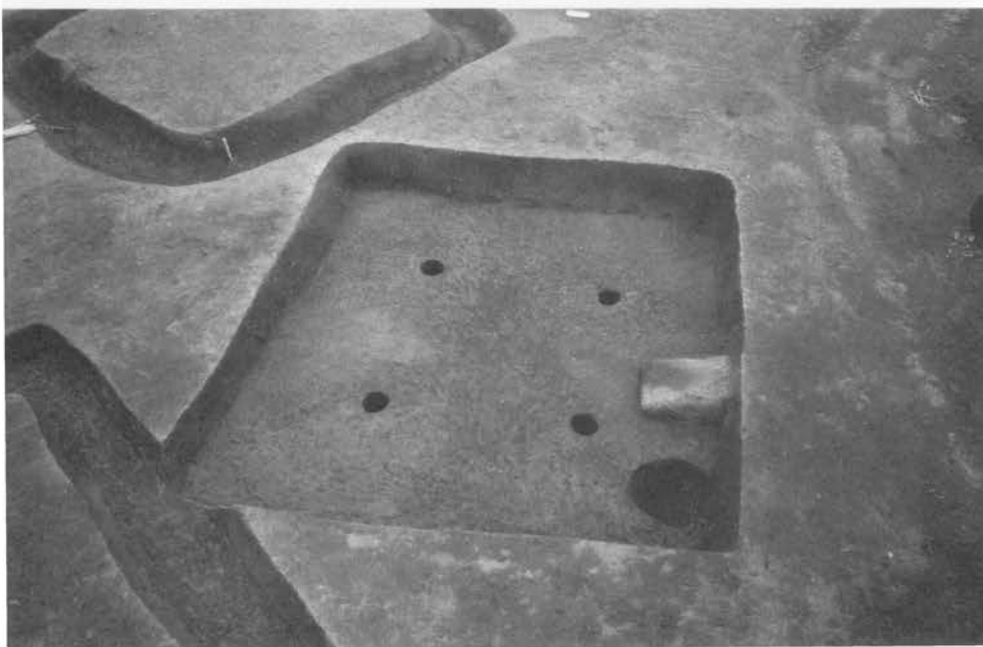
有吉遺跡(3次)



1. 9号住居址全景

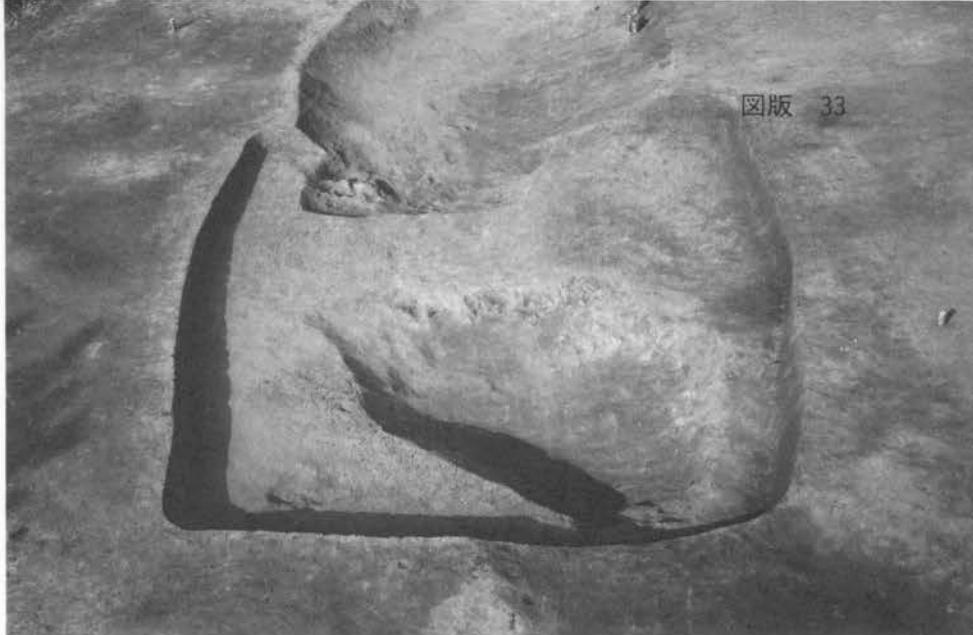


2. 9号住居址遺物出土狀況

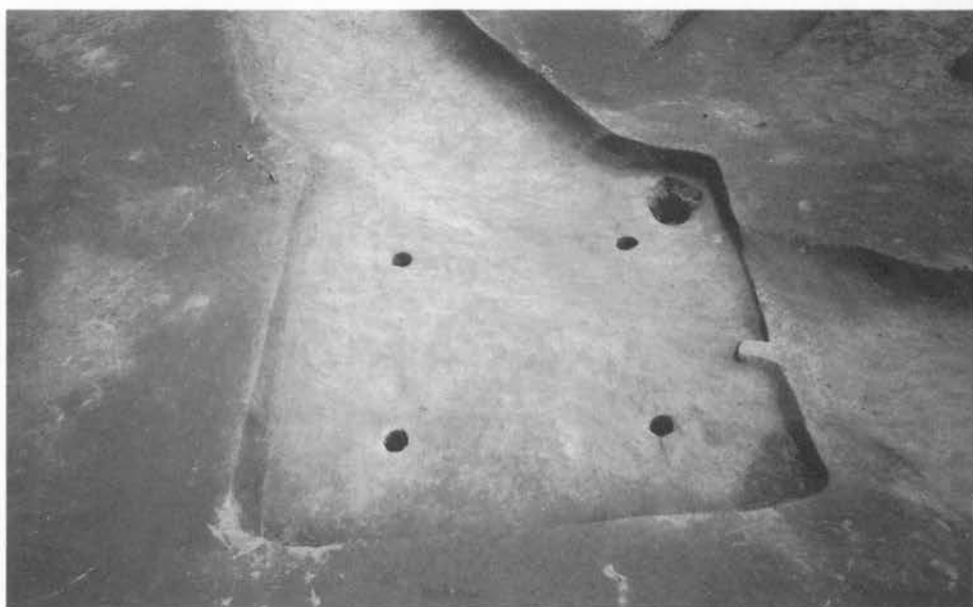


3. 10号住居址全景

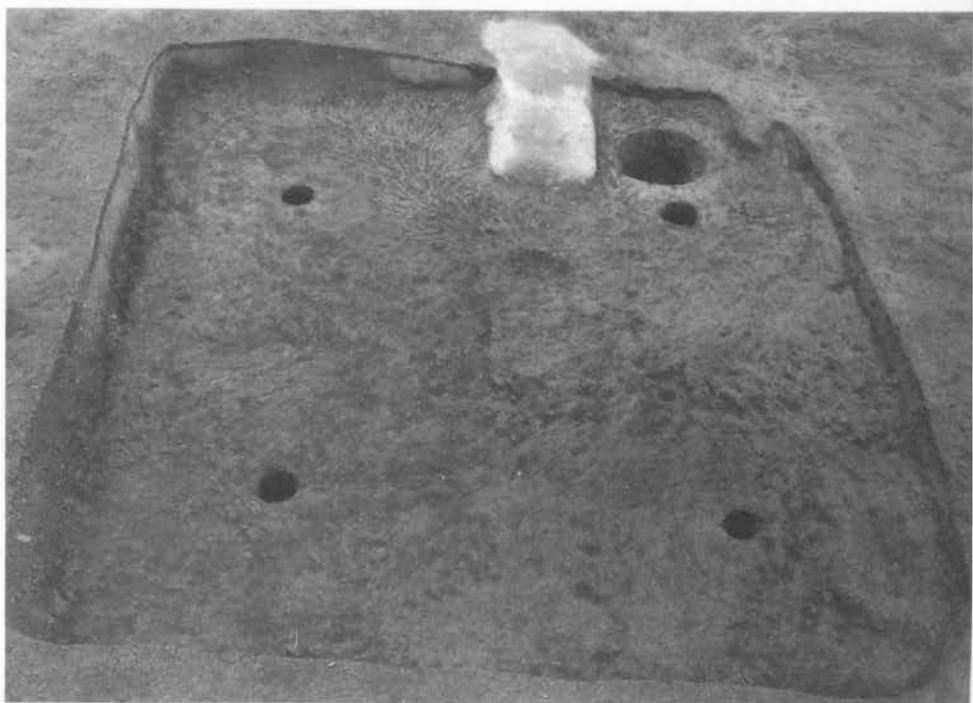
有吉遺跡(3次)



1. 16号住居址全景



2. 17号住居址全景



3. 32号住居址全景



1. 32号住居址遺物出土状況



2. 32号住居址遺物出土状況(カマド内)



3. 32号住居址カマド掘り方

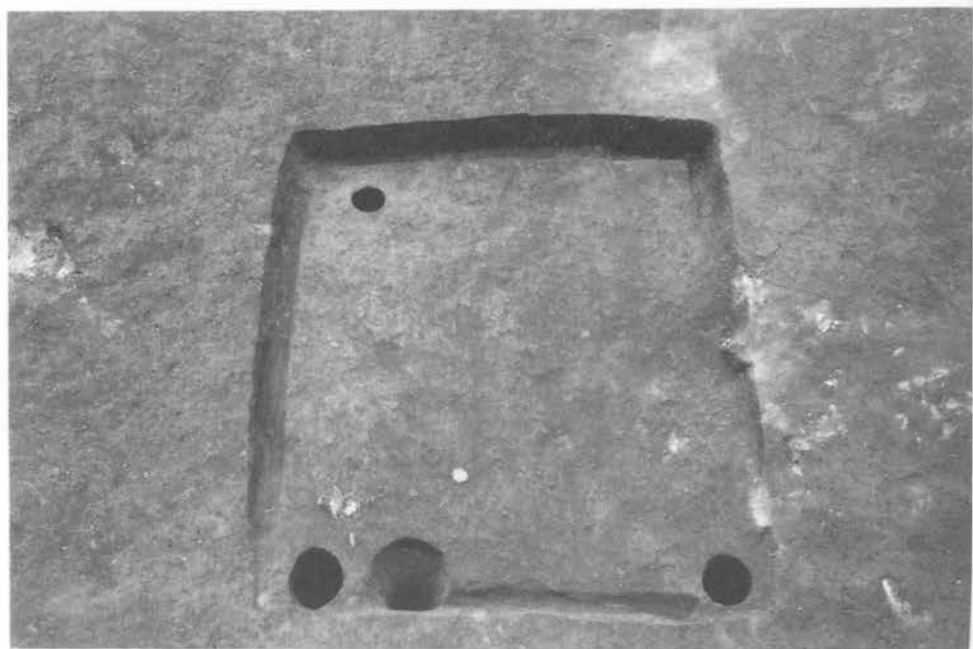
有吉遺跡(3次)



1. 15号住居址全景



2. 15号住居址遺物出土
状況

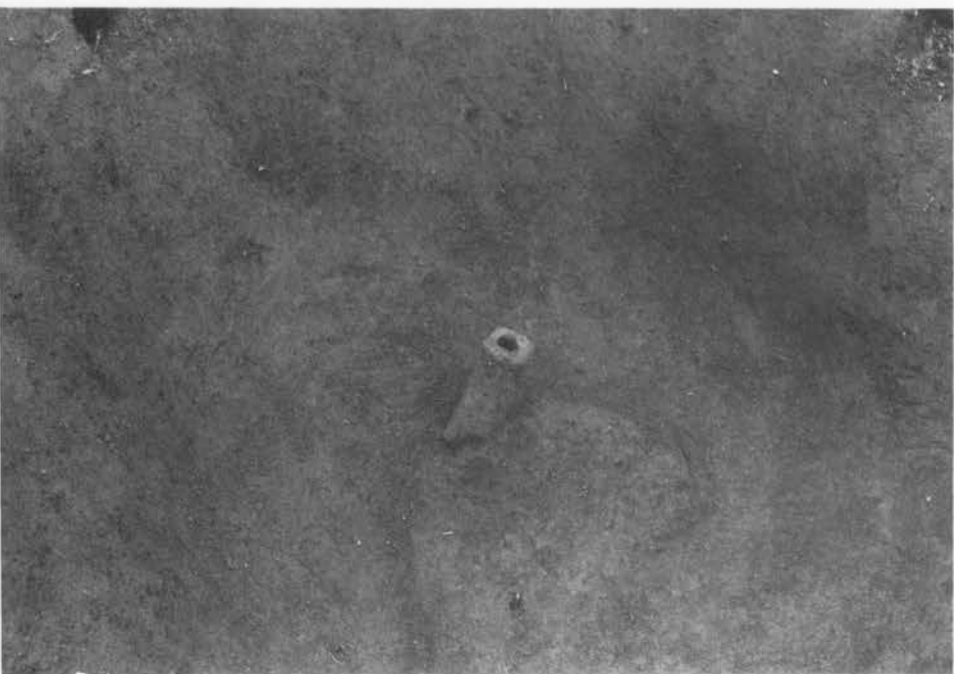


3. 30号住居址全景



有吉遺跡(3次)

1. 37号住居址全景



2. 37号住居址遺物出土
状況



3. 37号住居址カマド掘
り方

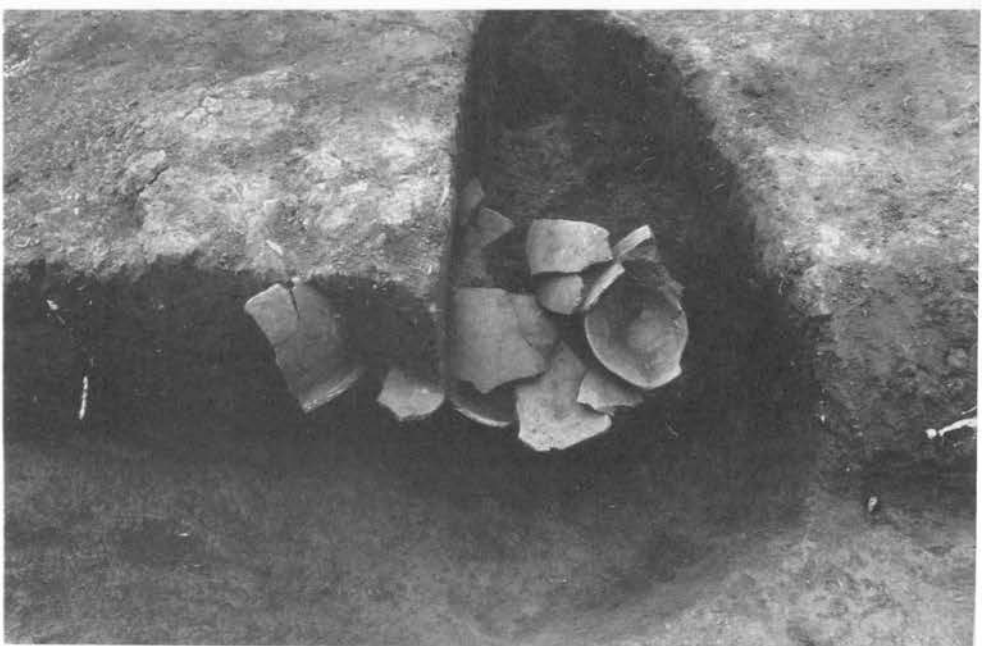
有吉遺跡(3次)



1. 41号住居址全景



2. 41号住居址遺物出土状況

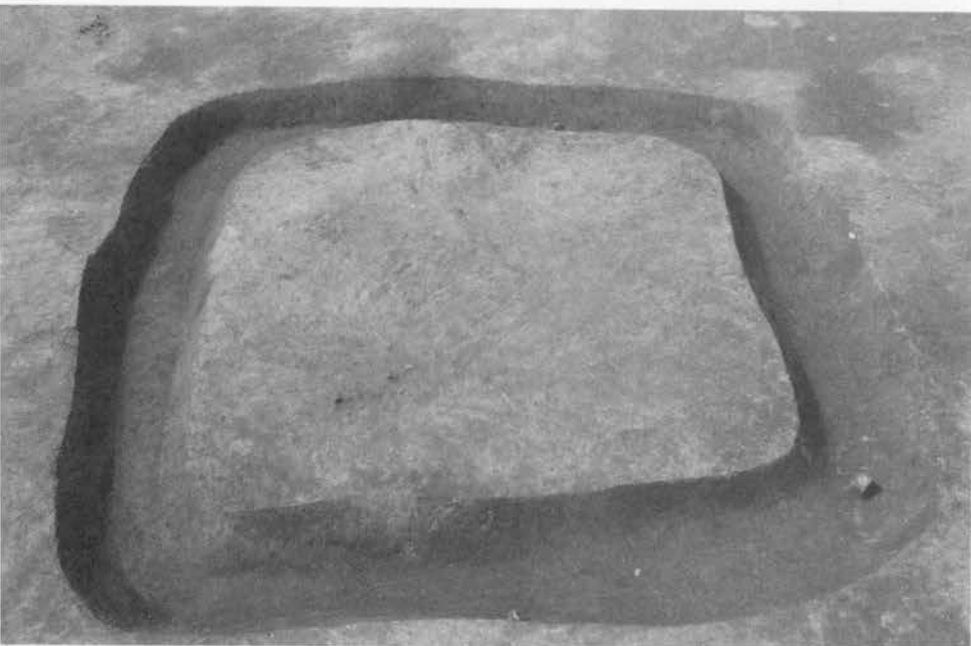


3. 41号住居址遺物出土状況(カマド内)



有吉遺跡(3次)

1. 41号住居址遺物出土
状況



2. 7号址全景



3. 8号址全景

有吉遺跡(3次)



3(11)



2(11)



6(11)



22(13)



5(11)



10(11)



8(11)



10(11)



7(11)

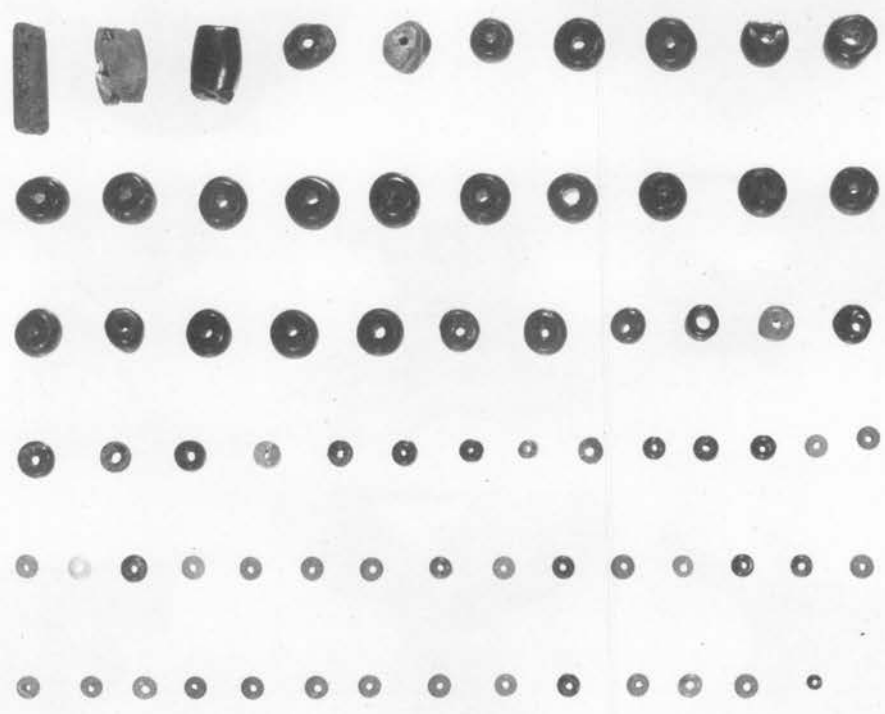


12(11)

住居址出土土器(11・13号住居址)

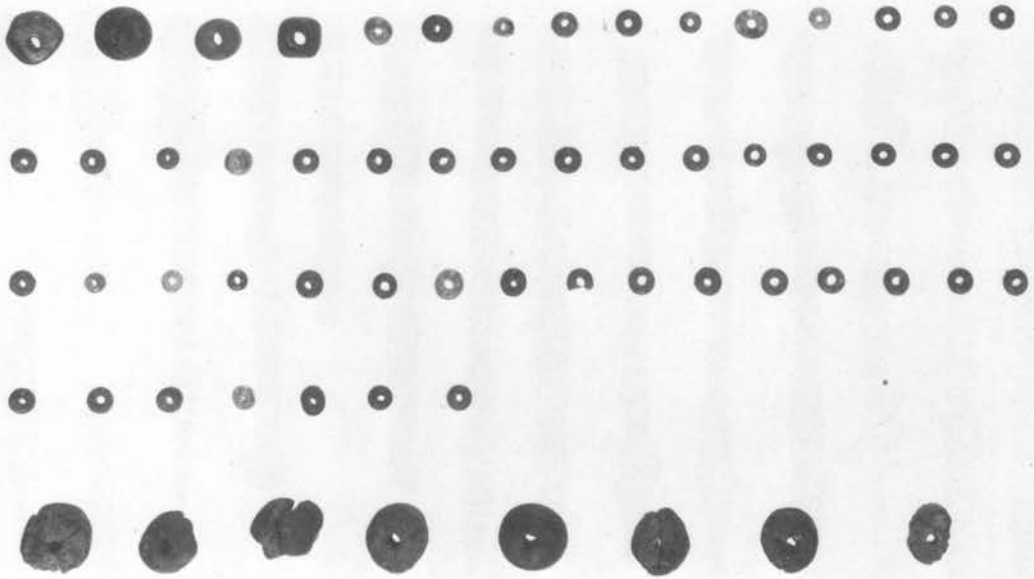


1. 住居址出土土器(11・12・13号住居址)

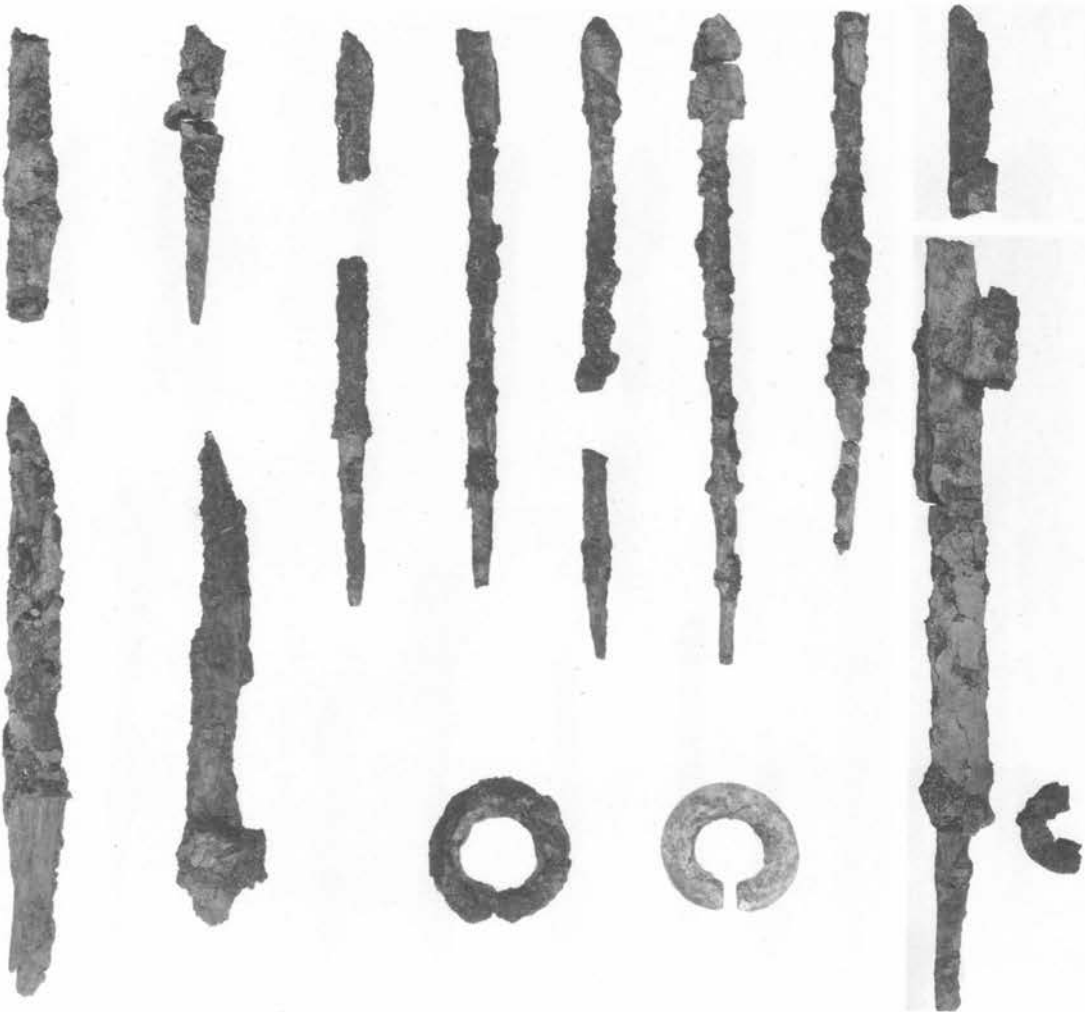


2. 1号墳第2主体部出土遺物

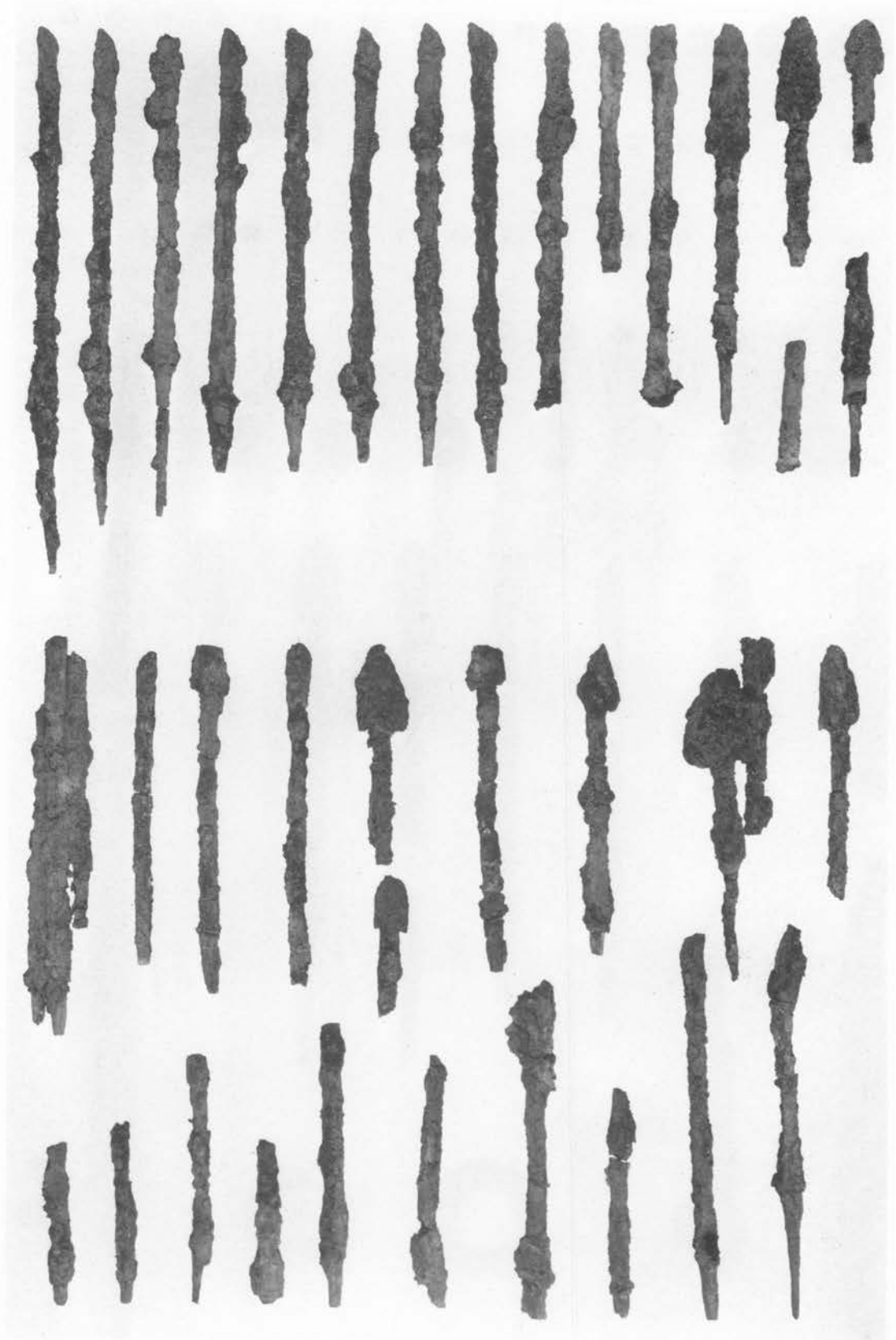
有吉遺跡(3次)



1. 2号墳第1・2主体部出土遺物

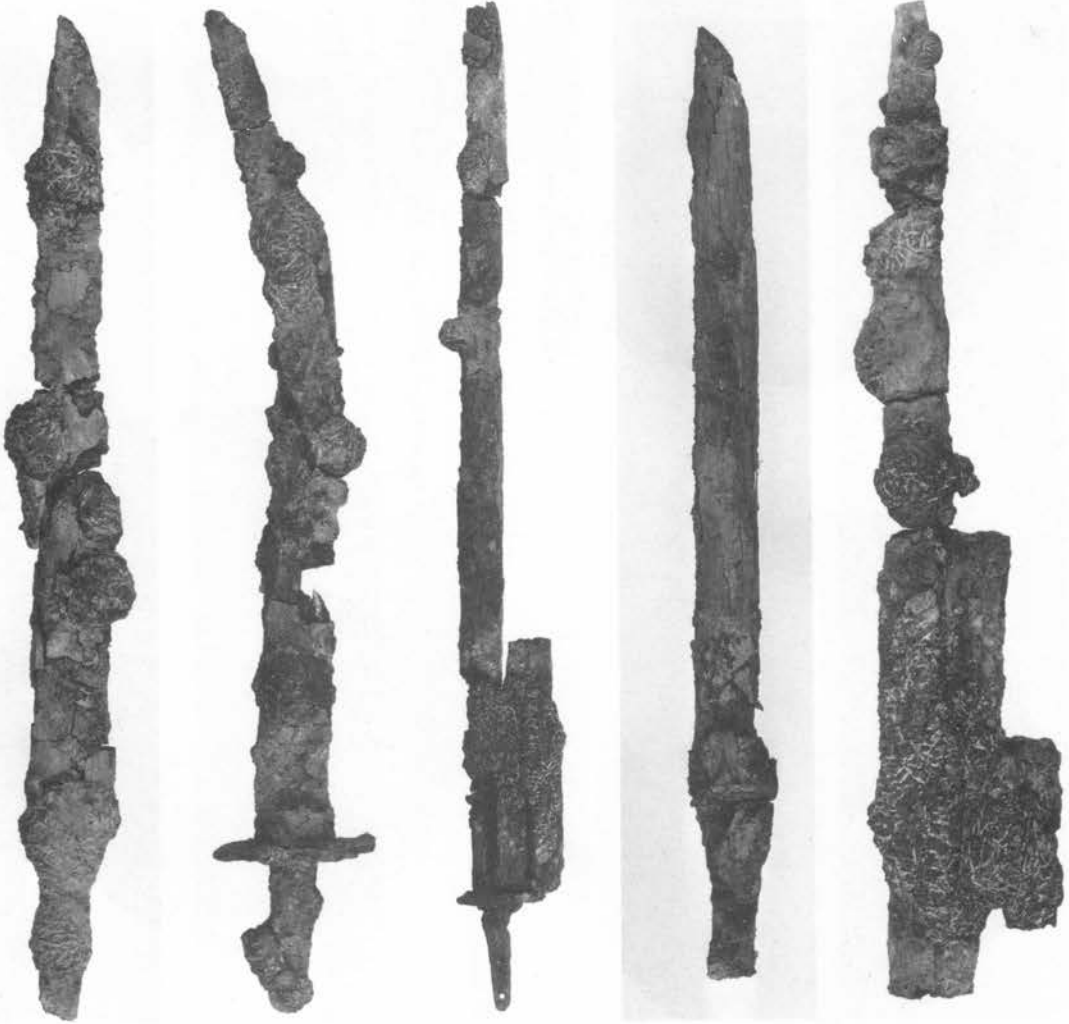


2. 1号墳第1・2主体部出土遺物

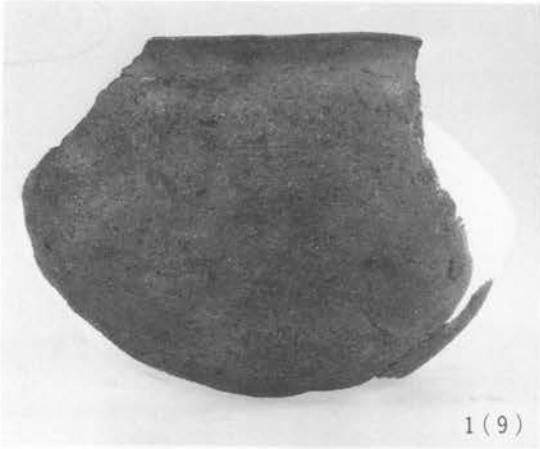


2号墳主体部出土遺物

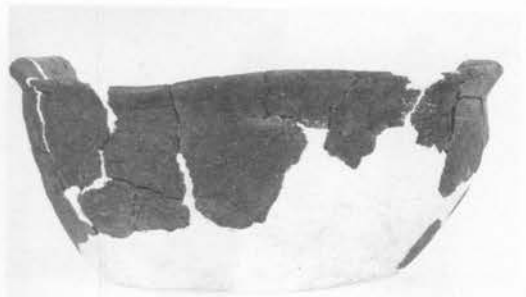
有吉遺跡(3次)



2号墳主体部出土遺物



1(9)



2(9)



12(10)



21(32)

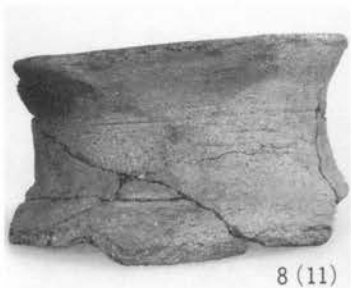


25(32)



22(32)

有吉遺跡(3次)



8(11)



9(10)



3(9)



26(32)



27(32)



5(9)



15(10)



16(10)



4(9)



14(10)



28(32)



29(32)



17(10)



(2号墳)

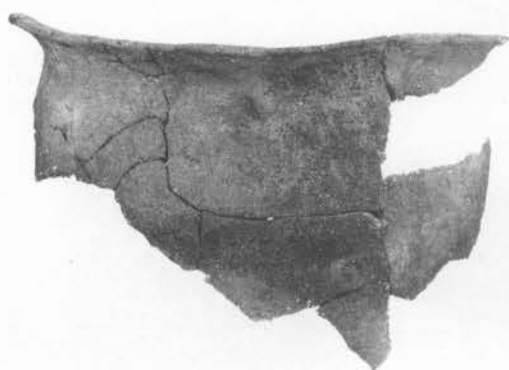


(1号墳)

住居址(9・10・11・32号住居址), 1・2号墳出土土器



14(37)



15(37)



23(41)



23(41)



26(41)



27(41)



2



3

住居址(15・30・37・41号住居址), 方形周溝状遺構(7号址), 土壇(14号址), 溝, グリッド出土土器



1. 遺跡遠景(西から)



2. 遺跡全景

有吉南遺跡



1. 7号址全景



2. 7号址遺物出土狀況



3. 1号住居址全景



有吉南遺跡

1. 3号住居址全景



2. 3号住居址カマド全景



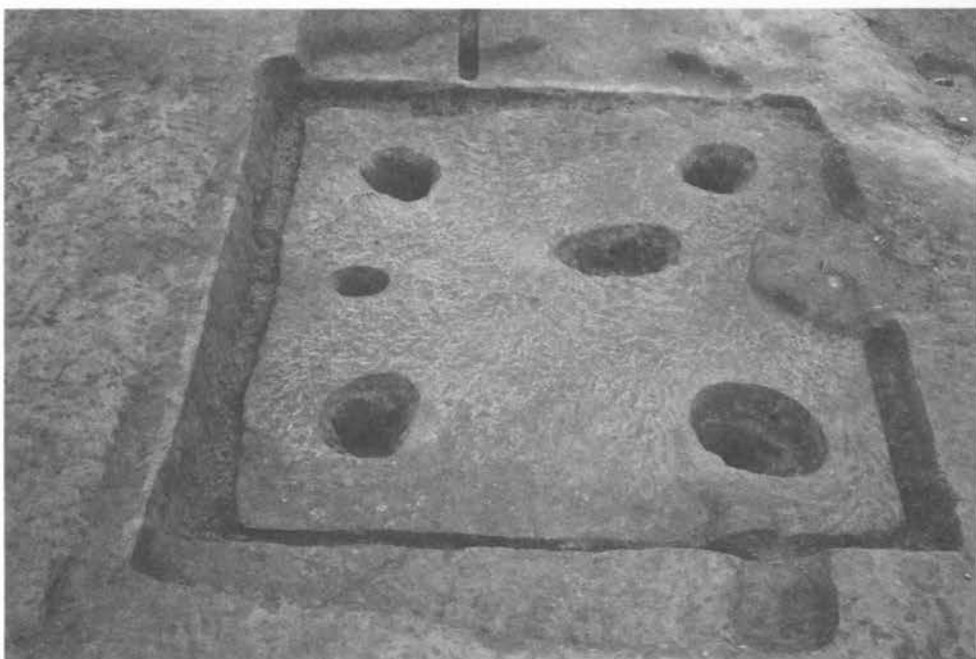
3. 3号住居址遺物出土状況(カマド左)

有吉南遺跡

1. 8号住居址全景

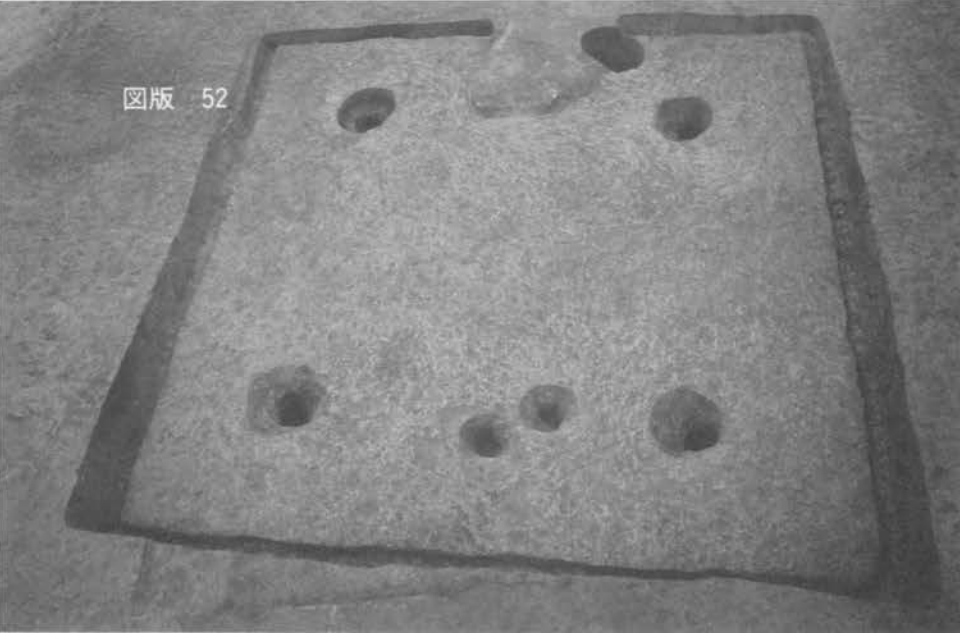


2. 10号住居址全景

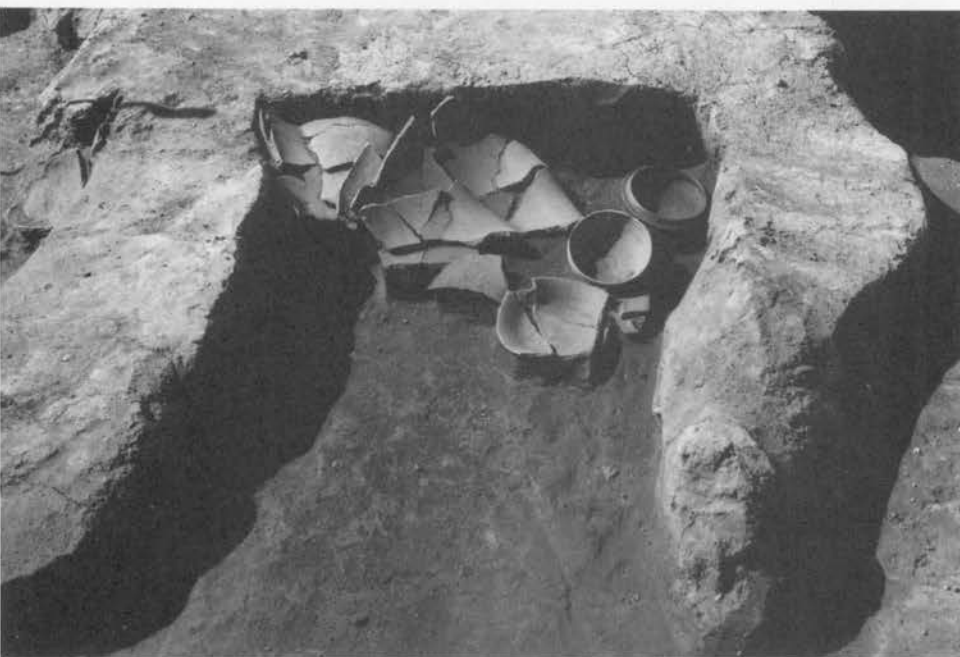


3. 10号住居址カマド全景





1. 12号住居址全景

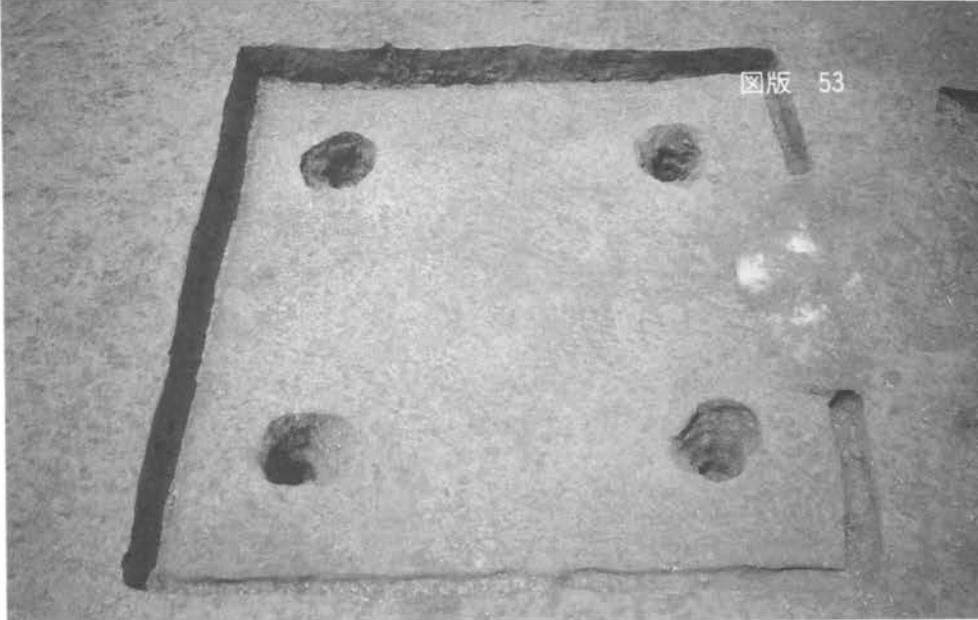


2. 12号住居址遺物出土状況(カマド内)



3. 14号住居址全景

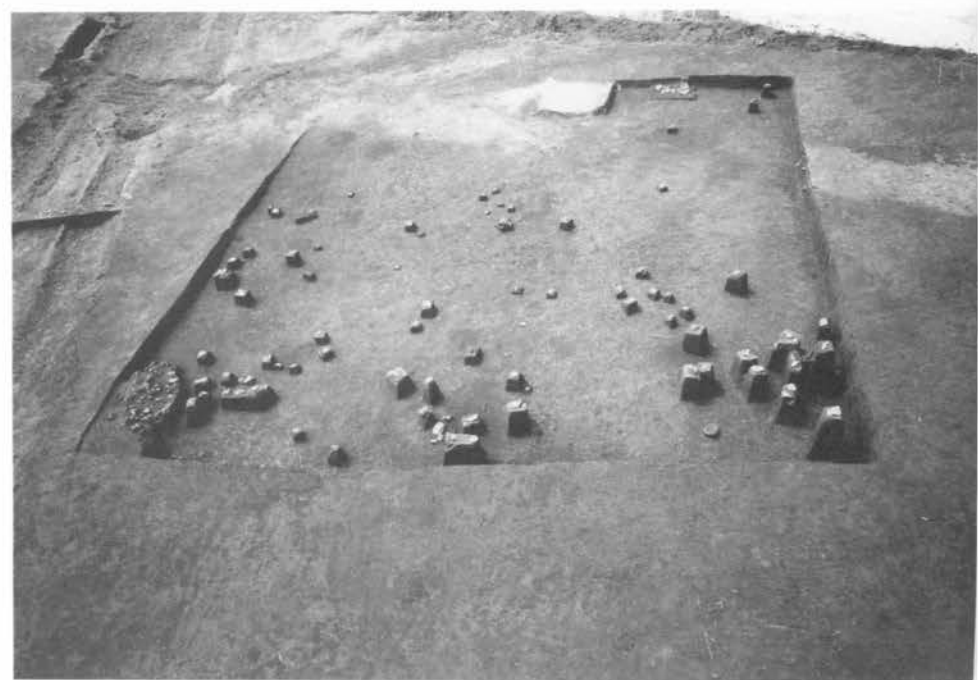
有吉南遺跡



1. 15号住居址全景



2. 16号住居址全景



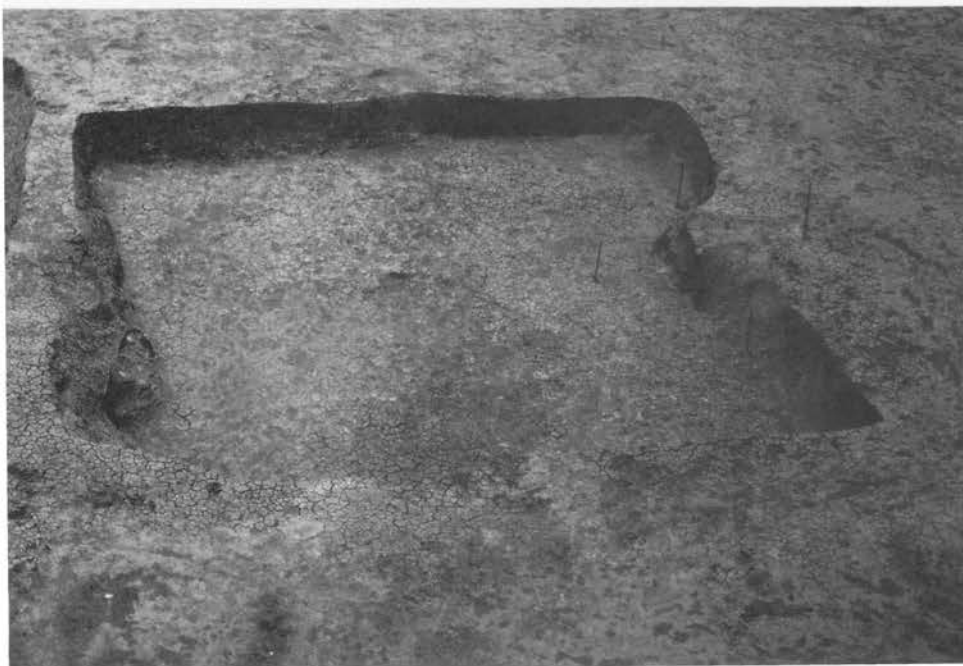
3. 16号住居址遺物出土
狀況



1. 17号住居址全景



2. 17号住居址遺物出土
狀況(貯藏穴内)



3. 18号住居址全景

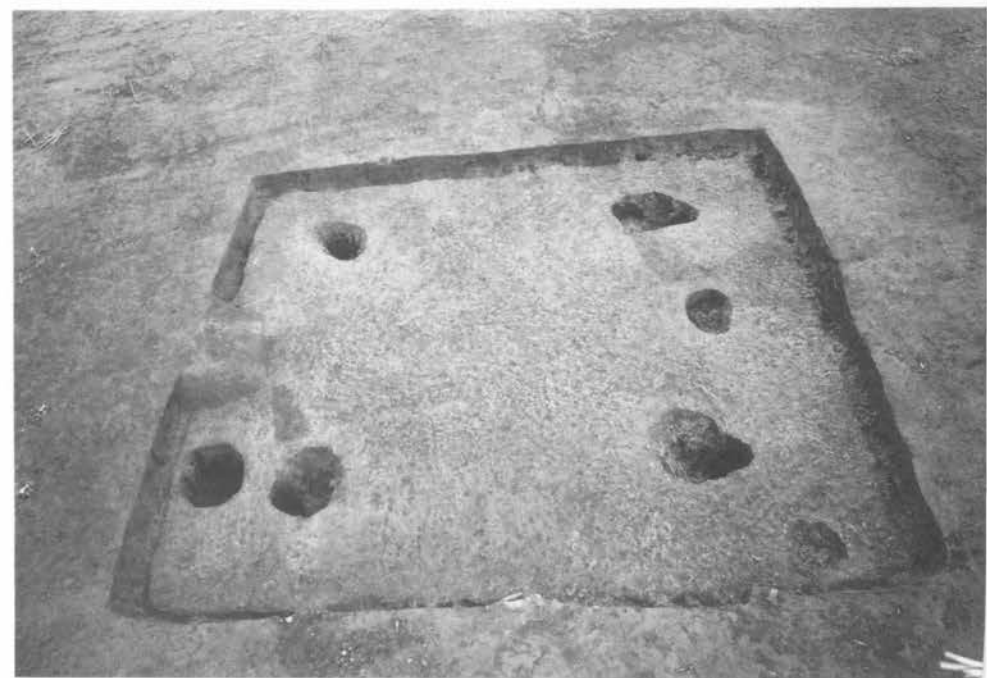
1. 18号住居址遺物出土
状況



2. 19号住居址全景

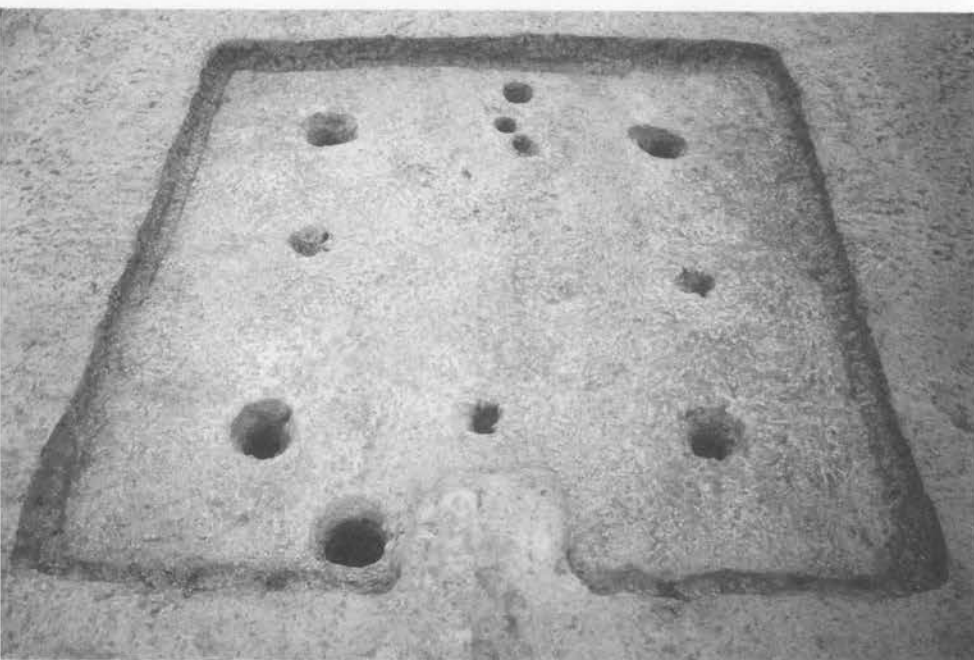


3. 20号住居址全景

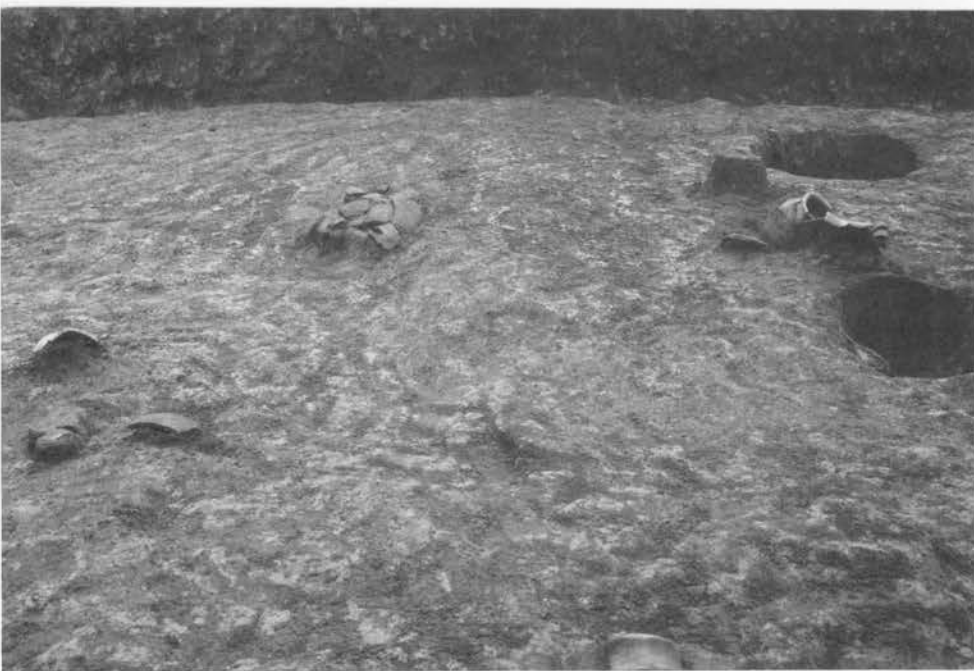




1. 21号住居址全景

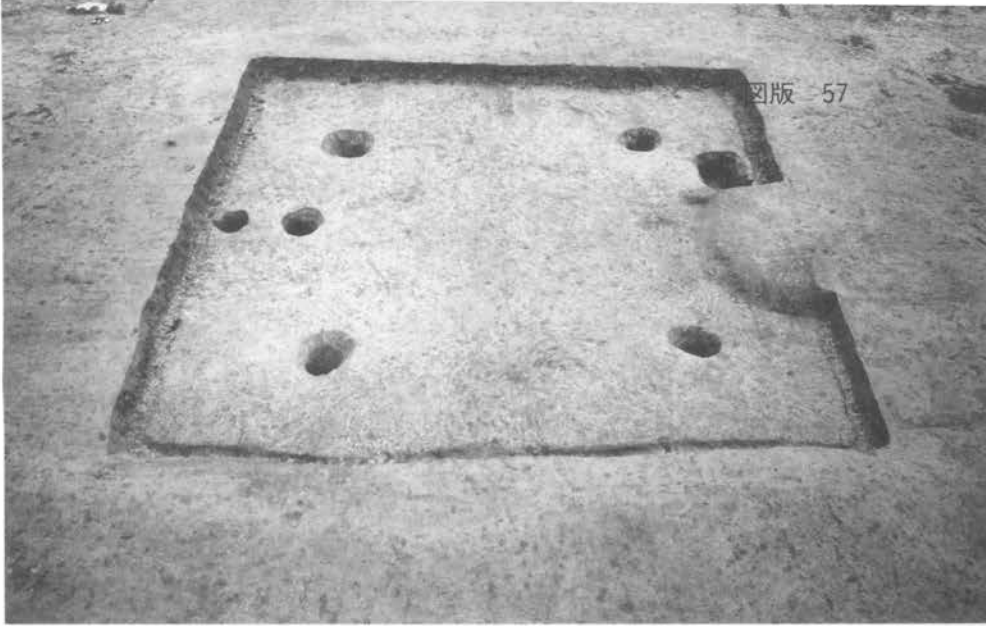


2. 22号住居址全景



3. 22号住居址遺物出土
狀況

1. 24号住居址全景

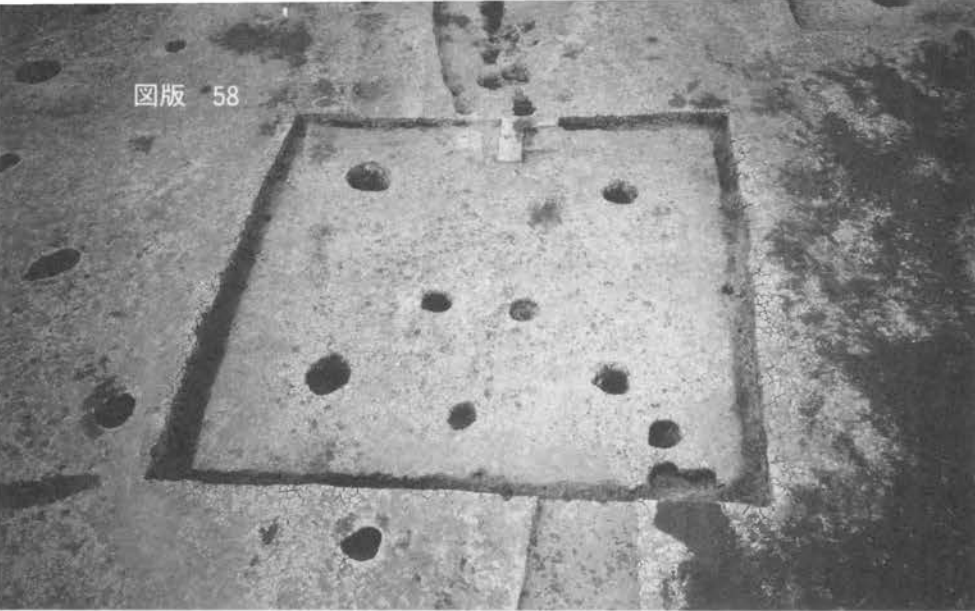


2. 24号住居址遺物出土状況

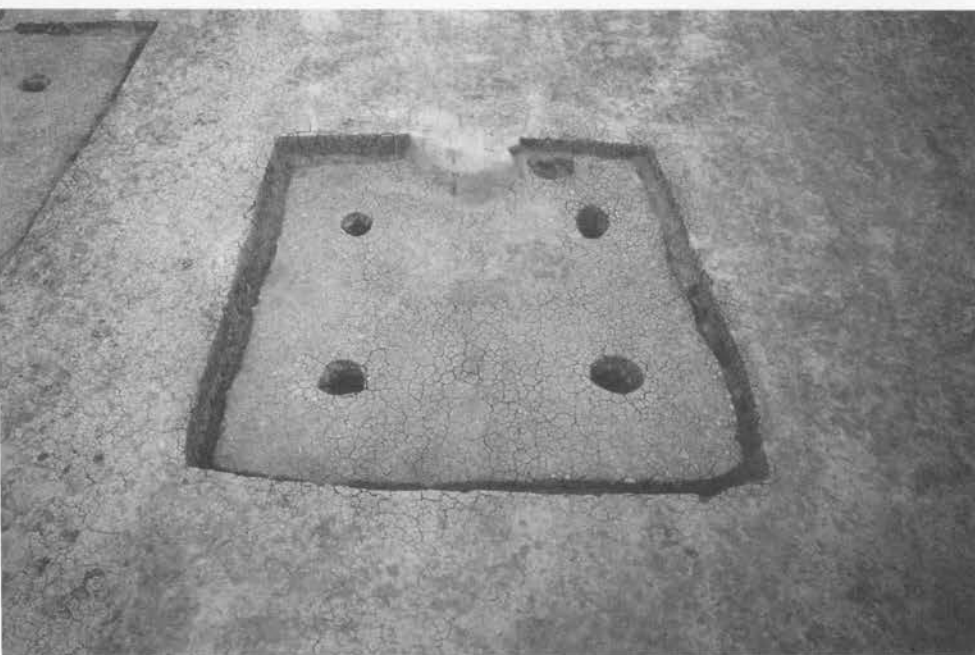


3. 24号住居址遺物出土状況(カマド内)





1. 25号住居址全景

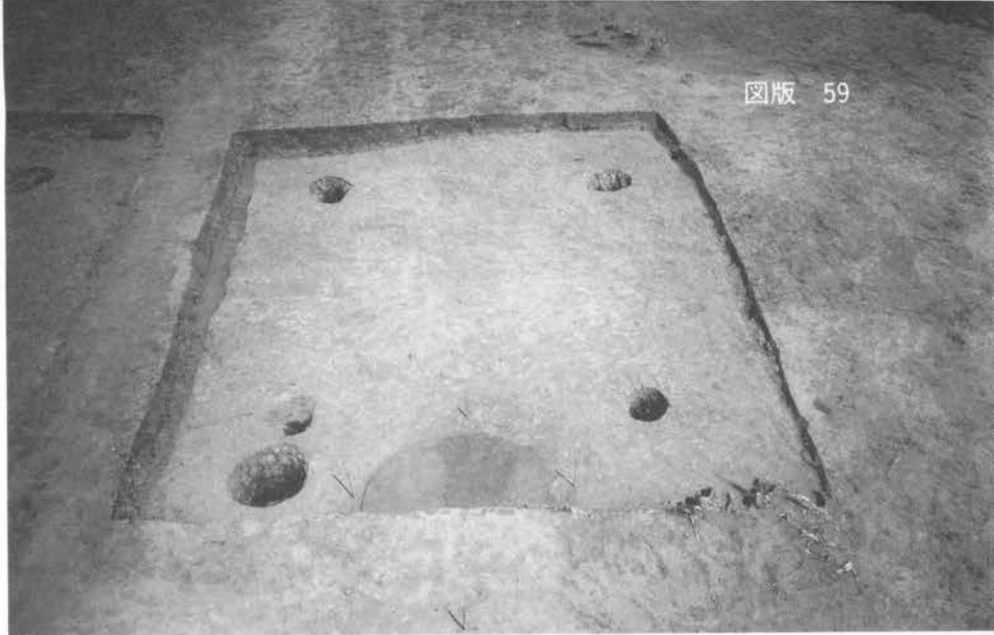


2. 27号住居址全景



3. 28号住居址全景

有吉南遺跡



1. 29号住居址全景



2. 30号住居址全景



3. 31号住居址全景



1. 33号住居址全景



2. 37号住居址全景

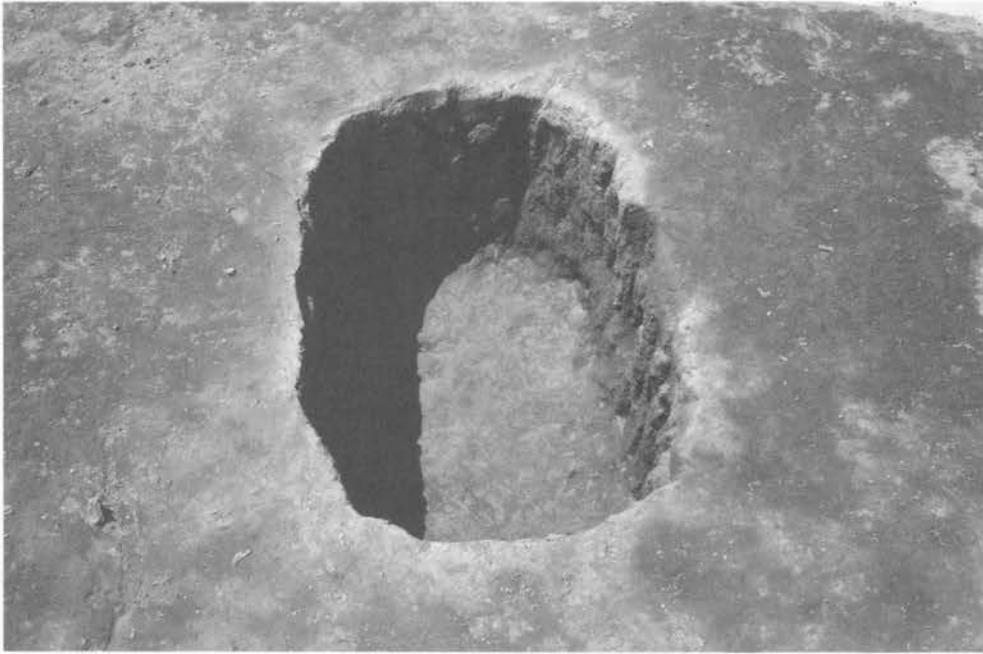


3. 37号住居址遺物出土狀況

1. 4号住居址全景

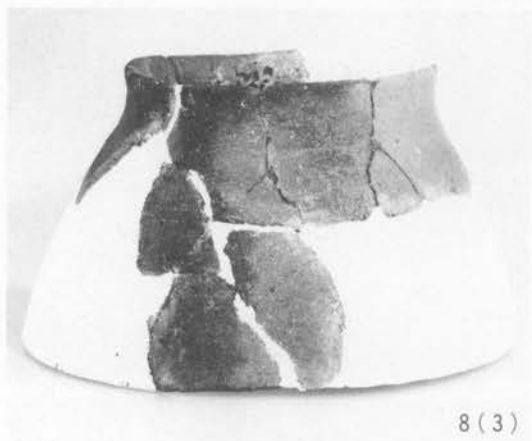
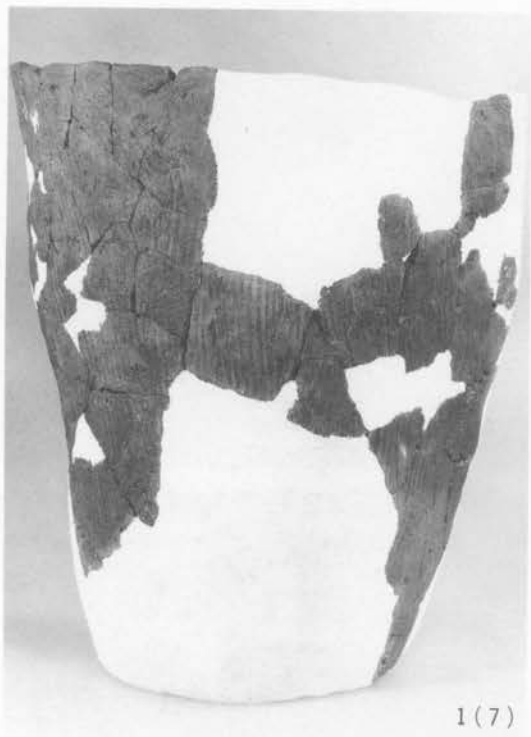


2. 13号址全景



3. 13号址遺物出土狀況





炉穴(7号址), 住居址(1・3号住居址)出土土器



住居址出土土器(1・3号住居址)



20(8)



21(8)



24(8)



25(8)



23(8)



22(8)



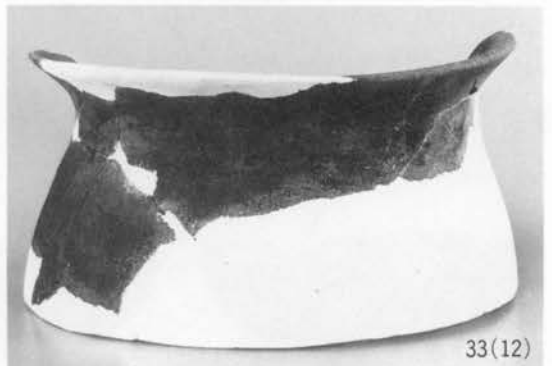
26(10)



28(10)



27(10)



33(12)

住居址出土土器(8・10・12号住居址)



31(12)



32(12)



30(12)



35(12)



43(14)



42(14)



38(12)



36(12)

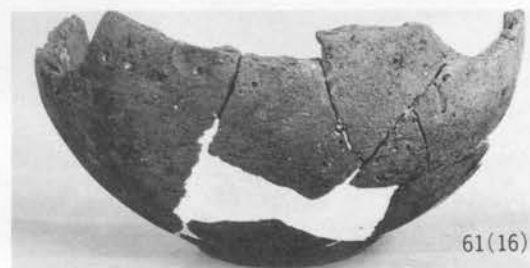
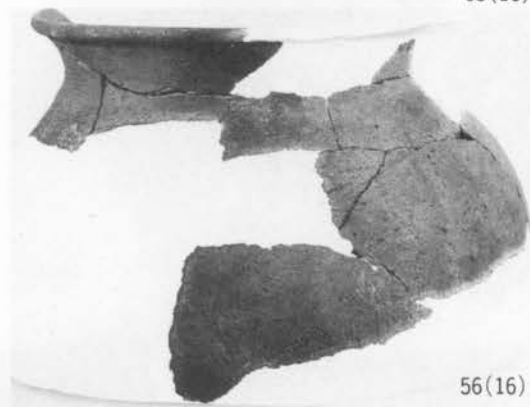


37(12)



39(12)

住居址出土土器(12・14号住居址)



住居址出土土器(14・15・16号住居址)



57(16)



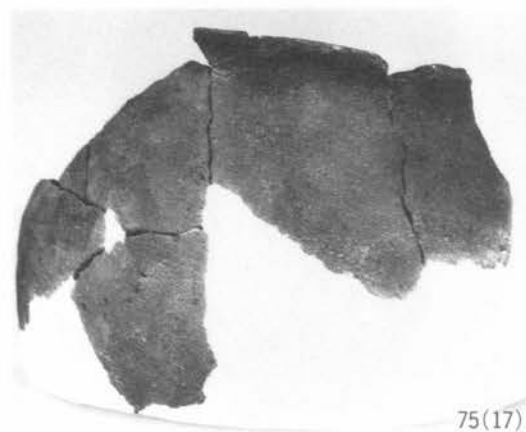
58(16)



59(16)



60(16)



75(17)



74(17)

有吉南遺跡



83(17)



86(17)



91(18)



85(17)



87(17)



88(18)



78(17)



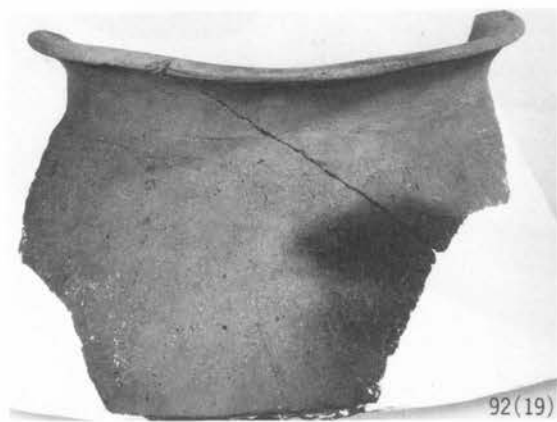
89(18)



90(18)

住居址出土土器(17・18号住居址)

有吉南遺跡



住居址出土土器(19・20・22号住居址)



106(24)



107(24)



104(22)



118(24)



116(24)



115(24)



122(24)



121(24)



119(24)



111(24)



112(24)



109(24)

有吉南遺跡



126(27)



108(24)



123(25)



131(28)



127(27)



125(25)



132(28)



124(25)



133(28)



140(30)



139(30)

住居址出土土器(24・25・27・28・30号住居址)



住居址出土土器(28・31・37号住居址)

有吉南遺跡



149(33)



153(37)



150(33)



159(37)



148(33)



5(23)



3(11)



7(23)



9(23)



14(23)



15(23)



17(23)

住居址出土土器(11・23・33・37号住居址)



1(3)



2(3)



3(10)



5(17)



6(22)

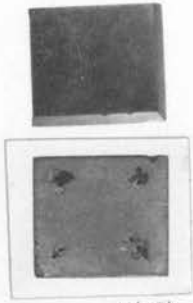


4(18)

住居址出土支脚(3・10・17・18・22号住居址)



2 (13)



1 (13)



5 (37)



8 (30)



6 (22)



7 (16)



1 (3)



2 (15)



4 (25)



3 (24)



9 (12)



10 (12)



11 (31)



12 (31)



13 (31)



14 (31)



15 (31)



16 (31)



17 (31)



18 (31)



19 (31)



20 (31)



21 (31)

住居址 (3・12・15・16・22・24・25・30・31・37号住居址),
土坑 (13号址) 出土遺物

昭和58年11月25日 印刷

昭和58年11月30日 発行

千葉東南部ニュータウン 14

— バクチ穴遺跡・有吉遺跡(3次)・有吉南遺跡 —

発行 住宅・都市整備公団 首都圏都市開発本部
東京都千代田区九段北1-14-6

財団法人 千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻1-3-13
TEL 0472(25)6478

印刷 株式会社 弘文社
千葉県市川市市川南2-7-2
TEL 0473(24)5977(代)

千葉東南部ニュータウン14 正誤表

頁	行	誤	正
挿図目次	第73図	12号住 [・] 号 [・] 址	12号住 [・] 居 [・] 址
1	1	収 [・] 書	所 [・] 収
10	31	の [・] 5 [・] 点 [・] は	の [・] 6 [・] 点 [・] は
11	4～6	この他に……となる。	トル
23	21	契 [・] 期	契 [・] 機
64	7	ナ [・] デ [・] 消 [・] し	ナ [・] デ [・] で [・] 消 [・] し
84	番号27	土 [・] 址	土 [・] 壇
96	28	撚 [・] 糸 [・] 文	繩 [・] 文
110	15	撚 [・] 糸 [・] 文	撚 [・] 糸 [・] 文
110	23	遺 [・] 跡 [・] お [・] け [・] る	遺 [・] 跡 [・] に [・] お [・] け [・] る
111	4	1 [・] 類 [・] は [・] 本 [・] 類 [・] は	1 [・] 類 [・] は
115	14	21 [・] は [・] 小 [・] 形	24 [・] は [・] 小 [・] 形
121	16	N-55°-W	N-125°-E
123	第81図	27	5
123	3	N-66°-W	N-114°-E
129	3	併 [・] 行 [・] す [・] る	平 [・] 行 [・] す [・] る
129	7	N-77.5°-W	N-102.5°-E
130	1	8 [・] の [・] 刀 [・] 子	7 [・] の [・] 刀 [・] 子
131	22	N-116.5°-W	N-63.5°-E
132	11	7 [・] の [・] 刀 [・] 子	8 [・] の [・] 刀 [・] 子
135	8	抑 [・] 葉 [・] 式	柳 [・] 葉 [・] 式
149	15	23 [・] は	22 [・] は
198	10	併 [・] 行 [・] し	平 [・] 行 [・] し
202	5	の [・] 坏 [・] 蓋	の [・] 坏 [・] 身 (139)
217	7	卵 [・] 倒 [・] 形	倒 [・] 卵 [・] 形
219	32	が [・] 窮 [・] え [・] る	が [・] 窺 [・] え [・] る
223	第153図	土玉の実測図のみ原寸大	
231	16	Yayoi	Kofun